

高島元洋 編著

近世日本の儒教思想

— 山崎闇斎学派を中心として

【第二分冊 資料編】

お茶の水女子大学附属図書館

近世日本の儒教思想

— 山崎闇斎学派を中心として

【第二分冊 資料編】

* 目次

第二部 山崎闇齋学派についての資料（解題・注釈・校合）

五	稲葉黙齋『姫島講義』	大久保紀子	解題・注釈・校合	3
六	稲葉黙齋『姫寫口義』	大久保紀子	解題・注釈・校合	45

※『稲葉黙齋先生姫島講義眞蹟書』（千葉県山武市成東・熱田秀夫氏蔵）

七	稲葉黙齋『處士越復傳』	大久保紀子	解題・注釈・校合	71
八	稲葉黙齋『先君子行實』	大久保紀子・長野美香	解題・注釈・校合	113

九	稲葉黙齋『先達遺事』	大久保紀子・長野美香	解題・注釈・校合	231
---	------------	------------	----------	-----

十	稲葉黙齋『墨水一滴』	大久保紀子	解題・注釈・校合	373
十一	林潜齋『稲葉黙齋先生傳』	長野美香	解題・注釈・校合	521

※岡直養『林潜齋事略』

十二	人名索引	大久保紀子・長野美香		615
----	------	------------	--	-----

第三部 上総道学についての関連論文と資料

十三	『孤松全稿』について―『黙齋艸』との関係	大久保紀子		637
十四	『稲葉家譜』について	長野美香		655
十五	『迂齋文集』について	長野美香		661
十六	稲葉迂齋・黙齋年譜	長野美香		707

あとがき

【第一分冊 研究編】

はじめに

第一部 日本儒教についての研究

一 「思想史」とは何か——「日本倫理思想史」に関する方法的反省

高島元洋

- (一) 「日本倫理思想史」とは何か——相良亨「日本倫理思想史研究の意義」
- (二) ささまざまな「日本思想史」——丸山真男「日本政治思想史一九六五」、黒田俊雄「思想史の方法——研究史からなにを学ぶか」

(三) 「日本倫理思想史」の定義——和辻哲郎『日本倫理思想史』

(四) 和辻倫理学の問題点と「日本倫理思想史」

二 日本儒教の特徴

高島元洋

- (一) 日本儒教をどのような問題設定において理解するか。
- (二) 問題設定の妥当性と検討すべき課題。

(三) 古学の「人倫」は〈倫理学・倫理思想的観点〉からどのように理解されるのか。

三 日本朱子学論

高島元洋

- (一) 日本儒教の多様性
- (二) 近世日本朱子学の一素描
- (三) 日本朱子学の特徴——「敬」の意味をめぐって

※崎門道統略図

四 稲葉黙斎論

大久保紀子

はじめに

(一) 「狂」の資質

(二) 黙斎の位置

(三) 黙斎の儒学の特質

(四) 上総における黙斎

おわりに

近世日本の儒教思想

—山崎闇斎学派を中心として

【第二分冊 資料編】

五 稲葉黙齋『姫島講義』

解題・注釈・校合 大久保紀子

○『姫島講義』解題

『姫島講義』は、稲葉黙齋が父迂齋の上総の門人達のために道学の要諦を説いた書である。平易にして自在、かつ道学を担う気迫に満ちたその文章は、黙齋の学問に対する姿勢をよく伝えている。

一般に知られている『姫島講義』は、明治二十四（一八九一）年、道学協会の刊になる『道學遺書 初集 巻一 孤松全稿卷之一』所収のものであり、本稿もそれを底本としたが、その成立についてはやや複雑ないきさつがある。『姫島講義』の原型は、後出の黙齋自身の筆になる『姫島口義』である。『姫島口義』は、黙齋が旅先で限られた門人達のためにいわば私信としてしたためたものであった。それを、序、講義という体裁に改め、内容も手を加え、さらに餘論を附して講義としてふさわしい形に整えたものが『姫島講義』である。

厳密にいえば、『姫島講義』と呼ばれる諸本には整齊の程度によって明らかに二つの系列が認められる。

一つは、『姫島口義』の私信としての性格をわずかに遺しつつ講義の形に整えられ、かつ『姫島講義』として独立の体裁を保っている諸本である。これらを本解題では平沼系と呼ぶこととする。もう一つは、内容は

平沼系とほぼ同じであるが、『孤松全稿』もしくは『黙斎艸』のうちの一冊として編纂された諸本である。これらを神習系と呼ぶ。

つまり、『姫島講義』には、原型である『姫島口義』、講義としての形を整え餘論を加えた『姫島講義』（平沼系）、さらに『孤松全稿』もしくは『黙斎艸』の中的一篇として編纂された『姫島講義』（底本、及び神習系）の三段階があるということになる。

（一）『姫島講義』の由来

『姫島講義』成立の発端は、宝暦二（一七五二）年、当時二十一歳であった黙斎が父迂斎の門人である鵜澤氏に招かれて清名幸谷（現在の千葉県山武郡大網白里町清名幸谷）を訪れたことにある。なぜ迂斎ではなく黙斎が招かれたのか、また招来の目的は黙斎の講義を聴くことだけであったのか等の子細については明らかではない。いずれにせよ、黙斎は同年十月十九日、上総に住む迂斎の門人八人に佐藤直方の『道学標的』を講義することを期して江戸を立った。八人に贈るために、『道学標的』の中から「孔曾孟思周程張朱」の言葉を八つ選び、迂斎自らがしたためた墨蹟八幅を携えてのことであった。

黙斎は、『道学標的』の講義を八人の門人の筆頭である鈴木養察の学塾で行うつもりであった。養察は江戸で迂斎に学んだ後帰郷し、姫島（現在の千葉県山武市姫島）で儒学を教えていたのである。『姫島講義』の「姫島」はここに由来する。しかし、当の鈴木家に不幸があったため、門人八人が姫島に会して黙斎の『道学標的』の講義を聴くことはついになかった。黙斎はそれを悔やみ、また迂斎の墨蹟をむなしく持ち帰ることを残念に思い、明日江戸に帰るという十一月二日、講義にかえて冊子をしたためた。これが『姫島口義』である。後出の『姫島口義』の文中にあるように、黙斎はこれを迂斎の墨蹟とともに小童に託して八人に与

えようとしたのである。^②したがって、『姫寫口義』は「上総ノ諸君ニ呈ス」と始まり、最後に「頓首九拝」、「二日 稲葉正信」とあり、次に「呈」、そして八人の門人の名が宛名として記され、「案下」が添えられる書簡の形をとっている。^③続いて「別幅」と改めて、迂斎の八幅の別幅を添えること、その言葉を受ける順序は迂斎に入門した順序によるべきことが記され、八幅の墨蹟が『姫寫口義』という一通の書簡とともに八人の門人達に宛てられたことがわかる。文中のもう一つの署名である「宝曆壬申十一月二日「稲葉亦三郎、箋を清名村旅館ニ操ル」」（原文では「」の部分が小字双行となっている。）も、『姫寫口義』が旅先で思い立つて書かれた書簡であることを示している。

このように『姫寫口義』は『道学標的』から選んだ「孔曾孟思周程張朱」の言葉についての講義を主な内容とする八人の門人宛の書簡である。それが、その後どのような契機によるものか、筆削が加えられ、餘論が補われて、講義として十分な形を備えた『姫島講義』が成立した。

(11) 『姫寫口義』と『姫島講義』

平沼系、神習系の相違については後述するとして、『姫寫口義』と『姫島講義』の構成の相違をおおまかに図示すると次のようになる。『姫島講義』は餘論が新たに加えられているばかりでなく、『姫寫口義』の内容自体を補訂しているが、構成要素は以下のAからDまでの四つにまとめることができる。

Aは「聖人ノ道……」で始まる漢字仮名混じりの和文で、聖人の学を学ぶにあつての心構えが述べられている。Bは「我_わ日東……」あるいは「吾東方……」で始まる漢文で、学統及び『姫島講義』成立の所以が述べられている。Cは漢文、および漢字仮名混じりの和文で「孔曾孟思周程張朱」の言葉を解説している部分である。Dは漢字仮名混じりの和文による餘論である。

『姫寫口義』 A B C

『姫島講義』 B A C D

『姫寫口義』では、最初に『道学標的』と関連づけて学問の心構え—A—が述べられ、次に学統、姫島講義成立の所以—B—が述べられているが、『姫島講義』では、最初にBを置いてこれを序とし、次に本論としてAと「孔曾孟思周程張朱」の言葉の解説—C—が配置され、最後に餘論を置くという形に整序されている。こうして思いつくままにつづられた書簡であった『姫寫口義』は、講義にふさわしく順序だてられて『姫島講義』へと変容していったと考えられる。

『姫寫口義』から『姫島講義』へ経過していくに際して、書簡から講義へと性質の変化があったことは、両者の内容の相違からも読みとることができる。先に述べたように『姫寫口義』は、旅先で特定の門人のために書かれた書簡であった。しかし、『姫島講義』では、冒頭の「上総ノ諸君ニ呈ス」という宛名を欠くばかりでなく、『姫寫口義』の旅先の口吻を伝える部分が省略され、そのかわり勉学を奨励する力強い言葉が挿入されている。^⑤『姫島講義』は、『姫寫口義』が帯びていた旅先の書、あるいは特定の門人向けの書簡という性質を払拭し、儒学を学ぼうとする人々一般を視野に入れた講義の書へと変化していく。講義として質量ともに充実をはかるべく餘論が附され、さらに、A、Cの部分にも手が加えられている。たとえば、「聖人」について述べる部分では、『姫寫口義』とは比べものにならないほど意を尽くした説明がなされている。^⑥

以上のような経過をへて、旅先の宿で思い立って書かれた私信としての『姫寫口義』は、構成を整えられ内容も十分に補訂されて、講義の書として世に流布することになったと考えられる。しかし、本来の性格が

門人達に対する書簡であつたことはかなり尾を引いていたと見え、『姫島講義』という形が成立してからも、八人の門人の名の扱い方にその形跡をうかがうことができる。

(三) 平沼系と神習系

『姫島講義』と呼ばれる諸本のうち、本編で参照した六冊の写本は凡例に示すとおりである。このうち、先に述べた平沼系に属するのは、平沼本、大倉山本、新発田甲本の三冊、神習系に属するのは、神習本、新発田乙本、元倡寺本の三冊である。

平沼系と神習系の最も大きな相違は、平沼系が『姫島講義』として独立した一冊の体裁を保っているのに対して、神習系は内題に「孤松全稿卷之一」あるいは「黙齋艸卷一」とあり、『孤松全稿』あるいは『黙齋艸』として編纂されたものの一部であることを示している点である。『孤松全稿』について『黙齋艸』との関係で述べるように『孤松全稿』また『黙齋艸』の成立年については確証がないために、神習系の諸本の成立年を推定することは困難である。平沼系の諸本は独立した一編としての形を保っているが、それだけを根拠にして神習系との成立の先後を言うことはできず、これもまた成立年は未詳とするほかない。しかし、Cの部分の末尾近くの門人八人の名の位置や敬称に注目してみると、平沼系の諸本は『姫島口義』がもっていた書簡としての性格のなごりをとどめており、神習系の諸本はそれを欠いていることがわかる。これによって、形式から考えれば、平沼系の諸本が『姫島口義』に近いことが知られるのである。

『姫島口義』の八人の宛名書きは敬称の種類がさまざまで、整えられていない分だけより具体的である。例えば、「姫島大兄」あるいは、「折戸丈」、また「鵜澤生」といった門人達の間での次序や年齢をしのばせる敬称の使い分けがなされていて、個々の門人の個性を表している。「大兄」、「丈」といった敬称には、い

かにも長年、学をともにしてきた親しみが感じられる。それとともに、八人の門人に道学を担う同志としての敬意をはらい、八人を大切に思っている黙齋の心が伝わってくる宛名書きである。『姫罵口義』は黙齋が八人の門人にあてた親しみと敬意のこもった書簡なのである。

これに対して『姫島講義』の諸本では、八人の門人の居住地と名が「庄内」、「兵右衛門」などの通称で出してくる。神習系の諸本では、一見して八人の門人の居住地と名を示すための配列であることがわかる。敬称もつけられていない。神習系の諸本は、一般の人々が読むことを想定すれば上総にいた八人の門人達の名前を示すことだけで充分であると考えられたためにこのような形になったのであろう。

一方、平沼系の諸本では、年月日の下に「江戸 又三郎頓首」とあり、次に八人の名前が通称に敬称の「殿」をつけて記され、しかも、その配置は明らかに書簡の形である。黙齋はこの年月日に上総にいたのだから、「江戸 又三郎頓首」とは江戸在住の意味であろうか。神習系の諸本が門人の名を列挙することだけを目的にしているのに対して、平沼系の諸本は、黙齋が門人達に、敬意をもってまた親しく宛てた書簡の形を明らかに残しているのである。

神習系の諸本はすでに一般の人々に対する講義の形をとり、そこではどのような門人がいたか、どのような門人が八つの言葉を与えられたのかがわかればよいだけであるのに対して、平沼系の諸本は、宛名書きの敬称と位置から、本来書簡であった『姫罵口義』のなごりを残していると考えられる。したがって形式からいえば、平沼系の諸本は、神習系の諸本にくらべて『姫罵口義』により近いことができる。

〔注〕

- (一) これら八幅の書は実際に八子に与えられた。池上幸次郎「稲葉黙齋先生（一）」『東洋文化第百三十八號』（東洋

文化學會、一九三六年、五二頁―五三頁）に八幅のうちの三幅が残っていると記されている。鈴木養察（庄内）、鶴澤近義（幸七郎）、安井半十郎に与えられたものの三幅で、それぞれ鈴木家、鶴澤家、池上氏が所蔵しているところ。池上氏所蔵の一幅は「言学便」の語で池上幸二郎編著『吾學叢書第一篇 稲葉黙齋先生傳』（誠堂書店、一九三五年）の冒頭の迂齋、黙齋などの自筆の書を掲載している部分に縮小されてあげられている。また、田原綱三郎「上総における山崎学」（梅澤芳男編著『稲葉黙齋先生と南総の道学』、ぺりかん社、一九八五年、一二七頁）によれば、「朝聞道」、「聖希天」、「言学便」、「為天地」の四幅が現存しているとのことである。

(2) 翻刻参照。

(3) 後出『姫島口義』解題参照。

(4) 同右。

○『姫島講義』注釈

凡例

一、『道學遺書 初集卷一 孤松全稿卷之一』（道學協会、明治二十四〔一八九二〕年）を底本とし、以下の諸本と校合した。

神習本 無窮会神習文庫所蔵の写本。目録番号一三五・一三の『孤松全稿』一卷所収。

平沼本 無窮会平沼文庫所蔵の写本。目録番号九五・三一。

大倉山本 大倉山精神文化研究所所蔵の写本。「慶應卯年六月十一日旦 實明」の識がある。

新発田甲本 新発田市立図書館所蔵の写本。目録番号 V09、教書 186。

新発田乙本 新発田市立図書館所蔵の写本。目録番号 V09、教書 198。

元倡寺本 千葉県山武市成東元倡寺所蔵の写本。『孤松全稿』一卷所収。

一、原文は、漢文と漢字片仮名混じりの和文からなる本論、及び漢字仮名混じりの和文の餘論によって構成されている。

1 漢文の部分は最初に原文をあげ、次に訓読文、最後に語注をつけた。

2 和文の部分は、原文を内容によって適宜分け、それぞれ語注をつけた。

3 校合はまとめて本編末に掲載した。

一、底本を忠実に翻印するように努めたが、読解上の便宜をはかるために次のような変更を加えた。

1 漢文の部分について

(1) 訓読文では、人名以外は新字を用いた。

(2) 底本には「于」を「干」とする誤りがある。訂正し「干」と翻印した。訓点の誤脱については補訂せず、底本のまま翻印した。

2 和文の部分について

(1) 適宜段落を設けて改行し、句読点を加えた。

(2) ヲ、フ、氏、子を現行一般の表記に直したほか、引用文等は「」、書名は『』で括った。

(3) 底本の片仮名の振り仮名はそのまま翻印した。(一)でくくった平仮名の振り仮名は校合者が新たに補ったものである。また、短い漢文の句には振り仮名形式でよみをつけた。

(4) 底本の誤字は訂正して翻印した。誤字は正字の下に(一)で示し、語注で訂正の根拠を示した。

(5)意味上、並立の関係にある語句と語句の間に・を補った。

一、語注の見出しには原文の字句をあげた。

一、訓点、送り仮名については、煩瑣を避けるため校合でその異同を記すことをしない。



孤松全稿卷之一

默齋艸卷一

姫島講義

吾東方始生_三山崎先生_一。尋有_二佐藤淺見_三宅三先生者繼出_一。而闡_三明道學_一。排_二斥異教_一。使_二後學知_レ所_二依歸_一。其功猶_下濂洛之得_二不傳於遺經_一。而有_中關閩之盛_上也。吾家大人受_二業於佐藤三宅二夫子_一。又見_二淺見先生_一。講_レ學授_レ徒殆五_二十年于今_一矣。余幼學_二於膝下_一。長及_二剛齋先生之門_一。承_二父師之教_一。雖_レ以_二至愚極陋之資_一。漸窺_二聖學之要_一。竊以_二此道爲_レ念。實教之令_レ然也。余今爲_二鵜澤氏_一所_レ延此來。諸生誤設_二講座_一。日使_三余講_二解近思錄_一。孜孜不_レ怠。其切磋之勤。足_三以彊_二人意_一。余先月十九日。離_二膝下_一及時。請_二大人賜_レ書_二道學標的所_レ載。孔曾思孟周程張朱之語各_一。大人許納。輒書_二凡八道_一以從_レ請。乃捧出。顧上總諸生之爲_レ學也。始_二酒井氏_一而成_二和田生_一。爾後篤信_二吾大人_一。勉々不_レ輟。以至_二于今_一然從_二大人_一其直指面命者僅八人。而姫島鈴木氏者。亦其鄉之師也。到_二于此_一則先就_二姫島學舍_一。講_二道學標的_一。以_二其墨蹟八道_一。各贈_二八子_一。不_レ圖姫島家禍如_レ此以負_二初心_一。因作_二講義一卷_一。略示_二要領_一。與_二之八子_一。以勵_二其志_一云。八子勉乎哉。美質之易_レ得。至道之難_レ聞。此佐藤夫子之所_下以蚤編_二鞭策錄_一。晚著_中道學標的_上。而彼闡_二明道學_一。排_二斥異教_一。使_二後學知_レ所_二依歸_一者非_レ此。而將何在哉。寶曆壬申冬十一

月

吾が東方、始めて山崎先生を生じ、尋いで佐藤・淺見・三宅三先生なる者繼いで出づる有り。而して道学を闡明にし異教を排斥し、後学をして依歸する所を知らしむ。其の功は猶ほ濂洛の不伝を遺經に得て、閨閥の盛りあるがごとし。

吾が家の大人、業を佐藤・三宅二夫子に受け、又、淺見先生に見ゆ。学を講じ、徒に授くること、殆ど今に五十年。余幼にして膝下に学び、長じて剛齋先生の門に及び、父師の教へを承く。至愚極陋の資を以てすと雖も、漸く聖学の要を窺ひ、竊かに此の道を以て念と為せり。実に教への然らしむるなり。

余今鶴澤氏に延かれ、此に来る。諸生誤つて講座を設け、日に余をして『近思録』を講解せしむ。孜孜として怠らず、其の切磋の勤め、以て人意を彊ふするに足れり。余、先月十九日、膝下を離るるの時に及び、大人に『道学標的』に載する所の孔曾思孟周程張朱の語各一を書して賜はらんことを請ふ。大人許納し、輒ち凡そ八道を書して以て請ひに従ふ。乃ち捧出せり。

顧みるに、上総諸生の学たるや、酒井氏に始まり、而して和田生に成る。爾後篤く吾大人を信じ、勉々として輟まず、以て今に至る。然れども、大人に従ひ、其の直指面命せる者、僅かに八人なり。而して、姫島の鈴木氏は、亦其の郷の師なり。此に到らば則ち先づ姫島学舎に就いて、『道学標的』を講じ、其の墨蹟八道を以て各八子に贈らんとす。図らずも姫島家の禍此くの如し。以て初心に負く。

因りて、講義一卷を作り、略要領を示し、之れを八子に与へ、以て其の志を励ますのみ。八子、勉めよや。美質の得易く、至道の聞き難きこと、此れ、佐藤夫子の蚤に『鞭策録』を編し、晩くに『道学標的』を著せし所以なり。而して彼の道学を闡明し、異教を排斥し、後学をして依歸する所を知らしむるは、此に非ずん

ば、将何^{はた}くに在らんや。宝曆壬申冬十一月

○語注

【山崎先生】山崎闇齋（元和四「一六八八」年—天和二「一六八二」年）。名は嘉、字は敬、号は闇齋。後垂加と号した。京都に生まれる。幼少より仏教の修行に努めたが、土佐で谷時中に儒学を学んで還俗し、朱子学の研究に専心した。後、吉川惟足、河辺精長から神道を伝授され、垂加神道を唱えた。著書に『關異』『文会筆録』『風水草』などがある。【佐藤】佐藤直方（慶安三「一六五〇」年—享保四「一七一九」年）。五郎左衛門と称した。備後国、福山の人。山崎闇齋に学び、浅見綱齋、三宅尚齋とともに崎門三傑と称された。著書に『講学鞭策録』『排釈録』『鬼神集説』などがある。【浅見】浅見綱齋（承応元「一六五二」年—正徳元「一七一一年」年）。名は安正。重次郎と称した。近江国、高島の人。山崎闇齋に学んだ。主著『靖献遺言』にみられる大義名分論は思想界に大きな影響を与えた。ほかに、『拘幽操附録』『氏族辨証』などを著した。【三宅】三宅尚齋（寛文二「一六六二」年—元文六「一七四一」年、一月）。諱は重固。丹治と称した。播磨国、明石の人。山崎闇齋の晩年に入門。忍藩に仕えたが、諫言して入れられず幽囚された。釈放後、京都で学塾を開き多くの門人を育てた。著書に『白雀録』『狼寔録』『黙識録』などがある。【道學】堯、舜、禹、湯王、文王・武王、周公、孔子、顔子・曾子、子思、孟子と伝えられた先王の道を学ぶ学問。「中庸は何の為に作れるや。子思子、道学の其の伝の失はんことを憂へて作るなり。」（『中庸章句』序）。【濂洛】濂は濂溪（湖南省にある川）に住んだ周濂溪、洛は洛陽に住んだ程明道とその弟、程伊川を指す。周濂溪（一〇一七年—一〇七三年）は宋学の祖といわれる北宋の儒者。著書に『通書』『太極図説』などがある。程明道（一〇三二年—一〇八五年）、程伊川（一〇三三年—一一〇七年）兄弟は、ともに周濂溪に学

んで性理の学を大成した。兄弟の遺文や語録は『二程全書』に収められている。【闇関】關中（陝西省）に住んだ張横渠と關中（福建省）に住んだ朱子をさす。張横渠（一〇二〇年—一〇七七年）は宋学の先駆者の一人で、著書に『西銘』、『正蒙』、『易説』などがある。朱子（一一三〇年—一二〇〇年）は宋学を大成した南宋の大儒。著書に『四書集註』、『易本義』、『通鑑綱目』などがある。【不傳】先王の道の伝統が、堯、舜、禹、湯王、文王・武王、周公、孔子、顔子・曾子、子思、孟子まで伝えられたあと、さまざまな異端が興り、道を継ぐ者が現れず不伝となった。【濂洛之得不傳於遺經】周濂溪と程明道、程伊川が、不伝となっていた道の伝統を遺された書によって回復した。【吾家大人】黙齋の父、稲葉迂齋（貞享元「一六八四」年—宝暦十「一七六〇」年）。名は正義。十左衛門と称した。江戸の人。佐藤直方の門人であるが、浅見綱齋、三宅尚齋にも学んだ。唐津藩に儒官として仕えた。著書に『幼君補佐之心得』、『迂齋先生学話抄略』などがある。【剛齋先生】野田剛齋（元禄三「一六九〇」年—明和五「一七六八」年）。名は徳勝。七右衛門と称した。江戸の人。佐藤直方の門人で、三宅尚齋にも学んだ。代々幕臣の家に生まれたが仕官せず、本所石原で学塾を営んだ。著書に『理気先後説』がある。【鵜澤氏】鵜澤近義（享保五「一二二〇」年—寛政三「一二九一」年）。幸四郎と称した。清名幸谷（現在の千葉県山武郡大網白里町清名幸谷）の名主で迂齋の門人であった。近義の父、容齋（元禄八「一六九五」年—安永二「一七七三」年）と兄、由齋も迂齋の門人で、近義と兄の協力によって黙齋の清名幸谷移住が実現した。【近思録】朱子と呂祖謙の共著。一一七六年成立。周濂溪、程明道、程伊川、張横渠の著書や語録から初学者にふさわしい六二二条を選んで編集したもの。【孜孜】怠らずつとめるさま。【道學標的】佐藤直方著。正徳二（一二二二）年成立。四書及び周濂溪、程明道・程伊川、張横渠、朱子の書から聖学の要諦となる文を選んだもの。【孔曾思孟周程張朱】孔子、曾子、子思、孟子、周濂溪、程明道・程伊川、張横渠、朱子。【八道】後出。『道学標的』の中から、右の八人が著した文を

一文ずつ選び、学問を志す者の目当てとして上総の八人の門人に与えた。【酒井氏】酒井脩敬。元文年間（一七三六年—一七四〇年）に没した。一名義武、初め竹右衛門と称し、後九郎右衛門と改めた。左平治と称した。伊勢長島藩の藩臣。佐藤直方、稲葉迂斎に師事した。享保十二（一七二七）年の成東大橋（現在の千葉県山武市成東町の大川（作田川）にかかる橋）修理の際、監督者として成東に派遣された。滞在中、脩敬が和田儀丹と鈴木養察の勉学ぶりを知ったことがきっかけとなって両者は迂斎に師事することとなり、それが上総道学の発端となった。【和田生】和田儀丹。寛保四（一七四四）年一月没。下総酒々井の人。佐藤直方門下の菅野兼山に学び、後、迂斎に師事した。医を業として成東に住んだ。【姫島】千葉県山武市姫島。【鈴木氏】鈴木養察（元禄八「一六九五」年—安永八「一七七九」年）。莊内と称した。迂斎の門人。独学で四書などを学び、酒井脩敬に面会した折り、読んでいる書の章句を暗唱して感心させた。江戸で迂斎に学び、帰郷後、農業に携わりながら学塾を開いた。【八子】後出。【姫島家禍】鈴木養察の家に不幸があった。【美質之易^レ得。至道之難^レ聞】『論語』公冶長、「子曰く、十室の邑、必ず忠信丘の如き者有らん」の条の朱注に「夫子は生知にして、而も未だ嘗て学を好まざることあらず。故に此れを言ひて以て人を勉ます。言ふころは美質得易く、至道聞き難し。学の至りは則ち以て聖人爲るべし。学ばざれば、則ち郷人爲るを免れざるのみ。勉めざるべけんや。」とある。【鞭策録】佐藤直方著。天和三（一六八三）年成立。為学の綱要に関する朱子の語を編纂したもの。『排釈録』、『鬼神集説』、『道学標的』と合わせて藤門の四部書と呼ばれる。【寶曆壬申】宝曆二（一七五二）年。

▼二

聖人ノ道先儒ノ議論已ニ盡キ、實々確々遺蘊ナケレバ、今更贅スルニ及ズ。タゞ「四書」・『小學』・『近思

録』ノ三書ヲクル々々讀メバ、ソノ中自深意出テ、他ニ求ルニ及ズ。然レトモ其三書モタゞ讀ムバカリニテハ、須磨明石ノ景勝ヲ睡リナガラ見ル如ク、何タビ經過ストモ争カソノ景色ヲ知ラン。サレバ三書ヲハツキリト目ヲ惺シテミルガ肝要ナリ。於^(いかに)是ヤ、昔年我佐藤先生『講學鞭策』ノ書ヲ著シ玉フ。實ニ吾輩即今學フ者ニ賜フテ、學者ノ啓發ナキニ策ヲアテ、昏睡スル人ノ耳ヲ提ル異見ナリ。然レバカノ三書イカホドの切ナルモ、鞭策ノ心ナケレバ、鱸ノ酔ノキカザル如ク、鯛モ鱸モ無用ノ肴トハナルナリ。「四書」モ『近思』モ無用ノ書トハナルナリ。タゞ此心ヲ引立テ眼ヲサマシテ諸先輩ノ異見ヲキリ身ニ塩ヲ付ルゴトクニキクガ、千々萬々實ニ學フト云モノナリ。

○語注

【遺蘊】もれのこす。【四書】『論語』、『孟子』、『大学』、『中庸』。【小學】朱子の指示によって門人劉子澄が編纂し、一一八七年に成立。洒掃、応対、身体などの作法、善行などに関する文章を集めて、幼童向けに日常道德の規範を示した書。【耳ヲ提ル】耳を引っぱって言い聞かす。

▼三

吾友イカゞ思フヤ。自家身上ニ引付ケ痛ク警策スベシ。人将言ハン、「世上ノ儒者ヲ見ルニ、大低タゞ書ヲ讀ムコトヲ務メ、詩ヲ賦シ文ヲ作り更ニ一議論アルナク（底本はり）山ニ登リ月ニ歩シ、酒ヲ飲ミ茶ヲ啜リ、安樂自在ニシテ老師・宿儒・大儒先生ト稱スルニ、闇齋門下ノ學何ヲ苦ンデ自脩如此ヤ。カク警策スル學ハ、果シテ何ノ學ゾヤ」。

曰「吾學由來有^二準的^一以至^二聖人^一之學也」。所謂聖人ナル人、日本タヘテ一人モ見ヘ玉ハズ。神武以來一

人モ近付ニナケレバ、吾人思ヒ忘レテヲルハ聖人ナリ。然ルニソノ聖人ナルモノ、別ニ天ヨリ内々ノ賦命アルニ非ズ。又外ニ格段ノ重寶ヲモ領セズ。耳目鼻口四肢百骸、吾人ト分寸ノ異ナルコトナケレバ、吾此一身モ聖人ト同ク完全備足シテ、聖人ニ對シ耻(はづか)シカラヌ家筋ナリ。只一毫ノ私欲、吾コノ血氣形体ニ長ジハビコリテ、自カラ如(かく)レ此汚濁ノ身ニヲチブレタルナレバ、吾此人欲ノ汚レタルモノヲ、吾此聖人ト共ニ持合セタルモノヲ以テ逐ヒ退レバ端的聖トナルノ路徑ヒラケテ、萬里之遠參商之隔千苦百難トイヘトモ、道ハ品川カラ長崎マデズツトアイテオレバ、イツゾハ聖人ノ域ニイタラザルノ理ナシ。此又分外過當ノ望ニアラズ。吾コノ天ヨリ備足スル處ノ本体トナリタルノミ。聖人豈遠カラシヤ。

○語注

【一議論アルナク】諸本によつて「アルナク」に改めた（校合参照）。【宿儒】年たけ名望ある学者。【自脩如レ此ヤ】自らを脩むること此くの如くや。【日吾學由來有ニ準的ニ以至ニ聖人一之學也】曰く、「吾が學の由りて來たる準的有り、以て聖人に至るの學なり」と。「準的」はめあて。【賦命】天から分け与えられたもの。【參商之隔】參はオリオン座の三つ星。商は金星。參星は西方に、商星は東方にあり、一緒に現れることはない。

▼四

於(こゝに)レ是乎、聖人ニ至ランコトヲ學ブナリ。因テ聖人ヲ學ブ學ヲ眞儒トモ云、君子儒トモ云、道學トモ云、爲レ己之學トモ云ヒ、古之學者トモ云ヒ、他所カラハ道學先生トモ嘲リ、宋儒トモ輕ンズ。皆是レ吾黨學脈心法聖門ノ旨訣ナリ。カクアル故ニヨツテ、天ニ對シテ聖人ニナリタキト望アル人ハ、上ハ天子中ハ諸侯卿

大夫士下ハ農工商、道學ヲシラズシテ何ノ法術アラン。故ニ道學ハ、聖トナルノ學ニシテ、學ブ者ノ目當ナリ。此目當ナケレバ、向ニ所_レ謂先輩ノ異見モ講學ノ鞭策モ亦無用ノ異見トゾナルナリ。無用ノ鞭策トゾナルナリ。於是ヤ、又我佐藤先生『道學標的』ノ書ヲ著シ、學問ノ目アテコヽナリト、孔曾思孟周程張朱ノ八人ヲ出シ、吾輩即今學フ者ノ目當ニゾ賜リケレバ、吾人拜讀シテ佩服スベキナリ。

○語注

【君子儒】道を身に修めるために学ぶ者。「子、子夏に謂ひて曰く、女、君子の儒と為れ。小人の儒と為る無かれ。」(『論語』擁也)。「為_レ己之學」「子、子夏に謂ひて曰く、女、君子の儒と為れ。小人の儒と為る無かれ。」(『論語』擁也)の朱注に、程子の言葉を引用して、次のようにある。「君子の儒は己の為にし、小人の儒は人の為にす。」【古之學者】「子曰く、古の學者は己の為にし、今の學者は人の為にす。」(『論語』憲問)。「道學先生」宋學者のこと。転じて、道德的な修養に拘泥して融通がきかず、世事にうとい學者をあざける場合に使われる。荻生徂徠の『学則』に「故に学んでむしろ諸子百家曲芸の士となるも、道學先生たることを願はず。」とある。【佩服】心にとどめて忘れない。

▼五

孔曾思孟周程張朱之語

朝聞道夕死可矣

註「不_レ可_ニ以_ニ不_ニ」ト云四字、眼ヲ付ヨ。金ヲホシイノ、長生ヲシタイノト云ヤフナコトニアラズ。委曲ハ姫島ニ問テ知ルベシ。福來ル便死スハ望ム處ニ非ズ。朝聞_レ道夕死可矣、ナゼニ可ナルゾ。体認ス

べシ。

在明明徳在新民在止於至善

或ハ佛者、或ハ霸者、又ハ王通ガ類、皆『大學』ニアラズ。學問ハ『大學』ヲ學ブコトナリ。「親」ノ字、程子當^レ作^レ新。眞儒ナリ。陽明、「親」ノ字ヲ用フ、俗儒ナリ。此意味、考ヘ看ヨ。

尊徳性而道問學

徳性ヲ尊ヌカラ見處卑シ。問學ニ道^{（上）}ヲヌカラ規模小シ。學ハ高く大クスルコトナリ。「高大」ノ二字ミヨ。學問ノ不^{（下）}振ハ卑ト小トニ由ルナリ。

孟子道性善言必稱堯舜

性善ナレバコソ學ブナリ。猿ハカシコクテモナラズ。學ノ綱領、「性善」ノ二字ナリ。タゞ「性善」ノ二字デスム。サレトモゼウノコハキモノ、アランカト稱「堯舜」。堯舜ハ證文ナリ。證文サヘアレバ公事ニマケズ。タゞ二人ノ堯舜大勢ノ證文トナルハ佐藤子云、「一匹ノ猫鼠ヲトル、アトノ千匹皆取ル」ト。荀・楊コ、ヲ知ラズ。ソレニ註ヲスル司馬溫公、ナントシテ道學ヲ知ラン。吾友自重セヨ。人柄ワルケレバ一休ガ家ノ小僧。

聖希天賢希聖士希賢

ア、快ナル哉、快ナル哉。天ガヤスマヌカラ、聖人モヤスマズ。聖人ガヤスマヌカラ、賢人モヤスマズ。賢人ガヤスマヌ、士尚何ゾ休マン。士トハ學者ナリ、儒者ナリ、メン々々ノコトナリ。武士ノ士デナシ。武士ハ此士ト別ナリ。賢ヲ希ハズ。賢ヲ希ハザレバ、士トセズ。此士ハ學者ナリ、學者衆。

言學便以道爲志言人便以聖爲志

志ニ遠慮ハ入ズ。謙退無用ナリ。吾人尻ゴミヲスルハ、志ナキナリ。女昏禮ヲスルトキ、夫ヲ二人モ

ツマイト思フハ志ナリ。二人モタウト云心アラバ、タレガ女房ニセウゾ。學者聖人ニナラヌト云バ、何トシテ許スゾ。

爲天地立心爲生民立道爲去聖繼絕學爲萬世開太平

所謂四ツノ「爲」ノ字、身ノ爲メ一モナシ。張子眞肺腑中ヨリ吐キ出ス、ホンボニホンナリ。迂訛ニアラズ、大言ニアラズ。學者タチ驚クベカラズ。此處俗心ヲ以テ知り難シ。

致知以明之立志以守之造之以精深充之以光大

余謂四者廢其一則非學矣

右段々全体肝要之處、タゞ体認スル事實ニ難シ。功夫ノ施ス處ハ、已ニ見ニ于諸先達之說「必有レ事勿レ正」之五字最妙ナリ。フンデフマザレ。知ル者ニシテ知ルベシ。其要、諸友ノ集會ニアリ。千々萬々遺恨ナルハ姫島ノ會ヲ得ザルコト。書不レ盡レ言言不レ盡レ意。明朝發足、仍而如^(よりふくむ)此記シ置クナリ。

壬申十一月二日夜

孔曾思孟周程張朱之語八道

右吾家大人墨蹟也。以與「吾八子」。子等各以下入於大人之門「先後上立次序」。從而受。焉其學之進否。德之高下。或有焉吾不_レ敢言_一

姫島 庄内 折戸 兵右衛門

片貝 彌右衛門 早船 安左衛門

成東 武兵衛 小松 半十郎

清名 幸七郎 東金 清十郎

○語注

【朝聞道夕死可矣】「子曰く、朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり。」（『論語』里仁）。【註「不_レ可_二以_二不_二ト云四字」】「子曰朝聞道夕死可矣」の朱注に「程子曰く、言ふところは、人_レ以て道を知らざるべからず。苟くも道を聞くを得れば、死すと雖も可なり。」とある。【姫島】鈴木養察。【在明明德在新民在止於至善】「大学の道は、明德を明らかにするに在り、民を新たにするに在り、至善に止まるに在り。」（『大学』）。【王通】五八四年頃―六一八年。文中子と号した。山西竜門の人。隋末の学者。著書に『中説』がある。【「親」ノ字、程子當_レ作_レ新】古注では「親民」とし「民を親しむ」とよむが、朱注では「新民」とし、「新」について次のように注釈している。「程子曰く、「親は當に新に作るべし」と。（中略）新とは其の旧を革_{あたら}むるの謂_いなり。言ふところは、既に自ら其の明德を明らかにす。又當に推して以て人に及ぼし、之れをして亦以て其の旧染の汚_おを去ること有らしむべしとなり」。【陽明】王陽明（一四七二年―一五二八年）。字は伯安、陽明と号した。浙江省の人。陽明学の祖。心即理であるとし、知行合一、致良知を主張した。著書に『伝習録』などがある。【尊徳性而道問學】「故に君子は徳性を尊んで問_{もん}學_{がく}に道_より、广大を致して精微を尽くし、高明を極めて中庸に道_より、故_{ふる}きを温_{たづ}ねて新しきを知り、厚_{あつ}きを敦_{とん}くして以て礼を崇ぶ。」（『中庸』第二十七章）。【孟子道性善言必稱堯舜】「滕の文公世子_た為_なりしとき、將_{まさ}に楚_{しよ}に之_ゆかんとし、宋を過_{よぎ}りて孟子に見ゆ。孟子性善を道_いひ、言へば必ず堯舜を稱す。」（『孟子』滕文公上）。【佐藤子】佐藤直方。【荀・楊】荀子と揚雄。荀子は、名は況。趙の人。戦国末期の儒者。孟子の性善説に対して性悪説を主張した。著書に『荀子』がある。揚雄（前五三年―後一八年）は、字は子雲。揚子ともいう。文章家として名高い漢代の学者。孟子の性善説と荀子の性悪説を折衷する、善悪混在説をとった。著書に『法言』などがある。【司馬溫公】司馬光（一〇一一年―一〇八六年）。字は君実、現在の山西省、夏県の人。北宋の政治家であり、儒者。太師温国公の称号を贈られた

ことから温公とよばれる。著書に『資治通鑑』がある。默齋の『話録』に「温公ホド徳ノアル人ハナイ（中略）天下ノ人ヨク／＼温公ノ徳ヲシタフタナリ。然レトモ不徳ナコトガアル。王奔ニクミシタ『法言』ニ註ヲシテ、道統ノ孟子ヲバワルク云フ。知ガ我ガモノニナラヌ故ノコトナリ。我ガモノニナラヌハ徳デナイ。『大學』ヲ合點セヌ人ナリ」とある。【一休ガ家ノ小僧】禅僧に対する批判。後出の餘論の部分に「梁ニ達磨アリ。唐ニ黄蘗・臨濟ガ類アリ。大慧、日本ノ一休ノ輩アリ。皆天ヲ知ラズ。天ニ違フテ自知ラス。自是トシテ無^レ忌憚^二」とある。【聖希天賢希聖士希賢】「濂溪先生曰く、聖は天を希ひ、賢は聖を希ひ、士は賢を希ふ。」（『近思録』爲學大要篇一）。もとは周濂溪の『通書』志学篇にあつた言葉。【言學便以道爲志言人便以聖爲志】「学を言へば便ち道を以て志と爲し、人を言へば便ち聖を以て志と爲せ。」（『近思録』爲學大要篇五九）。もとは『程氏遺書』十八の程伊川の言葉。【爲天地立心爲生民立道爲去聖繼絕學爲萬世開太平】「天地の爲に心を立て、生民の爲に道を立て、去聖の爲に絶学を継ぎ、萬世の爲に太平を開かん」（『近思録』爲學大要篇九五）。張横渠の言葉。【ホンボニホンナリ】本当という意味で「ほんぼん（根本）」という言葉があり、それを「ほんぼ」ともいう。【致知以明之立志以守之造之以精深充之以光大】「知を致し以て之を明らかにし、志を立てて以て之れを守る。之れに造るに精深を以てし、之れを充たすに光大を以てす。」（朱子文集』六四、「答劉朝弼」書）。【余謂四者廢其一則非學矣】余謂ふ、「四者の其の一を廢すれば則ち学に非らざるなり」と。【見^二于諸先達之說^一】諸先達の説に見る。【必有^レ事勿^レ正】「必ず事とすること有れ、而も正めすること勿れ、心に忘るること勿れ、助けて長ずること勿れ。」（『孟子』公孫丑上）。【書不^レ盡^レ言言不^レ盡^レ意】「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず。然らば則ち聖人の意は、其れ見るべからざるか。」（『易経』繫辭伝上）。【壬申十一月二日夜】「壬申十一月二日夜」から「東金 清十郎」までの体裁は、次の二種類に分かれる。一つは底本、神習本、新発田乙本、元倡寺本、つまり神習系の諸本の体裁である。そのうち

底本の体裁を①として再度あげておく。もう一種類は、平沼本、大倉山本、新発田甲本、つまり平沼系の体裁で、そのうち平沼本の体裁を左に②としてあげる。

①底本

壬申十一月二日夜

孔曾思_二孟周程張朱之語八道

右吾家大人墨蹟也。以與_二吾八子_一。子等各以下入_二於大人之門_一先後_上立_二次序_一。從而受。焉其學之進否。

德之高下。或有焉吾不_二敢言_一

姫島 庄内 折戸 兵右衛門

片貝 彌右衛門 早船 安左衛門

成東 武兵衛 小松 半十郎

清名 幸七郎 東金 清十郎

*但し、新発田乙本と元倡寺本は 姫島 庄内、折戸 兵右衛門、片貝 彌右衛門…の順に横一列に記されている。

②平沼本

壬申十一月二日夜 江戸 又三郎頼首

姫島 庄内殿

折戸 兵右衛門殿

片貝 彌右衛門殿

早船 安左衛門殿

成東 武兵衛殿

小松 半十郎殿

清名 幸七郎殿

東金 清十郎殿

孔曾思孟周程張朱之語八道吾家大人眞蹟也以與^フ吾八子^ニ子等各以下入^ニ於大人之門^一先後上立^ニ次序^一從而受焉其學之進否德之高下或有^{ハラン}焉吾不^ニ敢言^一

* 「又三郎」は黙齋の幼名である。また、大倉山本では地名と名前の間の空白がなく、新発田甲本は「姫島 庄内殿」のみ空白を設けている。

【以與^ニ吾八子^一。子等各以下入^ニ於大人之門^一先後上立^ニ次序^一。從而受。焉其學之進否。德之高下。或有焉吾不^ニ敢言^一】以て吾が八子に与ふ。子等各^{おのづから}大人の門に入るの先後を以て次序を立てれば、従ひて受けよ。其の学の進否、徳の高下、或いはこれ有らん。吾、敢へて言はず。【姫島 庄内】鈴木養察。【折戸 兵右衛門】

折戸村（現在の千葉県山武市松尾町折戸）の鈴木兵右衛門。【片貝 彌右衛門】片貝村（現在の千葉県山武郡九十九里町片貝）の布留川彌右衛門。【早船 安左衛門】早船村（現在の千葉県山武市早船）の平山安左衛門。以上三名は農業に従事していたという以外、詳細はわからない。【成東 武兵衛】成東（現在の千葉県山武市成東）の安井武兵衛。『崎門學脈系譜』によれば宝永六（一七〇九）年―天明四（一七八四）年。一説に宝永三（一七〇六）年―天明元（一七八一）年。半蔵と称した。【小松 半十郎】小松（現在の千葉県山武市小松）の安井記斎。『崎門學脈系譜』によれば享保十（一七二五）年―享和二（一八〇二）年。一説に享保永九（一七二四）年―享和二（一八〇二）年。名は利恒。字は子久。半十郎と称した。【清名 幸七郎】鵜澤近義。【東金 清十郎】東金（現在の千葉県東金市）の桜木闇斎。享保十（一七二五）年―文化元（一八〇四）年。初め大木剛中と称した。名は千之。東金の人。東金一の豪商であつたが、後長崎聖堂の教授となつた。

▼六

餘論曰、世知リ顔ニシテ知ヌコト多シ。眞知ト云ハ、ホンニ知ルコトナリ。ホンニ知ルト云モ色々アレトモ、一ツ大事ノコトヲホンニ知ルト學問ハ上ルナリ。サテ一ツ大事ノコトトハ何ゾ。人者天之子也ト云コトナリ。人者天之子也ト云コトヲホンニ知ルト、先ヅソレデ濟ムコトナリ。看ヨ今菜賣・肴屋マデ天道ヲソロシ天道ヲソロシト云カラハ、天ヲ他人アシライニスル者ハナケレトモ、我ヲ眞ニ天ノ子ト知タル者ナシ。折節ハ我コソ眞ニ知タト云學者モアルベシ。然ルニ眞ニ知リタラバ、ナゼニ學問ハ上ラヌゾト崇（底本は崇）ラバ挨拶ガナルマイナリ。若シ天ヲ實ニ我ガ親ト思ヘバ、天ノ機嫌ヲトラネバナラヌゾ。機嫌ヲ取ルト云モ、人ノ機嫌ヲ取ルハ易シ。劉伯倫ニハ酒、業平ニハ色、ソレデ機嫌ハヨシ。至テ易キナリ。タゞ天ノ機嫌ヲ取

ルガ誠ニ難シ。何ヲシテ天ノ氣ニ入ルベキヤ。唯天ヲツク々々ト見、アノ天ニ似ル様ニ違又様ニトスレバ、天ノ機嫌ハヨシ。看ヨ、天ハ萬古カハラズ流行シ達者ニメグラル、ニ、吾人其天ノ子デ居テ、氣質人欲ニ蔽ヒ拘ハサレ、我儘氣随ニ安ジ、ブラ々ト怠リタル姿ハ、ナント天トハ大ニ違ヒタルニ非ズヤ。親ハ實底律儀ニテ、俗ニ云虫モフマヌト云人柄ジヤニ、子ハ大ノ道落、親ハ下戸ジヤニ子ハ大ノ酒吞、親ハ武藝ヲ勵ムニ子ハ一日三味線ヒイテ日ヲ暮ラス。此ヲ鬼子ト云フ。

○語注

【崇】諸本により「崇」に改めた。【劉伯倫】劉倫りゅうりん。晋の文人。竹林の七賢人の一人。酒を非常に好んだ。【拘ハサレ】『東金市史料篇三』の柴田氏の訓読では「わずらハサレ」。

▼七

サテソレニ異見ヲ云役人ガ、學者ナリ。常ニ鬼子ヲ責テ曰「貴殿ハナント心得タルヤ。瓜ノツルニ茄子ハナラヌト諺ニ云ガ、今其身持言語道斷タリ。タシナムベシ」ト、親切ニ戒ム。其言甚以テ尤ニ聞ユルナリ。ナレトモ天ヲ親、我ヲ天ノ子ト云ニナツテハ、其異見云學者ガ即チ天ノ鬼子ナリ。今日不理屈ヲ云儒者ハ、鬼子ノ甚シキニテ、鬼子ノツマリガ異端ニ落ルナリ。其鬼子ノ開山ヲ云ハゞ老佛ニシテ、禪家頓悟ニ至ルマデガ鬼子ノ尤（はなはだ）キ者ニテ、天ニ似ヌト云ニツマル。サレバ聖學全体要領・聖賢千言萬語ヒツクルメテ、天ニ似ル様ニトナルコトナリ。夫故、學者タチ發明ニ事ヲサバカフトモ賢ク物ヲ云ハフトモ、天ニハヅレテハ千功萬業皆水ニナルコトナレバ、他事ニ勞シウカ々々ト途草（みちくさ）シテ日時ヲ費サンヨリハ、一ツノ「天」ノ字ヲ大書シ、是レヲ床ノ間ニ掛ケ置キ、行住坐臥ニ六時中、天ニ違ヌ様ニタ々々々々ト學フベシ。コレ我道の々

ノ宗旨ナリ。

○語注

【聖學全体要領聖賢千言萬語】聖學全体の要領、聖賢の千言万語。【的々】明らかなさま。

▼八

一學者聞^(これをきこ)之、ホツト大息シテ曰、「吾レイカナル難行苦行ヲモ忍ビ、大事ヲ成就セント思ヘトモ、タゞ一ツノ「天」ノ字誰アリテ模捉シ得テ受用セン」ト。余示^(もし)之曰、「尤ナリ。左アラバ、試ニ天ノ無キ里ヲ尋ネ、宿ガヘシテ然ルベシ。既ニ天ノ外ニ出デ、ハ、足ヲ首ニシテアリカフトモ鼻カラ飯ヲ喰ハフトモ、天ノ外デ天ニソムクハ勝手次第ナリ。只天ノ内デ天ノ法度ニソムクコトガナラヌナリ。時ニ何クトテ天ノナキ國ハナケレバ、天ノ外ヘ宿替ヲスルコトナラズ。兎角ニ天ノ内ニ居ルベシ。スハ天ノ内ニ居ルト云ニ成テハ我儘ハナラズ。釋迦ハ天竺ノ産ナレトモ、天竺モ天地ナリ。雪山ヘニグル、雪山モ天地ナリ。老子ハスマシタ顔デク、ハリ頭巾デ引込ミ、墨氏ガ六十餘州ノ世話ヲヤキ、齊桓・晋文ガヌカヌ太刀ノ高名、各々ソレ々々ニ流々アレトモ、何レモ天ヘモテユキタ時天ノ納受ハナイ。仍テ神道デモ佛道デモ軍者デモ、天ト云親ノ氣ニ入ヌコトハ一ツトシテ請取ラレヌ。源氏ノ友喰カラ信玄ガ信虎ヲ追出シタマデガ、土龍^(もぐら)ノ縁(底本は椽)ノ下ヘ入ル様ニコソ々々ト内證デシタモノ。天ノ御前デハナラヌコト。サテ武士ノ云立ル佐々木四郎ガ藤戸デ浦人ヲ殺シタモ、天ノナイ藤戸ナラバ許ス。梶原ヲダマシタ宇治川モ天ノナキ宇治川ナラバ許ス。天ノアル處デスル故決シテ許サレヌナリ。

○語注

【雪山】ヒマラヤ山。【ク、リ頭巾】頭の形に合わせて頭巾のへりをくくった頭巾。僧侶や老人がよく用いた。【墨氏ガ六十餘州ノ世話ヲヤキ】墨子は楚・衛・魯をはじめとする諸国で理想の実現のために邁進、努力した。【齊桓・晋文ガヌカヌ太刀ノ高名】「齊桓」は春秋時代の斉の国の君主桓公（在位紀元前六八五年―前六四三年）。斉の国の政治が乱れたため国外に逃亡して放浪を続けるが、後、帰国して君主となり管仲を用いて春秋五霸の一人となった。「晋文」は春秋五霸の一人である晋の文公。父、献公により国外に追放されるが、秦の穆公の力によって帰国し賢臣を用いて諸侯の盟主となった。【源氏ノ友喰】若林強齋の『雑話續録』に「平家ハ弱シ、去レドモ弱キナリニ一族睦クテ、生死モ同クスルト云様ナ形ナリ。源氏ハ何レモ弓矢ノ道賢ク勇武ハ余リアル様ナレドモ、一族門葉相傷ヒ相害シ、トカク睦ジカラズ、ソレデ源氏ノ友喰ト云、浅間シキコト也。然ルニ垂加翁ノ門流、學術窮理ノ力ハ各見ツベキ処アルヤウナレドモ、和順ニ一和セズ。彼ノ源氏ノ友喰ニ似タリ。」とある。【信玄ガ信虎ヲ追出シタ】天文十（一五四一）年、武田信玄は、父信虎を縁戚関係にあった駿河の今川義元のもとへ追放して、当主となった。【縁ノ下へ入ル】底本の「椽」はたるき。新発田甲本、元倡寺本によって「縁」に改めた。【佐々木四郎ガ藤戸デ浦人ヲ殺シタ】正しくは佐々木三郎。源氏の佐々木三郎盛綱は、瀬渡りのため浅瀬の場所を教えてくれた漁夫を刺し殺し、功を独占しようとした（『平家物語』十之巻）。【梶原ヲダマシタ宇治川】佐々木三郎盛綱の弟四郎高綱は、先んじていた梶原源太景季に腹帯について注意して気をそらさせ、そのすきに馳せ抜いて先陣を切った（『平家物語』九之巻）。

然ルニ、道微カニ世衰へ、滿天地ノ人貴賤上下都テ天ニ似ヌコトヲナシ、天ニ似ヌコトガ流行故、子思子憂テ『中庸』ヲ著ハサレタゾ。其『中庸』全体アタマノキリ々々カラ足ノツマサキマデ、天デカタメタ書ナリ。サレバ聖學ノ本領ハ『中庸』ニテ、『中庸』ハ「天」ノ一字ニ落着シ、聖人ノ學ハ天ト思込ムベシ。然ルニ其『中庸』ノ書アリトモ、梁ニ達磨アリ、唐ニ黄蘗・臨濟ガ類アリ、宋ノ大慧、日本ノ一休ノ輩アリ。皆天ヲ知ラズ。天ニ違フテ自知ラス。自是トシテ無^(みずから)忌憚^(きたん)。其有様ヲ譬ヲ以テ云ハバ、丁度我親ヲ弑シテ、人ノ親ニテハナシ我ガ親ヲ弑シタガナントシタト云如シ。言語道斷ノコトナリ。此理ヲ以テ平實ニ論セバ、諸奉行ヨリシテ下諸小吏ニ至ルマデ、ソノ罪逆分明タルヲ知ルベシ。何者ノ大儒、韓退之ナントシテ和尚ニ降參メサレシゾ。サレバ聖學ハ天ニ叶フ故ヨク、異端邪術ハ天ニハヅル、故ワルイト、天ト云尺度權衡ヲ出シ、學問ハ其天ノ機嫌ヲ取り、其天ニ似ル様ニスルコトト、慥ニ肺腑ニ命シ、蛇ノ目アクデ洗フタル如ク青天白日ノ様ニ辨フベシ。コレ我學的タノ方法ナリ。

○語注

【子思】前四九二―前四三二年。孔子の孫で名は伋^{きつ}という。曾子に師事し『中庸』を著した。【達磨】生年は未詳。没年は五二〇年代、あるいは五三〇年など異説がある。諡は円覚大師。南インドに生まれる。禪宗の第一祖。【黄蘗】黄蘗希運。生年未詳。没年は八五〇年頃。福建省の人。黄蘗宗の祖。「蘗」は蘗の俗字。【臨濟】臨濟義玄。生年未詳。没年は八六六年。一説に八六七年。山東省の人。臨濟宗の祖。【大慧】大慧^{だいゑ}宗杲^{そうこう}（一〇八九年―一一六三年）。安徽省の人。臨濟宗の楊岐派。【何者】神習本では「何者^{いかにして}」とある。【韓退之】韓愈（七六八年―八二四年）。河南省の人。中唐の文人で柳宗元とともに古文復興に努力した。儒教の本質を説き仏教を斥ける論文『原道』を著した。【和尚】韓愈が潮州（広東省北東部）在任当時親交を結

んだ禅僧大顚だいけんのことか。【權衡】ものの標準。【蛇ノ目アクデ洗フタル如ク】ものの正邪善惡などの真相が明らかになるさまのたとえ。

▼+

サテ其所^レ謂天トハ何ゾ。蒼々タル青空ト思フヤ。曰「然リ。非^{あらざる}歟」。曰「非ズ。天即理也。理即太極、無聲無臭之眞、乃自然乃謂、而其實則亦出^二于天^一「備^二于己^一」。心ノ徳トモ云、性ノ徳トモ云。小割ニ云ヘバ仁義礼智トモ云、大割リニ云ヘバ仁トモ云ヒ、皆彼天ナル者ニシテ、戸ヲ出テ窺フヲ待ズ。滿腔子都^{すべ}天ナレトモ、百姓ハ日用不知、今日學者スコシハ知レトモ、知テ求メズ。學ト云ハ、ソコヲ知リテスルコトニテ、人ノセイデ叶ヌト云ヲ合點セヨ。先ヅ天ノ理ヲ以テ天ノ氣^キデ生レ、天ノ内ニ居住シ、ヂキニ其天ノ子ニ成テオル我ナレバ、其天ノ氣ニ入ル爲メノ學問ヲソモヤタ々セイデ叶ハフト思フヤ。世人學者ヲ輕ンジ、ナニ學問、青表紙ト排擯スルハ尤ナリ。學者カ、ルアヤヲ知ラズ、徒^{いたづら}ニ末ヲ逐ヒ第二等ニ腰ヲカケクッタクセラル、故ゾ。皆學者ノ自取ル處ナリ。滄浪ノ水ナリ。余ガ言フ處ノ學ト云ハ、天子カラ庶人士農工商、天地中ニサヘオル程ノ者ナレバ、セイデ叶ヌコトナリ。如何々々」。

○語注

【天即理也】天は即ち理也。『論語』八佾「王孫賈問曰」の条の朱注に「天は即ち理なり。其の尊きこと對比無し」とある。【理即太極】理は即ち太極。【無聲無臭之眞】朱子が『太極図說解』で、周濂溪の『太極図說』の冒頭の語「無極而太極」を注釈している部分に「上天の載^こは声も無く臭も無し。而も実^{じつ}に造化の枢紐にして品彙の根柢也。故に無極にして太極と曰ふ。(後略)」とある。【乃自然乃謂】乃ち自然の謂。自然に

ついては、默齋の『堦簾録』に禅僧と佐藤直方の問答として次のようにある。「和尚問フ、「儒ノ無聲無臭。佐藤子云、「播盆ノグワラタナル蕃菽ノ辛ヤフナコト也」ト。(中略)此言皆自然ノ謂ニシテ、雷ハ鳴ルハズノモノナレバ鳴カ自然ニテ人々肝ヲツブシテ不測ニ思ハズ、播盆ノグワラタスルモ耳ニタハズ味嚕ヲスルヨト思フ迄也。耳ダツコトナシ。蕃菽モ辛キカ本然ナレバ喫シテ辛キヲ驚カズ。皆自然ニヨル。」【其實則亦出ニ于天ニ備ニ于己】。其の実則ち亦天に出て己に備はる。朱子が『中庸』第一章の末尾につけ加えた文章に「首めには、道の本原天に出でて而して易ふべからず、其の実体己に備はつて而して離るべからざるを明らかにす。」とある。【心ノ徳】「心ノ徳」とは專言の仁、つまり仁義礼智を含む仁。「仁は、愛の理、心の徳なり」(『論語集註』学而)、「心の徳は、是れ統べて言ふ。愛の理は、是れ仁義礼智の上に就きて分けて説く。」(『朱子語類』卷二十)。「性ノ徳」「道なる者は、日用事物当に行くべきの理、皆性の徳にして心に具はり、物として有らざる無く、時として然らざる無し。須臾も離るべからざる所以なり」(『中庸章句』第一章の注)。また「誠は、自ら己を成すのみに非ざるなり、物を成す所以なり。己を成すは仁なり、物を成すは知なり、性の徳なり。」(『中庸章句』第二章)。「小割ニ云ヘバ仁義礼智トモ云、大割リニ云ヘバ仁トモ云ヒ」【小割ニ云ヘバ】とは偏言の仁、「大割リニ云ヘバ」とは專言の仁。【滿腔】全身。『近思錄』道体篇二四に「滿腔子は是れ惻隱の心」とある。【百姓ハ日用不知】『易経下』繫辞伝上に「百姓は日に用いて而も知らず。」とある。【ソモヤタタ】一体全体という意味をあらわす「そもや」の強調形。【青表紙】経書には青表紙を用いたことから経書を指す。転じて儒学者。【滄浪ノ水】「滄浪の水清まばもって吾纓を濯ふべし。滄浪の水濁らばもって吾足を濯ふべし。」(『楚辞』漁父辞)。「楚辞」では何事も時勢のなりゆきに任せるべきであるという意味で用いられ、『孟子』離婁上では自業自得の意味で用いられている。

▼十一

一書生在^レ側、卒^{（そつじ）}爾問曰「至哉言也。小子豈不^レ勉哉。然二天地ノ大ナル四海ノ遠、モシ又學問ノ入ヌト云モノ有ベキヤ」。曰「有^レ之。聖人ナリ。禽獸ナリ。其故何ゾ。聖人ハヂキニ天ナリ、似ル様ニセフノ氣ニ入ル様ニセウノト云コトハナシ。聖希^レ天トコソ云へ、功夫^{（くふう）}ハナシ、ヂキニ水晶ナリ白クスルニ及ズ。天ガ聖人乎、聖人ガ天乎。綱翁ノ云ハル、天ナリノ聖人、聖人ナリノ天。天無^レ形底聖人、聖人有^レ形底天。天ハ聖人、聖人ハ天ナリ。扱々樂ナ身ノ上ナリ。ナレトモメツタニナキ生付ニテ、日本ハ開闢以來一人モ近付ニナク、異邦ニモ少々ナラデハ始終ミヘネバ、甚ダ拂底ナルコトニテ、吾人ノ引合セニナラヌコト。サテ又聖人ト同ク學問ノ入ヌガ、禽獸ナリ。猿ガカシカフテモ、狐ガ先ヲ知テモ、格物致知ナラズ。犬ニ異見云テモ、雞ニ講釋キカセテモ、通ゼズ。猫ニ花ナリ。然レバ天地ノ間學問ノ入ヌト云ハ、聖人ト禽獸ナリ。禽獸ハ木變子ノ黒ヒノナリ。洗フテモ白クナラズ。聖人ハトギタテノ刀ナリ。更ニトグニ及バズ。禽獸ハ木刀ナリ。トイテモキレズ。トギタテノ鏡トグニ及ズ、聖人ナリ。丸盆トイテモ光ラヌ、禽獸ナリ。學問ノ入ヌハコ、ノコトナリ。然ラバ學問トハ何事ソ。學者トハ何人ゾ。モト鏡デ一端クモリ、モト正宗デ一端サビル。ソコデトグ、ソコデミガク。コレヲトギコレヲミガイテ、本ノモノトハスルコトナリ。本ノモノト云ガ目當ナリ。本ノモノトハ何ゾ。人間ノ當然。人間ノ當然トハ何ゾ。即チ聖人ニシテ、聖人ハ所^レ謂天ナリノ聖人ナルモノ、一箇ノ天ナリ。横カラ云テモタテカラ云テモ、明道ノ「自家体認出來ル」ト云ハレタル遺意、コレ伊洛ノ趣キ。聖人ノ教學、木ニ竹ヲツグ様ナコトデナク、人々固有ニヨツテホドコシ顧^二天明命^一ト云ヘルガ即チ我ガ此腹中ノ天ヲ、ソレソコヨト指サシ示サレタモノナルニ、道ヲ聖人ガ拵^{（とぎ）}ヘタナド、カ^{（か）}ル非言^{（ひげん）}、天ノ字ニ昏キニシテ尚學ト思ヘルヤ。亂ニ曰「謹哉謹哉」。天ヲ知ラネバ天ニ叶ハズ。天ニ叶ハザレバ天ノ子デナシ。天ノ子デナケレバ天ノ勘當。天ノ勘當ヲ受ケナバ天地ニオラレズ。天地ニオラレズンバイカバセン。南

蠻・北狄、萬國ニ去リテモ天翁ノ追來レバ、進退維谷ラン。學問ヲセヨ學問ヲセヨ。孔子曰「學而時習レ之」。又曰「十有五而志ニ于學」。又曰「不レ如レ學」。又曰「不レ如ニ丘之好レ學」。又曰「有顏回者一好レ學」。學者其學レ之。佐藤子ノ歌ニ「天地の外に求る道しあらは水も吞すな飯も喰すな」ト。返ス々々モ天ニ似ル様ニセヨ。其法如何。一言以蔽レ之曰「學」。請レ益曰「學外無ニ別法」。

孤松全稿卷之一 姫島講義並餘論終

○語注

【一書生在レ側、卒爾問曰】一書生側かたはらに在りて、卒爾として問ひて曰く。【至哉言也。小子豈不レ勉哉。】至れるかな言や。小子豈勉めざらんや。【綱翁】淺見綱斎。【天無レ形底聖人、聖人有レ形底天】天は形無き底の聖人。聖人は形有る底の天。【木鑾子】もくれんじ。種子は数珠玉に用いる。【當然】あたりまえ。校合参照。【明道】程明道。【顧ニ天命】「天の明命を顧みる。」「先王諱ことの天の明命を顧み、以て上下の神祇・社稷・宗廟に承うけ、祇肅しよくせざるは罔なし」(『書経』太甲上)。また「大甲たいかふに曰く「諱ことの天の明命を顧みる」と」(『大学』伝第一章)。【道ヲ聖人ガ拵ヘタナド、】荻生徂徠の道は聖人が作り定めたものであるという学説に対する批判。徂徠は「先王の道は先王の造る所なり。天地自然の道に非ざるなり」(『弁道』)と述べている。【亂】終わりに大意を総括する言葉。【謹哉謹哉】謹めや、謹めや。【學而時習レ之】「子曰く、学びて時に之れを習ふ。亦説いばしからずや。」(『論語』学而)【十有五而志ニ于學】「子曰く、吾十有五にして学に志こずす。」(『論語』為政)。【不レ如レ學】「子曰く、吾嘗て終日食らはず、終夜寝ねず、以て思ふ。益無し。学ぶに如かざるなり。」(『論語』衛霊公)。【不レ如ニ丘之好レ學】「子曰く、十室の邑、必ず忠信丘が如き者有らん。丘の学を好む

に如かざるなり」(『論語』公治長)。【有^二顔回者^一好^レ學】「哀公問ふ、弟子、孰か學を好むと為す。孔子對へて曰く、顔回なる者有り。學を好む。怒りを遷さず。過ちを貳びせず。」(『論語』雍也)。【學者其學^レ之^一】學者其れ之れを學べ。【一言以蔽^レ之^一】「子曰く、詩三百、一言以て之れを蔽ふ、曰く、思ひ邪^{よし}無し」(『論語』為政)。【請^レ益^一】さらに教えを乞う。【學外無^二別法^一】學の外別法無し。

参考文献

・山崎闇斎学派、および荻生徂徠

稲葉黙齋

『童蒙訓』、無窮会神習文庫所蔵『孤松全稿』四三卷所収

『話録』、千葉県元倡寺所蔵『孤松全稿』二卷所収。また、『道學遺書 初集卷四 孤松全稿卷之四』

(道學協會、一八九一年) 所収も参考にした。

『攘簾録』、千葉県元倡寺所蔵『孤松全稿』二卷所収。また、『道學遺書 初集卷一 孤松全稿卷之一』

(道學協會、一八九一年) 所収も参考にした。

『鈴木養察の墓碑文』、東金市編『東金市史』史料篇4(東金市、一九八二年) 所収

『大順堂雜稿』、千葉県山武市鈴木氏所蔵。

若林強齋

『雑話續録』、神道大系編纂会編『神道大系 論説編十三 垂加神道(下)』(神道大系編纂会、一九七八年) 所収

西順藏、阿部隆一、丸山真男校注『日本思想大系三一 山崎闇斎学派』(岩波書店、一九八〇年)

吉川幸次郎、丸山真男、西田太一郎、辻達也校注『日本思想大系三六 荻生徂徠』(岩波書店、一九七三年)

・朱子、および中国思想古典

朱子『四書集註』(藝文印書館、一九六九年)

池田末利『全釈漢文大系第十一卷 尚書』(集英社、一九七六年)

石川忠久『新釈漢文大系一一二 詩経下』(明治書院、二〇〇〇年)

宇野精一『全釈漢文大系第二卷 孟子』(集英社、一九七三年)

井上哲次郎校訂『近思録』、『漢文大系 卷二十二』(富山房、一九八四年) 所収

鈴木由次郎『全釈漢文大系第九卷 易経上』(集英社、一九七四年)

鈴木由次郎『全釈漢文大系十卷 易経下』(集英社、一九七四年)

『楚辞』、富山房編輯部編輯『漢文大系 卷二十二』(富山房、一九八四年) 所収

西晋一郎、小系夏次郎譯註『太極圖説・通書・西銘・正蒙』(岩波文庫・岩波書店、一九八六年)

山下龍二『全釈漢文大系第三卷 大学・中庸』(集英社、一九七四年)

湯浅幸孫『中国文明選 近思録』上(朝日新聞社、一九七三年)

渡邊卓『全釈漢文大系第十八卷 墨子上』(集英社、一九七四年)

・人名、伝記

『日本道學淵源録』、岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編『楠本端山、碩水全集』（葦書房、一九

八〇年）所収

『日本道學淵源續録』、同右

『崎門學脈系譜』、同右

朝倉治彦監修『江戸文人辞典 国学者 漢学者 洋学者』（東京堂出版、一九九六年）

『国史大辞典』吉川弘文館

東金市史編さん会『東金市史 史料篇三』（東金市役所、一九八〇年）

東金市編『東金市史 史料篇四』（東金市、一九八二年）

東金市編『東金市史七 通史篇下』（東金市、一九九三年）

○『姫島講義』校合

底本…『道學遺書 初集卷一 孤松全稿卷之一』（道學協会編、一八九一年）。

神習…無窮会神習文庫所蔵の写本。目録番号一三五一三の『孤松全稿』の一巻所収。

平沼…無窮会平沼文庫所蔵の写本目録番号九五三。

大倉…大倉山精神文化研究所所蔵の写本。

新甲…新潟県新発田市立図書館所蔵の写本。目録番号 V09、教書 186。

新乙…新潟県新発田市立図書館所蔵の写本。目録番号 V09、教書 198。

元倡…千葉県山武市成東元倡寺所蔵の写本。『孤松全稿』一卷所収。

▼一 底本…孤松全稿卷之一 黙齋艸卷一 姫島講義 神習…黙齋艸卷一 姫島講義 平沼…姫島講義序

大倉…姫島講義序 新甲…姫島講義序 新乙…黙齋艸卷一 姫島講義 元倡…孤松全稿 黙齋艸卷一 姫島講義

／底本…不_レ圖姫島家 神習…圖姫島家 頭注に「案スルニ子圖之間疑フラクハ不字ヲ脱フ」／底本…寶

曆壬申冬十一月 神習…朱字で頭注「寶歷二年壬申至文化四年丁卯五十六年先生二十一歳」平沼…頭注に「按

先生時年二十一」改行して文末に「黙齋題」大倉…文末に「黙齋題」新甲…文末に「黙齋題」元倡…寶

曆壬申冬十一月^年 二 底本…へ欠 平沼…本文の前に「姫島講義」と題書きあり 新甲…本文の前に「姫

島講義」と題書きあり／底本…クル々々 平沼…グル／底本…三書モ 新甲…三書ヲ／底本…景

勝 平沼…勝景 大倉…勝景 新甲…勝景／底本…ソノ景色ヲ 大倉…ツノ景色ヲ／底本…於_レ是ヤ 大倉…

於_レ是 新乙…於_レ是／底本…玉フ 大倉…玉ヒ／底本…即今 新甲…今／底本…學者ノ啓發ナキニ

大倉…學者啓發ナキニ 新甲…學者啓發ナキニ／底本…耳ヲ提ル 大倉…耳ニ提ル／底本…的切ナルモ

大倉…的切ナル／底本…鱸ノ酢ノ 平沼…鱸ニ酢ノ 大倉…鱸ニ酢ノ 新甲…鱸ニ酢ノ 新乙…鱸ニ酢ノ

元倡…鱸ニ酢ノ／底本…キカザル如ク 大倉…キカヌ如ク 新乙…キカヌ如ク／底本…千々萬々實ニ

新甲…千々萬々實々 ▼三 底本…イカニ 新甲…イカニ／底本…引付ケ 新乙…引付テ／底本…警策ス

ベシ 大倉…驚策スヘシ／底本…人將言ハン 新甲…將言ハン／底本…見ルニ 大倉…見ル／底本…書

ヲ讀ムコトヲ **大倉**…書ヲ讀ムヲ／**底本**…一議論アルナリ **平沼**…一議論アルナク **大倉**…一議論アルナク
新甲…一議論アルナク **新乙**…一議論アルナク **元倡**…一議論アルナク／**底本**…安樂自在ニシテ **元倡**…安
樂自在シテ／**底本**…自脩如此ヤカク警策スル學ハ **大倉**…自脩如此ヤカク驚策スル學ハ **新乙**…自脩如此
ヤカマシク警策スル學ハ／**底本**…見ヘ玉ハズ **新乙**…見ヘス／**底本**…天ヨリ内々ノ賦命アルニ非ズ
新甲…天ヨリ賦命スルニ非ス／**底本**…又外ニ **大倉**…外ニ／**底本**…吾此一身 **大倉**…此一身／**底本**…
耻シカラヌ **新甲**…耻シカラス／**底本**…一毫 **平沼**…一豪／**底本**…端的聖トナルノ **大倉**…端的聖ナルノ
／**底本**…路徑 **新甲**…道／**底本**…參商 **大倉**…參高／**底本**…千苦百難 **大倉**…千苦萬難 **新甲**…千苦萬
難 **新乙**…千苦萬難 **元倡**…千苦萬難／**底本**…イツゾハ **大倉**…イツク／**底本**…吾コノ天ヨリ備足スル
大倉…吾コノ備足スル ▼四 **底本**…學ブナリ **大倉**…學ブコトナリ／**底本**…爲レ己之學 **大倉**…爲レ己文
學／**底本**…學者トモ云ヒ **大倉**…學者トモ云也／**底本**…心法 **新乙**…心／**底本**…カクアル故ニヨツテ
新乙…カクアル故ニヨリテ **元倡**…カクアル故ニヨリテ／**底本**…諸侯卿大夫士 **新乙**…諸侯卿大夫士 **元倡**…
諸侯卿大夫士／**底本**…聖トナルノ學 **新乙**…聖人トナルノ學／**底本**…無用ノ鞭策トゾナルナリ **大倉**…
／**底本**…目アテコノナリト **大倉**…目ユガ賜リト／**底本**…佩服スベキナリ **大倉**…佩服スベキコトナリ
新甲…佩服スベキコトナリ ▼五 **底本**…孔曾思孟周程張朱之語 **平沼**…
底本…朝聞道夕死可矣 **平沼**…文末に細書きで「孔子」／**底本**…便 **大倉**…使／**底本**…死スハ望ム處ニ
非ズ **神習**…死ス望ム處ニ非ズ **大倉**…死ス望ム處ニ非ズ **新甲**…死ス望ム處ニ非ズ **元倡**…死ス望ム處ニ非
ズ／**底本**…在明明德在新民在止於至善 **平沼**…文末に細書きで「曾子」／**底本**…或ハ霸者 **元倡**…或ハ
伯者／**底本**…學問ハ大學ヲ學ブコトナリ。親ノ字 **大倉**…
用フト云 **新乙**…親ノ字ヲ用ユ／**底本**…尊德性而道問學 **平沼**…文末に細書きで「子思」 **大倉**…尊德性而

問道學／**底本**…徳性ヲ **大倉**…能性ヲ／**底本**…道ヲヌカラ **新甲**…入ラヌカラ／**底本**…ナリ高大ノ二字ミヨ學問ノ不振ハ卑ト小トニ由ルナリ **大倉**…^レ欠／**底本**…卑ト小トニ由ルナリ **新乙**…卑ト小ト由ルナリ／**底本**…孟子道性善言必稱堯舜 **平沼**…文末に細書きで「孟子」／**底本**…學ブナリ **新甲**…學ナレ／**底本**…二字デ **神習**…二字ニテ **大倉**…二字ニシテ／**底本**…ゼウノコハキモノ **元倡**…ゼウコハキモノ／**底本**…鼠ヲトル **大倉**…鼠ヲトヲ／**底本**…コハヲ知ラズ **大倉**…ココヲ知ラヌ／**底本**…ソレニ註ヲスル **新乙**…ソレニ註スル／**底本**…聖希天賢希聖士希賢 **平沼**…文末に細書きで「周子」／**底本**…天ガヤスマヌカラ **新甲**…カヤスマヌカラ／**底本**…聖人モヤスマズ **大倉**…聖人モヤスマズ **新甲**…聖人モヤスマズ **新乙**…聖人モヤスマズ **元倡**…聖人モヤスマズ賢人モヤヌ／**底本**…賢人モヤスマズ **大倉**…賢人モヤスマズ **新甲**…賢人モヤスマズ **新乙**…賢人モヤスマズ **神習**…何トシテ／**底本**…休マン **大倉**…体マン／**底本**…カヲ **新乙**…賢人カヤスマヌカラ／**底本**…何ゾ **神習**…何トシテ／**底本**…休マン **大倉**…体マン／**底本**…武士ハ此士ト別ナリ **新甲**…武士ノ士トハ此士ト別ナリ／**底本**…賢ヲ希ハズ **大倉**…^レ欠／**底本**…此士ハ學者ナリ **新乙**…此士トハ學者ナリ／**底本**…言學便以道爲志言人便以聖爲志 **平沼**…文末に細書きで「程子」 **大倉**…言學便以道爲志言人使以聖爲志／**底本**…入ズ **新甲**…イラヌ **新乙**…イラヌ／**底本**…尻ゴミヲスル **大倉**…尻カナヨキ云ル／**底本**…繼 **大倉**…経／**底本**…爲天地立心爲生民立道爲去聖繼絶學爲萬世開太平 **大倉**…文末に細書きで「張子」／**底本**…身ノ爲一モナシ **新乙**…身ノ爲二一モナシ／**底本**…眞肺腑中ヨリ **平沼**…眞肺腑中ヨリ **新甲**…直ニ肺腑中ヨリ **新乙**…眞ノ肺腑中ヨリ／**底本**…吐キ出ス **新甲**…咄キ出ス／**底本**…ホンボニ **大倉**…ホントニ **新甲**…ホントニ／**底本**…此處 **新甲**…此／**底本**…俗心ヲ以テ知り難シ **新乙**…俗心ヲ知以テ知り難シ／**底本**…余謂四者廢其一則非學 **大倉**…この文が次の「右段々」以下の文の文頭におかれ、また「則」を欠く。／**底本**…功夫ノ施ス處ハ **神習**…功夫ノ施ス處

平沼…功夫ノ施ス處 大倉…功夫ノ施ス處 新甲…功夫ノ施ス處／ 底本…得ザルコト 新乙…得ルコト／
 底本…發足 新乙…發足／ 底本…仍而 大倉…仍／ 底本…壬申十一月二日夜 平沼…壬申十一月二日夜 江
 戸 大倉…壬申十一月二日夜 江戸 新甲…壬申十一月二日夜 江戸 新乙…へ欠／ 底本…へ欠 平沼…又三
 郎頓首 大倉…又三郎頓首○ 新甲…又三郎頓首○／ 底本…右吾家大人 平沼…吾家大人 大倉…吾家大人
 新甲…吾家大人／ 底本…墨蹟 平沼…眞蹟 大倉…直蹟 新甲…大人之眞蹟／ 底本…子等各 新甲…等各
 ／ 底本…不_レ敢言 大倉…不_レ敢言也 新甲…不_レ敢言也 ▼六 底本…一ツ大事ノコトハ何ゾ 新甲…一ツ
 大事ノコトハ何ノコトソ／ 底本…アシライ 新甲…アシラヒ／ 底本…折節ハ 大倉…折節／ 底本…
 我コソ眞ニ知タト 新甲…我コソ知リタト／ 底本…崇ラバ 平沼…崇ラバ 新甲…崇アラバ／ 底本…我ガ
 親ト 新乙…吾親ト／ 底本…易シ 新甲…安シ／ 底本…劉伯倫ニハ 新乙…劉伯倫ニ／ 底本…ツク々々
 ト見アノ天ニ似ル様ニ 大倉…ツク々々ト見テアノ天ニ似タル様ニ／ 底本…萬古カハラズ 大倉…一古カ
 ハラヌ又 新乙…萬古カハラヌ／ 底本…メグラル、ニ 大倉…メグラル、／ 底本…怠リタル姿 新乙…怠
 タル姿／ 底本…天トハ大ニ違ヒタルニ非ズヤ 平沼…天トハ大ニ違ヒタルニ非ズヤ親ニ似ヌト云ナルベシ。
 親ニ似ヌ子ヲ鬼子ト云ハ尤ナリ 大倉…天トハ大ニ違ヒタルニ非ズヤ親ニ似ヌ子ヲ鬼子ト云ハ尤也 新甲…天
 ト違フタルニ非ズヤ親ニ似ヌト云ナルベシ親ニ似ヌ子ヲ鬼子ト云尤也 新乙…天トハ大キニ違ヒタルニ非ズ
 ヤ／ 底本…親ハ實底 新甲…親實底／ 底本…俗ニ云 新甲…俗ニ／ 底本…虫モフマヌ 新甲…虫モ殺サ
 ヌ／ 底本…大ノ酒吞 新甲…大酒吞／ 底本…三味線ヒイテ 新甲…三味線ヲ弾テ ▼七 底本…役人ガ學
 者ナリ 新甲…役人ハ學者ナリ／ 底本…諺ニ云ガ 大倉…諺ニ曰ガ／ 底本…天ヲ親我ヲ天ノ子 大倉…天
 ヲ親吾ヲ子／ 底本…即チ天ノ鬼子ナリ 新甲…則鬼子ナリ／ 底本…尤キ者ニテ 平沼…尤キ者ニシテ 新甲…
 尤キ者ニシテ／ 底本…學者タチ 大倉…學者ダチ／ 底本…物ヲ云ハフ 大倉…物ヲ云フ 新乙…物云フ／

底本…千功萬業皆水ニナル 大倉…千功萬業ミナ皆水ニナル／ 底本…ウカ々々ト 新甲…ウカ々々トシテ／
 底本…費サン 大倉…費シ／ 底本…ヨリハ一ツノ天ノ字ヲ 新乙…ヨリ一ツ天ノ字ヲ／ 底本…大書シ
 新甲…大書キ／ 底本…天ニ違又様ニ々々々々々々 神習…天ニ違又様ニ々々々々々々 平沼…天ニく。違又
 様ニく 大倉…天ニ々々々々違又様ニ 新甲…天ニく。違又様ニく 新乙…天ニ違又様ニ 元倡…天ニ
 く。違又様ニく ▼八 底本…大息シテ 大倉…大息 新甲…大息 元倡…大息／ 底本…曰吾レ 新乙…
 曰／ 底本…成就セント思ヘトモタバ一ツノ天ノ字誰アリテ 新甲…成就セント思ヘトモ誰有テタ、一ツノ
 天ノ字ヲ 新乙…成就セント思ヘトモ只一ツノ天ノ字誰アツテ 元倡…成就セント思ヘトモタバ一ツノ天ノ字
 誰アツテ／ 底本…模捉 平沼…模捉 新甲…模捉 新乙…模捉／ 底本…喰ハフトモ 元倡…喰フトモ／
 底本…法度ニソムクコトガナラヌナリ 新乙…法度ニソムクコトナラヌナリ／ 底本…天ノ外デ天ニソムク
 ハ 新甲…天ノ外天ニソムクコト／ 底本…宿替ヲスルコトナラズ 大倉…宿替ヲスルコトハナラズ／
 底本…我儘ハナラズ 神習…我儘ハナラヌ 大倉…我儘ハナラヌ 新乙…我儼ナラス／ 底本…釋迦ハ天竺ノ
 産 新乙…釋迦天天竺ノ産／ 底本…墨氏ガ 新乙…墨氏ハ／ 底本…ヌカヌ太刀 新乙…ヌカ太刀／ 底本…
 何レモ天ヘモテユキタ時天ノ 大倉…何ニモ天ヘモテユキタ天ノ 新甲…何モ天ヘモツテユキタ天ノ 新乙…
 何モ天ヘモテユキタトキハ天ノ／ 底本…請取ラレヌ 大倉…請取レヌ 新乙…請取レヌ／ 底本…土龍ノ椽
 ノ下ヘ入ル 大倉…土龍ヲ椽ト下ヘ入ル 新甲…土龍ノエンノ下ヘ入ル 元倡…土龍ノエンノ下ヘ入ル／
 底本…佐々木四郎 神習…頭注に「按四郎恐作兄弟爲可」 新甲…佐々木三郎／ 底本…梶原ヲダマシタ宇
 治川モ 大倉…梶原ヲダマシテ宇治川モ 新甲…四郎ガ梶原ヲ宇治川テタマシタモ／ 底本…天ノナキ宇治
 川ナラバ 平沼…天ノナイ宇治川ナラバ 大倉…天ノナイ宇治川ナラバ 新甲…天ノナイ宇治川ナレハ ▼九
 底本…上下都テ天ニ 新甲…上下天ニ／ 底本…天ニ似ヌコトヲナシ 大倉…天ニ似ヌコトヲシシ／ 底本…

流行故 **平沼**…流行故 **新甲**…流行ル故 **新乙**…流行ルユヘ／**底本**…子思子 **平沼**…子思子ノ
大倉…子思子ノ **新甲**…子思子ノ／**底本**…著ハサレタゾ **大倉**…著ハサレタ **新甲**…ツクラレタソ／**底本**…
カタメタ **大倉**…カタメテ／**底本**…天ノ一字 **大倉**…天ノ一学／**底本**…黄蘗臨濟 **大倉**…蘗臨濟／**底本**…
我親ヲ弑シテ人ノ親ニテハナシ我親ヲ弑シタガナントシタ **大倉**…我親ヲ弑シテ人ノ親ニテハナシ我親弑シ
タガナントシタ **新甲**…我ガ親ヲ殺シテ人ノ親デハナシ我親ヲ殺シタガナントシタ **新乙**…我親ヲ殺シテ人ノ
親ニテハナシ我親ヲ弑シタガナントシタ **元倡**…我親ヲ殺シテ人ノ親ニテハナシ我親ヲ殺シタガナントシタ
／**底本**…諸奉行ヨリシテ **大倉**…諸奉行ヨリ以 **新乙**…諸奉行ヨリ／**底本**…罪逆分明 **平沼**…罪逆ノ分明
新甲…罪逆ノ分明 **新乙**…罪逆ノ分明／**底本**…何者ノ **神習**…何者 **大倉**…何者／**底本**…大儒韓退之ナ
ントシテ和尚ニ **新甲**…「大儒」の横に付箋で「退之何トシテ。之ノ」／**新乙**…大儒韓退之何トシテ奉和尚
ニ／**底本**…降參メサレシジ **大倉**…降參サレシジ **新甲**…降參サレシジ／**底本**…叶フ故ヨク **新甲**…叶フ
故ヨリ／**底本**…學問ハ其天ノ機嫌ヲ **元倡**…學問其天ノ機嫌ヲ／**底本**…似ル様ニスル **大倉**…似ル様ニ
トル／**底本**…白日ノ様ニ **大倉**…白日ノ様 **新乙**…白日ノコトクニ ▼十 **底本**…青空 **平沼**…青虚 **新甲**…
青虚 **元倡**…青虚／**底本**…無聲無臭之眞 **新甲**…無聲無臭之直／**底本**…窺フヲ待ズ **大倉**…窺フヲ得タス
／**底本**…都天 **大倉**…都々ノ天／**底本**…學者スコシハ **新甲**…學者ハスコシハ／**底本**…學ト云ハ **大倉**…
學者トハ／**底本**…人ノセイデ叶ヌト **大倉**…人ノイテ叶ヌト **新甲**…人ノセイテハ／**底本**…天ノ内ニ居
住シ **新甲**…其天ノ内ニ **新乙**…天ノ内ニ住居シ／**底本**…其天ノ子 **新甲**…天ノ子／**底本**…ソモヤ々々々
大倉…ソモヤ／**底本**…叶ハフト思フヤ **神習**…叶フト思フヤ **平沼**…叶フト思フヤ **新甲**…叶フト思フヤ／
底本…青表紙 **大倉**…表々紙／**底本**…第二等ニ腰ヲカケクツタクセラル、**大倉**…第二等ヲ腰ヲカケタツ
タクセラル、／**底本**…學ト云ハ **新甲**…学ハ／**底本**…天地中ニサヘオル **神習**…天地ノ中ニサヘフル **平沼**…

天ノ地中ニサヘラル **新甲**…天地ノ中サヘラル **新乙**…天ノ地中ニサヘラル ▼十一 **底本**…一書生在側 **大倉**…
 一書生^レ側ノ **底本**…然^レ天地ノ **大倉**…然^レ天地ノ **新甲**…然トモ天地ノノ **底本**…天地ノ大ナル **大倉**…天
 地云大ナルノ **底本**…聖人ナリ禽獸ナリ **大倉**…聖人ニ禽獸ナリノ **底本**…デキニ天ナリ **大倉**…デキニ天
 ニノ **底本**…似ル様ニセフノ **新乙**…似タルヤウノノ **底本**…云コトハナシ **新甲**…云コトナシ **新乙**…云コ
 トナシノ **底本**…天ガ聖人乎聖人ガ天乎 **大倉**…天ニ聖人カ聖人カ天ソノ **底本**…綱翁 **神習**…綱翁 **平沼**…
 綱翁 **大倉**…綱斎 **新乙**…綱翁ノ **底本**…天ナリノ聖人 **新甲**…天形ノ聖人ノ **底本**…少々ナラデハ始終ミヘ
 ネバ **大倉**…少々ナラネハナリミヘネバノ **底本**…格物致知ナラズ **大倉**…格物致知ナラヌ **新乙**…格物致知
 ニナラスノ **底本**…講釋 **新甲**…講解ノ **底本**…通ゼズ **大倉**…通セヌ **新甲**…通セヌ **新乙**…通セヌノ **底本**…
 聖人ト禽獸ナリ禽獸ハ木爨子ノ **神習**…聖人ト禽獸ハ木爨子ノ **新甲**…聖人ト禽獸ナリ木爨子ノノ **底本**…
 洗フテモ **神習**…洗ツテモノ **底本**…丸盆トイテモ光ラヌノコトナリ **大倉**…丸盆トイツテモ光ラヌ
新甲…凡盆トイテモ光ラヌ **新乙**…丸盆トイテモ光ラヌノコトナリノ **底本**…本ノモノト云ガ **新甲**…本ノ
 モノトハノ **底本**…人間ノ當然 **神習**…「人間ノ當然」のあとに「人間ノ當前本ノモノトハ何ソ人間ノ當前」
 とあるが朱字で括弧し「刊本無シ恐衍」とある。 **新甲**…人間ノアタリマヘ **新乙**…人間ノアタリマイノ **底本**…
 即 **新甲**…則ノ **底本**…聖人ハ所^レ謂^レ天ナリノ聖人 **大倉**…所謂聖人ハ天地ノ聖人ノ **底本**…タテカラ云テモ
 明道ノ **平沼**…タテカラ云テモ天ト云一字ニツマルコトコノ味ガ余甚秘藏スルコトニテ **大倉**…タテカラ云テ
 モ天ト云一字ニツマルコトコノ味ガ余甚秘藏スルコトニテ **新甲**…タテカラ云テモ天ト云一字ニツマルコトコ
 ノ味ガ余甚秘藏スルコトニテノ **底本**…自家体認出来ルト **新甲**…自家体認シ出シ來ルトノ **底本**…我が此
 腹中ノノ非言 **大倉**…我が腹中カハル非言ノ **底本**…指サシ示サレタモノ **新乙**…指シ示シサレタモノノノ
底本…ナド、 **新乙**…ナトノ **底本**…亂 **大倉**…終 **新甲**…亂ニ **新乙**…亂 **元倡**…亂ノ **底本**…天ニ叶ハザ

レバ **新甲**…天ニ叶ネハ天／ **底本**…受ケナバ **大倉**…受ケレバ／ **底本**…天地ニオラレズ **神習**…天地ニヲ
 ラレテ **大倉**…天地ニオラレヌ／ **底本**…イカゞセン **大倉**…イカゞセンヤ／ **底本**…天翁 **大倉**…天義／
底本…學問ヲセヨ學問ヲセヨ **大倉**…學問ヲセヨ **新乙**…學問ヲセヨ／ **底本**…學而時習レ之 **新乙**…學而時
 之／ **底本**…十有五志ニ于學ニ **大倉**…十有五而志學／ **底本**…不_レ如_二丘之好_レ學 **大倉**…不_レ如_二丘之如_レ
 學 **新甲**…不_レ如_二丘之如_レ學／ **底本**…有_二顏回者_一 **大倉**…有_二顏曲者_一／ **底本**…學者其學_レ之 **新甲**…學
 者學_レ之／ **底本**…孤松全稿卷之一 姫島講義並餘論^終 **神習**…〈欠〉 **平沼**…姫島講義終 **大倉**…〈欠〉 **新甲**…
 〈欠〉 **新乙**…〈欠〉 **元倡**…〈欠〉

六 稲葉黙齋『姫寫口義』

解題・注釈・校合 大久保紀子

○『姫寫口義』解題

『姫寫口義』は、千葉県山武市成東の熱田秀夫氏所蔵の稲葉黙齋の真蹟書である。『姫寫口義』の成立の経過については『姫島講義』の解題ですでに述べたので、ここでは、この真蹟書が熱田氏に伝えられた由来を述べ、次いで『姫寫口義』と『姫島講義』の性格の相違を示す具体的な部分を示すこととする。真蹟書が熱田氏に伝えられた由来については、千葉県山武市成東在住の山口巖氏のご教示によってここに記すことができた。本解題の資料¹も、山口氏のご教示によるものである。記して謝意を表す。

(一) 鈴木氏から花沢氏、さらに熱田氏へ

『姫寫口義』は、『姫島講義』解題に記したとおり、黙齋が、宝暦二（一七五二）年、上総清名幸谷（現千葉県山武郡大網白里町清名幸谷）滞在中に記した『道学標的』の講義の概略である。黙齋は、『姫寫口義』を迂斎の八幅の墨蹟とともに小童に託して八人の門人に与えようと考えた。実際に八幅の墨蹟はそれぞれ門

人の手に渡され、『姫寫口義』は八人がどのような形で目を通したかは不明であるが、鈴木養察^⑤によって所蔵されたものと思われる。養察は、『姫島講義』一の語注で述べたように江戸で迂斎に学び、帰郷して上総に道学の種を播き、育てた第一人者であった。上総の門人の筆頭にあげられている養察が『姫寫口義』を所蔵したと考えても無理はなからう。

山口氏は、平成十六年一月、『姫寫口義』真蹟書を所蔵している熱田秀夫氏の御母堂熱田静江氏に熱田家に真蹟書が伝わる由来について尋ね、次のような事実を確認した。熱田家の現当主秀夫氏の祖父、つまり静江氏の父君常三郎氏は山武市湯坂の花沢常藏氏の三男であった。常三郎氏が熱田家に養子入りする際、祖父花沢退藏氏の所蔵本を分け与えられ、『姫寫口義』真蹟書はその一冊であったということである。

花沢退藏氏が何故『姫寫口義』真蹟書を所蔵していたかは確認できなかったとのことである。山口氏は、佐藤直方門下では写本や貴重本を愛弟子に譲る習慣が昭和まで続いていた模様であることから、おそらく花沢退藏氏の師である鈴木養斎が、その祖父養察から受け継いだ真蹟書を退藏氏に与えたのではないかと推測する。以上のことを図示すると資料1のようになる。

花沢退藏（文政元「一八一八」年—明治二十八「一八九五」年）は養察の孫、鈴木養斎に学び、その没後は奥平棲遅庵に師事した。学に努め、温厚、篤実、同じ湯坂の佐久間泉台、佐藤秀敏らと村内の風紀をあらためるに力あったとして、安政三（一八五六）年、領主から褒美を下賜されている。^⑥

（二）『姫寫口義』と『姫島講義』

『姫島講義』解題で述べたように『姫寫口義』は特定の門人達に宛てた書簡であり、それが整齊を加えら

れて『姫島講義』という講義の形に変容していったと考えられる。両者の性格の違いを具体的に示す部分を資料としてあげる。構成の違いについては『姫島講義』解題を参照されたい。

資料2は『姫寫口義』と『姫島講義』の校合で用いた底本を比較し、細かな字句や文単位での相違は省略して、段落単位での相違を示したものである。AとBを見れば、『姫寫口義』と『姫島講義』の性格の違いは明らかである。Aでは、『姫島講義』の「聖人」の説明が、『姫寫口義』のそれと比べて、格段に行き届いた講義というにふさわしい説明になっていることがわかる。聖人について丁寧に解説されているだけでなく、人たる者はみな聖人を目指すべきであるという方向性が明確に打ち出されている。

また、Bの『姫寫口義』の部分には、たとえば「及^レ企^ニ行装^ツ」、あるいは「以^ニ易^ニ石尤^ニ風^ニ」などのいかにも旅先の宿らしい表現がある。それに対して、『姫島講義』の部分は講義にふさわしく学問を力強く奨励する文章となっている。

〔注〕

- (1) 『姫島講義』解題参照。
- (2) 『姫寫口義』末尾の宛名の「姫寫大兄」
- (3) 伊庭氏藏、田原秀信『諸君子小傳』

資料1

——は父子関係、……は師弟関係を表す。は真蹟書を所蔵していた者、は所蔵していたと推測される者を表す。

鈴木養察 □ 鈴木養齋 …… 花沢退蔵 花沢常蔵 熱田常三郎 熱田周意・静江夫妻 熱田秀夫

(一七七九年没) (一八三七年没) (一八九五年没)

資料 2

A 漢字片仮名混じりの和文の部分

『姫寫口義』

聖人ト云人、日本タヘテ一人モ見ヘ玉ス。神武以来近付ニ一人モナク、中国トデモ四五千年ノ久キ、ツイニカホ出モナケレハ、ドノヨフナモノト書付テハミセカタク、口ニ述テハ聞セガタシ。

『姫島講義』

所謂聖人ナル人、日本タヘテ一人モ見ヘ玉ハズ。神武以来一人モ近付ニナケレバ、吾人思ヒ忘レテヲルハ聖人ナリ。然ルニソノ聖人ナルモノ、別ニ天ヨリ内々ノ賦命アルニ非ズ。又外ニ格段ノ重寶ヲモ領セズ。耳目鼻口四肢百骸、吾人ト分寸ノ異ナルコトナケレバ、吾此一身モ聖人ト同ク完全備足シテ、聖人ニ對シ耻シカラヌ家筋ナリ。只一毫ノ私欲、吾コノ血氣形体ニ長ジハビコリテ、自カラ如^レ此汚濁ノ身ニヨチブレタルナレバ、吾此人欲ノ汚レタルモノヲ、吾此聖人ト共ニ持合セタルモノヲ以テ逐ヒ退レバ端的聖トナルノ路徑ヒラケテ、萬里之遠參商之隔千苦百難トイヘトモ、道ハ品川カラ長崎マデズツトアイテオレバ、イツゾハ聖人ノ域ニイタラザルノ理ナシ。此又分外過當ノ望ニアラズ。吾コノ天ヨリ備足スル處ノ本体トナリタルノミ。聖人豈遠カラランヤ。

B 漢文の部分

『姫島口義』

不^{リキ}レ圖^{ナラント}姫嶋^ノ老兄^ノ家禍^ノ如^レ。此^ニ於^テレ^ニ是不^レ得^三八子同集^二會^{スルコトヲ}。姫島^ニ而日^ニ與^二一^ニ之友人^一憂^ルレ負^二初心^一而巳^ニ。
十一月朔^ニ行^キ東金^ニ二日反^リ清名村^ニ與^二友人^一期^下明三日啓^テ行^ヲ歸^中江府^ニ上及^レ企^ニ行裝^ヲ徒然^{トシテ}將^下持^二墨跡^一空^ク歸^上郷雖^レ然^{リト}レ^ソ吾何^ニ嫌^{タラン}哉因^テ與^二鵜沢氏^一謀^リ實^ニ前約^ヲ輒^ク作^二講義一小冊^一充^テ面會^ニ以欲^下歸後煩^ニ小童生^一各^ニ與^中其家^上便安綴^ニ數言^一以易^三石尤風^ニ云^レ爾。宝曆壬申十一月二日「稻葉亦三郎操^ル箋於清名村旅館^ニ」
『姫島講義』

不^レ圖^二姫島家禍^一如^レ此以負^二初心^一。因作^二講義一卷^一。略示^二要領^一。與^二之八子^一。以勵^二其志^一云。八子勉乎哉。美質之易^レ得。至道之難^レ聞。此佐藤夫子之所^下以蚤^ニ編^二鞭策錄^一。晚著^中道學標的^上。而彼闡^二明道學^一。排^二斥異教^一。使^二後學知^レ所^ニ依歸^一者非^レ此。而將何^ニ在哉。寶曆壬申冬十一月

○『姫島口義』注釈

凡例

- 一、本編は、千葉県山武市成東 熱田秀夫氏所蔵の稻葉黙斎の真蹟『姫島口義』の翻刻である。
- 一、原文は漢字片仮名混じりの和文と漢文によつて成る。最初に原文をあげ、次に漢文の部分の訓読文を記し、最後に語注を附した。
- 一、真蹟書を忠実に翻印するように努めたが、読解上の便宜をはかるために次のような変更を加えた。

1 漢字片仮名混じりの和文の部分について

- (1) 適宜段落に分け句読点を加えた。
- (2) へ、氏、ノ、フ、子は現行一般の表記に直した。
- (3) 原文の双行、小字の割注は「」で括り、単行の普通字とした。
- (4) 書名については『』引用句等については「」で括った。
- (5) 意味上、並立の関係にある語句と語句との間に・を補った。
- (6) 和文の中の漢文体の文については、訓読しにくいもののみ語注で書き下した。

2 漢文の部分について

- (1) 原文の双行、小字の割注は「」で括り、単行の普通字とした。
- (2) 豎点、圈点などは省略した。

3 漢文部分の訓読では、便宜上人名以外は新字を用い、よみにくい字には振り仮名を加えた。

一、語注では、『姫島講義』の語注と重複する項目を省略した。

▼原文

姫
寫
口
義

呈_ス
上_ニ総ノ諸君_ニ
一

聖人ノ道先儒ノ議論已ニ尽キ、實ニ確ニ無^{ケレハ}ニ復^タ遺蘊^タ、則今更新ニ述ルモ贅ナリ。タゞ「四書」、^{ナレハ}『小學』、『近思』ノ三書ヲグルくくト讀メバ、ソノ中自深意出デ他ニ求ルニ及ズ。然レトモソノ三書トテモ、タゞグルく讀ム而已ニテウカくトシテハ、睡リナガラ須磨^ス、明石ノ景ヲ見ル如クニテ、何^{ナレハ}遍アロキテモ爭デカソノ景色ヲ知ランヤ。サレバ、三書ヲハツキリト目ヲ惺シテミルガ肝要ナリ。ソコデコソ昔年我 佐藤先生、『講學鞭策』ノ書ヲ著シ玉ヘリ。學者衆ノグツツカル、ニムチヲアテ、ネムラル、人ノ耳ヲヒカル、異見ナリ。然レバ、「四書」、^{ナレハ}『近思』、『小學』ノ三書、イカホド難^レ有結構ナル書ナレバトテ、鞭策ノ心ナケレバ、鱸ニ酢ノキカザル如クニテ、鯛^{タイ}モ鱸^コモ無用ノ肴トナルナリ。「四書」モ『近思』モ無用ノ書トナルナリ。タゞく此心ヲヒキタテく、眼ヲサマシテ、先輩タチノ異見ヲ誠ニ切身^{キリミ}ニ塩ヲ付ル如クニキクカ、千と万と實ニ學ブト云モノナリ。「我友如何思召ヤ」と自家身上ニ引付ケ痛ク警策スベシ。

サテソコニ一ツノ不審アリ。世ノ中ニサマく儒者タチアルニ、何レヲミテモ安樂ニ詩ヲ賦シ文ヲ作り、登^{ニシ}山步^ニ月、飲^ニ酒啜^ニ茶ア、ラクくト樂ミ世ヲ渡リクラセトモ、トコヨリ咎ムル人モナク、學者大儒先生ト呼ハル、ニ、何ヲクルシミテ山崎一家ノ學ハ勵ミ苦ミテホネヲヲラル、ゾ。カククルシマル、學ハ果シテ何ノ學ゾヤ。曰「吾學由來有準的以至聖人」之學ナリ。聖人ト云人、日本タヘテ一人モ見ヘ玉ス。神武以來近付ニ一人モナク、中国トテモ四五千年ノ久キ、ツイニカホ出モナケレハ、ドノヨフナモノト書付テハミセカタク、口ニ述テハ聞セガタシ。タゞ聖人ト云人ヲ目當ニシテスル學問ヲ、眞儒トモ云ヒ、古ヘノ學者トモ云ヒ、君子儒トモ云ヒ、道學トモ云ヒ、經學トモ云ヒ、爲^レ己之學トモ云ヒ、他処カラハ宋儒トモ呼フ。皆是我黨學脈心法聖門^{ホフ}ノ旨訣ナリ。タゞソコノ道學ト云目當ナケレハ、向^サキニ所謂先輩ノ異見モ、講學之鞭策モ、亦無用ノ異見、無用ノ鞭策トゾナルナリ。ソコデコソ、又我 佐藤先生、『道學標的』ノ書ヲ著シ、

學問ノ目アテコ、ナリトテ、長言ナシニ孔曾思孟周程張朱ノ八人ヲ出シ、コレヲ我輩ノ目當ニソサレケレバ、吾人コノ一書ニワイテハ、ヌク事モナラス、サス事モナラス、タス事モナケレバ、ヘラス事モナラズ、全然當レ拜ニ讀之。

因告ニ諸公ニ曰我日東始生ニ我山崎先生ヲ尋有ニ佐藤淺見三宅ニ先生之出ニ道學明ニ于世一亦不レ少矣我大人迂齋先生受ニ業於佐藤先生之門ニ講レ學有ニ年是以僕自レ幼学ニ于膝下ニ成童入ニ石原先生之門ニ受ニ父師之教一以ニ講レ書說一レ經爲ニ己業一僕至愚卑陋豈得レ受ニ其高喻一乎然今稍ニ知ニ理道之可一レ尚而以ニ此道ヲ爲レ念誠教之使レ然也何幸耶僕蒙リ不鄙一爲ニ鵜澤生ノ所延啓レ行到ニ于茲ニ諸公誤爲レ僕設ニ講席ヲ一日、使ニ某講解一孜ニ不レ怠其勵レ學之厚轉足ニ彊ニ人意一矣某先月十九日離ニ膝下ニ出家及ニ時與ニ大人一期至レ茲則講ニ道學標的一以示ニ道要ニ於レ是先レ期一日「十八日也」請ニ大人書ニ孔曾思孟周程張朱之文字ニ大人嘉ニ納之ニ輒書ニ其語各一凡八道一以從ニ某請ニ乃捧出某初意將以爲上総諸生爲レ學權興ニ酒井先生ニ盛ニ和田老大兄ニ自レ是諸生漸次立レ志深信ニ吾大人一不レ廢レ業不レ拒レ教乃至今日一也而隨ニ從大人一其直指面命者茲八人矣「姫寫鈴木氏折戸鈴木氏 片貝布留川氏 成東安井氏 早船平山氏 小松安井氏 清名鵜澤氏 東金大木氏」到レ此則趣ニ姫寫學舍ニ講ニ標の書一及ニ講畢一以ニ大人墨跡八道各一贈ニ八子一。不レ圖姫嶋老兄家禍如レ此於レ是不レ得ニ八子同集一會ニ姫寫一而日ニ與ニ一二之友人一憂ル負ニ初心一而己十一月朔行ニ東金ニ二日反リ清名村ニ與ニ友人一期下明三日啓レ行歸中江府上及レ企一行装一徒然將下持ニ墨跡一空歸上レ郷雖レ然吾何嫌哉因與ニ鵜沢氏一謀レ實ニ前約ニ輒作ニ講義一小冊一充ニ面會一以欲下歸後煩ニ小童生一各、與ニ其家上便妄綴ニ數言一以易ニ石尤風一云レ爾。

宝曆壬申十一月二日「稻葉亦三郎撰ニ箋於清名村旅館一」

孔曾思孟周程張朱語

講義畧

朝聞道夕死可矣

注ニ不^{スバアル}レ可^{スバアル}以^{スバアル}不^{スバアル}一ト云字アリ。眼ヲ付テミヨ。

金ヲモタズンハアルベカラス、長生^{ナガイキ}ヲセスンバアルベカラス、ズンバアルベカラズバ色トアリ。タハコ、ノスンハアルヘカラズカナイ。コハカ大事ノ処ナリ。逐一姫嶋君ニテ埒ヲ御明ケ候ヘかし。

一タ死^{ニハ}イヤナ事ナリ。八十^{ニシテ}而福来^{ルチス}便死^{スト}矣、コレハイヤナ事ナリ。朝聞道夕死可矣。ナゼニ可矣ナルゾ。体認シテミルベシ。

在明明德在親民在止於至善

佛者ハ役ニ立ズ。霸者ハ役ニ立ス。文仲子ハ役ニ立ス。學問ハ、大學ヲマナブ事大ナコトナリ。大コトハタバハナラズ。可^レ思。サテ親^ルノ字ヲ、程子、當^レ作^レ新ト。一寸シタ事ナレドモ眞儒ナリ。王陽明カ親ノ字テヨイト云ハ大ダワケナリ。トコカ眞儒ゾヤ。ドコガタワケゾヤ。自家引受テ知ルベシ。

尊德性而道問學

德性ヲ尊ヌカラ卑^{ヒク}シ。問學ニ道ヌカラ小シ。學ハ高ク大ナルヲヨシトス。高大之字、所^ム包^シ廣^シ。可^レ味。卑小之字、千万ノ氣ノ毒コハノ中ニアリ。所^ム包^シ廣^シ可^レ戒。

孟子道性善言必稱堯舜

學問ハ性善ナレバコソナル。猿ハカシコクテモナラス。學問ノ綱領、性善ノ二字ナリ。タバ性善バカリ云タトデモ、イヤトハ云ハレネトモ、俗人共ガゼウガコワイカラ、稱^ス堯舜^ツ。然レハ、堯舜ハ證文ナリ。證文サヘアレハ、公事ニマケヌ。サテ、證文ニハ大勢ヲ出スヘキニ、タハ二人テハ少キニ非スヤ。直方曰、「一匹ノ猫鼠ヲトレバ、アトノ千匹ハミナトル」。此中有^{ウチリ}「深意」。姫嶋丈宜^{ヨロシク}奉賴候。荀・楊ガ大ダワケハ

コ、ヲシラヌユヘノ事。ソレニ注ヲスル司馬温公、サテく痛敷事ナリ。コ、ニナルト温公ニサヘ顔ヲ赤クサセルゾ。

我友自重ゼヨ。人柄ワルケレハ一休小僧ナリ。

聖希天賢希聖士希賢「毎^{トニ}讀不^レ覺揚^{ケテ}言曰吁々快哉快哉」

天ガ腰ヲヤスメヌカラ、聖人モヤスマヌ。聖人カヤスマヌカラ、賢人モヤスマヌ。賢人ガヤスマヌカラ、士ハナヲヤスマヌ。士トハ學者ナリ、儒者ナリ。メンくノ事ナリ。俗人ハ士テナシ。ソコデヤスム。

言學便以道為志言人便以聖為志

志ニ遠慮ハ入ヌ事。メンくカフキイテモ尻ゴミヲスルハ、カイナイユヘナリ。ソレカスグニ志ノナイノナリ。志ノタンテキヲ云ニ、奉公スルトキ君ヲソマツニスマイトロモイ、女ノ昏礼スルトキ夫ヲ二人モツマイトロモフガ志ナリ。女ガ夫ヲ二人モトフト云心ナラハ、ダレモ女房ニハスマイカ、學者カ聖人ニナラレマイト云ヲバ、ナゼニユルスゾ。

為天地立心為生民立道為去聖繼絕學為万世開太平

直方云、「四ツ為ノ字アレトモ、身ノ為メの一モナイ」ト。正信竊謂張子ノ此言ホンナリ。迂詐デナシ。

學者タチキモヲツブサル、ナ。燕雀^ソ何知^ニ鴻鵠^ツ之心^一

致知以明之立志以守之造之以精深充之以光大

正信謂四者廢其一則非學

右段々ニ而全体肝要ノコル処ナシ。タゞコレヲ体認スル事難シ。功夫ノ仕方、非^レ他。「必有^レ事勿^レ正」ノ五字最妙ナリ。フンデフマザレ、活と滌と、中庸ト云モコレナリ。自然ト云モコレナリ。知^モル者ハ知ラン。其要在^ニ學友集會^一。

千々万々遺恨ナルハ姫嶋丈
書不_レ尽_レ言言不_レ尽_レ意

頓首九拜

二日夜

稻葉正信

呈

姫寫大兄

折戸丈

布留川氏

平山氏

安井氏

小松生

鶉澤氏

大木氏

案下

別幅

孔曾思孟周程張朱之語

八道_ハ大人_ノ眞蹟_{我カ} 八子丈各々以下_{ルノ}入_二大人之門_一 先後_上立_二次序_一 乃_チ宜_ク 受_二納_一_{シテ} 之_一 其學之進否_之 德之高下_ハ 或有_ラ焉

吾不_二敢言_一也

▼漢文部分の訓読

因つて諸公に告げて曰く、我が日東、始めて我が山崎先生を生じ、尋いで佐藤、淺見、三宅の三先生の出づる有りて、道学の世に明らかなること亦少しからず。我が大人迂齋先生、業を佐藤先生の門に受け、学を講じて年有り。是を以て僕幼より膝下に学び、成童石原先生の門に入り、父師の教へを受け、書を講じ経を説くを以て己が業と為す。僕、至愚卑陋、豈其の高諭を受くるを得んや。然るに今、稍々理道の尚ぶべきを知り、此の道を以て念と為す。誠に教への然らしむるなり。何ぞ幸なるや。僕、不鄙を蒙り、鵜澤生の為に延かれ行を啓きて茲に到る。諸公、誤つて僕か為に講席を設け、日々に某をして講解せしむ。孜孜として怠らず。其の学を励むの厚き、転人意を彊ふするに足る。

某、先月十九日膝下を離れ家を出づ。時に及びて大人と期す、茲に至らば則ち『道学標的』を講じ以て道要を示さんと。是に於て期に先んずる一日「十八日なり」、大人に孔曾孟思周程張朱の文字を書するを請ふ。大人、之れを嘉納し、輒く其の語各々一つ凡そ八道を書し、以て某が請ひに従ふ。乃ち捧じ出づ。某、初意將に以為らく、上総諸生の学為るや、酒井先生に権輿して、和田老大兄に盛んに、是れより諸生、漸次志を立て、深く吾が大人を信じ、業を廢てず、教へを拒まず、乃ち今日に至るなり。而るに、大人に随従し、其の直指面命なる者茲に八人なり。「姫島の鈴木氏 折戸の鈴木氏 片貝の布留川氏 成東の安井氏 早船の平山氏 小松の安井氏 清名の鵜澤氏 東金の大木氏」此に到らば、則ち姫島の学舎に趣き、『標的』の書を講じ、講畢るに及んで、大人の墨跡八道各々一つを以て八子に贈らんと。

図らざりき、姫島老兄の家の禍、此くの如くならんとは。是に於て、八子同じく姫島に集会することを得ずして、日々一二の友人と初心に負くを憂ふるのみ。十一月朔、東金に行き、二日清名村に反り、友人と明三日行を啓きて江府に帰らんことを期す。行装を企つるに及んで、徒然として將に墨跡を持ち空しく郷に帰らんとす。然りと雖も、吾れ何ぞ嫌たらんや。因つて鵜澤氏と前約を実にせんことを謀り、輒く講義一小冊を作り、面会に充て、以て帰つて後小童生を煩はして各々其の家に与へんことを欲す。便ち妄に教言を綴り、以て石尤風に易ふと云爾。宝曆壬申十一月二日「稻葉亦三郎 箋を清名村旅館に操る。」

○語注

【日「吾學由來有準的以至聖人」之學ナリ】曰く、「吾が學の由りて來たる準的有り、以て聖人に至るの學なり」【東金大木氏】八子のうち東金の清十郎こと桜木闇齋は、大木剛中と稱した。【何嫌哉】どうして満足なことがあるうか。【石尤風】旅人の行く手をはばむ向かい風。尤朗の妻となつた石氏の娘が、旅に出て行方不明となつた夫を思ふあまり病に倒れ、「自分は大風になつて人が遠く旅に出るのを天下の妻達のためにはばむ」と言つて死んだ故事による。【文仲子】王通。【毎讀不覺揚言曰吁々快哉快哉】読む毎に、覚えざる言を揚げて曰ふ、「吁々、快哉快哉」と。【燕雀何知鴻鵠之心】「燕雀いづくんど鴻鵠の志を知らんや。」【史記】陳涉世家【正信謂四者廢其一則非學】正信謂ふ、「四者の其の一を廢すれば、則ち學に非ざるなり」と。【活と澁と】「活潑潑地」と同意。心が引き締まつた状態にありながら、しかも作為なく自然で、どこおりになくいきいきと天理の妙用そのものとなつてゐる状態。『二程全書』卷四の程明道の言葉に「鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍る。其の上下に察らかなるを言ふなり」。此の一段は、子思の嚆矢に人の為にせし処にして、「必ず事とすること有れ、而も心に正めすること勿れ」の意と同じ。活潑潑地なり。会し得る時

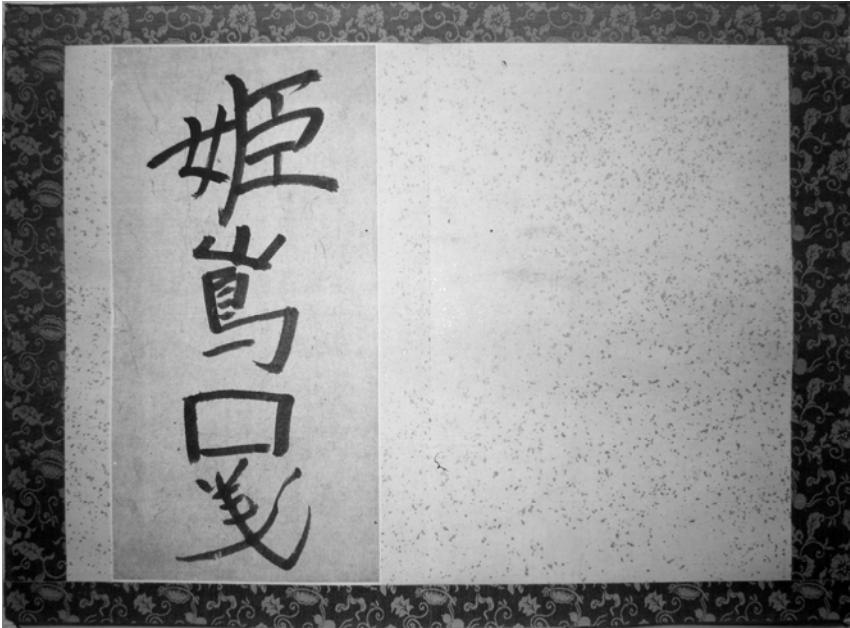
第二部 山崎闇斎学派についての資料

は、活潑潑地なり。会し得ざる時は、只是れ精神を弄するのみ。」とある。

六 稻葉默齋『姫島口義』



千葉県山武市成東 熱田氏所蔵 『稻葉默齋先生姫島講義真蹟書』



『姫嶋口義』表紙

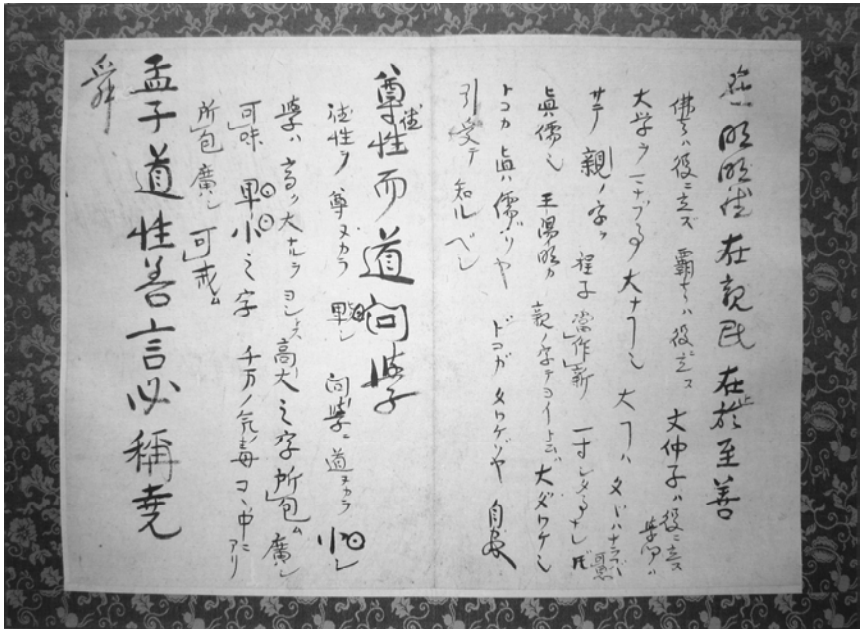
呈^ニ上^ニ総ノ指^ニ引^ニ
 聖人ノ道。先儒ノ議論已^ニ了^ニ。實ニ確^ニ
 無^ニ後^ニ遺^ニ蘊^ニ則^ニ今^ニ更^ニ新^ニは^ニモ^ニ者^ニ。タ^ニ四^ニ
 書小學近思^ニ三書^ニ。シ^ニく^ニ。漢^ニの^ニソ^ニ中^ニ
 深^ニ遠^ニ出^ニた。他^ニ来^ニル^ニ及^ニ々^ニ。然^ニレ^ニモ^ニリ^ニ三書^ニ。ト^ニハ^ニ
 ヲ^ニシ^ニル^ニ。讀^ニみ^ニ而^ニ已^ニニ^ニテ^ニ。ウ^ニカ^ニハ^ニト^ニシ^ニテ^ニ。睡^ニリ^ニ
 ナ^ニカ^ニウ^ニ。愛^ニ者^ニ。明^ニ名^ニノ^ニ景^ニヲ^ニ見^ニル^ニ。カ^ニク^ニ。何^ニ處^ニア^ニロ^ニヤ^ニ
 テ^ニモ^ニ。此^ニ中^ニ。ナ^ニカ^ニリ^ニノ^ニ景^ニ色^ニヲ^ニ知^ニル^ニ。ヤ^ニ。サ^ニレ^ニハ^ニ三^ニ書^ニヲ^ニ
 ハ^ニウ^ニキ^ニリ^ニト^ニ。目^ニヲ^ニ醒^ニシ^ニテ^ニミ^ニカ^ニ肝^ニ要^ニ。ソ^ニア^ニコ^ニソ^ニ昔^ニ
 年^ニ我^ニ。佐^ニ藤^ニ先^ニ生^ニ講^ニ學^ニ。鞭^ニ策^ニノ^ニ書^ニヲ^ニ著^ニシ^ニ玉^ニヘ^ニ。學^ニ
 者^ニハ^ニル^ニ。グ^ニツ^ニツ^ニカ^ニル^ニ。ニ^ニム^ニナ^ニラ^ニア^ニテ^ニ。オ^ニム^ニラ^ニル^ニ人^ニノ^ニ
 丹^ニヲ^ニヒ^ニカ^ニル^ニ。異^ニ見^ニル^ニ。他^ニハ^ニ。四^ニ書^ニ近^ニ思^ニ小學^ニノ^ニ
 三^ニ書^ニ。イ^ニハ^ニホ^ニト^ニ難^ニク^ニ。結^ニ搗^ニ。書^ニト^ニハ^ニ。鞭^ニ策^ニノ^ニ人^ニを^ニ
 ハ^ニ。難^ニ。酢^ニ。オ^ニカ^ニサ^ニレ^ニ。如^ニク^ニニ^ニテ^ニ。鯛^ニ。鱈^ニ。モ^ニ無^ニ用^ニノ^ニ主^ニ有^ニ
 ト^ニサ^ニレ^ニ。四^ニ書^ニモ^ニ近^ニ思^ニ。無^ニ用^ニノ^ニ主^ニ有^ニ。タ^ニハ^ニ。心^ニ
 ヲ^ニ。ヒ^ニキ^ニム^ニテ^ニ。服^ニヲ^ニサ^ニシ^ニテ^ニ。先^ニ輩^ニ々^ニチ^ニノ^ニ異^ニ見^ニ
 ヲ^ニ。誠^ニニ^ニ切^ニ身^ニ。塩^ニヲ^ニ付^ニル^ニ。カ^ニニ^ニキ^ニク^ニ。千^ニ。下^ニ。
 寅^ニ。寅^ニ。ト^ニス^ニ。我^ニ々^ニ。必^ニ。思^ニ。タ^ニ。ヤ^ニ。と^ニ自^ニ家^ニ

身上に3付痛く驚策へし。サチロニ一ツノ不
 審アリ世ノ中。さく儒者タナルニ何シミテモ
 ニ海ノ賦文ヲ作り、空山、半月、飲酒、遊春
 ト樂ミ世ヲ渡リケラレトコヨリ、各人ノよう、其さう
 大儒先生ト呼ビ、何ラクルヒテ、山崎一家ノ學ハ
 勸ミ苦ミテホチララル、ザ、カククルヒニルノ學ハ
 果シ何ノ學ゾ、曰哉、學子由來有準の以至
 重人ノ學シ、重人ト云人、日本タテ一人モ見エス
 神武以來、正付三人モシ、中國ナキ、四十年前ノス
 キツイニカ外出モナレド、ヨナキノト書付テハ
 ミセカクノ口ニ迷テハ、ウセガダシタビ、重人ト云人
 目、吾ニテスル學向ラ、直儒モ云、古學モ云、君子
 儒モ云、道學モ云、經學モ云、爲己之學モ云、他乳ナル
 宋儒ハ呼フ皆是、我輩、皆臆心陽垂、ノ旨
 訣ニツ、ノ道學云、目、吾ナレハ、向、所憎先輩ノ
 異見モ、儒學ノ數策モ、亦無用ノ異見、無用ノ
 數策ハ、ト云、ソ、テヲシ、又我、佐友先生
 道學標的ノ書ヲ著シ、其ノ月アチ、ナリトテ
 長言シ、孔曾思孟、周程張朱ノ八人ヲ

出^レ己^ラ我輩ノ目^ヲ盡^サレ^バ 吾人^{コノ}主^マ
 ニ^ライ^キハ 又^クワ^シミ^サラ^ス カ^スヲ^シミ^サラ^ス タ^スヲ^シミ^サラ^ス
 ヘ^ラス^ヲミ^サラ^ス 全^ク然^ル 當^ル并^ニ讀^ム之^ヲ 因^テ告^グ諸^ノ人^ニ
 曰^ク我^レ日^ニ東^ニ始^メ生^ル我^レ山^ノ崎^ノ先^ニ生^ル尋^ニ有^リ依^テ藤^ノ淺^ノ見^ル
 三^ニ宅^ニ三^ニ先^ニ生^ニ之^ヲ出^ス道^ヲ學^ブ明^ル于^ニ世^ニ亦^モ不^レ以^テ笑^フ
 我^レ大^ニ人^ニ江^ノ崎^ノ先^ニ生^ニ受^ケ業^ヲ於^ニ佐^ノ後^ノ芝^ノ世^ノ以^テ講^ス學^ヲ有^リ年^ヲ是^レ以^テ自^ラ劬^ム字^ヲ于^ニ膝^ノ下^ニ成^リ立^リ
 入^リ石^ノ原^ノ先^ニ生^ニ之^ヲ門^ニ受^ケ父^ノ師^ノ之^ヲ教^ヲ以^テ講^ス書^ヲ
 說^フ經^ヲ爲^ニ己^ノ業^ト僕^ニ至^リ愚^ニ里^ノ通^ル豈^ニ得^ル受^ケ其^ノ高^ノ喻^ヲ乎^ヤ今^ニ稍^シ知^ル理^ノ道^ノ之^ヲ可^ク尚^ム而^モ以^テ此^ノ道^ヲ
 爲^ニ念^ヲ誠^ニ教^ヲ之^ヲ使^シ後^ノ也^ヲ何^ノ幸^ヲ耶^ヤ僕^ノ蒙^リ
 不^レ鄙^ニ爲^ニ羈^ヲ譯^ス所^ニ延^ル啟^ス行^ヲ到^リ于^ニ茲^ニ
 諸^ノ公^ノ誤^リ爲^ニ僕^ノ設^ス講^ス席^ヲ日^ニ使^シ見^ル講^ス
 解^ス政^ヲ不^レ怠^ニ具^ニ勵^ス子^ノ之^ヲ厚^ニ轉^リ足^ニ聽^ル
 人^ノ意^ヲ笑^フ某^ノ十九^ニ日^ニ離^ル膝^ノ下^ニ出^ス家^ヲ
 及^リ時^ニ與^ニ大^ニ人^ニ期^ス至^リ茲^ニ則^チ講^ス道^ヲ學^ヲ標^ス的^ト

以示道要於是先期一百十八日
大人書孔曾思孟周程張朱之文字
大人嘉納之輒書與培各一凡八
道以從東情乃捧出某初意
將以為上總諸生為學之規與酒井
先生盛和田老兄自是諸生漸次立
志深信大人不廢業不拒教乃
至今日而隨從大人直指面中者
茲八人矣
堀富繁氏 折釜孝氏 片岡而留川氏
成中守氏 品鶴平山氏 小松安井氏
清名義隆氏
東金大氏
到世則趣姬嵩學令言講擇
的書及講畢以大人墨跡八道各一
贈八子不圖姬嶋老兄家禍如世
於是不得八子同集會姬嵩目與
一二之友人憂初心而已十一月朔行
東金二日及清各村與友人明三

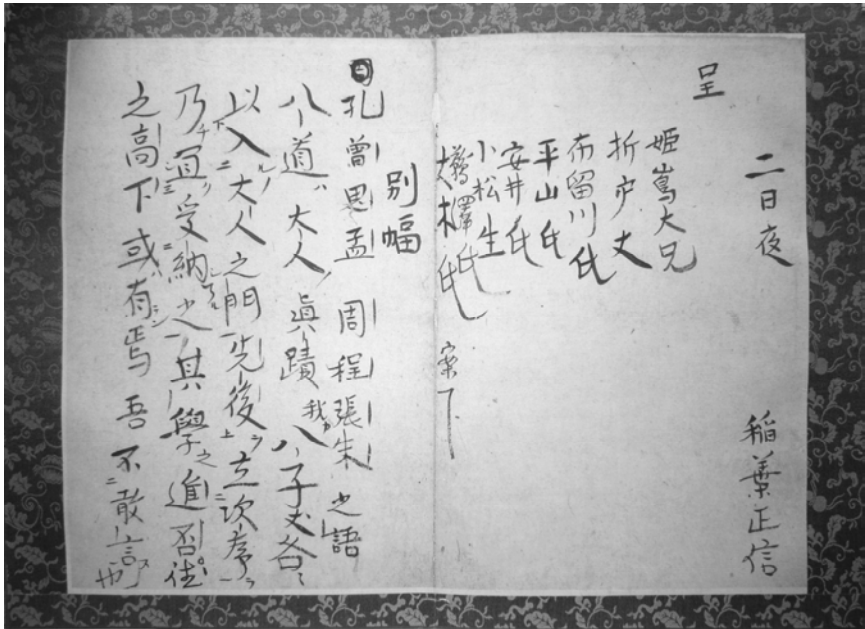
日故行歸江府及企行哉徒然將
 持單跡空歸鄉雖我吾何憐哉
 因與鶯沢氏謀實前約一軌作攝
 一小冊克面會歸後煩小童
 生各與其家便綴數言以代石
 左九云爾
 宝曆辛丑十一月二日 箱葉亦三亭標
 清谷村旅館
 孔曾思孟周程張朱語 構茂畧
 新道夕死可矣
 注 不可以不 ト云字アリ 暇付テミヨ
 金ヲモメシハアルベラス 長生ラモスハアルベラス
 スハアルベトガ 色ニアリ タニノスハアルベトガ
 コハカズノカシ 逐一姫侍君ニテ 好ク活明ク
 一 夕死ハイヤナシ 八十而福来便死スルニハイヤナシ
 新道夕死可矣セシ 可矣作場ノミルヘン



歩の性老ナレバコリナル猿ハアレコトナ
 ラヌ歩ノ綱領性若ニナシタレ性若バ
 カリシテモイヤト云ハレハ俗人ナガセウガ
 コワイカラ稱羨希一終シ羨希ハ證丈ニ
 證丈サレハ公のニケヌサテ證丈ハ大勢ラ
 出ス(キミタ、二人テハサキニ非ヌヤ直戸曰
 一匹ノ猫鼠ラトレハアトノ千匹ハミナト
 世中^{サカ}の深^リさ^ニ姫^ハ泣^キ思^フ事^ハ能^ク
 場^ハ大^ニタリケハコ^ノう^シヌ^コフ^ノ荀^ノ
 ソレニ注ラスル司馬溫公サテく痛^ク憂^フ
 コニナレ温公ニサ(顔^フ赤^クサセルソ
 我友自軍^ニ人柄^ハルケルハ一休小僧^ノ
 聖希天賢希聖士希
 賢^ハ毎^ニ讀^ム不^レ受^ル揚^グ言^ハ曰^ク
 天^ハが腰^ヲサヌメヌラ^ハ吾^ハ人^ニミヤヌ^メ吾^ハ人^ハカヤヌ
 ニヌカラ^ハ何^ノ人^モヤヌ^メ又^ハ人^ガヤヌ^メヌカラ^ハ
 士^ハナラヤヌ^メ士^ハト^ハ希^メナ^リ希^メニ

志ニ遠慮ハ入ラズ
 モ尻ゴミヲスルハカイナイエシソレカスグニ
 ノナイノシ
 志ノ老チヤラ云ニ
 君ラソニウニスエイトトラモイサノ皆礼スルトキ夫ニ
 ニ人モウニイトラモフガ志シ女^メニ人モトム心
 ナラバダシモ廿^ニ年ニハヌニイカ此^ニ事セカ至人ニ
 ナラシマイト云ラバナセニユルスゾ
 為天地立^ビ處^ニ為生民立道為
 去聖繼^テ學^ニ為万世綱太平
 直方云四ツ爲ノ才アレ身ノ爲メ一モナイ
 ト正信竊謂張子ノ言ハニ
 迂詐チナル此^ニ事セクタチキモラツザサルナ
 燕雀何知ニ鴻鵠之仁コ
 俗人ハ士テナシソレチヤスム
 言學便以道為志言人便
 以聖為志
 志ニ遠慮ハ入ラズ
 メンクカフキイテ
 志ニ遠慮ハ入ラズ
 メンクカフキイテ

致知以明之 立志以守之 造
之以精深 克之以光大
正信竭四者廢其一則非學
方修之 今修肝要
ノコルル 久ナシ ターコラ 体認
スルヲ 難シ 功夫ノ仕方非
他 必有事 勿正ノ字 最ぬ
こ フニテ フニサレ 活ニ 活ニ 中ナト
云モコレシ 自然ノ云モコレシ 知者ノ知
其要在 學友ノ身中
千ニ万ニ 遺恨ナシ 姫唄文
書不云 言言 不云 言言
此首九拜



『姫島口義』末尾

七 稲葉默齋『處士越復傳』

解題・注釈・校合 大久保紀子

○『處士越復傳』解題

はじめに

『處士越復傳』は、默齋がその生涯の二十四歳までをつづった狂文体の自叙伝である。二十四歳で終わっているのは、道を求めるが故に頹落した世に耐えきれず二十四歳で憤死したという設定だからである。一読して、默齋が剛胆しかも無器用で一本気、人一倍自意識の強い人物であることがわかる。最も目をひくのは、默齋がみずからの「粗卒、狂獫」たるさまを露悪趣味というべき筆致で描いている点である。その誇張された狂態の激しさは、道学の正統を継ぐ気迫の激しさと表裏一体をなすものである。默齋は、訓古注釈に終始し紙背に徹する眼力を持たない先輩、世に迎合し革新の氣を失ってしまった儒者、謹嚴たることに拘泥して洒落の妙を知らない学徒に憤り、容赦ない批判をあびせかける。その憤りは、そうした世情をどうともし難い自己の非力に対する憤りでもある。したがって、悪行が極まれば極まるほど、善悪を分明し聖賢の学によって立とうとする意志がその背後にすけて見えてくる。その意志の強さ故のもどかしさがあらわになる。

『處士越復傳』は、道学をもって任ずる氣迫と自尊心によつて書かれた、狂文の典型的な一例なのである。^③『處士越復傳』の成立年代については、管見の限りでは客観的な証左となるものはない。一般的には、『處士越復傳』の本文に、二十四歳の時に「東海に奔りて死す」とあることから、二十四歳ころの成立と考えられやすい。しかし、本解題では、以下に述べるような根拠から、その成立を宝暦十（二七六〇）年十一月（黙齋二十九歳）に父を亡くして以降、宝暦十三（一七六三）年冬（黙齋三十二歳）に牛島に転居するまでの間と定めることができると思われる。

（一） 黙齋の行跡

自己の半生をこのような狂文に仕立て上げるためには、ある程度の時間的な経過が必要であろう。事実のままの自叙伝を記すのならともかく、自己をより客観的にとらえ、自らを嘲笑するような眼を感じさせる描写はその渦中にあつてはできないことである。しかしまた、『處士越復傳』の随所に渦巻く憤りは、執筆当時、黙齋の聖学に対する熱意と強い自尊心がいまだ定まる所を見出し得ていないことを示している。つまり、『處士越復傳』が書かれたのは、その記述が終わる二十四歳の年からやや時間的な経過があつて、しかも、黙齋が『處士越復傳』の憤りに見合うような荒々しい生活をしていた時期であるということになる。黙齋が父を喪つた宝暦十（二七六〇）年以降の二、三年がこれにあたると考えられる。

黙齋は、「東海に奔りて死」んだとする翌年（宝暦六「一七五六」年）母を喪つた。その四年後の十一月に父を亡くすが、その後の生活のありさまを『雪梅草』で次のように述べている。

先君子下世ノ後、放蕩不軌、花街柳巷ニ旦暮シ、醜声家学ニ及ビ、同門多ク絶交ス。爾後、三十年餘、老イテ多病東瀛ニ匿レテ、世ニ知ル者無キコト殆ト十有餘年。

『雪梅草』

『雪梅草』は寛政八（一七九六）年の雜記で、黙齋六十五歳の作である。「先君子下世ノ後」だけでは父を亡くした後というだけで何年のことか確定できないが、「爾後三十年余」とあつて、六十五歳の当時から三十年あまり前のことであることがわかる。つまり、父を喪つた二十九歳から三十二、三歳の頃まで、黙齋は「放蕩不軌、花街柳巷ニ旦暮シ、醜声家学ニ及ビ、同門多ク絶交ス。」という放逸な生活をしていたのである。

しかし、さすがに明和九（一七七二）年（十一月改元、安永元年）、四十一歳で『西遊轡録』を著すころには落ち着き、次のような記述が見られるようになる。

先年、艱に服す。使酒、淫放、人吾を目して夷狄、禽獸を以てす。爾後十餘年、形神寂寥、作用朴簡、世吾を目して雅古、儒風を以てす。

『西遊轡録』

艱に服すとは父の死のことであろう。「使酒」とは酒の勢いに任せてふるまうことである。父を喪つたあと酒におぼれて放蕩を尽くした。しかし、その後十餘年^⑤、今では世間から「雅古、儒風」と見られるようになったと黙齋はいふ。『雪梅草』、『西遊轡録』いずれの文章も、黙齋は父を喪つた二十九歳からあと、しば

らく淫放思うがままの生活をしてたことを示している。

二十九歳で父を亡くして後、道を求めながらも、いや道を求めるが故の「禽獣」のような生活の中で『處士越復傳』は書かれた。黙齋がみずから東海に葬り去らなければならなかったのは、悲憤慷慨するという形でいまだ世に恋々としている自分を完全に世から切り離すためであつたろう。道がこの世に行われなことを憤り、さらにその憤る自分に苛立つ、そうした己を葬り去り人事を絶つために書いた自らの墓碑銘、それが『處士越復傳』であつた。そうして我が身を葬り去り、世から身を隠すべく黙齋は牛島の幽居に赴く。^⑤それが三十二歳、冬のことである。

(11) 『孤松全稿』の収録順

(一) で『處士越復傳』の成立を宝暦十(一七六〇)年十一月の父の死(黙齋二十九歳)から、宝暦十三(一七六三)年冬牛島に移る(黙齋三十二歳)までの間と定めた。ここでは、その間接的な証拠として『孤松全稿』に収録されている各編の順番をあげる。『孤松全稿』の十卷までは黙齋の江戸在住当時の著作が収録されている。そのうち、『處士越復傳』の成立年について考察するために必要な十四編のおおよその成立年は、次の表のとおりである。年月の下に数字は黙齋の年齢である。(一)に成立年を確定もしくは推定した根拠を示した。↓はその年月以降、あるいは以前の成立であることを示す。○で囲んだ数字は『孤松全稿』に収録されている順番を示す。

七 稻葉黙斎『處士越復傳』

年 月		年齢	著作名 (根拠)	『孤松全稿』 の収録順
宝暦二(一七五二)年		21	『姫島講義』(文中の日付)	①
三(一七五三)年 春		22	『壩笥録』(識語)	②
六(一七五六)年 1月		25	『三郎稿』(「武井夫人小伝」の日付)	③
〃 2月			『内艱筭記』(跋)	④
〃 冬			『話録』(筆写した溝口直範の奥書)	⑤
十(一七六〇)年 5月		29	『若松艸』(「寒山詩選序」の識語)	⑧
〃 12月			『外艱筭記』(跋)	⑥
十一(一七六一)年 頃		30	『先君子行實』(篠原惟秀の奥書)	⑦
明和元(一七六四)年		33	此頃『先達遺事』成立か、『墨水一滴』序	⑫
二(一七六五)年		34	『牛島隨筆』(「答木子茂」の年齢)	⑪
三(一七六六)年 秋		35	『墨水一滴』(識語)	⑬
九(一七七二)年		41	『西遊轡録明和壬辰』(標題の元号と干支)	⑭

年月を推定する文献上の確証がなく表の中に入れることができない⑨と⑩がそれぞれ『處士越復傳』と『若松夜話』である。右の表に明らかたとおり、『孤松全稿』の各編は、おおよそその成立の年の順番にしたがつて収録されている。右の表の中には、成立年を推定することしかできず、ある年以降、あるいは以前とすることしかできなかった著作もあるが、それを含めても、おおよそ成立年の順番にしたがつて収録されていることがわかる。

したがって、『處士越復傳』をその文中の記述から黙斎が二十四歳の頃の成立であるとする見解は、否定されざるを得ない。右の表を見れば、⑨の『處士越復傳』を③より前に位置づけることは明らかに無理があるからである。一方、(一)で定めたように『處士越復傳』(⑨)の成立年を父の死後、黙斎二十九歳から牛島転居前の三十二歳までの間とすれば、右の表の⑥のあと⑫までの間に入って、それほど無理はない。

(三) 『若松夜話』

次に、『處士越復傳』の成立を黙斎が二十九歳から三十二歳までの間と限定できる直接的な根拠をあげる。『孤松全稿』に『處士越復傳』に次いで収録されている『若松夜話』は『處士越復傳』と共通する点が多く、この二つの作品はほぼ同じ時期に書かれたものと考えられる。ならば、『若松夜話』が以下に述べるように若松町在住時に書かれたものである限り、『處士越復傳』も黙斎が若松町に住んでいた時期に書かれたと考えられる。その若松町に住んでいた時期が二十九歳から三十二歳までの間なのである。

〔一〕 「若松」の由来

『孤松全稿』の中で『處士越復傳』(⑨)の前後に位置する『若松艸』(⑧)と『若松夜話』(⑩)の「若松」の由来については、さまざまな可能性が考えられるであろう。『若松艸』や『若松夜話』のような雑録には、著者の号や書齋の名、居住地名などが冠されることが多い。現に黙齋の上総在住当時の講義全集はその居住地、清名幸谷の名をとって『清谷全話』と名付けられている。^⑤したがってこの「若松」も当時の黙齋の居住地を示すと考えられるが、決定的な証拠は無く、以下いくつかの根拠をあげて傍証とする。

一つは石井一素(周庵)氏との梅澤芳男氏がそれぞれ黙齋の「小傳」^⑥と「黙齋先生年譜」^③に宝暦七年、黙齋二十六歳の六月の記事として「父の命を以て諸生を誘導し若松町に別居す」^②と記していることである。若松町は黙齋の転居先として現れる。もともと、両氏のこの記事は『先君子行實』の宝暦十年、「六月次子正信を出す。居を別にし、諸生を誘はしむ」^⑦を宝暦七年ととり違えたものと思われる。黙齋がそれ以前に迂齋宅から別居した記述はないから、別居の年は宝暦十年、黙齋二十九歳の時である。それはともかくとして、若松町が黙齋が迂齋宅から別居して住んだ場所の名としてあげられていることは見逃せない。

石井氏、梅澤氏がなぜ別居先を若松町と特定できたのかは不明である。しかし、以下の二点から、別居先を若松町と特定してさしつかえないと考える。一つは、『若松艸』に収録されている「寒山詩選序」の識語に「宝暦十年夏五月若松黙齋題」^⑧とあることである。識語には、執筆当時の著者の居住地がしるされるのが一般である。とすれば、この「若松」は黙齋が当時住んでいた場所を指すと考えるのが自然である。

次に、若松町という地名が実在するという事実がある。宝暦十年(黙齋二十九歳)五月以降、迂齋、黙齋は「谷倉村松町」^⑨に住んでいたが、そこから道路一本をへだてた墨田川寄りのはす向かいに若松町がある。^⑩若松町はそれほど珍しい地名ではないから、この場所以外にもいくつか探し当てることができる。しかし、

宝暦十年一月、七十七歳の父迂齋はすでに発病していた。その後二月に長年住み慣れた山伏井戸の家が火災にあい、五月に近所の村松町に転居したのであった。⁽⁸⁾老齢にして病の不安を抱えた父親を持つ黙齋が遠く離れた「若松町」に転居したとは考えにくい。宝暦十年六月、黙齋は父の家に近接する若松町に転居した。以後、三十二歳の冬に牛島に移り住むまでの三年間を黙齋はここで過ごしたと考えられる。

〔2〕『若松夜話』

『孤松全稿』の収録順では、『若松艸』(⑧)、『處士越復傳』(⑨)、『若松夜話』(⑩)となっている。このことだけからも『處士越復傳』が若松町時代の作であることは予想できるが、それを確実にするために、以下二つの根拠を提示して『處士越復傳』の成立年代を限定する。

最初に『處士越復傳』の成立の下限を『若松夜話』以前と定める。『處士越復傳』の成立が『若松夜話』より前であることは、次の『若松夜話』の文章に明らかである。

石子仙、黙散人と御殿山に登り、東海を眺望し慷慨して曰く、「昔、處士越復、身を沈むる處なり」と。

〔『若松夜話』〕

黙散人(黙齋)が、石子仙⁽⁹⁾という友人と御殿山に登り海を眺めている時に、『處士越復傳』の挿話が話題にのぼったのである。つまり、『處士越復傳』(⑨)の成立は『若松夜話』(⑩)より前であることがわかる。⁽¹⁰⁾『處士越復傳』の成立を若松町在住当時より後、牛島転居後とすることはできないのである。

七 稲葉黙斎『處士越復傳』

著作名	自称
『姫島講義』	又三郎
『壘篋録』	信
『三郎稿』	余、予、正信、武藏越信、黙處士
『話録』	予
『外艱節記』	黙斎
『先君子行實』	正信
『若松艸』	處士越某、若松黙斎、稲葉正信
『處士越復傳』	越復、復
『若松夜話』	復、越復、黙散人
『牛島隨筆』	余、信、不佞、黙々散人
『西遊轡録』 <small>明和 壬辰</small>	吾

しかも、『若松夜話』より前であるといっても、『處士越復傳』の成立を『若松夜話』と切り離して、たとえば二十六、七歳当時とさかのぼることはできない。それは、もちろん「1」で述べたように、『處士越復傳』が若松町における著作であると考えられるためであるが、それ以外にも次のような根拠をあげることができる。黙斎が『處士越復傳』で使っている自称「越復」あるいは「復」は、『處士越復傳』以外では『若松夜話』にだけ見られる自称であり、それは、『處士越復傳』と『若松夜話』の執筆時期がほぼ重なりと考えてもよいことを意味する。黙斎二十一歳の著作『姫島講義』から四十一歳の『西遊轡録』まで、自称が使用されている著作だけにとどまるが、どのような自称が出てくるかを表にまとめると次のようになる。著作名は『孤松全稿』に収録されている順番どおりにあげた。

右の表により、「復」あるいは「越復」が『處士越復傳』と『若松夜話』だけで用いられている自称であることがわかる。『若松夜話』に多くみられる人を食ったような話題は、『處士越復傳』の露悪趣味と一脈通ずるものがある。自称だけでなく、内容においても『處士越復傳』と『若松夜話』は共通する点があるのである。したがって、『處士越復傳』と『若松夜話』は、若松町在住当時、つまり、宝暦十年六月（黙齋二十九歳）から宝暦十三年（黙齋三十二歳）冬以前の、ほぼ同じ時期に、『處士越復傳』がやや先だつて書かれたと結論することができる。

加えて、『若松夜話』と『牛島隨筆』で「黙散人」あるいは「黙々散人」という自称が使用されていることを見落としてはならない。「散人」とは俗世間を離れた人の謂である。『若松夜話』に出てくるその呼称は、すでに『處士越復傳』が成立し、黙齋は虚構の中に死して、世に隠れ住む身となっていることを示唆している。ほどなく黙齋が牛島の幽居に移ったのは、『處士越復傳』で暗示された世に亡き者、「散人」としての在り方を全うするためであつた。

おわりに

以上、『處士越復傳』と共通する性格をもつ『若松夜話』の成立年から考えれば、『處士越復傳』の成立は宝暦十年、黙齋二十九歳から、宝暦十三年、黙齋三十二歳の冬までの間と限定することができる。また、『處士越復傳』の荒々しい筆致から、放逸な生活の中での作であると想定すれば、さらに細かく上限を設定して、父を喪ったあと、つまり宝暦十年十一月から宝暦十三年冬までの間に成立したということができる。この成立年代は、『孤松全稿』の著作の収録順と照らし合わせてみても、また黙齋の行跡にあてはめてみても、と

もに無理なく整合するのである。

引用文献

『雪梅草』、千葉県元倡寺所蔵『孤松全稿』三三卷

『西遊轡録』、同右、五卷

『先君子行實』、同右、三卷

『若松艸』、同右

『若松夜話』、同右、四卷

『牛島随筆』、同右

〔注〕

(1) 狂文の性格、及びこうした狂文が享保から宝暦・明和年間に流行したことについては中野三敏「狂文論」（早大俳諧研究会編『中村俊定先生古希記念近世文学論叢』、桜楓社、一九七〇年）参照。

(2) 確かに父を喪った年（一七六〇年）から十二年後である。

(3) 『牛島随筆』に「癸未の冬、牛島に遷居す。落髪して人事を絶つ」とある。

(4) 「『姫島講義』解題」で述べたように『姫島講義』の文中の日付（宝暦二年）が示すのは、その原型である『姫島口義』の成立年である。

(5) 梅澤芳男編著『稻葉黙斎先生と南総の道学』（ぺりかん社、一九八五年）、三四頁―四二頁。

- (6) 石井一素「小傳」(『道學雜誌』第十一号、道學協會雜誌局、一八九三年、六頁)。
- (7) 梅沢芳男「默齋先生年譜」(梅沢芳男編著『稻葉默齋先生と南総の道学』、ぺりかん社、一九八五年、五一頁)。
- (8) 梅澤氏によれば、この箇所は「迂齋の命を以て諸生をして誘導して若松町に別居す」(同右)となっている。
- (9) 『先君子行實』。
- (10) 『若松卿』。この識語によると、默齋は五月にすでに若松町に住んでいたことになる。默齋の若松町への転居の時期については『先君子行實』の記事を重んじてひとまず六月としておくが、五月であった可能性もあるという一である。
- (11) 谷倉は日本橋浜町一帯の総称である「矢ノ倉」のことと考えられる
- (12) 人文社『東京江戸切絵図』(人文社、一九九九年)、一九頁。
- (13) 年譜参照。
- (14) 石子仙とは『牛島随筆』の中の「與石子僊」という默齋の書簡の受け取り手のことであろう。
- (15) 『處士越復傳』の冒頭に「越復は武陵江東の人」とあることから、『處士越復傳』は默齋が「江東」にあった当時、つまり隅田川の東、牛島在住当時の著作ではないかという見解もあるかと思われる。しかし、その可能性は低い。なぜなら、一般に漢文で「誰それは○○の人」と述べる場合、その出生地をいうことがほとんどである。その当時の在住地をいうことは皆無といってよい。また、默齋は隅田川以東の地域を呼ぶ場合「河東」という語を用いていたと思われるふしがある。たとえば、『處士越復傳』の中に「河東横綱」とあり『處士越復傳』、十二「壬申」の文(『牛島随筆』には「河東牛島」とある(『與宇弘篤』))。「江東」の用例は『處士越復傳』に一箇所(十三「癸酉」の文)あるが、これはその場所を確定できないので参考にならない。以上により「越復は武陵江東の人」という文から、『處士越復傳』を牛島在住当時の作とすることは難しいことがわかる。

(91) 「2」の引用文参照。

○『處士越復傳』注釈

凡例

一、『道學遺書 初集卷四 孤松全稿卷之四』（道學協会、明治二十四「一八九二」年）を底本とし、以下の諸本と校合した。

神習本 無窮会神習文庫所蔵の写本。目録番号一三五・一三の『孤松全稿』四卷所収。

元倡寺本 千葉県山武市成東元倡寺所蔵の写本。『孤松全稿』四卷所収。

一、底本の段落のつけ方に従って、年ごとに原文、訓読文、語注の順で記した。校合はまとめて本編末に掲載した。

一、底本を忠実に翻印するように努めたが、読解上の便宜をはかるために次のような変更を加えた。

1 底本の小字双行の割り注は「」で括り、単行の普通字とした。

2 底本の誤字については訓読文で正字に訂正し、（ ）内に誤字を示した。また、必要によっては語注で訂正の根拠を示した。

3 底本の次の誤りは訂正して翻印した。

- ・「于」とすべき箇所を「干」としている。
- ・「已」とすべき箇所を「巳」としている。

・「尸」とすべき箇所を「尸」としている。

4 底本の傍線、豎点は省略した。

5 訓点の誤脱については補訂せず、そのまま翻印した。

6 訓読では、読解上の便宜のために人名以外は新字を用い、難解な字には必要に応じて振り仮名を加えた。また、引用文等は「―」、書名は『』で括った。

一、語注の見出しには原文の字句をあげた。

一、人名についての語注は、以下の文献を参考にした。

『日本道学淵源録』、岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編『楠本端山碩水全集』（葦書房、一九八〇

年）所収

『日本道学淵源續録』、同右

『崎門學脈系譜』、同右

一、校合については以下の方針をとった。

1 諸本に異同がない場合、「なし」と記す。

2 訓点、送り仮名については、煩瑣を避けるため校合でその異同を記すことをしない。

3 頭注、および元倡寺本の細字の書き込みは省略する。

▼

孤松全稿卷之四

默齋艸卷九

處士越復傳

越復武陵江東人父重以道學德行聞於世。仕漢津官至大夫職任說書復幼有大志。厭與鄉里兒遊欲延尊長嬉戲上。總角致客冠蓋集會性聰穎能言。驕盈幸酒常折辱人。然以才暢意弘輕財好施得貴賤心。奇謀英斷足以經濟。襲父業儒以大道自任。解經雄辨令人解頤。漢津嘗意補講官復豫稱病固拒之。復憤世儒避禍盜名流俗日降謝謹愿退怯之輩。尋勝究幽清談醉狂以終世。

孤松全稿卷之四

默齋草卷九

處士越復傳

越復は武陵江東の人。父重は道學德行を以て世に聞こゆ。漢津に仕え、官は大夫に至り職は說書に任ぜらる。復、幼にして大志有り。郷里の兒と遊ぶを厭ひ、尊長を延いて嬉戲せんと欲す。総角にして客を致し、冠蓋して集會す。性聰穎にして能く言ふ。驕盈にして、酒に幸ひして常に人を折辱す。然れども、才暢やかにして意弘く、財を輕んじ施しを好むを以て貴賤の心を得、奇謀英斷、以て經濟に足る。父を襲ひて儒を業とし、大道を以て自ら任ず。經を解けば雄弁、人をして頤を解かしむ。漢津嘗て講官を補はんと意ふ。復、予め病と稱して固く之れを拒む。復、世儒の禍を避け名を盗んで流俗日に降るを憤り、謹愿退怯の輩を謝す。勝を尋ね幽を究め、清談醉狂を以て世を終はる。

○語注

【處士越復傳】處士は出仕していない在野の人物。默齋の墓碑銘に「先生姓越智。稻葉氏。諱正信。号默齋。幼名又三郎。」とあり、「越」は姓越智に、また、「復」は幼名又三郎の「又」に由来すると考えられる。【武陵】江戸。【江東】江戸城の東ということか。林潜齋の『稻葉默齋先生傳』に「生先生於武蔵江戸城東濱町山伏井」とある。【重】稻葉迂齋（貞享元「一六八四」年・宝暦十「一七六〇」年）。「重」は迂齋の通称である。「十左衛門」に由来すると考えられる。【漢津】唐津。迂齋は正徳五（一七一五）年から唐津藩主土井利実、利延、利里の三君に仕えた。【説書】君の側に侍して経書を講説する役職。【復】自称。【延】尊長。目上の者を引き入れる。【總角】あげまき。元服前の小児の髪型。【致客】「致」は招きよせる。【冠盖】成人して冠をつける。【經濟】経世済民。【解頤】あつけにとられる。【流俗】世俗の悪いならわし。【謹愿】小ぢんまりと気概なくまとまった小心者という悪い意味で用いられている。【尋勝究幽】脱俗の世界に遊ぶ。

▼二

壬子復生

生未_レ移_レ晷揚_レ眉張_レ目視_レ四方_一。巨頭垂眼白色骨立頗有_二異相_一。三歳顚悟過_レ人。御者永喜年八十豪彊撫_二愛嬰兒_一。每_レ遇_レ復抱而弄_レ之復奪_二喜佩玉_一及_レ去_二以_二木偶_一代_レ之。復悟投_二木偶於地_一。喜驚曰此兒非_二尋常_一必致_二大名_一。既而兄哲就_レ學復見_二其不_レ勤告_レ於父_一。許_二隱微於稠人坐_一長幼惡_レ之。嘗網_レ雀不_レ獲復持_二黏竿_一期_二待屏側_一。群鳥舞而不_レ下。旁人因激曰堅子不_レ如_二燕雀之智_一邪。復嘗曰燕雀禽也吾者人也何謂_レ不_レ如。乃極_レ口辨_二人物昏明之別_一又有_レ人來言古之深_二於醫_一者割_二父屍_一探_二經絡_一語未_レ畢復勵_レ聲曰汝口稱_レ之信心焉乎。其人乃言亦志之切耳。復不_レ許曰汝出去何入_二儒素純孝門_一説_二此不祥之話_一客慙

謝。

壬子^{じんし}、復生^{ふっせい}まる。

生まれて未だ晷^きを移さず眉を揚げ、目を張りて四方を視る。巨頭垂眼、白色にして骨立ち、頗る異相有り。

三歳^{さいざい}、穎悟^{えいご}人に過ぐ。御者永喜、年八十、豪強にして嬰兒を撫愛す。復に遇ふ毎に抱きて之れを弄ぶ。復、喜の佩玉を奪ふ。去るに及び木偶^{もくく}を以て之れに代ふ。復、悟りて木偶を地に投ず。喜、驚きて曰く、「此の児尋常に非ず、必ず大名^{たいめい}を致さん」と。

既に兄哲、学に就く。復、其の勤めざるを見て父に告ぐ。隱微^{いんゐ}を稠人^{ちゆうじん}の坐に託^{たく}き、長幼之れを惡めり。嘗て雀を網して獲ず。復、黏竿^{ねんさん}を持ちて屏側に期待す。群鳥舞ひて下らず。旁人因りて激して曰く「豎子^{じゅし}、燕雀の智に如かざるや」と。復、罵^{ののし}りて曰く「燕雀は禽なり。吾は人なり。何ぞ如かずと謂はん」と。乃ち、口を極めて人物昏明の別を弁ぜり。又、人有り、来りて言ふ、「古の医に深き者は、父の屍^さを割き経絡を探る」と。語未だ畢はらざるに、復、声を励まして曰く、「汝口に之れを称し心に信ずるや」と。其の人乃ち言ふ、「亦志の切なるのみ」と。復、許さずして曰く、「汝、出で去れ。何ぞ儒素純孝の門に入りて此の不祥の話を説かんや」と。客慙^はぢて謝す。

○語注

【壬子】享保十七（一七三二）年。黙齋一歳。【晷】日ざしをはかる柱。転じて、時を指す。【御者永喜】永禁喜右衛門。迂齋の門人。唐津藩臣で馬術で名をなした。【佩玉】大帯にかけて飾りとする玉。【兄哲】迂齋

の長子、稻葉廓斎（享保九「一七二四」年—安永七「一七七八」年）。名は正直。鉄次郎と称した。【稠人】たくさんの人。【黏竿】もちざお。【豎子】こども。「豎」は豎の俗字。【儒素】儒者の平素の行い。

▼三

丁巳父重爲授二句讀一

復無二記性一數口授不レ記重因講二解文義一復頓曉レ之一日讀二小學一喜曰是吾小學一也乃抄二一二名一正信小學一。又電二覽蒙求一便效二其體一品一題父門下生二綴一短文一。

丁巳、父重、為に句讀を授く。

復、記性無く、數口授くれども記せず。重、因りて文義を講解すれば、復、頓に之れを曉る。一日、『小学』を読み喜びて曰く、「是れ吾が『小学』なり」と。乃ち、一、二を抄して『正信小学』と名づく。又、『蒙求』を電覽し、便ち其の体に效ひ父の門下生を品題として短文を綴る。

○語注

【丁巳】元文二（一七三七）年。默齋六歳。【記性】記憶力。【頓】すぐに。【蒙求】唐の李瀚編。七四六年成立。偉人の逸話とその教訓を集めている。

▼四

庚申講二解經語一詰二難疑目一

侍^ニ父講筵^ニ退講^ニ一章或半章^一。集^ニ與^レ父詰難之語^一題曰^ニ迂亭答問^一。及^ニ十一歲^一慷慨講論振^レ扇顯^ニ風采^一聽者悚動不^レ下^ニ以^ニ兒輩^一視^上。復在^ニ講座^一或耳語曰長叟謂堅子解^レ書愈^ニ時祭酒^一人以告復自若曰固其所也。復讀^レ書未^レ曉^ニ文義^一能見^ニ大意^一自^レ幼通^ニ曉於理^一而暗^ニ於事物^一長^ニ於辨說^一而短^ニ於詩章^一。過^ニ弱冠^一尚不^レ知^ニ平仄^一然間暇愛^ニ吟詩賦^一有^ニ佳趣^一。文辭雖^レ不^レ爲^レ體而有^ニ從橫之氣^一。形^ニ容古先達氣象^一如^レ畫文稿若干卷藏^レ家。

庚申、經語を講解し疑目を詰難す。

父の講筵に侍し、退いて一章、或いは半章を講ず。父と詰難の語を集め、題して『迂亭答問』と曰ふ。十一歳に及んで、慷慨講論、扇を振ひて風采を顕はす。聴く者悚動し、兒輩を以て視ず。復、講座に在るとき、或るひと耳語して曰く、「長叟謂ふ、「堅子の書を解く、時の祭酒に愈る」と」と。人以て告ぐるに、復、自若として曰く、「固より其の所なり」と。

復、書を読むや、未だ文義を曉らざるも能く大意を見る。幼より理に通曉して事物に暗く、弁説に長じて詩章に短し。弱冠を過ぎて尚ほ平仄を知らず。然れども、間暇に詩賦を愛吟し佳趣有り。文辞体を為さずといへども從横の氣有り。古先達の氣象を形容して画の如し。文稿若干卷、家に藏す。

○語注

【庚申】元文五（一七四〇）年。黙齋九歳。【悚動】おそれおののく。【耳語】耳もとでささやく。【長叟】叟は老人に対する尊称。林潛齋『稻葉黙齋先生傳』によれば、この言葉を發した老人とは長谷川觀翁（後出）である。【祭酒】大学頭の唐名。

▼五

癸亥自爲二元服禮

復志在爲人師。恐以兒童輕之。頻欲冠父不許。復怒泣涕。不食。以故父可之。未及刻。日復遽告母曰。今日吉辰。將冠母云。家嚴不在。復曰。支子固不可備禮。主言何如。此。輒親解髻。換首髮。自呼禮畢。家人不暇供酒肴。用素食饗親舊偶至者。復視饌具。喜曰。餓鬼冠禮桑門膳。及父歸。自迎摩頂大笑。雖父誠其輕卒。心實樂。自是爲父奴僕。每出從行。觀翁視而奇之。舉淵明故事。勸其意。人以爲美談。復異常情。多類此。

癸亥、自ら元服の礼を為す。

復の志は人の師爲るに在り。兒童を以て之れを輕んずることを恐れ、頻りに冠せんことを欲す。父、許さず。復、怒り泣涕して食はず。故を以て、父之れを可す。未だ日を刻するに及ばずして、復、遽かに母に告げて曰く、「今日吉辰、將に冠せんとす」と。母云ふ、「家嚴在さず」と。復曰く、「支子固より礼を備ふべからず。主言何ぞ此くの如きか」と。輒ち親ら髻を解き首髪を換え、自ら「礼畢る」と呼ぶ。家人、酒肴を供するに暇あらず。素食を用ひて、親旧の偶至る者に饗す。復、饌具を視て喜びて曰く、「鬼の冠礼は桑門の膳なり」と。父帰るに及び自ら迎へ、頂を摩でて大笑す。父、其の輕卒を誠むると雖も、心実は樂しむ。

是れより父の奴僕と爲りて、出る毎に従行す。觀翁視て之れを奇とし、淵明の故事を挙げて其の意を勉む。人以て美談と爲す。復、常情に異なること多く此れに類せり。

○語注

【癸亥】寛保三（一七四三）年。黙齋十二歳。【吉辰】吉日。【家嚴】他人に対して自分の父をいう。【支子】嫡子以外の子。【桑門】出家。【觀翁】長谷川克明。号は觀水。源右衛門と称した。松平伊豆守信輝の臣。佐藤直方の門人。【淵明故事】陶淵明（東晋の詩人、四二七年没）が幼い時から六経を愛読した事をさすか。

▼六

甲子了廟漢津源公卒復慟哭發_レ疾

公温恭有_二英氣_一寡黙能斷居動慕_二儒者_一拔_二父重_一増_二采地_一遂欲_レ委_二國政_一。復未_二嘗見_二謁公_一重夜直或及_二復事_一公因意_下待_二成長_一而甄_中收_上之復亦有_二仕進之心_一。至_レ是薨年二十二痛哭發_レ病過_二三月_一始起人以爲_二虚僞_一。

甲子、了廟漢津源公卒_し。復、慟哭して疾を發す。

公、温恭にして英氣有り、寡黙にして能く断じ、居動儒者を慕ふ。父重を抜きて采地を増し、遂に国政を委ねんと欲す。復、未だ嘗て公に見謁せず。重、夜直のとき或いは復の事に及ぶ。公、因りて成長を待ちて之れを甄_{けん}收せんと意ふ。復も亦仕進の心有り。是に至りて薨ず。年二十二。痛哭して病を發し、三月を過ぎて始めて起く。人以て虚僞と為せり。

○語注

【甲子】延享元（一七四四）年。默齋十三歳。【了廟漢津源公】唐津侯土井利延。「了廟」は利延の戒名が「諦了院殿前大倉令真誉寂照堪然大居士」であることによる。【増二采地一】『先君子行實』に「寛保三年〔癸亥〕旨有り〔五月十一日〕、特に秩祿を改め〔二百石を賜る〕、階を進む。〔此れを持簡物頭と曰ふ（後略）〕」とある。【甄收】拔擢する。

▼七

丙寅倦^レ學始通^二群不逞^一大行^二不法^一

此歳祝融怒崇南北爲^二赤土^一士族子弟多廢^レ業相集博飲。復乘^レ醉與^レ之黨自^レ此公然往^二来娼家^一白晝不^レ避。尋兄哲議婚及^二納采^一親表宴賀酒酣族人嘲^二玩復^一目^二左右^一微吟曰蛾眉新佳嫂紅顔美少叔闇寺不^二嚴守^一陳平復生^レ今。復時與^二尊長^一行^レ酒整^レ容微笑面不^レ怒心衛^レ之。明旦入^二浴室^一□^レ額若^二武夫^一出示^二言者^一云嬌々虎臣叔嫂溺不^レ以^レ手人以爲狂發。既而豪氣日競淫放愈增遂至^下會^二俳優^一自歌舞^上。隣里鄉黨指目醜議及^二父兄^一然又包^レ荒不^二責訊^一唯恐^レ傷^二恩愛^一復心耻且暮不^レ釋^レ卷故雖^二昏睡相繼^一亦有^レ開^二于心^一盖聰明之所^レ發已階^二末後進^一業基^一矣。

丙寅^{へいゐん}、學に倦み、始めて不逞に通群し、大いに不法を行ふ。

此の歳、祝融^{しゆりゆう}怒^レ崇^{すい}し、南北、赤土と爲り、士族の子弟多く業を廢し、相集まりて博飲す。復、酔ひに乗じて之れと覚し、此れより公然と娼家に往來して白昼も避けず。

尋いで兄哲の議婚、納采に及び、親表宴賀して酒酣^{たけは}のとき、族人復を嘲玩して、左右を目し微吟して曰く、「蛾眉新しき佳嫂。紅顔美しき少叔。闇寺^{こんじ}嚴守ならず。陳平復^{また}今に生く」と。復、時に尊長と酒を

行^やり、容を整へ微笑す。面怒らずして、心之れを銜^く（底本は銜）む。明且浴室に入り、額を□武夫の若^{ごと}くして出て、言者^{げんしゃ}に示して云ふ。「矯々たる虎臣叔。嫂溺るるも手を以てせず」と。人^{おも}以為へらく、狂発せりと。

既にして豪氣日に競ひ、淫放^{いんぱう}愈増し、遂に俳優と会して自ら歌舞するに至る。隣里郷党、指目・醜議し父兄に及ぶ。然れども又、荒^{こう}を包^かねて責訊せず。唯、恩愛^{おんあい}を傷^{やぶ}らんことを恐る。復、心に恥ぢ、旦暮卷^{たんぼくまき}を釈^すてず。故に昏睡相繼ぐと雖も、亦心に開くこと有り。蓋し聡明の發する所、已に末後業を進むるの基^{もと}を階^{はし}ふ。

○語注

【丙寅】延享三（一七四六）年。黙齋十五歳。【祝融】火の神。転じて火災を意味する。『武江年表』の延享三（一七四六）年丙寅に次の記事がある。「二月二十九日夜、四時前、築地本願寺脇武家方より出火して、この辺、武家方一円、南八丁堀、本八丁堀、茅場町、小網町、大坂町、堺町、葺屋町芝居両座、村松町、橘町此の辺武家方、馬喰町、浜町、同朋町、米沢町、本所小泉町、横網町、松井町、相生町、亀沢町辺武家方、浅草より小塚原まで延焼。翌朔日夕七ツ時鎮まる（浅草寺は東側の坊舎のみ未刻焼ける）。二月晦日、昼、本所靈山寺横堀より出火、大風、此の辺の寺院多く焼亡。」【赤土】まるはだかの地。【博飲】賭博をし、飲酒する。【議婚】縁談の相談。【親表】親戚。【蛾眉】蛾の触角のように細い三日月形の美しい眉。転じて美人。【叔】弟黙齋。【閹寺】宮刑に処せられ、門番をする者。【陳平】生年未詳。没年は紀元前一七八年。河南の人。漢の高祖に仕え、漢室の復興に尽くした。嫂と私通したという噂があった。『史記』世家、陳丞相世家）【銜】元倡寺本の「銜」と同じ。（校合参照）。「銜」は「銜^くむ」の俗字。【□額】□は底本では偏が周。

旁が頁。元倡寺本では口を「彫」に作り、その横に小字で「額ヲヌイタ」という書き込みがある。【矯々】武勇のさま。【虎臣】君主を護衛する武勇の臣。【嫂溺不_レ以_レ手】「嫂溺るるに援けざるは、是れ豺狼なり。男女授受するに親_レらせざるは、礼なり。嫂溺れ、之れを援くるに手を以てするは權なり」（『孟子』離婁上）。【指目】人が指さしてみる。【包_レ荒】「九二。荒を包_レね、河を馮_レるを用い、退_レきを遺_レれず、朋亡ぶれば、中行に尚_レうを得ん」（『易経』泰九二）。【釋_レ卷】書物を離さないで常に読む。

▼八

丁卯以_二父命_一負_二笈於石郊_一師_二事之_一。

下總野質夫教_二導諸生_一隱_二石郊_一。厚重有_二威望_一。沈靜言不_レ苟時謂_二之石郊先生_一。復父友五人篋崎觀翁谷倉舍人西郭田子儀仙岸野子重其一人石郊復皆加_二禮敬_一石郊最賢故師_レ之然以下其執泥拘滯爲_二姻亞_一所_レ欺復屢笑_レ之初舍人冒_二異姓_一及_二晚學成德邵_一尚不能_二歸正_一復雖_レ服_二其大度愛_レ衆含弘不_レ怒自奉豐麗不_レ蓄_レ財「復嘗言舍人執_レ政多_二間暇_一。仙岸屏居常執掌。」而罵以爲_二守錢奴_一縛_二妻孥俸錢_一猶豫故也子重峭直多質言語有_レ法不能_レ俯_二仰貴戚_一閉_レ門讀_レ書博聞強識復信_レ之然以下其白_二首章句_一而無_二經世之志_一徒守_二訓詁_一而少_中開發之樂上。題_二目漢儒末流_一子儀和平練_レ熟於事_一自_レ幼爲_二人用_一浮_二沈流俗_一言多_レ詐居動僞飾懼_二衆口_一求_二媚一世_一恭敬及_二幼賤_一能散_レ財宴_レ客調_レ窮卹_レ孤復以_二父舊_一時往訪子儀每置酒厚待復贊揚唯諾不_レ傾_レ懷談笑盡_レ醉去觀翁性溫粹和仁常懼_レ傷_レ人姿貌寬裕如_二貴人_一復愛而重_レ之然小心狹量倚_二賴人言_一無_二是非之明_一承_二代前弊_一無_二改革之剛_一以_三其君學_二徠家_一故懼_レ陷_二僞學之禁_一終身鉗舌不_レ能_レ擔_二當道學_一至_二致仕_一尚慮_二禍及_一復嘗歎曰吾固愛_二敬翁_一然亦無學之人也

丁卯、父の命を以て笈を石郊に負ひ、之れに師事す。

下総野質夫、諸生を教導して石郊に隠る。厚重にして威望有り、沈静にして言を苟にせず。時に之れを石郊先生と謂ふ。復が父の友五人、筐崎觀翁・谷倉舍人・西郭田子儀・仙岸野子重、其の一人が石郊なり。復、皆礼敬を加ふ。石郊、最も賢なる故に之れを師とす。然るに、其の執泥拘滞して姻婭に欺かるるを以て、復、屢之れを笑ふ。

初め舍人異姓を冒し、晩く学成り徳邵きに及べども、尚帰正する能はず。復、其の太度にして衆を愛し、含弘にして怒らず、自奉して豊麗、財を蓄まざるに服すと雖も、「復嘗て言ふ、「舍人は政を執りて間暇多く、仙岸は屏居して常に執掌す」と。」罵りて以て、「守銭奴にして妻孥を俸錢に縛る」と。猶予の故なり。

子重は峭直多質にして、言語法有り。貴戚に俯仰する能はず、門を閉ちて書を読む。博聞強識、復、之れを信ず。然れども、其の首章句を白して経世の志無く、徒に訓詁を守りて開發の樂しみなきを以て、漢儒の末流と題目す。

子儀は、和平にして事に練熟し、幼より人用の為に流俗に浮沈す。言に詐り多く、居動偽り飾り、衆口を懼れ、媚を一世に求む。恭敬幼賤に及び、能く財を散じ、客を宴し、窮を憐ひ、孤を卹む。復、父の旧を以て時に往訪す。子儀毎に置酒して厚待す。復、賛揚唯諾して、懷を傾けず。談笑し酔ひを尽くして去る。

觀翁は、性、穩粹和仁、常に人を傷つけんことを懼る。姿貌寛裕にして、貴人の如し。復、愛して之れを重んず。然れども、小心狹量にして人言に倚頼し、是非の明無く、前弊を承代して、改革の剛無し。其の君、徠家を学ぶを以ての故に、偽学の禁に陷ることを懼れ、終身鉗舌して道学を担当する能はず。致仕

するに至りても、尚ほ禍の及ぶを慮る^{おもはな}。復、嘗て歎じて曰く、「吾、固より翁を愛敬す。然れども亦無学の人なり」と。

○語注

【丁卯】延享四（一七四七）年。默斎十六歳。【石郊】野田剛斎の塾が本所石原町にあったため、野田剛斎を石郊先生と呼ぶことがある。【下總野質夫】野田剛斎。剛斎が住んでいた本所はもと下総の地であった。【野】は野田の野。質夫は不明。【笹崎觀翁】長谷川克明。箱崎は居所。【谷倉舍人】小野崎舍人（貞享二「一六八五」年—宝暦二「一七五二」年）。名を師由といい、初め団六と称した。佐藤直方、三宅尚斎に学び、秋田新田藩家老職をつとめた。谷倉は日本橋浜町一帯の総称である矢ノ倉のことと考えられる。舍人が仕えていた佐竹侯の中屋鋪があった。【西郭田子儀】多田東溪（元禄十五「一七〇二」年—明和元「一七六四」年）。名は維則、号は蒙斎。京都に商人の子として生まれた。三宅尚斎に学び、後に室鳩巢の門下となった。秋田藩、伊予新谷藩、館林藩などに仕えた。著書に『世本正誤』、『心遠堂雜録』、『東溪筆記』などがある。西郭とは館林藩邸のあった西丸下を指す。「田」は姓に、また「儀」は通称である儀八郎による。【仙岸野子重】元倡寺本に、「野子重」の横に小字で「野沢十九郎」という書き込みがあることから、野澤弘篤を指していることがわかる。野澤弘篤は江戸の人。はじめ菅野兼山に学び、後直方に師事した。「仙岸」は仙台河岸（大川端佐賀町通り）のことか。「野」は姓の「野澤」に、また「重」は通称の十九郎による。【姻亞】身内、縁者。【含弘】広くどのようなことにも包容する徳。【自奉】自分の衣食などに不足のないようにする。【鞅掌】仕事が多く忙しくて服装を整える暇もない状態。【妻孥】妻子。【峭直】気性がきつくて仮借しない。【漢儒】漢、唐の儒学は経書の訓詁注釈を専らとしていた。【題目】品評。【爲二人用】人用の為に。「人に用い

られて」とよむこともできる。【衆口】多くの人の評判。【孤】父の無い幼い子。【置酒】さかもりをする。【唯諾】さからわず肯定、容認する。【傾懷】思いのすべてを吐露する。【徠家】徠学派。【偽學】宋学。朱子が説く道德説を偽りだとした宋の韓侂胄かんたぐゆうの説に基づく。

▼九

己巳雪樓徒村章歸_レ附濱坊_一。復結_レ交自_レ此專勉_レ業學舍一新

章質實性急厭_下雪樓不_レ根_二持論_一好_中詩賦_上。盡棄_二其學_一而師_二濱坊_一時橘義道年十二清通爽英門下無_レ雙復與_二二人_一偽_二堂長_一鼎_二待函丈_一學勢大振正義高談輕_二蔑四方學者_一氣焰射_二一世_一然三人各主_二張所見_一同門異戸遂不_二復親_一

己巳^{きし}、雪樓が徒村章、浜坊に帰附す。復、交はりを結び、此れより専ら業を勉め、学舎一新す。

章、質実性急、雪樓の持論を根とせず詩賦を好むを厭ひ、盡く其の学を棄てて浜坊を師とす。時に橘義道、年十二、清通爽英、門下に雙ぶ無し。復、二人と堂長と為り、函丈に鼎侍す。学勢大いに振るひ、正義高談、四方の学者を輕蔑し、氣焰一世を射る。然れども、三人各所見を主張し、同門異戸遂に復親しまず。

○語注

【己巳】寛延二（一七四九）年。黙齋十八歳。【雪樓】山宮雪樓。生没年未詳。名は惟深。字は仲淵。官兵衛と称した。江戸の人。初め室鳩巢に学び、後、三宅尚斎に師事した。羽後亀田藩に儒臣として仕えた。著

書に『和韓筆談薫風編』、『日本人朝紀聞』などがある。【村章】村士玉水（享保十四「一七二九」年—安永五「一七七六」年）。名は宗章。行蔵（あるいは幸蔵）と称した。江戸の人。初め山宮雪樓に学び、後迂斎門下に入った。礼学、兵学に詳しく、門人に岡田寒泉、服部栗斎らがいる。著書に『一斎先生雅言』、『二礼儀略』などがある。【濱坊】江戸、日本橋浜町山伏井戸にあつた迂斎の学塾をいう。【橋義道】柳田求馬（元文三「一七三八」年—天明四「一七八四」年）。姓は橋、名は義道。村松樵夫と号した。初め明石宗伯と称した。江戸の人。迂斎、野田剛斎に学んだ。【清通】人柄が清くて事理に通じている。【函丈】師。

▼十

庚午漢津大會「閣老」公命「復權充」賓客給使事「復忿懣固拒既而以」父兄故「遂從」命尋遭「家禍」親裁「喪禮」此歲公循「故典」會「閣老」以謝「繼封之恩」因「縉紳大會價介乏」用權任及「遊倅」復以「例繫」籍父重承「旨命」復復怒曰我有「棟梁之具」公已不「能」用使「我折」腰肉食兒輩「慢罵不」已故老為慰勞且引「展禽」諷「其不」屑「小官」復曰我魯人之志子無「復言」然於「是意少解以」父兄嚴戒慈母憂苦「出給」事尋兄哲妻病死父母痛慟廢「食復抑」驕倅自滿之氣「溫」顔事「父母」及「葬自裁」喪禮「先」是讀「文公家禮」參考酌「時宜」人多咨謀初復大父正則教「諸子」謂汝等假令不「訪」人福「當」趨「其凶」復奉「家訓」聞「親舊訃」必走護喪人笑「其不」稱「情復雖」跌蕩不「拘然安」養耆老「撫」愛寡孤「收」人心「是以多占」美名。

庚午、漢津大いに閣老を会す。公、復に命じて權に賓客給使の事に充つ。復、忿懣して固く拒む。既にして、父兄の故を以て遂に命に従ふ。尋いで家禍に遭ひ、親ら喪礼を裁す。

此の歳、公故典に循ひ閣老を会して以て繼封の恩を謝す。縉紳大いに会し、價介用に乏しきに因りて、

権の任遊倅ゆづりに及ぶ。復、例を以て籍を繫ぐ。父重、旨を承けて復に命ず。復怒りて曰く、「我に棟梁の具有り、公已に用ふる能はず、我をして腰を肉食の兒輩に折らしめんとす」と。慢罵して已まず。故老、為に慰勞し、且つ展禽を引きて其の小官を屑いさぎよしとせざるを諷す。復曰く、「我に魯人の志あり。子復言ふこと無かれ」と。然るに是こゝに於て意少し解け、父兄の嚴戒、慈母の憂苦を以て出て事を給す。

尋いで、兄哲の妻病死す。父母痛慟して食を廢す。復、驕悍自満の氣を抑へて顔を温ぬくかにして父母に事へ、葬に及びて自ら喪礼を裁す。是れより先、『文公家礼』を読み参考す。時宜を酌む人、多く咨謀す。初め、復の大父正則、諸子に教へて謂ふ、「汝等、仮令人の福を訪おもむはずとも、當に其の凶に趨おもむくべし」と。復、家訓を奉じ、親旧の計を聞けば必ず走りて喪を護る。人、其の情に称かなはざることを笑ふ。復、跌蕩てつたうにして拘こらずと雖も、然れども耆老を安養きし寡孤くわこを撫愛して、人心を収こむ。是こゝを以て多く美名を占む。

○語注

【庚午】寛延三（一七五〇）年。黙齋十九歳。【忿懣】いきどおり、もだえる。【縉紳】身分の高い人。【賃介】賃は主人を助け賓客を案内する人。【遊倅】倅はいまだ官に仕えない息子。黙齋を指す。【使三我折二腰肉食兒輩一】厚禄の官吏に頭を下げさせる。【故老】徳のある老人。【展禽】柳下惠。春秋の魯の人。姓は展、名は獲かく。字は禽。惠は諡。『孟子』公孫丑上、また万章下に「柳下惠は、汙をく君（不善をなす君主―校合者注）を羞ぢず、小官を卑しとせず。進んで賢を隠さず、必ず其の道を以てす。」とある。【魯人】孔子。【驕悍】心おこつてあらさま。【文公家禮】朱子（朱文公）の作とされているが、仮託であるという。通礼、冠礼、婚礼、喪礼、祭礼などの項目にわたつて南宋の家庭における礼のあり方を記した書。【咨謀】といはかる。【大父正則】黙齋の祖父、鈴木正則。享保五（一七二〇）年没。五郎右衛門と称し、不休と号した。大番与力よりき鈴

木家に婿入りした。【跌蕩】物事にむとんちやくな事。【寡孤】「老いて妻無きを鰥くわんと曰ひ、老いて夫無きを寡くわと曰ひ、老いて子無きを独と曰ひ、幼くして父無きを孤と曰ふ。」『孟子』梁惠王下。

▼十一

辛未^二與同門^一品^二題人物^一爲^二月旦評^一

往^二來瀆坊^一「人無^レ貴無^レ賤爲^二所^一嘲謔」或性情或形體皆有^二稱目^一「君子深惡^レ之復論^レ人尤刻剝功罪善惡露呈不^二相蔽藏^一世之論^レ人稱^レ美遺^レ惡則復笑^二其曖昧無智^一舉^レ罪亡^レ功則復譏^二其猜忌妬疾^一如^レ復可^レ謂^二善惡分明^一復嘗言唐彦明幸子善善知^レ我餘人徒譽妄毀士爲^二知^一己者^一死^二二生眞知^一我矣蓋以下^二二氏知^一復長^一亦能探^中其惡^上也

辛未^{しんび}、同門と人物を品題して、月旦の評を爲す。

浜坊に往来する人、貴と無く賤と無く嘲謔せらる。或いは性情、或いは形体、皆称目有り。君子深く之れを惡む。復、人を論ずるに尤も刻剝、功罪善惡露呈して相蔽藏せず。世の人を論ずるや、美を称し惡を遺せば、則ち、復、其の曖昧無智を笑ひ、罪を挙げ功を亡くせば、則ち、復、其の猜忌妬疾を譏る。復の如き、善惡分明と謂ふべし。復、嘗て言ふ、「唐彦明、幸子善、善く我を知る。餘人は徒に誉め、妄りに毀る。士は己を知る者の為に死す。二生眞に我を知る。蓋し二氏、復の長を知り、亦能く其の惡を探るを以てなり」と。

○語注

【辛未】宝暦元（一七五一）年。黙斎二十歳。【月旦評】月旦とは月のついたち。後漢の許劭が従兄の許靖と毎月一日に郷里の人物に評語をつけた故事による。【唐彦明】唐崎彦明（正徳四「一七一四」年—宝暦八「一七五八」年）。名は欽、金四郎と称した。芸州竹原の人。三宅尚斎の門人であった。延享元（一七四四）年、伊勢長島藩の増山侯に儒官として登用され藩政に参与するようになったが、主君に諫言して入れられず藩を追われた。その後、江戸に住むこと三年にして帰郷し、ほどなく没した。遺稿『竹原遺稿』三巻は黙斎がまとめたものである。【幸子善】幸田子善（享保五「一七二〇」年—寛政四「一七九二」年）。名は誠之、のち精義。善太郎と称した。幕臣。野田剛斎、稻葉迂斎、永井行達に学び、佐藤直方を信奉した。著書に『幸田先生語録』、『幸田先生詩歌稿』、『幸田先生論語筆記』などがある。【士爲「知」己者「死」】士は己のねうちを見抜いて待遇してくれる人のために身命をなげうつ（『史記』刺客列伝）。

▼十二

壬申長島大守逐_レ其大夫唐彦明_一禁錮復以_二幸子善_一赴_二其難_一

彦明以_二正論_一所_レ放亡命避_二河東橫網_一復競走嘲曰兄施_二牛刀鷄肉_一嚙_二白魚_一遇_二毒_一「白魚小弱魚長島産物故及此」阿主始免師傅嚴男兒慷慨刎頸交乃抗論無_レ所_レ諱自_レ此日夜相會引_二子善_一結_二交大收_一四方諸儒之說「折_二其衷_一論_二談道體_一及_二六合之外_一彦明大喜曰老子在_レ官三餘訪_二諸子_一話及_二人間事_一未_二嘗暇_一」語_二妙道_一今脱_二塵籠_一得_二此遊_一自_二泰山之崩_一所_レ不_レ有_二子善本莊人初參_二禪緇林_一出_二入莊老_一皆究_二其趣_一尋受_二教於濱坊石郊二老_一性寬博恬暢怡々常樂沈靖神識通_レ經致_二蘊奧_一嘗愛_二詩酒_一無_二他玩好_一凝塵滿_レ席居_レ之湛如也。

壬申^{じしん}、長島大守其の大夫唐彦明を逐ひて禁錮す。復、幸子善を以て其の難に赴かしむ。

彦明正論を以て放たれ、亡命して河東横網に避く。復、競ひ走りて嘲りて曰く、「兄は牛刀を鶏肉に施し、白魚を嚙んで毒に遇ふ「白魚は小弱の魚。長島の産物故、此れに及ぶ」。阿主、始めて免る師傳^ふの厳。男兒慷慨刎頸の交はり、乃ち抗論して諱む所無し」と。此れより日夜相会し、子善を引きて交はりを結ぶ。大いに四方諸儒の説を収めて其の衷を折し、道体を論談して六合の外に及ぶ。彦明大いに喜びて曰く、「老子官に在るの三餘、諸子を訪ひ、話人間^{じんかん}の事に及ぶも、未だ嘗て妙道を語るに暇あらず。今、塵籠^{ちんろう}を脱して此の遊を得たり。泰山の崩るるより有らざる所なり」と。

子善は本莊の人。初め緇林^{しりん}に參禪し、莊老に出入して皆其の趣を究む。尋いで教へを浜坊、石郊二老に受く。性、寛博恬暢^{てんちやう}、怡々として常に樂しむ。神識を沈靖し、經に通じて蘊奥^{うんおく}に致る。嘗て詩酒を愛し、他に玩好無し。凝塵^{ぎやうじん}席に満ち之れに居りて湛如^{たんじよ}たり。

○語注

【壬申】宝曆二（一七五二）年。默齋二十一歳。【長島大守】伊勢長島藩主増山正賛^{まさよし}（在位延享四「一七四七」年—安永五「一七七六」年）。唐崎彦明は正賛の先代の藩主正武によつて儒官として招聘され、後、用人に任ぜられた。正賛にも厚遇されたが、諫言して入れられず解任された。【河東】隅田川の東側。【横網】現在の墨田区横網。【施^二牛刀鶏肉^一】「子、武城に之き、弦歌の声を聞く。夫子完爾として笑ひて曰く、鶏を割くに焉んぞ牛刀を用ひん。」（『論語』陽貨）【阿主】「阿」は親しみをあらわす接頭語。【師傳】大名の子息の教育係。【刎頸交】お互いのためには、首をはねられて死んでも悔いないほどの親しい交わり。【折^二其衷^一】折衷する。【六合】天地と東西南北。世界。【老子】自称。【三餘】勉強に用うべき三つの余暇をいう。年の

余りである冬、日の余りである夜、時の余りである雨降りの三つ。【自「泰山之崩」所「不」有】『礼記』檀弓上に「孔子蚤（と）に作（お）き、手を負ひ杖を曳きて、門に逍遙す。歌ひて曰く、「泰山は其れ頽（く）れんか。梁木は其れ壊（やぶ）れんか。哲人は其れ萎（や）まんか」と。とあり、孔子が自らの死期を予知して述べた言葉であることから、後に「泰山頽れ、梁木折る」と言えは哲人の死を意味するようになった。泰山は山東省にあり、古来天子がまつるべき山として仰ぎ尊ばれた聖山。【本莊】現在の本所。【緇林】寺院。【怡々】楽しむさま。【神識】精神、意識。【沈靖】「靖」は静と同じ。【湛如】しずかなさま。

▼十三

癸酉謝「絶學舎課會」始會「宇仲喜于横網」

濱坊學舎敦篤之士多歸「有」才氣者皆復黨一日評「兄弟」曰阿伯何不學無術一人乃應「聲」曰叔何不德無行時論頗以爲當。然以「復雄辨善探」物情「人思」待「其講筵」重亦強「之復」忿「聽徒縛」章句「無」見「解上」謝「課會」卻「慕來人」意氣慷慨自任偶見「謹厚禮律之人」指「天畫」地以嫚「之或至」裸躰出接「宇仲喜漢津人獲」罪逃「京師」爲「久順利門人」既而舌「耕於江東」性剛斷鼓「扇」一方書生「至」是與「復會」一見傾「倒心志」應接如「舊知」相共劇論切「齒腐儒陸沈之風」

癸酉、學舎の課會を謝絶し、始めて宇仲喜に横網に会す。

濱坊学舎は敦篤の士多く兄哲に帰し、才氣有る者皆復の党なり。一日兄弟を評して曰く、「阿伯何ぞ不学無術なる」と。一人乃ち声に応じて曰く、「叔何ぞ不徳無行（むかう）なる」と。時論頗る以て当れりと爲す。然れども復が雄弁善く物情を探るを以て、人其の講筵に侍せんことを思ふ。重も亦之れを強ふ。復、聴徒の

章句に縛られて見解無きを忿り、課会を謝し、慕ひ来る人を卻く。意氣慷慨、自ら任ず。偶たまに謹厚礼律の人を見れば、天を指し地をかく画して以て之れを嫚り、或いは裸体にして出接するに至る。

宇仲喜は漢津の人。罪を獲て京師に逃れ久順利の門人と為り、既にして江東に舌耕す。性剛断、一方の書生を鼓扇す。是に至りて復と会し、一見するや心志を傾倒し応接すること旧知の如し。相共に劇論して腐儒の陸沈の風を切齒す。

○語注

【癸酉】宝暦三（一七五三）年。默齋二十二歳。【宇仲喜】字井默齋（享保十「一七二五」年—天明元「一七八一」年）。名を弘篤、字を信卿、小一郎と称した。唐津藩に仕えたが、十九歳の時、侯に放逐され、京都の久米訂齋のもとで三年間学んだ。その後歌舞伎役者に弟子入りしたり、服部南郭の門に学ぶなどして崎門から一時離れるが、再び、迂齋、剛齋、多田東溪らに学び、古河藩に仕えた。著書に『論語説』、『默齋講義筆記』、『周易本義筆記』、『読思録』などがある。【阿伯】阿は親しく呼びかけるときの言葉。伯は長兄。【無行】善行が無い。転じて品行が悪い。【時論】人々の一般的な考え。【指レ天畫レ地】動作が誰はばかることなくほしいままである。【久順利】久米訂齋（元禄十二「一六九九」年—天明四「一七八四」年）。名は順利、通称断次郎。京の人。三宅尚齋の高弟。天資英敏、特に性理を論じては門人中随一であったと伝えられている。著書に『学思録』、『性命説』などがある。【切齒】激しくいきどおる。

▼十四

甲戌復自作「荀子」要二買レ妾於父一逼レ母令二投内一

復以爲連歲潛_二心書典_一而以_二空房多思_一有_レ害_二於玩索_一不_レ如擁_レ妾得_二情願_一引證百端文飾寄托父大怒對_レ案不_レ食家人戰栗無_レ不_二跼蹐_一明旦父著_レ書召_レ復示_レ之卑幼羅_二列堂下_一慈母在_二帳內_一手加_レ額復昂々出曰家翁儉束小心無_二英雄手段_一此非_二御_レ復之術_一怏々懷_二不平_一復嘗傲_レ人謂余言一出宅中服從至_レ是惡_レ復者舉以激復益忿托_レ醉行_二不法_一初一書生說買_レ妾買_二倡女_一買則一也復口雖_二折難_一心頗然_レ之復淫放幼御_二數女_一然以_二好傳_一寢席隱語於廣座_二婦女厭忌未_レ及_二兩會_一乖離不_レ心_二於復_一復亦不_レ異故復平素見_下世之戀_二々々於色_一者_レ唾而罵焉

甲戌、復、自ら笥子を作り、妾を買はんことを父に要め、母に逼りて投内せしむ。

復、以為へらく、連歲、心を書典に潜めて空房に多思するを以て玩索に害有り。妾を擁して情願を得るに如かずと。引証百端、文飾に寄托す。父、大いに怒り、案に対すも食せず。家人、戰栗して跼蹐せざる無し。明旦、父、書を著し復を召して之れを示す。卑幼堂下に羅列し、慈母帳内に在りて手を額に加ふ。復、昂々として出て曰く、「家翁、儉束小心にして英雄の手段無し。此れ復を御するの術に非ず」と。怏々として不平を懷く。復、嘗て人に傲つて謂ふ、「余が言一たび出れば、宅中服従す」と。是に至り復を惡む者、挙つて以て激す。復、益忿り、醉ひに托して不法を行ふ。

初め一書生説く、「妾を買ふも、倡女を買ふも、買ふは則ち一なり」と。復、口に折難すと雖も、心頗る之れを然りとす。復、淫放にして、幼より數女を御す。然れども、好んで寢席の隱語を広座に伝ふるを以て、婦女厭忌し、未だ兩會に及ばずして乖離し、復に心せず。復も亦異ならず。故に、復、平素世の色に恋々たる者を見れば唾して罵れり。

○語注

【甲戌】宝曆四（一七五四）年。默齋二十二歳。【空房】ひとりねの寢室。【玩索】意義をよく考え求める。
 【案】足のついた食膳。【跼蹐】きよくんせきち跼天蹐地（局天蹐地）。天が高いのに身をかがめ、地が厚いのに抜き足差し足で歩く。非常におそれてびくびくするたとえ。【快々】不満で楽しまない。【御】寢席にはべらせる。

▼十五

乙亥商_二量春秋通鑑_一始講_二靖献遺言_一尋奔_二東海_一而死

漢津_一自_二了廟薨_一老臣握_レ權絶_二言路_一君上拱黙_二百官閣_一手雖_三父重_二以_一三世久故_一無_レ所_二匡救_一復欲_下改_二革積弊_一痛_中抑宰執_上無_レ由_二於達_一於_レ是討_二論大義_一勵_二同志_一復舊好_レ讀_二四子六經_一不_レ及_二史傳筆削之旨_一至_レ是特執_二通鑑綱目_一講習又題_二靖献遺言_一曰是瞑眩方劑若人切憂_二宿痾_一突出觸_二吾毒手_一坐客或曰感慨殺_レ身易從容就_レ義則難復罵曰汝不_レ能_二感慨殺_一身何如從容就_レ義復雖_二粗卒狂獫_一至_下其振_二綱常_一任_中大義_上則老師宿儒不_三少愧_二於心_一乎此歲赴_二東海_一而不_レ知_レ所_レ之

乙亥、いづがい『春秋』『通鑑』を商量し、始めて『靖献遺言』を講ず。尋いで東海に奔りて死す。

漢津、了廟薨じてより老臣權を握り、言路を絶つ。君上拱黙し、百官手を闇く。父重三世の久故を以てすと雖も、匡救する所無し。復、積弊を改革し宰執を痛抑せんと欲すれども、達するに由無し。

是に於て、大義を討論し同志を励ます。復、旧四子六經を讀むを好み史伝筆削の旨に及ばず。是に至りて特に『通鑑綱目』を執りて講習し、又『靖献遺言』に題して曰く、「是れ瞑眩の方劑たり。若し人切に宿痾を憂ふれば、突き出して吾が毒手に触れよ」と。坐客或いは曰く、「感慨して身を殺すは易く、從容

として義に就くは則ち難し」と。復、罵りて曰く、「汝感慨して身を殺すこと能はず。何如ぞ従容として義に就かんや」と。復、粗卒^{そそつきもうづ}狂獫^{きやうけん}と雖も、其の綱常を振ひ大義を任ずるに至りては、則ち老師宿儒少しく心に愧ぢざらんや。此の歳東海に赴いて之^ゆく所を知らず。

○語注

【乙亥】宝暦五（一七五五）年。黙齋二十四歳。【春秋】魯の史官によつて書かれ、孔子が筆削したと伝えられる。紀元前四八〇年頃成立。【通鑑】『資治通鑑』。宋の司馬光著。一〇八四年成立。【商量】考えはかる。【靖獻遺言】浅見綱齋編。貞享四（一六八七）年成立。【奔^二東海^一而死】『史記』の魯仲連鄒陽列伝に齊の魯仲連の言葉として「彼（秦王―校合者注）、肆然として帝と為り、過ちて政を天下に為さば、則ち連、東海を踏みて死するあるのみ。吾これが民と為るに忍びず。」とある。【言路】君主や朝廷に意見を述べるみち。【拱黙】手を束ねて何もせずに黙っている。【三世】唐津侯三代、土井利実、利延、利里。【久故】久しい知り合い。【匡救】ただし救う。【四子】四書。【通鑑綱目】『資治通鑑綱目』。朱子撰。『資治通鑑』にもとづいて史実を倫理的に批判している。綱（本文）は朱子、目（注釈）は門人の趙師淵による。【瞑眩】葉がきつたために苦しんでめまいがする。『書経』説命上に「若し葉瞑眩せざれば、厥^その疾瘳^{やまひ}えず」とある。【感慨殺^レ身易從容就^レ義則難】「感慨して身を殺すことは易く、從容として義に就くことは難し」（『近思録』君子処事之方篇）。【粗卒】おおざっぱでかざりけがない。【狂獫】狂人。【綱常】三綱（君臣、父子、夫婦の道）と五常（仁義礼智信）。【宿儒】年たけ名望ある学者。

参考文献

・稲葉黙齋の著作

『壺簾録』、千葉県元倡寺所蔵『孤松全稿』一卷所収
『先君子行實』、同右、三卷所収

・中国思想古典

池田末利『全釈漢文大系第十一卷 尚書』（集英社、一九八〇年）
内野熊一郎『新釈漢文大系四 孟子』（明治書院、一九八〇年）
宇野精一『全釈漢文大系第二卷 孟子』（集英社、一九七三年）
井上哲次郎校訂『近思録』、『漢文大系 第二十二卷』（富山房、一九八四年）所収
高田眞治『漢詩大系第二卷 詩経下』（集英社、一九六八年）
高田眞治、後藤基巳訳『易経（上）』（岩波文庫・岩波書店、一九六九年）
吉田賢抗『新釈漢文大系八七 史記七 世家下』（明治書院、一九八二年）
湯浅幸孫『中国文明選 近思録上』（朝日新聞社、一九七二年）
湯浅幸孫『中国文明選 近思録下』（朝日新聞社、一九七四年）

・人名、伝記

林潛齋『稻葉黙齋先生傳』、池上幸二郎編著『稻葉黙齋先生傳』（一誠堂書店、一九三五年）所收

『日本道學淵源録』、岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編『楠本端山碩水全集』（葦書房、一九八

〇年）所收

『日本道學淵源續録』、同右

『崎門學脈系譜』、同右

竹林貫一『漢學者伝記集成』（名著刊行会、一九七八年）

朝倉治彦監修『江戸文人辞典 国学者 漢学者 洋学者』（東京堂出版、一九九六年）

池上幸二郎編著『稻葉黙齋先生傳』（一誠堂書店、一九三五年）

池上幸二郎『稻葉黙齋先生（一）——（完）』、『東洋文化第百三十八號』（東洋文化學會、一九三六年）

——『東洋文化第百四十一號』（東洋文化學會、一九三六年）所收

『国史大辞典』（吉川弘文館）

・藩史、市史、町史

『藩史大事典』（雄山閣）

伊藤重信『長島町誌上巻』（長島町教育委員会、一九七八年）

東金史編さん会『東金市史 史料篇三』（東金市役所、一九八〇年）

西村嘉助、渡辺則文、道重哲男編『竹原市史第一巻 概説編』（竹原市役所、一九七二年）

・地名

市古夏生、鈴木健一校訂『江戸名所図会1』（筑摩書房、一九九六年）

浜田義一郎監修『新装普及版江戸文学地名辞典』（東京堂出版、一九九七年）

・その他

加藤常賢、水上静夫『中国故事名言辞典』（角川書店、一九八一年）

金子光晴校訂『増訂武江年表1』（平凡社、一九七六年）

○『處士越復傳』校合

底本…『道学遺書 初集第一 孤松全稿卷之四』（道學協会編、一八九一年）。

神習…無窮会神習文庫所蔵の写本。目録番号一三五一三の『孤松全稿』四卷所収。

元倡…千葉県山武市成東元倡寺所蔵の写本。『孤松全稿』四卷所収。

▼一 **底本**…孤松全稿卷之四 **神習**…なし **元倡**…なし。但し、内題に「孤松全稿本編四」とある。／ **底本**…

有大志 元倡…有太志／底本…以大道 元倡…以太道 ▼二底本…揚_レ眉 元倡…楊_レ眉／底本…致_レ大
 名 元倡…致_レ太名 ▼三なし ▼四底本…講_二解經語_一 神習…講_二經語_一／底本…復在_二講座_一 元倡…
 復在_二講座_一 ▼五底本…復異_二常情_一 元倡…異_二常情_一 ▼六なし ▼七底本…復乘_レ醉 神習…乘_レ
 醉／底本…陳平復生_レ今 元倡…陳平生_レ今／底本…心術_レ之 元倡…心術_レ之／底本…□_レ額 元倡…彫_レ
 額 ▼八底本…下総野 元倡…下総埜／底本…復賛揚 元倡…復賛楊 ▼九なし ▼十底本…繫_レ籍
神習…繫_レ籍 ▼十一なし ▼十二なし ▼十三底本…禮律 神習…禮拜 ▼十四底本…對_レ案 神習…
 對_レ按 ▼十五底本…三世 神習…三三／底本…至_レ是 神習…至_レ此／底本…大義 元倡…太義

第二部 山崎闇斎学派についての資料

八 稲葉黙齋『先君子行實』

解題 長野 美香

注釈・校合 大久保 紀子

長野 美香

○『先君子行實』解題

(一) 稲葉迂齋について

『先君子行實』は、佐藤直方の高弟・稲葉迂齋正義（貞享元「一六八四」年—宝暦十「一七六〇」年）の伝記である。著者は、迂齋の次男・稲葉黙齋正信、稲葉家の系譜、迂齋の一生や藩儒としての経歴や人柄・学徳、教授のさま、著作など、彼の儒者としての一生をあますところなく伝える作品である。

迂齋は、学脈上から言えば、佐藤直方門の筆頭に位置した。師弟の交わりは、元禄十三（一七〇〇）年（迂齋十七歳）以来、享保四（一七一九）年（迂齋三十六歳）に直方が死去するまで続いた。直方は、享保元（一七一六）年の冬至の日に文をつくり（「冬至文」）、これを迂齋、野田剛齋、永井行達の三人の高弟に授け、みずからの学問を託している。三人は、直方の没後も毎年冬至の晩に集まっては「冬至文」を奉読して遺徳を偲んだという。直方はこの三人の門人を特に信頼していた。彼らもそれによく応えて直方の学問を継承し

た。また、それぞれ多くの門弟を世に送り出し、その学統は近代にまで及んだ。

迂斎は、直方の推挙によって唐津藩の儒官となった。推挙の辞として、直方は迂斎を「廉清」と評している『先君子行實』。ちなみに、直方が没したのは「冬至文」の約三年後である。逝去の前日、直方は唐津藩主土井利実へ進講していて、そこで倒れた。土井侯は直方を駕籠で送り返し、迂斎に護視を命じたという『輶藏録』増補。

ところで、迂斎は、直方と出会う以前、元禄十一（一六九八）年（迂斎十五歳）にすでに三宅尚斎にも会っている。また、その後のかわりも深い。尚斎は、忍藩・阿部家に仕えたが、藩主に直言したために宝永四（一七〇七）年五月に忍城にて繫獄された。尚斎が江戸で藩主に召し出されてそのまま幽置されることになったその日、迂斎が尚斎宅を訪れていることが多田東溪の『尚齋先生實記』に見える。「午時偶門人稲葉正義来見。舍中整齊。無有一物。怪問之。先生（尚斎…引用者注）曰。必応有告侯者而今夜召我。蓋慮我出奔。欺召之也。我豈出奔忘君者哉。因從容為正義說經義。且示出处之道者数刻。（多田東溪『尚齋先生實記・中』『日本道學淵源録』五五八頁、同様の記事は五六〇頁にも。）」

その後、宝永六（一七〇九）年二月、尚斎は繫を解かれて放逐され、京都へ下った。迂斎が最初に京都の尚斎を訪れたのは、正徳元（一七一）年（迂斎二十八歳）である。このとき尚斎の紹介で浅見綱斎にも会っている。さらにこのほかに、享保二（一七一七）年（三十四歳）、享保十八（一七三三）年（五十歳）、元文四（一七三九）年（五十六歳）の計四回、迂斎は京都で尚斎の教えを受けている。また『稻葉黙齋先生傳』には、元文元（一七三六）年（五十三歳）に、尚斎が江戸の迂斎宅を訪問したことが記されている。このように、尚斎とのかかわりもまた深いものであったといえよう。

これらの師弟関係について、黙斎の見たところ、迂斎は、学風は直方を継承したが、その行状は尚斎に似

たものであったようである。『先君子行實』に、「先生長^二於譬喻^一」とある。このような語り口は、そのうち黙齋にも継承されたものであり、彼らの学風を代表する特徴のひとつであるが、これは直方の「雄辯懸河。譬喻如^レ湧」(『先達遺事』)を踏襲するものである。また黙齋は、迂齋について尚齋に似ているとも述べている(「竊瞻^二先生愨實敦篤之状^一。殆似^三三宅翁^二」『先君子行實』)。このように「唯善會^二先師之意^一。常傳^二先師之言^一」(『先君子行實』)という学問姿勢について、迂齋はきわめて忠実であったといえる。

しかし、迂齋は直方や尚齋に比較すれば、「性和順」(『先君子行實』)であり、穏やかで淡泊とでも言うべき性格であったようである。彼は、どのようなおりにも常に規則正しく質素な生活を送り、また家族に対しても常に「欣々」としてよく語り、言葉を荒げることもなかった(『先君子行實』)。早熟でいさか過激な次男・黙齋が、十二歳で勝手に元服の儀式を執り行ってしまったおりにも、迂齋は息子の頭を撫でて大笑したと、黙齋自身のちに回顧している(『處士越復傳』)。彼の度量の寛大なさまは、諸事にわたって貫かれていたようで、これには、さしもの黙齋も感服させられたもののようである。

『先君子行實』にはこうした儒者・迂齋の姿が生き生きと描写されている。歴代藩主に重用された儒者の面目とはどのようなものであったのか、『先君子行實』は、後世にその貴重な実例を伝えている。

(二) 迂齋と唐津藩

ところで、幼少時迂齋の家は貧しかった。親族は彼に他家の養子となることを勧めたが、迂齋はそれには応じず、仕官の道を求めた。はじめ二十四歳で、若狭守戸田君(『先哲叢談』によれば「戸田氏利」、若狭守祿七千石官為大番将」(『近世文芸者伝記叢書』第三卷、ゆまに書房、一九八八年、一五頁)の食客となつたが、のち佐藤直方の推挙により、正徳五(一七一五)年、三十二歳で唐津藩・土井家藩主の伴読に任命さ

れた（月俸二十口）。迂斎の家は祖父以来土井家に仕えていたので、この人事はその縁でもあろうが、期的には、前々年（正徳三「一七一三」年）に土井利実が唐津藩を襲封したことを機に行われた人事というところになるであろう。以後、迂斎は利延、利里と三代の藩主に仕え、最終的には二百石の禄に至っている（『先君子行實』）。

儒官としての迂斎は、土井侯に「賓師之礼」を以て遇されたという。また後年、多くの大名が迂斎に対して弟子の礼を執った。このような迂斎の儒者としての名聞について、『先哲叢談』は、当時、大名家に仕える儒者でこれほどに「優遇恩禮」を受けた者は他にいないと評している（『先哲叢談』二九〇頁）。迂斎は、崎門三傑の佐藤直方筆頭門人として、闇齋オリジナルに当時もっとも近い朱子学を継承した儒者であり、いわば引っぱりだこの状態だったのである。

ところで、『先君子行實』によれば、任官後の迂斎は、藩主の参勤交代に伴って江戸と唐津とを計六回往復している。また二度は唐津へは赴かず、大坂で藩主を出迎え、随行して江戸へ戻っている。

ちなみに、享保頃、土井家の地元唐津では、三宅尚斎門下の儒者・吉武法命が仕えていた。法命は、生年が迂斎より一年先んじており、しかも迂斎死去の前年に迂斎と同じ七十七歳で没している。要するにまったく同世代の儒者であり、「在江戸。則有稲葉迂斎。在唐津。則有吉武法命。」と言われた（『日本道學淵源録・續録』七〇一頁）ように、唐津藩において迂斎と法命は同時期に藩の学問や藩政に影響力をもった人物であった。しかも、彼らの間には、単に並び称されたという関係のみでなく、なんらかの対立が存在したことが窺われるのである。この対立の表面化したできごとが、「中外頗有「異論」」とされた人事（『先君子行實』）であった。『先君子行實』は、この騒動を寛保三（一七四三）年よりも「三四年前」のこととしている。迂斎はそれ以前すでに十年ほど唐津には足を運んでおらず、問題の時期にはなにゆえか二度とも大坂に藩主を

迎えている。迂齋の、このいささか奇異な行動は、当時の国許と江戸表との対立に関係するものであったかもしれない。唐津側の記録『唐津市史』（唐津市史編纂委員会編、唐津市、一九六二年）などに引用されている史料（未見）では、迂齋は、国許に下向しないまま藩政に口出しする者として批判されているようである。『先君子行實』や迂齋自身の藩主に宛てた上書などを見ると、この騒動が、『唐津市史』の断ずるほどに単純な構図でなかったと考えられるが、しかし、少なくとも迂齋の藩政に対する影響が、遠く国許にまで及んでいたことはたしかであり、これらのこともまた、江戸中期の大名諸侯や藩政と朱子学とのかかわり、また藩儒や藩学の実像を知る上で貴重な手がかりであるといえよう。

（三）『先君子行實』の成立について

『先君子行實』には成立年が明記されていない。しかし、篠原惟秀による跋（寛政四「一七九二」年十二月）に、同書は迂齋の死後一年の後にはすでに成立していたと、黙齋自身の語っていたことが記されている。迂齋の死は宝暦十（一七六〇）年十一月であるから、宝暦十一（一七六一）年末には成立していたことになる。跋によれば、その後、同書は門人たちによつて争つて筆写され、それが黙齋門の外へも伝えられるところとなった。しかし、黙齋自身はこれを未完と考えていたため、誤写・散出を心配し、迂齋の遠忌に再読したのち、校訂を加えて後に遺すものとしたという。校訂の時期は、跋文の文面からは、惟秀が跋を付した寛政四（一七九二）年十二月の直前になされたように読める。しかし、すでにこの点からしてたしかではない。ちなみに、『先君子行實』は、その後、『孤松全稿』巻三に収められた。『孤松全稿』の編集方針は、基本的には執筆時期順に採録することにあつたと考えてよい。巻三には、『外艱劄記』・『先君子行實』・『若松艸』の順で三編が収められているが、このうち『外艱劄記』は、迂齋の喪事（外艱）にあたつて綴られた覚書で

あり、成立は迂斎没年の宝暦十（一七六〇）年である。また『若松艸』には宝暦六（一七五六）年に二編、宝暦十（一七六〇）年に一編、成立年の明らかな短文が確認できるが、同書は、折々の覚書を集めてあるため、全体としては、宝暦六（一七五六）年から宝暦十（一七六〇）年、あるいはその前後を含めた四、五年間のうちに書かれたものと考えてよいであろう。また、巻三につづく巻四には『處士越復傳』からはじまる四編が収められている。『處士越復傳』解題によれば、同書は宝暦十（一七六〇）年冬から宝暦十三（一七六三）年冬までに書かれたであろうことが推測できるといふ。各著作が同時に書き進められることはあつたであろうが、『孤松全稿』の編集方針から考えて、『先君子行實』の執筆開始が『處士越復傳』にわずかも先行すると考えることには、ある程度の妥当性がある。これが黙齋自身の著述の順をあらわしているものであるならば、父の死後間もない時期に、まずもつて父の学問の後継者としての自覚のもとに『外艱割記』を著し、つづいて父の伝記をまとめることによって父との関係に一区切りをつけたのち、狂文風の自伝『處士越復傳』を綴つて「東海に赴きて之く所を知らず」と結んだ黙齋の心境も推し量ることができるのではないだろうか。

（四）『先君子行實』の情報源

ところで、黙齋が『先君子行實』を著すにあたっては、黙齋自身の記憶や記録、また迂斎を含めた家族や学塾に出入りする者たちから直接見聞きした情報に拠つた場合もあつたであろうが、参照した文献としては迂斎自身の著作集があつた。概要は以下のとおりである。『先君子行實』末尾に、黙齋自身がほぼ同様の書名を挙げている。ここに掲載した書名は、梅澤芳男「稲葉黙齋先生」による。梅澤はこれらをまとめて『迂齋全書』の名を冠しているが、この叢書名が黙齋の門流において一般に用いられたものであるかどうかは不

明。梅澤芳男編著『稲葉黙斎先生と南総の道学』南総崎門学会、ペリかん社、一九八五年、二六頁。

迂齋文集	十卷	續集	四卷	別集	一卷
別集附録	一卷	先君子語録	一卷	卒年文稿	一卷
迂齋和書集	五卷	續和書集	五卷	雜稿	三卷
迂齋學話	二十八卷	學話附録	十六卷		

『先君子行實』末尾には「皆未脱稿」とあるので、『先君子行實』執筆の時点では、完全に整理の終わった状態ではなかったであろう。しかし、たとえば『先君子行實』には、迂斎が唐津藩主に対して行った上申の記事がたびたびあらわれるが、これらの「上書」は『迂齋文集』巻二、『續集』巻四、『別集』に収められている。同様に『先君子行實』執筆における多くの情報は、ここに掲げた迂斎の著作から得られている。

とはいえ、迂斎の著作も全体として満遍なく遺されていたものではなく、年代によつてはごく一部分が採録されているに過ぎないため、これらの情報のみから編年体で迂斎の生涯を再構成することは不可能に近く、このため年次に関しては、特に『迂齋文集』巻一冒頭所収の『稲葉家譜』が重要な役割を果たしたと考えられる。『稲葉家譜』は、稲葉家の系譜と迂斎の経歴を迂斎自身が記録したもので、『先君子行實』前半の歴史的記述において直接的な典拠になったものと考えられる。しかし、内容の詳細さにおいて、『先君子行實』は『稲葉家譜』をはるかに凌いでおり、『稲葉家譜』に欠けている記事も存在する。なにより『稲葉家譜』は、延享三（一七四六）年二月に浜町の自宅を焼失、同五月に新居が再建される記事で終わり、識語は延享四（一七四七）年七月下旬であるので、それ以後、迂斎没年までの記事は、言うまでもなく『稲葉家譜』に拠るものではない。しかし、火災のあった延享三（一七四六）年には黙斎は十五歳で、それ以前の記憶——儒者としての父・迂斎の公的な経歴についての記憶——は曖昧であったであろうことを考えれば、迂斎自身

がその年までの略歴を『稻葉家譜』として書き残したことは、黙齋にとっては幸いなことであつたといえる。

以下は、『先君子行實』と『稻葉家譜』における、延享三（一七四六）年までの年譜的記事のみの比較である。若干の記述の相違などは省いた。

①『先君子行實』のみの記事

宝永四（一七〇七）年、『火葬論』を著す。

宝永五（一七〇八）年四月、下総古河城に招かれる記事で、長谷川克明の名を挙げる。

正徳五（一七一五）年、唐津藩主の伴説に任じられ、鍛冶橋の唐津藩邸に転居する。

享保五（一七二〇）年春、土井利実が唐津に帰る。

享保九（一七二四）年春、土井利実、藩校盈科堂を造り、迂齋、その教官となる。

享保十一（一七二六）年五月、転居先を「浜町山伏井戸」とする。『稻葉家譜』は「浜町」。

享保十五（一七三〇）年、唐津藩主土井利実に上書して諫言する。

享保十六（一七三二）年、土井利実が『人物辨』を著し、迂齋、同書に略言を付す。

享保十七（一七三三）年、西国に蝗害発生、迂齋、永井行達『蟲災考』の跋文を書く。

元文元（一七三六）年、土井利延が襲封し、迂齋、家老に『幼君補佐説』を与える。

寛保元（一七四二）年二月、尚齋死去の報が迂齋のもとにもたらされる。

寛保二（一七四二）年九月、迂齋、藩主に対する講義を終えて賀文を奉る。

②『稻葉家譜』のみの記事

宝永四（一七〇七）年、迂齋の母・鈴木氏の没年月日を一月二十日とする。

享保十（一七二五）年、地名「江戸材木町」に「新右エ門町是なり」の割注。

寛保元（一七四一）年、三宅尚齋の死去の記事に、「黒谷山」と墓所の場所を記す。

③『先君子行實』と『稲葉家譜』とで内容・時期に相違のある記事

『先君子行實』…元禄十二（一六九九）年、伴部安崇と赤井直義に学ぶ。

『稲葉家譜』…元禄十二（一六九九）年に赤井直義、翌年春に伴部安崇に会う。

『先君子行實』…正徳二（一七一二）年五月、鎌倉、江ノ島、箱根に遊ぶ。

『稲葉家譜』…正徳五（一七一五）年夏、鎌倉、江ノ島、箱根に遊ぶ。

以上の点から推測されることはおおむね以下のとおりである。まず②の『稲葉家譜』にあつて『先君子行實』で取り上げられなかった記事の少ない点については、②の三つの記事のうち、後半二つは後人による注記である可能性が考えられる。また③については、前者は記述のしかたの相違にすぎないかもしれないが、また後者は『稲葉家譜』の年号が正しく、『先君子行實』は誤記と考えられる（『迂齋文集』巻九に「温泉説」があり、これはこの温泉旅行に関する一文である。日付は「正徳乙巳中夏」、正徳五「一七一五」年）。

一方、①の『先君子行實』にのみみられる記事については、以下のことが考えられる。まず、長谷川克明の名は長谷川本人からの情報などが考えられる。また、「浜町山伏井戸」は、黙齋自身が同地で生まれていることから書き加えられたものであろう。さらに著作についての記事は、黙齋の手許に原本があつたために加えられた記事であり、また、藩主とのかかわりなどに関しては、前述のように『迂齋文集』にその経緯を示す「上書」などが残されており、これらを利用したと考えられる。

しかし、以上の比較は、単に年譜の表面にあらわれてくる部分の比較である。むしろ実際には、それ以外の叙述こそが、迂齋の一生や、その人となりを生き生きと語っている部分であり、それらのほとんどが『稲葉家譜』に欠けていることは、本文を比較すれば明らかである。こうした叙述は、無論『迂齋文集』などに

拠る場合もあるが、中には迂斎生前の述懐を黙齋が記憶していたという場合もあったのではないかと考えられる。

このように、『先君子行實』は学の継承者にして孝子である黙齋にしか描くことのできない独自の視点において描かれている。その意味で、『先君子行實』は、単なる備忘的記録とは異なる、きわめて精彩ある伝となっている。また、単に迂斎というひとりの人物の歴史であるのみでなく、江戸中期の儒者の日常や旅、家族や主君や学友との交わり、学問に対する姿勢、儒者としてのありようを生き生きと描き出している点で、文化史・思想史上においても貴重なテキストであると言えるだろう。

(五) 底本、諸本について

管窺ながら、現在のところ確認されている写本は以下の三点である。

- ① 財団法人無窮会専門図書館・神習文庫蔵『孤松全稿』巻三のうち。内題「黙齋艸巻七 先君子行實」。
- ② 京都大学附属図書館蔵本。内題「迂齋先生行實」。同書は付録一卷を付す。一冊。
- ③ 新潟県新発田市立図書館蔵本。内題「先君子迂齋先生行實」。

これらのうち、新潟県の新発田市立図書館蔵本(③)は、黙齋とかかわりの深い、旧新発田藩の蔵書であることが明らかであるが、無窮会と京都大学の蔵本(①、②)については、同所に収蔵された経緯など、いまのところ不明である。

また、近代以降の活字本として以下のものがある。

- ④ 『道學遺書初集』(全二冊、道學協会編、一八九一年)所収、『孤松全稿』巻三のうち。内題「黙齋艸巻七 先君子行實」。

このほか、以下の抄録がある。

⑤岡次郎（直養）編『日本道學淵源録・續録』卷之二「迂齋先生行實略」（ただし抄録）（『稻葉迂齋先生』項のうち。（開明堂、一九三四年、六二二～六頁。『楠本端山・碩水全集』岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編、葦書房、一九八〇年、所収。）

以上の①～⑤の諸本のうち、底本として用いたのは『道學遺書初集』所収版（④）である。同書は、無窮会神智文庫蔵本（①）以下、（無窮会本）を活字化したものと考えられ、無窮会本との字句の異同はほとんどない。

ところで、現存する写本三点の性質や三点の関係性はどのようなものであろうか。（①無窮会本）との異同のもっとも大きかったものは、新発田市立図書館蔵本（③（新発田本））である。（③新発田本）は、大名家の収蔵本らしい大ぶりのくせのない書体で一字一句丹念に書写されている。しかし、同本は言い回しや語の選択、文法的な部分にまで（①無窮会本）とは異なる部分が至るところにみられる。これに対して、京都大学附属図書館蔵本（②（京大本））には、そのような異同は多くは見受けられないのであるが、ある部分では、（③新発田本）と（②京大本）とが同じ記述で、（①無窮会本）のみ異なっている場合があり、また、それよりも数は少ないが、（①無窮会本）と（③新発田本）において一致している記述が、（②京大本）では異なった記述になっている場合もある。それぞれ単なる誤記の場合もあるが、三者を比較すると、これら三本の伝播の経緯は一筋には考えられないもののように見える。それゆえ諸本伝播の問題については、『先君子行實』諸本の校合の過程で明らかにした点を列举し、参考とするに留めたい。

先に『先君子行實』成立の箇所で触れたが、『先君子行實』は、迂斎の死後一年ほどで一応の成立をみており、それがそのままのかたちで一部門外に流出している。その後、黙斎が校訂を加えて寛政四（一七九二）

年十二月に篠原惟秀が跋を付したが、要するに、改訂後の形態とは異なった本、いわば初期形の異本がそれ以前に少なくとも一種類以上はあり、さらに黙齋が案じていたように、それらは黙齋門内外で誤写を繰り返してきたのではないかと考えられる。ちなみに、〈③新発田本〉に限って、この篠原惟秀の跋を欠いている。

このことは特筆すべきことである。〈③新発田本〉が写された当時には、この跋が成立していなかった可能性があるからである。無論、跋を欠いているという点のみから、〈③新発田本〉が初期形の系列に属すると断定することはできない。しかし、跋の成立した寛政四（一七九二）年には黙齋はすでに上総に隠居後である。その二年後に江戸へ上つて新発田藩主溝口直侯に進講しているとはいえ、黙齋もすでに晩年、また長がかわりのあった好学の前藩主・溝口直養（浩軒侯）も寛政九（一七九七）年には没している。直養によって崎門の書が多く蒐集されたことを考えれば、この『先君子行實』もまた、より早い時期にすでに新発田藩に持ち込まれていた可能性はあるであろう。

さらに特筆すべきことは、〈①無窮会本〉のみが『孤松全稿』所収版であり、他が単行のかたちをとっているということである。〈①無窮会本〉は、黙齋の著作集である『孤松全稿』に採録され、正式な『先君子行實』として長く継承されてきた形態である。今回、〈①無窮会本〉を底本とする『道學遺書』を用いて注釈を行った理由はここにある。

一方、〈②京大本〉と〈③新発田本〉とでかなり踏み込んだ一致を見せている箇所において、〈②京大本〉と同じく改訂の跋をもつ〈①無窮会〉のみが異なった記述をとっている場合がある。このような箇所を検討すると、〈①無窮会本〉、つまり『孤松全稿』版には、〈②京大本〉とは違うかたちの改訂が加えられている可能性が浮上してくる。この点については後述する。

ちなみに、〈①無窮会本〉と〈③新発田本〉の記載が同じであり、〈②京大本〉にのみ相違のある箇所の、

その相違のありようには特徴がある。〈③新発田本〉が、〈①無窮会本〉との対比において、言い回しや文法的な部分にまで踏み込む相違を見せるのに対して、〈③新発田本〉と〈①無窮会本〉とが一致し、〈②京大本〉のみが異なつた表記をとる場合には、ほぼそのすべてが過失による誤記あるいは脱落とみられるのである。〈②京大本〉は相対的にみて誤記・脱落と見られる異同が多い。このような箇所、すなわち〈③新発田本〉と〈①無窮会本〉とが一致し、〈②京大本〉は誤記と見られる箇所は、要するに初期形以来表記の変わらなかつた箇所と考えることができるだろう。

またいまひとつ、それぞれの内題にも興味深い特徴がある。〈①無窮会本〉のみが『先君子行實』であり、〈③新発田本〉と〈②京大本〉は『迂齋先生行實』という内題を採っている点である。(ただし、〈③新発田本〉の外題は『先君子迂齋先生行實』である)。『迂齋先生行實』と『先君子行實』と、いずれが先行する名称であるのかを断定することはできないが、寛政四(一七九二)年跋の時点では『迂齋先生行實』の名が用いられ、『孤松全稿』において、題名を『先君子行實』に確定した可能性があるのではないだろうか。

以上、諸本の校合を概観するかぎり、〈②京大本〉が三者の中間的な位置にある写本のように見える。『先君子行實』を含む『孤松全稿』前編に収められた黙齋の著作は、黙齋江戸在住時の安永九(一七八〇)年にはすでに自身の手によつて一応はまとめられていたという(大久保紀子「『孤松全稿』について―『黙齋』との関係」)から、このときにプレ『孤松全稿』版とでもいふべき版が成立していたとすれば、それが〈②京大本〉に近い形態であつた可能性がある。ただし〈②京大本〉には寛政四(一七九二)年、つまり黙齋上総移住後の時期の跋が付されている。それゆえ、もし〈①無窮会本〉を最新版に位置づけるとするならば、黙齋は寛政四(一七九二)年に跋が付された後に、再度改訂を行ったことになる。当時の黙齋の年齢を考えればその可能性は否定できないが、校合のみから断言することは困難と言わざるを得ない。あるいはより複

雑な伝播が行われた可能性も十分に考えられるだろう。

このように現存する諸本の成立については、校合のみからでは明らかにならない点がほとんどである。その原因のひとつとして、『先君子行實』の自筆本やそれ以外の写本（改訂前後、何種類かのテキストが存在する可能性がある）が見出されていないことがあげられる。同書にかぎらず、『姫島講義』などのような特殊な事例を除いて、迂斎や黙斎の著作の多くに自筆本の現存しないこと、また現存する写本も数少ないことは、惜しまれるところである。

迂斎の生涯をたどっていくと、彼らのように江戸で活躍した学者が、大火による蔵書・著書の焼失を免れないという宿命を負っていたことに、あらためて気づかされる。このことは、彼らの自筆本、写本の少ないことの原因のすべてではないが、確実に一因ではある。そのような状況下で学問を継続し、広範な知識を維持するためには、我々の想像を絶する労苦が伴ったことであろう。迂斎最晩年には、この労苦がふたたび一夜の火災によって灰燼に帰している。迂斎はそれ以後、結局再起できずに没したが、しかし、見方を変えれば、そのような過酷な条件下にありながら、迂斎自身や、黙斎をはじめ門人たちはよく彼らの著作を守り、遺したとも言えるのである。

○『先君子行實』注釈

凡例

一、『道學遺書 初集卷三 孤松全稿卷三』（道學協會、一八九一年）の『先君子行實』を底本とし、以下の諸本と校合した。

新発田本 新発田市立図書館所蔵の写本（目録番号V09、教書186）。題簽『迂齋先生行實 全』。

京大本 京都大学図書館所蔵の写本。『迂齋先生行實』。

無窮会本 無窮会神習文庫所蔵の写本。目録番号一三五一三の『孤松全稿』三卷所収。

一、原文を年代もしくは内容によって適宜分け、訓読文と語注とを加えた。校合はまとめて本編末に掲載した。

一、原文、および語注の見出しは可能な限り旧字体を用い、訓読文は現行字体に改めた。

一、底本を忠実に翻印するように努めたが、読解上の便宜をはかるために次のような変更を加えた。

1 底本の小字双行の割り注は「」で括り、単行の普通字とした。

2 底本の次の誤りは訂正して翻印した。

・「已」あるいは「巳」とすべき箇所を「巳」としている。

・「于」とすべき箇所を「干」としている。

・「尸」とすべき箇所を「尸」としている。

3 そのほかの底本の誤字については訓読文で正字に訂正し、（ ）内に誤字を示した。また、必要によつては語注で訂正の根拠を示した。

4 訓点の誤脱については訂補せず、そのまま翻印した。

一、訓読では、難解な字に必要に応じて振り仮名を加えた。また、引用文等は「」、書名は『』で括つ

た。

一、語注の見出しには原文の字句をあげた。但し、底本に誤りがある場合は、訓読の語句をあげた。

一、校合では煩瑣を避けるために訓点、送り仮名、異体字、俗字等についての異同を記さないこととした。

☆ 注釈・校合の担当者は以下のとおり。

▼一 〃 ▼十六 大久保紀子

▼十七 〃 ▼三十一 長野美香

▼三十二 〃 ▼四十四 大久保紀子

▼一

孤松全稿卷之三

黙齋艸卷七

先君子行實

先生武藏江戸人。姓越智。「越智出」孝元帝第伊豫皇子。其後胤河野冠者權之助越智親清。伊豫越智郡河野人。而平治二年爲「伊豫刺史」。故又有「河野之族」。稻葉氏。「先生六世祖。一哲齋越智通朝者。河野四郎通信之後。而初領「美濃稻葉」。因氏焉。」名正義。「幼曰「通經」。俗稱十左衛門。幼稱「小大夫」又改二十

五郎^一。』嘗命^二其居^一謂^二迂齋^一。

先生は、武蔵江戸の人なり。姓は越智。「越智は 孝元帝の弟（原文は第）伊予皇子より出づ。其の後胤河野冠者權之助、越智親清^{ちかきよ}は、伊予越智郡河野の人にして、平治二年伊予刺史と為^なる。故に又河野の族有り。」稻葉氏。「先生六世の祖、一哲斎・越智通朝は、河野四郎通信の後にして、初め美濃稻葉を領す。因つて焉^{こゝ}れを氏とす。」名は正義。「幼に通経と曰ふ。俗称十左衛門。幼にして小大夫と称す。又、十五郎と改む。」嘗て其の居に命じて迂齋と謂ふ。

○語注

【孝元帝】第八代天皇。孝靈天皇の第二子。【伊豫皇子】孝靈天皇の第三皇子。【平治二年】一一五七年。【刺史】国守の唐名。【河野四郎通信】保元元（一一五六）年—貞応二（一二二三）年。伊予国河野氏の素地を築いた武将。源頼朝、義経の平氏討伐を助けた。一遍の祖父にあたる。

▼二

高祖直政。「稱^二但馬守^一。仕^二駿府^一。秩^一萬石。致仕號^二玄齋^一。美濃郡上城主。伊豫守義通第三子。」妣某氏。「不^レ詳^二氏族^一。」曾祖正尚。「稱^二兵庫^一。直政之第二子。養^二於山本喜兵衛^一。襲^二其家^一冒^レ姓。喜兵衛初仕^二東照宮^一。仕^二後尾張公^一。」妣某氏。「亦不^レ詳^二氏族^一。」祖正長。「稱^二山本太夫^一。兵庫第三子。仕^二下總古河城主。土井候利勝及嗣君利隆利重^一。歷^二三世^一。」妣杉山氏。「土井候之臣。杉山甚右衛門之女。」父正則。「稱^二五郎右衛門^一。正長之第二子。初與^二其兄正春^一。仕^二土井候利重^一。及^二後兄正春辭^レ仕^一。去養^二

於大番與力鈴木政重^一。襲^レ家冒^レ姓。以補^二與力^一。致仕稱^二不休^一。母鈴木氏。「即政重之女。」先生即其第三子。以^二貞享元年甲子九月十七日^一。生^三於江戸城南麻布六本木^一。「即不休宅第。」晚居^二於城東元谷倉^一。

高祖は直政「但馬守と称す。駿府に仕へ、秩^{ふち}一万石。致仕して玄斎と号す。美濃郡^{ぐしやう}上城主たり。伊予守義通の第三子」、妣は某氏「氏族を詳らかにせず」。曾祖は正尚「兵庫と称す。直政の第二子。山本喜兵衛に養はる。其の家を襲ひ姓を冒す。喜兵衛初め。東照宮に仕へ、後尾張公に仕ふ」、妣は某氏「亦氏族を詳らかにせず」。祖は正長「山本十太夫と称す。兵庫の第三子。下総古河城^{こが}主土井侯利勝及び嗣君利隆・利重に仕へ、三世を歴す」、妣は杉山氏「土井侯の臣杉山甚右衛門の女」。父は正則「五郎右衛門と称す。正長の第二子。初め其の兄正春と土井侯利重に仕ふ。後兄正春の仕を辞するに及び、去りて大番与力鈴木政重に養はれ、家を襲ひ姓を冒し、以て与力を補す。致仕して不休と称す」、母は鈴木氏「即ち政重の女」。先生即ち其の第三子なり。貞享元年甲子九月十七日を以て江戸城南麻布六本木に生まる「即ち不休の宅第^{たくてい}」。晩に城東元谷倉に居す。

○語注

【高祖】祖父の祖父。【郡上】現在の岐阜県郡上市八幡町。【妣】つれあい。【曾祖】曾祖父。【土井侯利勝】天正元（一五七三）年—正保元（一六四四）年。幼少のころから家康に仕え、秀忠の代には側近として重用され老中を務めた。続く家光の信任もあつく、初の大老職に任じられた。【利隆】土井利勝の子（元和五「一六一九」年—貞享二「一六八五」年）。【利重】利隆の子（正保四「一六四七」年—延宝元「一六七三」年）。【大番與力】与力と同心によって成る番組が十二集まって大番組という軍制組織を構成し、江戸城、大阪城、

京都二条城の勤番、及び江戸市内の非常時の警戒にあたつた。与力は八十石で、加えて八十石の合力米を扶与された。【貞享元年】一六八四年。【麻布六本木】麻布町は古く阿佐布村と称した豊島郡麻布領の総称。六本木はこの麻布町の一部で町名は松の古木が六本あつたことによる。【元谷倉】元矢野倉のことと考えられる。

▼三

先生性孝友。幼安_二父母心志_一。善給_二兄長之使令_一。郷黨稱焉。「不休致仕也。先生兄端齋祇_二役京城_一。行時先生從焉。歸路五十三驛。每_レ驛買_二產物_一。至_二或無_一。則取_二其土之砂石玲瓏者。若樹葉草花_一。輸致慰_二親意_一。不休嘗語_二佐藤先生_一曰。賤息三人不_レ爲_レ不_レ孝。而今_二爺心樂易_一者。乃季兒耳。母氏患_二乳巖_一。臥病三年。將護不_レ脱_二衣帶_一。家素貧窶。至_二衣食或不_レ能_レ給者數。先生處_二其間_一。裕如極_二色養_一。先生兄二人。女弟一人。友愛尤至。仲兄端齋。豪爽好_レ飲。慷慨講_二武事_一。與_二先生_一歡愛相深。先生年踰_二二十一_一。尚共_二大被_一同寢。會有_二適意_一談笑達_二旦_一。人以爲_二美談_一。及_二後異居_一。往來如_レ織。端齋六十而卒。先生時五十五歲矣。終不_レ異_二竹馬之情_一也。伯兄圓齋質直性急。嘗學_二武家典故之禮_一。以_二小廉曲謹_一自持。又以_レ習_二兵於山鹿氏_一。頗睥_二睨道學_一。屢々責_二先生不_レ事_二武備_一。先生因讀_二武教全書_一。以慰_二兄意_一。更不_レ論_二異同_一。亦遂得_二其懼心_一。先生齡過_二古希_一。兄尚無_レ恙。平居問訊賀壽省謁。一如_レ事_二父母_一。新羞珍味無_レ不_二月進_一。如_レ比六十春。未_レ嘗衰_一矣。先生喪_二女弟_一。哀悼廢_二寢食_一。每_二忌辰_一往拜哭。存_二間墻氏_一不_レ異_二生時_一。先生孝弟友愛畧如_レ此」

先生、性孝友、幼にして父母の心志_{しんし}を安んじ、善く兄長の使令に給す。郷黨_{こたう}焉_なれを称ふ。「不休、致仕す。

先生の兄端齋京城に祇役しやくして行く時、先生焉んれに従ふ。帰路五十三駅、駅毎に産物を買ひ、或いは無きに至れば則ち其の土の砂石玲瓏なるもの、若しくは樹葉草花を取りて、輸おくり致いたせて親の意を慰む。不休嘗て佐藤先生に語りて曰く、「賤息三人孝ならずと為さず。而して爺ちちの心をして樂易らくいせしむるは、乃ち季兒のみ」と。母氏乳巖を患ふ。病に臥ふすこと三年、將護して衣帶を脱せず。家素もとより貧窶、衣食或いは給する能はざるに至ること数しばしばなり。先生其の間に処をりて裕如として色養しきやうを極む。

先生兄二人、女弟一人。友愛尤も至る。仲兄端齋、豪爽にして飲を好み、慷慨して武事を講ず。先生と歛愛相深し。先生年二十を踰こゆるも尚ほ大被を共にして同寝せり。会意かいたいに適ふこと有れば、談笑して旦あしたに達す。人以て美談とす。後に居を異にするに及び、往来織るが如し。端齋六十にして卒す。先生時に五十五歳。終に竹馬の情に異ならざるなり。

伯兄圓齋、質直・性急、嘗て武家典故の礼を学び、小廉曲謹を以て自ら持す。又兵を山鹿氏に習ふを以て、頗る道学を睥睨へいげいし、屢々先生の武備を事とせざるを責む。先生因つて『武教全書』を読み、以て兄の意を慰む。更に異同を論ぜず。亦遂に其の懽心を得たり。先生齡古希を過ぎ、兄尚ほ恙つつがなし。平居の問訊、賀寿の省謁しやうてつ、一に父母に事ふるが如し。新羞・珍味、月に進めざる無し。此くの如くすること六十春、未だ嘗て衰へず。先生女弟を喪うしなひ、哀悼して寢食を廢す。忌辰きしん毎に往きて拝し哭す。壻氏せうしを存問すること生時に異ならず。先生の孝弟友愛、略ほ此くの如し。」

○語注

【祇役】主君に随行すること。【玲瓏】玉のように美しい。【賤息】我が子を謙遜するという語。【將護】看護。【裕如】ゆつたりとしたようす。【色養】親の顔色を見てその心を察し仕えること。【大被】被はふとん。【伯

兄圓齋】稲葉則通（寛文十「一六七〇」年—宝暦十「一七六〇」年）。国学者、兵学者。武家の典礼については小笠原流の礼法家水島ト也に学び、兵学は山鹿高基に学んだ。著書に『山鹿古先生由来記参考』『小笠原流古記録』などがある。【質直】かざりけがなく正直。【小廉曲謹】こまかい事について潔白できびしい。【武教全書】山鹿素行著。明暦二（一六五六）年成立。【新羞】すすめそなえるごちそう。【春】年月。【忌辰】命日。【壻】婿。

▼四

先生自三總角時一。聞二古昔聖賢之道不レ可レ不レ學。〔尚齋三宅先生之門人。三木信成講レ學倡二書生一。與二先生一居相近。先生十三時與レ之相見。始聞下人之不レ可レ不二以學一。而孔孟程朱之傳。在中於闡齋山崎先生上。因階下後來謁二諸君子一以成中其學上。故先生終身。稱二此人恩義之重一矣。〕以三元禄十一年一。〔戊寅。〕始見二三宅先生一。立二志於學一矣。〔時年十五。〕

先生、総角の時より古昔聖賢の道の学ばざるべからざることを聞けり。〔尚齋三宅先生の門人三木信成、学を講じ書生を倡く。先生と居相近し。先生十三の時之れと相見え、始めて人の以て学ばざるべからずして、孔孟程朱の伝への闡齋山崎先生に在ることを聞けり。因つて後來、諸君子に謁え、以て其の学を成さんことを階む。故に先生終身此の人の恩義の重きことを称す。〕元禄十一年を以て「戊寅」、始めて三宅先生に見え、志を学に立つ。〔時に年十五。〕

○語注

【三木信成】宝永四（一七〇七）年に没した。治部左衛門と称した。尚齋の門人。【元禄十一年】一六九八年。迂齋十五歳。

▼五

十二年。「己卯。」行「加冠之禮」。「二月二十八日。」從「是受」家長之命。博訪「四方之人」。「如」伴部安崇。及綱齋淺見先生之門人赤井直義。往復講磨承「其誘」。及「後先生齒卻學成」。尚辭避貴重。自「履端賀壽之禮」。至「伏臘束修之享」。終「二氏之身」。未「嘗衰」。直義周密有「威望」。學識亦醇正。至「於安崇」。雖「乃沈靖有「雅量」。而不「純」於學」。故先生辨詰不「置」。及「最後」則不「復致」數疏。惟慰勞舉「舊交」而已。然先生於「二氏」。屢稱「其存養之有「素」。非「如」後世儒生之所「學」」

十二年「己卯」、加冠の礼を行ふ「二月二十八日」。これより家長の命を受け、博く四方の人を訪ふ。「伴部安崇、及び綱齋淺見先生の門人赤井直義の如きは、往復講磨し其の誘きを承く。後に先生齒卻く学成るに及ぶも、尚ほ辞避けて貴重す。履端賀寿の礼より伏臘束修の享に至りては、二氏の身を終ふるまで未だ嘗て衰へず。直義、周密にして威望有り、学識も亦醇正なり。安崇に至りては乃ち沈靖にして雅量有りと雖も、学においては純ならず。故に先生弁詰して置かず。最後に及びて則ち復數疏を致さず、惟だ慰勞して旧交を挙ぐるのみ。然れども先生、二氏において屢、其の存養の素有りて、後世の儒生の学ぶ所の如きに非ざることを称す。」

○語注

【十二年】元禄十二（一六九九）年。迂斎十六歳。【伴部安崇】寛文七（一六六七）年—元文五（一七四〇）年。武右衛門と称し、八重垣翁と号した。幕臣。はじめ佐藤直方のもとで朱子学を学んだが、跡部良顕に垂加神道を学んでからは神道に傾倒し、直方を批判した。著書に『神道野中の清水』がある。【赤井直義】傳左衛門と称した。浅見綱斎の門人。著書に『大学筭記』がある。【履端】新年。【伏臘】盆暮れの贈答。【束修】訪問、入門の際の進物。【辨詰】よしあしを明らかにして非難する。

▼六

十三年。「庚辰。」遂謁_二佐藤先生_一師事焉。一見之間觀_二其氣貌精彩高出_二物表_一。竦然奮起。以爲傳在_二於斯_一矣。從遊一年。嘗所_レ疑_二異端百家_一。渙然心釋。藏修之暇。爲_レ人說_レ書。

十三年「庚辰」、遂に佐藤先生に謁_{まみ}えて師事す。一見の間、其の氣貌精彩の高く物表_{ぶつへう}に出づるを觀て、竦_{しやう}然として奮起す。以_{おも}へらく、伝へは斯_{こゝ}に在りと。從遊すること一年、嘗て異端百家を疑ふところ、渙然として心、釈_とく。藏修_{いとしま}の暇、人の爲に書を説く。

○語注

【十三年】元禄十三（一七〇〇）年。迂斎十七歳。【佐藤先生】佐藤直方。【出_二物表_一】尋常でない。【渙然】溶けて散る。【藏修】書を読み學問に努める。

▼七

寶永四年。「丁亥」遭_レ内艱_一。執_二心喪_一三年。「禮葬事裏」著_二火葬論_一。以_レ喻_レ俗。時年二十四。」此夏出客。「先」是以_二家貲蕩盡生計難_レ保_一。親舊勸_下家長須_中出_二支子_一贅_上。先生自_三成童見_二尚齋_一。始聞_二冒_レ姓之非_一義。而諸儒紛論信疑相半。及_下謁_二佐藤子_一扣_上之。斷然決_レ意。取_二氏族辨證_一講究。著_二養子論_一一卷。示_二同志_一。遂喻_二開家長之心_一。覲_二縷義利之實_一。以_レ輟_二出贅之謀_一。因有_二爲_レ貧進仕之意_一焉。」於若狹守戸田君。「初美濃文珠。楨元眞。嘗學_二闇齋之門_一。仕_二如納城主松平侯光重_一。以_二政事_一所_レ稱。後傳_二侯次子戸田光政_一。宰_二於茲_一。畫_二政務之要數條_一。且約君采地蕞狹。無_レ由_二於建_レ學立_レ師且邸内設_二客館_一。留_下四方諸儒遊_二歷東武_一者_上。假_二館饋食_一。以使_二君臣授_レ經講_レ學焉。爾後儒生東遊求_レ仕者。且館_レ此。先生至_レ此移_二其邸内_一。受_二三月俸_一若干。○五年戊子。夏四月。爲_二友人長谷川克明諸人_一所_レ延。遊_二下總古河城_一。留_二止旬日。爲_二講_二孟子近思錄_一。又訪_二辻道德於忍城_一。爲_二解_二大學孟子_一。數日而反焉。」

宝永四年「丁亥」、内艱に遭ひ、心喪を執ること三年。「礼葬して事を裏す。『火葬論』を著して以て俗を喻す。時に年二十四。」此の夏出でて、「是れに先んじて家貲蕩尽し、生計保ち難きを以て、親旧、家長をして須く支子を出だし贅増とすべきことを勧む。先生、成童より尚齋に見え、始めて姓を冒すことの義に非ざることを聞けり。而して諸儒紛論して信疑相半ばす。佐藤子に謁え、これを扣くに及びて、断然と意を決す。『氏族弁証』を取りて講究し、『養子論』一卷を著し、同志に示す。遂に家長の心を喻し開き、義利の実を覲縷し、以て出贅の謀を輟む。因つて貧の為に進仕の意有り。」若狹守戸田君に客たり。「初め美濃・文殊（底本は文珠）の、楨元眞、嘗て闇齋の門に学び、加（底本は如）納城主松平侯光重に仕へ、政事を以て称せらる。後に侯の次子戸田光正（底本は光政）に傳たり。茲に宰し、政務の要数条を画す。且く約せば、「君の采地蕞狹、学を建て師を立つるに由無し。且く邸内に客館を設け、四方の諸儒、東武に遊歴する者を留め、

館を假し食を饋^{おく}り、以て君臣をして經を授け學を講ぜしめん」と。爾後儒生の東遊して仕を求むる者は、且く此に館す。先生、此に至り、其の邸内に移り、月俸を受くること若干。○五年戊子夏四月、友人長谷川克明と諸人に延^{まね}かれ、下総古河城に遊び、留止すること旬日、為に『孟子』『近思錄』を講ず。又、辻道德を忍^{おし}城に訪ひ、為に『大学』『孟子』を解し、数日にして反る。」

○語注

【寶永四年】一七〇七年。迂齋二十四歳。【内艱】母親の死。【心喪】心の中で喪に服する。【火葬論】迂齋の『和書集』卷一に『火葬辨』がある。【貲】資と同じ。財産。【支子】嫡子以外の子。【贅壻】結婚して妻の家に婿入りする男性。【扣】質問する。【氏族辨證】浅見綱齋著。元禄五（一六九二）年成立の『養子辨証』を改称したもの。【養子論】迂齋の『和書集』卷一に『養子辨』がある。正徳五（一七一五）年成立。【覲縷】くわしく明らかにする。覲は覲の俗字。【若狹守戸田君】宝永四（一七〇七）年当時は、後出の戸田光政（正しくは光正）の子、若狹守光輝が当主であった。【美濃文珠】岐阜県本巣市文殊。はじめ織田氏の所領であったが、寛永十六（一六三九）年から加納藩戸田氏領となった。寛文八（一六六八）年からは、旗本文殊戸田氏知行地となる。【楨元眞】元禄四（一六九二）年夏、没した。七郎左衛門と称した。美濃の人。山崎闇齋の門人。加納藩主松平丹波守光重に仕え、後、光重の第二子、戸田光正の家宰となった。【松平侯光重】戸田丹波守光重（元和八「一六二二」年—寛文八「一六六八」年）。寛永一六（一六三九）年、播磨国明石より加納に入封（七万石）。【戸田光政】諸本により「光正」と改めた。【宰】大名の家老。【葦狭】「葦」は小さい。【學】学舎。【假】貸。【五年】宝永五（一七〇八）年。迂齋二十五歳【長谷川克明】『處士越復傳』の五の語注参照。【旬日】十日間。【辻道德】未詳。

▼八

正徳元年「辛卯。」春。從^二兄端齋^一至^二京師^一。「時尚齋教^二授於京師^一。因自^二通於綱齋^一。」見^二淺見先生^一。留止三旬。授^二聖學要領^一。「夏五月東歸。過^二伊勢山田。及駿河草深^一。時戸田君。祇^二役駿府^一。留止十日。爲^二諸生^一講^レ書。餘暇尋^二泉石之勝^一。明年五月。遊^二相模州^一。訪^二鎌倉故趾^一。徇^二江島之巖^一。又登^二箱根^一。浴^二堂嶋温泉^一。」

正徳元年「辛卯」春、兄端齋に従ひ京師に至り「時に尚齋、京師に教授す。因つて自ら綱齋に通ふ。」、淺見先生に見え、留止すること三旬、『聖學要領』を授かる。「夏五月、東へ帰り、伊勢山田及び駿河草深を過る。時に戸田君、駿府に祇役す。留止すること十日、諸生の為に書を講じ、余暇に泉石の勝を尋ぬ。明年五月、相模州に遊ぶ。鎌倉故趾を訪ひ、江島の巖を徇^{しやう}伴す。又箱根に登り、堂嶋温泉に浴す。」

○語注

【正徳元年】一七一一年。迂齋二十八歳。【勝】景色のすぐれている地。【徇伴】ぶらぶら歩く。

▼九

五年。「乙未。」入仕^二唐津侯^一。「侯諱利實。」任^二伴讀^一。「以^二大番班^一。月俸二十口。先生辭^二戸田君之館^一。遷^二居其邸内^一。時年三十二。先生之仕也。佐藤子薦^二之侯^一。子嘗語^レ人曰。此人官途不^レ歷^二胸次^一。凡百依^二某指揮^一。更不^レ問^二俸資多寡^一。雖^二抗節不^レ驚^レ人。而其心廉清也。世之汲汲經營者。其於^二出處之道^一。誰

出「此人之右。」先生在「講筵」。日陳「聖賢大學之道」。開「導君心」。又作「箴子」内上。其略言。閣下常左「右簡編」。講「磨經史」。固非有「飾」外爲「人」也。而於「是」加「意」或有「不」至。則心術之微。存亡之機。天理人欲交戰「其中」。處「己」接「物」槩與「俗」相「成」伯仲。況政事之美。黜陟之公。何又爲「萬夫之望」乎。然而以「其」博識洽聞之務。所「言」所「論」大愈「於」世俗無學之徒。故每自以爲「是」。乃直諒退而諂諛進。終至「飾」非拒「諫」之域。亦當「慮」之。侯警敏獨斷。常折「家老世臣」。而至「先生」進「言」。乃虛「己」聽納。「丁酉正月十二日。鍛冶橋之邸懼」災。權移「巢鴨別邸」。二月啓「行訪」楨元眞之子小進。於差濃文珠。尋謁「尚齋」京師「授」朱易衍義。易學啓蒙。周易本義。留止幾五旬。」

五年「乙未」、入りて唐津侯に仕へ、「侯、諱は利実」、伴読に任ず。「大番の班を以て、月俸二十口。先生、戸田君の館を辞し、居を其の邸内に遷す。時に年三十二。先生の仕ふるや、佐藤子、之れを侯に薦む。子嘗て人に語りて曰く、「此の人、官途胸次に歴ず。凡百、某が指揮に依る。更に俸資の多寡を問はず。抗節人を驚かさずと雖も、而も其の心は廉清なり。世の汲汲として経営する者、其の出処の道において、誰か此の人の右に出でん」と。」

先生、講筵に在りて、日に聖賢大学の道を陳べ、君心を開導す。又箴子を作りて、内上す。其の略に言ふ、「閣下、常に簡編を左右にし、經史を講磨す。固より外を飾り人の爲にすること有るに非ず。而して是に意を加へ、或いは至らざること有るは、則ち心術の微、存亡の機なり。天理・人欲交其の中に戦ふ。己を処し物に接すること、概ね俗と伯仲を相成す。況や政事之美、黜陟の公、何ぞ又万夫の望みたらんや。然れどもその博識洽聞の務め、言ふ所、論ずる所大いに世俗無学の徒に愈るを以て、故に毎に自らを以て是と爲す。乃ち直諒退き諂（底本は諂）諛進み、終に非を飾り諫めを拒むの域に至る。亦当に之れを慮るべし」と。

侯、警敏独断、常に家老・世臣せいしんを折く。而して先生言を進むるに至りて、乃ち己を虚にして聴き納れる。「丁酉正月二十二日、鍛冶橋の邸罹災し、権に巢鴨別邸に移る。二月啓行し、楨元真の子小進を美濃文珠（底本は差濃文珠）に訪ふ。尋いで、尚齋を京師に謁え、『朱易衍義』・『易学啓蒙』・『周易本義』を授かる。留止すること幾ほどんど五旬。」

○語注

【五年】正徳五（一七一五）年。迂齋三十二歳。【二十口】二十人扶持。【戸田君之館】戸田氏の芝三田の館。原文三一、「五月」以下の記述参照。【邸内】後出の「鍛冶橋之邸罹災」という記述から、鍛冶橋の唐津藩江戸邸内を指すと考えられる。【佐藤子】佐藤直方。【凡百】あらゆること。【抗節不驚人】抗節は節操を守る。あからさまに目立つような立派さではない。【汲汲經營者】出世することばかりを望み努める者。【箭子】上奏文。『迂齋文集』二所収の「上利實侯」と題された全文は次のとおりである。

恭白今朝適讀朱子答沈叔晦書近日又有一般學問之條竊有感焉恭惟閣下常左右簡編而講磨經史固非有務外為人意也而但於是加意或一有不至則亦不能必無此患焉耳今世讀書者不寡而只求道者盖鮮矣故雖以手不釈卷之久而於其心術之微則不自察存亡之機天理人欲交戰其中而已是以其處己接物之間槩與俗相成伯仲而不足觀者亦多矣況政事之美黜陟之公何又為萬夫之望乎然而但其博識洽聞之務而其所言所論稍有愈於世俗無學之徒也故人以稱之自以為是終至飾非拒諫之罪也又不遠矣是以直諫日退而諂諛日進陰長陽消其禍不可測矣所謂不苦無學者是其驗也此等之事閣下之明何為待臣等愚老之贅乎然但效責難陳善之美以不自知其狂妄昧死再拜謹言

【簡編】書物。【左右】かたわらにおく。【飾外】『論語』学而の「子曰く、巧言令色、鮮し仁」の朱注に次

のようにある。「其の言を好くし、其の色を善くし、飾りを外に致して、務めて以て人を悦ばせば、則ち人欲肆にして本心の徳亡ぶ。【爲^レ人】「子曰く、古の学者は己の為にし、今の学者は人の為にす。」『論語』憲問。「人の為にす」について、朱注は程子の言葉を引き「人に知られるを欲するなり」としている。【黜陟】功のない者を降職、免職にし、功のある者を登用、昇進させる。【洽聞】知識が広い。【諂諛^{たう}】「諂^{たう}」はうたがうという意味であるから、諂に訂正した。諂諛はこびへつらう。【世臣】代々仕えている家来のこと。【丁酉】享保二（一七一七）年。迂齋三十四歳。【鍛冶橋之邸罹災】『武江年表』の享保二年丁酉に「正月十二日未刻、小石川馬場沸井出某殿より出火、湯島神田護持院の莊殿、神田橋御門内鍛冶橋御門まで、諸侯の藩邸数宇、通町八丁堀築地まで、武家屋ども夥しく焼亡あり」とある。【榎小進】榎元真の子、元勝か。【差濃文珠】諸本によって「美濃文殊」に改めた。【朱易衍義】山崎闇斎編。延宝五（一六七七）年成立。【易學啓蒙】朱子著。一一八六年成立。【周易本義】朱子著。一一七七年成立。

▼十

享保三年。「戊戌。」春加恩。「増^レ俸十口。」差扈^三從侯歸^二唐津^一。「三月二十一日啓^レ行。」先生到^レ邑。退食之餘。爲^二學者^一講^二解諸經^一。聽徒大集。雖^二藩中厭^レ學之人^一。及^二一見^レ之^一。則心服尊慕。

享保三年「戊戌」春、加恩。「俸を増すこと十口。」差^ゑはして、侯の唐津に帰るに扈從せしむ。「三月二十一日行を啓く。」先生、邑^{くに}に到りて、退食之余、学ぶ者の為に諸経を講解す。聴徒、大いに集まる。藩中の学を厭ふの人と雖も、一たびこれを見るに及べば、則ち心服して尊慕す。

○語注

【享保三年】一七一八年。迂斎三十五歳。【侯】土井利実。【邑】諸侯の領地。【退食】勤先から退出して私宅に在る。

▼十一

四年「己亥。」夏。東歸。「五月十五日歸。八月十五日。佐藤先生卒。嗣子就正尚幼。先生與「同門」謀。禮葬畢。執「心喪」。自「此爲」嗣子「賑給十數年。忌辰造「其家」。拜跪奠獻。又屢展「省墳墓」。存「問寡孤」。以盡「誠意」。終「其身」不「衰」。」

四年「己亥」夏、東へ歸る。「五月十五日、歸る。八月十五日、佐藤先生卒す。嗣子就正、尚ほ幼し。先生、同門と謀りて礼葬を畢へ、心喪を執る。此れより、嗣子のために賑給すること十數年。忌辰には其の家に造り、拜跪し、奠獻す。又、屢墳墓を展省し、寡孤を存問し、以て誠意を尽くすこと、其の身を終ふるまで衰へず。」

○語注

【四年】享保四（一七一九）年。迂斎三十六歳。【佐藤先生卒】「明年己亥（中略）此歳、八月十五日、病ひを以て終はる。享年七十。門人稻葉正義、野田徳勝、永井行達、事を主り、以て江戸麻布土器町瑠璃光寺に葬る。浮屠の諡に曰く、「一貫了道居士」と。」『佐藤先生年譜略』。【嗣子就正】佐藤就正（宝永六「一七〇九」年—延享四「一七四七」年）。彦八と称し、謙斎と号した。【賑給】金品をほどこしあたる。【展省】

墓参り。【寡孤】『處士越復傳』の十の語注参照。

▼十二

五年「庚子。」秋。差遣^二唐津^一。「此歳春侯歸^二唐津^一。命^二先生秋登^レ路。先^レ是先生以^二親老^一辭^二遠役^一。至^レ是侯方勤^レ學。因委曲慰勞令^二強起^一。然先生尚以爲不^レ安。尚齋亦累留^レ行。而會^下家尊訶責。言^中君召^二吾兒^一爲^レ求^レ道。而汝若不^レ行。吾死不^レ可^レ令^三汝侍^二吾牀前^一。因不^レ辭^二其命^一。八月十九日啓^レ行」冬遭^二外艱^一。「十一月十日。家君不休卒。二十三日訃至。」執^二心喪^一三年。「有^二禪祭文^一。」

五年「庚子」秋、差^つはして唐津に遣^やる。「此の歳の春、侯、唐津に帰る。先生に秋、路を登るを命ず。是^これより先、先生、親老を以て遠役を辞す。是^こに至りて、侯、方^{まさ}に学を勤めんとして、因つて委曲慰勞し、強ひて起^たたしむ。然るに、先生、尚ほ以^{おも}て爲^なへらく、安からずと。尚齋、亦累^{しき}りに行くを留^{とど}む。而るに、会^{たまたま}家尊、訶責し、「君、吾が兒を召して、道を求めんとす。而るに、汝、若^もし行かざれば、吾死すとも汝をして吾が牀^{しょうぜん}前に侍らしむべからず」と言ふ。因つて其の命を辞せず、八月十九日、行を啓く。」冬、外艱に遭ふ。「十一月十日、家君、不休卒す。二十三日、訃至る。」心喪を執ること三年。「禪^{たん}の祭文有り。」

○語注

【五年】享保五（一七二〇）年。迂齋三十七歳。【親老】親が年をとる。【外艱】父の死。【禪】除服の祭り。父母には三年（二五箇月）の喪を終えた後、一箇月を隔てて二七箇月目に行う。【祭文】『迂齋別集^{附録}全』所収の「禪祭文」（享保壬寅「一七二二」年成立）は次のとおりである。

禪者大祥之後間一月而祭之者朱子家礼有説然予今在旅寓而府君之禪月予從于君將啓行是以慮事務忙□
遂不能成礼故竊取禪祭於日中之一説又以前年訃告之日情不如他日之故壬寅十一月廿三日聊陳白蘋以代
禪祭云爾「是不得已之事諸生勿準之」維享保壬寅十一月壬午之朔二十三日頓首恭告顯考府君不休翁之
威靈嗚呼哀哉斯想往事既再周歲今日此日訃告東來其為駭愕良不自勝一慟自失俯仰無告神魂既飄遺骸瘞
地今日追慕今又何及唯吾此身一氣尚存視之在目聽之在耳心志嗜欲不忘諸心昊天罔極茲莫酒茗聊代禪祭
英靈尚饗

▼十三

六年「辛丑。」夏。東歸。「五月。」先生以下累年任「侍講」。而無上レ所三匡救萬一自効。因託病請去不レ許。
特命「六月十五日。」進レ階。「行人此日二使番一。」會四有司促三侍講之外日供二新除之識一。先生以為求レ退。
得レ進。欲レ閑授レ劇。難二以從一命固辭。侯召三有司一數言。吾所二以留一渠者。爲下上輔二翼嗣兒一。下使中群臣
向上レ學。故置二清閑地一。養二病軀一。今嘉二其廉退一。進レ班矣。不二復與一職也。又特召二先生一委曲慰勞。
先生亦不レ得レ辭。

六年「辛丑。」夏、東へ帰る「五月」。先生、累年侍講に任じ、万一を匡救する所無きを以て自効す。因つ
て病に託して去るを請ふも、許されず。特命して「六月十五日」階を進む「行人此れを使番と曰ふ」。会
有司、侍講の外の日に新除の職（底本は識）に供へんことを促す。先生以為へらく、退くを求めて進むを得、
閑を欲して劇を授かると。以て命に従ふこと難く、固辞す。侯、有司を召して数言ふ、「吾、渠を留むる所
以の者は、上、嗣兒を輔翼し、下、群臣をして学に向かはしめんが為なり。故に清閑の地に置き、病軀を養

はしむ。今其の廉退を嘉^よして、班を進む。復職^{また}を与へず」と。又特に先生を召して委曲慰勞す。先生亦辞することを得ず。

○語注

【六年】享保六（一七二一）年。汪齋三十八歳。【累年】毎年。【自効】自分で自分の罪をあばく。【行人】使者。【使番】主人の名代として他所へ赴き伝達外交を務める者。人品が優れて、弁舌の立つ者が選任された。【有司】官吏。【除】官職につける。【劇】いそがしい。【渠】彼。【清閑】俗っぽい仕事がなくてひま。【廉退】心が清らかで遠慮がち。【班】位階。

▼十四

七年。「壬寅。」春。從^二侯于唐津^一。「三月啓行。」冬「十二月。」請^レ歸^二復本姓^一。命從^二其請^一。「先生初請^二家長^一。稱^二本姓^一六七年。後以^二兄圓齋^一其似^レ僭踰^甲。因復依^二養家之姓^一。至^レ是遂歸^二本姓^一。有^二復姓詩並序^一。」

七年「壬寅」春、侯に唐津に従ふ「三月行を啓く」。冬「十二月」、本姓に帰復せんことを請ふ。命じて、其の請ふに従ふ。「先生、初め家長に請ふて、本姓を称すること六、七年。後、兄円齋、其の僭踰^{せんぐう}に似たるを誦^{しか}るを以て、因りて復び養家の姓に依る。是に至りて遂に本姓に帰す。復姓の詩並びに序有り」。

○語注

【七年】享保七（一七二二）年。迁齋三十九歳。【本姓】稻葉氏。【養家之姓】鈴木氏。【復姓詩並序】『迁齋文集』九に「復姓文并詩」と題して復姓文のみが所収されている。次のとおりである。

予出自姓越智氏稻葉祖先美濃州稻葉人予之曾祖冒山本氏以来祖父称山本先君子復冒鈴木氏予亦幼年称鈴木山本源姓而鈴木則穗積也皆非本姓也予十四五時適聞呼他姓之非義而慨然不能自己爾後請父兄以復稻葉称之凡六七年後有少故復因父命以旧称呼鈴木今日幸蒙君命得復姓於稻葉歆喜之餘賦一絶竊宣所以復姓者云天地同根雖不二綿々譜系氣相親何称異姓為渾合今日正名言得倫享保壬寅二月

▼十五

八年「癸卯」。春「三月」。東歸。秋「八月五日」。娶二武井氏一。「同僚勝征之女。主守之妹。」冬又差遣二唐津一。「十月啓レ行。」

八年「癸卯」春「三月」、東へ帰る。秋「八月五日」、武井氏を娶めとる。「同僚勝征の女、主守の妹。」冬、又差はして唐津に遣る「十月行を啓く」。

○語注

【八年】享保八（一七二三）年。迁齋四十歳。【娶二武井氏一】黙齋による「武井婦人小伝」によれば、迁齋の妻は宝永元（一七〇四）年、十一月二十日に生まれ、宝暦六（一七五六）年、正月十三日に亡くなった。名を蘭といい、「勤敏」をもって迁齋を補佐した。精神は強健、寡欲にして度量が広く、よく人を愛したという。【勝征】未詳。【主守】未詳。

▼十六

九年「甲辰」。春。侯造_二學校_一。「侯有_二記文_一」。扁曰_二盈科堂_一。又令_二先生作_レ記。掲_二之楣間_一。後味池直好。合田敬勝。遊事管_二教授_一。先生爲_二教官_一。講_二古昔大小設_レ教之道_一。侯常親臨視_レ學。先生凡爲_レ侯論_二政治之大體_一。上述_二唐虞三代之制_一。而不_レ效_二漢唐事功之陋_一。故自_二致知誠意之地_一。置_二之齊家治國_一。本_二關雎麟趾之意_一。至_二百官萬目之備_一。是以武人俗吏以爲_二迂遠無_レ益_一於國。而至_下士君子有_二遠識_一者_上。乃信_二其言達_二政事之本_一矣。「先生每見_二藩中執_レ事者_一乃爲說_二治道_一。然以_二明道正義之趣_一。未_レ嘗及_二成敗利鈍之迹_一。嘗與_レ人間答說曰。古之賢王所_二以建_レ學立_レ師者。則將_レ使_二其民由_レ之也爾。後世不_レ惟不_二建_レ學立_レ師反爲_レ之置_レ倡家戲場_一。及酒戶宴遊之設。使_二民遂_二其不善之志_一。宜_二嚴禁_二防之_一。或曰然至_下於逆旅之街。船湊之濱。爲_レ利_二市民_一置_上之。乃無_レ害乎。曰不然。古聖王賢主。常以下_レ振_二紀綱_一正_二風俗_上爲_レ務。故姦聲亂色。妓女機巧。凡亂_二風俗_一淫_二人心_一之具。不_レ惟不_レ置_二之城營間巷_一。雖_二國外邊鄙_一而嚴禁_二防之_一者。雖_二彼奴僕皂隸。匹夫匹婦之賤_一。而莫_レ不_二以_レ人視_レ之。則其輔_レ世恤_レ民之誠。周徧豫防無_レ不至矣。然則今日願_レ治之君。雖_二教_レ民不_レ及_二於古_一。又何忍_二設_レ此以助_二民之淫_一乎。世之戶位膏粱固不_レ足論。雖_下有_レ志_二於治_一者_上。大抵不_レ出_二於富國強_レ兵之謀_一。則以_二舊章_一爲_二迂濶_一以_二近規_一爲_二捷利_一。其弊遂至_レ如此。○夏六月十六日。嗣子正直生_二於江戸_一。秋「九月。」東歸。

九年「甲辰」春、侯學校を造る。「侯に記文有り。扁に「盈科堂」と曰ふ。又先生をして記を作らしむ。之れを楣間^{びかん}に掲ぐ。後味池直好・合田敬勝遊事し、教授を管す。」先生、教官と爲りて、古昔大小の教へを設くるの道を講ず。侯、常に親^{みづか}に臨み学を視る。先生凡^{およ}そ侯の爲に政治の大体を論じ、上^{かみ}は唐虞三代之制を

述べ、而して漢唐事功の陋に效はず。故に致知・誠意の地より、之れを齊家・治国に置き、関雎麟趾の意に本づき、百官万目の備へに至る。是を以て武人俗吏以為へらく迂遠にして国に益なしと。士君子の遠識有る者に至りて、乃ち其の言の政事の本に達するを信ずるなり。「先生、毎に藩中の事を執る者に見え、乃ち為に治道を説く。然して明道正義の趣を以てし、未だ嘗て成敗利鈍の迹に及ばず。嘗て人と問答して説きて曰く、「古の賢王、学を建て師を立てる所以は、則ち將に其の民をして之れに由らしめんとするのみ。後世、惟に学を建て師を立てざるのみならず、反つて之れが為に倡家戯場、及び酒戸宴遊の設けを置くは、民をして其の不善の志を遂げしむるなり。宜しく嚴に之れを禁じ防ぐべし」と。或るひと曰く、「然れども逆旅の街、船湊の濱、市民に利する為に之れを置くに至りては、乃ち害無きか」と。曰く、「然らず。古の聖王賢主、常に紀綱を振ひ風俗を正すことを以て務めと為す。故に姦声乱色、妓女機巧、凡そ風俗を乱し人心を淫らにするの具、惟に之れを城宮閭巷に置かざるのみならず、国外辺鄙と雖も、嚴に之れを禁じ防ぐ者なり。彼の奴僕皂隸・匹夫匹婦の賤と雖も、一に人を以て之れを視ざるは莫し。則ち其の世を輔け民を恤むの誠、周徧予防至らざること無し。然れば則ち今日治を願ふの君は、民を教へて古に及ばずと雖も、又何ぞ此れを設け以て民の淫を助くるを忍ばんや。世の尸位膏梁、固より論ずるに足らず。治に志有る者と雖も、大抵国を富ませ兵を強むるの謀を出でず。則ち旧章を以て迂闊と為し、近規を以て捷利と為す。其の弊遂に此くの如きに至る」と。○夏六月十六日、嗣子正直江戸に生まる。」秋「九月」、東へ歸る。

○語注

【九年】享保九（一七二四）年。迂齋四十一歳。【侯有三記文一】土井利実の「盈科堂記」（古河歴史博物館所蔵）は次のとおりである。

孟子曰流水之為物也不盈科不行君子之志於道不成章不達是乃予所以名斯堂者也夫教也者本於秉彝之性非是有難知難行之事燦然於日用之間矣如彼觀水之瀾則知其源之有本矣人雖以性之善然不能學以擴充之則終不能成德達材也猶家有千金之玉而委之衢路然即鼓之舞之輔之翼之者予之所不辭也因竊效古庠序之万一而設此小堂立師令之以講學於此焉予豈售譽於他邦乎正慾使我臣者我民者孜孜自勉盈科成章以全其固有之性也然是止示教學之大綱耳若夫切磋琢磨之功則在汝曹之力也不以漸無能至勿忘勿躐等享保甲辰姑洗下句記

【令二先生作レ記】『迂齋文集』九所収の「盈科堂記」は次のとおりである。

國有倉廩所以養民鄉有庠序所以教人一則養此生一則喻此道二者彈拳而后生養遂倫理明古昔聖王憂民之至治亦可以馴致也我君嘗注意於此既有年今茲享保甲辰之春於肥之前州唐津城宮一字名以盈科堂欲使人日學此堂以各有所矜式焉其意不亦美乎愚適扈從於此邑以故友明彊文以記竊不勝我君之美意敢忘固陋輒應其需抑學之方則始乎三皇五帝中乎孔曾思孟終暨濂洛閩關其闡明詳密廣大悉備蓋無復餘蘊矣夫我邦古昔上非無學校之設下非無青箱之學而只未嘗聞得其聖賢道脉之要者也邇年山崎敬義先生負特立之才以明程朱之書以倡明道學其有功於世也非俗儒之所能彷彿矣今誦其詩讀其書可以槩見俊傑之不可強焉耳然則今為學者亦當要知其路脉以不惑乎所從也故入此堂者純信正學痛排俗學不馳記問不滯寡陋真知實踐不助不忘循々漸進遜志時敏隆師親友講習討論相觀而善邇事遠事君薰口透徹優柔厭飫以成其德器則誠可謂善學者也如不然徒弄文辭而厭涵養或徑趨省約而廢博攷則終無造人材而大非我君建此堂之本旨也因又愚竊有為此堂慮者冀我君益貴德而尊士其教本於躬行心得之餘長宦有司則將順其美以贊襄之其授者則正己以誘掖諸生其學者則溫恭自虛相與進勵如此則宜不悖於先王設庠序之意焉且假令我君遷邑於他邦亦後之為君者後為宰者冀念之哉因書揭之堂上云享保甲辰春三月

【扁】門戸にかけるふだ。【盈科】「流水の物たるや、科に盈たざれば行かず。君子の道に志すや、章を成さざれば達せず。」（『孟子』尽心上）。【梲】長押、らんま。【味池直好】味池修居（元禄二「一六八九」年—延享二「一七四五」年）。儀平と称した。播磨竹原の人。はじめ岩崎氏を冒した。三宅尚斎の姉の孫。尚斎の門人であるが、直方及び綱斎にも学んだ。一時唐津藩に仕えた。著書に『南狩録』がある。【合田敬勝】合田忠蔵のことか。合田忠蔵は迂斎の門人で唐津藩儒。【唐虞三代】堯（陶唐氏）、舜（有虞氏）と夏・殷・周の三代。【致知誠意】「古の明德を天下に明らかにせんと欲する者は、先づ其の国を治む。其の国を治めんと欲する者は、先づ其の家を斉ふ。其の家を斉へんと欲する者は、先づ其の身を脩む。その身を脩めんと欲する者は、先づ其の心を正しくす。其の心を正しくせんと欲する者は、先づ其の意を誠にす。其の意を誠にせんと欲する者は、先づ其の知を致す。知を致すは物に格るに在り。」（『大学』）。【地】したじ。【齊家治國】『大学』、前出。【關雎麟趾之意】治者の徳によって子孫、宗族がみな善に化すことをいう。關雎は『詩経』周南の詩の編名。麟趾は『詩経』の詩「麟之趾」による。【遠識】すぐれた見識。【成敗】成功と失敗。【利鈍】つこうよくいくといかない。【逆旅】宿屋。【閭巷】村里。【皂隸】めしつかい。【匹夫匹婦】庶人、低い身分の夫婦。【周徧】徧は遍の本字。【尸位】人がかたしろになつて神のまつられる場所につくように、何もしないで地位にだけついている。【膏粱】あぶらづいた肉と米の飯。また、それを食べている富貴な者。【舊章】むかしの規則、制度。【迂濶】迂濶と同じ。【正直】稲葉廓斎（享保九「一七二四」年—安永七「一七七八」年）。黙斎の兄。鉄次郎と称した。

▼十七

（▼一く▼十六 注釈・校合 大久保紀子）

十年。「乙巳」。稱_レ病再請_レ去。「侯待_二先生_一禮接未_二嘗衰_一矣。而任_二獨斷_一。抑_二老臣_一至_三黜_二陟諸士_一。亦數失_レ倫。又少惑_二於神佛_一。稍有_二倦_レ學之意_一。先生以爲雖_三比年以來_二在_二侍講_一。無_下一輔_二導主德_一。新_中作府政上。爲_二講官_一。亦不_レ有_二群臣子弟學成_レ業。此吾所_レ學未_レ至_レ動_レ人。若留_二於此_一不_レ去。則此知_レ進而不_レ知_レ退。汲汲急_レ仕者之所_レ爲。上辱_二先師_一。下謬_二此身_一。因稱_レ病請_レ去。」不_レ許。「先生上書請_レ去。家老進_レ侯。侯勃然失_レ色曰。渠非_二求_レ利自私者_一。吾無似不_レ能_二進_レ學新_二臣民_一。渠求_レ去非_二吾家美事_一。卿等爲_レ吾慰_二喻渠_一。會有_二家老言_レ渠前年求_レ去受_二特恩_一。今復爲_レ請。此輕_二我君_一也。以從_中其請上者_甲。侯曰。卿等何識_レ渠吾善知_二渠心事_一。吾每_三一思_二渠請_レ去。憤々腐_レ心。家老因召_二先生_一。委曲慰勞。至_二於言_一侯懷_二憂思_一甚此後去一字勿_レ復言_甲先生感_二侯誠心_一。後不_二復請_一。」尋有_レ命。營_二居於本邸外_一。廣會_二同門友生_一。以免_二繫羈_一。秋出遷焉。「九月遷_二材木町_一。十一年丙午五月。卜_二居濱町山伏井_一」

十年「乙巳」、病と称して再び去ることを請ふ。「侯の先生を待する、礼接未だ嘗て衰へず。而れども独断に任じ、老臣を抑へ諸士を黜陟するに至りては、亦数倫を失ふ。又少しく神仏に惑はされ、稍学に倦むの意有り。先生以爲へらく、比年以来、侍講に在りと雖も、一も主徳を輔導し、府政を新たに作ることに無し。講官と爲りても、亦群臣・子弟、学びて業を成すもの有らず。此れ、吾が学ぶ所未だ人を動かすに至らず。若し此に留まりて去らざれば、則ち此れ、進むを知りて退くを知らず。汲汲として仕へを急ぐ者の爲す所上、先師を辱め、下、此の身を謬る。因りて病と称して去らんことを請ふ。」許されず。「先生、上書して去ることを請ふ。家老、侯に進む。侯、勃然として色を失ひて曰く、「渠、利を求めて自ら私する者に非ず。吾、無似にして学を進め臣民を新たにすること能はず。渠の去ることを求むるは、吾が家の美事に非ず。卿等、吾が爲に渠を慰喻せよ」と。会家老に「渠、前年去ることを求めて特恩を受く。今復た請ふことを為

すは、此れ我が君を軽んずるなり。以て其の請ふに従はん」と言ふ者有り。侯曰く、「卿等、何ぞ渠を識らん。吾、善く渠の心事を知る。吾、一たび渠の去らんことを請ふを思ふ毎に、憤憤として心を腐む^{いた}」と。家老因つて先生を召して委曲慰勞し、「侯の憂思を懷くこと甚だし。此の後、去の一字を復た言ふこと勿れ」と言ふに至る。先生、侯の誠心を感じ、後復た請はず。」尋いで命有り。居を本邸の外に営み、広く同門友生に会し、以て繫羈^{けいき}を免る。秋、出でて遷る^{うつ}。「九月、材木町に遷る。十一年丙午五月、居を浜町山伏井にトす。」

○語注

【十年】享保十（一七二五）年、迂齋四十二歳。【侯】唐津藩主・土井利実（元禄三「一六九〇」年—元文元「一七三六」年）。正徳三（一七一三）年—元文元（一七三六）年、在位。【黜陟】功のない者を斥け、功のある者を登用・昇進させること。【比年】近年。【無似】賢人に似ていないこと。愚か。自分を謙遜している言葉。【卿等】諸君。【腐心】心をいためる。心をかきみだす。【友生】弟子、門下生。自らの門下生に対する称。【繫羈】束縛すること。【材木町】『稻葉家譜』『迂齋文集』卷一（所収）には「材木町」に「新右エ門町是也」の割注がある。「新右エ門町」は本材木町にあり、現在の中央区日本橋二丁目、日本橋高島屋のあたりを指すが、浜町近くには新材木町（現・日本橋堀留町付近）もある。【十一年】享保十一（一七二六）年、迂齋四十三歳。【濱町山伏井】浜町山伏井戸。現在の中央区浜町、明治座のあたり。井戸は浜町西寄りにあった。なお迂齋死没の年にあった大火の後、同地に細井平洲が私塾・嚶鳴館を移している。

十三年「戊申」春。差遣^二唐津^一。「三月啓^レ行。」冬「十月。」東歸。侯連歲召^二先生^一。講筵之外。夜直或設^二酒醴^一。論^二時事^一談^二世說^一。響合膝前。及^三政事有^二評論^一。屏^二左右^一密謀。或延^二寢奧禁密之所^一諮問。先生每從容誘掖。或激勵矯^レ弊。

十三年「戊申」春、差はして唐津に遣る。「三月、行を啓く。」冬「十月」、東へ帰る。侯、連歲先生を召す。講筵の外に夜直し、或いは酒醴を設け、時事を論じ、世説を談じ、響合膝前す。政事に評論有るに及びては、左右を屏^{しりぞ}けて密謀し、或いは寢奧禁密の所に延^ひきて諮問す。先生毎に從容として誘掖し、或いは激勵して弊を矯^たむ。

○語注

【十三年】享保十三（一七二八）年、迂齋四十五歳。【連歲】毎年。【講筵】講義をする席。【酒醴】酒と甘酒。【世説】世間のうわさ。【膝前】夢中になつて自然に膝が進むこと。【從容】ゆつたりとして落ち着いたさま。【誘掖】導き助けること。

▼十九

會^二侯一時自悔^一過。先生因上書「十五年庚戌。」言。閣下爲^レ學多年。引^レ儒好^レ問。一無^二挾^一貴自是之意^一。臣竊每稱譽不^レ置也。而又唯所^二以不^一能無^レ恨^二其間^一者。則閣下好^レ善惡^レ惡。恐有^下分毫幾微未^レ純未^レ剛。未^レ慊^二於心^一者^上焉。以^レ故乎學非^レ不^レ講。諫非^レ不^レ納。而未^レ至^二於在^レ家無^レ怨。在^レ邦無^レ怨之效^一。乃似^下民望或未^レ伸。政綱或不^上振。此臣漆室嫠婦之憂。所^二以不^一忘^二於心肝^一。而又常背^二閣下誤恩眷賜之重^一。

不_レ報_二萬一_一。羞愧無_レ所_レ惜_レ身也。閣下今奮然作_二自警銘一_一云。勝_レ私室_一欲_レ。言路不_レ壅。兼聽廣納。臣恭拜三復。不_二以不_レ將_二順其美一_一。蓋唐虞三代之君。納_レ諫詢謀。其高明正大。實照_二萬世一_一。而德澤餘韻固不_レ可_二勝言一_一。至_二夫漢唐英主一_一。亦其治功。固不_レ可_レ誣矣。如下世之主。不_レ知_レ學不_レ好_レ古。狃_二滯近規一_一。拘_二習見聞一_一。取_二笑後世一_一者_上。置而不_レ論矣。而其或能好_レ學納_レ諫。亦尚陽納陰拒。時納時拒。燕間螻蟻心術隱微。與_二外廷聲聞一_一。相背馳。要_レ之五十步百步。何望。伏惟閣下固不_レ有_二此之患一_一。而大堤蟻穴之微。江河涓々之漸。其亦可_レ忽哉「十二月五日上。」

会、侯、一時自ら過ちを悔ゆ。先生因つて上書して「十五年庚戌」言ふ、「閣下、学を為すこと多年、儒を引き問ふを好み、一も貴を挟み自らはとずるの意無し。臣窃かに毎に称誉して置かざるなり。而れども又唯其の間に恨み無き能はざる所以の者は、則ち閣下、善を好み惡を惡むこと、恐らくは分毫幾微、未だ純ならず、未だ剛ならず、未だ心に慊らざる者有るなり。故を以てか、学は講ぜざるに非ず、諫めは納れざるに非ず、而れども未だ家に在りては怨み無く、邦に在りては怨み無きの効に至らず。乃ち民望或いは未だ伸びず、政綱或いは振はざるに似たり。此れは臣の漆室嫠婦の憂ひ、心肝に忘れざる所以にして、而して又常に閣下の誤恩・眷賜の重きに背き、万一も報ひざるは、羞愧して身を措く所無きなり。閣下、今奮然として自警の銘を作りて云く、「私に勝ち欲を望ぎ、言路を壅がず、兼ねて聴き広く納れよ」と。臣、恭拝すること三復、以て其の美に将順せざるなし。蓋し唐虞三代之君、諫めを納れ詢謀す。その高明正大、実に万世を照らして、徳沢の余韻、固より勝_あげて言ふべからず。夫の漢唐の英主に至りて、亦其の治功は固より誣_しふべからず。世の人主、学を知らず古を好まず、近規に狃_じ滯し、見聞に拘習し、笑ひを後世に取る者の如きは、置きて論ぜず。而れども其の或いは能く学を好み諫めを納るるも、亦尚ほ陽に納れ陰に拒み、時に納れ時に

拒み、燕間くわんかん蟻あひの心術隱微にして、外廷の声聞と相背馳す。之れを要するに五十歩百歩にして、何ぞ望まんや。伏して惟おもふ、閣下、固よりこの患ひ有らず。而れども大堤蟻穴の微、江河涓涓けんけんの漸、其れ亦忽ゆるがせにすべけんや」と。「十二月五日上る。」

○語注

【十五年】享保十五（一七三〇）年、迂齋四十七歳。【上書】「上利實侯」（享保庚戌十二月十五日）『迂齋文集』卷二所収。【引】招く。【挾貴】身分の貴いことを鼻にかけて誇る。【漆室嫠婦之憂】嫠はやもめ。ここでの「漆室嫠婦之憂」は臣下が藩主やその治世を憂える心を指す。『蒙求』『漆室憂葵』による。「古列女伝に、魯の漆室邑の女、時を過ぎていまだ人に適かず。穆公ぼくこうの時に当たり、君老い太子幼し。女、柱に倚よりて嘯うそく。隣婦曰く、「何ぞ嘯くことの悲しき。子嫁がんと欲するか」と。女曰く、「吾、豈に嫁がざる為に悲しまんや。吾は魯の君老いて太子の幼きを憂ふるなり」と。隣婦笑ひて曰く、「此れ魯の大夫の憂ひなり。婦人何ぞ與あつらんや」と。女曰く、「然らず。昔、晋の客吾が家に舍やどり、馬を園中に繋ぐ。馬佚いして馳せ走り、吾が葵きを踐み、我をして終歳葵を食らはしざらしむ。（また）隣女、人に奔はり随ひて亡にぐ。其の家、吾が兄を倩やとひ行きて之れを追はしむ。霖りんに逢ひ、水出で溺死し、吾をして終身兄無からしむ。吾聞く、『河潤九里、漸洳三百歩』と。夫れ魯国患うれひ有らば、君臣父子皆其の辱しめを被り、禍衆庶に及ばん。婦人独り安んぞ逃る所あらんや」と。居ること三年にして魯果して内乱あり、斉楚之を攻め、連しりに寇有り。男子は戦闘し、婦人は転輸して息いふことを得ざりき。」とある。（『新釈漢文大系 59・蒙求（下）』早川光三郎、明治書院、一九七三年）【誤恩】御恩の誤りか。「誤恩」の語は『迂齋文集』卷二「上利實侯」（享保庚戌十二月十五日）にも見られる。黙齋がここで「誤恩」と表記したのは『迂齋文集』に做ったものと考えられる。諸本もすべ

て「誤恩」。**【眷賜】**眷はかえりみる、目をかける。**【兼聽】**ひろく、分け隔てなく人の意見を聞く。「兼聽齊明、則天下帰之」(『荀子』君道)**【將順】**行い従う。助け従う。**【詢謀】**問いはかる。相談する。**【近規】**享保九年割注の「近規」は「旧章」(昔の法令、規則、制度)の対概念。**【狂滯】**狂はなれる。滯はとどこおる。**【燕間】**休息しているとき。**【螻蟻】**退き隠れること。**【外廷】**表向きの政治の場。**【聲聞】**世間の評判。**【五十歩百歩】**学を知らず、古を好まない「世の人主」と比較し、諫言に対する態度に裏表があつて「燕間螻蟻」における心のありようと「外廷」における名声とが背馳するようではないということ。**【大堤蟻穴之微】**わずかな油断が大きな失敗につながるたとえ。「千丈之堤、以蟻蟻之穴潰」(『韓非子』喻老)**【江河】**揚子江と黄河。転じて大河。**【涓涓】**水が細く流れるさま。「涓涓不壅、終爲江河」(『孔子家語』觀周)**【十二月五日上】**『迂齋文集』卷二所収「上利實侯」の日付から、定本の日付は誤写と考えられる。新発田本・京都大学本は「十二月十五日上」。

▼二十

十六年。「辛未」會^マ侯用^レ人有^二過差^一。因著^二人物辨^一訂^二先生^一。先生對簡略言。君子難^レ進。而小人易^マ進。彼進此退。陰陽消長之象。直諒得^レ黜。姦巧得^レ陟。蓋有^二爲^レ之者^一。人主墜^二其術^一。懵不^二自知^一。古今歷々。

十六年「辛亥(原文・未)」、会^{たふ}侯、人を用ひて過差有り。因りて『人物弁』を著し、先生に訂す。先生、対割・略言す。「君子は進み難くして、小人は退き難し(原文・易^レ進)」。彼は進み此れは退くは、陰陽消長の象なり。直諒は黜^えを得、姦巧は陟^あを得。蓋し之れを為す者有らば、人主其の術に墜ち、懵^{くら}くして自ら知ら

ざること古今歴歷たり」と。

○語注

【十六年】享保十六（一七三一）年、迂齋四十八歳。【辛未】享保十六年の干支は、正しくは辛亥。【過差】あやまち。【人物辨】藩主利実が著し、迂齋に校訂を求めたもの。人物の弁。『迂齋文集』卷二「上利實侯」（享保辛亥四月廿二日）、および「追副」。【対筭】筭は臣下が君主に差し出す奏文。【君子難進。而小人易進。】「小人易進」の「易進」は「難退」の誤りであり、新発田本が正しい。なお『迂齋文集』卷二「上利實侯」（享保辛亥四月廿二日）の原文は「君子難進而小人難退是以直諒常得黜姦巧反得陟人主憐墜其術而不自知者古今歴々」。【陰陽消長之象】陰陽二氣が衰え榮える現象。【直諒】まこと。【黜】官位を下げる。【陟】官位をすすむこと。【其術】「姦巧」を為す者の術。

▼二十一

十七年。「壬子」。西國蝗。先生累作「筭子」。言「勤荒政」賑「飢民」。減「饌息」上「宴」。【此歳跋】永井行達蟲災考。冬十一月十三日。次子正信生。○十八年癸丑。春三月。與「佐藤就正」。及上總學生數輩。謁「尚齊」于京師。聽「其講」大學。先生亦說「鞭策錄」留止殆三旬。尋迎「侯參觀於大阪」。從「駕」六月六日東歸。其十日世子出雲守卒。諱利武。先生嘗授「經」。至「是命」先生護「喪事」。

十七年「壬子」、西國に蝗あり。先生、累ねて飭子を作り、荒政を勤めて飢民に賑し、饌を減らして宴を息めんことを言ふ。【此の歳、永井行達の『虫災考』に跋す。冬十一月十三日、次子正信生まる。○十八年

癸丑春三月、佐藤就正、及び上総の学生数輩と尚齋（原文・斉）を京師に謁し、其の『大学』を講ずるを聴く。先生、亦『鞭策録』を説く。留止すること殆ど三旬、尋いで侯の参勤を大阪に迎へ、駕に従ひて六月六日東へ帰る。其の十日、世子出雲守卒す。諱は利武。先生、嘗て経を授く。是に至りて先生に喪事を護るを命ず。）

○語注

【十七年】享保十七（一七三二）年、迂齋四十九歳。【西國蝗】いわゆる享保の飢饉。享保十七（一七三二）年は、前年の冬以来の氣候不順によつて、夏頃に伊勢・近江以西に大規模な「蝗蟲」の発生をみた。当時の被害については諸説あるが、一説には餓死者一万二千人とされる。これに対して幕府は、被害のなかつた中部以東の諸藩の米を西国に急送するとともに、幕府自身も多量の救援米を送り、また被災地の大名には、その石高に応じて恩貸金を与えた。この飢饉は一年で収拾を見たが、翌年、江戸では最初の打ちこわしが起きた。これは、西国に救援米を送つたことにより江戸の米価相場が急騰したことに端を発している。この年、唐津領内にも蝗害が発生し、唐津藩は飢飯米支給を理由に幕府へ拝借金を願ひ出ている。【先生累作「筭子」】『迂齋文集』卷二「劄子」（享保壬子八月十三日）。「享保壬子之秋九州並有「蝗災」是盖天之所爲而人主所當「自脩省」也伏惟吾侯憂「民恤」下之誠盖不「可」勝言「矣因敢言於「此時」也人主當減「饌息」宴以發「政施」仁也群臣等則當「自儉自約以守」上之令「矣不」然則豈無「乃不」畏「天者乎因謹考「春秋胡氏傳」以獻」之八月十三日稻葉正義謹識」【荒政】飢饉など凶年に人民を救う政策。【永井行達】永井隠求。行達は諱。佐藤直方の門人、江戸の人。元禄二（一六八九）年—元文五（一七四〇）年。『日本道學淵源録・續録』六二七頁）【蟲災考】永井隠求『蟲災考』。迂齋の跋文（後述）によれば、この年の虫害に「慨然」とした行達が編集

した書。国立国会図書館白井文庫蔵。【跋永井行達蟲災考】「記蟲災考後」享保壬子冬。『迂齋文集』卷三所収。【正信】黙斎。【十八年】享保十八（一七三三）年、迂齋五十歳。【佐藤就正】既出。佐藤直方の子。迂齋門人。【上總學生數輩】迂齋の門人に、のちに上総道学を興す「上総八子」があつた（『姫島講義』参照）。このうちの何名かを指すものか。【聽其講大學】『稻葉家譜』『迂齋文集』卷一所収）は「聽大學章句」。【鞭策録】佐藤直方『講學鞭策録』『稻葉家譜』『迂齋文集』卷一所収）によれば、迂齋は諸生の要請と佐藤直方の命によつて講義を行つた。【三旬】三十日。【世子出雲守】土井利武。【迎侯參觀於大阪】『稻葉家譜』『迂齋文集』卷一所収）によれば、迂齋は大坂の藩邸で、江戸に向かう藩主・利実を迎えた。【護喪】葬儀一切を取り仕切ること。【護喪】「以子弟知禮能幹者爲之。凡喪事皆稟之。」（『家礼』）

▼二十二

元文元年。「丙辰」冬「十一月二十四日。」侯卒。先生哀悼如喪父母。親歛禮葬。制令之外。執心喪。嗣侯「諱利延。」繼封。侯幼未親政。政出家老。先生著幼君輔佐說。與家老。又會家老議毀祠堂。從衆俗。先生謁家老。極言其非。知其不可。以理喻。乃言先侯始建祠堂。不_三必遠師古時習_二異邦所_レ爲。因以紅葉山大廟爲證。家老遂輟毀議。「時堀正知傳侯嗜學慕古人言行」。性剛斷苟不_レ投俗論。輔翼侯令就學。多所匡救。故先生屢稱其功最大。」

元文元年「丙辰」冬「十一月十四日」、侯卒す。先生、哀悼すること父母を喪ふが如し。親ら歛めて礼葬し、制令の外に心喪を執る。嗣侯「諱は利延」、封を継ぐ。侯、幼にして未だ政を親らせず。政、家老より出づ。先生『幼君輔佐説』を著して、家老に与ふ。又会、家老、祠堂を毀ち、衆俗に従ふことを議す。先

生、家老に謁^{まみ}え、其の非を極言す。其の理を以て諭すべからざるを知り、乃ち先侯始めて祠堂を建つるに、必ずしも遠く古を師とし、時に異邦の為す所に習はざるを言ひ、因つて紅葉山大廟を以て証と為す。家老、遂に毀議を輟^やむ。「時に堀正知、侯に傳^ふたり。学を嗜み古人の言行を慕ふ。性、剛断にして苟^{いやしく}も俗論に投ぜず、侯を輔翼し学に就かしめ、匡救する所多し。故に先生屢^{しばしば}其の功を最も大なりと称す。」

○語注

【元文元年】一七三六年、迂齋五十三歳。【侯卒】土井利実没。享年四十九。浅草・誓願寺に埋葬された。【制令之外。執^ニ心喪^一】。制令は、制度と法令、法度。心喪は、喪服をつけず、心の中で喪に服すること。弟子が師の喪に服すること（『礼記』檀弓）。迂齋が藩主の喪に服するに際して、本来は師の喪に服する仕方である心喪の形式をとったことが「制令之外」ということか。【利延】土井利延。没した土井利実の養子・利清の子。母は利実の妹なので、利実にとっては実質上は甥にあたる。享保八（一七二三）年—延享一（一七四四）年。【幼君輔佐説】『幼君補佐之心得』。安永九年版、安政二年版などの版本も残されている。近代以降にも『日本教育文庫・家訓編』（同文館編輯局編、同文館、一九一〇年）に採録され、また同書を底本とした『幼君補佐の心得』が、東洋文庫二八五『子育ての書1』（山住正己他編注、平凡社、一九七六年）に収められている。【祠堂】先祖の霊をまつた所。【紅葉山大廟】紅葉山東照宮。元和四（一六一八）年、幕府により江戸城内に創祀された。明治維新後廃絶。【堀正知】堀九兵衛。迂齋門人『崎門學脈系譜』四六五頁。『唐津市史』によれば、堀家は家老職で五百石。【傳】守り役。

二年「丁巳。」春。任「伴讀」。自「是夙夜侍」左右。授「句讀」曉「文義」。循々開導薰「陶德性」。每「進講」。別謄「抄古人言行尤切」龜鑑者。更爲「注脚」内上。侯温粹穎悟。專信「先生」。又能會「人言意趣」。故先生每「退食」。欣然稱譽。「嘗語」人曰。爲「侯進」言如「以」石投「水」。而其室「私欲於末」萌。無「不」密矣。其防「邪說於未」聞。無「不」嚴矣。先生皆豫焉。

二年「丁巳」春、伴読に任ず。是れより夙夜左右に侍り、句読を受け、文義を曉かにし、循循として開導し、徳性を薰陶す。進講する毎に、別に古人の言行、尤も亀鑑に切なる者を謄抄し、更に注脚を爲して内上す。侯、温粹穎悟、専ら先生を信じ、又能く人言の意趣を会す。故に先生退食する毎に欣然として称譽す。「嘗て人に語りて曰く、「侯の為に言を進むること、石を以て水に投ずるが如し」と。」而かも其の私欲を未だ萌さざるに窒くこと密ならざる無く、其の邪説を未だ聞かざるに防ぐこと嚴ならざる無し。先生、皆豫ぶ。

○語注

【二年「丁巳」】元文二（一七三七）年、迂齋五十四歳。【伴讀】大名の子弟の読書の相手役。【夙夜】朝早くから夜遅くまで。【龜鑑】手本。【退食】官吏が退出して家へ帰ること。【如「以」石投「水」】言葉が聞き入れられることの喩え。「張良は黄石の符を受け、三略の説を誦し、以て羣雄に遊ぶ。其の言ふや、水を以て石に投ずるが如し。之れを受くる莫きなり。其の漢祖に遭ふに及び、其の言ふや、石を以て水に投ずるが如し。之れに逆らふ莫きなり。」（『文選』運命論、『全釈漢文大系三二・文選（文章編）七』小尾郊一・全釈漢文大系刊行会編、集英社、一九七六年）

▼二十四

「三年戊午。秋七月五日。遭^二兄端齋喪^一。執^二心喪^一。○四年己未三月謁^二尚齋于京師^一。聽^三其講^二中庸鬼神章^一。先生亦講^二中庸序及首章^一。四月迎^二侯參觀於大阪^一。從^レ駕五月東歸。○六年辛酉。正月二十九日。三宅先生卒^二于京師^一。二月訃至。先生爲執^二心喪^一。」

「三年戊午、秋七月五日、兄端齋の喪に遭ふ。心喪を執る。○四年己未三月、尚齋を京師に謁し、其の『中庸』鬼神章を講ずるを聴く。先生も亦『中庸』序及び首章を講ず。四月、侯の參勤を大阪に迎へ、駕に従ひて五月東へ歸る。○六年辛酉、正月二十九日、三宅先生京師に卒す。二月訃至る。先生、爲に心喪を執る。」

○語注

【三年戊午】元文三（一七三八）年、迂齋五十五歳。【端齋】鈴木端齋。迂齋の三兄。源五右衛門と号す。

長兄は夭折、次兄円齋は水戸侯に仕えたため、端齋が家父の与力職を継いだ。『稻葉家譜』『迂齋文集』卷一所収）【四年己未】元文四（一七三九）年、迂齋五十六歳。【中庸鬼神章】『中庸』第十六章。【六年辛酉】元文六（一七四一）年、迂齋五十八歳。二月、寛保に改元。【三宅先生卒】三宅尚齋はこの年正月二十九日に八十歳で死去、京都洛東の黒谷に葬られた。

▼二十五

寛保三年。「癸亥」有^レ旨「五月十一日。」特改^二秩禄^一「賜^二二百石^一。」進^レ階。「此曰^二持筒物頭^一」○秋九月講筵小學四子終^レ業。先生上^二賀文^一。以勤^二侯意^一。日召論^レ事。又屢促^二侍講^一。先^レ是三四年前。侯親^レ政。

銳意求_レ治。英烈振_二藩内_一。會_下付_二老臣竊_レ柄者_一。又遂_二講官_一。中外頗有_中異論上。「講官合田敬勝。性疏放不_レ修_二邊幅_一。侯欽_三其風韻異_二庸俗_一。輒進_レ階賜_二二百石_一。敬勝常_三夜直進_二言治道_一。直申_二自_レ隗始_一之意。諸老臣素睡_三眈敬勝羈_レ旅新召_一。而輒得_レ擢用_一。至_レ是舉劾_二僭越出_レ位_一。遂放_レ之。先生一日諫_レ侯曰。人君黜陟褒貶。群下所_レ屬_レ眼。敬勝清狂少_二威望_一。不_レ可_レ任_二政事_一。而閣下欲_レ用_レ之。亦似_二不_レ明察_一。又恩賜無_レ年。而逐_レ之。亦殆刻薄。且渠羈妄輕卒。以取_レ禍。其心本無_レ私。何復必罪。侯勃然引_レ過。不_二會_一諛言_一。」先生因進言。以_地人主_レ位居_レ體者。當_二密靜以養_レ德_一。玄默以藏_レ用。不下_レ以_レ炳_二燿一時_一。爲_中美治上之意。侯每動_レ容嘉納。信_二用先生_一益堅。

寛保三年「癸亥」旨有り「五月十一日」、特に秩禄を改め「二百石を賜る」、階を進む。「此れを持筒物頭と曰ふ。○秋九月の講筵に『小学』・「四子」、業を終ふ。先生、賀文を上り、以て侯の意を勤_中ふ。」日々召して事を論じ、又屢_{しばしば}侍講を促す。是れに先んじて三四年前、侯、政を親_{みづか}らし、意を鋭くして治を求め、英烈藩内に振_{たまたま}ふ。會、老臣の柄を窃_{ぬす}む者を斥_{ぬす}(原文・付)け、又一講官を逐_おひ、中外頗る異論有り。「講官合田敬勝、性疏放にして辺幅を修めず。侯、其の風韻の庸俗に異なることを歎_{よろこ}び、輒ち階を進め、二百石を賜ふ。敬勝、夜直に治道を進言するに当たり、直ちに「隗より始めよ」の意を申す。諸老臣、素_{もと}より敬勝の羈旅新召にして、而れども輒ち擢用を得るを眈_{がみ}眈す。是に至りて挙_{こぞ}りて僭越して位を出づるを効し、遂に之れを放つ。先生、一日侯を諫めて曰く、「人君の黜陟褒貶は群下の属_{しやう}目する所なり。敬勝、清狂にして威望少なく、政事に任ずべからず。而して閣下之れを用ひんと欲するは、亦明察せざるに似たり。又恩賜年無くして之れを逐ふ。亦殆ど刻薄なり。且つ渠の羈_そ妄輕卒、以て禍を取るも、其の心本より私無し。何ぞ復た必ずしも罪せんや」と。侯、勃然として過ちを引き、曾て諛言せず。」先生因つて進言するに、人主の位を正

し体に居る者は、当に密静にして以て徳を養ひ、玄黙にして以て用を蔵すべく、一時を炳耀するを以て美治と為さざるの意を以てす。侯、毎に容を動かして嘉納し、先生を信用すること益々堅し。

○語注

【寛保三年】一七四三年、迂斎六十歳。【持簡物頭】『稻葉家譜』『迂斎文集』卷二所収）は「持簡頭」。鉄砲をあずかり、警衛にあたる職掌の名。新発田本「弓銃屯将」。【小學】劉子澄が朱子に指導を受けて編集した初學者課程の書。二八七年成立。内外二編、六卷よりなり、洒掃・応待・進退などの作法、修身道德の格言、忠信孝子の事績などを集めている。【四子】孔子・曾子・子思・孟子の総称。【賀文】「上利延侯」（寛保癸亥九月廿六日）。『迂斎文集』卷二所収。【英烈】優れた功績。【付_二老臣竊_レ柄者_一】「付」は「斥」の誤り。『唐津市史』によれば、このときの家老は堀愚斎と吉武九郎兵衛。堀愚斎は堀知正か。また、吉武九郎兵衛は唐津の儒者・吉武法命の兄。吉武法命（天和三「一六八三」年—宝曆九「一七五九」年）は「土井侯之時。在江戸。則有稻葉迂斎。在唐津。則有吉武法命。」と言われた唐津藩儒。『日本道學淵源録・續録増補』（七〇一頁）、『先君子行實』解題参照）【柄】権力。【合田敬勝】『崎門學脈系譜』（四六七頁）に、迂斎門人として、丸亀藩臣ではじめ尚斎に学んだ合田玄瑞という人名が記されている。その子として合田忠蔵の名が見え、「唐津藩儒臣」とされている。合田敬勝はこの忠蔵のこと。玄瑞は迂斎門人だが、忠蔵も門人であったか否かは不明。『唐津市史』は、忠蔵を迂斎門人とする。ただし『唐津市史』には信憑性の疑われる記事が多い。迂斎は「渠_レ羈妄輕卒。以取_レ禍。」と手厳しい批判を加えるものの、反面「其心本無_レ私。何復必罪。」として擁護する。迂斎の公正さ・寛容さとともに、唐津藩における微妙な立場を窺わせる。【修_二邊幅_一】修飾邊幅。体裁をかまう。うわべを飾る。ここでの「不修邊幅」は必ずしも批判的な意味合いではない。【自_レ隗始】從

隗始。賢者を招くには、まず自分のようなそれほど有能でない人間をまず優遇せよ。燕の郭隗の故事（『戦国策』）。【睚眦】目をいからしてにらむ目つき。【羈旅】他郷・他国に身を寄せる者。【擢用】多くの人の中から引き抜いて用いること。【清狂】世俗にとらわれず放逸な行いをする者。【羸妄】おおまか。【諛言】諛は、かこつける。【属目】注目する。【玄默】奥ゆかしく何も言わないこと。「人君以玄默為神」（『漢書』揚雄伝）【藏用】ひそみ隠れているはたらき。「諸れを仁に頭はし、諸れを用に藏し、万物を鼓して聖人と憂ひを同じうせず」（『易経』繫辞伝上）。山崎闇斎『文會筆録』（十一・一）参照。【炳燿】明るく光り輝くこと。【動容】容貌を変える。【嘉納】喜んで聞き入れる。

▼二十六

延享元年「甲子。」春。差属「從侯于唐津」。「三月十五日啓行。」侯在「道毎夜召先生旅館」。置酒厚勞。語晤傾動。「詩賦倡和有數章」既到。日侍「講筵」。侯特勤「政」。又臨「學」。先生受「命」。講「小學論孟於學」。府署一新。學政大振。未幾遭「侯有「不豫」。至「秋」〔七月十六日〕。侯卒。先生慟哭殆至「發疾」。家老命「先生」。「護喪事」。先生抑「哀親歛棺」。禮葬始裏。制令之外。執「心喪」。先生以「鬱伊無意人間」。欲「老告致仕」。會「家老」〔堀正知〕。密喻苦留「之」。先生以爲「先侯事業未成緒」。又烏知「嗣君不「能」憲」著垂統之政」。因復有「仕意」。冬東歸。「八月十五日出城。十月朔日歸。」今侯繼「封」。又任「伴讀」。命撰「先侯碑銘」。先生爲「伴讀」。先進「講大學論孟」。誠意教導一如「於先侯世」。侯繼「述志事」。講學孜孜。禮貌先生「不異先世」。先生彊「老進仕」。以匡「翼侯室」。

延享元年「甲子」春、差はして侯に唐津に属從せしむ。「三月十五日、行を啓く。」侯、道に在り、毎夜先

生を旅館に召し、置酒して厚く勞ひ、語晤傾動す。「詩賦を倡和して数章有り。」既に到り、日々に講筵に待す。侯、特に政を勤め、又学に臨む。先生、命を受け『小学』、『論』、『孟』を学に講ず。府署一新し、学・政、大いに振ふ。未だ幾くならずして侯の不豫有るに遭ふ。秋に至りて「七月十六日」侯、卒す。先生、慟哭して殆ど疾を發するに至る。家老、先生に命じて喪事を護らしむ。先生哀しみを抑へ親ら棺に斂め、礼葬始めて襄す。制令の外に心喪を執る。先生、鬱伊して人間に意無きを以て、老を告げ致仕せんと欲す。家老「堀正知」の密諭して苦りに之れを留むるに会ふ。先生以為へらく、先侯の事業未だ緒を成さず、又烏くんぞ嗣君の垂統の政を憲著する能はざるを知らんや。因つて復た仕ふる意有り。冬東へ帰る。「八月十五日」城を出で、十月朔日帰る。」今侯、封を継ぎ、又伴読に任じ、命じて先侯の碑銘を撰せしむ。先生、伴読と為り、先づ『大学』、『論』、『孟』を進講し、誠意教導にして先侯の世に於けるが如し。侯、志事を継述し、講学孜孜として、先生を礼貌すること先世に異ならず。先生老を疆めて進仕し、以て侯室を匡翼す。

○語注

【延享元年】一七四四年、迁齋六十一歳。寛保四年二月、延享へ改元。【扈從】天子の乗り物につき従う。【語晤】語晤の誤りか。語り合う。【傾動】深く尊敬して心を寄せる意か。【府署】役所。【不豫】天子の病氣。【侯卒】唐津藩主・土井利延、享年二十二。諡諦了院。墓所は唐津市神田・神田公園。【鬱伊】心が塞いでのびのびしないさま。【嗣君】土井利里（享保七「一二七三」年—安永六「一二七七」年）。宝曆十二（一二七六）年、古河へ転封。延享元（一二四四）年—安永九（一二七七）年、在位。『藩史大辞典』【憲著】憲は明らかに目立つさま。顯著。【垂統】よい政治の基礎を定め、子孫に残すこと。【先侯碑銘】『迁齋文集』卷七所収。【孜孜】怠らずにつとめ、励むさま。【禮貌】礼儀正しく人に接する。「從而礼貌之」（『孟子』離婁）

【匡翼】正し助けること。【侯室】侯の一家。

▼二十七

「三年丙寅春。山伏井宅權^レ火。夏新居落成。○四年丁卯春。作^二婚書^一。爲^二嗣子^一。授^二室喜多川氏^一。先生撫^二愛新婦^一尤厚。常教訓。解^二其嘗拜^レ佛祈^レ神之習^一。○寛延元年戊辰。九月二十五日。妹麻田孺人卒。先生爲執^二心喪^一。」〈※寛延二年「己巳」春「元旦著^二一文^一揭^二學舍^一以激^二勵諸生^一」〉侯歸^レ城。臨^二駕發^一先生作^レ書進言。欲^二望英斷奮發震^二上下^一。」「三年庚午。八月十七日。喪^二新婦喜多川氏^一。先生爲執^二心喪^一。」※〈〉は新発田本による。

「三年丙寅春、山伏井の宅、火に權^ぶる。夏、新居落成す。○四年丁卯春、婚書を作り、嗣子の為に室・喜多川氏を授く。先生、新婦を撫愛すること尤も厚く、常に教訓して其の嘗て仏を拝し神に祈るの習ひを解く。○寛延元年戊辰九月二十五日、妹麻田孺人卒す。先生、為に心喪を執る。」〈※寛延二年「己巳」春「元旦、一文を著して学舎に掲げ、以て諸生を激励す。」〉侯、城に帰る。駕発に臨み、先生、書を作りて進言し、英断奮発上下に震ふを欲望す。「三年庚午八月十七日、新婦喜多川氏を喪ふ。先生、為に心喪を執る。」

○語注

【三年丙寅】延享三（一七四六）年、迁斎六十三歳。【權^レ火】『武江年表』延享三年丙寅二月二十九日項によれば、「夜四時前、築地本願寺寺脇武家方より出火して、この辺武家方一円、南八町堀・本八町堀・茅場町・小網町・大坂町・堺町・葺屋町芝居両座・村松町・橘町此辺武家方・馬喰町・浜町・同朋町・米沢町・

本所小泉町・横網町・松井町・相生町・亀沢町辺武家方・浅草より小塚原まで延焼。翌朔日夕七ツ時鎮る。」（今井金吾校訂『武江年表・上』ちくま文庫、二〇〇三年、三三二頁）【四年丁卯】延享四（一七四七）年、迂齋六十四歳。【婚書】結婚の契約書。【室喜多川氏】迂齋の長男・廓齋の最初の妻・順。（享保四「一七一九」年—寛延三「一七五〇」年）。越中富山前田家旧臣の喜多川安正の孫で、自身も前田侯夫人の側に仕えた。廓齋との間に一女を儲けるが、夭逝。その後まもなく彼女も没した。「喜多川婦人小傳」（『迂齋續集』卷三所収）、『處士越復傳』参照。【寛延元年】一七四八年、迂齋六十五歳。延享五年七月、寛延に改元。【妹麻田孺人】名は政（元禄五「一六九二」年—寛延元「一七四八」年）。水戸侯家臣麻田兵衛門直平の妻。孺人は身分ある人の妻。（祭令妹政女文・「鈴木氏小傳」『迂齋續集』卷一所収）【寛延二年】一七四九年、迂齋六十六歳。【一文】「諭學者」『迂齋續集』卷二所収。「夫博文約禮聖門之教而下學上達則造之之方也學者得_レ其門_レ者或寡矣於_レ是踰_レ等陵_レ節終_レ身埋_二首於書冊_一而終不_レ能_レ入_レ德者天下滔滔矣故其所_レ爲日誦_二五車_一月巧_二文辭_一亦誇_レ多闕_レ靡之媒何足_レ謂_二之學_一乎入_二我門_一者深絶_二此意_一以實致_二爲_レ己之學_一焉則得_レ寸者己之寸_レ得尺者己之尺各自随_レ分不_レ可_レ以無_レ益也不_レ然則爲_レ人之弊噫不_レ如_レ無_レ學也二三子其思_レ之寛延二年己巳正月朔旦【侯歸_レ城】底本は、寛延元（一七四八）年九月二十五日の妹の死の記事の直後に、土井利里侯の帰国を記している（無窮会本、京都大学本も同様）が、新発田本のみ「寛延二年春：侯歸_レ城」として、帰国が翌年であることを示している。文脈上、新発田本の記述が正しいと考えられるので、本文および訓読文を改めた。【進言】『迂齋續集』卷二に「奉送利里侯序」がある。【三年庚午】寛延三（一七五〇）年、迂齋六十七歳。【喪_二新婦喜多川氏_一】墓所は駒込龍光寺。（喜多川婦人小傳）（『迂齋續集』卷三所収）

四年。「辛未。」特恩命_下嗣子以_二近習_一兼_中伴讀_上。「先_レ是嗣子以_二遊倅_一。待_二講筵_一。至_レ此特恩任_二近習_一。賜_二月俸_一。」臨_二侯歸_レ城。先生上_レ書。陳_二君道貴_一剛。厥_レ孚威如之趣_一。「夏四月。結_二門人武井敬勝・男正信_一。遊_二相州_一。至_二金澤鎌倉江島_一。登_二大山_一。十四日啓_レ行。十八日歸焉。自_三先生生_二二十五歲_一。始遊_二下總古河_一。旅行止_二於此_一矣。時年六十八。○寶曆二年壬申夏爲_二嗣子_一納_二繼妻日原氏_一。○六年丙子春正月十三日。遭_二婦人武井氏喪_一。執_二心喪_一。而以_三先生時齡逾_二古稀_一。又不_二強勤_一。始權障_二正廳北隅_一充_二祠堂_一。奉_二神主_一。三月孫男生。四月孫女生。」

四年「辛未」、特恩にて、嗣子に近習を以て伴読を兼ねるを命ず。「是れに先んじて、嗣子、遊倅を以て講筵に侍る。此に至り特恩にて近習に任じ、月俸を賜ふ。」侯の城に帰るに臨み、先生、書を上り、君道の剛を貴び、厥の孚と威如の趣を陳ぶ。「夏四月、門人武井敬勝・男正信と結び、相州に遊び、金沢・鎌倉・江島に至り、大山に登る。十四日、行を啓き、十八日、帰る。先生、生まれて二十五歳始めて下総古河に遊ぶより、旅行は此に止む。時に年六十八。○宝暦二年壬申夏、嗣子の為に継妻日原氏を納る。○六年丙子春正月十三日、婦人武井氏の喪に遭ひ、心喪を執る。而して先生、時に齡古稀を逾るを以て、又強ひて勤めず。始めて權に正庁の北隅を障てて祠堂に充て、神主を奉ず。三月、孫男生まる。四月、孫女生まる。」

○語注

【四年辛未】寛延四（一七五二）年。十月、宝暦に改元。迂齋六十八歳。【近習】寛政初年の土井家の役職表『藩史大事典』には、国許・江戸表双方に「近習番」という役職が見える。国許は四人がこの役職につき、禄高三〇〇〇三四〇石、江戸表は七人が任命され、十二石五人扶持、二〇〇石五人口。【遊倅】まだ官

に仕えないでいる息子。【上書】「上利里侯」（寛延四年三月廿四日）『迂齋續集』卷四所収。【君道貴】剛厥孚威如【上利里侯】（寛延四年三月廿四日）には「易云厥孚交如威如吉本義云君道貴剛太柔則廢」とある。「剛孚威如」は『易経』「大有」六五による。「君道貴剛」は『周易本義』の言葉。君子のありようは剛健・孚であるべきであり、威嚴がなければ臣下に侮られるであろう、といった意。迂齋の言葉に該当する箇所は以下のとおり（傍線引用者）。「六五。厥孚、交如。威如、吉。象曰、厥孚交如、信以發志也。威如之吉、易而无備也。」（『易経』大有）、「厥孚、交如。威如、吉。」「大有之世柔順而中以処、尊位虚己以応、九二之賢而上下歸之、是其孚信之交也、然君道貴剛太柔則廢、当以威済之則吉、故其象占如此、此亦戒辞也」二（『周易本義』【武井敬勝】迂齋の妻・武井氏の弟。のち下総古河藩儒。宝永五（一七〇八）年―天明六（一七八六）年。『崎門學脈系譜』四六七頁）【男正信】默齋。【遊相州】『迂齋續集』卷四に「遊相州詩」がある。同詩によれば旅程は江戸↓神奈川宿↓金澤（能見堂・金沢文庫跡）↓鎌倉（鶴岡八幡宮・大塔宮土牢・源頼朝墓・滑川・北鎌倉東慶寺・高德院・長谷寺・腰越万福寺）↓江ノ島（龍穴）↓大山↓藤澤遊行寺↓川崎宿↓江戸。【寶曆二年】一七五二年、迂齋六十九歳。【繼妻日原氏】迂齋門人・手塚靖齋の娘。手塚靖齋は、名は可英、初め日原氏を冒した。土浦藩儒臣。靖齋の孫が手塚坦齋（日原以道）。『崎門學脈系譜』四六七頁）【六年丙子】一七五三年、迂齋七十歳。この頃の唐津藩は『稻葉默齋先生傳』によれば「頻年侯家老臣弄權。君臣閣手。」「婦人武井氏」迂齋の妻。【正廳】庁は表座敷。【神主】位牌。儒家の葬式で、死者の官位・姓名を書いて祠堂に安置するもの。【三月孫男生四月孫女生】迂齋には廓齋と默齋の二子があるが、默齋は終生独身、子を持たなかった。廓齋の子とすれば、三月、四月とつづけて生まれたことになる。異母兄妹か。三月に生まれた長男は、稻葉通故、のち古河藩に仕えるものの亡命したことが、『稻葉默齋先生傳』の默齋死去の記事および成東町・元倡寺に現存する通故の妻（矢嶋婦人）の墓碑銘などに見える。また宝曆八（一七五八）

年七月に孫女、宝曆十（一七六〇）年七月に孫女の誕生を記すが、廓齋はそれ以外にも子を為し、後年、黙齋の養子となっている。

▼二十九

寶曆七年「丁丑。」夏。有_レ旨。以_二先生老_一。命_二嗣子_一免_二近習_一。專學_二膝下_一。「八年戊寅七月。孫女生。」

宝曆七年「丁丑」夏、旨有り、先生老ゆるを以て、嗣子に命じて近習を免じ、専ら膝下に学ばしむ。「八年戊寅七月、孫女生まる。」

○語注

【寶曆七年】一七五七年、迂齋七十四歳。【八年戊寅】一七五八年、迂齋七十五歳。【孫女生】『先君子行實』に見えるかぎりでは、廓齋の次女にあたる。

▼三十

九年。「己卯。」侯擢庸。先生因上_レ書言。人之處_レ世也。貧與_レ富顯與_レ晦而已。其間賦命之疾徐。或壽或夭。各自不_レ均。是皆不_レ期_レ然而至者。天實爲_レ之。豈人力微幸營爲之所_二能致_一。然人々不_レ知_二此理_一。或諂_二鬼神_一。或諂_二威權_一。慕_レ富厭_レ貧。自_レ朝至_レ夕汲々然唯利之求。常累_二此靈臺_一。可_レ謂_二惑之甚_一。是求無_レ益_二於得_一也。猶_下不_レ知_二無_レ魚之池_一。而終日下_二之釣竿_一。不_レ知_二無_レ根之木_一。而待_中其萌芽華英_上。亦獨何心哉。然則出處進退之道如何。子曰君子之於_二天下_一也。無_レ適也無_レ莫也。義之與比。又謂_二顏淵_一曰。用_レ

之則行。舍^レ之則藏。惟我爾有^レ是夫。是飛潛與^レ時從。固非^三學者所^二輒企^一也。其下^レ之一等。則在^二修^レ身俟^レ命而已。所^レ謂富而無^レ驕。貧而無^レ諂^マ。雖^二身否^一。而道便亨者。正君子之道也。然做^レ官則志爲^二利達^一所^レ奪。以負^二初心^一。又終喪^レ己者滔々此也。豈不^二知者之笑^一乎。蓋仕與^レ學。事^二而理^一。所^レ謂仕而優則學。學而優則仕。世之知^レ仕而不^レ知^レ學者。識趣陋劣。其當^二要路^一。又何益^二於天下國家^一乎。徒成^二己之私^一而已。而雖^下志^二於道^一之人^上。亦不^レ知^二學仕^一理^一。及其做^レ官也。退食之頃。多與^二下等之人^一聚議。不^三復留^二意於學^一。內則游戲玩物。外則請託參謁。徒謀^レ固^二君寵^一而止。苟如此負且乘。覆^レ公之餗^一之不^レ暇。終^レ身不^レ得^下冥^レ昇利^二不^レ息之貞^一之道^上也。此皆急^レ仕之所^レ致。豈可^レ不^レ警哉。然則有^レ志^二於學^一者。雖^二官事鞅掌^一。而當^三講^レ學取^レ友。以勵^二進竭^レ忠退補^レ過之誠^一。所^レ謂大臣者不^レ外^二於此^一矣。不^レ然講學之意。日荒月衰。漸々消磨。陷^二于鄉愿合^レ汙之流^一。而不^二自知^一。又上^二筭子^一曰。朱子與^二李誠父^一書曰。茲聞榮^二被親擢^一。進^二居六察之聯^一。深以爲^レ慰。熹託契深厚。不^下敢効^二常人^一進^二諛詞^一。以贊^中除用之喜^上。臣正義適讀^二此書^一。有^二深感^一。自^二閣下頃進庸^一。藩內諸臣莫^レ不^レ賀^二祝之^一。正義狂妄竊効^二朱子^一。不^レ獻^二諛詞^一。此雖^レ似^レ不^レ近^二人情^一。而恭蒙^二講筵之職^一多年。四簋禮設。權輿是承。何隱默回互。以^二常情^一置^レ之。謹爲^二閣下^一誦^レ之。〔七月朔上。〕

九年「己卯」、侯、擢庸せらる。先生、因りて書を上り言ふ。「人の世に処するや、貧と富、頭と晦のみ。其の間、賦命の疾徐、或いは寿或いは夭、各自に均しからず。是れ皆然ることを期せずして至るは、天実之れを爲す。豈人力の微幸、當爲の能く致す所ならんや。然れども人々此の理を知らず、或いは鬼神に諂（原文・諂）ひ、或いは威權に諂（原文・諂）ひ、富を慕ひ貧を厭ひ、朝より夕に至るまで汲々然として、唯利之れを求めて、常に此の靈台を累はす。惑ひの甚だしきと謂ふべし。是れ求めて得るに益無きなり。猶ほ魚

無きの池を知らずして終日之れに釣竿を下らし、根無きの木を知らずして其の萌芽・華英を待つがごとし。亦独り何の心ぞや。然れば則ち出処進退の道、如何。子曰く、「君子の天下に於けるや、適も無く、莫も無し。義と与に比ふ」と。又、顔淵に謂ひて曰く、「之れを用ふれば則ち行ひ、之れを舍つれば則ち藏る。惟我と爾と是れ有るかな」と。是れ飛潜、時と与に従ふ。固より学者の輒く企て及ぶ所に非ざるなり。其れ之れを下ること一等は、則ち身を修め命を俟つに在るのみ。所謂「富みて驕ること無く、貧しくして諂（へつ）文・諂（へつ）ふこと無く」、身否がると雖も、道、便ち亨る者は、正に君子の道なり。然れども官と做れば、則ち志は利達の為に奪はれ、以て初心に負き、又終に己を喪ふ者は、滔々として此れなり。豈知者の笑ひならざらんや。蓋し仕ふると学ぶと、事は二にして理は一なり。所謂「仕へて優なれば則ち学ぶ。学びて優なれば則ち仕ふ」なり。世の仕ふることを知りて学ぶことを知らざる者は、識趣陋劣、其れ要路に当たれば、又何ぞ天下国家に益あらんや。徒に己の私を成すのみ。而して道に志すの人と雖も、亦学・仕の一理なることを知らず。其の官と做るに及ぶや、退食の頃、多く下等の人と聚議し、復た意を学に留めず。内は則ち遊戲・玩物、外は則ち請託・参謁、徒に君寵を固めんと謀りて止む。苟も此くの如くならば、負ひ且つ乗り、公の餽を覆すの暇あらず、身を終ふるまで冥くして昇り、息まざるの貞に利するの道を得ざるなり。此れ皆仕へを急にするの致す所なり。豈警せざるべけんや。然れば則ち学に志有る者は、官事に鞅掌すと雖も、當に学を講じ、友を取り、以て進みては忠を竭し、退きては過ちを補ふの誠を励むべし。所謂大臣なる者は、此れに他ならず。然らずんば、講学の意、日に荒み月に衰へ、漸漸として消磨し、郷愿の汙れに合するの流れに陥るも、自ら知らず。」

又割子を上りて曰く、「朱子「李誠父に与ふる書」に曰く、「茲に聞く、親擢を榮被し、六察の聯に進居す。深く以て慰めとす」、「烹、託契深厚なるも、敢へて常人に効ひ諛詞を進り、以て除用の喜びを賛せず」と。

臣正義（たてまつるまこと）適此の書を読み、深く感ずること有り。閣下頃進庸（しんよう）せるより、藩内の諸臣、之れを賀祝せざるもの莫し。正義、狂妄、窃かに朱子に効ひ、諛詞（たてまつりごと）を献（けん）らず。此れ、人情に近からざるに似ると雖も、恭しく講筵の職を蒙ること多年、四簋（き）醴設の権輿（けんう）は承（う）く。何ぞ隱默回互して、常情を以て之れを置かんや。謹んで閣下の為に之れを誦（よみ）す」と「七月朔、上る」。

○語注

【九年】宝暦九（一七五九）年、迁斎七十六歳。【擢庸】擢用に同じ。多くの人の中から引き抜いて用いること。この年六月二十三日、土井利里は奏者番に任用された『藩史大事典』。【顯與晦】晦は世に知られないこと、顯は世に知られること。【上書】『迁斎文集』はこの時期の文書を欠いており、この上書も収められていない。【賦命】天から与えられた運命。【疾徐】速いことと遅いこと。【微幸】まぐれあたりの幸福を求めること。僥倖。零れ幸い。「君子居易以俟命、小人行險以徼幸。」『中庸』【威權】威光と權力。【靈臺】魂のあるところ。心。「靜觀靈臺妙、萬化從此」『朱子文集』四・齋居感興二十首、「若夫佛氏之虛靈列子之方寸莊子之靈臺則不知其中具萬理也」『文会筆錄』三二【華英】花。【子曰君子之於天下也。無適也無莫也。義之與比。】『論語』里仁による。「適・莫」二字について、鄭玄は憎むことと好むこと、范寧は人に對して親切であつたり不親切であつたり不公平なことを指すとする。朱子は、「適」はただ特定の人とだけ交際すること、「莫」は交際を承知しないこととする。【謂顏淵曰。用之則行。舍之則藏。惟我爾有是夫。】「子謂顏淵曰用之則行舍之則藏唯我爾有是夫」『論語』述而【飛潛】『易經』「乾」初九「潜龍勿用」、九五「飛龍在天」。潜龍は世に出ない大人、君子を指し、飛龍は聖人が天子の位にいることを指す。【所謂富而無驕。貧而無諂。】「子貢曰貧而無諂富而無驕何如」『論語』学而【否】ふさがる。『易經』の卦。ふ

さがって通じないさまを象る。【亨】とおる。『易経』「坤」「坤元亨」（坤は元もといに亨とほる）。支障なく行われることを指す。【滔々】広大なさま。新發田本は「天下滔々」。滔々此也とは、広い世の中、このような者ばかりだ、といった意。【所謂仕而優則學。學而優則仕。】「子夏曰仕而優則學而優則仕」（『論語』子張）【玩物】無用な物をもて遊ぶこと。【請託】権力ある人に私事を頼み込むこと。【負且乘】『易経』「解」による。「六三 負且乘致寇至貞吝」（六三。負ひ且つ乗る。寇あだの至るを致す。貞ただしけれども吝りん。）「負」は荷物を背負うこと、「乘」は馬車に乗ること、「負且乘」は荷物を背負った不徳の小人が、馬車に乗って高官を気取っていると、ついには寇（あだ、賊）に見舞われること。ここでは、徳もないのに高官にいと、みずから困難を招く結果になるということを意味している。【覆公之餽之不暇】訓読すれば「公の餽くわくを覆すの暇あらず」となるが、「覆すに暇あらず」（余念がない）といった意味か。「覆公之餽」は『易経』「鼎」による。「九四 鼎折足覆公餽其形渥凶」（九四。鼎足を折る。公の餽くわくを覆す。その形、渥あかくたり。凶。）「餽」は粥の類。「公餽」は、君公から賜ったご馳走、もしくは天子が天地の神や天下の賢人を供応するためのご馳走。鼎の足が折れ、「公餽」を大臣が覆す。実力以上の地位に就いても、才能が追いつかず災厄を被ることを目指す。【冥昇利不息之貞】『易経』「升」による。「上六 冥升利于不息之貞」（冥くらくして升のぼる。息やまざるの貞ていに利よろし。）「冥升」は、心が冥くらいままやみくもに昇り進むこと。「利于不息之貞」は、不断に正道を守ることがよい、ということ。【鞅掌】鞅は荷うこと、掌は捧げること。荷物を持っているので威儀を整えることができない。忙しいこと。【鄉愿合汙】「子曰郷原德之賊也」（『論語』陽貨）、「孔子曰过我門而不入我室我不憾焉者其惟郷原乎郷原德之賊也（中略）同乎流俗合乎汙世居之似忠信行之似廉絜衆皆悅之自以為是自不可与入堯舜之道故曰德之賊也」（『孟子』尽心）（以上、傍線引用者）。郷原は村里の偽善者。闡然は本性を隠してこびへつらうさま。流俗は世俗のならわし。汙世と対して、悪いならわし。流は水の下流の意味で、

墮落を意味する。汙世は汚世。なお、『先君子行實』本文と同じ「合汙」の語は『論語集註』に見える。「鄉者鄙俗之意原與愿同（中略）蓋其同流合汚以媚於世故在鄉人之中獨以愿稱夫子以其似德非德而反亂乎德故以爲德之賊而深惡之」【朱子與李誠父書】『朱子文集』二八所収。【榮被】榮は名譽。被はこうむる。【親擢】親は天子みずから。擢は選び出して用いる。【六察】唐宋時代に置かれた六人の監察御史。【熹】朱熹。朱子。【託契】託はたのむ。契は約束する。ここでは朱子と李誠父との信頼関係を指すのであろう。【除用】除は叙に同じ。官職を授けて用いること。【正義】迂斎。【狂妄】「朱子與李誠父書」中の言葉。【進庸】奏者番に任用されたことを指す。【四簋體設】簋は祭器の一つ。穀物を盛って神に供える器。四簋は、簋に盛った四種の穀物。客を厚くもてなすこと。漢の穆生は酒を好まなかったので、楚の元王は特に醴（あまざけ）を設けて厚遇した。後、王戊の時にはこれを設けなくなつたので、穆生は楚を去つたという（『漢書』楚元王傳）。ここでは、三代前の藩主の初め（権興）以来、藩主より「四簋體」を賜つた恩義は忘れていないが、朱子に倣い「諛詞」を奉ることをしなかったという意か。【隱黙】目立たないところに退いて黙っていること。【互】心が蟠つて塞がること。

▼三十一

十年「庚辰。」春。「正月六日。」罹_レ疾。「二月六日。山伏井之宅罹_レ火。」尋愈。夏侯歸_レ城。先生臨_レ駕發_一。言_二勤_レ學治_レ政極切。「先生且言。臣歳七十七。加以_二今春之疾_一。且暮恐難_レ保。況來歲仰_二尊顔_一何可_レ得。伏願問學精進。千萬勿_レ懈。侯且納且叱云。卿矍鑠何然。唯勿_下任_二壯實_一。輕舉以冒_中時氣_上。一味愛養以保_二再會_一。請卿爲_レ吾自愛。懇々慰勞。令_二先生殆涕下_一。及_二侯啓_レ行後_一。先生思_二慕其言_一。數形_二顔色_一。五月新營_二居於谷倉村松町_一。奉_二武井喜多川二氏木主_一遷居。先生自_レ生_二麻布_一。廿四年。遷_二芝三田戸田君之

第一。後十年遷_二鍛冶橋邸_一。後十年遷_二材木町_一。後一年遷_二濱町山伏井_一。後三十五年遷_二于茲_一終焉。五月十八日。遭_二兄圓齋喪_一。先生以_レ疾不_レ執_レ喪。六月出_二次子正信_一。令_三別_レ居誘_三諸生_一。七月孫女生。」秋再臥病。以其病狀不_レ可_二支吾_一。作_二筭子_一。謝_三三世荷_三寵異_一。託_二有司_一投內。且勅_二嗣子學不_レ成_一緒業_一。乞_レ不_レ依_二蔭襲世祿之例_一。〔十月上_二筭子_一。〕先生被_レ病。精神不_レ異_二平日_一。對_レ客答_レ書。賦_レ詩著_レ文。談笑如_レ常。及_二門人中嘗屬_レ目者來訪_レ疾。則苦附_二學術之事_一。至_二最後_一扶_レ疾揮_レ毫。親寫_二疾中所著之短文_一。以上_二侯于唐津_一。又呈_二諸閣老館林侯_一。畧言學不_レ識_二天道性命_一。則無_レ體矣。不_レ通_二經濟之業_一。則無_レ用也。知高禮卑。變_二化己之氣質_一。謂_二之君子儒_一。彼徒尚_二忠信篤行_一。而無_二見解_一者。乃婦女之檢押焉耳。〔館林侯作_レ書卑_レ辭報_レ之。〕其十一月十日辰時。終_二正寢_一焉。享年七十有七屬續之前夜。門人武井敬勝。明石義道。男正直。正信。侍坐。先生訓_二義道_一。以_二學須_レ爲_レ己要在_レ變_二化氣質_一。又命以_レ此傳_二致村士宗章_一。且言臨_レ死不_レ變_二素志_一。如_二伊川疾革門人應答_一。誠非_二伊川_一不_レ能矣。然病證不_レ一。如_二人疾_一熱症_一。雖_二聖賢_一亦不_レ保_レ不_レ變_二其常_一。至_レ如_二吾病證_一。精神亦自定得。又以_二正信嗜_レ酒。譬_三以_二過飲伐_レ性又致_二昏惰_一。至_二夜半_一疾益篤。敬勝因問_二其所_一苦。先生曰只覺_二眞元耗散_一。但死生晝夜之道。無_レ可_レ疑者_上。彼異端之徒。以_二臨終正念_一驚_レ人聽_一。學者須_レ知_二本自如_レ此也_一。又託_二敬勝_一。遺_二其友剛齋野田先生_一言。數十年來辱_二警策_一。今臨_レ死幸不_二顛倒_一。以_二陰陽晝夜之道_一。安_二置胸中_一而已。又呼_二嗣子_一累言勤_レ學久_レ之。及_二夜漏建_レ寅尚未_レ絕。先生含笑曰。平生受_レ氣強壯。至_レ是亦不_レ散。恰似_二客之閑遊不_レ屑_レ去也_一。其悠々樂易。足_三以觀_二平素存養之熟_一也矣。嗣子正直與_二弟正信諸門人_一。以_レ禮斂棺。十二日奉_レ柩。卜_二葬江戶城北駒籠龍光寺_一。

十年「庚辰」春「正月六日」、疾に罹り「二月六日、山伏井の宅、火に罹る」、尋いで愈ゆ。夏、侯城に歸

る。先生、駕の發するに臨みて、学を勤め政を治むることを言ふこと極めて切なり。「先生、且つ言ふ、「臣、歳七十七、加ふるに今春の疾を以てす。且（原文・且）暮恐らくは保ち難し。況んや来歳、尊顔を仰ぐこと何ぞ得べけんや。伏して願はくは問学に精進し、千万懈る勿かれ」と。侯、且つ納れ且つ叱りて云ふ、「卿、矍鑠にして何ぞ然らん。唯壮実に任せ、輕挙以て時氣を冒すこと勿かれ。一味愛養して以て再会を保たんと請ふ、卿、吾が為に自愛せよ」と。懇々と慰勞し、先生をして、殆ど涕下さしむ。侯、行を啓く後に及びて、先生其の言を思慕し、数顔色に形はる。

五月、新たに居を谷倉村松町に宮み、武井・喜多川二氏の木主を奉じて遷居す。先生、麻布に生まれてより廿四年、芝三田戸田君の第に遷り、後十年鍛冶橋の邸に遷り、後十年材木町に遷り、後一年浜町山伏井に遷り、後三十五年茲に遷りて終焉す。五月十八日、兄圓齋の喪に遭ふ。先生、疾を以て喪を執らず。六月、次子正信を出し、居を別にし、諸生を誘はしむ。七月、孫女生る。」

秋、再び病に臥す。其の病状支吾すべからざるを以て、割子を作り、三世寵異を荷するを謝して、有司に託して投内し、且つ嗣子の学、緒業を成さざることを効し、蔭襲世祿の例に依らざるを乞ふ。「十月、割子を上る。」

先生、病を被るも精神平日に異ならず。客に対し書に答へ詩を賦し文を著し、談笑すること常の如し。門人の中の嘗て属目する者、来りて疾を訪ふに及びては、則ち苦ろに學術の事を附す。最後に至りて、扶疾して毫を揮ひ、親ら疾中著せる所の短文を写し、以て侯に唐津に上る。又諸れを闇老館林侯に呈す。略言す。「学、天道・性命を識らざれば、則ち体無し。經濟の業に通ぜざれば、則ち用無し。知高く礼卑くして、己が氣質を変化す、之れを君子儒と謂ふ。彼の徒に忠信篤行を尚びて、見解無き者は、乃ち婦女の檢押のみ」と。「館林侯、書を作り辞を卑くし、之れに報ゆ。」

其れ十一月十日辰の時、正寝に終ふ。享年七十有七。属續ぞくつづの前夜、門人武井敬勝・明石義道、男正直・正信、待坐す。先生、義道に訓するに、「学、須く己が為にすべし。要は氣質を變化するに在り」を以てす。又命ずるに、此れを以て村土宗章に伝致す。且つ言ふ、「死に臨みて素志を變ぜざること、伊川の疾革あつたまり、門人と応答するが如き、誠に伊川に非ずんば能はず。然れども病証びやうしやう一ならず。人の熱症ねつしやうを疾やむるが如きは、聖賢と雖も、亦其の常を變ぜざることを保たず。吾が病証びやうしやうの如きに至りては、精神亦自ら定むることを得う」と。又、正信酒を嗜むを以て、警するに過飲は性を伐きり、又昏惰を致すことを以てす。夜半に至り、疾益やひますます篤し。敬勝、因りて其の苦しむ所を問ふ。先生曰く、「只真元かうさんの耗散するを覚ゆ。但死生昼夜の道は疑ふべきもの無し。彼の異端の徒は、臨終正念を以て人聴を驚かす。学者、須く本自ら此くの如きを知るべきなり」と。又敬勝に託し、其の友剛齋野田先生に遺して言ふ。「数十年来、警策を辱かたじけなくす。今死に臨みて幸ひに顛倒せず。陰陽昼夜の道を以て、胸中に安置するのみ」と。又嗣子と呼ばて累しきりに言ふ、「学を勤めよ」と。之れを久しくして夜漏寅を建きすに及びて、尚ほ未だ絶えず。先生笑みを含みて曰く、「平生氣を受くること強壮なり。是に至るも亦散ぜず。恰も客の閑遊して去ることを屑いさやしとせざるに似たり」と。其の悠悠樂易、以て平素存養の熟を觀るに足れり。嗣子正直、弟正信・諸門人と礼を以て棺に斂をさむ。十二日、柩を奉じて江戸城北駒籠・龍光寺に卜葬す。

○語注

【十年】宝曆十（一七六〇）年、迂齋没年、享年七十七歳。【罹レ火】『武江年表』宝曆十年庚辰二月六日項によれば、「戌刻、神田旅籠町壱丁目明石屋といへる足袋屋より出火、乾大風、佐久間町辺はいふに及ばず、浅草辺・両国橋・馬喰町・本町・日本橋・江戸橋辺・靈巖島新川辺・深川へ飛、洲崎木場の辺迄焼亡。三十

三間堂焼失。永代橋・新大橋も焼る。七日巳刻鎮火。」（今井金吾校訂『武江年表・上』ちくま文庫、二〇〇三年、三六九頁）【愈】癒に同じ。【問學】「君子尊德性而道問學」（『中庸』）【矍鑠】鑠は鑠に同じ。矍鑠。年老いて元気なさま。【時氣】病名。時候あたり。【一味】もっぱら。【谷倉】地名「元矢ノ倉」。『先君子行實』冒頭に「晩居於城東元谷倉」とある。迂齋の住んだ浜町山伏井戸、村松町などいずれも近接している。【村松町】現在の中央区東日本橋三丁目の一部、東日本橋駅近く。子供の祝い事などに用いられる飾り太刀を売る店が多く、村松町のなまくら屋として知られた。【木主】位牌。【遷三田戸田君之第】宝永四（一七〇七）年項参照。【遷二鍛冶橋邸】迂齋は三十二歳で唐津侯土井利実に出仕し、鍛冶橋にある同藩邸内に転居した。正徳五（一七一五）年項参照。鍛冶橋は旧外堀にあった。現在の東京駅の南端あたり。交差点名として残る。【遷二材木町二】享保十（一七二五）年項参照。【遷三濱町山伏井二】享保十一（一七二六）年項参照。【兄圓齋】迂齋の次兄、稲葉通則。『迂齋先生卒年文稿』に「稲葉圓齋記事」（五月二十二日）がある。【孫女】名は薦。廓齋の三女と考えられる。【支吾】支える。【割子】『迂齋先生卒年文稿』「病中漫筆」第七がこれにあたる。割注によれば、同文は唐津侯に送られたのち、館林侯、土浦侯、長嶋侯、杉浦君に奉呈され、館林侯からは返書があつたとしている。【謝三世荷「寵異」】底本の訓点は「謝三世荷「寵異」」。の誤り。【投内】人に託して手紙を渡してもらうこと。【緒業】やりかけの事業。【蔭襲】父祖のおかげで官位につくこと。【世禄】俸禄を代々受けること。【扶疾】病気の身を支える。病身でありながら無理に起き上がる。【閣老館林侯】閣老は老中の別称。当時の館林藩主は松平武元。このとき老中職。【畧言】前掲『迂齋先生卒年文稿』「病中漫筆」第七の略言。この略言の内容について、『日本道學淵源録・續録』所収「迂齋先生行實略」には、千手旭山（興成）による、以下の割注が付されている。「興成竊謂。聖賢所謂經濟。是以天道性命之理。施之於天下國家而已。別無經濟之學矣。道體與經濟。固是爲體用也。然體立而後用有以行焉。則未有通

平道體而不達乎經濟者。其未通乎道體者也歟。」(『日本道學淵源録・續録』六二四頁)【性命】万物が天から受けたそれぞれの性質。【體】ものの本体。【用】はたらき。【變化己之氣質】「呂氏曰、君子所以學者、為能變化氣質而已。」(『中庸章句』)【君子儒】道を学び徳を修めることを心がける學者。「子謂子夏曰女爲君子儒無爲小人儒」(『論語』雍也)【見解】物事の道理をみてさとる。【撿押】取り締まること。また法度、規矩。【正寢】「疾病遷居正寢」「凡疾病遷居正寢内外安靜以俟氣絶」(『家礼』喪礼・初終)【屬續】死にかかった人の口に續(新しい綿)をあてて呼吸の有無をみることに。屬續之際は、人の死に際。「疾病、男女改服、屬續以俟絶氣。」(『礼記』喪大記)【明石義道】柳田求馬(元文三「一七三八」年—天明四「一七八四」年)。姓は橘、氏は柳田、初め明石宗伯と称した。江戸浜町で医者をしていたが、この職を甥に譲つて隠居し、迂齋、野田剛齋に学んだ。【以學須爲己要在變化氣質】「子曰古之學者為己今之學者為人」(『論語』憲門)。「迂齋先生卒年文稿」「永訣揮筆」冒頭にこの一文が収められている。【村士宗章】村士玉水(享保十四「一七二九」年—安永五「一七七六」年)。備後福山藩儒官、村士淡齋の子。江戸の人。初め山宮雪楼、のち稲葉迂齋に学ぶ。江戸小川町に信古堂を建てて弟子を教育した。門人に岡田寒泉、服部栗齋、小松原剛治などがある。『日本道學淵源録・續録』六七—六七四頁)【伊川疾革門人應答】邵康節『伊川擊壤集』「疾革吟」による。「有命更危亦不死 無命極醫亦無效 唯將以命聽於天 此外誰能閑計較」(『和刻本近世漢籍叢刊 思想初篇(二) 擊壤集』中文出版社、一九八五年)。伊川(邵康節、邵雍(一〇一一年—一〇七七)年)臨終の様子について、『二程全書』卷十九に以下のように記されている。「邵堯夫臨終時、只是諧謔。須臾而去。以聖人觀之、則亦未是。蓋猶有_レ意也。比_二之常人_一甚懸絶矣。(邵堯夫臨終の時、只是_た諧謔す。須臾にして去きぬ。聖人を以て之れを觀れば、則ち亦未だ是ならず。蓋し猶ほ意有るなり。之れを常人に比すれば甚だ懸絶す。)(『和刻本漢籍 二程全書 附索引』中文出版社、一九七九年)。司馬光、程顥、程頤、

張載などが朝夕邵雍の病床を見舞ったが、邵雍はその間も詠詩をやめず、談話を楽しんだという。(上野日出刀『中国古典新書・伊川擊壤集』、明徳出版社、一九七九年、参照。)『迂齋先生卒年文稿』『易實語録』(十一月九日)に迂齋のこのときの言葉が載せられている。割注に「從來會「學友」話及「此事」今實會得請告「之野田生」」とある。【伐性】伐性之斧のこと。伐性之斧は、人の本性を損なう斧で、女色や歌舞音曲などに耽ることを指す。【昏惰】おろかで怠ける。『迂齋先生卒年文稿』『易實語録』(十一月九日)に、黙齋に対する言葉がある。【眞元】眞の元氣。【敬勝因問「其所」苦】『迂齋先生卒年文稿』『易實語録』(十一月九日)所収。【耗散】減ってなくなる。【死生晝夜之道】『易経』繫辭伝上による。「範「圉天地之化」而不_レ過。曲_二萬物_一而不_レ遺。通_二乎晝夜之道_一而知。故神无_レ方、而易无_レ體。」(天地の化を範圍して過ぎせしめず、万物を曲成して遺さず、晝夜の道を通じて知る。故に神は方なくして易は体なし)。「晝夜之道」は昼と夜とが循環する理。「昼」は陽、「夜」は陰であり、幽明・死生・鬼神の理を指している。『先君子行實』では、「死生晝夜之道」の直後に「陰陽晝夜之道」の言葉も見える。また『論語』先進「未知生焉知死」について、『論語集註』は「程子曰晝夜者死生之道也知生之道則知死之道」としている。(傍線引用者)【臨終正念】臨終にあたって雑念を捨ててひたすら仏道に思いをかけること。一般的に浄土思想における念仏を指すが、『迂齋先生卒年文稿』『易實語録』(十一月九日)では、「臨終正念」について「如「傳教弘法」としている。【剛齋野田先生】野田剛齋(元禄三「一六九〇」年―明和五「一七六八」年)。名は徳勝、江戸の人。佐藤直方の門人。三宅尚斎にも学んだ。家は代々幕臣であったが、剛齋は隠居して仕えなかった。本所石原に住んだ。『日本道學淵源録・續録』六二六く六二七頁)【警策】励まし鞭打つこと。【顛倒】平静を失う。【夜漏】夜の時刻。【寅】午前四時、またはその前後二時間。【樂易】心が楽しく安らか。【棺】屍を直に納める箱。内棺。【柩】内棺を収めるもの。【龍光寺】現・文京区本駒込一丁目。迂齋の墓は同寺に現存する。長男・廓齋

による墓碑銘は『迂齋文集』卷一所収。

（▼十七〜▼三十一 注釈・校合 長野美香）

▼三十二

先生自_レ筮仕_一。至_レ此四十六年。歷_二事三世_一。其間當_レ不_レ從_二侯歸_二城邑_一。則命開_二講於家老署_一。先生始仕也。齡方壯。頗著_二鋒穎_一。抗論面折。而以_二其嘉樂和順之德_一。無_二言之涉_二倨侮不遜_一。侯每感悟篤信_二先生_一。而又侯與_二先生_一。情好相善。至_レ如_下其夜間或以_二不虞細故_一非時進謁_上。亦忽聞_二先生聲咳_一輒召談笑。至_レ使_二先生不_レ能_二得而退_一焉。此所_二以其道合服從_一也。如_二嗣侯_一。則一言一行無_レ不下_二以_二先生_一爲_上準。乃無_レ所_レ論_二道合與_レ不_レ合耳_一。及_二晚歲_一今侯待_二先生_一以_二師禮_一。如_下其每_二歸城_一。遣_二近習一人_一。造_二先生宅_一存問極_二殷勤_一。及夜直賜_二輜輿_一迎送_上。前世所未_レ有。而至_二其親筆賜_レ書。則三世皆同矣。先生三世賜翰。緘封藏_二書庫_一。至_下翰中載_二機密_一者_上。讀畢火_レ之。不_二以遺_レ家。先生對稿。亦以_二其泄露_一皆年年火_レ之。未_二嘗傳_レ人也。先生忠愍念_レ君之誠。無_二一日忘_二胸次_一。未_下嘗有_中以_二一時舉措_一決_二去就_一。皜皜自潔之意_上焉。雖_下先生不_レ當_二要路_一。政治無_中可_レ觀者_上。而輔_二翼君德_一。扶_二持政綱_一。使_二永不_レ墜_二祖先淳厚之風_一者。豈謂_二之無_レ所_二匡救_一哉。

先生、筮仕_{ぜいし}より此_{こゝ}に至りて四十六年、三世に歷事す。其の間侯の城邑_{じやういふ}に歸るに從はざるに当たれば、則ち命じて講を家老の署に開く。先生始めて仕ふるや、齡、方_{まさ}に壯、頗る鋒穎_{ほうえい}を著はし、抗論・面折_{めんせつ}す。而れども其の嘉樂_{からく}・和順の徳を以て、言の倨侮_{きよぶ}・不遜_{ふそん}に渉_{わた}るもの無し。

侯、毎_{つね}に感悟し篤く先生を信ず。又侯、先生と情好相善し。其の夜間、或いは不虞_{ふぐ}の細故_{さいこ}を以て非時に進

謁するが如きに至れば、亦忽ちに先生の訾^{けい}咳^{がい}を聞き、輒^{すなは}ち召して談笑し、先生をして得て退く能はざらしむるに至る。此れ其の道合^{がう}して服従する所以なり。嗣^し侯の如きは、則ち一言一行、先生を以て準と為さざるは無し。乃ち道合すると合せざるを論ずる所無きのみ。晩歳に及びて、今侯、先生を待^{たい}するに師礼を以てす。其の帰城^{きじょう}する毎に、近習^{きんじふ}一人を遣はし、先生の宅に造らしめ、存問^{そんもん}すること懇勤を極め、及び夜直に輒^{けふ}興^{きよう}を賜り迎送するが如きは、前世未だ有らざる所なり。

其の親筆して書を賜ふに至りては、則ち三世皆同じ。先生、三世の賜翰は緘封して書庫に蔵す。翰中機密を載する者に至りては、読み畢^をへて之れを火^やき、以て家に遺さず。先生の対稿も、亦其の泄露^{せつろ}を以て皆年々之れを火^やき、未だ嘗て人に伝へず。

先生の忠悃^{ちゆうくん}、君を念ふの誠は、一日も胸次に忘るること無し。未だ嘗て一時の举措を以て去就を決し、皜^{かう}として自ら潔しとするの意有らず。先生、要路に当たらず、政治に観るべき者無しと雖も、君徳を輔翼し、政綱を扶持し、永く祖先淳厚の風を墜^{しな}はざらしむる者は、豈^{いかで}之れを匡救^{きやうきう}する所無しと謂はんや。

○語注

【筮仕】はじめて仕官する。【四十六年】迂齋が土井利実^{とゐり}に筮仕したのは正徳五（一七一五）年。亡くなつたのが宝暦十（一七六〇）年である。【三世】土井利実、利延、利里。【歴史】代々の君主にひき続いて仕える。【鋒穎】鋭く秀でてゐる。【面折】面と向かつて人の過失を責める。【嘉樂】よろこび、楽しむ。『中庸』十七章に『詩経』大雅から引用して「詩に曰く、嘉樂の君子は憲憲たる令徳あり。」とある。【侯】土井利実。【不虞】予期しないこと。【細故】ささいな事がら。【嗣侯】土井利延。【今侯】『先君子行實』の成立は、後出の篠原惟秀の「書」先君子行實改本後」によると、迂齋の死後一年経過した宝暦十一（一七六一）年以前

と考えられる。従って今侯とは土井利里を指す。【存問】安否をうかがう。【輜輿】肩にかつぐこし。【泄露】露頭と同じ。【忠愍】まめやかで、誠がある。【皜皜】まっしろくきよらか。【要路】重要な地位。

▼三十三

先生蚤歳欲_レ明_二道學_一於海内_一。是以列國諸侯。有_二禮聘以招_一。則往以見。如_二筑前別封_一。故黒田侯長清。「先生蚤爲_二其世子繼高_一授_レ經。及_二繼高紹_二筑前_一。其臣擁陶以欲_レ薦_二先生筑前_一。因累勸_二先生且請謁_一。舉_二舊好_一。先生時方求_二仕進_一。親戚特獎_レ焉。先生以爲士君子出處之道。正繫_二此學之興廢_一。何以_二請託_一求_レ焉。以謬_二一身_一。遂不_二復謁_一。」館林侯武元。秋田侯義明。其別封佐竹侯義敏。阿波侯重喜。龜田侯隆韶。佐貫侯正興。岩村田侯正弼。村松侯直堯。大田喜侯正温_一。皆待以_二客禮_一。至_二土浦侯篤直_一。長島侯正孝。新發田公子直養。杉浦雲州正勝_一。親造_二其宅_一以執_二弟子禮_一。稱呼未_二嘗名_一焉。先生没諸侯皆致_二賻奠_一各有_レ等。先生所下以說_二駕四方諸侯_一。講_レ學談_レ道者。固未_レ可_二豫知_一不_二異日道學之傳因_一此以興_一焉。則亦不_二必爲_一小_二補於天下國家_一也矣。

先生、蚤歳より道學を海内に明らかにせんと欲す。是を以て列國の諸侯、礼聘を以て招くこと有れば、則ち往きて以て見ゆ。筑前の別封、故黒田侯長清「先生、蚤く其の世子繼高の為に經を授く。繼高筑前を紹ぐに及びて、其の臣、擁陶し以て先生を筑前に薦めんと欲し、因りて累りに先生に且く請謁し旧好を挙ぐることを勧む。先生、時に方に仕進を求む。親戚特に焉れを奨む。先生、以爲へらく、士君子出處の道は、正に此學の興廢に繋る。何ぞ請託を以て焉れを求め、以て一身を謬らんやと。遂に復謁えず。」館林侯武元、秋田侯義明、其の別封佐竹侯義敏、阿波侯重喜、龜田侯隆韶、佐貫侯正興、岩村田侯正弼、村松侯直堯、大田

喜侯正温まさなるの如きは、皆待するに客礼を以てす。

土浦侯篤直あつなお、長島侯正孝、新発田公子直養なおやす、杉浦雲州正勝に至りては、親みづから其の宅に造り、以て弟子の礼を執り、称呼するに未だ嘗て名なをよばず。先生没するや、諸侯、皆賻ふてんを致し、各等有り。先生、四方の諸侯に説駕して、学を講じ道を談ずる所以は固もとより未だ予め知るべからず。異日ならずして道学の伝、此れに因りて以て興れば、則ち亦必ずしも天下国家に小補せうほと為さず。

○語注

【蚤歳】若いとき。【筑前別封】黒田長清が、筑前藩第四代藩主である兄綱政から新田五万石を分与されてたてた直方藩。【故黒田侯長清】寛文七（一六六七）年—享保五（一七二〇）年。筑前藩の第三代藩主黒田光之の子。第五代藩主宣政を助けて長崎警備の任を負い、藩政にたずさわった。宣政のあとを嗣いで藩主となった継高は長清の実子。【継高】黒田継高。安永四（一七七五）年に没した。筑前藩五代藩主黒田宣政の養子となり、六代藩主として藩財政を中心とするさまざまな改革を行った。【請謁】権力ある人にたのみこむ。【請託】請謁に同じ。【館林侯武元】館林藩主松平武元（正徳三「一七一三」年—安永八「一七七九」年）。

吉宗、家重、家治の三代に仕え重用された。老中職にあること三十三年、そのうち老中首座を十五年間つとめた。謹厳忠誠、学を好んだ。松平家は武元の祖父にあたる清武（六代將軍家宣の実弟）の代から代々朱子学を信奉した。【秋田侯義明】秋田藩主佐竹義明（享保八「一七二三」年—宝暦八「一七五八」年）。秋田新田藩の第二代藩主佐竹義道の子として生まれ、宗家秋田藩主佐竹義真よしまさの養子となった。若林強斎の弟子小野鶴山および迂斎に師事していた中山菁菰せいぐを侍読に任じた。【其別封佐竹侯義敏】佐竹義明の弟。別封とは元禄十四（一七〇一）年に秋田藩領の内新田二万石を分与されて成立した支藩、秋田新田藩のこと。【阿波侯

重喜】阿波藩第十代藩主蜂須賀重喜（元文三「一七三八」年—享和元「一八〇二」年）。秋田新田藩主佐竹義道の子。佐竹義明、義敏の弟。阿波藩第九代藩主蜂須賀至央（としまさ）の養子となった。【龜田侯隆韶】龜田藩第四代藩主、岩城隆韶（宝永五「一七〇八」年—延享二「一七四九」年）。学問を好み、在府の際には迂齋に師事するとともに、山宮雪樓を侍講として経書を学んだ。龜田藩の陣屋に祠堂を設け、先聖先師を祭ったという。龜田藩は現在の秋田県由利本荘市岩城龜田町周辺。【佐貫侯正弼】佐貫藩主、阿部正興（享保十九「一七三四」年—宝暦十四「一七六四」年）。佐貫藩は現在の千葉県富津市佐貫周辺。【岩村田侯正弼】岩村田藩の藩主内藤正弼（享保十八「一七三三」年—明和七「一七七〇」年）。【村松侯直堯】新潟県旧蒲原郡のうち、村松・七谷・下田・見附地方を領有した村松藩の藩主堀直堯（享保二「一七一七」年—天明五「一七八五」年）。【大田喜侯正温】大多喜藩の藩主松平正温（享保十「一七二五」年—天明二「一七八二」年）。大多喜藩は現在の千葉県夷隅郡大多喜町周辺。【土浦侯篤直】土浦藩主土屋篤直（享保十七「一七三二」年—安永五「一七七六」年）。【長島侯正孝】長島藩主、増山正賛（ましやまさよし）（享保十一「一七二六」年—安永五「一七七六」年）。長島藩は現在の三重県桑名市長島町周辺。【新發田公子直養】新發田藩主溝口直養（元文元「一七三六」年—寛政九「一七九七」年）。浩軒と称した。若い頃から学に志し、稲葉迂齋、野田剛齋、稲葉黙齋に師事した。安永八（一七七九）年、闇齋学派の朱子学を藩学と定め、他の学派の儒学を学ぶことを禁じた。【杉浦雲州正勝】杉浦正勝。出雲守と称した。幕臣。【賻奠】葬儀の際に供える物品、財貨。【有等】おのおの分に応じて。【説駕】自分の説を伝える。「仲尼は説を駕（つた）ふる者なり。」（『法言』学行）。【異日】将来。【先生所下以説駕四方諸侯】講學談道者。固未可豫知不異日道學之傳因此以興焉。則亦不必爲駕四方諸侯。講學談道者。於天下國家也矣】以下のように訓点を變えて書き下した。「先生所下以説駕四方諸侯」。講學談道者。固未可豫知。不異日道學之傳因此以興焉。則亦不必爲駕四方諸侯。講學談道者。於天下國家也矣。【小補】少しの

補い、小利益。なお「則亦不_二必爲_レ小_二補於天下國家_一也矣」は京大本、新発田本では「則亦不_二必爲_レ無_二小_二補於天下國家_一也矣」となっている。これにしたがえば「則ち亦必ずしも天下國家に小補無しと為さざるなり」となる。

▼三十四

自_三闇齋先生紹_二濂洛關閩不傳之學於吾邦_一。佐藤淺見三宅三先生。繼起而闡明大成焉。先生始見_三三先生_一。奮起有_下負_二荷此傳_一之志_上。然而尊_レ之之篤信_レ之之純。「嘗作_下見_三三先生_一説_上。曰佐藤淺見三宅三先生。同受_二業於山崎先生之門_一。其學之所_レ造。其德之所_レ成。固非_三後學所_二敢議_一也。蓋三先生資稟各異而風采亦不_レ一。釋_レ經立_レ論復不_二必同_一。今日學者阿_レ所_レ好。妄論_二優劣_一。乃不可也。予於_二淺見先生_一。侍_二其講筵_一。僅二十五會矣。如_二佐藤三宅二先生_一。則自_二蚤歲_一執_レ籌出_三入其門_一。數十年予至愚極陋未_レ能_レ窺_二其藩牆_一。而至_レ尊_二信三先生_一。則又窃有_レ所_レ不_レ辭_一。」未_下嘗創_二爲新奇_一而成_中一家之學_上矣。是以其所_レ學也。不_レ出_二乎知行兩端_一。而操存持敬貫_二其_一。齊家治國平天下之所_二推及_一。固在_二自己分內當然_一。未_下嘗以_二偏見小成_一爲_レ得_レ矣。其所_レ見也。自_二太極形氣顯微無_レ間_一。至_三人心虛靈寂滅之妙與_二鬼神來格之理_一。蓋有_二洞見而玩味焉默識而牀察焉者_一。又辨_三鳶飛魚躍無聲無臭_一乎老莊釋氏之説_一。未_下嘗分_二牀用本末_一爲_中兩段之看_上矣。其讀_レ書也。本_二諸四子六經濂洛關閩之書_一。以及_二乎子史百家_一。雖_二小說雜誌_一。時或閱_レ之。而未_下嘗不_レ歸_二要約於四子六經_一也。每疾_下世之學者區_二々於註解訓詁_一。未_三嘗知_二聖賢語意氣象_一。又不_レ顧_二其語脉地步之所_一指。而妄以_二私見_一。遷就增益者_上。嘗稱_下朱子言_中聖經字如_二主人_一解者猶_中奴僕_上。又推_二其説_一。曰不_三唯以_レ解爲_二奴僕_一。經亦造_レ道之奴僕也。此其所_三以度_二越諸儒_一。者於_レ是亦可_三以見_二其一端_一也。

闇齋先生、濂洛閩閩不伝の学を吾が邦に紹いでより、佐藤・浅見・三宅三先生、継起して、闇明し大成す。先生、始めて三先生に見え、奮起して此の伝を負荷するの志有り。然して之れを尊ぶことの篤く、之れを信ずることの純なる、「嘗て「三先生に見ゆの説」を作りて曰く、「佐藤・浅見・三宅三先生、同じく業を山崎先生の門に受く。其の学の造る所、其の徳の成す所は、固より後学の敢へて議する所に非ざるなり。蓋し三先生の資稟は各異にして、風采も亦一ならず。経を積み論を立つる、復必ずしも同じからず。今日の学者、好む所に阿り、妄りに優劣を論ずるは、乃ち不可なり。予、浅見先生に、其の講筵に侍すること、僅かに二十五会のみ。佐藤・三宅二先生の如きは、則ち蚤歳より箒を執り其の門に出入すること数十年。予、至愚・極陋、未だ其の藩牆を窺ふ能はず。而れども三先生を尊信するに至りては、則ち又窃かに辞せざる所有りと。」未だ嘗て新奇を創為して一家の学を成さず。

是を以て其の学ぶ所や、知行の両端を出でずして操存・持敬其の二を貫き、齊家・治国・平天下の推及する所は固より自己分内の当然に在り、未だ嘗て偏見・小成を以て得たりと為さず。其の見る所や、太極・形氣、頭微間無きより、人心の虚靈、寂滅の妙と鬼神来格の理とに至るまで、蓋し洞見して玩味し、默識して体察する者有り。又鳶飛魚躍・無声無臭の老・莊・釈氏の説に異なることを弁じ、未だ嘗て体用・本末を分けて兩段の看と為さず。其の書を読むや、諸れを四子・六経、濂洛閩閩の書に本づき、以て子史百家に及ぶ。小説・雜誌と雖も、時に或いは之れを閲し、未だ嘗て要約を四子・六経に帰せずんばあらず。毎に世の学者の、註解・訓詁に区々として、未だ嘗て聖賢の語意・氣象を知らず、又其の語脈・地歩の指す所を顧みずして、妄りに私見を以て遷就し増益する者を疾む。嘗て、「朱子は、聖経の字は主人の如く、解は猶ほ奴僕のごとしと言ふ」と称へ、又其の説を推して曰く、「唯解を以て奴僕と為すのみにあらず、経も亦道に造るの

奴僕なり」と。此れ其の諸儒に度越する所以の者は、是に於て亦以て其の一端を見るべきなり。

○語注

【濂洛閩不傳之學】宋学。濂は濂溪に住んだ周濂溪、洛は洛陽に住んだ程明道・程伊川、閩は閩中に住んだ張横渠、閩は閩中に住んだ朱子を指す。「不傳」については『姫島講義』一の語注参照。【負荷】背負いになう。【見三先生一説】『迂齋先生續集』四に収める。宝暦改元辛未十二月（一七五一年）成立。【藩牆】垣。【不辭】譲らない。【知行】知は致知、つまり窮理。行は力行、つまり居敬。【操存持敬】居敬。【太極形氣顯微無二間】太極（体）と形氣（用）、顕（用）と微（体）のへだてがない。体用一源。【体用一源、顕微間無し。】（程伊川『易伝』。【虚靈】人の心が、形無く虚の状態であるがゆえに靈妙なはたらきをなすさま。「心の虚靈知覚は一のみ。」『中庸章句』序。【明德】なる者は、人の天に得る所にして、虚靈不昧、以て衆理を具へて万事に応ずるものなり。『大学章句』。【鬼神來格之理】亡くなった者の氣が祭祀によつて招来され、祭祀の場に至ること。【默識】無言で心の中に記憶して忘れない。【鳶飛魚躍】理が天地のいたるところで流行発見するさま。「詩に云く、鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍ると。其の上下に察らかなるを言ふなり。」『中庸』二二章。【無聲無臭】朱子が『太極図説解』で、周濂溪の『太極図説』の冒頭の語「無極而太極」を注釈している部分に、「上天の載は声も無く臭も無し。而も実に造化の枢紐にして品彙の根柢也。故に無極にして太極と曰ふ。（後略）」とある。【未下嘗分】勉用本末「爲中兩段之看上矣」体用一源。【子史】書籍を四部に分類して経・史・子・集という。「子」は主として思想家の著書。「史」は歴史書。【區々】こせこせず。【地歩】状況。【遷就】あれこれとこじつける。【聖經】聖人が著した書。【度越】まさる。

▼三十五

先生立_二課日_一。「用_二一與_レ六之日_一。毎月都六會。」集_二書生_一。講_二小學近思錄大中論孟_一。及_レ終_レ業。則循環復講餘_二三四十一年_一焉。其他如下旁應_二門人諸生之需_一所_中講解_上。則詩書集傳。易本義。大中或問集畧。家禮。易學啓蒙。太極通書。西銘解。祭祀來格說。鬼神集說。排釋錄。朱子行狀。講學鞭策錄。道學標的。玉講附錄。靜坐集說。仁說問答。朱易衍義。未_三嘗講_二他雜書_一。先生同帷之友亦多。而至_下其相共負_二荷道學_一者_上。則野田先生德勝。永井先生行達二人而已。「又如_二警澤一天木時中_一。雖_三學德不_二相列_一。而敬重託契焉。又於_二當時唐津家老小杉以長隱醫榎並正固_一。亦嘗所_二重望_一。」佐藤先生嘗冬至日作_レ文。授_三先生與_二此二人者_一。以附_二託學術_一。者亦有_レ由_二於此_一也矣。「佐藤先生嘗語_レ人曰。吾無_レ嚴_二師道_一。且爲_二從慕者_一。講_レ書未_四嘗分_三別友朋與_二門弟_一。而唯至_レ如下呼稱以_二爾汝_一於_中正義。德勝。行達_上。亦且可_二以爲_レ在_二弟子之列_一。及_二佐藤先生卒_一。先生每歲冬至夜。招_二野田。永井_二二子及諸友_一。拜_二讀遺文_一。數十年。」先生又月々立_二課會_一。與_二同門_一。「與_二野田德勝。永井行達。長谷川克明。天木時中_一。爲_二會約_一。後小野崎師由。佐藤就正。多田維則。野澤弘篤亦與焉。」讀_二朱子書節要朱子訓門人_一。數十年。反復凡三四回焉。

先生、課日を立て「一と六との日を用ふ。月毎に都て六会。」書生を集め、『小学』・『近思錄』・『大』・『中』・『論』・『孟』を講じ、業を終ふるに及び、則ち循環し復講すること三、四十年余り。その他旁門人書生の需めに応じ、講解する所の如きは、則ち『詩書集傳』・『易本義』・『大中或問』・『集略』・『家礼』・『易学啓蒙』・『太極』・『通書』・『西（底本は酉）銘解』・『祭祀來格說』・『鬼神集說』・『排釈錄』・『朱子行狀』・『講学鞭策錄』・『道学標的』・『玉講附錄』・『靜坐集說』・『仁說問答』・『朱易衍義』、未だ嘗て他の雜書を講ぜず。

先生、同帷の友、亦多し。而れども其の相共に道学を負荷する者に至りては、則ち野田先生德勝、永井先

生行達、二人のみ。「又、瞽^こ澤一・天木時中の如きは、学徳、相列^{あひだ}ばずと雖も、敬重して託契す。又、當時の唐津家老小杉以長、隱医榎並正固に於いても、亦嘗^{また}て重望する所なり。」佐藤先生、嘗て冬至の日に文を作り、先生と此^この二人の者^{もの}とに授け、以て学術を附託するは、亦此^こに由ること有り。「佐藤先生、嘗て人に語りて曰く、「吾、師道を厳にすること無し。且つ従慕する者の為に書を講じ、未だ嘗て友朋と門弟とを分別せず。而して、唯呼^{ただ}称するに爾汝^{じじよ}を以てすること正義、徳勝、行達に於けるが如きに至りて、亦且^{また}つ以て弟子の列に在りとすべし」と。佐藤先生卒するに及びて、先生、毎歳冬至の夜、野田・永井の二子及び諸友を招き、遺文を拝読すること数十年。」

先生、又月課会を立て、同門「野田徳勝・永井行達・長谷川克明・天木時中と会約を為す。後、小野崎師由・佐藤就正・多田維則・野沢弘篤も亦与^{またあつ}かる。」と『朱子書節要』、『朱子訓門人』を読むこと数十年、反復すること凡^{およ}そ三、四回。

○語注

【用二一與レ六之日】この課会の記録は無窮会神習文庫所蔵『孤松全稿』二五卷から二七卷の『一六課会』に収められている(目録参照)。【餘三四十一年】迂齋が唐津藩邸を出て材木町に転居した享保十(一二二五)年から、その死(宝暦十「一七六〇」年)まで。【詩書集傳】朱子『詩集伝』、蔡沈『書経集伝』。【易本義】『周易本義』。九の語注参照。【大中或問】朱子『大学或問』、『中庸或問』。【集畧】朱子『中庸輯略』。【家禮】『處士越復傳』十の語注参照。【易學啓蒙】九の語注参照。【太極】周濂溪『太極図説』。【通書】周濂溪著。【西銘解】朱子著。張横渠『西銘』の注釈書。【祭祀來格説】三宅尚齋著。忍城の獄中で著した『狼戾録』三卷の中の「祭祀説約」をぬきだして『祭祀來格説』として単行した。【鬼神集説】佐藤直方編。元禄二(一

六八九）年に刊行された。『朱子文集』、『朱子語類』から鬼神の説を選出している。【排釋録】佐藤直方編。貞享二（一六八五）年に成立、翌三年に刊行された。【朱子行状】朱子の弟子黄勉齋（一一五二年—一二二一年）著。【講學鞭策録】佐藤直方編。天和三（一六八三）年成立。翌年刊行された。為学の綱要に関する朱子の語を収録している。【道學標的】佐藤直方編。正徳二（一七一一）年成立。翌三年に刊行された。四書、周濂溪、程明道・程伊川、張横渠、朱子の書から聖学の要諦となる語を収録している。【玉講附録】山崎闇齋編『玉山講義附録』寛文五（二六六五）年成立。朱子『玉山講義』とそれに関する朱子の文を附録として加えている。【静坐集説】佐藤直方編。序に享保丁酉（一七一七）年秋とある。『朱子語類』から静坐に関するものを抄録している。【仁説問答】山崎闇齋編。寛文八（二六六八）年成立。『朱子文集』卷六七所収の「仁説」、「朱子語類」卷一〇五の「仁説図」、および朱子と友人張南軒、呂東萊との間でかわされた仁説を主題とする書簡六編を収録している。【朱易衍義】九の語注参照。【同帷】同門。【野田先生德勝】野田剛齋。『姫島講義』一の語注参照。【永井先生行達】二十一の語注参照。【磬澤一】貞享元（一六八四）年—享保十年（一七二五）年。姓大神氏、筑前国佐原郡原村の人。直方の門人。【天木時中】元禄九（二六九六）年—元文元（一七三六）年。善六と称した。尾張の人。初め佐藤直方に学び、後尚齋の門人となった。伊勢長島藩に仕えた。著書に『為貧説』、『命説』などがある。【小杉以長】享保十三（一七二八）年に没した。土井家家臣。【榎並正固】肥前唐津の眼医。著書に『有学思筆記』がある。【作文】「冬至文」と呼ばれている。享保元（一七一六）年成立。全文は次のとおりである。

道之廢而不_レ行。猶_三擔物之捨_二置地上_一也。若有_三其人出_二於其時_一。則任_レ之而使_レ不_二永墜_一地矣。今務_二聖学_一者乃擔夫也。俗學之徒則路中之游手耳。何足_レ望_二道之任_一乎。朝鮮李退溪之後。欲_レ負_二荷此道_一者。吾未_レ聞_二其人_一焉。中庸序_レ謂吾道之所_レ寄。不_レ越_二乎言語文字之間_一。正謂_レ此也。我邦

自_レ古_二于_一今_一。欲_レ任_二此道_一者幾人也耶。二三子有_レ志_二於聖學_一矣乎。無乎。若果有_二其志_一。則堅_二立脊梁骨_一。可_二以願_レ學_二孔孟_一矣。曾子不_レ云乎。士不_レ可_二以不_二弘毅_一。任重而道遠。仁以為_二己任_一。不_二亦重_一乎。死而後已。不_二亦遠_一乎。豈悠々徘徊。終_二歲月_一。與_二夫游手浮浪之徒_一。為_二伯仲_一哉。享保丙申冬至日。直方書_レ之。與_二鈴木正義。野田德勝。永井行達_一。以勵_二其志_一云。

道の廢_{すた}れて行はれざるは、猶ほ担物を之れ地上に捨て置くがごとし。若_もし、其の人、其の時に出づること有らば、則ち之れに任じて永く地に墜ちざらしむ。今聖学を務むる者は、乃ち担夫なり。俗学の徒は、則ち路中の遊手のみ。何ぞ道の任を望むに足らんや。朝鮮の李退溪の後、此の道を負荷せんと欲する者、吾未だ其の人を聞かず。『中庸』序に謂ふ所の「吾道の寄する所は、言語文字の間を越えず」とは、正に此の謂なり。我が邦、古へより今に至るまで、此の道を任ぜんと欲する者、幾人ぞや。二三子、聖学に志有るか、無きか。若_もし果して其の志有らば、則ち脊梁骨を堅立_{けんりつ}し、以て孔孟を学ぶことを願ふべし。曾子云はずや。「士は以て弘毅ならざるべからず。任重くして道遠し。仁以て己が任と為す、亦重からずや。死して後已まん、亦遠からずや」と。豈悠々と徘徊して歳月を終へ、夫の遊手、浮浪の徒と伯仲を為さんや。

享保丙申冬至の日、直方之_レれを書し、鈴木正義、野田德勝、永井行達に与へ、以て其の志を励ます。云。

【爾汝】親しい間柄で用いる二人称代名詞。【長谷川克明】『處士越復傳』五の語注、篋崎觀翁参照。【小野崎師由】小野崎舍人。『處士越復傳』五の語注、谷倉舍人参照。【佐藤就正】十二の語注参照。【多田維則】多田東溪。『處士越復傳』五の語注、西郭田子儀参照。【野澤弘篤】『處士越復傳』五の語注、仙岸野子重参

照。【朱子書節要】李退溪（一五〇一年—一五七〇年）編。朱子の文集の中の書簡から、学問、あるいは日用の工夫に関する重要な書簡を選び、収録している。【朱子訓門人】『朱子語類』の一三から一二一。

▼三十六

先生長_二於譬喻_一。圓轉妙旨使_二人人省悟不_レ知_二手舞足蹈_一。講解用_二俗語_一。要_二聽者易_レ曉。然無_二復及_二市井俚巷之語_一。詞氣怡々吐言不_レ竭。自_二道牀性命之原_一。至_二天下事物之變_一。從橫抑揚歸_二要於民生日用之實_一。猶_下江河之激湍沖瀾雖_レ如_レ無_二津涯_一。而乍合乍散同入_二於海_一而流_上也。非_レ如_二他人剽聞掠說藉_レ口嘗試者_一也。故從遊之士有_二達識_一者。則未_二嘗爲_二就以治_レ經。而其玩_二味一夜之話_一。以至_二覺悟_一。殆似_下李初平之見_二濂溪_一。尹彥明之從_中伊川_上者或有_レ之矣。蓋先生所_二以自得焉而人由以興起_一者至_二于此_一。先生於_二中庸論語通書易本義_一。尤長但其熟玩自得之餘地。皆在_二無味處_一。「嘗每_下講_二本義_一。說_二出人事形勢之迹_一。有_中妙旨_上。乃曰說過出_レ此一步乃非_二復易本義_一。在_二本義上_一。有_二無盡道理_一。此本義之所_三以爲_二本義_一。而又所_三以異_二於程傳_一。者也。晚解_二詩經_一。令_丁聽者興起如_丙反_二三代于古_一。親浴_乙其風_甲矣。」

先生、譬喻_{ひゆ}に長じ、円転妙旨、人人をして省悟せしめ、手の舞ひ足の蹈_ふむを知らざらしむ。講解には俗語を用ひ、聴_きく者の曉_{さと}り易_いからんことを要す。然るに復_{また}市井俚巷の語に及ぶこと無し。詞氣怡々として吐言竭_つきず。道体・性命の原より天下事物の変に至るまで從横に抑揚し、要を民生日用の実に歸すこと、猶ほ江河の激湍沖瀾_{ゆうもつゆわう}たる、津涯_{しんが}無きが如しと雖も、乍_{また}合ひ乍ち散じて、同じく海に入りて流るるがごとし。他人の剽聞・掠_{しやう}説し藉口・嘗試_{しやうし}する者の如きには非ざるなり。故に從遊の士の達識有る者は、則ち未だ嘗て就_まきて以て經を治むることを為さずして、其の一夜の話を玩味して以て覺悟するに至る。殆ど李初平の濂溪に見

え、尹彦明の伊川に従ふに似る者、或いは之れ有らん。蓋し先生の自得して、人の由りて以て興起する所以は此に至る。

先生、『中庸』・『論語』・『通書』・『易本義』に於いて尤も長ぜり。但し其の熟玩して自得する余地は、皆無味なる処に在り。「嘗て『本義』を講じ、人事・形勢の迹を説き出だして妙旨有る毎に、乃ち曰く、「説き過ぎて此れを出づること一步すれば、乃ち復『易本義』に非ず。『本義』の上に在りて無尽の道理有り。此れ『本義』の『本義』為る所以にして、又『程伝』に異なる所以の者なり」と。晩に『詩経』を解き、聴く者をして興起せしむること、三代の古に反り親しく其の風に浴するが如くならしむ。」

○語注

【圓轉】とどこおらず自由自在。【性命】天より賦与され具有している理。「而るに以て人心、道心の異なるもの有り」と為すは、則ち其の或いは形氣の私に生じ、或いは性命の正しきに原づくを以て、知覚を為す所以の者同じからず」(『中庸章句』序)。「激湍」流れるさま。【沖融】「沖」は「冲」の俗字。水のふかくひろいさま。【津涯】岸辺。【藉口】口実をもうけていいわけをする。【從遊】師につくために遠くに出かける。【初平】宋代の人。周濂溪に学んだ。【尹彦明】尹焞(一〇七一年—一一四二年)。号は和靖。程伊川に学んだ。著書に『孟子解』、『和靖集』がある。【程傳】程伊川『易伝』。『易伝』が義理を極めて精密に説き、修身治世の道を明らかにしたのに対して、朱子の『易本義』はあくまでも『易』を卜筮の書としてとらえ、卦画とそれにつけられている卦爻辞の本来の意味を明らかにしようと務めた。「又『程伝』に異なる所以なり」はこの相異をふまえる。

▼三十七

先生教_レ人。殆有_下如_二或俯就_レ之者_上。而未_二敢引而自高_一焉。亦隨_二其材_一。而教導焉。未_三嘗責_二其所_レ不能_レ爲者_一。故無_下爲_二已甚_一。露_{節角上}。唯至_三其論_二大義_一。則斷然以_レ義決無_レ所復含_二糊調_三護其間_一也。是以學之著_二事業_一者。道之復_二古者_一。如_レ其受_レ教侯伯或造_二祠堂_一。建_二學校_一。與_内彼從遊學士義去_レ國辭_二異姓_一。歸_乙本氏_甲。偶有_二奮發興起者_一。乃先生輒嘉賞贊成亦未_三嘗問_二其成敗如何_一矣。如_下世之老師宿儒再三校_二計成敗_一雖_二周密似_レ厚。然非_二儒者任_二道之心_一。而反折_二後生英發之氣_一者_上。先生常擯_二斥_一之。故如_二再嫁說_一。如_二養子論_一。嚴且厲。而不_レ求_二備於人_一。故婦之再嫁者。惡_レ之不_レ至_二已甚_一。士之出贅者。又未_三嘗絕_二其交_一。情實似_レ薄。而本篤。氣槩如_レ柔。而實則剛望_レ人之恕。責_レ己之嚴。亦如_レ此。先生取_レ人。舍_レ短錄_レ長。略_二細過_一。而揚_二大節_一。如_三一時湖海之士狂簡倨敖輕_二蔑諸老先輩_一。亦及_レ一_二見先生_一。輒折_レ節屈降。「如_二山宮維深_一。學雖_レ未_レ醇。而一世英秀也如_二唐崎彦明_一。德雖_レ未_レ熟。而一世之俊傑也。此二人者。自高不_レ降_レ人者也。而及_レ見_二先生_一。皆恭敬尊讓。殆執_二弟子禮_一矣。蓋先生德量之非_二令_レ然者_一耶。維深之死。諸儒醜焉不_レ顧。先生奔起弔_二妻子_一。彥明之放。諸儒棄焉不_レ訪。先生調卹致_二恩意_一。」

先生の人に教ふるや、殆ど或いは俯して之れに就くが如き者有りて、未だ敢へて引きて自ら高くせず。亦其の材に随ひて教導し、未だ嘗て其の爲す能はざる所の者を責めず。故に已甚_{はなは}だしきことを爲して節角を露はすこと無し。唯其の大義を論ずるに至りては、則ち断然と義を以て決し、復其の間を含糊_{がんに}・調護する所無し。是を以て学の事業に著_あるる者、道の古昔_{こせき}（底本は「昔」は無し）に復_{かへ}る者の、其の教へを受くる侯伯の或いは祠堂を造り学校を建つと、彼の從遊する学士の義により国を去り、異姓を辞して本氏に帰るとの如く、偶奮_{ふんふん}發し興起する者有れば、乃ち先生輒_{すなは}ち嘉賞して賛成す。亦未だ嘗て其の成敗の如何を問はず。

世の老師・宿儒の再三成敗を校計して、周密なること厚きに似たりと雖も、然れども儒者の道を任ずるの心に非ずして、反りて後生の英発の氣を折く者の如きは、先生常に之れを擯斥す。故に『再嫁説』の如き、『養子論』の如きは、厳且つ厲、而れども備はるを人に求めず。故に婦の再嫁する者、之れを惡むこと已甚だしきに至らず。士の出贅する者、又未だ嘗て其の交はりを絶たず。情実薄きに似て本は篤く、氣概柔なるが如くして実は則ち剛なり。人に望むの恕、己を責むるの嚴、亦此くの如し。

先生、人を取るに短を捨て長を録り、細過を略して太節を揚ぐ。一時湖海の士、狂簡・倨敖にして諸老・先輩を輕蔑するが如きも、亦先生に一見するに及びて、輒ち節を折つて屈降す。「山宮維深の如きは、学未だ醇ならずと雖も、一世の英秀なり。唐崎彦明の如きは、徳未だ熟せずと雖も、一世の俊傑なり。此の二人は、自ら高くして人に降らざる者なり。而れども先生に見ゆるに及び、皆恭敬し、尊讓し、殆ど弟子の礼を執る。蓋し先生の徳量の然らしむる者に非ずや。維深の死するや、諸儒醜として顧みず。先生奔起して妻子を弔ふ。彦明の放たれるや、諸儒棄てて訪はず。先生調卹して恩意を致す。」

○語注

【殆有_下如_レ或俯就_レ之者_上。而末_二敢引而自高_一焉。】「程子曰く、聖人の人を教ふるや、俯して之れに就くこと此くの若し。猶衆人_{（なほ）}以て高遠として親しまざることを恐れるごとし。聖人の道、必ず降りて自ら卑くす。此くの如くならざれば、則ち人親しまず。賢人の言、則ち引きて自ら高くす。此くの如くならざれば、則ち道尊からず。」（『論語』子罕・子曰吾有知乎哉章の朱注）【材】資質。【已甚】「孟子曰く、仲尼は已甚だしきを為さざる者なり。」（『孟子』離婁下）。【以_レ義決】「決」は「決」の俗字。【含糊】ごまかす。【調護】ととのえおさめる。【古者】新発田本、京大本により「古昔者」とした。【再嫁説】未詳。迂齋の再嫁に関する説

としては、『迂齋先生文集』の中の『卒年文稿』に、中山氏の再嫁説に寄せた迂齋の跋がある。宝暦十（一七六〇）年成立。【養子論】七の語注参照。【不_レ求_二備_一於人_一】「備はるを一人に求むること無かれ。」（『論語』微子）。【出贅】家を出て他家の入り婿になる。【録】記憶する。【太節】留意して守るべき重要なこと。【湖海之士】豪快な気風があつて野にある人。【狂簡】「吾党の小子、狂簡、斐然として章を成す。」（『論語』公治長）。【狂簡】について朱注には「狂簡は志大にして、事において略なり。」とある。【山宮維深】山宮雪樓。『處士越復傳』九の語注参照。山宮維深は川越侯松平大和守に仕えたが道合わずして出境するに及んで、盜賊によつて惨殺された。後出の「維深の死するや、諸儒醜として顧みず」の「醜」とはこのことを指すと考えられる。【唐崎彦明】『處士越復傳』十一の語注、「唐彦明」参照。【關卬】施しめぐむ。

▼三十八

蓋徳容盈溢感_二動人_一者。有_二不_レ可_レ誣_一者。先生以_二恬淡_一之性。成_二淳厚_一之徳。不_レ動_二精氣_一。事皆成。所見高遠。率_レ性會_レ道。不_レ區_二々事爲_一之末。始有_下出_二塵埃_一之趣_上。故望_二學者_一。不_三必取_二其敦篤可_レ保者_一。獨樂_下得_二通敏穎悟聞_レ道怡笑者_一。而教_中育_上之。故見_下雖_二老成徳望有_レ餘_一。而持論卑近無_レ足_三以警_二發人_一者_上。則爲_レ之歎。其學無_レ傳矣。嘗謂吾學無_二足_レ道者_一。唯善會_二先師之意_一。常傳_二先師之言_一而已。【嘗薦_下正信於一二大守求_レ講_レ書者_上。曰此兒行實無_二一可_レ取_二只會_二父解_レ經之意_一。又儘_レ傳_二佐藤先生之言_一而已。蓋雖_レ疾_二正信放蕩不軌_一。又許_下其知_二旨訣_一說_中好話_上。亦可_レ見_乙此學之末_二必謹厚拘滯之可_レ傳_一。而又無_下以_二其子_一。避_中嫌於其間_上者_甲矣】

蓋し徳容盈溢^{えいいつ}して人を感動する者、誣^しふべからざる者有り。先生、恬淡^{てんたん}の性を以て淳厚の徳を成し、精氣

を動かさずして事皆成る。見る所高遠にして、性に率^{しな}ひて道に会ひ、事為の末に区々とせずして、始めて塵埃^{あひ}を出づるの趣有り。故に学者に望むに、必ずしも其の敦篤^{とんとく}保つべき者を取らず、独り通敏・穎悟^{えいご}にして道を聞き怡笑する者を得て、之^これを教育することを樂しむのみ。故に老成して徳望余り有りと雖も、持論卑近にして以て人を警発するに足る無き者を見ては、則ち之^これが為に其の学の伝はること無きを歎ず。嘗て謂ふ、「吾が学、道^いふに足る者無し。唯^{ただ}善く先師の意を会し、常に先師の言を伝ふるのみ」と。「嘗て正信を、一二の太守^{たいしゅ}の書を講ずることを求むる者に、薦めて曰く、「此の児の行実、一も取るべきもの無し。只、父の経を解く^{たいしゅ}の意を会し、又儘く佐藤先生の言を伝ふるのみ」と。蓋し正信の放蕩不軌^{にんく}を疾むと雖も、又其の旨訣を知りて好話を説くを許す。亦、此の学の未だ必ずしも謹厚に拘滞するの伝ふべからずして、又其の子を以て其の間に避嫌^{ひけん}すること無きを見るべし。」

○語注

【盈溢】満ちあふれる。【誣】あざむく。【恬淡】あつさりとして無欲なさま。【淳厚】真心があつて手厚い。【率^し性會^い道】「天の命ずる、之れを性と謂ふ。性に従ふ、之れを道と謂ふ。道を修むる、之れを教へと謂ふ。」(『中庸』第二章)。【塵埃】俗世間。

▼三十九

燕居莊敬未^三嘗見^二其箕踞盤坐^一。故臨^レ之也。若^レ不^レ可^レ犯。而及^レ接^レ之。和悦恂々色笑可^レ親。是以老少賢愚皆相歡洽。然亦不^レ可^レ狎者有焉。常虚^レ懷待^レ人不^レ疑^二其欺妄^一。性淳質不^レ解^二末俗機事^一。或如^レ至^二數爲^レ之見^一欺。而未^三嘗墮^二其術中^一。蓋心有^二權度^一。貴^レ明不^レ容^レ察者。足^四以見^三其度量所^二以寬大^一也。先

生觀^レ人尤明徹。於^レ是雖^レ與^二人之爲^一善。而於^二全軀^一。則大抵少^二然可^一。嘗咲^下人忽見^三人有^二一善行^一。顯然許可。及^レ聞^三其有^二一惡行^一。遽貶爲^レ不^レ可^二賴望^一者^上以爲亦何甚耶。先生性和順。不^レ爲^二崖岸斬絶之行^一。常欣々善與^二家人^一語。而未^二嘗毀譽^一人。故雖^下平居待^二妻孥^一之言^上。未^丙曾有^レ不^レ可^下對^二外人^一而言^上者^甲矣。夫以論^二世之人^一。乃怨讐橫逆之來。坦夷不^レ宿意甚可^レ稱。至^二於先生^一則雖^二悍暴兇猾之徒^一。未^三嘗構^二讎逆^一於先生^一。亦烏在^レ論^二坦夷不^レ宿意^一。

燕居して莊敬、未だ嘗て其の箕踞盤坐するを見ず。故に之れに臨むや、犯すべからざるが若し。而れども之れに接するに及べば、和悦恂々として色笑親しむべし。是を以て老少賢愚、皆相欽洽す。然れども亦狎るべからざる者有り。常に懷を虚しくして人に待し、其の欺妄を疑はず。性、淳質にして未俗の機事を解せざること、或いは数之れが爲に欺かるるに至るが如し。而れども、未だ嘗て其の術中に堕ちず。蓋し心に権度有り、明を貴び察するを容れざる者は、以て其の度量の寛大なる所以を見るに足る。

先生、人を觀るに尤も明徹たり。是に於いて、人の善を爲すを與くと雖も、全体に於いては則ち大抵然可少なし。嘗て人の、忽ち人に一善行有るを見ては、顕然として許可し、其の一惡行有るを聞くに及びては、遽かに貶めて賴望すべからずと爲す者を咲ひて、以爲へらく、亦何ぞ甚しきやと。

先生、性和順にして崖岸斬絶の行を爲さず。常に欣々として善く家人と語り、未だ嘗て人を毀譽せず。故に平居、妻孥に待するの言と雖も、未だ嘗て外人に対して言ふべからざる者有らず。夫れ以て世の人を論ずれば、乃ち怨讐・横逆の来りて、坦夷にして意を宿さざるは甚だ称すべし。先生に至りては、則ち悍暴兇猾の徒と雖も、未だ嘗て讐逆を先生に構へず。亦烏くんぞ坦夷にして意を宿さざるを論ずるに在らんや。

○語注

【箕踞】兩足を前に伸ばし尻をおろしてすわる。【恂々】「孔子、郷党に於いて恂恂如たり。」（『論語』郷党）。朱注に「恂恂は信実の貌」とある。【歡洽】喜びうちとける。【機事】たくらみの行い。【權度】はかりとものさし。転じて規則、法則。【雖レ與二人之爲レ善】『論語』憲問・子問公叔文子章の朱注に「君子は人の善を為すを與け、其の非を正言するを欲せず。」とある。【崖岸】性質がかどだつて人となごやかにできない。【斬絶】崖がけわしくきり絶つさま。【欣々】喜び楽しむ様さま。【妻孥】妻と子ども。【怨讐】うらみあう関係になる。【横逆】「其の我を待つに横逆を以てすれば、則ち君子必ず自ら反するなり。」（『孟子』離婁下）。朱注に「横逆は強暴、理に順はざるを謂ふなり。」とある。【坦夷】たいらか。

▼四十

先生動息臥起之給_レ用者皆親焉。未_下悉呼_二子婦僮僕_一。給_中使令_上。嘗言古人運_二百甕於齋外_一。凡百身之安佚心反_レ不安。其有_二微恙_一。不_三必用_二艸根木皮_一。以爲良醫不_レ醫。夏葛冬裘。飢食渴飲。少_二嗜欲一定_二心氣_一。是實吾家方劑。子婦婢童。請_レ按_二摩其痛痒_一。乃言吾本寒素穹士。今浴_二公養_一。然性壯實。老尚輕健。何安_二佚四體_一。以習_二輒弱之態_一。先生簡易寡欲。至_二於用_レ財又尤儉。雖_レ未_二嘗求_レ人。而人或饋_レ之。則復不_二必固辭_一。又未_三嘗論_二多寡厚薄_一。嘗愛_三公子荆善居_レ室在_二苟字_一。是以食之可_二於口_一者。不_レ厭_二其甘旨_一。衣之適_二於體_一者。不_レ厭_二其觀美_一。然而未_三嘗在_二強用_一。晚歲以_二四方仰慕者多_一。頗備_二酒肉珍味_一。家貲事力亦非_レ如_二往時_一。是以自奉亦殆豐麗。先生以爲_レ不_レ安云。先君貧屢甘旨未_二盡給_一。每_三話及_二范文正_一感愴塞_レ心。其至_二淚下_一者數。

先生、動息・臥起の用に給するは皆親らして、未だ悉くは子婦・僮僕を呼びて使令に給せず。嘗て言ふ、「古人、百髧を齋外に運ぶ。凡百、身の安佚なる、心反つて安からず」と。其の微恙有るも、必ずしも草根木皮を用ひず。以為へらく、良医は医せず。夏は葛、冬は裘、飢えて食ひ、渴きて飲む。嗜欲を少くして心氣を定む。是れ実に吾が家の方劑なりと。子婦・婢童、其の痛痒を按摩せんことを請ふ。乃ち言ふ、「吾本寒素の窮士たり。今公養に浴し、然も性壯実、老いて尚ほ輕健なり。何ぞ四体を安佚にして、以て軟弱の態を習はんや」と。

先生、簡易寡欲にして、財を用ふるに至りては又尤も儉なり。未だ嘗て人に求めずと雖も、人或いは之れに饋れば、則ち復必ずしも固辞せず。又未だ嘗て多寡厚薄を論ぜず。嘗て公子荆の善く室に居ること、「苟」の字に在るを愛す。是を以て食の口に可なる者は其の甘旨を厭はず、衣の体に適ふ者は其の觀美を厭はず。然れども未だ嘗て強ひて用ふるに在らず。

晩歳、四方仰慕する者多きを以て、頗る酒肉珍味を備ふ。家貲事力も亦往時の如くに非ず。是を以て自奉すること亦殆ど豊麗なり。先生以て安からずと為して云ふ、「先君、貧窶にして甘旨未だ尽くは給せず」と。話、范文正に及ぶ毎に感愴心を塞ぎ、其の涙下に至ること数なり。

○語注

【子婦】子とその嫁。【古人運百髧於齋外】東晋の名將であり、陶淵明の曾祖父である陶侃の故事による。『晋書』列伝第三六陶侃に「侃、州に在り事無ければ、輒ち朝に百髧を齋外に運び、暮れに齋内に運ぶ。」とある。【微恙】軽い病氣。【夏葛冬裘】飢食渴飲。【夏は葛して冬は裘し、渴しては飲み飢えては食らう、その事は殊なれども、その智たるゆえんは一なり。】（韓愈『原道』）。【寒素】清貧。【公養】「孔子に行可を

見るの仕へ有り、際可の仕へ有り、公養の仕へ有り。」(『孟子』萬章下)。朱注に「公養は国君の賢を養ふの礼なり」とある。【輒弱之態】「輒」は「軟」の本字。【愛三公子荆善居室在二荀字】「善く室に居る」は家もちがよいこと。「荀」は、まあどうかというほどの意味。「子、衛の公子荆を謂ふ。「善く室に居る。始め有るに曰く、「荀か合る」と。少しく有るに曰く、「荀か完し」と。富んに有るに曰く、「荀か美なり」と。」(『論語』子路)。朱注に「公子荆は衛の大夫。荀は聊か且つ粗略の意なり。合は聚まるなり。完は備はるなり。言ふところは、其の序でに循ひて節有り。速きを欲し、美を尽くすを以て其の心を累らず」とある。【事力】僮僕。【自奉】自分の衣食などに不足のないようにする。【先君】迂斎の父。【范文正】范仲淹(九八九年—一〇五二年)。字は希文。江蘇省呉県の人。宋の名臣。著書に『范文正公集』二四巻がある。『宋名臣言行録』の范文正の逸話に次のような一節がある。「公、すでに貴きも、常に儉約を以て家人を率ふ。かつ諸子を誡めて曰く、「吾、貧なりし時、汝が母と吾が親を養ふ。汝が母、躬ら爨を執れども、吾が親の甘旨、いまだかつて充たざりしなり。今にして厚禄を得、以て親を養はんと欲するも、親は在さざるなり。汝が母もまたすでに早世せり。吾の最も恨むところのものは、若曹をして富貴の樂を饗けしむるを忍ぶことなり。」と。【感愴】心を動かしたむ。

▼四十一

先生卑遜接レ物。親舊門人至レ家輒輟レ事速出對。如二履端伏臘一。遠近書牘積成レ堆。然未三嘗不二親報一。曾無二倦色一。筆翰之不二壅滯一。門内之無二停客一。有下若二晋人陶侃之爲一者上也。親疏慶弔問訊必先焉。雖二幼賤一必躬造。嘗語レ人曰。生涯清閑。無二復鞅掌一。與レ人往復爲レ禮吾當然處。此中自有二樂地一。此其所三以非二勉勵強作一也。平居晨興夜半而寢。每旦着二禮服一。炷レ香望三拜父母先師一。雖二病臥旅館一未二嘗變一。每二

考妣忌辰^一。質明出^レ家至^二宗家^一。助^二奠禮^一。雖^二疾風甚雨^一必行。終身不^レ衰。「自^二先生二十四喪^レ母^一。三十七喪^レ父至^二卒前一年^一。忌辰與^二其祭^一。無^レ虛日^一。宗家相去又遠。然未^二嘗以爲^レ勞^一。」竊瞻^二先生愍實敦篤之狀^一。殆似^二三宅翁^一。而學皆準^二於佐藤子^一矣。竊仰^二先生言談詞氣之風^一。殆似^二佐藤子^一。而行皆則^二於三宅翁^一矣。先生之所^レ見。先生之所^レ踐。足目無^レ非^レ由^二於二君子^一。此先生所^三以爲^二先生^一者爾也矣哉。

先生、卑遜にして物に接し、親旧・門人家に至れば、輒^{すなは}ち事を輟^やめ速^{すみ}やかに出対す。履端・伏臘の如き、遠近の書牘、積みて堆^{たい}を成す。然るに未だ嘗て親^みから報^かぜずんばあらずして、曾^{かつ}て倦色無^{けんしき}し。筆翰^{ひつかん}の壅滯^{ようたい}せざる、門内の停客無きこと、晋人陶侃^{たうかん}の爲すが若^{ごと}き者有^あり。親疏の慶弔の問訊は必ず先として、幼賤と雖も必ず躬^{みづか}ら造^{いた}る。嘗て人に語りて曰く、「生涯清閑にして復^{また}執^と掌^{しやう}すること無^あし。人と往復して礼を爲すは、吾が当然の処なり。此の中に自から楽地有^あり」と。此れ其の勉勵^{きんり}強作^{きやうさく}するに非ざる所以なり。

平居^{あじ}晨に興^{おこ}き、夜半に寝ぬ。毎旦礼服を着^{きた}け、香を炷^たき、父母・先師を望拜す。病臥、旅館と雖も未だ嘗て変ぜず。考妣の忌辰^{きしん}毎に、質明に家を出で、宗家に至り、奠礼を助く。疾風・甚雨と雖も必ず行ひ、終身衰へず。「先生、二十四にして母を喪ひ、三十七にして父を喪ふより、卒する前一年に至るまで、忌辰に其の祭りに与^{あづ}かりて、虚日無^あし。宗家相去りて又遠し。然れども未だ嘗て以て勞と爲さず。」

窃^{ひそ}かに先生の慇懃^{かんしん}敦篤^{とんこく}の状を瞻^みるに、殆ど三宅翁に似たり。而して学は皆佐藤子に準ず。窃^{ひそ}かに先生の言談詞氣の風を仰ぐに、殆ど佐藤子に似たり。而して行は皆三宅翁に似る。先生の見所、先生の踐^ふむ所、足目、二君子に由るに非ざるは無^あし。此れ先生の先生爲る所以の者、爾^{しか}なり。

○語注

【親舊】親類とむかしなじみの友。【書牘】てがみ。【倦色】あきた顔つき。【筆翰之不壅滯】。門内之無二停客^一。有^下若^二晋人陶侃之爲^上者也。【「壅滯」はふさがりとどこおる。「陶侃」は四十の語注、「古人運三百甕於齋外^二」の項参照。『晋書』列伝第三六陶侃に「遠近の書疏、手^{てがみ}ら答へざる莫し。筆翰流れる如く未だ嘗て壅滯せず。疎遠を引接して、門に停客無し。」とある。【執筆】仕事が多くて服を整えるひまもない。【強作】強いてなす。【晨】早朝。【考妣】死んだ父母。【忌辰】親の命日。【質明】夜あけがた。【愍實】つつしみ深く正直。

▼四十二

先生愛^二山林泉石之勝^一。教授餘暇。偶會^二天晴氣爽^一。從^二一二親舊門人^一。出尋^二景勝^一。如^二隅田川飛鳥山^一。無^レ不^二年々一至^一焉。平生有^二適意^一。則賦^レ詩。爲^レ文。然未^二嘗留^二意於其間^一。而又至^下關^二學術之大體^一者^上。則慨然揮^レ毫。嘗以^二佐藤先生之命^一。辨^二伊藤仁齋之學^一。名曰^二初學秦蕪辨^一。又憂^下徂徠物茂卿以^二古學^一。鼓^二扇一世^一。註^中誤書生^上。欲^レ著^レ書而闕^レ焉。而及^レ見^三唐崎彦明著述辨^レ之。無^二復遺蘊^一。終閣^二手筆^一。至^三其門人小子錄^二平日之語^一。亦皆既類集。今藏^二于家^一者。文集十卷。續集四卷。別集一卷。附錄一卷。雜稿三卷。和書集五卷。續和書集五卷。學話二十八卷。附錄十六卷。卒年文稿一卷。皆未^レ脱稿。先生卒明年。侯命^二嗣子正直^一。世^レ祿。奉^二祭祀^一。次子正信考^三其譜系履歷之大者與^二言行學德之著者^一如^レ此。又竊附^二片言於篇末^一。曰先生道有^二淵源^一矣。學有^二宗旨^一矣。而至^三於其所^二以得焉爲^レ德。則乃殆庶^二乎古人所^レ謂安而成者^一也歟。遂以^レ此。終^二行實之筆^一。謹撰。

男稻葉正信撰

先生、山林泉石の勝を愛し、教授之余暇、偶たま天晴れ気爽やかなるに会へば、一二の親旧・門人を従へ、出でて景勝を尋ぬ。隅田川・飛鳥山の如き、年々一たび至らざるは無し。

平生、適意有れば、則ち詩を賦し文を為す。然るに、未だ嘗て意を其の間に留めず。而して又學術の大体に關はる者に至りては、則ち慨然がいぜんとして毫を揮ふるふ。嘗て佐藤先生の命を以て伊藤仁齋の学を弁じ、名づけて『初学纂蕪弁』と曰ふ。又徂徠物茂卿、古学を以て一世を鼓扇し、書生を註誤かいごするを憂へ、書を著して闢しりぞけんと欲す。而るに唐崎彦明の著述、之れを弁じて復遺蘊またあうん無きを見るに及びて、終に手筆を闕おく。

其の門人・小子、平日の語を録するに至りては、亦皆既に類集す。今家に藏する者は、文集十卷、続集四卷、別集一卷、附録一卷、雜稿三卷、和書集五卷、続和書集五卷、学話二十八卷、附録十六卷、卒年文稿一卷。皆未だ稿を脱せず。

先生卒する明年、侯、嗣子正直に命じ、祿を世にし祭祀を奉ぜしむ。次子正信、其の譜系履歴の大なる者と、言行學徳の著しき者とを考ふること此こくの如し。又竊ひそかに片言を篇末に附して曰く、「先生、道に淵源有り、学そに宗旨し有り。其の得て徳と為す所以に至りては、則ち殆ど古人の所謂「安んじて成す者」に庶ちかからんか」と。遂に此これを以て行実の筆を終ふ。謹んで撰す。

男 稲葉正信 撰す

○語注

【適意】心にかなう。【慨然】いきどおりなげくさま。【初學纂蕪辨】正徳五（一七一五）年、成立。『迂齋先生文集』六、所収。「纂蕪」は正道を害するもの。【註誤】あざむいて人をまきこんで罪を犯させる。【遺蘊】もれのこす。【小子】後輩。

▼四十三

正信既撰^二先君子行實^一。又偶讀^二淵源續錄^一。及^二延平部^一。朱子叙^二其事^一。曰閨門内外夷愉肅穆。與^二族婣舊故^一。恩意篤厚久而不^レ忘。處^二生事^一。量^レ入爲^レ出。與^二鄉人^一居。飲食言笑油々如也。色温言厲。神定氣和。端詳閑泰。於^レ事若^レ無^二甚可否^一。及^二其酬^二酢事變^一。斷以^二義理^一。則有^下截然不^レ可^レ犯者^上。清通和樂。展也大成。神彩精明。略無^二墮墮之氣^一也。凡此數文字。先君子以有^二近似^一之矣。因抄謄。附^二行實之後^一云。

孤松全稿卷之三先君子行實終

正信、既に『先君子行実』を撰す。又偶^{ふたまたま}『淵源続録』を読み、「延平部」に及ぶ。朱子、其の事を叙べて曰く、「閨門の内外夷愉^{いゆ}たり、肅穆^{しゆくぼく}たり。族婣^{いん}・旧故との恩意、篤厚久しくして忘れず。生事^{せいじ}を処するに入るを量りて出づるを爲す。郷人と居り、飲食し言笑すること油油^{いういう}如なり。色温^{おん}にして言厲^{はげ}しく、神定まりて氣和^{やは}らぐ。端詳閑泰^{たんしょうかんたい}にして、事に於いて甚だ可否^{かふふ}すること無きが若し^{ごと}。其の事変に酬酢^{しうそく}するに及びては、断ずるに義理を以てし、則ち截然^{せつぜん}として犯すべからざる者有り。清通和樂^{せいとうわがく}にして展に大成す。神彩精明にして、略墮墮^{はつたいだ}の氣無し」と。凡そ此の數文字、先君子以て之れに近く似たること有り。因りて抄謄し『行実』の後に附す、云。

孤松全稿卷之三先君子行實終

○語注

【淵源續錄】『伊洛淵源續錄』。明の謝鐸^{しやんとく}（一四三五年—一五一〇年）著。全六卷。一四八〇年に刊行された。羅從彦^{しよしゆん}、李延平、朱子、張南軒ら二十一人の言行を集録したもの。【延平部】『伊洛淵源續錄』卷第二の中の「延平李先生」の部分を用いる。李延平（一〇九三年—一一六三年）は、名は侗、字は愿中。諡は文靖。宋の南劍州、劍浦の人。羅從彦に師事した。以下の「閨門内外夷愉肅穆。與^二族婣舊故^一。恩意篤厚久而不^レ忘處^二生事^一。量^レ入爲^レ出。與^二鄉人^一居。飲食言笑油々如也。」および「色温言厲。神定氣和。端詳閑泰。於^レ事若^レ無^二甚可否^一。及^三其酬酢事變^一。斷以^二義理^一。則有^下截然不^レ可犯者^上。」は「延平李先生」の「行狀」から一部を省略して引用したもの。また「清通和樂。展也大成。」は「祭文」から、「神彩精明。略無^二隕墮之氣^一也。」は「遺事」からの引用。【閨門】家庭。【夷愉】よろこぶ。【肅穆】つつしみやわらぐ。【族婣】族は、血つづき。婣^{いん}（姻の別体）は結婚による親類。【舊故】むかしなじみの人。【生事】生活上のこと。【量^レ入爲^レ出】収入がどれくらいあるかを考えた上で、支出する。「入るを量りて以て出すことを為す。」『礼記』王制）。【油々】「君子の酒を飲むや、一爵を受けて色洒如たり」洒如^{せんじよ}は肅敬の貌なり。洒、或いは察^{つく}に爲る」。二爵にして言言たる斯^{きん}「言言は和敬の貌なり。斯、猶ほ耳のごときなり」。礼は三爵に已みて油油たり「油油は説^よび敬う貌なり」『礼記』玉藻、「」は鄭注を示す。【色温言厲】「子夏曰く、君子、三変有り。之れを望めば儼然たり。之れに即くや温。其の言を聴くや厲。」『論語』子張。この朱注に「儼然は貌の莊なる。温は色の和なる。厲は辞の確なる。」とある。【端詳】態度やすがたがきちんと整っていて落ち着きがある。【閑泰】しずかでやすらか。【可否】よしあしを断ずる。【酬酢】対応する。【展也大成】『詩経』十小雅南有嘉魚・車攻。【神彩】すぐれた風采。

書「先君子行實改本後」

「惟秀」聞「諸函丈」。曰行實之作既成_レ於易_レ實後一年_一矣。固未_レ脱_レ稿。而當時同門之士爭寫各藏_二其家_一。又頗傳_二外人_一。迄_三近來疾_二其用_レ字不_レ穩。最憂_三彼散出者難_二逐正_一。今茲遠忌之日讀_レ之特不_レ安。輒訂_二其一二_一。以遺_二於後_一。又追_二感其道德餘韻_一。實有_下戚_二々此_上者_上。先師嘗警_レ某曰。汝功夫非_レ他矣。唯在_レ謹_二守家庭言行_一而已。今而真知_二師訓之簡要而近切_一也。乃同志之徒亦以_レ此爲_二準則_一。其可_三以無_二大過_一也。因出_二所_レ改一本_一。授_二吾曹_一焉。「惟秀」拜而退。謹繕寫并錄_二其語_一附_二其末_一。以欲_レ使_下吾黨嘗藏_二斯編_一者。知_上宜_下就_二此本_一質_上之。云

寛政壬子冬十二月

篠原惟秀謹跋

『先君子行実』改本の後に書す

惟秀諸_これを函丈に聞く。曰く、『行実』の作は既に實を易ふるの後一年に成る。固_もより未だ稿を脱せず。而るに當時同門の士、争ひて写し各_{おの}其の家に蔵し、又頗る外人に伝ふ。近來其の字を用ふること穩やかならざるを疾_{にく}むに迄_{およ}ぶ。最も彼の散出する者の逐ひて正し難きことを憂ふ。今茲に遠忌の日に之_これを読み、特に安からず。輒_{すなは}ち其の一二を訂_{ただ}し、以て後に遺す。又其の道德の余韻を追感し、実に此に戚_{せき}々たる者有り。先師、嘗て某を警_{いそ}めて曰く、「汝の功夫は他にあらず、唯家庭の言行を謹守するに在るのみ」と。今にして、真に師訓の簡要にして近切なるを知る。乃ち同志の徒、亦此_{また}れを以て準則と為せば、其れ以て大過無かるべし」と。因_よりて改むる所の一本を出だし、吾曹_{わがさう}に授く。惟秀拜して退く。謹_{つづ}みて繕_{ぜん}写し、並びに其の語を録して其の末に附し、以て吾が党の嘗て斯編を蔵する者をして、宜しく此の本に就きて之_これを質_たすべきことを

知らしめんと欲す、云。

寛政壬子冬十二月

篠原惟秀謹跋

○語注

【惟秀】篠原惟秀（延享二「一七四五」年—文化九「二八一二」年）。堀上村（現在の東金市堀上）の人。本姓北田。字は秀甫、與五右衛門と称し、静庵と号した。黙斎の門人。著書に『黙斎行實』がある。【易】實後一年】宝曆十一（一七六一）年。【外人】外部の人。【寛政壬子】寛政四（一七九二）年。

（▼三十二〜▼四十四 注釈・校合 大久保紀子）

参考文献

▼一〜▼十六、および▼三十二〜▼四十四の参考文献

・稲葉黙斎の著書、編著

「武井婦人小伝」、『三郎稿』、千葉県元倡寺所蔵『孤松全稿』一卷所収

『墨水一滴』、千葉県元倡寺所蔵『孤松全稿』五卷所収

『先達遺事』、関儀一郎編『日本儒林叢書 第三卷』（鳳出版社、一九七一年）所収

稲葉黙斎編『韞蔵録二卷』、日本古典学会編纂『増訂佐藤直方全集 卷一』（ぺりかん社、一九七九年）

所収

稲葉黙斎編『佐藤乙先生年譜略』、日本古典学会編纂『増訂佐藤直方全集 卷一』（ぺりかん社、一九七

九年）所収

稲葉默斎編『迂齋文集』十卷十冊、『續集』四卷四冊、『別集・附録』一冊、『迂齋先生卒年文稿』一冊、
茨城県立古河歴史博物館所蔵。

・佐藤直方の著書

『冬至文』、日本古典学会編『増訂佐藤直方全集 卷三』（ぺりかん社、一九七九年）所収。

・宋学、および宋学に関する文献

西晋一郎、小糸夏次郎譯註『太極圖説・通書・西銘・正蒙』（岩波文庫・岩波書店、一九八六年）

朱子『晦庵先生朱文公文集』、岡田武彦・荒木見悟主編『近世漢籍叢刊 和刻影印 思想初編（九・十）』

（中文出版社、一九八五年）

朱子『家礼』（慶應義塾大学蔵）

朱子『周易本義』（新文豊出版公司・台北、一九七九年）

朱子『四書集註』（藝文印書館、一九六八年）

朱子『孝経刊誤』、内田周平『孝経刊誤合纂』（谷門精舎、一九三六一年）所収

朱子、楊廉、謝鐸編『伊洛淵源録新增附續録』、岡田武彦、荒木見悟主編『近世漢籍叢刊 和刻影印 思

想編九』（中文出版社、一九七二年）

諸橋轍次、安岡正篤監修『朱子學入門』朱子學大系第一卷（明徳出版社、一九七四年）

・中国思想古典

- 平岡武雄『全釈漢文大系第一卷 論語』（集英社、一九八〇年）
- 宇野精一『全釈漢文大系第二卷 孟子』（集英社、一九七三年）
- 山下龍二『全釈漢文大系第三卷 大学・中庸』（集英社、一九七四年）
- 竹内照夫『全釈漢文大系第五卷 春秋左氏伝 中』（集英社、一九七四年）
- 金谷治、佐川治、町田三郎『全釈漢文大系第八卷 荀子』（集英社、一九七四年）
- 鈴木由次郎『全釈漢文大系第九卷 易経 上』（集英社、一九七四年）
- 池田末利『全釈漢文大系第十一卷 尚書』（集英社、一九七六年）
- 市原亨吉、今井清 鈴木隆一『全釈漢文大系第十二卷 礼記 上』（集英社、一九七六年）
- 市原亨吉、今井清 鈴木隆一『全釈漢文大系第十三卷 礼記 中』（集英社、一九七七年）
- 斎藤响『全釈漢文大系第十五卷 老子』（集英社、一九七九年）
- 近藤光男『全釈漢文大系第二十三卷 戦国策 上』（集英社、一九七五年）
- 藤井専英『新釈漢文大系五 荀子 上』（明治書院、一九七九年）
- 市川安司、遠藤哲夫『新釈漢文大系八 莊子 下』（明治書院、一九七八年）
- 竹内照夫『新釈漢文大系二七 礼記（上）』（明治書院、一九七一年）
- 遠藤哲夫『新釈漢文大系四三 管子 中』（明治書院、一九九一年）
- 宇野精一『新釈漢文大系五三 孔子家語』（明治書院、一九九六年）
- 早川光三郎『新釈漢文大系五九 蒙求（下）』（明治書院、一九七三年）
- 吉田賢抗『新釈漢文大系八五 史記（世家中）』（明治書院、一九七八年）

高田眞治『漢詩大系第一巻 詩經 上』（集英社、一九六六年）

福永光司『老子』（朝日新聞社、一九九七年）

湯浅幸孫『中国文明選 近思録 上』（朝日新聞社、一九七二年）

鈴木喜一『法言』（明徳出版社、一九八八年）

田中麻紗巳『法言』（講談社、一九八八年）

・人名、伝記

『日本道學淵源録』、岡田武彦・荒木見悟・町田三郎・福田殖編『楠本端山 碩水全集』（葦書房、一九

八〇年）所収

『日本道學淵源續録』、同右

『崎門學脈系譜』、同右

『寛政重修諸家譜』（続群書類従完成会、一九六六年）

東條琴台『先哲叢談後編 卷之五』、『近世文芸者伝記叢書 第三卷』（ゆまに書房、一九八八年）

唐房玄齡等撰『晋書 第六冊 卷六〇至卷七四（傳）』（中華書局）

諸橋轍次、原田種成『宋名臣言行録』（明徳出版社、一九七二年）

「綱齋先生文集解題」――相良亨、高島元洋、黒住眞、遠山敦編集・解説『近世儒家文集集成第二巻 綱齋

先生文集 浅見綱齋著』（べりかん社、一九八七年）所収

『古河藩系譜略』（古河歴史博物館、一九九八年）

福田啓作「館林城主松平家の藩學」（館林郷土史談會編『館林郷土叢書 第七輯』（館林圖書館發行、一

九四二年）所収

吉岡勲『山崎闇斎美濃国の門流 覚書』（岐阜郷土出版社、一九九〇年）

阿部隆一「崎門学派諸家の略伝と系譜」、西順蔵、阿部隆一、丸山真男校注『日本思想大系三一 山崎闇斎学派』（岩波書店、一九八〇年）所収

梅澤芳男編著『稻葉黙斎先生と南宋の道学』（ぺりかん社、一九八五年）

柴田武雄『稻葉黙斎 上総道学関係諸学者略伝（未完）』（東金市郷土研究愛好会、一九九八年）

朝倉治彦監修『江戸文人辞典 国学者 漢学者 洋学者』（東京堂出版、一九九六年）

『国史大辞典』（吉川弘文館）

國學院大學日本文化研究所編『神道事典』（弘文堂、一九九九年）

・地名

『角川日本地名大辞典』（角川書店）

浜田義一郎監修『江戸文学地名辞典』（東京堂出版、一九七三年）

吉田東伍『増補大日本地名辞書 第六卷 板東』（富山房、一九八五年）

斎藤直成編『江戸切絵図集成 第二巻・近江屋板上』（中央公論社、一九八一年）

・藩史

『藩史大事典』（雄山閣）

唐津市史編纂委員会『唐津市史』（唐津市、一九六二年）

伊藤重信『長島町誌 上巻』（長島町教育委員会、一九七八年）

新発田市史編纂委員会『新発田市史 上巻』（新発田市役所、一九八〇年）

館林市誌編集委員会編『館林市誌 歴史篇』（館林市役所、一九六九年）

土浦市史編さん委員会『土浦市史』（土浦市役所、一九七五年）

古河市史編さん委員会『古河市史 通史編』（古河市、一九八八年）

西村嘉助、渡辺則文、道重哲男編『竹原市史 第一巻、概説編』（竹原市役所、一九七二年）

秋田県編『秋田県史 第三巻 近世編 下』（秋田県、一九六五年）

渡辺武夫「古河の教育史の一考察（一）」、『古河市史研究』創刊号（古河市史編さん委員会、一九七六年）所収

・その他

國學院大學日本文化研究所編『神道事典』（弘文堂、一九九九年）

多屋頼俊他編『佛教學辭典』（法藏館、一九五五年）

斎藤月岑著 金子光晴校訂『新訂 武江年表 2』（平凡社、一九六八年）

原田憲雄『漢詩大系第十一巻 韓愈』（集英社、一九六五年）

都留春雄『中国詩文選一一陶淵明』（筑摩書房、一九七四年）

清水茂『唐宋八家文 上』（朝日新聞社、一九五六年）

・ 崎門、稻葉迂齋・默齋の編著

稻葉默齋編『迂齋文集』（茨城県立古河歴史博物館所蔵、写本、全十三冊）

稻葉迂齋『幼君補佐の心得』（山住正己他編注『子育ての書1』東洋文庫二八五、平凡社、一九七六年）

稻葉默齋『姫島講義』（『孤松全稿』卷一）

林潜齋『稻葉默齋先生傳』（池上幸二郎編著『吾學叢書第一篇・默齋先生傳』神田小川町池上方・默齋学

会編、一誠堂書店、一九三五年）

山崎闇齋『文會筆録』（日本古典学会編『山崎闇齋全集』卷一、ぺりかん社、一九七八年）

・ 中国思想古典

『礼記』（宇野精一・平岡武夫編著、市原亨吉、今井清 鈴木隆一『全釈漢文大系 12・13・14 礼記 上・

中・下』（集英社、一九七六、一九七七、一九七九年）

『易経』（宇野精一・平岡武夫編著、鈴木由次郎『全釈漢文大系 9・10 易経』集英社、一九七四年）

『論語』（宇野精一・平岡武夫編著、平岡武夫『全釈漢文大系 1 論語』（集英社、一九八〇年）

『孟子』（宇野精一・平岡武夫編著、宇野精一『全釈漢文大系 2 孟子』（集英社、一九七三年）

『大学』（宇野精一・平岡武夫編著、山下龍二『全釈漢文大系 3 大学・中庸』（集英社、一九七四年）

『中庸』（宇野精一・平岡武夫編著、山下龍二『全釈漢文大系 4 大学・中庸』（集英社、一九七四年）

劉向編『戦国策』（宇野精一・平岡武夫編著、近藤光男『全釈漢文大系 23・24 戦国策 上・下』（集英社、

一九七五年）

班固『漢書』（高木友之助・片山兵衛訳注『中国古典新書続編15 漢書列伝』明德出版社、一九九一年）
蕭統他編『文選』文章編七（宇野精一・平岡武夫編、小尾郊一『全釈漢文大系32・文選（文章編）七』
集英社、一九七六年）

李瀚『蒙求』（柳町達也編『中国古典新書・蒙求』明德出版、一九六八年）

邵康節『擊壤集』（岡田武彦、荒木見悟主編『近世漢籍叢刊 和刻影印 思想初編（二）擊壤集』中文出版、
一九八五年）

程顥・程頤『二程全書』（岡田武彦、荒木見悟主編『近世漢籍叢刊 和刻影印 思想初編（三）二程全書』
中文出版社、一九八五年）

朱熹『晦庵先生朱文公文集』（岡田武彦・荒木見悟主編『近世漢籍叢刊 和刻影印 思想初編（九・十）』
中文出版社、一九八五年）

朱熹『家禮』（慶應義塾大学蔵、五卷、一七九二年刊本）

朱熹『周易本義』（新文豊出版公司・台北、一九七九年）

朱熹『論語集註』（『四書集註』藝文印書館・台北、一九五六年）

朱熹編『小学』（宇野精一『新釈漢文大系3 小学』明治書院、一九六五年）

・人名、伝記

岡次郎編『日本道學淵源録』（開明堂、一九三四年（岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編『楠本端
山・碩水全集』葦書房、一九八〇年、所収））

岡次郎編『崎門學脈系譜』（開明堂、一九三四年（岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編『楠本端山・

碩水全集』葦書房、一九八〇年、所収）

梅澤芳男編著『稲葉黙齋先生と南宋の道学』（ぺりかん社、一九八五年）

・その他

角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典』（角川書店、一九七九～一九九〇年）

斎藤月岑、今井金吾校訂『武江年表』（ちくま文庫、二〇〇三～二〇〇四年）

木村礎他編『藩史大事典』（雄山閣、一九八八～一九九〇年）

唐津市史編纂委員会編『唐津市史』（唐津市、一九六二年）

○『先君子行實』校合

底本…『道学遺書 初集第一 孤松全稿卷之三』道學協会編、一八九一年。

新発田…新潟県新発田市立図書館所蔵の写本。目録番号 V09、教書 186。

京大…京都大学附属図書館所蔵の写本。

神習…財団法人無窮会専門図書館・神習文庫所蔵の写本。目録番号 一三五・一三の『孤松全稿』三卷所収。

▼一 底本…孤松 全稿卷之三 黙齋艸卷七 新発田…なし 京大…なし／底本…先君子行實 新発田…先

君子迂齋先生行實 京大…迂齋行實／底本…第 新発田…第 京大…第 神習…第／底本…伊豫越智郡河

野人。而平治二年為「伊豫刺史」。故又有「河野之族」。〔新發田〕以下伊豫越智郡河野人而平治二年為「伊豫刺史」故又有「河野之稱」。〔底本〕而初領「美濃稻葉」。因氏焉。〔新發田〕而初領「美濃稻葉山」因稱焉。〔底本〕俗稱十左衛門。〔新發田〕割り注ではなく本文。〔底本〕小大夫。〔京大〕小大夫。▼〔底本〕秩一萬石。〔新發田〕領一萬石。〔底本〕襲其家。冒姓。〔新發田〕襲家。冒姓。〔底本〕仕「後尾張公」。〔新發田〕仕「後尾張府」。〔底本〕稱「山本十太夫」。〔新發田〕稱「山本十大夫」。〔底本〕仕「下總古河城主」。土井候利勝及嗣君利隆利重。〔新發田〕仕「下總古河城主土井候利勝與「嗣君利隆及利重」」。〔底本〕初與「其兄正春」。〔新發田〕初與「兄正春」。〔底本〕及「後兄正春辭」仕。〔新發田〕後從「兄辭」仕。▼〔底本〕善給「兄長之使命」。〔新發田〕善給「兄長之使命」。〔京大〕善給「兄長之使命」。〔神習〕「命」の横に赤字で「令」。〔底本〕若樹葉草花。〔新發田〕若樹葉草華。〔底本〕乃季兒耳。〔新發田〕乃季兒。〔底本〕慷慨講「武事」。〔新發田〕常慷慨講「武事」。〔底本〕談笑達旦。〔新發田〕談笑怡々至達旦。〔底本〕嘗學「武家典故之禮」。〔新發田〕嘗學「武家典故之禮器」。〔底本〕平居問訊賀壽省謁。〔新發田〕起居問訊賀壽省謁。▼〔四〕異同なし。▼〔五〕底本「從」是受「家長之命」。〔新發田〕「從」是受「家長之許」。〔底本〕及「後先生齒即學成」。〔新發田〕及「後先生年即學成」。〔京大〕及「後先生年即學成」。〔底本〕非「如」後世儒生之所「學」。〔新發田〕非「如」後世儒生之所「學」。▼〔六〕底本「嘗所」疑「異端百家」。〔新發田〕嘗所「疑」於「異端百家」。〔京大〕嘗所「疑」於「異端百家」。〔底本〕藏修之暇。為「人說」書。〔新發田〕藏修之暇開「講筵」為「人說」書。▼〔七〕底本「取」氏族辨證「講究」。〔京大〕取「氏族辨證」講窮。〔底本〕「覲」縷義利之實」。〔神習〕「覲」縷義理之美」。〔底本〕於若狹守戸田君。〔新發田〕於若狹守戸田氏」。〔底本〕初美濃文珠。〔新發田〕初美濃文殊人。〔底本〕仕「如納城主松平侯光重」。〔新發田〕仕「加納城主松平侯光重」。〔京大〕仕「加納城主松平侯光重」。〔神習〕仕「加納城主松平侯光重」。〔底本〕後傳「侯次子戸田光政」。〔新發田〕後傳「侯次子戸田光正」。〔京大〕後傳「侯次子戸田光正」。〔底本〕爾

後儒生東遊求仕者。[新発田]…爾後儒生之東遊求仕者 [神習]…爾後儒生東遊求仕者 / [底本]…先生至レ此移二其邸内一。 [新発田]…先生至レ是移二居其邸内一 ▼八 [底本]…留止三句。 [京大]…留止三日 / [底本]…過二伊勢山田。 [新発田]…路過二伊勢山田 / [底本]…餘暇尋二泉石之勝。 [新発田]…餘暇尋二泉石之勝而反 / [底本]…又登二箱根一。 浴二堂嶋温泉。 [新発田]…遂登二箱根一。 至二堂嶋一浴二温泉一 ▼九 [底本]…先生辭二戸田君之館一。 遷二居其邸内一 [新発田]…先生辭二戸田氏之館一因遷二居其邸内一 / [底本]…而其心廉清也。 世之汲汲經營者。 其於二出處之道一。 誰出二此人之右一。 [新発田]…而其心中廉清近來諸儒出處誰出二此人之右一 [底本]…閣下常左二右簡編一。 [神習]…「閣下」の「閣」の横に朱で「閣」 / [底本]…而於レ是加レ意或有レ不至。 [新発田]…而於レ是加レ意或有二不一至 / [底本]…所レ言所レ論大愈一於世俗無學之徒一。 [新発田]…所レ言所レ論稍愈二於世俗無知之徒一 / [底本]…故每自以為レ是。 乃直諒退而諂諛進。 終至二飾レ非拒レ諫之域一。 亦當レ慮レ之。 [新発田]…故人稱レ之自以為レ是終至二飾レ非拒レ諫之域乃直諒日退諂諛日何可レ測 / [底本]…鍛冶橋之邸權レ災。 [新発田]…鍛冶橋之邸羅レ災 / [底本]…於差濃文殊一。 [新発田]…於美濃文殊。 [京大]…於美濃文殊。 [神習]…於美濃文殊。 / [底本]…尋謁二尚齋于京師一 [新発田]…尋謁二尚齋于京師一 [京大]…尋謁二尚齋于京師一 ▼十 [底本]…唐津 [新発田]…唐津城 / [底本]…邑 [新発田]…城 / [底本]…尊慕 [新発田]…尊 ▼十一 [底本]…賑給十數年。 [新発田]…每レ歲賑給幾十數年 / [底本]…存二問寡孤一。 以盡二誠意一。 [新発田]…存二問寡孤一百方經營以盡二誠意一 ▼十二 [底本]…命二先生秋登レ路。 [新発田]…先生秋登レ路 / [底本]…侯方勤レ學 / [底本]…為レ求レ道。 [新発田]…求レ道 / [底本]…而汝若不レ行 [新発田]…汝若不レ行 / [底本]…吾死不レ可レ令三汝侍二吾牀前一。 [新発田]…吾死不レ侍二吾牀前一 [京大]…吾死不レ令三汝侍二吾膝前一 / [底本]…冬遭二外艱一。 [神習]…冬遭二外難一（頭注に朱で「艱」と訂正） / [底本]…家君不休 [新発田]…家翁不休 ▼十三 [底本]…因託レ病請レ去不レ許。 [新発田]…因託レ病請レ退去一不レ許 / [底本]…特命「六月十五日。」進レ階。 「行

人此曰「使番」。
 新発田…特命進階於行人班。「六月十五日。」
 底本…會^四有司促^三侍講之外日供^二新除之職^一。
 新発田…會^四有司促^三侍講之外日供^二新除之職^一。
 底本…為^下上輔^二翼嗣兒^一下使^中群臣向上^上學。
 新発田…為^下上輔^二翼嗣兒^一下使^中群臣咸向上^上學。▼十四 異同なし
 ▼十五 異同なし ▼十六 底本…侯造^二學校^一。
 新発田…侯新^二學校^一。
 底本…侯有^二記文^一。扁曰^二盈科堂^一。
 新発田…侯扁^レ額曰^二盈科堂^一。
 底本…又令^二先生作^レ記。
 新発田…令^二先生作^レ記。
 底本…先生每見^二藩中執^レ事者^一乃為^レ說^二治道^一。
 新発田…先生嘗見^二藩中當^レ事者^一乃為^レ說^二治道^一。
 底本…置^二倡家戲場^一。
 新発田…置^二娼家俳優^一。
 底本…及酒戸宴遊之設。
 新発田…及酒戸戲遊之設。
 底本…宜^二嚴禁^一防^レ之。或曰
 新発田…^レ欠^レ。
 京大…^レ欠^レ。
 底本…然至^下於逆旅之街。船湊之濱。
 新発田…然至^下於旅驛津渡及會舩之湊。
 底本…古聖王賢主。
 京大…古聖王賢王。
 底本…不^二惟不^レ置^二之城營間巷^一。
 新発田…不^二惟不^レ置^二之城營間巷^一。
 底本…而莫^レ不^二以^レ人視^レ之。
 京大…而莫^レ不^二以^レ人視^レ人^一。▼十七 底本…稱^レ病再請^レ去。
 新発田…稱^レ疾再請^レ去。
 底本…退去^一。
 底本…面任^二獨斷^一。
 新発田…面以^二獨斷^一。
 底本…抑^二老臣^一至^二點^レ陟諸士^一。
 新発田…輕進^二退老臣^一至^二點^レ陟諸士^一。
 底本…又少惑^二於神佛^一。
 新発田…又稍惑^二於神佛^一。
 京大…又少惑^二神佛^一稍有^二新発田…少有^一。
 底本…在^二侍講^一。
 新発田…任^二侍講^一。
 底本…為^二講官^一。
 新発田…蒙^二教官^一。
 底本…下^レ謬^二此身^一。
 新発田…下^レ繆^二此身^一。
 京大…下^レ繆^二此身^一。
 底本…因稱^レ病請^レ去。
 新発田…因稱^レ疾請^レ去。
 底本…閑退^一。
 底本…先生上書請^レ去。
 新発田…先生以^レ疏請^レ退去^一。
 京大…先生請^レ去。
 底本…進^レ學新^二臣民^一。
 新発田…吾無似而不^レ能^二成^二學新^二臣民^一。
 底本…我善知^二渠心事^一。
 新発田…我善知^二他心事^一。
 底本…至^下於言^丙侯懷^二憂思^一。
 京大…至^下於言^丙侯懷^二憂心^一。
 底本…營^二居於本邸外^一。
 新発田…營^二居於侯第外^一。
 底本…卜^二居濱町山伏井^一。
 京大…卜^二居濱田山伏井^一。
 ▼十八 底本…講筵之外。
 神習…

講延之外。／**底本**…屏_二左右_一密謀。**京大**…屏_二左右_一蜜謀／**底本**…諮問。**新發田**…咨問**京大**…咨問
 ▼十九**底本**…會_二侯一時自悔_レ過。**新發田**…會_二一時感悟自悔_レ過**京大**…會_二一時感悟自悔_レ過／**底本**…
 臣竊每稱譽不_レ置也。**新發田**…臣嘗竊每稱譽而不_レ置也／**底本**…未_レ慊_二於心_上者_上焉。**新發田**…不_レ慊_二
 於心_上者_上焉／**底本**…政綱或不_レ振。**新發田**…政綱或未_レ振者**京大**…政綱或未_レ振／**底本**…閣下誤恩**京大**…
 閣下之誤恩／**底本**…羞愧無_レ所_レ惜身也。**新發田**…羞愧自効無_レ所_レ惜身也／**底本**…不_レ以_レ不_レ將順
 其美。**新發田**…不_レ以將順其美_レ訓点落／**底本**…至_二夫漢唐英主_一。**新發田**…而如_二夫漢唐英主_一**京大**…
 而至_二夫漢唐英主_一／**底本**…固不_レ可_レ誣矣。**新發田**…固不_レ可_レ誣／**底本**…如下世之人主。**新發田**…世
 之人主／**底本**…而其或能好_レ學納_レ諫。**新發田**…其或稱好_レ學納_レ諫／**底本**…「十二月五日上」。**新發田**…
 「十二月十五日上」**京大**…「十二月十五日上」▼二十**底本**…辛未**京大**…辛亥／**底本**…會_三侯用_レ人有_二
 過差_一。**新發田**…會_三侯用_レ人頗有_二過差_一／**底本**…因著_二人物辨_一**京大**…固著_二人物辨_一／**底本**…而小人
 易_レ進。**新發田**…小人難_レ退／**底本**…彼進此退。**新發田**…〈欠〉／**底本**…陰陽消長之象。**新發田**…陰
 陽消長／**底本**…蓋有_二爲_レ之者_一。**新發田**…〈欠〉／**底本**…僧不_二自知_一。**新發田**…僧不_二自知_一者▼二
 十一**底本**…西國蝗。**新發田**…西海蝗／**底本**…大阪**新發田**…大坂**神習**…大坂／**底本**…六月六日東歸。
新發田…六月六日歸焉**京大**…六月六日歸▼二十二**底本**…不_三必遠師_レ古時習_二異邦所_レ爲_一。**新發田**…不_三
 必遠復_レ古時習_二異邦所_レ爲_一**京大**…不_三必遠師_レ古時習_二異邦所_レ爲_一／**底本**…時堀正知傳_レ侯**新發田**…特
 堀正知傳_レ侯▼二十三**底本**…龜鑑**新發田**…龜監／**底本**…會_二人言意趣_一**新發田**…會_二人言意_一▼二十
 四**底本**…迎_二侯參觀於大阪_一。**新發田**…迎_二侯參勤於大坂_一**神習**…迎_二侯參觀於大坂_一▼二十五**底本**…
 有_レ旨「五月十一日。」特改_二秩祿_一「賜_二二百石_一。」進_二階_一。「此日_二持筒物頭_一○秋九月…」**新發田**…有_レ旨賜_二
 采地_一「二百石」進_二階弓銃屯將_一「五月十一日○秋九月…」／**底本**…秋九月**新發田**…秋九月乙巳／**底本**…

先^レ是三^二四年前。^{〔新発田…自^二是三^二四年前^一 京大…三^二四年前^一 底本…付^二老臣竊^レ柄者^一。 新発田…斥^二一老臣竊^レ柄者^一 京大…斥^二老臣竊^レ柄者^一 底本…輒進^レ階賜^二二百石^一 新発田…輒進^レ階賜^二采地^一 底本…}

：敬勝常^三夜直進^二言治道^一。直申^二自^二隗始^一之意^一。諸老臣素睡^三眈敬勝羈^レ旅新召。而輒得^二擢用^一。至^レ是舉劾^二僭越出^レ位。遂放^レ之。先生一日諫^レ侯曰。人君黜陟褒貶。群下所屬^二眼。敬勝清狂^一。 京大…〔傍線部分脱落

／底本…至^レ是 新発田…至^レ此 底本…先生一日諫^レ侯曰。 新発田…先生於^レ是一日喻^レ侯曰 底本…群下所屬^二眼。 新発田…萬人所屬^二眼 底本…而逐^レ之。 新発田…以逐^レ之 底本…其心本無^レ私。何復必罪。 新発田…至^二心中^一何^レ可^レ罪 底本…不^レ會^二諺言^一。 新発田…復不^二諺言^一 京大…進講^二大學論孟^一 新発田…先生旅館^一。 京大…侯雖^二在^二旅館^一 每夜召^二先生 底本…先進講^二大學論孟^一。 京大…妹麻田婦人卒 底本…侯歸^レ城。 新発田…寬延二年「己巳」春「元旦著^二一文^一揭^二學舍^一以激^二勵諸生^一」侯歸^レ城 京大…二十八 底本…婦人武井氏 神習…夫人武井氏 底本…北隅充^二祠堂^一。 新発田…北隅為^二祠堂^一 底本…

底本…○寶曆二年壬申夏爲^二嗣子^一納^二繼妻日原氏^一。○六年丙子春正月十三日。遭^二婦人武井氏喪^一。 京大…〔傍線部分脱落。〕 京大…命^二嗣子^一免^二近習^一。專學^二膝下^一。 新発田…免^二嗣子^一專學^二膝下^一 底本…

「八年戊寅七月。孫女生。」 京大…〔欠〕 京大…侯擢庸。 京大…侯擢庸 底本…或壽或夭。 新発田…或壽或疾 底本…然人々不^レ知^二此理^一。 新発田…然蚩々人姓不^レ知有^二此理^一 底本…或諛^二威權^一。 新発田…或諛^二威權^一 京大…或諛^二威權^一 底本…是求無^レ益於得^二也。 新発田…是求無^レ益於得^二矣 底本…猶下不^レ知^二無^レ魚之池^一。 新発田…譬^レ之猶下不^レ知^二無^レ魚之池^一 底本…而待^二其萌芽華英^一上。 京大…待^二其萌芽華英^一上 底本…惟我爾有^レ是夫。 新発田…惟我與^レ爾有^レ是夫 底本…其下^レ之一等。 新発田…乃下^レ此一等 底本…正君子之道也。 新発田…正君子之徒也 底本…然做^レ官則志爲^二利達^一

所_レ奪。**新發田**…然世之士君子做_レ官則志爲_二利達_一所_レ奪／**底本**…又終喪_レ己者滔々此也。**新發田**…終喪_レ己天下滔滔此也／**底本**…豈不_二知者之笑_一乎。**新發田**…豈不_二亦知者之笑_一乎／**底本**…識趣陋劣。其當_二要路_一。**新發田**…鄙夫陋劣雖或當_二要路_一／**底本**…又何益_二於天下國家_一乎。**新發田**…而何益_二於天下國家_一乎／**底本**…而雖_下志_上於道_一之人_上。**新發田**…而至如_下志_上於道_一之士_上／**底本**…及其做_レ官也。**新發田**…乃或_二其做_レ官_一／**底本**…退食之頃。**新發田**…退食之後／**底本**…多與_二下等之人_一聚議。**新發田**…多與_二下等之人_一聚議終_レ日／**底本**…不_二復留_一意於學_一。**新發田**…_レ欠_一／**底本**…覆_二公之餽_一之不_レ暇。**新發田**…覆_二公餽_一之不_レ暇而／**底本**…然則有_レ志_二於學_一者。**新發田**…有_レ志_二於學_一者／**底本**…所謂大臣者不_レ外_二於此_一矣。**新發田**…所謂大臣忠臣者不_レ外_二於此_一矣。**京大**…所謂大臣者忠臣者不_レ外_二於此_一矣。／**底本**…陷_二于鄉愿合_レ汙之流_一。**新發田**…終陷_二于鄉愿合_レ汙之人_一／**底本**…茲聞榮_二被親擢_一。**京大**…茲聞榮_二被親擢_一／**底本**…自_二閣下頃進庸_一。**新發田**…自_二閣下頃擢庸_一／**底本**…藩內諸臣莫_レ不_レ賀_二祝之_一。**新發田**…正義狂妄竊効_二朱夫子_一／**底本**…此府內諸臣莫_レ不_レ賀_二祝之_一／**底本**…正義狂妄竊効_二朱夫子_一／**底本**…此雖_レ似_レ不_レ近_二人情_一。**新發田**…此雖_レ似_レ倨侮不_レ近_二人情_一／**底本**…而恭蒙_二講筵之職_一多年。**新發田**…而既恭蒙伴讀之任_一近侍講筵之職_一▼三十一**底本**…二月六日。山伏井之宅罹_レ火。**京大**…_レ欠_一／**底本**…尋愈。**新發田**…尋愈／**底本**…先生臨_二駕發_一。言_二勤_レ學治_レ政極切。**新發田**…先生臨_二駕發_一上_二言_レ勤_レ學治_レ政極功_一／**底本**…且暮恐難_レ保。**新發田**…且暮命恐難_レ保／**底本**…伏願問學精進。千萬勿_レ懈。**新發田**…請千萬努力勿_レ懈／**底本**…唯勿_下任_上壯實_一。**新發田**…唯休_下任_上壯實_一／**底本**…奉_二武井喜多川_一二氏木主_一遷居。**新發田**…奉_二武井喜多川_一二氏木主_一遷居焉。**京大**…奉_二武井喜田川_一二氏木主_一遷居／**底本**…遷_二芝三田戶田君之第_一。**新發田**…遷_二芝三田戶田氏之第_一／**底本**…先生以_レ疾不_レ執_レ喪。**京大**…先生以_レ病不_レ執_レ喪／**底本**…令_二別_レ居誘_二諸生_一。**新發田**…令_下別_レ居誘_上諸生_一聚_二學徒_上／**底本**…秋再臥_レ病。

京大…秋再臥疾／底本…作「筍子」。
 新發田…及「門人之嘗屬」目者來訪レ疾／底本…親寫「疾中所」著之短文」。
 新發田…親寫「病中所」著之書
 底本…又呈「諸閣老館林侯」。
 新發田…又呈「諸閣老館林侯源侍從」／底本…不「通」經濟之業」。
 新發田…不「通」治國平天下經濟之業」／底本…彼徒尚「忠信篤行」。
 京大…彼徒尚「忠信篤行」／底本…館林侯作
 書卑「辭報」之。
 新發田…館林侯作「書卑」辭謝報／底本…誠非「伊川」不「能」矣。
 新發田…苟非「伊川」不
 能矣／底本…警以「過飲伐」性又致「昏惰」。
 新發田…乃警言過飲伐「性又致「昏惰」／底本…先生含「笑
 曰」。
 新發田…先生因含「笑」曰／底本…恰似「客之閑遊不」屑「去也」。
 新發田…恰似「客之閑遊不」屑「去也」
 京大…似「客之閑遊不」屑「去也」／底本…其悠々樂意。
 新發田…其悠々樂意
 從「侯歸」城邑」。
 新發田…其間當「不」從「侯歸」城／底本…齡方壯。
 新發田…齡亦妙壯／底本…抗論面
 折。
 新發田…抗論面折／底本…侯每感悟篤信「先生」。
 神習…侯每感悟篤信「先生」／底本…情好相善。
 神習…情好相好／底本…至「如」其夜間或以「不」虞細故「非時進謁」。
 新發田…至「其如」夜間或以「不」虞細故「
 非時省謁」上／底本…乃無「所」論「道合與」不「合耳」。
 底本…及「晚歲」今侯待「先生」以「師禮」。
 神習…
 及「晚歲」今侯待「先生」以「師禮」。
 底本…前世所「未」有
 新發田…前世之所「未」有／底本…則三世皆
 同矣。
 新發田…則三世無「所」差異也／底本…皆年年火之
 神習…皆年年火之／底本…
 未「嘗傳」レ人也
 新發田…未「嘗傳」レ人矣
 底本…是以列國諸侯。
 新發田…是以貴顯諸侯
 神習…
 是以列國諸侯／底本…其臣擁陶以欲「薦」先生筑前」。
 新發田…其臣擁陶以薦「先生於筑前」以下／底本…
 正繫「此學之興廢」。
 新發田…正繫「此學之興廢」／底本…何以「請託」求「焉」。
 新發田…何以「請託」求「薦」／
 底本…遂不「復謁」。
 新發田…遂不「復相謁」／底本…則亦不「必為」小「補於天下國家」也矣。
 新發田…則
 亦不「必為」無「小」補於天下國家「也矣」京大…則亦不「必為」無「小」補於天下國「也矣」
 底本…於

吾邦 **新發田**…於 吾邦 **京大**…於 吾邦 / **底本**…先生始見 **三宅先生** / **神習**…先生始見 **三宅先生** / **底本**…至 **三**人心虛靈寂滅之妙與 **三**鬼神來格之理 **一**。 **新發田**…至 **三**人心虛靈寂滅之妙與 **三**鬼神來格之理 **一**。 **京大**…至 **三**人心虛靈寂滅之妙與 **三**鬼神來格之理 **一**。 / **底本**…未嘗分 **二**軀用本末 **一**為 **中**兩段之看 **上**矣。 **新發田**…未嘗分 **二**軀用本末 **一**為 **中**兩段之看 **上**矣。 **京大**…未嘗分 **二**軀用本末 **一**為 **中**兩段之看 **上**矣。 **京大**…雖 **二**小說雜誌 **一**。 **底本**…雖 **二**小說雜誌 **一**。時或閱之。 **新發田**…小說雜誌之策而 / **底本**…每疾 **下**世之學者區 **二**々於註解訓詁 **一**。 **新發田**…嘗疾 **下**世之學者區 **二**々於註解訓詁 **一**。 / **底本**…未嘗知 **二**聖賢語意氣象 **一**。 **新發田**…未嘗知 **二**聖賢語意氣象 **一**。 **京大**…未嘗知 **二**聖賢語意氣象 **一**。 / **底本**…嘗稱 **下**朱子言 **二**聖經字如 **二**主人 **一**解者猶 **中**奴僕 **上**。 **新發田**…嘗稱 **下**朱子言 **二**聖經字如 **二**主人 **一**解者猶 **中**奴僕 **上**。 **京大**…未嘗知 **二**聖賢語意氣象 **一**。 / **底本**…嘗稱 **下**朱子言 **二**聖經字如 **二**主人 **一**解者猶 **中**奴僕 **上**。 **新發田**…常稱 **下**朱子言 **二**聖經字如 **二**主人 **一**解者猶 **中**奴僕 **上**。 **京大**…未嘗知 **二**聖賢語意氣象 **一**。 / **底本**…則循環復講 **三**四十年 **一**焉。 **神習**…則循環復講 **三**四十年 **一**焉。 / **底本**…西銘解。 **新發田**…西銘解 **京大**…西銘解 **神習**…「西」字のわきに「西」と修正 / **底本**…未嘗講 **二**他雜書 **一**。 **新發田**…未嘗講 **二**他雜書 **一**也 / **底本**…而至 **下**其相共負 **二**荷道學 **一**者 **上**。 **神習**…而至其共負 **二**荷道學 **一**者 / **底本**…附 **二**託學術 **一** **新發田**…以附 **二**託學術 **一** / **底本**…而唯至 **レ**如下呼稱以 **二**爾汝 **一**於 **中**正義。 **神習**…而唯至 **レ**如下呼稱以 **二**爾汝 **一**於 **中**正義。 / **底本**…爾汝 **一**於 **中**正義 / **底本**…先生又月々立 **二**課會 **一** **新發田**…先生又月々立 **二**課會 **一** **京大**…先生又月々立 **二**課會 **一** **十六** **底本**…先生長 **二**於譬喻 **一**。 **新發田**…先生雄辯長 **二**於譬喻 **一** / **底本**…圓轉妙旨使 **二**人人省悟不 **レ**知 **二**手舞足蹈 **一**。 **神習**…圓轉妙旨使 **二**人人省悟不 **レ**知 **二**手舞足蹈 **一**。 **新發田**…然無 **レ**及 **二**復市井俚巷之語 **一**詞氣怡怡吐言不 **レ**竭。 **底本**…然無 **三**復及 **二**市井俚巷之語 **一**。詞氣怡怡吐言不 **レ**竭。 **新發田**…然無 **レ**及 **二**復市井俚巷之語 **一**詞氣怡怡吐言不 **レ**竭。 **底本**…殆似 **下**李初平之見 **二**濂溪 **一**。尹彥明之從 **中**伊川 **上**者或有 **レ**之矣。 **新發田**…猶 **下**若李初平之見 **二**濂溪 **一**。尹彥明之從 **中**伊川 **上**者亦多矣。 / **底本**…蓋先生所 **二**以自得焉而人由以興起 **一**者至 **レ**于此 **一**。 **新發田**…蓋先生所 **二**以自得焉而人由以興起 **一**者至 **レ**于此 **一**。 **底本**…乃曰說過出 **レ**此一步乃非 **二**復易本義 **一**。 **新發田**…乃曰說過出 **レ**此一步亦非 **二**易本義 **一** / **底本**…而又所 **三**

以異_二於程傳_一。新發田…而又所_三以終異_二於程傳_一。▼三十七 底本…道之復_二古者_一。新發田…道之復_二古昔_一者_二道之復_二古昔者_一（二点は判然とせず）／底本…如_レ其受_レ教侯伯或造_二祠堂_一。新發田…如_レ其受_レ教侯伯之或造_二祠堂_一／底本…而反折_二後生英發之氣_一者_上。新發田…而反折_二後生英發之氣_一者_上。底本…嚴且厲。而不_レ求_二備於人_一。新發田…嚴且厲然而不_レ求_二備於人_一／底本…略_二細過_一。而揚_二太節_一。新發田…略_二細過_一而揚_二太節_一。京大…略_二細過_一而揚_二太節_一。京大…皆恭敬樽讓。新發田…皆恭敬樽讓。京大…皆恭敬樽讓。底本…蓋先生德量之非_二令_レ然者_一耶。新發田…蓋先生德量之令_レ然者非耶。京大…先生德量之令_レ然者非耶。底本…先生奔起弔_二妻子_一。新發田…先生奔起弔_二妻子_一。京大…先生奔起弔_二妻子_一。▼三十八 底本…不_レ區_二々事為之末_一。新發田…不_レ區_二區事為之末_一／底本…獨樂_下得_二通敏穎悟聞_レ道怡笑者_一教育之上。京大…獨樂_下得_二通敏穎悟聞_レ道怡笑者_一教育之上。底本…嘗薦_下正信於_二一大守_一求_レ講_レ書者_上。新發田…嘗薦_下正信於_二二諸侯求_レ講官_一者_上。神習…嘗薦_下正信於_二二太守求_レ講_レ書者_上。／底本…曰此兒行實無_二一可_レ取_一。新發田…曰此兒放蕩不軌行實無_二一可_レ取_一／底本…蓋雖_レ疾_二正信放蕩不軌_一。又許_下其知_二旨訣_一說_中好話_上。新發田…〈欠〉／底本…亦可_レ見_レ此學之末_二必謹厚拘滯之可_レ傳_一。新發田…亦可_レ見_レ其學之末_二必忠信謹厚之可_レ得_一。▼三十九 底本…故雖_下平居待_二妻孥_一之言_上。神習…故雖_下平居侍妻孥之言_上／底本…常欣々善與_二家人_一語。新發田…常欣欣善與_二家人_一語。底本…未曾有_乙不_下對_二外人_一而言_上者_甲矣。神習…未曾有不可對外而言者矣。／底本…亦鳥在_レ論_二坦夷不_レ宿意_一。新發田…亦鳥在_レ論_二坦然夷然與_レ不_レ宿意_一。▼四十 底本…不_三必用_二艸根木皮_一。新發田…不_三必求_二助於艸根木皮_一／底本…夏葛冬裘。新發田…故夏葛冬裘。▼四十一 底本…有_下若_二晉人陶侃之為_一者_上也。新發田…有_下猶_二若晉人陶侃之為_一者_上也。／底本…嘗語_レ人曰。新發田…嘗語_レ人云。／底本…每旦着_二禮服_一。新發田…每旦着_レ服。／底本…殆似_二三宅翁_一。新發田…猶_レ似_二三宅翁_一。／底本…殆似_二佐藤子_一。新發田…猶_レ似_二佐藤子_一。

▼四十二 **底本**…出尋_二景勝_一。 **京大**…〈欠〉／ **底本**…從_二親舊門人_一出尋_二景勝_一。如_二隅田川飛鳥山_一。
新發田…從_二一二親舊門人_一行如_二隅田川飛鳥山_一／ **底本**…無_レ不_二年々_一至_二焉_一。 **新發田**…無_レ不_二年々_一至_二焉_一／ **底本**…平生有_二適意_一。 **新發田**…平世有_二適意_一／ **底本**…學話二十八卷。附錄十六卷。 **新發田**…學話二十八卷附錄數十卷／ **底本**…亦竊附_二一片言於篇末_一。 **新發田**…又竊附_二一片言於篇末_一。▼四十三 **底本**…於_レ事若_レ無_二甚可否_一。 **新發田**…恂_二恂於事_一若_レ無_二甚可否_一／ **底本**…孤松全稿卷之三先君子行實終 **新發田**…〈欠〉 **京大**…〈欠〉 **神習**…〈欠〉 ▼四十四 **底本**…書_二先君子行實改本後_一 **新發田**…（この跋を欠く） **京大**…書迂齋先生行實改本後／ **底本**…實有_下戚_ニ々此_一者_上。 **京大**…實有_下戚_ニ々乎此_一者_上／ **底本**…授_二吾曹_一焉。 **京大**…授_二吾曹_一

第二部 山崎闇斎学派についての資料

九 稲葉黙齋『先達遺事』

解題・注釈・校合 大久保紀子

○『先達遺事』解題

はじめに

『先達遺事』は、稲葉黙齋によって著された儒者の逸話集である。成立年については、『墨水一滴』の序の次の部分が手がかりとなる。文末にあるように、『先達遺事』成立の後、「其の遺漏を補」つて書かれたのが『墨水一滴』であった。

余、居を江左に僻けて人事を絶棄す。形神寂寞として、耳目營のぞまず。高きを睇のぞみ、古を慕い『先達遺事』を作る。以て邈はく焉として、俗を跨ぐの心を寄せ、兼ねて慨然と世に経るの志を存す。爾後二三歳、客と座談せし者を編み、其の遺漏を補ふ。

（『墨水一滴』）

『墨水一滴』の成立は明和三（一七六六）年であるから、『先達遺事』の成立は、それから二、三年さかのぼった明和元（一七六四）年ころと推定することができる。

『国書総目録』では、無窮会神習文庫、慶應義塾大学図書館、高知県立図書館に写本が所蔵されているとあるが、慶應義塾大学の所蔵本は『山崎佐藤浅見三宅四先生略伝』と題する『先達遺事』の抄本であり、高知県立図書館所蔵の写本は戦災によつて焼失した。確認することができた写本は、無窮会神習文庫所蔵の『孤松全稿』（目録番号一三五一一三）のうち四巻所収の『先達遺事』および、新発田市立図書館所蔵の『先達遺事』（目録番号V09 教書203）の二冊である。

『先達遺事』はよく読まれ、刊本も多数出ている。『国書総目録』によれば、確認されているだけでも明和四年、同九年、文化九年、文政八年、同十一年の刊本がある。

記載されている逸話の総数は一一五編を数え、山崎闇齋と高弟達をはじめとする崎門の儒者、ないし門人達の記事が大半を占めるが、伊藤仁斎、荻生徂徠などの逸話も収録されている。記載されている回数が四回以上の儒者、門人を示すと次のようになる。逸話の主体ではなくても、登場していれば一回と数えた。

名	回数	名	回数	名	回数	名	回数
佐藤直方	43	山崎闇齋	30	三宅尚齋	23	稻葉迂齋	20
浅見綱齋	18	若林強齋	11	唐崎彦明	10	永井行達	8
永田養庵	8	野田剛齋	5	多田東溪	5	澤一	5
天木時中	5	荻生徂徠	5	跡部良顕	4	梨木祐之	4
鵜飼鍊齋	4	荻野重祐	4	小野崎舍人	4	出雲路信直	4
桑名松雲	4	谷 泰山	4				

記載されている逸話の情報源は、父迂齋、および諸先輩や学友達からの聞き伝えと先学の語録であったと考えられる。一一五編の逸話うちの約半数に及ぶ四九編は、黙齋が編集した父稻葉迂齋の『迂齋先生学話』^③に記された逸話と内容が重複しており、また、十二編は若林強齋の語録である『雑話筆記』の内容と重複している。

(一) 『先達遺事』執筆の意図と方法

『先達遺事』の魅力は、儒者達の気象が活写されている点にある。儒者達の姿が生き生きとした精彩を放っているのはもちろん黙齋の文才によるのであるが、『先達遺事』の意図、および方法から必然的に招かれた結果でもあった。

黙齋の目的は、一般的な儒者伝のように伝記的な事項や学論、業績を記すのではなく、儒者の一挙一動、片言隻句にあらわれた気象を後世に伝えることにあった。黙齋は、父や諸先輩、学友達から伝え聞いた先学の逸話の中からその気象を端的にあらわす場面を選び、彼らの言行を写し取るように表現する。読者は、その「伝神写照」の筆力によって記された儒者達の一挙一投足、一言一言からその気象を感じとり読みとっていくのである。

黙齋は『先達遺事』著述の意図と方法について次のように述べている。

諸先達の風韻気象、或いは言、或いは行、各自物表かくじがうへに高踏する者は、家伝・語録の外、人の口碑こうひに在

ること久しければ則ち之れを失ふ。仍りて旧聞を蒐輯す。若し夫れ議論は則ち六經の支流、語孟の余波、駿逸取るべしと雖も、玄黄略して可なり。一段の奇快、以て人に語り難き者に至りては、豈復思量の能く解する所ならんや。而して伝心写照の妙、正に阿堵一点に在り。彼の守文の徒、俛焉佔畢して、思ひを斯に致さざるは何ぞや。余、此の編を撰し、兼て待つて有るの意を寓す云。

『先達遺事』

黙齋は、諸先達の風韻、氣象を「物表に高踏する」ものととらえる。こうしたひとときわ「奇快」なる精神は、「人に語り難」く「思量」を越えており、まさに写照することによってその精神を伝えるほかはない。もつて、經義の議論や訓古の学にいそしんで足れりという学徒に本来の儒者の精神を伝え、覺醒をはかるものである。

理を絶対的規準とする以上、儒者の言行が「物表に高踏する」と評されるのは当然のことである。儒者は、世間一般の規準に惑わされることなく、理によって示されるあるべき姿を規準にして行為するからである。その超俗ぶりが「奇快」と評される。

『先達遺事』に記されているのは、理を絶対的規準とすることによって理そのものの在り方を実現しようとする儒者達の「超俗」の姿である。黙齋は口づてに伝えられている先学の「超俗」の在り方が忘れ去られることを惜しみ、記録して遺そうとした。しかし、それは言語による理解や思量を越えた「一段の奇快」であつて、「守文の徒」がするように字面だけを追つて理解できるようなものではない。「超俗」の儒者の本質は、「伝心写照の妙」によってのみ表現され、そこに香り立つ風格や氣品、あるいはにじみでるおかしみや情意にこそあらわれるのである。

(二) 『先達遺事』の特質

黙齋が表現しようとした先学の「風韻氣象」とは、一言でいえば「超俗」の氣象であつた。この「物表に高踏する」超俗の儒者と対照されるのが、先の引用文にあるように瑣末な議論に終始したり、字面にとらわれて本質を見抜くことができない器量の小さい儒者、つまり俗儒である。黙齋は、型どおりにこぢんまりとまとまった俗儒達を批判する意味をこめて、先学の型破りな「超俗」ぶりを描き出す。『先達遺事』が一般的な儒者伝には見られない儒者の逸脱かとも見える姿を描出するのはそのためである。たとえば、貴顕の前でなお頭巾をとらない關齋の簡傲な態度を、また愛妾ともなつて舟遊びする荻野重祐を、そして日に醇酒を楽しむ直方の姿を生き生きと描き出すのである。

もちろん、『先達遺事』に記された儒者達の言行は、聖人ほどの完璧さに達してはいない。しかし、山崎闇齋と高弟達の言行はたゆまぬ研鑽の成果であり、そこには、理を絶対的規準となし得た者だけがもつ自在にして充足した境地があらわれている。理の何たるかを窮理と修養によつて見窮め体認した彼らは、俗見や世間一般の規準を完全に相対化し、一切のこだわりから解き放たれている。そうしてほとんど理そのものとなつた彼らの心身には生き生きとした力がみなぎり、それがただならぬ氣迫や豪放な言行となつて、あるいは關達洒脱な在り方となつて、さらにまた、悠揚迫らぬ風格となつてあたりに放射され、人を圧倒するのである。^⑤

また、『先達遺事』には、彼らほどの水準の高さを持たないためにほかの儒者伝ではとりあげられることの少ない儒者達の姿が多数描き出されている。それもまた、経歴や学論、業績などが紹介されるのではない。

黙齋は、彼らの日常の生活の何気ない動作や言葉を切り取るように示して、儒者というものの生の態をあざやかに浮き彫りにするのである。それぞれの儒者の特質をあらわす逸話、機微をとらえた会話、あるいは墨東や京に遊ぶ儒者達のなごやかなさまなど、当時の儒者の実態が目に浮かぶように描写されている。

その描写に余裕が感じられるのは、題材の多くが学統の中で語り伝えられたものであることと黙齋自身の資質によると考えられる。先にも述べたように『先達遺事』の逸話の多くは、聞き書きをもとにしている。父迂斎や諸先輩を囲んで先学の逸話を聞く席では、嘆賞の声とともに逸話の機微を楽しむ笑い声が絶えなかったであろう。黙齋にとって、口伝えに生き生きと語られる先学達は尊敬の対象であるばかりでなく、親しみ愛すべき身近な存在であった。『先達遺事』の文体が簡潔、かつ平明で引き締まっているにもかかわらず、読んでいてあたたかいのはそのためである。

余裕ある筆致はまた、黙齋の「狂」の資質^⑤によるものでもある。黙齋は「狂」の資質を持つ者の例にもれず、優れた知力によって世俗の規準にとらわれず自由に、かつ適確に事象、ないしは存在をとらえることができた。理を絶対的規準とすることによって、存在および事象を相対化することにしたのであ^⑥る。そうした「狂」の眼をもつ黙齋の手かかれ^⑦ば、理をもつて任ずる崎門の儒者達のひたむきな求道のさまにも何ともいえないおかしみがただよう。このおかしみがまた、『先達遺事』の魅力の一つである。

おわりに

『先達遺事』を読み進むうちに、読者の胸にはさまざまな儒者達のその時々^⑧のありさまが像を結ぶ。一般に、儒者といえば道学先生、儒学といえば倫理や道徳という堅い印象を持つ。しかし、黙齋が後世に遺そう

としたのは、「超俗」の在り方を体现する儒者達の姿であった。『先達遺事』は、世に認められている一般的な儒者像とは異なる、儒者本来の風采を伝える貴重な書なのである。

【注】

(一) 無窮会平沼文庫所蔵、大倉山精神文化研究所蔵、静嘉堂文庫所蔵、筑波大学附属図書館所蔵の諸本を『先達遺事』の内容と照らし合わせ、内容が重複している逸話数を確定した。諸本の目録番号は注釈の参考文献参照。

(二) 「超俗」の行為は、俗世間や他者からの乖離を意味してはいない。ほとんど理そのものと化した心から生まれる彼らの言行は、本来かくあるべきであるという当然にして、必然、かつ自然な行為なのである。それが、世のしがらみにしばられて容易に本来の行為をなし得ない俗人の眼に超俗の行為として映る。

(三) ゆえに『先達遺事』は崎門内外からの非難をあびた。黙斎自身が語るところによれば、某藩の一儒官は「此の書名教を害す」として火に投じた(『見花稿』、元倡寺所蔵『孤松全稿』三二卷)という。また、同門の学友である村土宗章は、『先達遺事』を『世説新語』と同類であると非難した(『雑記壬寅上』、元倡寺所蔵『孤松全稿』一三卷)。

非難されたのは、黙斎自身の記述によれば「佐藤子の不恭の言行を載せ」(『見花稿』、元倡寺所蔵『孤松全稿』三二卷)た点であった。これについて、黙斎は、「一時の快に乗じて先賢を煩わす」(『雑記壬寅上』、元倡寺所蔵『孤松全稿』一三卷)ことになってしまった自らの不明を悔やみはするが、決して直方の言行に非を認めてはいない。黙斎は、『先達遺事』の直方の破格な「超俗」の在り方を理解できないのは「徒らに書を読むのみにて終はり、流俗を脱せ」ざる「今の学者」(『六七録』、無窮会神習文庫所蔵『孤松全稿』三五卷)の水準の低さを示すものであり、非難は「佐藤子を嫉忌するより出づ」(『見花稿』、元倡寺所蔵『孤松全稿』三二卷)るものであると反

論している。

このように非難が正当性を欠くことを指摘する一方で、黙斎が「先達遺事ヲ刻タコト一生ノ不出来ナリ」(『雜記癸卯一』、『元倡寺所藏『孤松全稿』一五卷)と後悔し、「自ら警省」(『雜記壬寅上』、『元倡寺所藏『孤松全稿』一三卷)しているのはなぜかと言えば、それは、先に述べたように、結果として「先賢を煩わす」ことになってしまったためと、「載せずして可なるもの多く在りて、人を悚動すべきものにして載せざる、頗る多し」(同右)という内容の選択の誤りがあったこと、記事の中に「呼称当らざる」ものが多い(同右)という著述の杜撰さのためであると考えられる。

- (4) 詳しくは、拙稿「山崎闇斎学派の儒者の多様性について―稲葉黙斎の著作を手がかりに―」(『お茶の水女子大学人文科学研究』第五卷、二〇〇九年) 参照。

- (5) この点については、拙稿「『狂』に関する考察―稲葉黙斎『処士越復傳』を手がかりに―」(『お茶の水女子大学人文科学研究』第一卷、二〇〇五年) で詳述した。

- (6) もちろん黙斎が、聖人のように完璧に理を絶対的規準となし得ていたというのではない。黙斎は「狂」の實質を持つ者の例にもれず、修養が不充分であった。しかし、理を正確に認識する水準の高さにかけては群を抜いていた。

- (7) たとえば、次のような記事がある。

沢一、打飯する毎に自省す。「喫し来つて饑多を充たすは是れ天理なり。些か此れ飽くを需むるは是れ人欲なり」と。嘗て先君子の坐に在りて、魚汁を喫するに転甘美なり。天木時中旁より云ふ、「乃ち今、人欲界中に至る」と無きや」と。

松岡多助、忌日に斉戒す。若林子適来り、頓に之れを呼んで曰く、「多助、哀しめるや不や」と。曰く、「亦甚しくは哀しまず」と。曰く、「若し、爾らば吾と東山に去きて花を看ん」と。

○『先達遺事』注釈

凡例

一、関儀一郎編『日本儒林叢書 第三卷』（鳳出版社、一九七一年）所収の『先達遺事』を底本とし、以下の諸本と校合した。

無窮会本 無窮会神習文庫所蔵の写本。目録番号一三五・一三の『孤松全稿』四卷所収。

新発田本 新発田市立図書館所蔵の写本。目録番号V09、教書203。

一、原文を翻印し、訓読文と語注を加えた。校合はまとめて本編末に掲載した。

一、原文は底本を忠実に翻印するように努めたが、読解上の便宜をはかつて、小字双行の割注を「」で括り、単行の普通字とした。

一、底本の誤字については、訓読文で正字に訂正し、（ ）内に誤字を示した。また、必要によっては語注で訂正の根拠を示した。

一、訓読文では新字を用い、必要に応じて振り仮名を加えた。また引用文などは「」、書名は『』で括った。

一、語注の見出しには原文の字句をあげた。

一、校合では煩瑣を避けるために訓点、送り仮名、異体字、俗字等についての異同は省略した。

▼一

先達遺事序

世人愛^三子建七步與^二一斗百篇^一甚矣。余嘗言世人識^レ物。何其不能乎。彼七步百篇之徒。言致^二修飾^一。反失^二巧韶^一。辭究^二麗藻^一。方取^二魏^一二南^一。胡爲足^レ愛也。若夫斯文之醇乎醇者。非^二是先達遺事編^一乎。顧葉君之設^二斯書^一也。其縫^二認英雄豪傑磊落氣象^一。恰如^レ坐^二巖巖綺室^一。以鍼^二炳乎俗流謹厚拘滯之陋^一。還^二淵源於道德問學之實^一矣。眞奇才哉。葉君何其富饒。是編固非^レ有^二開^レ局而成^一。唯合^二衆聞^一以歸^二掌中^一焉耳。然則斯文之醇乎醇者。非^二是先達遺事編^一乎。非邪。抑亦本來骨髓也。後之學者。正抽^レ關啓^レ鑰。可^下從^二是編^上始也。余一讀不^レ忍^二自覆^一。乃復爲^下買^レ櫝還^レ珠而未^レ察者^上稱焉。後生併^二觀此言^一。亦更知^下世之所^レ愛而不^二余之所^レ愛者^上也。

明和丁亥秋八月

櫻田江求達撰

先達遺事序

世人、子建七歩と一斗百篇とを愛すること甚だし。余、嘗て言ふ、「世人の物を識ること、何ぞ其れ能はざるや」と。彼の「七歩百篇」の徒は、言、修飾を致して、反りて巧なる韶謔に失し、辞、麗藻を究めて、方に媿を二南に取る。胡為愛するに足らん。若し夫れ、斯文の醇乎として醇なる者は、是れ『先達遺事』の編に非ずや。顧みるに葉君の斯の書を設くるや、其れ英雄・豪傑、磊落の氣象を縫認し、恰も巖巖たる綺室に坐するが如く、以て、俗流の謹厚・拘滞の陋を鍼炳し、淵源を道德・問學の実に還す。真に奇才なるかな。葉君、何ぞ其れ富饒なるか。是の編、固より局を開きて成す有るに非ず。唯だ、衆聞を合して、以て掌中に帰するのみ。然れば則ち斯文の醇乎として醇なる者は、是れ『先達遺事』の編に非ずや。非ずや。抑亦本来の骨髓なり。後の學者、正に関を抽き鑰を啓きて、是の編従り始むべし。余、一読して自ら覆ふに忍びず。乃ち復、櫝を買ひて珠を還し未だ察せざる者の為に称ふ。後生、此の言を併觀して、亦更に世の愛する所に於て余の愛する所ならざるを知らん。

明和丁亥秋八月

桜田江求達撰

○語注

【子建】曹植（一九二年—二三二年）。子建は字。三国時代の魏の人。曹操の第三子で詩文にすぐれていた。著書に『曹子建集』十巻がある。【七歩】詩を作るのが早いことを「七歩の才」という。子建の兄である魏の文帝（曹丕）が、子建の詩文の才能をねたんで七歩あるく間に詩をつくるように命じたが、子建が命にたがわず即座に詩をつくったという故事による。【一斗百篇】李白は一斗にして詩百篇 長安市上酒家に眠る」

（杜甫「飲中八仙歌」）。【韶濩】殷の湯王の音楽。【麗藻】すぐれた詩文。【二南】『詩経』の周南と召南。【斯文】「子、匡に畏る。曰く、文王既に没す。文茲（こゝ）に在らずや。天の將（まさ）に斯（こゝ）の文を喪ぼさんとするや、後死（こうし）の者斯の文に與（あ）かることを得ざるなり。天の未だ斯の文を喪ぼさざるや、匡人其れ予（わ）れを如何せん。」（『論語』子罕）【醇乎醇者】「孟子は醇乎として醇なる者なり。荀と揚とは大醇にして小疵あり。」（韓愈「読荀子」）。【葉君】稻葉默齋。【綺室】美しい部屋。【鍼焔】焼く。【道德問学】「故に君子は徳性を尊んで問学（もんがく）に道り、广大を致して精微を尽くし、高明を極めて中庸（ちゆう）に道り、故（ゆゑ）きを温（あた）ねて新しきを知り、厚きを敦（あつ）くして以て礼を崇ぶ。」（『中庸』）。【買（レ）檀（レ）選（レ）珠】物のほんとうの価値を知らず、つまらないものを尊ぶことのたとえ。【櫻田】伊勢長嶋藩の江戸上屋敷があつた外桜田を指すか。【明和丁亥】明和四（一七六七）年。【江求達】大江求達。澄次郎と称した。永井行達の子。伊勢長嶋藩主増山氏に仕えた。

▼二

先達遺事

武藏 稻葉正信著

諸先達風韻氣象。或言或行。各自高（二）蹈物表（一）者。家傳語録之外。在（二）人口碑（一）。久之則失（レ）之。仍蒐（二）輯舊聞（一）。若夫議論則六經支流。語孟餘波。雖（二）駿逸可（レ）取（一）。而玄黃略而可也。至（二）下一段奇難（一）以語（レ）人者上。豈復思量所（二）能解（一）哉。而傳心寫照之妙。正在（二）阿堵一點（一）矣。彼守文之徒。俛焉佔畢。不（レ）致（二）思于斯（一）何也。余撰（二）此編（一）。兼寓（二）有（レ）待之意（一）云。

先達遺事

武蔵 稻葉正信 著

諸先達の風韻気象、或いは言、或いは行、各自物表に高踏する者は、家伝・語録の外、人の口碑に在ること久しければ則ち之れを失ふ。仍りて旧聞を蒐輯す。若し夫れ議論は則ち六経の支流、語孟の余波、駿逸取るべしと雖も、玄黄略して可なり。一段の奇快、以て人に語り難き者に至りては、豈復思量の能く解する所ならんや。而して伝心写照の妙、正に阿堵一点に在り。彼の守文の徒、俛焉佔畢して、思ひを斯に致さざるは何ぞや。余、此の編を撰し、兼て待つて有るの意を寓す云。

○語注

【風韻】気高い人柄。【物表】世俗の外。【口碑】いいたえ。【玄黄】馬が病み疲れる。「駿逸」に対して劣っているものという意味。【傳心寫照之妙。正在阿堵一點一矣。】「顧長康、人を画くに、或いは数年まで目精を点ぜず。人其の故を問ふ。顧曰く、「四体の妍蚩は、本妙処に関する無し。伝神写照は、まさに阿堵の中に在り」と。」(『世説新語』巧芸、顧長康)。「俛焉」つとめ励む。【佔畢】内容を理解せず、字面だけを読む。

▼三

闇齋年八九歳。在佛堂看經。至夜半大笑。師驚問汝何笑。曰。釋迦說許大虚誕。

播磨宍粟有山崎村。闇齋姓氏出於此。○闇齋母佐久間氏。夢詣比叡坂下。拜華表下。有白

頭翁^一。投^中梅花一枝於左袖^上而娠。生^三闇齋^一。○闇齋幼。祖妣多治比氏常語^レ之云。諺有^レ之。身一錢目百貫。汝善習^レ字。不^レ識^レ字則與^レ盲無^レ異。母佐久間氏嘗訓^レ之云。饑鷹不^レ啄^レ穀。士當^レ尚^レ志。○闇齋父淨因。自^レ播入^レ京。隱^二醫于下立賣^一。闇齋六七歲。尤没雕當。每出^二堀河橋^一。持^レ竿打^二行人脛^一。轉^二水中^一以爲^レ戲。淨因患^レ之。乃遣^二妙心寺^一爲^レ僧。號^二絶藏主^一。

闇齋年八九歳、仏堂に在りて看經^{かんきん}し、夜半に至り大笑す。師、驚きて問ふ、「汝、何をか笑ふ」と。曰く、「釈迦、許大の虚誕を説く」と。

播磨の宍粟に山崎村有り。闇齋の姓氏、此^{こゝ}に出づ。○闇齋母、佐久間氏、比叡坂下^{ひゑさかもと}に詣り華表の下に拝するに、白頭翁有りて、梅花一枝を左の袖に投ずるを夢みて娠み、闇齋を生む。○闇齋幼にして、祖妣多治比氏、常に之れに語りて云ふ、「諺に之れ有り、「身は一錢、目は百貫」と。汝、善く字を習へ。字を識らざれば則ち盲と異なること無し」と。母佐久間氏、嘗て之れに訓^{おし}へて云ふ、「饑えても鷹は穀を啄^{つば}まず」。士は当に志を尚^{たか}くすべし」と。○闇齋の父淨因、播^{ばん}より京に入り、医に下立売^{しもだちうり}に隱る。闇齋六七歳のとき、尤も没雕^{ぼつてうたう}当にして、毎に堀河橋に出で、竿を持つて行人の脛^{こう}を打ち水中に転ばし、以て戯れと為す。淨因、之れを患^{うれ}へ、乃ち妙心寺に遣^やりて僧と為し、絶藏主^すと号せしむ。

○語注

【播磨宍粟有^二山崎村^一】山崎村は、現在の兵庫県宍粟市山崎町。【佐久間氏】「母君、姓は佐久間氏、名は舍奈。天正九年辛巳冬十月、近^{きん}の江州安比路に生まれる。寛文十一年辛亥二月二十一日午の中刻、洛陽に没せり。二十七日質明、黒谷山に葬る。享年九十一歳。」(『山崎氏家譜』)【比叡坂下】日吉大社。【華表】鳥居。

【多治比氏】「妣、姓は多治比氏、名は良、号は妙泉、永祿五年壬戌秋九月九日庚寅、摂州西生郡中嶋村に生まれ、寛永十年庚辰正月九日辛卯、洛陽に没せり。知恩寺に合せ葬る。享年七十九。」『山崎家譜』。【父淨因】「父君、天正十五年丁亥夏五月四日壬辰日出づる時、泉州岸和田に生る。延宝二年甲寅冬十月二十一日辛亥酉の下刻、洛陽に没し、二十七日夜、黒谷山に合せ葬る。享年八十八歳。名は長吉、小字鶴千代。」『山崎家譜』。【隠醫于下立賣】「終に京師に窮居す。名を改めて淨因と曰ひ、針醫を以て業と為す」『山崎先生行實』。【没雕當】手がつけられない状態。【妙心寺】京都市右京区。臨濟宗妙心寺派大本山。

▼四

闇齋僧童。狡悍母頼。師欲放去。闇聞之。詈云。若爾吾焼此堂塔。寺中震慄。

闇齋在妙心寺。聞師藏中峰廣録。頻請閱之。師笑云。驅鳥大奇怪。何不似平生作用。因出廣録示云。電覽一過。亦有何益。須有二驗。闇齋諾而退。一月而還之。師問記得多少。上卷有何事。語未畢。暗誦如流。因及中卷下卷。亦復如始。師大奇之。後閱五燈會元。三日而終業。○闇齋嘗與一僧辨難。闇不能屈。竊至僧寢室焚紙幃去。

闇齋、僧童なるとき、狡悍母頼たり。師、放去せんと欲す。闇、之れを聞き罵りて云ふ、「若し爾すれば、吾、此の堂塔を焼かん」と。寺中震慄す。

闇齋、妙心寺に在りて師の『中峰広録』を蔵するを聞き、頻りに之れを閲することを請ふ。師、笑ひて云ふ、「驅鳥大奇怪。何ぞ平生の作用に似ざるや」と。因りて『広録』を出し、示して云ふ、「電覽一過、亦何の益有らん。須く二驗有るべし」と。闇齋、諾して退き、一月にして之れを還す。師、記得の多少を

問ふ、「上巻、何事や有る」と。語、未だ畢はらざるに、暗誦すること流るるが如し。因りて中巻・下巻に及ぶも、亦復始めの如し。師、大いに之れを奇とす。後に『五燈會元』を閲して、三日にして業を終ふ。○闇斎、嘗て一僧と弁難し、闇、屈する能はず。竊かに僧の寢室に至りて紙幃を焚きて去る。

○語注

【母頼】無頼。【中峰廣録】『中峰和尚広録』。三十卷。中峰明本（一二六三年—一三二三年）撰。慈悲編。一三三五年刊。中峰明本の語録。【驅鳥大奇怪】「驅鳥」は食物の上の鳥を追ひ払う役目をする見習いの小坊主。闇斎を指す。「狡悍母頼」な闇斎が本をしきり請うという殊勝な態度にでたことを「大奇怪」と評した。【五燈會元】二十卷。宋の大川普濟撰。一二五三年刊。『景德伝燈録』、『天聖廣燈録』、『建中靖国統燈録』、『聯燈会要』、『嘉泰普燈録』の重複している内容を整理し、一冊にまとめている。

▼五

下有「僧妒「絶藏主卓越」者^上。主會患「泄瀉」。因欲^下乘「其虚憊」以陵駕^上。預以爲^レ快。一夕往訪^レ疾。主倚^レ壁跨^二厠馬^一誦經。精神不^レ減^二平日^一。僧愕然。

一僧、絶藏主の卓越するを妒む者有り。主會泄瀉を患ふ。因りて其の虚憊に乗じて以て陵駕せんことを欲す。預め以て快と爲し、一夕、往きて疾を訪ふ。主、壁に倚り、厠馬に跨りて誦経す。精神平日に減ぜず。僧愕然たり。

○語注

【泄瀉】はらくだり。【虚憊】弱り、苦しむ。

▼六

南人每_レ會_二絶藏主_一。必設_二素饌_一。一日集_二野中氏_一。僧時中講_二中庸_一。野中氏豫令_二厨人具_二魚肉_一。云今日集主必喫_レ肉。頃之主至。讀_二中庸_一一次。通身汗出。即輒招_二僧服擲_二珠子_一歸正焉。

初南學之興也。權_二輿僧時中_一。時中即谷_二三介之父_一。宗_二親鸞門徒_一。主_二土佐眞常寺_一。性宏曠又能識_レ字。

野中兼山從_レ之讀_レ書。自_レ是南人始知_レ讀_二經籍_一。野中嘗祇_二役江戸_一。得_二中庸一本_一。未_三悉曉_二文義_一。而又稍覺_レ異_レ佛。既南歸使_二時中講解_一也。於是偏求_二儒書_一。當時最乏_二書策_一。有_二士人得_二大學或

問_一。因知_レ有_二小學者_一。求_二諸三都及長崎_一而不_レ得焉。有_二一人買_二小學白本於大津驛_一。諸人爭集校。

絶藏主自作_二註解_一。至_二明倫篇_一。會野中得_二韓本小學句讀於宗對州之許_一。藏主乃火_二所著註解_一。便區_二別句讀_一。使_二諸人訓點_一。有_二一人訓_二小學做人底樣子語_一。底爲_二蓋底之底_一。誤_二認樣字爲_レ橡。子訓_レ

實。滿坐無_レ不_二大笑_一。南人至今爲_二笑談_一。○若林語錄云。藏主出_二妙心寺入_二吸江寺_一。蓋擬_三後爲_二寺主_一。野中兼山時爲_二檀家之最_一。因_二一見藏主甚異_レ之。乃漸勸讀_二聖典_一。及_レ至_レ讀_二語類文集_一。氷

釋霧消。著_二關異一卷_一。以舉_二示師們_一遂去。時年二十四五。○闇齋在_二南土_一。每然歸正。不_レ申_二狀於府_一。太守責_二其輕_二國法_一。於是逃_二京師_一。若林語錄云。依_二野中氏指導_一。住_二吉屋町出水上町_一。自_レ是下_レ

幃。常持_二一棒擊_二講座_一。以教_二授諸生_一。聽徒畏懼。無_レ敢仰_二其面者_上也。○尚齋語錄云。先師課會。

以_二已時爲_レ限。後_レ期至者。闔_レ門不_レ入。最禁_二浮屠雜入_一。其聲高亮。行人佇立竊_二聽於門外_一。其解_レ

書必談^二要領^一。不^レ復細密^一。如^二論語^一止四丁。至^二孟子^一儘及^二六丁以上^一。○若林語録云。闇齋講坐。有^下問^二徒然草是何書^一者^上。當時聽徒大率如^レ此。故平易淺近教誨過。○唐彦明云。大父録^二闇齋語^一中。有^下今上皇帝謂^二今天子^一者^上。當年門人朴實寡聞。槩類^レ此。

頭注

野中土佐執政名止字良繼號兼山俗稱傳右衛門

南人南學共謂土佐也

三都謂平安大坂江戸三都會也

南人、絶藏主に会ふ毎に必ず素饌を設く。一日、野中氏に集ひて、僧時中、『中庸』を講ず。野中氏、予め厨人をして魚肉を具へしめて云ふ、「今日の集ひ、主、必ず肉を喫らはん」と。頃之くして、主、至る。『中庸』を読むこと一次、通身汗出で、即輒ち僧服を脱ぎ珠子を擲ち、帰正す。

初め南学の興るや、僧時中に権輿す。時中は即ち谷三介の父にして、親鸞門徒を宗とし、土佐真常寺に主たり。性宏曠、又能く字を識る。野中兼山、之れに従ひ書を読む。是れより、南人、始めて経籍を読むを知る。野中、嘗て江戸に祇役し、『中庸』一本を得。未だ悉くは文義を曉らざれども、又稍仏に異なるを覚ゆ。既に南帰して、時中をして講解せしむ。是に於て徧く儒書を求む。当時、最も書策に乏し。一人人有り、『大学或問』を得。因りて『小学』なる者有るを知りて、諸れを三都及び長崎に求めて得ず。一人有り、『小学』の白本を大津駅に買ふ。諸人、争ひて集校す。絶藏主自ら注解を作り、「明倫篇」に至る。会野中、韓本の『小学句読』を宗対州の許に得たり。藏主、乃ち著はす所の注解を火く。便ち句読

を区別し、諸人をして訓点せしむ。一人有り、「小学は人と做る底の様子」の語を訓じて、「底」を「蓋底」の底と為し、「様」の字を誤認して「椽」と為し、「子」を「実」と訓ず。満坐大笑せざる無し。南人、今に至るも笑談と為す。○『若林語録』に云ふ、「蔵主、妙心寺を出て、吸江寺に入る。蓋し後に寺主と為さんと擬す。野中兼山、時に檀家の最たり。因りて蔵主を一見して、甚だ之れを異とし、乃ち漸く勧めて聖典を読ましむ。『語類』、『文集』を読むに至るに及び、氷积雪消し、『關異』一卷を著し、以て師們に挙示し遂に去る。時に年二十四五」と。○闇齋、南土に在つて、奮然として帰正し府に申状せず。太守、其の国法を軽んずるを責む。是に於て京師に逃る。『若林語録』に云ふ、「野中氏の指導に依り、吉屋町出水上町に住む。是れより幃を下す。常に一棒を持ち講座を撃つて、以て諸生を教授す。聴徒、畏憚し、敢へて其の面を仰ぐ者無し」と。○『尚齋語録』に云ふ、「先師の課会は、巳時を以て限と為し、期に後れて至る者は、門を闔ちて入れず。最も浮屠の雜入することを禁ず。其の声、高亮、行人、佇立して竊かに門外に聴く。其の書を解くや必ず要領を談じ、復細密ならず。『論語』の如きは四丁に止まり、『孟子』に至つては儘六丁以上に及ぶ」と。○『若林語録』に云ふ、「闇齋の講坐に、『徒然草』は是れ何の書ぞ」と問ふ者有り。当時の聴徒、大率此くの如し。故に平易浅近に教誨し過ぐ」と。○唐彦明云ふ、「大父闇齋の語を録する中に、『今上皇帝を今天子と謂ふ』者有り。当年の門人の朴実寡聞なること概ね此れに類す」と。

頭注

野中は土佐の執政。名は止、字は良繼、号は兼山、俗称伝右衛門。

南人、南学は共に土佐を謂ふなり。

三都は平安、大坂、江戸の三都会を謂ふなり。

○語注

【野中氏】野中兼山（元和元「一六一五」年—寛文三「一六六三」年）。字は良繼、傳右衛門と称した。土佐藩家老、儒学者。寛永八（一六三一）年から寛文三（一六六三）年まで朱子学を施政方針の基礎として藩政をとりしきった。【僧時中】慶長三（一五九八）年—慶安二（一六四九）年。名は素有、大学と称した。浄土真宗の僧侶であったが、南村梅軒に朱子学を学んで還俗し、儒学と医学を教授した。【講「中庸」】山田思淑『闇齋先生年譜』によれば『中庸』の首章を講じた。【谷三介】谷一斎（寛永二「一六二五」年—元禄八「一六九五」年）。土佐藩に仕えたが、野中兼山の失脚にともなうて致仕し、京都に移る。その後江戸で稲葉侯に仕えた。【祇「役」】江戸に参勤する主君に随行すること。【大學或問】朱子著。【小學】『小学』。六卷。劉清之の原稿に朱子加筆して選定した。一一八七年成立。【小學句読】明の陳選著。子供に『小学』を読み学ぶことを勧めるために著した書。【宗対州】対馬の府中藩主宗氏。対州は府中藩の別称。【做人底様子】『朱子語類』巻第七 学一に「後生の初学、且く小学の書を見よ。那れは是れ人を做人底様子」とある。無窮会平沼文庫所蔵の『先達遺事』の藤田畏斎の割記にはこの部分について「不案内デ「人ヲナスソコノドングリノミ」ト云タ。ソコデ大笑ニナリタ」とある。【若林語録】未詳。『雑話筆記』のことか。【吸江寺】臨済宗妙心寺派。【語類】『朱子語類』。百四十卷。宋の黎靖德編。【文集】『晦庵先生朱文公文集』。正集百卷、続集十一卷、別集十卷。清の朱玉編。【關異】山崎闇齋著。闇齋の跋によれば正保四（一六四七）年成立。『朱子文集』、『朱子語類』から朱子の排仏説を抜き出して編集した。【師門】師と仲間達。【下「幃」】学塾を開く。【尚齋語録】『尚齋先生雜談録』。【巳時】午前十時ころ。【高亮】声がよくとおる。【唐彦明】唐崎彦明（正

徳四「二七一四」年—宝暦八「二七五八」年。名は欽。金四郎と称した。芸州竹原の人。三宅尚齋の門人。伊勢長島藩に仕えたが諫言していられず、放逐された。遺稿『竹原遺稿』三卷は黙齋がまとめたものである。【大父】唐崎彦明の祖父は名定信、甚右衛門と称し、後隼人と改めた。山崎闇齋の門人。

▼七

垂加翁、師道至りて厳しく、其接^二門人^一。雖^二細過^一不^二少假^一。一日鵜飼金平與^二諸人^一侍^二翁坐^一。翁方講談。金平在^二稠人席^一。偶弄^二剪刀^一碰^レ爪。翁睨視^レ聲云。師席碰^レ爪何禮。金平掉慄。諸人失^レ色。

金平名眞昌。成章訓^二點通鑑^一。弱冠從^レ翁而學。尋仕^二水府^一脩^二國史^一。

垂加翁、師道至りて厳しく、其の門人に接するや細過と雖も少しも仮さず。一日、鵜飼金平、諸人と翁の坐に待す。翁、方^{まさ}に講談す。金平稠人^{ちうじん}の席に在りて、偶^ぐ剪刀を弄して爪を碰^みく。翁、睨視^{げいし}し声を励まして云ふ、「師席に爪を碰くは何の礼ぞ」と。金平掉慄^{てうりつ}し、諸人色を失ふ。

金平、名は眞昌。成章にして『通鑑』に訓点し、弱冠にして翁に従ひて学ぶ。尋いで水府に仕へ国史を脩む。

○語注

【仮】ゆるす。【鵜飼金平】鵜飼鍊齋（寛永十「一六三三」年—元禄六「二六九三」年）。名は眞昌、字は子欽。京都の人。水戸藩に仕えて『大日本史』の編纂に従事した。従五位。【睨視】にらむ。【掉慄】ふるえおののく。【稠人】たくさんの人。【通鑑】『資治通鑑』二百九十四卷。宋の司馬光著。

▼八

書生毎_下自_二垂加翁許_一還路見_二美色_一。或過_二娼家俳優肆_一。心動情移_上。恍忽見_三翁面貌在_二咫尺間_一。不_レ覺存_二畏敬_一。

佐藤子嘗云。昔師_二事闇齋_一。每_下到_二其家_一入_{上レ}戸。心緒惴惴如_レ下_レ獄。及_二退出_{一レ}戸。則大息似_レ脱_二虎口_一。

書生、垂加翁の許より還る路、美色を見、或いは娼家・俳優の肆_{よぎ}を過り、心動き情移る毎に、恍忽として翁の面貌、咫尺_{しせき}の間に在るを見て、覚えず畏敬を存す。

佐藤子、嘗て云ふ、「昔、闇齋に師事せしとき、其の家に到り戸に入る毎に、心緒惴惴_{しんしゆいずい}として獄に下るが如し。退きて戸を出づるに及び、則ち大息_{たいそく}して虎口を脱するに似たり」と。

○語注

【咫尺】非常に近い距離。【佐藤直方（慶安三「一六五〇」年—享保四「一七一九」年）。五郎左右衛門と称した。備後、福山の人。山崎闇齋に学び、浅見綱齋、三宅尚齋とともに崎門三傑と称された。著書に『講字鞭策録』、『排釈録』、『鬼神集説』などがある。【惴惴】おそれびくびくするさま。

▼九

佐藤直方因_二永田養菴_一見_二垂加翁_一。翁問汝嘗讀_二何書_一。直方云。且誦_二五經_一。翁乃問大夫適_二四方_一乘_二安

車^一。此記得不。直方答少凝滯。翁直云。在^二曲禮^一。戴記初卷尚記不^レ得。烏爲^レ誦^二五經^一。因顧^二養菴^一曰。年少從^二學予^一。早在。且退須^二誦讀^一。直方大懷^二耻慨^一。自^レ是發^レ憤苦學。至^レ廢^二眠食^一。後一年復詣^レ翁。時鶴飼金平在^レ坐。會書肆竹村携^二漢本二程全書^一來。翁輒令^二直方誦^レ之。直方受讀頗滯澁。翁叱投^二金平^一。金平開^レ卷誦^二序文^一。不^レ蹉^二一字^一。讀畢傲然云。明人作^レ文。亦復浮靡。翁向^二直方^一言。讀書如^二他們^一始是。何若^二汝滯澁^一。直方益摧屈。然亦資性英發。因徐稟云。小子嘗見^下浮屠誦^二一切經^一。建立^二堂塔^一者^上。未^三必至^二佛界^一。小子精懇志在^二成佛^一。至^二聖學^一亦如^レ此。豈該博之爲。翁大奇^二其言^一。寵異最至。

佐藤直方、永田養庵に因りて垂加翁に見ゆ。翁問ふ、「汝、嘗て何の書をか読める」と。直方云ふ、「且く五經を誦す」と。翁乃ち問ふ、「大夫、四方に適くには安車に乗る」、此れを記し得たりや不^レや」と。直方、答ふるに少しく凝滯す。翁直ちに云ふ、「曲礼」に在り。『戴記』初卷すら尚ほ記し得ず。烏くんぞ五經を誦すと為さん」と。因りて養庵を顧みて曰ふ、「年少にして、予に従学すること早し。且く退きて須く誦読すべし」と。直方、大いに恥慨を懷き、是れより憤を發して苦学し、眠食を廢するに至る。後一年、復び翁に詣る。時に鶴飼金平、坐に在り。會、書肆竹村、漢本の『二程全書』を携へ来る。翁、輒ち直方をして之れを誦せしむ。直方、受けて読むも頗る滯澁す。翁、叱して金平に投ず。金平、卷を開き序文を誦し、一字を蹉へず。読み畢はり傲然として云ふ、「明人の文を作る、亦復浮靡なり」と。翁、直方に向ひて言ふ、「読書、他們的の如くして始めて是。何ぞ汝が滯澁する若くならん」と。直方、益摧屈す。然れども亦、資性英發なり。因りて徐に稟して云ふ、「小子、嘗て浮屠の一切經を誦し堂塔を建立する者を見るに、未だ必ずしも仏界に至らず。小子、精懇の志は成仏に在り。聖學に至るも亦此くの如し。豈該博を之れ爲さんや」と。翁、大いに其の言を奇とし、寵異すること最も至れり。

○語注

【永田養菴】名は在明。備後の人。『周易』の解釈に優れていた。【大夫適四方一乗安車】。「大夫は七十にして事を致す。若し謝することを得ざれば、則ち必ず之れに几杖を賜ふ。役に行くには婦人を以てし、四方に適くには安車に乗る。自ら称して老夫と曰ふ。」(『礼記』曲礼上)。【曲礼】『礼記』の編名。【戴記】『礼記』は編纂者が前漢の戴聖であることから『戴記』とも呼ばれる。【從學予一早在】「在」は区末の強調の助字。【耻慨】「耻」は「恥」の俗字。【發憤苦學。至廢眠食】。「憤を發して食を忘れ、楽しんで以て憂いを忘れ、老いの将に至らんとするを知らざるのみ」(『論語』述而)。【書肆竹村】武村市兵衛。壽文堂と号した。闇齋の門人。『京羽二重』の書物屋の項に「二條東洞院安齋書 武村一兵衛」とある。【二程全書】六八卷。徐必達編。一六〇六年成立。【序文】徐必達による。【浮靡】輕薄ではでやか。明代の詩文は、放恣な時代風潮を反映して調和を欠いた退廢的なものが多いとされる。【他們】彼等。【摧屈】屈服する。【稟】「稟」の俗字。もうしあげる。

▼十

淺見安正嘗患吐血。連日不愈。翁尚使之苦學。楨元眞爲之諷。翁言。渠病狀已如此。且廢業以將息。翁不_レ可。安正力_レ疾強就_レ業如_レ常。未_レ幾復_レ故。翁呼_二元眞_一云。安正故自不_レ死。汝何使_三年少爲_二軟弱之計_一邪。元眞退歎云。師亦殆是刻薄在。

初直方從_二學翁_一。中間謂_二安正_一云。吾曹日喫_二翁怒罵_一。精力已罄。若久_レ之勢應_レ至_レ死。安正云。吾亦思_レ之。然今海内此外豈有_レ師乎。因相共堅苦。遂師_二事于翁_一。

浅見安正、嘗て吐血を患ひ連日愈えず。翁、尚ほ之れをして苦学せしむ。榎元真、之れが為に翁を諷めて言ふ、「渠かれの病状すで、已に此こくの如し。且く業を廢し以て将息せしめん」と。翁、可ゆるさず。安正、力疾して強ひて業に就くこと常の如し。未だ幾ばくならずして故に復す。翁、元真を呼びて云ふ、「安正、故もとより自ら死せず。汝、何ぞ年少をして軟弱の計を為さしむるや」と。元真、退きて歎じて云ふ、「師、亦殆んど是れ刻薄なること在り」と。

初め直方、翁に従学す。中間、安正に謂ひて云く、「吾曹わがそう、日に翁の怒詈どを喫し、精力已に罄つく。若し之れを久しくすれば、勢まさひ応に死に至るべし」と。安正云ふ、「吾も亦また之れを思ふ。然れども、今、海内に此の外豈あに師有らんや」と。因りて相共に堅苦し、遂に翁に師事す。

○語注

【浅見安正】浅見綱齋（承応元「一六五二」年—正徳元「一七一」年）。重次郎と称した。近江、高島の人。山崎闇齋に学んだ。主著『靖献遺言』の大義名分論は思想界に大きな影響を与えた。ほかに『拘幽操附録』、『氏族辨証』などを著した。【榎元真】元禄四（一六九二）年夏、没した。七郎左衛門と称した。美濃の人。山崎闇齋の門人。加納藩主松平光重に仕え、後、光重の第二子、戸田光正の家宰となった。【将息】養生する。【力疾】病気であるにもかかわらず頑張る。【吾曹】われわれ。

▼十一

闇齋性急。特罵「門人遲鈍者」。及「直方安正輩來談」玄理。始怡笑。其妾密囑「直方」曰。願君與「浅見」日

接ニ德音」。不_レ然無_レ奈ニ主公鞅鞅不_レ樂。

闇齋、性急にして、特に門人の遲鈍なる者を罵_{のし}る。直方・安正の輩来りて玄理を談ずるに及び、始めて怡笑す。其の妾、密かに直方に囑みて曰く、「願はくは、君、浅見と日に德音に接せんことを。然らざれば主公の鞅鞅として樂しまざるを奈んともする無し」と。

○語注

【怡】喜ぶなごむさま。【德音】有徳者のことば。無窮会平沼文庫所蔵『先達遺事』の藤田畏齋の割記には「德音」について「妾カラ云詞。旦那様ト云コト」とある。

▼十二

浅見安正初名順良。常與ニ垂加翁酒筵一。順良本豪飲。酬酢之間。人不_レ飲己亦不_レ飲。雖_レ翁不_レ許。翁謂_レ之云。卿平素順良。毎_レ至_レ飲_レ酒。亦復不順良。

浅見安正、初め名は順良。常に垂加翁の酒筵に与かる。順良、本豪飲、酬酢の間、人飲まざれば己も亦飲まざること、翁と雖も許さず。翁、之れに謂ひて云ふ、「卿、平素は順良なるも、毎に酒を飲むに至れば亦復順良ならず」と。

○語注

【酬酢】応対報告。

▼十三

垂加翁疾在「蚊帳内」。永田養菴至。話及「仁説」。養菴精析極通爽。翁悚然呼「侍者」云。去「蚊帳」。養菴何會得至「于斯」。

垂加翁、疾みて蚊帳の内に在り。永田養庵至り、話、「仁説」に及ぶ。養庵、精析、極めて通爽なり。翁、悚然として侍者を呼びて云ふ、「蚊帳を去れ。養庵、何ぞ会得の斯に至るや」と。

○語注

【仁説】『朱子文集』六十七の「仁説」のことか。【悚然】無窮会平沼文庫所蔵『先達遺事』の藤田畏斎の割記には「シャントスルコト。寝コロンデ居タモノガ、ハネ起ルヨフナコト」とある。

▼十四

一太守詣「闇齋」託「求講官」。時群弟子滿「坐」。闇齋眄「睞衆人」曰。甲者直方。乙則安正。此二人不「應」公之招」。其他不「足」擢用」。太守良久乃言。若敝邑「二三子從」學先生」。後漸用「之如何。闇齋云。否舍之。儒生之成。不「如」葡萄匏之生」。

當時受「學於闇齋」者。會津中將。正親町一位。野野宮中將。加藤美作守。井上河内守。高田未白。淺井万右衛門。遊佐清左衛門。黒岩慈菴。楨元眞。桑名松雲。檜崎正員。春原民部。鵜飼金平。谷丹三郎。植

田玄節。雲川治兵衛。梨木祐之。永田養菴。佐藤直方。淺見安正。三宅重固。其他及^レ門者。不^レ可^二枚舉^一。唐彦明云。天木時中門人。有^二伊門善藏者^一。伊豫今治人。其家藏^二闇齋門人名籍^一。其數六千人云。

一太守、闇齋に詣り、講官を託し求む。時に群弟子坐に満つ。闇齋、衆人を眇睞して曰ふ、「甲なる者は直方、乙は則ち安正。此の二人は公の招きに応ぜず。其の他は擢用するに足らず」と。太守、良久しくして乃ち言ふ、「若し敝邑の二三子、先生に従学し、後、漸く之れを用ふれば如何」と。闇齋云ふ、「否、之れを舍け。儒生の成るは菑匏の生ずるが如くならず」と。

当時、学を闇齋に受くる者は、会津中将、正親町一位、野野宮中将、加藤美作守、井上河内守、高田未白、浅井万右衛門、遊佐清左衛門、黒岩慈庵、榎元真、桑名松雲、櫛崎正員、春原民部、鶴飼金平、谷丹三郎、植田玄節、雲川治兵衛、梨木祐之、永田養庵、佐藤直方、淺見安正、三宅重固。其の他門に及ぶ者、枚挙すべからず。唐彦明云ふ、「天木時中の門人に伊門善藏なる者有り。伊予、今治の人。其の家に闇齋の門人の名籍を蔵す。其の数、六千人と云ふ」と。

○語注

【一太守】『迂齋先生学話 卷之十五』によれば、小出備前守。【眇睞】にらむ。【甲者直方。乙則安正。】無窮会平沼文庫所蔵『先達遺事』の藤田畏齋の割記には「コレヲ多ク人ガ取リソコノフ。一番家老、二番家老ト云コトニアラズ。アツチ、コツチト云コト」とある。【敝邑】自分の国の謙称。【匏匏】大根と瓜。【会津中将】会津藩主保科正之（慶長一六「一六一」年—寛文一二「一六七二」年）。土津靈神と号した。徳川秀忠の子、家光の弟。『三子傳心録』、『玉山講義附録』、『二程治教録』を編纂した。『三子傳心録』、

『二程治教録』は序跋とともに山崎闇齋、『玉山講義附録』の跋は山崎闇齋による。【正親町一位】権大納言藤原公通（承応二「一六五三」年—享保一八「一七三二」年）。風水軒、また白玉靈社と号した。著書に『甲子祭考』、『庚申祭考』などがある。【野野宮中将】野野宮定基（寛文九「一六六九」年—正徳元「一七一一年」）。松堂と号した。【加藤美作守】伊予大洲藩主加藤泰義（寛永六「一六二九」年—寛文八「一六六八」年）。幼名亀之助、右馬介と称し、省齋と号した。江戸の人。【井上河内守】横須賀藩主井上正利（慶長十一「一六〇六」年—延宝「一六七五」年）。正保二（一六四五）年、笠間に移封。【高田未白】高田正方（寛永七「一六三〇」年—正徳五「一七二五」年）。別号、白翁。備後の人。著書に『古語拾遺節解』がある。【浅井万右衛門】浅井琳庵（万治元「一六五八」年—享保二「一七二七」年）。名は重遠。近江の人。園部藩臣。【遊佐清左衛門】遊佐木斎（万治元「一六五八」年—享保十九「一七三四」年）。名は好生。仙台藩儒。著書に『人倫箴』、『洪範發微』などがある。【黒岩慈菴】寛永四（一六二七）年—宝永二（一七〇五）年。名は恒、東峯、また震翁と号した。土佐藩儒。後福岡藩に仕えた。著書に『君臣要略』、『除患録』などがある。【楨元真】十の語注参照。【桑名松雲】桑名黙齋（慶安二「一六四九」年—享保十六「一七三二」年）。字は子石、仙台藩に仕えたが、藩主伊達綱村が仏教を信ずるに及んで辞去した。【檜崎正員】元和六（一六二〇）年—元禄九（一六九六）年。忠右衛門と称した。備後三原の菓商。【春原民部】出雲路信直（慶安三「一六五〇」年—元禄十六「一七〇三」年）。八塩道靈社と号した。下御霊神社神官。従五位上。著書に『日少宮伝并生死伝』などがある。【鵜飼金平】七の語注参照。【谷丹三郎】谷秦山（寛文三「一六六三」年—享保三「一七一八」年）。名は重遠。土佐の人。著書に『秦山集』全五十巻がある。【植田玄節】植田良背（慶安四「一六五二」年—享保二〇「一七三五」年）。諱は成章。広島藩儒。【雲川治兵衛】雲川弘毅。春庵と号した。著書に『心學辨』などがある。【梨木祐之】鴨桂齋（万治二「一六五九」年—享保九「一七二四」年）。

右京権大夫と称した。賀茂御祖神社（下賀茂神社）神官。正三位。著書に『日本逸史』がある。【永田養菴】九の語注参照。【三宅重固】三宅尚齋（寛文二「一六六二」年—元文六「一七四一」年、一月）。丹治と称した。播磨国明石の人。山崎闇齋の晩年に入門。忍藩に仕えたが、諫言して入れられず幽囚された。釈放後、京都で学塾を開き多くの門人を育てた。著書に『黙識録』、『狼寔録』などがある。【唐彦明】六の語注参照。【天木時中】元禄九「一六九六」年—元文元「一七三六」年。善六と称した。尾張の人。初め佐藤直方に学び、後尚齋の門人となった。伊勢長島藩に仕えた。著書に『為貧説』、『命説』などがある。【伊門善藏】天木時中の門人。伊予の人。

▼十五

山崎正員「稱_二忠右衛門」。備後三原薬店。親執_レ爨事_二垂加翁。一日在_二堂下_一束_レ薪。翁召_二正員。正員唯而起。再_二拜床下_一言。即日天氣清爽。翁冒云。吾不_レ問_二天氣。盍_三速質_二疑難_一。

山崎正員、「忠右衛門と称す。備後、三原の薬店。」親しく爨_{さん}を執りて垂加翁に事_{つか}ふ。一日、堂下に在りて、薪_{たば}を束ぬ。翁、正員を召す。正員、唯_いして起ち、床下に再拝して言ふ、「即日、天氣清爽なり」と。翁、罵_{ののし}りて云ふ、「吾、天氣を問はず。盍_{なん}ぞ速_{すみ}やかに疑難_{ただ}を質_たさざる」と。

○語注

【執_レ爨】炊飯する。【唯】つつしんで、すぐに「はい」と答える。

▼十六

黒岩慈庵與^二谷重遠^一同入^二垂加門^一。翁服^レ葛盤坐。隱^レ几寫^レ字。都講引^二之几下^一。各稱^二姓名^一。翁昂^レ首視而呼云。彼總角者清八「重遠小字。後改^二丹三郎^一」。耶。聞汝穎敏。自^レ今須^二努力^一。翁遇^二門客^一。神氣傲邁每如^レ此。

黒岩慈庵、谷重遠と同じく垂加の門に入る。翁、葛を服^きて盤坐し、几に隠^より字を写す。都講^{とこう}、之^こを几下に引き、各姓名^{おのおの}を称す。翁、首を昂^あげ視て呼びて云ふ、「彼の総角なる者は清八「重遠の小字、後丹三郎と改む。」か。聞く、汝穎敏と。今より須^すく努力^{から}すべし」と。翁の門客を遇する、神氣の傲邁なること毎に此くの如し。

○語注

【都講】塾生の頭。

▼十七

垂加翁遭^二外艱^一。喪禮一依^レ古。僧慍^二其不^レ作^二佛事^一。頗忤^レ翁。翁勵^レ色呼^二門人^一云。第爲^レ吾殯^二宅内^一。吾詰朝到^二關東^一訟^二祠曹^一。僧見^二其不^レ可^レ犯。屈^レ意不^二復忤^一。

垂加翁、外艱に遭ふや、喪礼は一に古に依る。僧、其の仏事^なを作さざるを慍^{うら}み、頗る翁に忤^{たが}ふ。翁、色を励まし門人を呼びて云ふ、「第^{ただ}、吾が爲に宅内に殯せよ。吾^{われ}、詰朝關東に到り、祠曹に訴へん」と。僧、其の

犯すべからざるを見て、意を屈して復忤^{また}はず。

○語注

【外艱】父の死。闇斎の父は延宝二（一六七四）年十月二十一日に没した。【不^レ作^二佛事^一】『家礼』喪礼。

【詰朝】明朝。

▼十八

會津侯卒。垂加翁往相^レ禮。有司細大咨^二稟翁^一。翁所^レ命一器巨大難^レ出^レ門。有司以告。翁直云。好壞^二城門^一出焉。

會津侯、卒す。垂加翁、往きて礼を相^{たす}く。有司、細大翁に咨稟す。翁の命ずる所の一器、巨大にして門を出で難し。有司、以て告ぐ。翁、直^{ただ}ちに云ふ、「好^よし、城門を壊^{やぶ}りて出だせ」と。

○語注

【會津侯卒】會津藩主保科正之は寛文十二（一六七二）年十二月十八日に没した。【有司】官吏。【咨稟】相談して指図を受ける。

▼十九

後藤松軒侍^二垂加翁講筵^一。翁講畢。顧^二松軒^一云。坊「俗稱^二落髮者^一」亦會麼。松軒忿恚。終身手不^レ執^二翁

著述之籍^一。「唐彦明云。南學傳先生部。疑松軒使^レ作^レ之。而一老者亦恐此人。」

後藤松軒、垂加翁の講筵に待す。翁、講じ畢はりて、松軒を顧みて云ふ、「坊「俗に落髮者を称す」も亦会するや」と。松軒、忿恚^{ふんい}して、終身手に翁の著述の籍を執らず。「唐彦明云ふ、『南学伝』の先生の部、疑ふらくは、松軒、之^これを作らしむ。而して一老者は亦、恐らくは此の人ならん」と。」

○語注

【後藤松軒】寛永十三（一六三六）年—享保二（一七一七）年。三河の人。盲人。医者であり、また会津藩儒。【忿恚】うらみいかる。【南學傳】大高坂芝山著。元禄四（一六九二）年成立。内外二集より成り、土佐の朱子学者計二十一人の伝記を収める。【一老者】『南学伝』二〇頁—二二頁参照。

▼二十

梨木祐之欲^レ再^二興^一葵祭^一。懷^下奏^二請^一東朝^上。割^子子^上。質^二之^一垂加翁^一。翁輒援^レ筆。且讀且批。不^二復^一細訂^一。即投^二祐之^一。祐之退熟^三讀其所^二改正^一。拍^レ手嘆云。翁何人。才云能云。何其如^レ此。

梨木祐之、葵祭を再興せんと欲し、東朝へ奏請する割子を懷きて、之れを垂加翁に質す。翁輒^{すなは}ち筆を援^ひき、且つ読み且つ批し、復^{また}細訂せず、即ち祐之に投ず。祐之、退きて其の改正する所を熟読し、手を拍ちて嘆じて云ふ、「翁、何人ぞ。才と云ひ能と云ひ、何ぞ其れ此^かくの如きや」と。

○語注

【葵祭】五月十五日（古くは四月中の酉の日）の京都賀茂御祖神社、京都賀茂別雷神社の例祭。欽明天皇（五三九年―五七一年）に始まると伝えられている。応仁の乱以後二百余年間、中絶していたが、梨木祐之によつて元禄七（一六九四）年に再興された。

▼二十一

闇齋記性絶^レ人。一門生執^レ巾侍^ニ浴室^一。話偶及^ニ梅花^一。翁乃輒暗^ニ吟古人賦^レ梅詩。無慮五十四首^一。

闇齋、記性^{きせい}人に絶す。一門生、巾を執りて浴室に侍す。話、偶^{たまに}梅花に及ぶ。翁、乃ち輒^{すなは}ち古人の梅を賦せし詩、無慮五十四首を暗吟す。

○語注

【記性】記憶力。【無慮】およそ。

▼二十二

春原民部「下御靈神職」在^ニ垂加門^一。尤謹愿。其侍^レ翁如^ニ芒刺在^レ背^一。一日翁授^ニ門人神代卷^一。「翁得^ニ神道於吉川惟足^一。惟足得^ニ之卜部繁兼^一。」避^ニ左右^一。雖^ニ兒輩^一不^レ許^レ窺。以爲^レ常。云吾年十二三。竊^ニ見天台秘書^一。既已會得。時民部侍^レ側。斂容逡巡且晒云。世豈有^下若^ニ先生^一兒上哉。

翁嘗言。周公納^レ冊啓^レ書。而王繆不起。嚴光加^ニ足於帝腹^一。而大史奏^ニ客星之變^一。天神幽居。世界自如^ニ

長夜^一。此人天感通。必然之應。儒者不^三敢議^二金^一。而致^二疑於神書^一何也。晚著^二風水草^一。託^二之正親町一位・梨木三位・桑名松雲・春原民部^一。遺命云。此書須^二學進^一披閱。不^レ要^二早看^一。因藏^二之下御靈宮^一。不^二敢發^一。易^レ寶後七八年。民部謂^三三子^一云。遺命雖^レ存。吾輩學之成期^二何日^一。不^レ如^二熟讀而深思^一。遂相共緝^二書於御靈宮中^一。或謂民部不^レ在^二遺命之列^一。因^レ有^レ所^二云云^一得^二共閱^一也。後植田玄節得^二之四氏^一。○闇齋門下最秘^二風水草^一。余友村士行藏藏^二一本^一。其父得^二之岡田盤齋^一。盤齋得^二之玉木葦齋^一。葦齋得^二之正親町^一。藝陽竹原人唐崎淡路藏^二一本^一。其父上總介受^二之梨木祐之^一。仙臺桑名才一世藏^レ之。才一即松雲曾孫。○唐崎淡路曾祖曰^二定信^一。嘗見^レ翁。有^二講義^一。載^二翁之言^一云。我邦所^三以秘^二神書^一者。昔應神帝徵^二百濟博士王仁^一。授^二太子經^一。王仁竊^二見官庫書^一。欲^レ傳^二其國^一。事覺將^レ見^レ刑。以下授^二經典^一之功^三贖^二其罪^一。自^レ是朝廷載籍。非^二其人^一則不^レ許^二輕授^一。至^レ今嚴^レ盟。固非^二一己私秘^一也。○闇齋門人。毅然不^レ惑^二神道^一。醇乎醇者。佐藤淺見三宅三君子而已。而永田養菴有^レ見^二於道學^一。梨木祐之有^レ發^二於神道^一。俊異卓絕。當時無^下出^二其右^一者也。○植田玄節篤信^二闇齋^一。嘗云。師說若有^二差謬^一。則吾不^レ辭^二同誤^一。其純乎師^二多類^一此。其徒作^二叛門論^一。譏^二淺見佐藤二氏^一。○淺見佐藤見^レ絕^二師門^一。淺見晚炷^レ香拜跪。謝^二罪於神靈^一。佐藤則否。○植田之徒。每詆^二淺見佐藤^一。其門人加藤好謙閱^二佐藤一貫講義^一云。渠亦至^二此耶^一。誠從^レ翁之効驗。詞氣尤不遜。唐彦明嘗見^二玄節義男伊助^一。伊助云。聞子從^二三宅丹治者^一學。丹治素與^二淺見佐藤^一友善。直方姦。安正愚。丹治亦恐爲^レ之所^レ誤。子盍^三早改圖學^二闇齋正統^一耶。彦明正^レ色云。闇齋正統。學規文會筆錄詳^レ之。足矣。豈待^二子之贅^一乎。遂不^二復相見^一。

頭注 一位號風水軒白玉翁姓藤原諱公通

春原民部「下御霊の神職」、垂加門に在りて尤も謹愿なり。其の翁に侍すること、芒刺背に在る如し。一日、翁、門人に『神代卷』を授く。「翁、神道を吉川惟足に得たり。惟足は之れを卜部繁兼に得たり。」左右を避け、児輩と雖も窺ふことを許さざるを以て常と為す。云ふ、「吾、年十三にして、竊かに天台の秘書を見、既に已に会得す」と。時に民部、側に侍して、斂容、逡巡し且つ晒ひて云ふ、「世に豈先生の若き兒有らんや」と。

翁、嘗て言ふ、「周公、冊を納れ書を啓き、而して王は瘳え禾は起つ。嚴光、足を帝腹に加へ、而して大史、客星の変を奏す。天神幽居すれば、世界自から長夜の如し。此れ人天の感通すること必然たる応なり。儒者、敢て「金匱」を議せず、疑ひを神書に致すは何ぞや」と。晩く『風水草』を著し、之れを正親町一位・梨木三位・桑名松雲・春原民部に託し、遺命して云ふ、「此の書、学の進むを須ちて披閱せよ。早く看るを要せず」と。因りて之れを下御霊宮に蔵して、敢へて発ず。易簣後七、八年、民部、三子に謂ひて云ふ、「遺命存すと雖も、吾輩、学の成る何れの日か期せん。熟読して深思するに如かず」と。遂に相共に書を御霊宮中に緝く。或るひと謂ふ、「民部は遺命の列に在らず。云云する所有るに因りて、共に閲するを得たり」と。後に植田玄節、之れを四氏に得たり。○闇齋の門下、最も『風水草』を秘す。余が友村士行蔵、一本を蔵す。其の父、之れを岡田盤斎に得、盤斎、之れを玉木葦斎に得、葦斎、之れを正親町に得たり。芸陽竹原の人、唐崎淡路、一本を蔵す。其の父、上総介、之れを梨木祐之に受けたり。仙台の桑名才一、世、之れを蔵す。才一は即ち松雲の曾孫なり。○唐崎淡路の曾祖を定信と曰ふ。嘗て翁に見え、講義有り。翁の言を載せて云ふ、「我が邦、神書を秘する所以は、昔、応神帝、百済の博士王仁を徴して太子に経を授く。王仁、竊かに官庫の書を見、其の国に伝へんと欲し、事竟はれて將に刑せられ

んとす。經典を授くるの功を以て其の罪を贖ふ。是れより朝廷の載籍、其の人に非ざれば、則ち軽く授くるを許さず。今に至るまで盟を嚴にす。固より一己の私秘に非ざるなり」と。○闇齋の門人に、毅然として神道に惑はず醇乎として醇なる者は、佐藤・浅見・三宅の三君子のみ。而して永田養庵は道学に見るところ有り、梨木祐之は神道に発するところ有りて、俊異卓絶たること、当時其の右に出づる者無きなり。

○植田玄節、篤く闇齋を信じ、嘗て云ふ、「師の説、若し差謬有らば、則ち吾同じく誤るを辞せず」と。其の師に純なること、多く此れに類す。其の徒、『叛門論』を作り、浅見・佐藤二氏を譏る。○浅見・佐藤は師門に絶たれたり。浅見は、晩く香を炷き拜跪し、罪を神靈に謝するも、佐藤は則ち否らず。○植田の徒、毎に浅見・佐藤を詆る。其の門人加藤好謙、佐藤の「一貫」講義を閲して云ふ、「渠も亦此に至るか。誠に翁に従ふの効驗なり」と。詞氣、尤も不遜なり。唐彦明、嘗て玄節が義男伊助に見る。伊助云ふ、「聞く、子は三宅丹治なる者に従ひて学ぶと。丹治は素浅見・佐藤と友として善し。直方は姦、安正は愚。丹治も亦恐らくは之れがために誤まる所となる。子、盍ぞ早く図を改めて闇齋の正統を学ばざるや」と。彦明、色を正して云ふ、「闇齋の正統は『学規』・『文会筆録』之れを詳らかにすれば足る。豈子の贅を待たんや」と。遂に復相見ず。

頭注 一位、号は風水軒、白玉翁。姓は藤原、諱は公通。

○語注

【芒刺在背】おそれはばかりことがあつて心が安らかでない。【吉川惟足】天和二（一六一六）年—元禄七（一六九四）年。五郎左衛門と称し、視吾堂と号した。江戸の人。明暦二（一六五六）年、萩原兼従から吉

田神道を伝授される。天和二（一六八二）年に幕府の神道方に任ぜられた。著書に『神道大意講談』、『日本神道学則』などがある。【卜部繁兼】未詳。萩原兼従のことか。【斂容】つつしみうやうやくする。【周公納冊啓書。而王繆禾起。】『書経』（金縢）。周の武王が病におかされた時、周公は武王の身代わりとなることを決意して亀卜をする。亀卜はすべて吉と出て、周公が亀卜の際の祈りをしたためた冊書を金で綴じた匱の中に収めた翌日、王は全快した。武王の死後、周公は摂政として成王を助け、成王が成人して後は自ら身を引いて東征する。東征している間に、雷、大風で稲がごとく倒れたことがあった。成王は天変の際のしきたりとして周公が冊を収めた匱を開き、その冊書を啓いてはじめて周公が成王から政権を奪おうとしたという嫌疑がぬれぎぬであったことを知る。そこで周公を迎えるために王が外に出ると、雨が降り、風が逆方向から吹いて、倒れていた稲がごとく起きあがったという。【嚴光加足於帝腹。而大史奏客星之變。】後漢光武帝のむかしなじみである嚴光が帝に招かれ、共にあおむけになって寝ころんだ時に、光武帝の腹に足を乗せてしまった。それが、天文曆算を司どる役人の占いにあらわれたため、役人が常ならぬ星がにわかにあらわれて帝座をおかすと奏上したという故事による。【天神幽居。世界自如長夜。】天照大御神が天の岩屋戸に姿を隠したことか。【金縢】『書経』の編名。【風水草】『中臣祓』の注釈書。【或謂民部不在遺命之列。】「民部は遺命の列に在らず」は誤りと考えられる。東京大学文学部宗教学研究室所蔵の「出雲路信直、大山為起、梨木祐之連署誓文」によれば、春原民部も、梨木祐之、大山為起とともに闇齋の遺命を拝していた。【村士行藏】村士宗章（享保十四〔一七二九〕年—安永五〔一七七六〕年）。号は玉水。別号一齋。江戸の人。初め山宮雪樓に学び、後迂齋に学んだ。礼学、兵学に詳しく、門人に岡田寒泉、服部栗齋らがいる。著書に『一齋先生雅言』、『二礼儀略』などがある。【其父】村士淡齋（元禄十三〔一七〇〇〕年—安永元〔一七七二〕年）。名は宗殖。弥右衛門と称した。福山藩儒臣。三宅尚齋に学んだ。【岡田盤齋】寛

文元（一六六一）年—延享元（一七四四）年。名は正利。別号磯波翁。左近と称した。奈良の人（一説に近江の人）。跡部光海に学んだ。【玉木葦斎】玉木正英（寛文十「一六七〇」年—元文元「一七三六」年）。兵庫と称した。別号五鱗靈社。京都の人。梅宮大社神官。儒学を浅見綱斎に学び、神道を正親町公通、春原民部に学んだ。墓目、鳴弦などの秘儀行法を主な内容とする橘家神道を唱導した。著書に『玉籤集』、『神代巻藻塩草』、『橘家墓目伝』などがある。【唐崎淡路】上総介を父とするとすれば唐崎赤斎のことと考えられる。唐崎赤斎は元文二（一七三七）年—寛政八（一七九六）年。名は信徳。字は士愛、常陸介と称した。竹原の磯宮八幡宮神官。植田玄節の門人である塩谷志帥、谷川士清に学んだ。【其父上総介】唐崎辛斎（元禄元「一六八八」年—延享四「一七四七」年）。名は信通、初め織部と称し、後上総介と改める。竹原の人。磯宮八幡宮神官。塩谷志帥、梨木祐之に学んだ。【桑名才一】未詳。【其徒作二叛門論一】無窮会神習文庫所蔵『叛門論』の跋によれば「享保丁酉六月」（享保二「一七一七」年）成立。【浅見佐藤見二絶二師門一】延宝八（一六八〇）年頃のことと推定されている。【炷二香拜跪一】板倉勝明輯『綱齋浅見先生傳』に「晚年悔二背二先師一。炷二香稽首。謝二罪其靈云。」とある。【加藤好謙】加藤十千（元禄十二「一六九九」年—安永七「一七七八」年）。名は友徳。豈苟とも号した。初め好謙と称し、後孫三と改めた。安芸、海田市の人。広島藩に仕えた。【一貫】「子曰く、参よ、吾道は一を以て之れを貫く」（『論語』里仁）。【玄節義男伊助】植田慎斎（享保七「一七七二」年—元文三「一七三八」年）。名は成之、字は玄仙。広島藩に仕えた。【直方姦。安正愚。】植田玄節の『批水足安直撰山崎先生行實』に「二人（直方と綱斎—校合者注）、一人者姦佞、一人者愚駭」とある。【學規】『白鹿洞學規集註』。山崎闇斎著。慶安三（一六五〇）年の自序がある。【文會筆録】山崎闇斎著。天和三（一六八三）年刊。

▼二十三

闇齋挺達簡傲。嘗到^二福山家老宅^一。佐藤直方從。闇齋戴^二頭巾^一入^レ門。其家最貴顯。主人與^二諸大夫^一出迎^二廳庭^一。家臣數人伏^二拜砌下^一。永田養菴亦在。闇齋尚不^レ脱^二頭巾^一。目^二左右^一呼^二養菴^一。云好天氣好天氣。傍若^レ無人。

頭注 頭巾與禮冠不同燕服也遇人以脱之爲禮

闇齋は挺達簡傲なり。嘗て福山の家老宅に到る。佐藤直方、從ふ。闇齋、頭巾を戴きて門に入る。其の家、最も貴顕なり。主人、諸大夫と出でて庁庭に迎へ、家臣數人、砌下^{せいか}に伏拝す。永田養庵も亦在り。闇齋、尚ほ頭巾を脱せず、左右を目し養庵を呼びて云ふ、「好天氣、好天氣」と。傍ら^{かたはら}に人無きが若し。

頭注 頭巾は礼冠と同じからず。燕服なり。人に遇へば以て之^これを脱するを礼と爲す。

○語注

【挺達】「挺」はぬきんでるの意。【簡傲】細かいことに気を配らず、おごりたかぶる。【砌下】石の階段のもと。【燕服】ふだん着。

▼二十四

書生或舉^二訓詁^一問^二之函丈^一。闇齋直云。在^二字書^一。

書生、或いは訓詁を挙げて之れを函丈に問ふ。闇齋、直ちに云ふ、「字書に在り」と。

○語注

【函丈】師の尊称。

▼二十五

垂加翁疾革。一醫診脈。翁問死生如何。醫云。尚可_レ治。既出。告_二門人_一以_二必死_一。翁聞_レ之作_レ色云。此醫虚妄。吾不_レ服_二奴藥_一。

林市之進者。最後調藥。○垂加墓在_二黒谷_一。傳説正親町所_レ營。垂加靈社本在_二下御靈_一。因_二吉田公効_レ之。後附_二庚申社_一。庚申者猿田彦。爲_二日本道學之祖_一。翁嘗稱_二其德_一。用_二庚申日_一爲_二猿田彦祀日_一。庚申之義。至_レ翁始明。故配_二祀庚申社_一。我邦教_二日神之道_一。始_二於猿田彦_一。成_二於舍人親王_一。大發_二揮於垂加靈社_一。○垂加翁家。十一月二十二日。供_二赤豆飯醴酒密柑屬_一爲_二祭祀_一。謂_二之火焚祭_一。後門人多以_二此日_一稱_二先師家火焚_一供_レ神。如_二垂加故事_一。相傳報_レ師恩_一之祭。以上_二條見_二若林語錄_一。○闇齋往_二桑名松雲之舍_一。作_二鎧銘_一自書。又有_下批_上松雲問目_一者_上。不_レ過_二三五字_一。或直書_レ好。皆藏_二其曾孫才一家_一。土佐谷丹内云。同僚有_乙藏_下翁與_二諸人_一往復手跡_上者_甲。余家藏_下翁批_二大父重遠近思錄問目_一。及雪花六出眞跡_上。尾池氏藏_二佐藤書牘_一。以_三書中有_二忌諱_一。秘而不_レ傳_レ人_一。○唐彦明云。大父名定信。稱_二甚右衛門_一。後改_二隼人_一。妣千日氏。大父壯歲與_二千日氏_一共上京。同見_レ翁。後妣自織_二木綿布_一以贈_レ翁。翁報_レ之書。爲_二余筐笥之寶_一。妣晚年爲_レ余屢語_二翁容貌性情_一。

垂加翁、疾やまひ革あらたまり、一医診（底本は脰）脈す。翁問ふ、「死生如何」と。医云ふ、「尚ほ治すべし」と。既に出づるや門人に告ぐるに必ず死せんことを以てす。翁、之これを聞きて色を作なして云ふ、「此の医、虚妄なり。吾、奴の藥を服せず」と。

林市之進なる者、最後に調藥す。○垂加の墓は黒谷に在り。伝説す正親町が営む所と。垂加靈社は本下御靈に在り。吉田公之れを効するに因りて、後庚申社に附す。庚申とは猿田彦にして日本道学の祖たり。翁、嘗て其の徳を称し、庚申の日を用もつて猿田彦の祀日と為す。庚申の義、翁に至りて始めて明らかなり。故に庚申社に配祀す。我が邦、日神の道を教ふること猿田彦に始まり、舍人親王に成り、大いに垂加靈社に發揮す。○垂加翁の家、十一月二十二日に赤豆飯・醴れい酒・密柑しちかんの属を供へて祭祀を為す。之れを「火焚祭」と謂ふ。後門人、多く此の日を以て、先師の家の火焚と称し神に供ふること、垂加の故事の如く、師恩を報ずるの祭を相伝す。以上二條は『若林語録』に見ゆ。○闇齋、桑名松雲の舍に往き、鎧の銘を作りて自ら書す。又、松雲の問目に批する者有り。三五字に過ぎず、或いは直ただ「好し」と書す。皆、其の曾孫才一の家に藏す。土佐の谷丹内云ふ、「同僚に翁と諸人との往復の手跡を藏する者有り。余の家に、翁が大父重遠の「近思錄問目」を批せしもの、及び「雪花六出」の真跡を藏す」と。尾池氏、佐藤しよてくの書牘しよかくを藏す。書中忌諱きき有るを以て、秘して人に伝へず。○唐彦明云ふ、「大父、名は定信、甚右衛門と称し、後隼人と改む。妣は千日氏なり。大父、壮歳のとき千日氏と共に上京し、同じく翁に見まゆ。後、妣自ら木綿布を織りて以て翁に贈る。翁之れに報いる書は、余の篋きようし笥の宝なり。妣、晚年余の為に屢しばしば、翁の容貌・性情を語る」と。

○語注

【胗脈】「胗」は「診」の誤り。【林市之進】林玄白。京都の人。闇齋の門人。儒者、医者として著名であった。【黒谷】金戒光明寺。【傳説正親町所營】未詳。【下御靈】下御霊神社。【吉田公】吉田神祇伯のことか。【後附^二庚申社^一】若林強齋『雜誌筆記』に「曰。垂加ノ社ハイヅクニ候ヤ。曰。下御靈ノ中ニ之^レ有候。前ヘハ少キ祠ニテ有^レ之候處、先年吉田殿ヨリ被^レ相咎^一、少社モ崩サレ、今ハ庚申ノ社ノワキニ相殿ノヤウニシテ有^レ之候。少キ札ニ垂加靈社ト書付有^レ之候。」とある。【我邦教^二日神之道^一。始^二於猿田彦^一。】「道は日神の道にして、教へは猿田彦の導く所なり」(『垂加社語』)【舍人親王】天武天皇の第三子。勅命により『日本書紀』の編纂を主宰した。闇齋は『藤森弓兵政所記』の中で、舍人親王が猿田彦命の先導によって伝えられた天照大御神の天壤無窮の神勅の密旨を伝え遺したとして、その功績を顕彰している。【醴酒】甘酒。【三五】わずか。【其曾孫才^一】未詳。【谷丹内】谷北溪(享保十二「二七二七」年—寛政九「二七九七」年)。名は眞潮。谷重遠(秦山)の孫。鍋山の長子。土佐藩儒。稻葉迂齋に学んだ。【雪花六出】闇齋が没年に詠んだ詩を指す。「文会養^テ心身^{ヲモ}亦安^シ 世間閑事不^ニ相干^{カラ}」雪花六出梅花五 白髮朝来多少般(『垂加草』第二 壬戌)【尾池氏】佐藤直方の門人、尾池存齋、あるいはその子孫の総称か。尾池存齋(慶安二「一六四九」年—享保二「一七一七」年)は名を敬續、弾之進と称した。土佐の人。尚齋にも学んだ。

▼二十六

永田養菴云。尹彦明印子蚤。韓退之泥塑虎。永田品^二藻人物^一。多類^レ此。

若林語録云。養菴爲^レ人亦只曾點底。又能通^二易學^一。退溪未^ニ會得^一處。養菴多整頓了。

永田養庵云ふ、「尹彦明は印子の蚤、韓退之は泥塑の虎」と。永田が人物を品藻するは多く此れに類す。

『若林語録』に云ふ、「養庵の人と為り、亦只曾点底なり。又、能く易学に通じ、退溪の未だ会得せざる処を養庵は多く整頓し了はりぬ」と。

○語注

【尹彦明】尹焞（一〇七一年—一二四二年）。号は和靖。洛陽の人。程伊川に学んだ。著書に『孟子解』、『和靖集』がある。【韓退之】韓愈（七六八年—八二四年）。河南省の人。中唐の文人で柳宗元とともに古文復興に努力した。儒教の本質を説き仏教を斥ける論文『原道』を著した。【印子蚤】純金でできた蚤。【品藻】品評。【退溪】李退溪（一五〇一年—一五七〇年）。名は滉。李朝朝鮮の代表的な朱子学者。著書に『朱子節要』、『延平答問』がある。

▼二十七

有_レ人問_二梨木三位_一。神道臨終亦復有_二密付_一不。三位居然良久。手援_二問者衣_一。問者揖而進_二膝前_一。三位微吟云。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

三位下賀茂神職。著_二日本逸史及大八洲記_一。其爲_レ人清爽。議論明決。嘗解_二常闇義_一云。此言天神廢朝也。豈如_二闇夜_一哉。如_三龍宮爲_二龍形_一。亦謂_二婦人産_レ子之醜狀_一耳。猶_三勢語言_二鬼一口喫去_一。實則某女與_レ人出奔也。

人有_レり、梨木三位に問ふ、「神道の臨終に亦復密付有_レりや不_レや」と。三位居然たること良久しくして、手に

問者の衣を援く。問者、揖して膝前に進めば、三位微吟して云ふ、「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と。

三位は下賀茂の神職にして、『日本逸史』及び『大八洲記』を著はす。其の人と為り清爽、議論明決なり。

嘗て「常闇」の義を解して云ふ、「此れ天神、廃朝することと言ふ。豈闇夜の如くならんや。龍宮、龍形

を為すが如きも、亦婦人子を産むの醜状を謂ふのみ。猶ほ『勢語』に鬼一口に喫し去ると言ふがごときも、

実は則ち某女、人と出奔せしなり」と。

○語注

【居然】そのまま動かないさま。【南無阿彌陀佛】無窮会平沼文庫所藏『先達遺事』の藤田畏齋の割記には、

「南無阿弥陀仏 神道ニコフシタコトハナヘカ、コ、カ合点シタコト。ナンゾ大造ナ秘密カアルカト云ユヘ、

イヤナンノコトモナイト云テキカセタコト」とある。【日本逸史】元禄五（一六九二）年の序がある。【大八

洲記】享保八（一七二三）年の自序がある。【常闇】『日本書紀』神代上、第七段の本文に「時に、天照大神、

驚動きたまひて、梭を以て身を傷ましむ。此れに由りて、発愠りまして、乃ち天石窟に入りまして、盤戸を

閉して幽り居しぬ。故、六合の内常闇にして昼夜の相代もしらず」とある。山崎闇齋はこの部分を「岩戸

ノ段。先 日神ノ御機嫌ノソコネテ御入ナサレテ、祭事ヲ御聴ナサレヌコトゾ。造化デイヘバ、日ノ入テク

ライコト。」（『神代卷講義』）と解釈している。【如三龍宮爲三龍形】。亦謂三婦人産レ子之醜状「耳」【『日本書紀』

神代下、第十段本文に「豊玉姫、方に産むときに龍に化為りぬ」とある。吉川惟足はこの部分を「化為龍

トハ實ノ龍ニナリ玉フニアラス、尾籠ヲ現シ玉フタコト在処ノ本性ヲアラハシテタツトハ云ナリ」（『神代卷

惟足講説』）と解釈している。【猶三勢語言二鬼一口喫去】。【『伊勢物語』六段。

▼二十八

春原民部聞^三梨木發^二明師所^一未^レ説。信疑相半。每謂將去決^二之先師之神^一。乃拜^二靈社^一探^レ闇。

春原民部、梨木が、師の未^{いま}だ説かざる所を發明すと聞き、信疑相半ばして、毎に謂ふ、「將に去きて之れを先師の神に決せん」と。乃ち靈社を拜し^{きう}闇を探る。

○語注

【闇】くじ。

▼二十九

春原民部謁^二垂加翁^一問^レ敬。翁云。且見^二直方^一扣^レ之。民部朴質。承^レ命尤謹。更著^二禮服^一。往訪^二佐藤^一。佐藤時^二有^二微疾^一。被^レ衾而不^レ起。引見^二臥内^一。民部拜跪問^レ敬。佐藤漸出^二頭於衾端^一。轉^レ身閃^レ手曰。敬是如^レ此。

荻野重祐以^レ是爲^二話頭^一。以輕^レ視祝徒^一。每言土金は敬。敬是如^レ此。○高田未白從^二垂加翁^一而遊。翁熟^二視其爲^レ人。思念良久乃云。汝殆遲鈍。恐不^レ能^レ成^二儒業^一。且學^二神道^一。

春原民部、垂加翁に謁^{まみ}えて敬を問ふ。翁、云ふ、「且^{しか}く直方に見えて、之れを扣^たけ」と。民部は朴質なり。命を承けて尤も謹み、更に礼服を著^つけて往きて佐藤を訪ふ。佐藤、時に微疾有り、衾を被りて起きず。臥内^{ふだい}に引見す。民部、拜跪して敬を問ふ。佐藤、漸^{やうやう}く頭を衾端より出し、身を転じ手を閃かせて曰く、「敬は是

れ此^かくの如し」と。

荻野重祐^ニ是れを以て話頭と為し、以て祝徒を輕視し、毎に言ふ、「土金は是れ敬。敬は是れ此^かくの如し」と。○高田未白、垂加翁に従ひて遊ぶ。翁、其の人と為りを熟視^やして、思念すること良久しくして乃ち云ふ、「汝^{ほとん}殆ど遲鈍なり。恐らくは儒業を成す能はず。且く神道を学べ」と。

○語注

【閃^レ手】山崎闇齋は「敬」、すなわち「つつしみ」について説明する際、みずからの手をぎゅっと握りしめて聴衆に示し、心をひきしめるさまを表現した（『神代卷講義』）。そのさまを模したものか。無窮会織田文庫所藏の渡辺豫齋『先達遺事割記』では「転身閃手」について「敬ト云フテ板天神ノヤウナモノテハナヘ。自由自在ナモノ。敬ト云フトカタヘ斗リニ心得ルカラ、コレカ敬タト云タモノ。ヤハリ前ノ南無阿弥陀仏ノヤウナモノ。余リカカツテキタカラソ」とあり、「敬」の自在な面が強調されている。【荻野重祐】莊右衛門と称し、斃已齋と号した。備後の人。佐藤直方の門人。広島藩に仕えた。著書に『擔當雜志』がある。【祝徒】闇齋の門人のうち神道に傾倒している者達。

▼三十

會津源公著^ニ三子傳心錄^一。因問^ニ垂加^一。今日讀^ニ此編^一而會得者爲^レ誰。翁云。福山永田養菴其人。自^レ是後。公每^レ遇^レ翁。必問養菴無^レ恙不。

會津源公、『三子伝心録』を著はす。因りて垂加に問ふ、「今日、此の編を読みて会得する者は誰と為すか」

と。翁云ふ、「福山の永田養庵、其の人なり」と。是れより後、公、翁に遇ふ毎に、必ず問ふ、「養庵、恙無きや不^{いな}や」と。

○語注

【會津源公】会津藩主保科正之。【三子傳心録】『伊洛三子伝心録』。寛文九（一六六九）年、成立。保科正之編。山崎闇齋の序跋を附す。三子とは楊龜山、羅豫章、李延平。

▼三十一

仙臺侯綱村豪邁粗猛。一日召^二儒臣^一。問^二無聲無臭之義^一。儒臣所^レ答。與^二佛空寂^一無^レ異。因召^二桑名松雲^一。松雲闇齋門。辨^二駁儒佛異同^一尤精析。公復召^二儒臣^一責云。儒佛辨一大要領。汝不^二判得^一。儒何在。遂賜^レ死。公及^二晚歲^一大悔焉。

初松雲與^二石川又新菴^一入^二仕公^一。公及^三偶信^二從鐵牛禪師^一。遂去。○水戸栗山源介。即松雲門人也。嘗著^二保建大記^一。谷重遠撰^二大記打聞^一。而不^レ記^二其師授^一者。失^二事實^一也。初鵜飼金平筮^二仕水府^一。以下三宅觀瀾拜^二楠子墓^一文^上。獻^二之西山公^一。公因辟^二觀瀾^一。觀瀾薦^二栗山於公^一。

頭注 尚齋門人有石川治平者即又新菴子

仙台侯綱村、豪邁粗猛なり。一日、儒臣を召して「無声無臭」の義を問ふ。儒臣の答ふる所、仏の「空寂」と異なること無し。因りて桑名松雲を召す。松雲は闇齋の門、儒仏の異同を弁駁して尤も精析なり。公復^{また}儒

臣を召し、責めて云ふ、「儒仏の弁は一大要領なり。汝判得せず。儒何くにか在る」と。遂に死を賜ふ。公、晩歳に及びて大いに悔ゆ。

初め松雲、石川又新庵とともに公に入仕す。公、偶鉄牛禪師（底本は帥）に信従するに及んで、遂に去る。○水戸栗山源介は即ち松雲の門人なり。嘗て『保建大記』を著はす。谷重遠、『大記打聞』を撰するも、其の師授を記さざるは事実を失せるなり。初め鵜飼金平、水府に筮仕し、三宅観瀾の「楠子の墓を拝するの文」を以て之れを西山公に献ず。公因りて観瀾を辟し、観瀾、栗山を公に薦む。

頭注 尚齋の門人に石川治平なる者有り。即ち又新庵子なり。

○語注

【仙臺侯綱村】仙台藩主伊達綱村（万治元「二六五九」年―享保四「二七一九」年）。藩政を独裁的に推進し、秩序確立のために儒教を奨励した。仏教にも傾倒し僧鉄牛を招いて大年寺を建立した。【無聲無臭】「上天の載は声も無く臭も無し。而も実に造化の枢紐にして品彙の根柢也。故に無極にして太極と曰ふ。」（朱子『太極図説解』）。【石川又新菴】未詳。【鐵牛禪帥】新發田によつて「帥」を「師」に改めた。鉄牛道機（寛永五「一六二八」年―元禄十三「一七〇〇」年）。長門国の人。黄檗宗の僧。隠元隆琦、木庵性瑫に師事した。小田原の紹太寺、江戸の弘福寺などを開山した。【栗山源介】栗山潜鋒。寛文十一（一六七二）年―宝永三（一七〇六）年。名は愿、字は伯成、源助と称した。京都の人。桑名松雲の門人。特に国史に優れ、水戸藩に仕えて国史編纂に尽くした。著書に『保建大記』などがある。【保建大記】元禄二（一六八九）年の自序がある。【谷重遠】谷秦山。【大記打聞】『保建大記打聞』二卷。『保建大記』の注釈。享保五（二七二〇）

年刊。【三宅觀瀾】延宝二（一六七四）年—享保三（一七一八）年。諱は緝明^{つぐめき}。字は用晦。京都の人。はじめ浅見綱齋に学び、のち木下順庵に学んだ。水戸藩に仕え、国史編修にたずさわった。後年、室鳩巢とともに幕府の儒官となった。著書に『中興鑑言』などがある。【拜楠子墓一文】「謁楠公正成碑并序」。三宅觀瀾が徳川光圀の建立した碑「嗚呼忠臣楠子之墓」を拝謁して記した文。『觀瀾集』所収。【西山公】徳川光圀（寛永五「一六二八」年—元禄十三「一七〇〇」年）。西山は晩年の隱棲地。【觀瀾薦栗山於公】『先哲叢談續篇』三之卷「栗山潜鋒」の項には、著者東條琴臺の注として「按ずるに、稻葉默齋の先達遺事に云く、三宅觀瀾、潜鋒を水府に薦むるといふは全く誤れり、潜鋒、義公（光圀の諡—校合者注）に奉仕する、既に癸酉に在り、觀瀾の江戸に到るに先だつこと五六年なり、近人の書、信ずべからざる極て多し。」とある。癸酉は元禄六（一六九三）年。三宅觀瀾が水戸藩に仕えたのは、板倉勝明の「觀瀾三宅先生傳」によれば元禄十二（一六九九）年。

▼三十二

野中兼山才性絶^レ人。然亦偏曲猜忌。嘗怒^二垂加翁^一。使^三同藩吻士到^レ翁^二述^二絶交之意^一。翁瞑目端坐。不^レ接^二一語^一。其人衝衝抗論。翁聞畢。徐云。若爾便好。神氣自若。其人自屈。

其人晩歳語^レ人云。余弱齡使^レ氣。爲^二野中^一與^二闇齋^一牴牾。而今思^レ之。赧然發^レ汗。○闇齋嘗云。今日在^二列國^一有^二伎倆^一者。野中友松二人而已。友松會津大夫。稱^二勘十郎^一。著^二孟浩錄^一。○谷丹内曰。野中氏嘗刻^二活字四書^一。今尚存^二南土士大夫間^一。芝山會稿。南學人物。野中・小倉・僧時中之外。不^二心名家^一。

野中兼山、才性人に絶す。然れども亦偏曲猜忌^{（んせくさいき）}なり。嘗て垂加翁を怒り、同藩の吻士をして翁に到りて絶交

の意を述べしむ。翁、瞑目端坐して一語を接まじへず。其の人、衝つ衝しょうと抗論す。翁、聞き畢はりて徐おそに云ふ、「若もし、爾しからば便ち好し」と。神氣自若たり。其の人、自ら屈す。

其の人、晩歳に人に語りて云ふ、「余弱齡のとき、氣を使ひて野中の為に闇齋と牴牾ていごす。而れども、今之れを思へば赧たんぜん然として汗を發す」と。○闇齋、嘗て云ふ、「今日、列国に在りて伎倆ぎりやう有る者は、野中・友松の二人のみ」と。友松は会津の大夫なり。勘十郎と称し、『孟浩録』を著はす。○谷丹内曰く、「野中氏、嘗て活字の「四書」を刻し、今尚ほ南土の士大夫の間に存す」と。『芝山会稿』に「南学の人物は、野中・小倉・僧時中の外は必（底本は心）ずしも名家ならず」と。

○語注

【編曲】「編」は心がせまいさま。【猜忌】人の才能などをそねみきらう。【吻士】議論を好む者【衝衝】氣がせておちつかないさま。【使氣】血氣に任せてふるまう。【牴牾】くいちがう。【赧然】はずかしくて顔が赤くなるさま。【友松】友松氏興。元和八（一六二二）年—貞享四（一六八七）年。勘十郎と称した。土佐の人。会津藩主保科正之の重臣。山崎闇齋、吉川惟足に学んだ。【孟浩録】延宝八（一六八〇）年、八月成立。『朱子文集』、『朱子語類』の中から『孟子』の浩然の章（公孫丑上）に関する文章を抜き書きしている。【芝山會稿】大高坂芝山著。元禄十（一六九七）年刊。全十一卷。【小倉】小倉三省。慶長九（一六〇四）年—承応三（一六五四）年。弥右衛門と称した。土佐藩士。谷時中に学んだ。野中兼山と親しく、その政策の遂行を助けた。【不二心名家一】無窮会本、新発田本に従って「心」を「必」とした。

僧時中宏曠豪邁。不_レ與_二流俗_一浮沈_上。一士人揮_二霜刃_一脅_二時中_一云。賣僧。爾何德常在_二士大夫_上。若無_二一言可_レ說。鼠首今墜_レ前。又幾加_二額下_一。時中神氣不_レ動。傲然云。任_二卿所_一欲。士人異而不_レ加害。時中使_三子三介_二從_二學野中兼山_一。以爲富貴喪_レ志。因賣_二田五百石_一。遣_二少頃田_一給焉。

僧時中、宏曠豪邁にして流俗と浮沈せず。一士人、霜刃を揮ひて時中を脅かして云ふ、「禿僧、爾何の徳ありて常に士大夫の上に在るや。若し一言説くべき無くば、鼠首、今前に墜ちん」と。又幾ど額下に加はる。時中、神氣動かず傲然として云ふ、「卿の欲する所に任す」と。士人、異として害を加へず。時中、子三介をして野中兼山に従学せしむ。以爲へらく「富貴は志を喪はせしむ」と。因りて田五百石を売り、少頃の田を遣はして給す。

○語注

【浮沈】俗世間の流れに順応する。【霜刃】鋭いやいば。【鼠首】「鼠」はとるに足らないもの。【少頃田】わずかな田。「頃」は田畑の広さを測る単位。

▼三十四

谷三介廉介清苦。泊然無_二財利之累_一。父時中月餽_レ金。給_二旦夕之費_一。三介受_レ金。投_二之竈邊_一。與_レ薪無_レ異。

野中兼山在京師。買_二鍛工正宗所_一鑄之刀。正宗鍛工中尤清練者。本邦無_レ二。爲_二甚難_一得。得者至寶焉。乃託_三三介_二令_二劂工磨_レ之。時偶有_二窮士_一。將_レ冠_二其兒_一。請_三三介_二爲_二冠寶_一。三介云。余有_二

何徳^一爲^レ賓。但賓者當^レ有^レ贄。輒以^二正宗刀^一贈^レ之。後野中間劔成否。三介云。已贈^二一窮兒^一。公若愛^レ之。更買而還耳。野中没後。仕^二土佐^一補^二史官^一。

谷三介、廉介清苦、泊然として財利の累無し。父時中、月に金を餽^{おく}り旦夕の費に給す。三介、金を受くるや、之れを竈辺に投じて薪と異なる無し。

野中兼山、京師に在りし時、鍛工^{たんこう}正宗の鑄る所の刀を買ふ。正宗は、鍛工中尤も精練なる者にして本邦に二無く、甚だ得難しと爲し、得る者は至宝とす。乃ち三介に託し、劔^{けん}工をして之^をを磨かしむ。時に、偶^{なだま}一窮士有り。將に其の児に冠^{かん}せんとして、三介を請ひて冠^{かん}賓と爲す。三介云ふ、「余に何の徳有りて賓と爲すや。但し賓者には當に贄^{もて}有るべし」と。輒^{すなは}ち正宗の刀を以て之れに贈る。後に野中間ふ、「劔、成るや否や」と。三介云ふ、「已^{すで}に一窮児に贈れり。公、若^もし之れを愛^をしまば更に買ひて還^{かへ}さんのみ」と。野中の没後、土佐に仕へ史官に補せらる。

○語注

【泊然】さっぱりとして欲のないさま。【累】思いなやむ。【冠賓】冠礼のさいの後見人。【贄】初めて君主や先生にお目にかかるときに差し上げる礼物。

▼三十五

三宅尚齋品^一藻人物^一。至^二垂加翁^一。喟然歎云。淺見佐藤吾黨耆賢。然以^二淺見嚴毅威重^一。加以^二佐藤俊異快爽^一。而其伎倆未^レ能^レ及^レ翁也。楨元眞嘗云。每謁^レ翁如^二清水灑洒^一。乃見^二存養之有^レ素也。

三宅尚齋、人物を品藻^{ひんさう}して垂加翁に至るや、喟然^{きげん}として歎じて云ふ、「浅見・佐藤は吾が党の耆賢^{きけん}なり。然^{しか}れども浅見の嚴毅威重を以て、加ふるに佐藤の俊異快爽を以てしても、其の伎倆は未だ翁に及ぶ能はざるなり」と。槇元眞、嘗て云ふ、「毎に翁に謁^{つね}ゆれば清水の灑洒^{さいしや}たるが如し。乃ち存養の素有るを見るなり」と。

○語注

【喟然歎云】「夫子、喟然として歎じて曰く、吾は点に與せん。」（『論語』先進）。【耆賢】徳望ある老人、賢人。

▼三十六

綱齋壯。常帶^二一長劔^一。方鐔大三寸許。篆^二鐫赤心報國四字^一。【門人三宅觀瀾篆云。】毎日夙興。驅^レ馬數回。

若林語録云。綱翁江州高島人。家本業^レ醫。初稱^二高島順良^一。永田養菴與^二綱齋^一情好尤善。每^レ會呼^二綱翁^一曰。醫者坊主醫者坊主。翁由^二永田^一見^二闇齋^一。○又曰。靖獻遺言梨棗成。前一年。綱齋家公没。綱齋愁歎曰。先君每恨^二吾不^レ用^二于世^一。今也遺言之書。將^レ布^二海内^一。先君見^レ之。其喜不^レ細。因不^レ堪^二追懷之情^一矣。綱齋祖父。京師人。父本豪富。生^二子三人^一。伯道徹受^二醫術於山脇道立^一。仲即綱齋。叔稱^二吉兵衛^一。司^二市橋下總侯羅羅^一爲^二米商^一。父欲^レ使^二道徹綱齋俱有^二名^一二世^一。於是破^レ産以見^二一時豪傑^一。綱齋自^レ一見闇齋^一。泊然無^レ意^二於世用^一矣。父特惜^レ之。弟吉性質不斷。雖^レ嗣^二其家^一。而家事大小倚^二頼綱齋^一。繼母榮壽在^二弟宅^一。最貧乏。奉養不^レ足。家務齷齪。人不^レ能堪。而綱齋處^レ之雄偉傑出。

常示以^二細大來稟^レ吾。吾能裕給之意^一。綱齋門人常歎。以^二翁豪邁^一處^二癡叔家事^一。實如下以^二千金珠^一投^レ鼠。榮壽素多病。綱常往將護。達^レ旦而還。還便教^二授學者^一。以爲^レ常。榮壽在^二御幸町松原下町^一。炎暑祁寒。不^二一日懈^一。路間市店識^二綱齋面^一。舉稱^二其孝^一。○綱齋編^二靖獻遺言^一。八年而脱^レ稿。訓^二點朱子文集^一。卒^レ業之日。設^レ饌饗^二門人^一。

頭注 醫者坊主四字連讀

綱齋の壮なるや、常に一長劍を帶ぶ。方鐔^{はうたん}の大きさ三寸許り、「赤心報国」の四字を篆鐫^{てんけん}す。「門人、三宅觀瀾篆すと云ふ。」毎日夙^{ふと}に興^おき、馬を驅^かること数回。

『若林語錄』に云ふ、「綱翁は江州高島の人。家は本医^{もと}を業とす。初め高島順良と称す。永田養庵、綱齋と情好尤も善し。会ふ毎に綱翁^{しやう}を呼びて曰く、「医者坊主、医者坊主」と。翁、永田に由りて闇齋に見ゆ。

○又曰く、「『靖獻遺言』の梨棗^{りさう}成る前一年に、綱齋の家公没す。綱齋、愁歎して曰く、「先君、毎に吾の世に用ゐられざるを恨めり。今や『遺言』の書、將に海内^{かいだい}に布かれんとす。先君、之れを見れば、其の喜び細^{わづ}かならざらん。因りて追懷の情に堪へざるなり」と。綱齋の祖父は京師の人。父は本豪富^{もと}なり。子三人を生む。伯道徹は医術を山脇道立に受く。仲は即ち綱齋。叔は吉兵衛と称し、市橋下総侯の羅羅^{てきでう}を司り、米商たり。父は、道徹・綱齋をして俱^{とも}に一世に名有らしめんと欲す。是に於て産を破りて以て一時の豪傑に見えしむ。綱齋、闇齋を一見してより、泊然として世用に意無し。父、特に之れを惜しむ。弟吉は性質不斷。其の家を嗣^{つぐ}ぐと雖も、家事の大小を綱齋に倚賴^{いらい}す。繼母榮寿は弟宅に在り。最も貧乏にして奉養足らず。家務の齷齪^{あくさく}、人堪ふるに能はざれば、綱齋、之れを処して雄偉傑出^{ゆうゑいけしゅつ}し常に示すに、「細大来り

て吾に稟せよ。吾、能く裕給せん」の意を以てす。綱斎の門人、常に歎ず、「翁の豪邁を以て癡叔の家事を処するは、実に千金の珠を以て鼠に投ずるが如し」と。栄寿、素より多病なり。綱、常に往きて将護し、旦に達して還り、還れば便ち学者に教授するを以て常と為す。栄寿は御幸町松原下町に在り。炎暑^{きかん}祁寒、一日も懈^{おそ}ず。路間の市店、綱斎の面を識り、挙げて其の孝を称す」と。○綱斎『靖献遺言』を編し、八年にして稿を脱す。『朱子文集』に訓点し、業を卒^をふるの日、饌を設けて門人を饗す。

○語注

【高島】綱斎の生地は現在の滋賀県高島市新旭町太田と考えられる。【靖献遺言】浅見綱斎編。屈原、諸葛亮、陶淵明など八人の忠臣の文を収め、事跡を記し、さらに日本の忠臣、義士の行状を附して、大義に殉じた精神を示した書。【家公】他人に対して、自分の父・祖父をいう。【梨棗】書籍の版木。【山脇道立】承応三（一六五四）年―享保一二（一七二七）年。名は玄脩。禁裏の侍医、山脇玄心の甥であったがそのあとを嗣ぎ、法橋、法眼の位にのぼった。山脇東洋はその養子。【市橋下總侯】近江仁正寺藩主市橋氏。【糴糶】米の売買。【齷齪】あくせくするさま。【稟】あたえる。【祁寒】たいそう寒い。【八年而脱稿】『靖献遺言講義』の跋には「貞享甲子、余甫稿『靖献遺言』、閱四年而方浄寫」とある。これによれば、『靖献遺言』の脱稿までの期間は四年ということになる。

▼三十七

綱翁與^二佐藤^一論^二出處^一。佐藤因詰^レ翁云。出則出。處則處。君未^二曾出^一。亦無^二出處^一。翁嚴然曰。可^レ仕而仕。與^二不^レ可^レ仕而不^レ仕。共是出處。亦奚疑。

翁嘗言。予於此學「非有苗畚耕穫之功」。只拾得垂加遺穗。凡百無足道。唯出處一事。生涯無毫末愧。○高田未白常稱闇齋蘊奧。至綱齋始開發。○佐藤淺見晚絶交。京人傳說。綱齋詰佐藤云。居親喪而仕何禮。自是不復相接。

綱翁、佐藤と出處を論ず。佐藤、因りて翁を詰りて云ふ、「出づるときは則ち出で、處るときは則ち處る。君、未だ曾て出でず。亦出處無からん」と。翁、嚴然として曰ふ、「仕ふべくして仕ふると、仕ふべからずして仕へざるとは共に是れ出處なり。亦奚ぞ疑はん」と。

翁、嘗て言ふ、「予、此の学に於て苗畚耕穫の功有るに非ず。只垂加の遺穗を拾得するのみ。凡百道に足るもの無し。唯出處の一事は、生涯毫末の愧無し」と。○高田未白、常に稱す、「闇齋の蘊奧は綱齋に至りて始めて開發す」と。○佐藤・淺見晩に交はりを絶つ。京人伝説す、「綱齋、佐藤を詰りて云ふ、「親の喪に居りて仕ふるは何の礼ぞ」と。是れより復相接はらず」と。

○語注

【苗畚】荒れ地を開墾する。【凡百】あらゆるもの。【高田未白】十四の語注参照。【親喪】『礼記』（檀弓）によれば、致喪三年。綱齋が親喪に關して直方を批判したことについては、若林強齋筆録による淺見綱齋『常話雜記』に以下のようにある。「寶永二年（一七〇五年）校合者注）四月七日、酒井雅樂頭殿、松平隱岐守殿、御上使トシテ御登。雅樂頭殿ニ佐藤五郎左衛門就テ登ル。先生御物語ニ、何トモ合點ユカヌハ、去年正月、實父死去セシヨシ、三宅義平ヨリ申来、マダ三年タ、ヌ内ニ御祝義ノ上使ニシタガヒ登ルコト、其意ヲ得ヌコトゾ。定テ世間ナミノ五十日ヲツトメテ、酒肉モ今ハ用ルデアロウ。養父ト云カ、何トゾ故アレバデ

ヤガ、適子ナリ實父ナリ、ソレニカウシタコトハウスイコトゾ。高田未白ノ七十二ナリテサへ、三年ノ喪ヲツトメラル、ニ、五郎左衛門ガ道ヲ唱フト云身デ、コウシタコトハキコヘヌゾ。」

▼三十八

綱翁論談。理致周密。首尾通徹。嘗解^二志字^一曰。雁腐爲^レ蛆。蛆猶北飛。

翁講^レ書。字字句句極詳細。讀^二論語^一至^二舜臣五人章^一云。看此五人。非^レ多亦非^レ少。自是當時有^二五人^一了。○綱齋答^三跡部宮内問^二尚書蔡傳諸家說^一云。講義非也。旁通通考是。故事在^二大全^一。○綱翁謂^二林道春^一。孔子而下。不^レ劣^二於十人之列^一矣。蓋稱^下林公倡^二程朱書於海内^一之功^上耳。

綱翁の論談、理致周密、首尾通徹す。嘗て「志」の字を解して曰く、「雁は腐りて蛆と為るも、蛆は猶ほ北へ飛ぶ」と。

翁の書を講ずるや、字字句句極めて詳細なり。『論語』を読み「舜臣五人章」に至りて云ふ、「看^みよ、此の五人は多きに非ず、亦^{また}少なきに非ず。自^{おのづ}からは是の当時、五人有りて了す」と。○綱齋、跡部宮内^{くない}が『尚書』蔡伝の諸家説を問ふに答へて云ふ、「講義は非なり。旁通・通考は是なり。故事は『大全』に在り」と。○綱翁、林道春を謂ふ、「孔子より下、十人の列に劣らず」と。蓋し林公の程朱の書を海内^とに倡ふるの功を称するのみ。

○語注

【舜臣五人章】「舜に臣五人有りて天下治まる。武王曰く、「予^{われ}に乱臣十人有り」と。孔子曰く、「才難し」

と。其れ然らざらんや。唐虞の際、斯に於て盛りと為せども、婦人有り。九人のみ。天下を三分して、其の二を有ち、以て殷に服事す。周の徳は、其れ至徳と謂ふべきのみ」(『論語』泰伯)。【跡部宮内】跡部良頭(万治元「一六五八」年―享保十四「一七二九」年)。靈社号は光海。江戸の人。浅見綱斎、佐藤直方に儒学を学び、神道を正親町公通、竹下青山に学んだ。『垂加文集』を編纂した。【蔡傳】宋の蔡沈著『書経集伝』。【傍通通考】よく考える。「傍通」は『中庸章句序』に「而して凡そ諸説の同異得失、亦以て曲暢傍通して、各其の趣を極むることを得」とある。また、「通考」は『大学』傳の六章の細注に「故に此の章の指、必ず上章を承けて通じて之れを考へる」とある。【大全】『性理大全』。【十人】道学を伝えた孔子以下十人のことか。孔子、顔子、曾子、子思、孟子、周濂溪、程明道、程伊川、張横渠、朱子。

▼三十九

綱翁講_下近思録爲_二萬世_一開_二太平_一章_上。卒呼_二聽徒_一曰。吾今日爲_二諸生_一講解去。亦是爲_二萬世_一開_二太平_一。綱齋晚講_二授錦里_一。師弟之間嚴峻。又甚_二於闇齋_一。先君子嘗侍_二其講筵_一。課會之日。門人侍_二坐函丈_一。實如_三臣下在_二君前_一。每_三請_レ業請_レ益。及講談中語勢有_二段落_一。聽徒唱喏扣頭。每_二一章一節解了_一。呼_二聽徒_一曰。咸且如_レ此會去。聽徒又一扣頭。席間録_二口義_一者。筆硯墨楮皆豫備。翁既出_レ席。則不_三復許_二注_レ硯磨_レ墨也。翁爲_レ人尤肥大。及_三其從_レ室出_二講席_一。尚扶_レ杖發_二氣息_一。登_レ褥盤坐。倚_レ几安_レ體。而後低聲說出。標儀威重。一坐肅然。屏_レ氣拜聽。無_二敢嚏咳欠伸者_一。如_二佐藤子_一。則無_レ嚴_二師弟之禮_一。嘗云。吾且爲_二慕來者_一講_レ書。此爲_二友生_一。豈師弟之謂乎。但從遊日久。則稱呼以_二爾汝_一。此輩亦自是在_二弟子之列_一耳。今之學者。多不_レ信_二其師_一。師獨自尊大。甚可_レ笑。尚齋講_二授西洞_一。塾有_二大小_一。小曰_二培根_一。大曰_二達支_一。雖_二學規嚴密_一。而師弟之間。甚竭_二情意_一。怡怡質_レ疑。懇懇應答。殆似_三七

十子慕^二聖人^一。及^二尚齋没^一。門人哭泣如^レ喪^二父母^一。三君子氣象風格各異如^レ此。○若林強齋云。余定省餘暇。努力謁^レ師。師故嚴厲。不^二曾稱譽^一。或值^二師不在^一而虛反。然尚無^レ有^二愆意^一。余居去^レ師三里。數年之間。隔^レ日謁見。不^レ問^二雨暘^一。雖^レ有^二小疾^一而必到。師一無^レ所^二憐撫^一。或奉^レ命使^レ外。或口占作^レ帖。不^二必授^二經義^一。及^二從遊日久^一。稍覺^レ有^二其味^一。自負^二探索之功^一。質^二之函丈^一。師末^二嘗許可^一。適有^三說得至^二十分處^一。師只言。頗通。如^レ此說亦可。豈趨伊川門前雪哉。

綱翁、『近思錄』の「万世の為に太平を開く」の章を講じて、卒に聴徒を呼びて曰く、「吾、今日諸生の為に講解し去るも亦是れ万世の為に太平を開くなり」と。

綱齋、晩に錦里に講授す。師弟の間嚴峻なること又闇齋より甚だし。先君子、嘗て其の講筵に待す。課会の日、門人函丈に侍坐すること実に臣下の君前に在るが如し。業を請ひ益を請ひ、及び講談中語勢の段落有る毎に、聴徒は唱^{しやうじや}・扣^{こうくう}頭す。一章一節を解し了^をはる毎に、聴徒を呼びて曰く、「咸且く此くの如く会し去れ」と。聴徒、又一一扣頭す。席間に口義を録する者は、筆硯・墨・楮を皆^{あらかじ}予め備ふ。翁、既に席に出づれば、則ち復硯に注ぎ墨を磨^することを許さず。翁の人と為り尤も肥大、其の室従^より講席に出づるに及ぶも尚ほ杖に扶^より氣息を発し、褥に登りて盤坐す。凡に倚^より体を安んじ、而る後低声に説き出だす。標儀威重にして、一坐肅然、氣を屏^{をさ}めて拝聴し、敢て嚏咳^{てんがい}・欠伸する者無し。佐藤子の如きは、則ち師弟の礼を嚴にすること無し。嘗て云ふ、「吾、且く慕^{しほら}ひ来る者の為に書を講ず。此れ友生の為なり。豈師弟の謂^{いひ}ならんや。但だ從遊するの日久しければ、則ち称呼するに爾汝を以てす。此輩も亦自^{おの}からはれ弟子の列に在るのみ。今の学者、多く其の師を信ぜず。師、独り自ら尊大にす。甚^{はなは}だ笑ふべし」と。尚齋、西洞に講授し、塾に大小有り。小を「培根」と曰ひ、大を「達支」と曰ふ。学規嚴密なりと雖も、

師弟の間甚だ情意を竭くし、怡怡として疑を質せば懇懇と応答す。殆ど七十子の聖人を慕ふに似る。尚齋没するに及び、門人哭泣すること父母を喪ふが如し。三君子の氣象風格、各異なること此くの如し。○若林強齋云ふ、「余、定省の余暇に努力して師に謁ゆ。師、故より嚴厲にして、曾て称譽せず。或いは師の不在に値ひて虚しく反る。然るに尚ほ恕意有ること無し。余が居は、師を去ること三里なり。数年の間、日を隔てて謁見し、雨暘を問はず。小疾有りと雖も必ず到る。師、一たびも憐撫する所無し。或いは命を奉じて外に使ひし、或いは口占して帖を作る。必ずしも経義を授けざれども、從遊の日久しきに及びて、稍其の味有るを覚ゆ。自ら探索の功を負みて之れを函丈に質すに、師、未だ嘗て許可せず。適説き得て十分なる処に至ること有れば、師、只言ふ、「頗る通ず。此くの如く説くも亦可なり」と。」と。豈翹（底本は翹）に伊川門前の雪のみならんや。

○語注

【爲「萬世」開「太平」章】「天地の為に心を立て、生民の為に道を立て、去聖の為に絶学を継ぎ、萬世の為に太平を開かん。」（『近思錄』為学大要篇）。【去】語調を整える助字。【錦里】錦小路。【唱喏】喏は諾の古字。はいと応答する。【扣頭】ていねいにおじぎをする。【標儀】外面のありさま【屏氣】「齊を擲げて堂に升れば、鞠躬如たり。氣を屏めて息せざる者に似たり。」（『論語』郷党）。【爾汝】親しい間柄で用いる二人称の代名詞。【西洞】『尚齋先生實紀中』の享保十八（一七三三）年の項に「建書堂於西洞院曰達支培根（割注略）、至冬遷居」とある。【小曰「培根」。大曰「達支」。】「衆人は蚩蚩、物欲交々蔽ひ、乃ち其の綱を頼して、此の暴棄に安んず。惟れ聖斯に惻れみ、學を建て師を立て、以て其の根に培ひ、以て其の支を達す」（朱子「小学題辭」）。【怡怡】樂しむさま。【七十子】孔子の弟子のうちで特にすぐれた人々。【若林強齋】延宝七（一

六七九)年―享保十七(一七三二)年。名は進居。新七と称した。綱斎の門人。終生仕えず、師説を広め門人の育成に努めた。著書に『三科祓』、『家礼訓蒙疏』などがある。【定省】子が父母によく仕えること。朝は安否を問い、晩は寢床をしいて休ませる。【雨暘】雨天と晴天。【口占】口述して書きとらせる。【翹】のあやまり。【伊川門前雪】「游・楊初めて伊川を見る。伊川、瞑目して坐す。二子侍立す。既に覺めて顧みて謂ひて曰く、「賢輩、尚ほ此に在りや。日既に晚れぬ。且く休せよ」と。門を出るに及んで、門外の雪、深きこと一尺。」(『近思録』觀聖賢類)。

▼四十

綱翁京師處士。不_レ達_二關東時勢_一。因_三竹村市平到_二江府_一。欲_レ致_二書於三宅氏_一。敕_レ之云。他們在_二阿部侯邸中_一。若人不_レ知_二侯邸所_一。則宜_下到_二渡部越州_一問_中赤井直義_上。阿部時爲_二閣老_一。府下望_レ塵拜。府人豈有_下不_レ知_二時相_一者_上。諸人爲_レ之大笑。佐藤子云。十二「綱翁俗稱」居_二于京師_一。如_二闇中繫_レ牛_一。乃爲_二道德先生_一。使_二之執_レ事亦遲鈍。

綱翁、京師の処士にして關東の時勢に達せず。竹村市平、江府に到るに因りて、書を三宅氏に致さんと欲し、之れに勅めて云ふ、「他們、阿部侯の邸中に在り。若し人、侯の邸所を知らざれば、則ち宜しく渡部越州に到りて赤井直義に問ふべし」と。阿部は時に閣老たり。府下、塵を望んで拝す。府人、豈時の相を知らざる者有らんや。諸人、之れが為に大いに笑ふ。佐藤子云ふ、「十二「綱翁の俗稱」の京師に居るは、闇中に牛を繫ぐが如し。乃ち道德先生たり。之れをして事を執らしむるも亦遲鈍なり」と。

○語注

【竹村市平】九の語注参照。【阿部侯】忍藩主阿部氏。【渡部越州】未詳。【赤井直義】綱斎の門人。傳左衛門と称した。著書に『大學劄記』がある【十二】綱斎が重次郎と自称したことによる。

▼四十一

綱翁貧特甚。一時乃至嚴冬尚無^二一布袍^一。會若林母贈^二一衣於新七^一。以充^二履端服^一。新七拜受。輒獻^レ翁。

綱翁、貧しきこと特に甚^{はなは}だし。一時乃ち嚴冬に尚ほ一布袍無きに至る。會^{なやま}若林の母、一衣を新七に贈り、以て履端の服に充^あつ。新七、拜受して輒^{すなは}ち翁に獻ず。

○語注

【新七】若林強斎の通称。【履端】新年を迎える。

▼四十二

綱翁家破。每^二雨日^一如^二漏天^一。翁與^二若林^一親升^レ屋修葺。翁體貌肥大。所^レ蹈多破壞。

綱翁講堂席桁落。柱礎傾。不^レ能^レ雇^二梓匠^一。翁與^二若林^一輿謗邪許。互相修理。晚山本半助山本源藏。親^二炙於翁^一。葺^二理講堂^一。給^二瞻家貲^一。漸不^レ苦^二生計^一。而未^レ幾易^レ簞。當時聞^二翁道德^一欲^レ見者。公伯數家。仙洞亦屢稱^二翁姓名^一。然確乎無^二出意^一。

綱翁の家破れ、雨日毎に漏天の如し。翁、若林と親ら屋に升起修葺す。翁、体貌肥大なれば、踏む所多く破壊す。

綱翁、講堂の席桁落ち柱礎傾くも梓匠を雇ふ能はず。翁、若林と輿譌邪許して互ひに相修理す。晩に山本半助・山本源藏、翁に親炙し、講堂を葺理し家賃を給贍（底本は贍）して、漸く生計に苦しまず。而れども未だ幾くならずして賃を易へぬ。当時、翁の道徳を聞き見えんと欲する者、公伯数家あり。仙洞も亦屢翁の姓名を称す。然れども確乎として出意無し。

○語注

【梓匠】大工、指物師。【輿譌】重いものをあげるときの「よいしょ、よいしょ」というかけ声。【邪許】「輿譌」と同じ。【山本半助】山本良貴。現在の神戸市東灘区魚崎の人。綱齋の門人。【山本源藏】山本復齋（延宝八「二六八〇」年—享保十五「二七三〇」年）。名は信義。香山、また守境靈社と号した。山本半助の弟。代々醸造業の家に生まれ、綱齋に学んだ。門人に上月信敬がいる。著書に『神路山講義』『神代鈔説』などがある。【給贍】贍（あおぎみる）は文脈にそわないので「給贍」とした。「給贍」は困っている人にめぐみを与えて助ける。【仙洞】上皇・法皇の敬称。

▼四十三

若林素貧。到二綱翁一。路買二餅一頓一。進レ翁。翁素健啖。輒一口了。乃云。卿尚有二買レ餅餘計一。

若林、素より貧なり。綱翁に到るに、路に餅一頓を買ひて翁に進む。翁、素より健啖、輒ち一口にし了り、

乃ち云ふ、「卿、尚ほ餅を買ふ余計有り」と。

○語注

【一頓】一食分ということか。

▼四十四

若林自_二大津_一謁_二師于洛_一。常脱_二衣袴_一。縛_二之劍把_一。身著_二小襦_一。擔_二劍於肩_一。

初若林住_二京師_一。家尤貧窶。以_二老父多病奉養不_レ足_一。因移_二大津_一。僑_二居三井寺支院微妙寺境内_一。去_二綱翁居_一三里。翁課會。期在_二辰時_一。若林每戴_レ星出。○綱翁未_三嘗印_二可門人_一。若林難苦勵志數年不_レ懈。翁因語_レ人云。如_二若林_一者。亦可_レ謂_二眞丈夫_一焉耳。翁嘗命_二若林之齋_一稱_レ強。後改以_二寬字_一。○若林一時會_二家計不_レ可_二支吾_一。因賦_レ詩曰。寺在_二大津小關邊_一。僧房五六半無_レ主。北窓坐見比良嶺。東臯步望志賀浦。樹稠落葉足_レ炊_レ食。土濕蹲鴟宜_レ種_レ圃。平生素欲_レ咬_二菜根_一。今日幸得_レ嘗_二辛苦_一。壯骨不_レ憚負米勞。啜_レ菽飲_レ水養_二老父_一。翁誦_レ之。直云辛苦中亦能吟出。

若林、大津より師を洛に謁ゆ。常に衣袴を脱して之れを劍把に縛り、身に小襦を着け劍を肩に担ふ。

初め、若林京師に住む。家尤も貧窶にして、老父の多病なるに奉養足らざるを以て、因りて大津に移り、三井寺支院微妙寺の境内に僑居す。綱翁の居を去ること三里。翁の課会の期は辰時に在れば、若林、毎に星を戴きて出づ。○綱翁、未だ嘗て門人に印可せず。若林、難苦勵志すること数年懈らず。翁、因りて人に語りて云ふ、「若林の如き者は、亦眞の丈夫と謂ふべきのみ」と。翁、嘗て若林の齋に命じて「強」

と称し、後、改むるに「寛」の字を以てす。○若林、一時家計の支吾すべからざるに会す。因りて詩を賦して曰ふ、「寺は天津の小関の辺に在り。僧房五六半ば主無し。北窓、坐して見る比良の嶺。東臯、歩して望む志賀の浦。樹稠く落葉食を炊くに足り、土湿りて蹲鴟圃に種うに宜し。平生、素より菜根を咬まんと欲し、今日、幸ひに辛苦を嘗むるを得たり。壮骨憚らず、負米の勞。菽を啜らせ水を飲ませ、老父を養ふ」と。翁、之れを誦して直ちに云ふ、「辛苦の中、亦能く吟じ出せり」と。

○語注

【老父】若林弥太郎（寛永十五「一六三八」年—宝永七「一七一〇」年）。号は正印。近江、大藪の人。京都で医業を営んだ。【因移二大津二】『若林家譜』によれば、宝永六（一七〇九）年春、微妙寺に移居し、さらにその年の冬、大門の更田佐七宅に移っている。【三井寺支院微妙寺】大津市小関。【辰時】午前八時ころ。【印可】承認する。【翁因語レ人云。如二若林一者。亦可レ謂二眞丈夫一焉耳】「イカサマ先生ニモ珍重ニ思召タカ、自分ニハソフハ仰ラレズ、他人ニ、丈夫ト云モノハ新七ガコトデアラフト云コトヲ再傳ニ承タ。」（『雑話筆記』）。【翁嘗命二若林之齋一稱レ強。後改以二寛字一】「其後、自分ニ強齋ト云號ヲ付テクレラレタガ、丈夫ト云ハ工夫ノ熟慮デ云コトナレバ、中々自分ガ當ル處デナシ。強ト云ハ自分ガ得處デ、張テハリ付力ハアル生付ニテ其ユヘ、此名ニハ恥シイコトハナイデアラフト思タルコトニ候。ソノ後、又、寛ノ字ヲ付テクレレ候ガ、反復スルニ、先生ノ教ラル、懇篤、云ツクシ難ク候。強ト云ガ唯一面ニ向ズルト、必寛ナ味ヲ失フモノニテ候。ソレデ又、寛ノ字ヲ付テ下サレタト覺ユルコトニテ候。」（『雑話筆記』）。【支吾】支える。【東臯】東のおか。【蹲鴟】いものこの異名。【負米勞】「親の為に米を百里の外に負ふ。」（『孔子家語』致思）。【啜レ菽飲レ水養二老父一】「孔子曰く、「菽を啜らせ水を飲ませ、其の歡を盡くさしむ。斯を之れ孝と

謂ふ(豆のかゆをすすり、水を飲んで腹を膨らすような生活でも、親の喜ぶように仕える。これを孝という)。「『礼記』檀弓)。

▼四十五

若林任達不_レ顧_二毀譽_一。嘗_二丁_二外艱_一。自制_二喪服_一著_レ之。時或詣_二綱翁_一。路間人怪視。若林却自得。翁後止_レ之。

傳説若林晩歳出行。著_二黷_二頂_二圓笠_一。帶_二一長劔_一。意氣常慷慨。

若林、任達にして、毀譽を顧みず。嘗て外艱に丁たり、自ら喪服を制して之を著、時に或いは綱翁に詣る。路間の人、怪しみ視るも、若林却つて自得す。翁、後に之れを止む。

伝説す、若林、晩歳出行するに、黷_{あいた}を著け円笠を頂き一長劔を帶し、意氣常に慷慨すと。

○語注

【任達】勝手にふるまう。【嘗_二丁_二外艱_一】強齋の父正印は宝永七(一七一〇)年正月に亡くなった。【自得】得意になる。【黷_二頂_二圓笠_一】眼鏡。

▼四十六

彦根人請_三若林到_二城中_一。「若林親故多在_二近江彦根_一」若林倨然答_レ之云。夜裏或往。吾視_下諸侯城堞以_二聖土_一塗者上。則頗願不_レ堪_二唾罵_一。

彦根の人、若林に城中に到るを請ふ。「若林の親故、多く近江彦根に在り」若林、倨然として之れに答へて云ふ、「夜裏、或いは往かん。吾、諸侯の城堞の聖土を以て塗るを視れば、則ち頻顚して唾冒に堪へず」と。

○語注

【親故】親類と昔なじみの者。【城堞】城の築地。【聖土】聖はしろつち。

▼四十七

松岡多助「後改_二下總_一。號_二蓼藏舎_一。尾張熱田人。若林弟子。受_二神道於葦齋_一。著_二神道學則_一。因見_レ絶_二於葦齋_一。後爲_二神祇官副吉田公侍讀_一。近衛大臣及諸摺紳多師_レ之。伊勢谷川士清亦就_レ之學。唐彦明語_二諸先達遺事_一。多出_二於此人_一也。士清字公介。幼學_二松岡玄達_一。受_二神道於玉木葦齋_一。著_二日本紀通證_一。」從_二彦根_一還。謁_二若林_一云。今日與_二客_一辨難。一人謂。吾邦若有_三湯武聖與_二桀紂暴_一。則亦自應_二放伐_一。一人堅尊_二信保建大記_一。如_二放伐說_一。吾且備_レ法辨答。如_二大記_一實是舉_二祖先之非_一。余痛排斥。若林云。多助誤矣。大記爲_二親王_一作。述_二祖先廢亡_一。爲_二孫子監戒_一。亦何傷。只有_下言_三我邦可_二放伐_一者_上。卿何不_レ戮_二其人_一而還。

松岡多助「後に下總と改め、蓼藏舎と号す。尾張、熱田の人なり。若林の弟子にして、神道を葦齋に受く。『神道學則』を著し、因りて葦齋に絶たる。後、神祇官副吉田公の侍読と爲り、近衛大臣及び諸摺紳、多く之れを師とす。伊勢の谷川士清も亦之れに就いて学ぶ。唐彦明、諸先達の遺事を語れるは多く此の人に出づ。

士清、字は公介。幼くして松岡玄達に学び、神道を玉木葦齋に受け、『日本紀通証』を著す。」彦根従り還りて、若林に謁えて云ふ、「今日、二客と弁難す。一人謂ふ、「吾が邦、若し湯武の聖と桀紂の暴と有らば、則ち亦自ら応に放伐すべし」と。一人は堅く『保建大記』を尊信す。放伐説の如きは、吾且く法を備へて弁答せん。『大記』の如きは、實に是れ祖先の非を挙ぐる。余、痛く排斥す」と。若林云ふ、「多助、誤れり。『大記』は親王の為に作り、祖先の廃亡を述べて孫子の監戒と為す。亦何ぞ傷らん。只、我が邦、放伐すべしと言ふ者有らば、卿、何ぞ其の人を戮さずして還る」と。

○語注

【松岡多助】松岡雄淵（元禄十四「一七〇一」年—天明三「一七八三」年）。字は仲良、蓼蔵舎と号した。尾張、熱田神社の神官の家に生まれる。吉見幸和、若林強齋、玉木正英に学んだ。著書に『神道学則日本魂』、『中臣祓講義』などがある。【神道學則】『神道学則日本魂』。松岡雄淵著。成立は享保十八（一七三三）年。【神祇官副吉田公】吉田兼雄。宝永二（一七〇五）年—天明七（一七八七）年。侍従、右衛門督、大蔵卿、神祇権大副に任ぜられた。吉田家の当主として唯一神道の教線拡大に努めるとともに、神道に関する書籍の書写や修補を行った。【近衛大臣】未詳。【谷川士清】宝永六（一七〇九）年—安永五（一七七六）年。字は公介、養順と称し、淡齋と号した。伊勢、津の人。松岡玄達、松岡雄淵、玉木正英に学んだ。著書に『日本書紀通証』、『倭訓栞』がある。【松岡玄達】松岡如庵（寛文八「一六六八」年—延享三「一七四六」年）。字は成章。京都の人。闇齋の門人。神道を正親町公通に学ぶ。伊藤仁斎、稻生若水にも師事した。本草に通じ、著書に『千金方薬注』、『本草彙言摘要』などがある。【日本紀通証】『日本書紀通証』。谷川士清著。宝暦元（一七五一）年成立。同十二（一七六二）年刊。三十五卷二十三冊。『日本書紀』の注釈書。【大記爲親王】

作】『保建大記』の前身である『保平綱史』（元禄二「一六八九」年六月成立）は、その巻首に「八条親王に保平綱史を進め上るの疏」を掲げていることから明らかなように、八条宮尚仁親王（後西天皇の第八子）に献げられた。その直後親王は亡くなるが、『保建大記』にも「上保建大記彈正尹八条親王牋」が収められている。【述^ニ祖先廢亡^一。爲^ニ孫子監戒^一。】『保建大記』の「上保建大記彈正尹八条親王牋」に「伏して冀はくは、事は本末を原ね、論は始終を要め、妖源を探索して規箴を聖世に垂れ、乱幾を詳審して鑑戒を明時に昭らかにし、天を未だ摧けざるに補ひて表儀を宗室に掲示し、邦と瑞を同じくして華萼を春秋に光啓せんことを。」とある。

▼四十八

松岡多助忌日齊戒。若林子適來。頓呼^レ之曰。多助。哀乎不。曰。亦不^ニ甚哀^一。曰。若爾與^レ吾去^ニ東山^一看^レ花。

松岡多助、忌日に齊戒す。若林子^{たままたま}適來り、頓^{とみ}に之れを呼んで曰く、「多助、哀しめるや不^{いな}や」と。曰く、「亦^{また}甚しくは哀しまず」と。曰く、「若^もし、爾^{しか}らば吾と東山に去^ゆきて花を看ん」と。

○語注なし

▼四十九

山本源藏就^レ食。方喫^ニ河魚佳美者^一。若林指示云。士後^ニ天下之樂^一而樂。便共^ニ寧馨魚於人^一。

山本源蔵、食に就き、方に河魚の佳美なるを喫ふ。若林、指示して云ふ、「士は、天下の楽しみに後れて
樂し」めば、すなは便ち寧馨魚を人に共せよ」と。

○語注

【後「天下之樂」而樂】『宋名臣言行録』に范仲淹について次のようにある。「公、少くして大節有り。其の
富貴貧賤、毀譽歛戚に於いて一つも其の心を動かさず。慨然として天下に志有り。常に自ら誦して曰く、「士
はまさに天下の憂ひに先んじて憂へ、天下の楽しみに後おくれて樂しむべし」と。【寧馨】晋、宋代の俗語。
「このような」という意味。

▼五十

若林新七受「神道於葦齋」。師「事之」。葦齋性嗜酒。若林亦好飲。一日會飲。二人醉出。葦齋渡「二條橋」。
若林從抱「其腰」。若林門人亦自「後扶」若林。

若林新七、神道を葦齋に受け、之れに師事す。葦齋、性酒を嗜たしなむ。若林、亦飲を好む。一日會飲し、二人酔
ひて出づ。葦齋、二條橋を渡るや、若林從ひて其の腰を抱き、若林の門人、亦後より若林を扶たすく。

○語注なし

▼五十一

玉木葦齋著「玉籤集」。本「風水艸」而發「揮之」。若林云。何泄「奥秘」如此。後屢勸「破」之。葦齋遂焚「之」。
「祇園神職山下隼人作」歌稱「之」。

玉木葦齋、『玉籤集』を著し、『風水艸』に本づきて之れを發揮す。若林云ふ、「何ぞ奥秘を泄らすこと此くの如きや」と。後、屢之れを破らんことを勧め、葦齋、遂に之れを焚く。「祇園の神職山下隼人、歌を作りて之れを称す。」

○語注

【玉籤集】八卷。垂加神道の秘伝集。【風水艸】山崎闇齋著。『中臣祓』の注釈書。【山下隼人】未詳。

▼五十二

高木甚平綱齋門。又從「佐藤子」。與「先人」友。每謂「先人」云。佐藤洞「見道體」。然不「似」綱翁規模如馨地大「」。

高木甚平は綱齋の門なり。又、佐藤子に従ひ、先人と友たり。毎に先人に謂ひて云ふ、「佐藤は道体を洞見す。然れども、綱翁の規模の如馨地に大なるに似ず」と。

○語注

【高木甚平】高木毅斎（延宝元「一六七三」年—延享二「一七四五」年）。名は行法。別号何久、あるいは可久に作る。伊予宇和島の人。伊達氏に仕える。【先人】亡くなった父親。稻葉迂斎。【如馨地】「如レ此」と同じ。「馨」は語勢を助ける助字。「地」は語尾にそえる助字。

▼五十三

佐藤子到_二江戸_一。税駕未_レ移_レ晷。聞_四人說_三師在_レ洛開_二講易_一。即日登_レ道還_二京師_一。

佐藤子、江戸に到る。税駕して未だ晷^きを移さざるに、人の「師、洛に在りて『易』を開講す」と説くを聞き、即日道を登りて京師に還る。

○語注

【税駕】駕を解く。【移晷】長時間にわたる。

▼五十四

寶永中江都雨_レ砂三尺。都下洶洶。佐藤子馮_レ几自若云。富嶽火矣。

宝永中、江都に砂雨^ふること三尺。都下洶^{きう}洶^{きう}たり。佐藤子、几に馮^より自若として云ふ、「富嶽の火ならん」と。

○語注

【寶永】斎藤月岑『武江年表』の宝永四（一七〇七）年の記事に「十一月二十日より、富士山の根がた須走り口焼くる。天暗く雷声地震夥しく、関東白灰降りて雪の如く地を埋む。西南頻りにいなびかりあり。白昼暗夜のごとくに成り、行燈挑灯をとます。二十三日殊に甚だしく、二十四日に至り天晴れ、皎日を押して諸人安堵す。又二十五日、二十六日、再び天曇り砂降り、雷声の如き響き地震あり。是れより黒灰降る。二十八日、平常の如し。此の時出来たる山を宝永山といふ。」とある。【洵洵】さわぎどよめくさま。

▼五十五

佐藤子毎^レ聞^三人有^二廉介清節^一。必問其人有^二妻孥^一不。

佐藤子、人の廉介清節有るを聞く毎に、必ず問ふ、「其の人、妻孥^{さいと}有りや不^{いな}や」と。

○語注

【廉介】いさぎよく正しい。 【妻孥】妻と子。

▼五十六

赤穂遺臣襲^二吉良氏^一殺^レ之。天下莫^レ不^レ稱^二其忠^一。其明詰且跡部宮内謁^二佐藤子^一云。義士復讐。先生既聞諸。佐藤云。此非^二復讐^一也。何得^レ爲^二義士^一。自^レ是諸儒集議不^レ一。辨詰多端。或人云。佐藤不^レ取^二義士^一。恐後人無^二以興起者^一。佐藤乃云。民之秉^レ彝。好^二是懿德^一。又奚憂。

赤穂の遺臣、吉良氏を襲ひて之れを殺す。天下、其の忠を称せざる莫し。其の明詰旦に跡部宮内、佐藤子に謁えて云ふ、「義士復讐す。先生、既に諸れを聞くや」と。佐藤云ふ、「此れ復讐に非ざるなり。何ぞ義士と為ることを得ん」と。是れより諸儒、集議すること一ならず、弁詰多端なり。或る人云ふ、「佐藤、義士を取らず。恐らくは後人以て興起する者無からん」と。佐藤乃ち云ふ、「民の彜を乗る、是の懿徳を好む」と。又奚ぞ憂へんや」と。

○語注

【民之乗^レ彜。好^ニ是懿徳^一。】「天、烝民を生ず。物有れば、則有り。民の彜を乗る、是の懿徳を好む。」（『詩経』大雅蕩 烝民）。

▼五十七

鳴瀧僧道濟問^ニ佐藤子^一。儒者説^ニ無聲無臭^一。且道是甚麼。佐藤子直云。和尚看。雷震號號。蕃椒喫口辛辣。〔又嘗示^ニ先君子^一云。搗盆研擦鳴。正是無聲無臭〕

鳴瀧の僧道濟、佐藤子に問ふ、「儒者「無聲無臭」を説く。且く道へ、是れ甚麼」と。佐藤子、直ちに云ふ、「和尚、看よ。雷震すれば號號。蕃椒を口に喫すれば辛辣」と。〔又嘗て先君子に示して云ふ、「搗盆、研擦すれば鳴る。正に是れ「無聲無臭」と。」〕

○語注

【甚麼】如何。【無聲無臭】「上天の載は声も無く臭も無し。而も実に造化の枢紐にして品彙の根柢也。故に無極にして太極と曰ふ。」（朱子『太極図説解』）。【號號】おどろきおそれるさま。

▼五十八

尚齋在京。恒事屢空。佐藤子云。丹治「尚齋俗稱」天玉_レ汝亦至劇。輒出_二中金五兩_一。贈_二京師_一云。凡百爲_二寒士_一謀。無_レ如_二此物_一。

尚齋の京に在るや、恒に事屢空し。佐藤子云ふ、「丹治「尚齋の俗稱」、天、汝を玉にすること亦至りて劇し」と。輒_{すなは}ち中金五両を出して、京師に贈りて云ふ、「凡百、寒士の為に謀るも、此の物に如くは無し」と。

○語注

【屢空】しばしば食物や生活物資に欠乏すること。『論語』（先進）に「回や其れ庶_{ちか}いか。屢空_{しばしば}し。賜は命を受けずして、貨殖す。億_{はか}れば則ち屢中る。」とある。【寒士】貧しい人。

▼五十九

佐藤子自奉豐麗。日飲_二醇酒_一。快活脱洒。終身無_二戚容_一。

佐藤子、自奉すること豊麗にして、日に醇酒を飲む。快活脱洒、終身戚容無し。

○語注

【自奉】自分の衣食などを充分に備える。【戚容】いたみなしむさま。

▼六十

彦根侯禮_二待佐藤翁_一。如_二列國會同_一。翁皆固辭。唯不_レ辭_下乘_レ轎到_二廳事砌下_一一事_上。乃云。此則不_レ拜_二受特命之辱_一。老爺若顛_二躓邸下_一。恐煩_二有司_一。

彦根侯の佐藤翁を礼待すること、列国会同せるが如し。翁、皆固辞するも、唯、轎に乗りて庁事の砌下に到るの一事のみは辞せず。乃ち云ふ、「此れ則ち特命の辱を拝受せず。老爺、若し邸下に顛躓せば、恐らくは有司を煩はさん」と。

○語注

【彦根侯】佐藤直方の門人であつた彦根藩主井伊直興（明暦二「一六五六」年—享保二「一七一七」年）のことか。

▼六十一

佐藤子在_二長嶋侯座_一講談。卒然立出_二廳側_一。振_レ衣云蚤蚤。其不_レ拘多類_レ此。

佐藤子、長島侯の座に在りて講談す。卒然として立ち片側に出で、衣を振りて云ふ、「蚤、蚤」と。其の拘とろはれざること多く此れに類す。

○語注

【長嶋侯】伊勢長嶋藩主増山侯。【卒然】にわかに。

▼六十二

友部安崇云。佐藤子皓齒玲玲。眼彩已先勝^二諸人^一。聞^二其冷咳^一。自然使^二人口囁囁不^レ能^二與話^一。

友部安崇云ふ、「佐藤子、皓齒玲玲、眼彩已に先づ諸人に勝つ。其の冷咳を聞けば、自然に人口をして囁囁せふじゆせしめ與に話す能はざらしむ」と。

○語注

【友部安崇】伴部安崇（寛文七「一六六七」年—元文五「一七四〇」年）。武右衛門と称し、八重垣翁と号した。江戸の人。直方の門人であったが、後正親町公通に学んだ。著書に『神道野中の清水』がある。【皓齒】白い齒。【玲玲】玉のように美しいさま。【囁囁】ものを言おうとしながら言いかねて、口をもぐもぐさせるさま。

▼六十三

佐藤子遣_二遙園中_一。偶掘_二草根_一泥_二滓手_一。時有_二一急事_一。室人呼_レ公。公立以_レ袖拭_二兩手_一。乃升_レ堂。

佐藤子、園中を逍遙し、偶_{たま}草根を掘りて手を泥滓す。時に一急事有りて、室人、公を呼ぶ。公、立ちて袖を以て両手を拭ひ、乃ち堂に_{のぼ}る。

○語注

【室人】妻。【以_レ袖拭_二兩手_一】無窮会織田文庫所蔵の『先達遺事』の該当箇所に「シカモ上羽_二重ノ小袖へ。不断然リトキク」との書き入れがある。

▼六十四

佐藤翁晩歳如_二京師_一。既東歸。野田德勝・永井行達俱謁云。先生經_二數年_一還_レ京。定應_下是會_二故人_一慰_中舊情_上。翁云。不_レ爾。余樂_下與_二英妙才子_一談_上。不_三曾愛_二故老朽腐_一。攢_レ眉尤悔的_一。

佐藤翁、晩歳京師に如き、既に東歸す。野田德勝・永井行達、俱に謁えて云ふ、「先生、數年を経て京に還_{かへ}る。定めて應に是れ故人に会ひて旧情を慰むべし」と。翁云ふ、「爾_{しか}らず。余、英妙の才子と談ずるを楽しみ、曾て故老の朽腐し、攢眉尤悔的を愛せず」と。

○語注

【佐藤翁晩歳如^二京師^一】『佐藤先生年譜略』に「享保三年戊戌（一七一八年―校合者注）、七月十六日、行を發し京師に遊ぶ。又、江州彦根、及び勢州長島、尾州名古屋などの邑に如く。閏十月二十五日、先生、江戸に帰る。」とある。この記事はこの時のことか。当時直方は六十九歳。亡くなる前年のことである。【野田德勝】野田剛斎。元禄三（一六九〇）年―明和五（一七六八）年。七右衛門と称した。江戸の人。佐藤直方の門人で、三宅尚斎にも学んだ。著書に『理氣先後説』がある。【永井行達】元禄二（一六八九）年―元文五（一七四〇）年。隠求、又三右衛門と称した。江戸の人。直方の門人。【故人】旧友。【攢眉】不愉快なさま。【尤悔】後悔すべき事。

▼六十五

佐藤翁在^二酒井侯邸中^一。跡部氏在^二宕山下^一。翁一日訪^レ之。侍者告^レ火^二翁宅邊^一。翁乃借^二主人馬^一。翁高齡。主頗難^レ之。因^二翁固請^一。不^レ獲^レ已出^レ馬。翁直向^レ馬執^レ轡。體貌尤熟。既騎。馳驅如^レ飛。

佐藤翁、酒井侯の邸中に在り。跡部氏、宕山たうざんの下に在り。翁、一日之れを訪ふ。侍者、「翁の宅辺に火あり」と告ぐ。翁、乃ち主人の馬を借る。翁、高齡なれば、主頗る之れを難かたんずれども、翁、固く請ふに因りて、已むを獲ず馬を出す。翁、直ただちに馬に向かひ轡を執る。体貌尤も熟せり。既に騎するや、馳ち驅くすること飛ぶが如し。

○語注

【酒井侯】『佐藤先生年譜略』、および稲葉迂斎の『浜見録』（卷一）によれば、直方は元禄七（一六九四）

年から享保四（一七一九）年まで、厩橋藩（うまはしはん前橋藩）酒井侯の賓客として浜町蛸殻町の中屋敷に居住した。
【岩山下】愛宕山の下。『江戸城下変遷絵図集 第九卷』所収の「愛宕下之内」の絵図のうち延宝年中之形（一六七三年—一六八一年）、及び正徳三巳年之形（一七一三年）の愛宕下通と薬師小路が交差する角に「跡部宮内」の居所を確認することができる。

▼六十六

一 醫人師^二事佐藤翁^一者。早世。其妻寡居三四年。欲^二祝髮爲^レ尼。謀^二之永井行達^一。行達甚不^二可^一之。以告^レ翁。翁直云。好省^二紅粉之費^一耳。

一 医人の佐藤翁に師事せし者、早世す。其の妻、寡居すること三、四年なり。祝髮して尼為らんと欲し、之れを永井行達に謀^はる。行達、甚だ之れを不可とし、以て翁に告ぐ。翁、直ちに云ふ、「好^よし。紅粉^{こうふん}の費^{つひ}えを省くのみ」と。

○語注

【一 醫人】『迂齋先生学話』卷之一によればこの医者は道運といい、彼自身も法体であった。【好】軽い肯定の言葉。

▼六十七

佐藤翁隣邸失火。門人趨救^レ之。既消。翁令^三作^レ粥^二勞^一來者^一。一門生幹^二厨事^一監^レ膳云。箸精潔。翁叱云。

倉卒中何爾。汝此心不_レ可_レ入_二堯舜之道_一。

佐藤翁の隣邸に失火あり。門人、趨_{はし}りて之れを救ふ。既に消ゆるや、翁、粥を作らしめて来者を勞_{ねが}ふ。一門生、厨事を幹し、膳を監_みて云ふ、「箸は精潔なりや」と。翁、叱りて云ふ、「倉卒中、何ぞ爾_{しか}。汝が此の心は堯舜の道に入るべからず」と。

○語注

【倉卒】いそがしくあわただしいさま。

▼六十八

荻濃重祐「俗稱_二莊右衛門_一」自_レ一見佐藤子_一。視_二天下萬物_一如_二兒戲_一。終身放言愚_二弄一世_一。然亦以_二道學_一自任。嘗名_二其手録_一曰_二擔當雜志_一。

荻濃重祐「俗に莊右衛門と称す」、佐藤子を一見してより、天下万物を視ること兒戲の如く終身放言して一世を愚弄す。然れども亦道学を以て自任し、嘗て其の手録に名づけて『担当雜志』と曰ふ。

○語注

【擔當雜志】二冊。享保七（一七七二）年の序がある。

▼六十九

荻濃重祐携_二愛妾_一。泛_レ舟遊觀。鄉人大爲_二異議_一。

荻濃重祐、愛妾を携へて舟を泛_うかべ、遊觀す。鄉人大いに異議を為せり。

○語注

【鄉人】俗人

▼七十

荻濃重祐講_下不_二許_レ友以_レ死章_上。右手載_二小學_一。左手掛_二帶劔_二云。此言_レ不_二豫許_一。若路逢_下害_二夥伴_一者_上。豈可_レ旋_レ踵。因手振_二劔把_一。

唐彦明七年而歸_二省竹原_一。即日都筑氏使_二人來_一。無_三一言及_二起居平安_一。只問所_二發揮_一之說有不。都筑氏稱_二九郎右衛門_一。淺野甲斐家臣。爲_二荻濃門人_一。

荻濃重祐、「友に許すに死を以てせず」の章を講ず。右手に『小学』を載せ、左手を帶劔に掛けて云ふ、「此れ予め許さざるを言ふ。若し路に夥伴を害する者に逢はば、豈_{あに}踵を旋らすべけんや」と。因りて手に劔把を振る。

唐彦明、七年にして竹原に帰省す。即日、都筑氏、人をして来たらしめ、一言も起居平安に及ぶ無く、只、「發揮する所の説、有りや不_{いふ}や」と問ふのみ。都筑氏は九郎右衛門と称す。浅野甲斐の家臣にして荻濃の

門人なり。

【不^レ許^レ友以^レ死章】「曲礼に曰く、父母存すれば、友に許すに死を以てせず」（『小学』明倫）。【夥伴】なかま。【都筑氏】都筑鷺洲（文化三「二八〇六」年—安政四「一八五七」年）か。鷺洲は名は可復。字は叔言。九郎右衛門と称した。備後三原の人。浅野甲斐守忠敬に仕えた。

▼七十一

永井隠求未^レ學。養^ニ土浦醫家^一。冒^ニ其姓^一。後始知^ニ復姓爲^レ義。悉遺^ニ其書籍衣服器用^一。單身去。隠求去後。假父檢^ニ其遺篋^一。得^ニ藏金十八兩^一。大驚^ニ其廉介^一。追^ニ求之^一不^レ已。

永井隠求、未だ学ばざるとき、土浦の医家に養はれて其の姓を冒す。後、始めて復姓の義を知るを、悉く其の書籍・衣服・器用を遺して单身去る。

隠求、去りて後、仮父、其の遺篋を検べ藏金十八両を得。大いに其の廉介に驚き、之れを追求して已まず。

○語注

【器用】役にたつ道具。【假父】養父。

▼七十二

隱求有「疑難」。時尚齋在京師。以書辨詰。往復數回。隱求不屈。尚齋厭其褊急。且置。後山本立仙「江戸人。學先君子」。到洛謁尚齋。話偶及隱求。尚齋云。阿三「隱求俗稱三右衛門」。齧馬漢。終無復親意。後先君子在尚齋坐。便言行達表裏如一。不欺暗室。渠上先生書。易服盟寫。報至亦復如此。實如在函丈。於是尚翁始服其誠實。

隱求、一疑難有り。時に尚齋、京師に在り。書を以て弁詰し往復すること數回。隱求、屈せず。尚齋、其の褊急なるを厭ひて且く置く。後に、山本立仙「江戸の人。先君子に学ぶ」、洛に到りて尚齋に謁ゆ。話、偶隱求に及ぶ。尚齋、云ふ、「阿三「隱求、俗に三右衛門と称す」は齧馬漢なり」と。終に復親意無し。後に、先君子、尚齋の坐に在り。便ち言ふ、「行達、表裏一の如く、暗室を欺かず。渠、先生に上るの書は服を易へ盥して写す。報、至れば亦復此くの如し。実に函丈に在るが如し」と。是に於て、尚翁、始めて其の誠実に服す。

○語注

【時尚齋在京師】尚齋は幽閉から解かれた後、正徳元（二七一）年、京都に移った。【褊急】性急。【山本立仙】山本立善。迂齋の門人。【阿三】「阿」は親しみを表わす接頭語。【齧馬漢】食いつく馬のような男。【不欺暗室】人が知らなくても悪いことをしない。【盥】手を洗う。

▼七十三

先君子住「材木街」。先婦人歸寧。先君獨止。隱求自「北島」來訪。入夜而還。先君便閉戸就寢。比及二

子時^一。有^二敲^レ門者^一。出接則隱求也。先君驚問。君亦復何爲至。隱求乃出^二發^レ燐^一一把於袖中^一云。去時見^レ無^二燐^一具^一。此物不^レ可^レ不^三豫備^二不^レ虞^一也。輒置而去。

佐藤先生既卒。隱求恭^二敬^レ先君^一。最至。先君亦每加^二禮貌^一。余兄弟總角。隱求來則必迎^二門外^一。去則從^二先君^一送至^二門庭^一。以爲^レ常。故有^二隱君駕音^一。家僕遽報。先君嘗養^二一奴^一今平者^一。奴有^二一兒^一。亦養爲^レ卒。兒忽疾^レ疫死。小祥日。先妣作^レ饌。令^二奴祭^レ之。時報^二隱君^一來^一。家兄倉卒出迎。隱君云。今日不^下爲^二家公^一來^上。正爲^二貴僕^一今平來。便置^二線香一束^一。追^二薦亡兒^一去。

先君子、材木街に住す。先婦人、^{きねい}婦寧して、先君、独り止まる。隱求、北島より來訪し、夜に入りて還る。先君、便ち戸を閉ぢ寢に就く。比子^{ころ}の時に及び、門を敲^{たた}く者有り。出^いでて接すれば、則ち隱求なり。先君、驚きて問ふ、「君、亦復^{またまた}何の爲に至る」と。隱求、乃ち發^は燐一把を袖中より出して云ふ、「去る時、燐具無きを見る。此の物は予め不^ふ虞に備へざるべからざるなり」と。輒^{すなは}ち置きて去る。

佐藤先生、既に卒す。隱求、先君を恭敬すること最も至れり。先君も亦毎^{またつね}に礼貌を加ふ。余が兄弟、総角のとき、隱求、来れば則ち必ず門外に迎へ、去れば則ち先君に従ひて送りて門庭に至るを以て常と爲す。故に隱君の駕の音有れば、家僕、遽^{すみ}やかに報ず。先君、嘗て一奴の今平なる者を養ふ。奴に一兒有り。亦養ひて卒と爲す。兒、忽ち疫を疾みて死す。小祥^{せうしやう}の日、先妣、饌を作りて奴をして^こ之れを祭らしむ。時に、隱君^{きた}来ると報ず。家兄、倉卒として出で迎ふ。隱君云ふ、「今日は家公の爲に來らず。正に貴僕今平の爲に來る」と。便ち線香一束を置き、亡兒を追^つ薦^{せん}して去る。

○語注

【材木街】享保十（一七二五）年九月、迂齋は江戸の唐津藩邸から材木町に転居した。【先婦人】迂齋の妻、黙齋の母である武井氏蘭。【歸寧】とついだ女が実家に帰って父母の安否を問う。【北島】日本橋茅場町、一、二丁目付近。【子時】午前零時ころ。【發焔】つけぎ。【不虞】予期しないこと。【小祥】死後二年めに行うまつり。【先妣】亡くなった母。【追薦】追福と同じ。

▼七十四

先君子訪^二隱求^一。見^三其如^二齊戒^一。因問^レ之。乃云。今日張君敬夫遠忌。

隱求嘗讀^下朱子答^二何叔京^一書^上。覺^二功夫向前^一。後望^二拜何叔京^一。

先君子、隱求を訪ひ、其の齊戒^{さいかい}するが如きを見、因りて之^こを問ふ。乃ち云ふ、「今日は張君敬夫の遠忌なり」と。

隱求、嘗て朱子の「何叔京に答ふるの書」を読み、功夫向前^{きふうぜん}たるを覚え、後、何叔京を望拝す。

○語注

【張君敬夫】張栻^{ちやうしやく}（一一一三年—一一八八年）。南宋の学者。敬夫は字。南軒先生と呼ばれた。著書に『南軒易說』、『癸巳論語解』、『南軒集』などがある。【何叔京】何鏞^{かかう}。朱子の門人。著書に『潭州善化令』がある。【答^二何叔京^一書】『朱子文集』卷四十。【向前】目の前にある。「向」は方位を示す語の上につく接頭語。

▼七十五

小野崎師由「稱^二舍人^一」宰^二秋田別封佐竹侯^一。嘗從^三侯祗^二役駿府^一。藩中年少出遊犯^レ禁。有司嚴制^レ之。年少便夜出^レ從^二狗寶^一。有司百方莫^二如^レ之何^一。遂告^レ宰。舍人云。從^二狗寶^一者是狗。不^レ妨^二縛而斬^レ之。自^レ是無^二復犯者^一。

舍人樂曠有^二識度^一。爲^レ政寬恕。然亦多^二奇策^一。

小野崎師由「舍人と称す」、秋田別封佐竹侯に宰たり。嘗て侯の駿府に祗役するに従ふ。藩中の年少出遊して禁を犯し、有司、嚴に之れを制す。年少、便ち夜狗寶^{うどう}従り出で、有司百方すれども之れを如何ともする莫^なし。遂に宰に告ぐ。舍人云ふ、「狗寶^{うどう}従りする者は是れ狗なり。縛りて之れを斬るを妨げず」と。是れより復犯^{また}す者無し。

舍人、楽曠く識度有り。政を為すに寛恕、然れども亦^{また}奇策多し。

○語注

【小野崎師由】小野崎舍人（貞享二「一六八五」年—宝暦二「一七五二」年）。本姓は在原。小野崎氏を冒す。はじめ団六と称した。秋田藩支封の老職。直方没後、尚齋に学んだ。【秋田別封】元禄十四（一七〇二）年、秋田藩領から新田二万石を分与されて成立した支藩、秋田新田藩のこと。【狗寶】犬がくぐって出入りする穴。【百方】さまざまな方法。

▼七十六

先君子同^ニ野田徳勝・小野崎師由・多田維則・野澤弘篤^一。遊^ニ葛西牛島禪林^一。還就^ニ墨水^一借^レ舟。時五六月。諸人多乗^レ舟避^レ暑。最乏^ニ賃艇^一。僕便借^ニ猪牙二艘^一。此舟本爲^ニ飄客^一造。先君野田先乗。多田與^ニ野澤^一云。吾曹生來不^ニ曾乘^ニ此舟^一。師由徐曰。生來不^レ乗者。只稻葉野田二人已。如^ニ卿等^一便海賊耳。

先君子、野田徳勝・小野崎師由・多田維則・野澤弘篤とともに葛西牛島の禪林に遊び、還りに墨水に就きて舟を借る。時に五六月、諸人多く舟に乗りて暑を避け、最も賃艇乏しければ、僕、便ち猪牙二艘を借る。此の舟、本飄客の為に造る。先君と野田、先づ乗る。多田、野沢と云ふ、「吾曹、生來曾て此の舟に乗らず」と。師由、徐に曰く、「生來乗らざる者は、只稻葉・野田の二人のみ。卿等の如きは便ち海賊のみ」と。

○語注

【多田維則】多田東溪（元禄十五「一七〇二」年—明和元「一七六四」年）。京都の人。三宅尚齋に学び、後、室鳩巢の門人となった。秋田藩、伊予新谷藩、館林藩などに仕えた。著書に『世本正誤』などがある。【野澤弘篤】江戸の人。はじめ菅野兼山に学び、後直方に師事した。【葛西牛島禪林】黄檗宗弘福寺のことか。【猪牙】猪牙舟。江戸で造られた細長く屋根のない、先のとがった舟。軽快で速く、漁業のほか、吉原通いの遊び舟などに用いられた。【飄客】遊郭で遊ぶ男。

▼七十七

石原「野田居^ニ石原^一」舍人東溪「維則別號」篁崎「長谷川克明在^ニ篁崎^一」諸老集^ニ迂齋^一。此日仙岸「野澤弘篤在^ニ仙岸^一」獨不^レ在。話偶及^ニ仙岸父子睽離事^一。諸老厚重。不^レ舉^ニ人過惡^一。東溪徐云。仙岸人尤難^レ

曉處。石原歎息良久。攢眉云。阿十「野澤俗稱」故不_レ非_二理於兒_一。舍人應_レ聲云。故自不_二非理_一矣。然莫_下如_二怒罵捶撻_一何_上。坐中或笑或歎。時長野退藏「彦根人」既入_レ戸將_レ就_レ坐。諸老不_レ及_レ省_レ之。撞撞續_二前話_一。退藏咳一咳爲_二不_レ聞者_一。徐進云。即日炎暑。諸老萬福。

石原「野田は石原に居る」、舍人、東溪「維則の別号」、筐崎「長谷川克明は筐崎に在り」の諸老、迂斎に集ふ。此の日、仙岸「野澤弘篤は仙岸に在り」、独り在らず。話、偶仙岸父子の睽離する事に及ぶ。諸老、厚重にして人の過惡を挙げず。東溪、徐に云ふ、「仙岸は人の尤も曉り難き処なり」と。石原、歎息すること良久しくして、攢眉して云ふ、「阿十「野沢の俗稱」故兒に非理ならず」と。舍人、声に応じて云ふ、「故自ら非理ならず。然るに怒罵捶撻するを如何ともすること莫し」と。坐中、或いは笑ひ或いは歎く。時に、長野退藏「彦根の人」、既に戸に入りて將に坐に就かんとす。諸老、之れを省るに及ばず、撞撞として前話を續く。退藏、咳一咳して聞かざる者とし、徐に進みて云ふ、「即日炎暑。諸老万福」と。

○語注

【石原】野田剛齋は本所石原で学塾を営んでいた。【筐崎】現在の日本橋箱崎町のことか。【長谷川克明】号は観水。源右衛門と称した。松平伊豆守信輝の臣。佐藤直方の門人。【仙岸】仙台堀の河岸のことか。【睽離】そむき別れる。【捶撻】むちうち。【長野退藏】永野退藏。初め宇右衛門と称した。直方の門人。後迂斎に学んだ。彦根藩医。『三郎稿』、および『迂斎先生学話』卷之二十五（乙亥歳）によれば、廃嫡して異性の養子をとった。【撞撞】とだえることなく続くさま。【萬福】ごきげんよろしゅう。

▼七十八

佐藤子不^レ嗜^二烟草^一。門人亦多不^レ執^二烟管^一。野田德勝至性事^二庶母^一孝謹。每晨省問^レ安。母未^レ起。乃執^レ管吸^レ煙以進。在^レ己則未^ニ曾用^一。父醉翁精^二茶理^一。數會^二茶人^一。人每稱^二其饌具精辨^一。皆言阿兒幹事之故也。德勝下^レ氣事^二父母^一。多類^レ此。

佐藤子、烟草を嗜まず。門人、亦多^{また}く烟管を執らず。野田德勝は至性にして庶母^{しよぼ}に事へて孝謹なり。毎に晨省問安す。母、未だ起きざれば、乃ち管を執りて煙を吸ひ、以て進む。己に在りては則ち未だ曾^{かつ}て用ひず。父の醉翁は茶の理に精^はしく、數^{しばしば}茶人を会す。人毎^{つね}に其の饌具の精弁なるを称するに、皆^{ことごと}く言ふ、「阿兒の幹事する故なり」と。德勝、氣を下して父母に事ふること多く此れに類す。

○語注

【佐藤子不^レ嗜^二烟草^一】「直方曰、多葉粉ハ烟ヲダスアホフナモノ。酒ニハ酔ト云効ガアル。鬼神ヘモス、メルカ、多葉粉ハ何ノ役ニ立ヌ。陳ツブシモノナリ。」（『迂齋先生學話』卷之一）。【至性】非常に善良な生まれつき。【醉翁】野田久忠。文京区善仁寺に現存する墓の墓碑銘によれば、享保十六（一七三二）年卒。弥佐衛門と称し、幕府に仕えた。【其饌具精辨】無窮会平沼文庫所藏『先達遺事』の藤田畏齋の割記に「黙齋先生ノ咄シニ酔翁ノヒバ汁ト云コトアリ。酔翁ノヒバジルノヤウナウマヘコトハナイ。茶人カ感心シタ。ソレト云フモ野田先生ノ汁ノコシラヘヨウカ上手タテハナヘ。只親ノ機嫌ノヨイヤウニヒハノ葉ヲ一ツ一ツムシツテ丁寧ニナサレタ。饌具精弁トハソノコト」とある。「ヒバ」とは、「乾葉」すなわち大根の葉を陰干しにしたもの。【下^レ氣】氣をおさえておとなしくする。『礼記』（内則）に「父母過ち有らば、

氣を下し色を怡よろこばしめ、声を柔らかにし以て諫む。」とある。

▼七十九

磬澤一得二贗金一。人告二其非レ眞。澤一使二子姪碎レ之。曰不レ可二復誤一人。

磬こ沢一、贗金を得たり。人、其の真に非ざるを告ぐ。沢一、子姪してつをして之これを碎かしむ。曰く、「復また、人を誤るべからず」と。

○語注

【澤一】貞享元（一六八四）年—享保十（一七二五）年。姓は大神氏。筑前国佐原郡原邑の人。佐藤直方の門人。【誤】人をまよわせる。

▼八十

澤一嘗言。吾功夫怠惰。則見二永井丈一。即悚然奮勵。自覺レ有レ進。吾酬二酢郷黨族人一。事多不レ満二心意一。謀二之野田君一。處置得十分適當。吾讀レ書有二滯義一。則問二之稻葉子一。如下下披二雲霧一。觀中青天上。此三君則吾師範也。

沢一、嘗て言ふ、「吾が功夫怠惰なれば、則ち永井丈に見まゆ。即ち悚然しんぜんとして奮勵し、自ら進むこと有るを覚ゆ。吾、郷党の族人に酬酢しゅうそくするに事多く心意に満たざれば、之これを野田君に謀る。処置、得て十分適

当なり。吾、書を読みて滞義有れば、則ち之れを稻葉子に問ふ。雲霧を披きて青天を睹るが如し。此の三君は、則ち吾が師範なり」と。

○語注

【丈】友人の年長者に対する敬称。

▼八十一

澤一與^二先君子^一情好尤善。每相戲笑。澤一素懷道體玄理在^二先君^一。然亦口未^二嘗言^一。一日與^二先君野田永井天木諸子^一出往。諸子相語而行。澤一卒呼^二先君^一云。道體兄「三字連讀」鄙説如何。先君笑曰。吾故自道體。

沢一、先君子と情好尤も善く、毎に相戲笑す。沢一、素より懷ふ、「道体の玄理は先君に在り」と。然れども亦口に未だ嘗て言はず。一日、先君・野田・永井・天木の諸子と出でて往き、諸子、相語りて行く。沢一、卒かに先君を呼びて云ふ、「道体兄「三字連讀」、鄙説如何」と。先君、笑ひて曰く、「吾、故自から道体」と。

○語注

【鄙説】「鄙」は謙称。

▼八十二

澤一本職「俚樂」。及「從」佐藤。自耻「其業」。欲「爲」針醫。佐藤云。庸醫「繆」人。亦不「細事」。且執「俗樂」不「妨」。但不「做」幫間的。

沢一、本俚樂を職とす。佐藤に従ふに及び、自ら其の業を恥ぢ、針医為らんと欲す。佐藤、云ふ、「庸医の人を繆まるは亦細事ならざれば、且く俗樂を執るを妨げず。但し幫間的を做さざれ」と。

○語注

【俚樂】琵琶、箏、三味線などの俗樂。【庸醫】やぶ医者。【幫間】たいこもち。

▼八十三

澤一毎「打飯」自省。喫來充「饑」是天理。些此需「飽」是人欲。嘗在「先君子坐」。喫「魚汁」轉甘美。天木時中從「旁」云。無「乃」今至「人欲界中」邪。

沢一、打飯する毎に自省す。「喫し來つて饑ゑを充たすは是れ天理なり。些か此れ飽くを需むるは是れ人欲なり」と。嘗て先君子の坐に在りて、魚汁を喫するに転甘美なり。天木時中旁より云ふ、「乃ち今、人欲界中に至ること無きや」と。

○語注

【喫來】「來」は語末にそえる助字。【乃】なんじと訓むことも可能。

▼八十四

先君子謁二尚齋一于京師一。先婦人省二舅氏一。家兄尚幼。天木時中來監守。以二炊烹妨レ業一。自二醫一脱粟一飲レ水旬日。忽患二泄瀉一。佐藤就正「直方子」云。老兄殆亦不レ可レ至レ此。時中唯笑而已。

先君子、尚齋に京師にて謁まみゆ。先婦人舅きやうし氏を省せいす。家兄尚ほ幼なれば、天木時中、来りて監守す。炊烹、業を妨ぐるを以て、自ら脱粟だつそくを齧かみ、水を飲むこと旬日、忽ち泄瀉を患ふ。佐藤就正「直方の子」云ふ、「老兄、殆ど亦此に至るべからず」と。時中、唯笑たふふのみ。

○語注

【先君子謁二尚齋一于京師一】享保十八（一七三三）年、迂齋が佐藤就正と上総の門人をもなつて上京し、尚齋から『大学』の講義をうけた時のことか。【舅氏】母の兄弟。【家兄】黙齋の兄正直。【脱粟】もみをとりさつただけで、精白していない穀物。【佐藤就正】宝永六（一七〇九）年—延享四（一七四七）年。彦八と称し、謙齋と号した。

▼八十五

尚翁嚴排レ冒二異姓一不二少假一。有下一力夫傭二翁家一者上。一兒既長。寒乏不レ能二衣食一。里中商人憐レ之。取二其兒一爲レ嗣。夫亦得二薄助一。大喜以告レ翁。翁不二敢應一。去後酸鼻云。奴失レ子。

尚翁、蔽に異姓を冒すを排し、少しも仮さず。一力夫の翁の家に傭はるる者有り。一児、既に長じ、寒乏にして衣食する能はず。里中の商人、之れを憐み、其の児を取りて嗣と為す。夫も亦薄助を得て、大いに喜びて以て翁に告ぐ。翁、敢へて応へず。去りて後、酸鼻して云ふ、「奴、子を失へり」と。

○語注

【尚翁嚴排冒異姓】尚齋は、元禄六（一六九三）年『氏族辨證附録』を著して、異姓を冒すことを排した。

▼八十六

阿部侯幽尚翁於忍城三年「尚翁壯歲激昂負氣。仕阿部侯。以諫不可。欲得病辭官。先是罹災。家僕拾銅器經火者。貯之米苞。重可二十貫。翁意負之投地。必傷腰脚。輒升梁上。負而墜。」翁在獄中。每旦請水浴。未嘗汗垢。自作紙縷。補布袍裂。未嘗生虱。朝夕食後必匝獄中。約凡一里。精神不減平日。一吏巡警。偶謂監人云。監守當戒嚴。翁聞之忿然云。吾何男子。假令一縷縛之。義不敢脫。勿復多慮。初翁下獄。拾得一鐵釘。竊置梁上。以爲萬不堪。用此自殺。亦是快適。又司獄給紙。翁用之甚約。以餘數十紙作小冊。又偶得一竹片五六寸許。「桶匠所棄之殘篋。時會爲回風所吹入。」嚼之爲筆。傷股取血。以錄所開發。狼毫白雀二録。血筆就緒者也。

阿部侯、尚翁を忍城に幽すること三年なり。「尚翁、壮歳のとき激昂、氣を負ふ。阿部侯に仕へ、諫の可れざるを以て、病を得て官を辞せんと欲す。是れより先災に罹り、家僕、銅器の火を経し者を拾ひ、之れを米苞に貯ふ。重さ二十貫可。翁、意へらく、「之れを負ひて地に投ぜば、必ず腰脚を傷つけん」と。輒ち梁上に升り、負ひて墜つ。」翁、獄中に在るや、毎旦水を請ひて浴し、未だ嘗て汗垢せず。自ら紙縷を作り布袍の裂けたるを補ひて、未だ嘗て虱を生ぜず。朝夕、食後に必ず獄中を匝り、約ね凡そ一里なり。精神、平日に減ぜず。一吏、巡警し、偶監人に謂ひて云ふ、「監守、当に戒嚴すべし」と。翁、之れを聞きて忿然として云ふ、「吾、何ぞ男子たるや。仮令一縷之れを縛するも、義敢て脱せず。復多慮する勿れ」と。初め、翁、獄に下るとき、一鉄釘を拾得し、竊かに梁上に置く。以為へらく、「万一堪へざれば、此れを用つて自殺せん。亦是れ快適なり」と。又、司獄紙を給す。翁、之れを用ふること甚だ約にして、以て数十紙を余し、小冊を作る。又、偶一竹片の五六寸許りなるを得「桶匠が棄てし所の残篋にして、時に会回風の為に吹き入れらる」、之れを嚼み筆と為し、股を傷つけて血を取り、以て開発する所を録す。『狼寛』・『白雀』の二録は血筆にて緒に就きしものなり。

○語注

【阿部侯幽二尚翁於忍城二三年】尚斎は、元禄三（一六九〇）年、忍藩阿部正武侯（在位慶安二「一六四九」年—宝永元「一七〇四」年）に仕え、次の藩主正喬によつて宝暦四（一七〇七）年から同六年まで、忍城に幽閉された。【米苞】米俵。【汗垢】「汗」は「汚」の別体。【未二嘗生二虱】「先生曰く、身に虱を生ずるの人は、一身を潔むることすら且く得ず。況や天下国家をや。吾、繫囚三年、曾て虱を生ぜず。」（『尚齋先生實紀上』）。【朝夕食後必匝二獄中一。約凡一里。】「獄に在ること凡そ三年、毎旦、水を乞ひて沐浴

し、布袍、綻び裂ければ紙縷を以て之れを補綴す。食後毎に必ず起行すること数百匝。守る者怪しみて嚴を加ふ。先生笑ひて曰く、「丈夫義を苟くも脱せず。然る所以の者は、脚疾に罹り膝行して刑に就き、人の笑ふ所と為るを恐るなり」と」（『甘雨亭叢書三』所収の『狼臆録』の「傳」）。【殘篋】「篋」は竹の皮。【回風】つむじ風。【狼臆】『狼臆録』。宝永六（一七〇九）年の自序がある。【白雀】『白雀録』宝永四（一七〇七）年の序がある。

▼八十七

尚翁翫味池直好。播磨某縣里正。翁嘗往宿。先是狐食二民戸老婆。其子哀恚莫二如レ之何。翁聞レ之作色急呼二直好云。狐食レ人。汝爲二里正。何忍レ坐二視之。蓋下速驅二境内狐二悉殺上レ之。詞氣甚厲。直好即令二伍保一發二鄉丁一。明日將レ狩。獵具皆備。其夜既半。翁寢所外有二敲レ戸者一。翁寢而聞レ之。乃報隣里川上一狐斃。呼兩三聲。其聲似レ人。亦非レ人。翁心怪。詰旦令二入視レ之。果川上有二狐死一。里人集觀。乃知是食レ婆之狐。實群狐畏二翁威武一。相集讎殺。翁令二屠戸割二剥其皮一。常藉レ之扣二狐皮一云。那厮亦善食二阿婆一爲。

尚翁の甥、味池直好は播磨某県の里正なり。翁、嘗て往きて宿る。是れより先、狐、一民戸の老婆を食ふ。其の子、哀恚すれども之れを如何ともする莫し。翁、之れを聞きて色を作し、急に直好を呼びて云ふ、「狐、人を食ふ。汝、里正為り。何ぞ之れを坐視するに忍ばん。蓋ぞ速やかに境内の狐を駆り、悉く之れを殺さざる」と。詞氣、甚だ厲し。直好、即ち伍保に令し、郷丁を發して明日將に狩らんとし、獵具皆備ふ。其の夜既に半ば、翁が寢所の外に戸を敲く者有り。翁、寢めて之れを聞く。乃ち報ずるに「隣里の川上に一狐斃

る」と。呼ぶこと兩三声。其の声人に似て、亦人に非ず。翁、心に怪しむ。詰旦、人をして之れを視しむるに、果して川上に一狐の死せる有り。里人、集まり觀て、乃ち是れ婆を食ふ狐なるを知る。実に群狐翁の威武を畏れて、相集り讎殺せしなり。翁、屠戸をして其の皮を割剥せしめ、常に之れを藉き狐皮を叩きて云ふ、「那厮、亦善く阿婆を食ふことを為さんや」と。

○語注

【尚翁甥】正しくは、尚齋の母違いの姉の孫。【味池直好】味池修居（元禄二「一六八九」年—延享二「一七四五」年）。儀平と称す。はじめ岩崎氏を冒した。直方、綱齋に学び、後尚齋の門人となった。一時唐津藩に仕えた。著書に『南狩録』がある。【里正】名主。【伍保】五人組。【那厮】無窮会平沼文庫所藏『先達遺事』の藤田畏齋の割記に「コイツト云コト」とある。

▼八十八

尚齋性不^レ傷^レ物。門人小子嘗捕^レ鼠。翁叱云。殺^レ之何益。生棄^レ之。唐彦明曰。余常侍^二師席^一。几案上有^二飯粘^一。雀下而哺^レ之。

尚齋、性、物を傷めず。門人の小子、嘗て鼠を捕らふ。翁、叱りて云ふ、「之れを殺すも何の益ぞ。生かして、之れを棄てよ」と。唐彦明、曰く、「余、常に師席に侍す。几案の上に飯粘有れば、雀、下りて之れを哺む」と。

○語注なし

▼八十九

佐藤子客「酒井侯」。侯歳餽「百金」。二十餘年。子不「敢辭」。三宅大不「可之」。佐藤從容云。丹治譏「吾。吾受「公金」。聊教「之作「美事」耳。

佐藤子、酒井侯に客たり。侯、歳に百金を餽^{おく}ること二十余年。子、敢て辭せず。三宅、大いに之れを不可とす。佐藤、從容として云ふ、「丹治、吾を譏^{そし}る。吾公金を受くるは、聊^{いさ}か之^これをして美事^なを作^なすを教ふるのみ」と。

○語注

【侯歳餽「百金」。二十餘年。】『佐藤先生年譜略』によれば、直方は元禄七（一六九四）年から享保三（一七一八）年まで、二十四年間、厩橋藩の酒井侯から年百金を与えられた。【聊教「之作「美事」耳】『清谷話録』の寛政三（一七九一）年の記録に次のようにある。「直方先生ノ酒井侯カラ廿六年百兩ツ、ノ合力ヲ得ラレタガ、何モ益ハミヘヌ。三宅先生力辭退シタラヨカロフト云ハレタレハ、直方ノ善ヲサスルノジヤ、コレニクレネハヲドリ子ニヤルト云ハレタ」。

▼九十

尚翁客「土佐」。未^レ幾遭「一名宰亡」。慨然云。事寢矣。遂去。「門人記「其首末」。曰「易退録」」

尚翁、土佐に客たり。未だ幾ばくならずして一名宰の亡するに遭ふ。慨然として云ふ、「事、寝む」と。遂に去る。「門人、其の首末を記して『易退録』と曰ふ」

○語注

【尚翁客^二土佐^一】『尚齋先生實記下』によれば、尚齋は享保六（一七二二）年四月土佐侯に招かれて、大名小路の江戸藩邸で『大学』、『小学』を講義した。【一名宰】山内規重。天和二（一六八二）年—享保六（一七二二）年。主馬と称し、畏齋と号した。土佐藩老。谷秦山の門人で後尚齋に学んだ。幼君豊常の大傳であった規重は、尚齋を師範として土佐藩に迎えるために尽力したが、享保六（一七二二）年に急逝した。【易退録】別名『南行録』。三宅尚齋門人編。

▼九十一

尚翁應^二土州之招^一來^二江戸^一。僮輿從僕甚盛。佐藤嘗詣^二尾藩一當路宅^一。主履一人携^二布囊^一而已。

尚翁、土州の招きに応じて江戸に来る。僮輿の從僕甚だ盛んなり。佐藤、嘗て尾藩の一當路の宅に詣る。主履一人、布囊を携ふるのみ。

○語注

【僮輿】僮はになう。【當路】重要な地位にあつて権力を握る。

▼九十二

佐藤子晩歳上^レ京。及^二東歸^一。尚齋致^二書於先君^一云。佐藤齒徳邵高。仁義忠信不^レ離^二於心^一。佐藤聞^レ之乃云。謂^レ吾至^レ此。渠亦長^二一格價^一。

佐藤子、晩歳京に上る。東帰するに及び、尚齋、書を先君に致して云ふ、「佐藤は齒徳邵（底本は邵）高、仁義忠信心に離れず」と。佐藤、之れを聞きて乃ち云ふ、「吾を謂ひて此に至る。渠も亦一格の価を長ぜり」と。

○語注

【佐藤子晩歳上^レ京】直方は亡くなる前年、享保三（二七一八）年七月に上京している。六十四の語注参照。
 【齒徳】年齢と徳行。【邵高】「邵」は固有名詞だけに用いられる文字であることから、「たかい」という意味の「邵」に改めた。

▼九十三

佐藤翁每^下至^二土井侯^一講談^上。侯必置^レ酒。左右嘗遺^レ置。談既酣。翁直命^二侍者^一。輒引^二一椀^一。又理^二前話^一。雄辯懸河。譬喻如^レ涌。侯不^レ覺前^レ席。

佐藤翁、土井侯に至りて講談する毎に、侯、必ず酒を置くも、左右嘗て置くを遺る。談、既に酣、翁、直

ちに侍者に命じて輒すなはち一椀を引き、又前話を理たづす。雄弁懸河、譬喩涌くが如し。侯、覺えず席すを前む。

○語注

【左右】君主の左右に仕えるそばつきの家来。【雄辯懸河】雄弁なさまを勢いよく流れる河の水にたとえた。

▼九十四

佐藤翁及坐談移レ時。不復端坐一。雖在封君坐一。亦復然。嘗在土井侯坐一。低語先人一云。欽案尤妙。善蔽盤坐一。

佐藤翁、坐談して時を移すに及ぶや、復端坐またせず。封君の坐に在りと雖も亦復然またなり。嘗て土井侯の坐に在りて、先人に低語して云ふ、「欽、案尤も妙なり。善く盤坐を蔽ふ」と。

○語注

【欽】感嘆詞。ああ。

▼九十五

長島侯「増山河州」清曠秀邁。一見佐藤。聞其玄談。斂レ枉讃述。及佐藤没。便延尚齋一。尚齋口談極周密。不レ曾清言一。河州於是レ有厭レ學意一。

佐藤講書。拔理於言表一。至訓詁事實一。則亦忽畧。尚齋在増山侯坐一。講中庸集畧一。尤詳密。字

字句句不_レ苟遺_一。每_レ至_二要領處_一。乃言此說本_二漢儒解_一。朱子又改正。文集有_二三說_一。語類初說爲_二未定_一。文會筆錄斷爲_レ可_レ據。淺見安正說如_レ此。佐藤直方論異_レ此。未_レ知_二孰是_一。更須_二商量_一。引證百端。亦無_二會心之妙_一。河州不_レ堪_二欠伸_一。遂厭_レ學。

長島侯「増山河州」は清曠秀邁なり。佐藤に一見して其の玄談を聞くや、枉_{えり}を斂_{ひきし}めて讃述す。佐藤の没するに及び、便_{すなは}ち尚齋を延_{まね}く。尚齋は、口談極めて周密、曾_{かつ}て清言せず。河州、是_{こゝ}に於て学を厭ふの意有り。佐藤の書を講ずるや、理を言表に抜き、訓詁事実に至れば則ち亦忽_{たちま}ち略す。尚齋の増山侯の坐に在るや、『中庸集略』を講ずること尤も詳密、字字句句、苟_いくも遺さず。要領の処に至る毎_{ごと}に、乃ち言ふ、「此の説は漢儒の解に本づく。朱子、又改正す。『文集』に二説有り。『語類』の初説は未定爲り。『文会筆録』、断じて拠るべしと爲す。浅見安正の説は此_かくの如し。佐藤直方の論は此れに異なり。未だ孰_{いづ}れか是なるを知らず。更に商量を須_またん」と。引証百端、亦_{また}会心の妙無し。河州は欠伸に堪へず、遂に学を厭ふ。

○語注

【長島侯「増山河州」】長島藩藩主、増山正任（延宝七「一六七九」年—延享元「一七四四」年）。藩主在位は宝永元（一七〇四）年から寛保二（一七四二）年。「河州」は河内守であったことによる。【中庸集略】朱子の『中庸輯略』【文集】『朱子文集』。正式には『晦庵先生朱文公文集』。正集百卷は一二三九年刊。以降、一二四五年に続集十卷、一二五〇年に続集附一卷、一二六五年に別集十卷が刊行された。【語類】『朱子語類』、一四〇卷。一二七〇年刊。【商量】はかり考える。

▼九十六

館林源公嘗語^二先君子^一云。昔與^二増山河州^一同寅。彼故僇僕。無^三一所^二推服^一。每^三話及^二佐藤直方^一。欽慕歎稱曰。古往今來誰得可^レ比。

館林源公、嘗て先君子に語りて云ふ、「昔、増山河州と同寅たり。彼、故より僇僕にして、一も推服する所無きも、話、佐藤直方に及ぶ毎に、欽慕歎称して曰く、「古往今來誰か得て比す可けんや」と。」と。

○語注

【館林源公】館林藩主松平武元（正徳三「一七一三」年—宝暦八「一七七九」年）。稲葉迂斎に学んだ。【同寅】同僚。増山正任と松平武元は一七三九年から一七四一年まで奏者番を同職している。【僇僕】才氣が群を抜いてすぐれているさま。

▼九十七

佐藤少在^レ洛。從^二垂加許^一回。賃房女衛方蹇^レ裳洗^レ足。佐藤入^レ足同^レ盤共洗。

佐藤、少きとき洛に在り。垂加の許より回る。賃房の女衛、方に裳を蹇^かけて足を洗ふ。佐藤、足を入れ、盤を同じくして共に洗ふ。

○語注

【女衛】衛はめしつかい。

▼九十八

有^レ二村儒^一問^レ佐藤^一。孔氏何故出^レ妻。佐藤居然云。不^レ保^三三千子中^一不^レ烝^レ之。

一村儒有り、佐藤に問ふ、「孔氏、何が故に妻を出す」と。佐藤、居然として云ふ、「三千子中、之れに烝せざることを保てず」と。

○語注

【出^レ妻】不詳。『韞藏録拾遺 卷之三 永井行達平日語』に「孔子、伯魚、子思、三代妻ヲ去ラレタ。外ノコトデハアルマイ。弟子衆ト大方ハ密通ヲシタデアラント云ヘハ、ワルロナト云ヘトモ実ニソフデアロフゾ。」とある。【三千子】「孔子、詩書礼樂を以て教ふ。弟子蓋し三千。」（『史記』孔子世家）。【烝】自分より身分の高い女と私通すること。

▼九十九

佐藤子言談多驚^二人聽^一。嘗議^三尹彦明誦^二佛經^一云。程門上足如^レ此。害^二名教^一實甚^二於寄猥^一。

佐藤子の言談は、多く人聴を驚かす。嘗て尹彦明の仏經を誦せるを議して云ふ、「程門の上足にして此くの如く名教を害すること、実に寄猥よりも甚だし」と。

○語注

【寄猥】夫が他人の妻に不義を行うこと。

▼百

三宅甚平尚齋弟。佐藤一日造^二其宅^一。見^下甚平臥^二爨側^一讀^レ書。以^レ足燃^上薪。乃云。寒進巧慧過^二阿兄^一。

三宅甚平は尚齋の弟なり。佐藤、一日其の宅に造りて、甚平が爨側^{さん}に臥して書を読み、足を以て薪を燃やすを見て、乃ち云ふ、「寒さ進む、巧慧^{かうけい}、阿兄に過ぐ」と。

○語注

【三宅甚平尚齋弟】三宅甚平は『尚齋先生實紀中』によれば尚齋の甥である。尚齋の弟は甚蔵と称し、寛文八（一六六八）年明石に生まれた。三宅甚平は甚蔵の長男で、元禄十六（一七〇三）年江戸に生まれた。母は菊池氏。甚蔵、甚平ともに久世候に仕えた。

▼百一

書肆竹村朴厚春直。嘗爲^二垂加監奴^一東行。日録^二驛路費^一。織悉不^レ遺。會丐夫犯^二垂加典^一乞^レ物。竹村輒投^二一錢^一。乃披^レ簿録云。一文丐兒。

書肆竹村は朴厚春直なり。嘗て垂加の監奴と為りて東行す。日に駄路の費を録すること纖悉にして遺さず。会丐夫、垂加の輿を犯して物を乞ふ。竹村、輒ち一錢を投じ、乃ち簿を披き録して云ふ、「一文丐兒」と。

○語注

【春直】「春」はゆつたりして、あくせくしないさま。【丐夫】こじき。

▼百二

多田維則從^二尚翁^一于京師^一。毎夜勵苦。至^二子時^一乃就^レ臥。一時溽暑不^レ安^レ寢。忽寐忽寤。便見一老婆長丈餘。白髮垂曳^レ地。兩眼如^レ鏡。對^二維則^一微笑。維則恐悸欲^レ呼^二同舍^一。不^レ能^レ發^レ聲。戰慄經^レ時。而婆尚在。維則不堪^レ之。輒拔^レ刀斬^レ之。翁聞^二客舍震動^一。明^レ燭往視^レ之。維則几上書既兩斷矣。後先君子與^二維則^一侍^レ翁。翁屢舉^二其魔^一以嘲^二維則^一。翁門學規極嚴。然師弟之間。每怡怡談戲。

多田維則、尚翁に京師に従ふ。毎夜勵苦して子の時に至りて、乃ち臥に就く。一時溽暑にして寢を安んぜず。忽ち寐ね忽ち寤む。便ち一老婆を見る。長丈余、白髮垂れて地に曳き、両眼鏡の如く、維則に対して微笑す。維則恐悸して同舍を呼ばんと欲すれども声を発する能はず。戰慄して時を経るに、而も婆、尚ほ在り。維則、之れに堪はず、輒ち刀を抜きて之れを斬る。翁、客舍の震動するを聞き、燭を明らかにして、往きて之れを視れば、維則の几上の書、既に両断す。後に先君子、維則と与に翁に侍す。翁、屢其の魔を挙げて以て維則を嘲る。翁の門は学規極めて嚴なり。然れども師弟の間は毎に怡怡として談戲す。

○語注

【溽暑】むし暑い。【恐怖】おそれおののく。【同舍】同じ家に住む人。【魘】夢でおそろしいものを見ておびえる。

▼百三

尚齋到^二東武^一。與^二先君子・小野崎舍人・井澤遠治^一遊^二墨水^一。田維則聞^レ之追至。相^二逢乎摠泉寺中^一。舍人謂^レ之云。子是不^レ速之客。維則乃云。敬^レ之終吉。舍人嘻嘻笑云。田生記^二得好的句^一。

尚齋、東武に到り、先君子・小野崎舍人・井澤遠治と墨水に遊ぶ。田維則、之れを聞き、追ひて至り、摠泉寺中に相逢ふ。舍人、之れに謂ひて云ふ、「子、是れ速^{まね}かざるの客」と。維則、乃ち云ふ、「之れを敬すれば終には吉なり」と。舍人、嘻嘻として笑ひて云ふ、「田生好的の句を記得す」と。

○語注

【尚齋到^二東武^一】『尚齋先生實記中』によれば、尚齋が幽囚を解かれて以降、江戸に下ったのは享保六（一七二一）年、同七年、同八年、元文元（一七三六）年の時である。【井澤遠治】井澤灌園（宝永二「一七〇五」年―宝暦五「一七五五」年）。名は剛中、字は子悦、号は強齋。播磨高砂の人。尚齋の弟子。京都に住んだ。【田維則】多田維則。【摠泉寺】現在の台東区橋場にあった禪宗の総泉寺のことと考えられる。【不^レ速之客】【敬^レ之終吉】「速^{また}かざるの客三人来る有り。之れを敬すれば終には吉なり。」（『易経』需）。

【田生】多田維則。

▼百四

先君子自_レ東如_レ京。從_二尚翁_一探_二諸勝_一。詣_二梵那_一。見_二紅梅樹_一。花少異。翁問是何樹。先君未_レ答。久米順利從_レ旁輒云。十兄「先君子俗稱_二十左衛門_一」。盍_二答言_一。既認吾州梅花。不_レ知彼都人士稱_二甚麼_一。便舉_二宗任故事_一。翁與_二先君子諸從者_一。拍_レ手大笑。

先君子、東より京に如_ゆき、尚翁に従ひて諸勝を探る。一梵那に詣_{いた}りて紅梅樹を見るに、花、少しく異なれり。翁、問ふ、「是れ何の樹ぞ」と。先君、未だ答へざるに、久米順利、旁より輒_{すなは}ち云ふ、「十兄「先君子、俗に十左衛門と称す」、盍_{なん}ぞ答へて言はざるや。」「既に吾州の梅花と認_かむ。知らず、彼の都の人士は甚麼_{なん}と称すか」と。と。便ち宗任の故事を挙ぐ。翁、先君子・諸の從者と手を拍ちて大いに笑ふ。

○語注

【先君子自_レ東如_レ京】『尚齋先生實紀中』によれば、迂齋が上京して尚齋に会ったのは、正徳元（一七一）年（迂齋二十八歳）、享保二（一七一七）年（迂齋三十四歳）、元文四（一七三九）年（迂齋五十六歳）。【久米順利】久米訂齋（元禄十二「一六九九」年―天明四「一七八四」年）。断次郎と称した。京の人。三宅尚齋の高弟。天資英敏、特に性理を論じては門人中随一であったと伝えられている。著書に『学思録』、『性命説』などがある。【甚麼】_{いふ}什麼に同じ。何。【宗任故事】源頼義によつて捕らえられて京都に連行された阿部宗任と宗任を嘲弄する殿上人との問答が『平家物語』百二十句本、劍の巻に次のようにある。「殿上人うち群れて「いざや、奥の夷を見ん」とて行かれけるに、一人梅の花を手折して、「やや、宗任。これ

はなにとか見る」と問はれければ、とりあへず、「わが国の梅の花とは見たれども大宮人はいかがいふらん」と申しければ、殿上人しらけてぞ帰られける。」

▼百五

久米順利在_レ洛。家尤貧。大歳日門人宇井弘篤至。順利不_レ在。待_二其還_一。順利出醉。路買_二茶甌十口_一。乃縛_二各五_一納_二之兩袖_一。歸至_二門外_一。見_二弘篤在_一。即欲_二急入_一。撞_二突門柱_一。甌皆毀碎。順利輒從_二袖中_一擲_二之背後_一。直入不_二復顧視_一。

久米順利、洛に在りて家尤も貧し。大歳の日、門人宇井弘篤至れども、順利在らず、其の還るを待てり。順利、出でて酔ひ、路に茶甌^お十口を買ひ、乃ち各五を縛りて之れを兩袖に納む。歸りて門外に至り、弘篤の在るを見るや、即ち急ぎ入らんと欲して門柱に撞突す。甌^{きさい}皆な毀碎す。順利、輒^{すなは}ち袖中より之^これを背後に擲^{なげ}ち、直ちに入りて復顧視せず。

○語注

【宇井弘篤】宇井黙齋（享保十「一七二五」年—天明元「一七八二」年）。字は信卿。小一郎と称した。唐津藩に仕えたが放逐され、その後京都で久米訂齋に学んだ。一時崎門から離れるが、再び、迂齋、剛齋、多田東溪らに学び、古河藩に仕えた。【甌】湯のみ茶碗。

▼百六

味池直好學「綱齋」。言動尤謹。嘗爲「漢津講官」說「靖獻遺言」。壹據「師言」。先君子戲之云。賢講解特詳細。但綱常民彝四字。經緯錯綜。何復鄭重。「綱常民彝」四字。綱翁以「此爲「口舌」」。「明日又講之。先君在「背後」聽。講畢乃呼「先君」云。訥訥爲「兄所」禁「遏綱常民彝」。舌本強澁。無「由」出「言」。

味池直好は綱齋に学び、言動尤も謹む。嘗て漢津の講官と爲り『靖獻遺言』を説くに、壹に師の言に拠る。先君子、之れに戯れて云ふ、「賢の講解は特に詳細なり。但し「綱常民彝」の四字は經緯錯綜す。何ぞ復鄭重なる」と。「綱常民彝」の四字は、綱翁此れを以て口舌を爲せり。「明日、又之れを講ず。先君、背後に在りて聴く。講畢はるや、乃ち先君を呼びて云ふ、「訥訥たり。兄の爲に「綱常民彝」を禁遏せられ、舌の本強く渋り、言を出すに由無し」と。

○語注

【爲「漢津講官」】「漢津」は唐津。味池直好が唐津藩の藩校盈科堂の講官であつたことについては、『先君子行實』十六參照。【賢】敬意をこめた二人称。【綱常民彝】「則於「彼此之間、天性民彝之善」。豈不「足」以交有「所」發、而增「夫三綱五典之重」。」（『靖獻遺言』）。

▼百七

味池直好沈靜厚重。無「高朗豪邁乃象」。佐藤子嘗題「其扇」云。磊磊落落。直好之功。

唐彦明與「余交。悉舉「在「西洞」所「會人物上」。彦明豪率。一無「推服」。但天木時中・味池直好・久米順利三人而已。時中雄爽。直好威重。順利理學。無「當時出「其右」者上」。彦明每在「先君子坐」。說「同門言行」。

如^三田維則爲^二齋長^一。稱呼亦甚輕漫。至^二直好之事^一。則話雖^二急卒^一。必以^二丈人行^一稱焉。余戲^レ之云。足下恭^二敬味池^一至矣。無^三乃生彦明畏^二死直好^一乎。先君爲^レ之大笑。

味池直好、沈靜厚重にして高朗豪邁の象無し。佐藤子、嘗て其の扇に題して云ふ、「磊磊落落、直好の功」と。

唐彦明の余と交はるに、悉く西洞に在りて会ふ所の人物を挙げ、彦明は豪率なれば、一も推服する無し。但^ただ、天木時中・味池直好・久米順利の三人のみ、時中の雄爽、直好の威重、順利の理学は当時、其の右に出づる者無し。彦明、毎に先君子の坐に在りて同門の言行を説く。田維則齋長爲るが如き、稱呼亦甚だ輕漫なれども、直好の事に至れば、則ち話急卒と雖も必ず丈人の行を以て称す。余、之れに戯れて云ふ、「足下の味池を恭敬すること至れり。乃ち生ける彦明、死せる直好を畏るる無^なれ」と。先君、之れが爲に大いに笑ふ。

○語注

【西洞】尚齋の学塾があつた場所。【齋】学舎。【丈人】徳のある長老に対する尊称。【無^三乃生彦明畏^二死直好^一乎。】「死せる諸葛、生ける仲達を走らしむ」（『十八史略』卷三 三国）によるか。

▼百八

赤井直義「綱齋門人」沈重寡黙。記性過^レ人。年八十。自^二親舊門客齒齡^一。至^二通家子弟名字^一悉暗記。凡應^二接事物^一尤周密。嘗臥病。偶懷^二鰻鱺炙^一。敕^レ僕云。就^二市店^一買^二鰻魚^一來。然豫貫串者死魚。更買^二生魚^一

頭^一。使^二之聶割^一。僕因^下路見^二楊花兒^一後^上レ期。遽買^二豫割者^一進^レ之。直義熟視而不^レ食。亦不^二訶責^一。子婦怪問。直義徐笑云。豈有^二一頭而二尾者^一耶。僕扣頭謝^レ罪。

赤井直義「綱齋の門人」、沈重寡黙にして記性^{きせい}人に過ぐ。年八十にして、親旧門客の齒齡より、通家^{つうか}の子弟の名字に至るまで悉く暗記す。凡そ事物に応接すること尤も周密なり。嘗て病に臥せるとき、偶^{たま}鰻鱺^{なまなれい}炙^いを懷^{おも}ひ、僕に勅^{いまし}めて云ふ、「市店^{いちみせ}に就きて鰻魚を買ひ来れ。然れども予め貫き串する者は死魚なり。更に生魚一頭を買ひ、之れを聶^{もつ}へて割^きかしめよ」と。僕、路に楊花兒を見て期^{とき}に後^{おく}れるに因りて、遽^{には}かに予め割きし者を買ひて、之れを進む。直義、熟視して食はざるも、亦訶責^{かやく}せず。子婦怪しみて問ふに、直義徐^{おもむ}に笑ひて云ふ、「豈^{あに}一頭にして二尾なる者有らんや」と。僕、扣頭^{こうとう}して罪を謝す。

○語注

【赤井直義】傳左衛門と称した。著書に『大學割記』がある。【親舊】親類とむかしなじみの友。【門客】居候。【通家】祖先の代から親しくつきあっている家。【鰻鱺】うなぎの通称。【楊花兒】無窮会織田文庫所藏渡辺豫齋『先達遺事割記』には「カラクリノコト」、無窮会平沼文庫所藏『先達遺事』の藤田畏齋の割記には「乞食デガイヲシテアルクモノ」とある。【扣頭】頭をたたみにつけておじぎする。

▼百九

到津中務少輔來^二江戸^一。受^二業於跡部宮内^一。一門生語^二宮内^一云。中務入^二先生門^一。尚好^レ觀^二雜戲^一。宮内云。此恐人所^レ誣。曰。非^レ誣實爲^レ然。曰。子何知^二其實^一。其人卒爾云。吾於^二戲場^一親見。宮内作^レ色云。

此子先犯矣。即日與^二人^一絶^レ交。

跡部氏關東朝士。與^二友部安崇^一俱講究。跡部受^二儒學^一於友部^一。友部學^二神道^一於跡部^一。二氏皆見^二佐藤先生^一。

到津中務少輔、江戸に來りて業を跡部宮内に受く。一門生、宮内に語りて云ふ、「中務、先生の門に入るも尚ほ雜戲を觀るを好む」と。宮内、云ふ、「此れ恐らくは、人の誣^しう所ならん」と。曰く、「誣うるにあらず。実に然りと為す」と。曰く、「子、何ぞ其の実なるを知るや」と。其の人、卒爾として云ふ、「吾、戲場に於て親しく見たり」と。宮内、色を作して云ふ、「此れ、子先づ犯せり」と。即日二人と交を絶つ。

跡部氏は關東の朝士なり。友部安崇と俱に講究す。跡部は儒學を友部に受け、友部は神道を跡部に学ぶ。二氏、皆佐藤先生に見ゆ。

○語注

【到津中務少輔】未詳。【雜戲】すぐろく、ばくちなどの遊び事。【誣】ありもしないことを事実のように言う。【卒爾】輕率なさま。

▼百十

友部安崇接^レ衆。怡怡戲笑。不^三復經^二情^一於去留^一。常注^二心^一於臍下^一。先君子云。去者不^レ追。來者不^レ拒。善戲謔不^レ爲^レ劇者。於^二安崇^一見^レ之。

友部安崇、衆に接するに怡怡として戲笑す。復情を去留に絰ず、常に心を臍下に注ぐ。先君子、云ふ、「去る者は追はず、来る者は拒まず。善く戲諱すれども劇を為さざる者は、安崇に於て之れを見る」と。

○語注

【不_三復經_二情於去留_一】相手にまかせて、頓着しないこと。【去者不_レ追。來者不_レ拒。】往く者は追はず、来る者は拒まず。【孟子『尽心章句下』。】善戲諱不_レ爲_レ劇【詩經『衛風の衛の武公をたたえる詩の中に「善く戲諱すれども虐を為さず」という一句があり、朱子は「善く戲諱すれども虐を為さず」とは、其の樂易にして節有るを言ふなり」と注釈している（『詩集伝』卷第三）。

▼百十一

江村萬藏「青山大膳亮臣江村如圭養子。尚齋門人。石川治平以_レ妹妻_レ之。因見_二尚齋_一。在_二門人之列_一。尚齋門下嚴禁_レ冒_二異姓_一。其嗣_二義家_一而後入_レ門者。興起復姓。爲_二門下第一義_一。而萬藏未_レ能_二脱然_一。」「養_二於如圭_一。冒_二其姓氏_一。一日見_二宇士新_一。話及_二宇氏家庭_一。因忽問。乃翁是公實父歟。士新直云。余家_句父無_二虛實_一矣。萬藏默然。

宇野三平名鼎。字士新。作_二姓氏解_一正_二譜系_一。玉壺集載_レ之。著_二論語考_一。有_二文集_一。曰_二明霞遺稿_一。其父三郎右衛門京師豪家。從_二角倉與市吏廂_一。司_二高瀬河運遭_一。徂徠送_二三平弟平介_一文曰。其家屬_二船司冠_一。兄弟讀_二書於篷窓之下_一。

江村万藏「青山大膳亮の臣、江村如圭の養子なり。尚齋の門人石川治平、妹を以て之れに妻はす。因りて尚齋に見

え、門人の列に在り。尚齋の門下、嚴に異姓を冒すを禁じ、其の義家を嗣ぎて後門に入る者は、興起して復姓せんこと門下の第一義とす。而して万蔵、未だ脱然たること能はず。」、如圭に養はれて、其の姓氏を冒す。一日、宇士新に見え、話宇氏の家庭に及ぶ。因りて忽ち問ふ、「乃翁は、是れ公の実父か」と。士新、直ちに云ふ、「余が家父に虚実無し」と。万蔵、默然たり。

宇野三平、名は鼎、字は士新。『姓氏解』を作りて譜系を正す。『玉壺集』に之れを載す。『論語考』を著す。文集有り、『明霞遺稿』と曰ふ。其の父三郎右衛門は京師の豪家なり。角倉与市の吏廂に従ひ、高瀬河の運遣を司る。徂徠の『三平の弟平介を送るの文』に曰く、「其の家は船司冠に属き、兄弟、書を簞窓の下に読む」と。

○語注

【江村萬藏】江村北海（正徳三「一七一三」年—天明八「一七八八」年）。名は綬。字は君錫。青山侯に仕え、致仕して後は他姓を冒していることを恥じて、敢て師とならず詩文を業とした。【青山大膳亮】宮津藩主青山幸秀（元禄九「一六九六」年—延享元「一七四四」年）。【江村如圭】江村如亭。宮津藩藩儒。父、江村毅庵、松岡玄達に学んだ。【石川治平】石川黙齋。名は元利。京都の人。【脱然】病氣、悪習などからさっぱりとぬけるさま。【宇士新】宇野三平（元禄十一「一六九八」年—延享二「一七四五」年）。名は鼎、字は士新。明霞軒と号した。京都の儒者。運漕業を営みながら、向井滄洲などに学んだ。【乃翁】人の父の呼称。【句】文章の切れ目につける符号。【姓氏解】二卷二冊。成立年不明。【玉壺集】未詳。【論語考】六卷六冊。【明霞遺稿】『明霞先生遺稿』。寛延元（一七四八）年、成立。八卷二冊。【其父三郎右衛門】未詳。【角倉與市】角倉家では角倉玄之以来代々「與一」を名乗っている。【徂徠】荻生徂徠（寛文六「一六六六」年—享保十三「一七二八」

年）。名は雙松。字は茂卿。江戸の人。古文辞学を提唱した。柳沢吉保に仕えた。著書に『弁道』、『論語徴』などがある。【送三平弟平介一文】三平の弟平介とは宇野士朗（元禄十三「一七〇〇」年—享保十六「一七三一」年）。兵介と称した。名は鑒。荻生徂徠に学んだ。『徂徠集』卷之十一の「贈于季子序」に「季子は履躋して來謁す。自ら謂ふ、「其の家は隸船の司空。仲と季と書を篷窓下に讀む」と。」という一節がある。【篷窓】船のまど。

▼百十二

宇士新簡默冲退。不_二妄與_レ人接_一。唐彦明就_レ之論_二文辭學_一。其間未_三嘗毀_二譽人_一。一日呼_二彦明_一。低聲云。物茂卿些_レ吝的意_レ在。

宇士新は簡默冲退にして、妄りに人と接せず。唐彦明、之れに就きて文辞学を論ずるに、其の間未だ嘗て人を毀譽せず。一日、彦明を呼びて、低声に云ふ、「物茂卿、些_{いささ}か吝_{いさ}かの意_い在_る」と。

○語注

【冲退】「冲」は「沖」の俗字。心をむなくしてへりくだる。【物茂卿】荻生徂徠。

▼百十三

東武一醫官携_二金若干_一以爲_レ贄。謁_二物茂卿_一。時平玄中「奥人。字子和。號_二金華_一。」以_レ文爲_レ贄謁_二門下_一。茂卿閱_レ文言。子文士哉。乃引_二上坐_一。顧謂_レ醫云。欲_レ入_二吾門_一。則作_レ文如_レ此而可也。奚須_二束脩_一爲。

東武の一医官、金若干を携へ以て贅と為して、物茂卿に謁ゆ。時に平玄中「奥の人。字は子和。金華と号す。」、文を以て贅と為して門下に謁ゆ。茂卿、文を閲して言ふ、「子は文士なるかな」と。乃ち上坐に引く。顧みて医に謂ひて云ふ、「吾が門に入らんと欲せば、則ち文を作ること此くの如くなれば可なり。奚ぞ束脩を須ゐることを為さん」と。

○語注

【平玄中「奥人。字子和。號「金華」。」】平野金華（元禄元「一六八八」年―享保十七「一七三二」年）。源右衛門と称した。陸奥の人。守山藩松平侯に仕えた。磊落にして才氣煥發、特に詩文にすぐれていた。【束脩】入門する時の進物。

▼百十四

有^レ人被^レ依^二野狐^一。巫祝百方祈^レ之不^レ驗。仁齋偶過^レ之。其人見^二仁齋^一。心神惕慍。回旋仆^レ地。狐精忽去。仁齋少^二闇齋^一十年。○仁齋杜^レ門讀^レ書。不^レ出^二書齋^一七年。父曰^二長澤屋長右衛門^一。家^二堀河^一鬻^レ材。仁齋終身不^レ易^二其居^一。以^レ誨^二書生^一。○仁齋嘗愛^二程氏易傳^一云。此是論語以來書。

人有^レり、野狐に依らる。巫祝、百方之れを祈れども驗あらず。仁齋、偶之れを過ぐ。其の人、仁齋を見るや心神惕慍し、回旋して地に仆れ、狐精、忽ち去る。

仁齋、闇齋より少きこと十年なり。○仁齋、門を杜ぢ書を読み、書齋を出でざること七年なり。父は長沢

屋長右衛門と曰ふ。家は、堀河にて材を鬻ぐ。仁齋、終身其の居を易へず。以て書生を誨ふ。○仁齋、嘗て程氏『易伝』を愛して云ふ、「此れは是れ『論語』以来の書」と。

○語注

【仁齋】伊藤仁齋（寛永四「一六二七」年—元文元「一七三六」年）。名は維楨、字は源佐。京都の人。朱子学を批判し、古学を唱えた。終生仕えず堀川の学塾で門人の教育にあたった。著書に『童子問』、『論語古義』などがある。【惕慍】「惕」はつつしむ、おそれる。【不_レ出_二書齋_一七年】仁齋は明暦元「一六五五」年、二十九歳の時、家を弟に託して松下町に隠棲し、学問に専心した。寛文二（一六六二）年に堀川の家に帰った。【長澤屋長右衛門】仁齋の父は諱長勝、字は七右衛門。「長澤屋」とは、伊藤家に養子に入ったら、仁齋の祖父了慶の本姓である「長澤」を屋号としたものか。【家_二堀河_一鬻_レ材】仁齋の家は商家であつたらしいが、その業種については不明である。【程氏易傳】程伊川の『易伝』。

▼百十五

物茂卿召侍_二丹楓殿_一。主上未_レ出。風憲巡_二警班列_一。諸人屏息肅敬。茂卿談笑如_レ在_二家_一。

物茂卿、召されて丹楓殿に侍す。主上、未だ出でず。風憲、班列を巡警し、諸人、屏息して肅敬すれども、茂卿の談笑すること家に在るが如し。

○語注

【風憲】風俗が乱れないようにとりしまる人。

▼百十六

物茂卿姿容清瘦。眼纖垂。神氣怡怡。愚^二弄^一一世學者^一。先君子少由^二一書僧^一往見。茂卿出接。頗禮貌。先君初意渠不^二必酬答^一。於^レ是待遇出^二意外^一。然以下其詆^二闇齋^一。謂^中佐藤淺見輩。初頭只除不^レ識^レ字。亦奚論^上學。後遂不^二相見^一。

茂卿謂^二先君子^一云。吾子嘗從^二佐藤三宅輩^一。彼們不^レ識^レ字。後生須^二要不^レ誤^二其學^一。

物茂卿、姿容清瘦、眼は纖垂、神氣怡怡たり。一世の學者を愚弄す。先君子、少きとき一書僧に由りて往きて見ゆ。茂卿、出でて接するに頗る礼貌あり。先君、初め意へらく、「渠、必ずしも酬答せざらん」と。是に於て、待遇意外に出づ。然れども、其の闇齋を詆り、「佐藤・淺見の輩は初頭只除字を識らず、亦奚ぞ學を論ぜん」と謂ふを以て、後、遂に相見えず。

茂卿、先君子に謂ひて云ふ、「吾子、嘗て佐藤・三宅の輩に従ふ。彼們字を識らず。後生其の學を誤らざるを須要す」と。

○語注

【只除】「只除是」。まさに。【彼們】彼等。【須要】しななければならない。

▼百十七

先君子資性無_二適莫_一。不_レ畏_二寒暑_一。不_レ好_二茶酒_一。不_レ嗜_二烟草_一。一味怡怡樂_二古人書_一。「自_二年十六始開_二講坐_一。至_二七十七歿年_一。旅次喪齋之外。未_三嘗一日不_レ爲_レ人講_レ書_一。」不_レ立_二奇說_一。不_レ做_二激節_一。而亦不_レ回_二護大關節義_一。

先君子、資性適莫無し。寒暑を畏れず、茶酒を好まず、烟草を嗜まず。一味怡怡として古人の書を楽しむ。「年十六にして始めて講坐を開いてより、七十七にして没する年に至るまで、旅次喪齋の外、未だ嘗て一日も人の為に書を講ぜざることあらず。」奇説を立てず、激節を做さず、而して亦大關節義を回護せず。

○語注

【無_二適莫_一】『論語』（里仁）。こだわりがなく、あっさりしている。【一味】ひたすら。

▼百十八

先君子簡易寡欲。性亦矍鑠。年過_二五十_一如_二京師_一。足著_二皮鞋_一。不_下以_二行旅_一爲_上心。入_レ洛之日到_二大津_一。始雇_二肩輿_一。門人疑東海五十三驛。未_三嘗一乘_二轎馬_一。至_レ此乘亦何意。先君笑云。今日至_二君邸_一。官人不_レ宜_二徒行_一。聊復隨_二人情_一耳。

先達遺事終

先君子、簡易寡欲にして、性亦矍鑠たり。年五十を過ぎて京師に如くに、足に皮鞋を著け、行旅を以て心

と為さず。洛に入るの日、大津に到りて始めて肩輿を雇ふ。門人、疑ふ、「東海五十三駅、未だ嘗て一たびも轎馬に乗らず。此に至りて乗るは、亦何の意ぞ」と。先君、笑ひて云ふ、「今日、君邸に至る。官人、宜しく徒行すべからず。聊か復人情に随ふのみ」と。

○語注

【年過五十一如京師】 迂齋は、享保十八（一七三三）年（迂齋五十歳）と元文四（一七三九）年（迂齋五十六歳）に大坂に藩主土井利実を迎えている。

▼百十九

道學之妙。在二一言半句之上。至二於經濟。亦只一舉措而已。英雄豪傑於レ是思過レ半矣。故道學云。經濟云。待二英雄。而后可レ得焉。待二豪傑。而后可レ行焉。此先達之所三以卓二越一世。而遺事之所二以寓レ意成レ編也。而其所レ得有二餘地。其所レ行有二閑暇。達而行レ道。窮而善レ身。道學經濟不レ異レ趣。而靜觀二於其風韻氣象。實妙道玄理之流。轉搖三動乎赤肉身上者。豈曰小二補之。哉。讀二斯編。者。且識レ之可也。始可二與言レ學。

明和四年秋九月

黙 齋 跋

大 阪 書 肆

心齋橋筋南久寶寺町

河 内 屋 八 兵 衛

道学の妙は一言半句の上に在り。經濟に至りては、亦只一举措のみ。英雄豪傑、是に於て思ひ半ばに過ぐ。故に道学と云ひ、經濟と云ひ、英雄を待ちて后得べく、豪傑を待ちて后行ふべし。此れ先達の一世に卓越する所以にして、遺事の意を寓して編を成す所以なり。而して其の得る所に余地有り、其の行ふ所に閑暇あれば、達して道を行ひ、窮して身を善くする。道学と經濟は趣を異にせず。而して静かに其の風韻氣象を觀れば、実の妙道・玄理の赤肉身上に流転揺動すること、豈之れを小補と曰はんや。斯の編を読む者、且く之れを識ること可なるや、始めて与に学ぶと言ふべし。

明和四年秋九月

黙 齋 跋

大 阪 書 肆

心齋橋筋南久宝寺町
河 内 屋 八 兵 衛

○語注

【思過^レ半】だいたいのがわかる。

参考文献

・山崎闇齋学派、および伊藤仁齋、荻生徂徠の著作

山崎闇齋

『垂加草』、日本古典学会編『山崎闇齋全集 第一卷』（ぺりかん社、一九七八年）所収

『神代卷講義』、平重道、阿部秋生校注『日本思想体系三九 近世神道論 前期国学』（岩波書店、一

九七二年）所収

『垂加社語』、同右

『藤森弓兵政所記』、近藤啓吾校注『神道大系 論説編十二 垂加神道（上）』（神道体系編纂会、一九八四年）の『風葉集首卷』三二三頁以下に所収

『山崎家譜』、谷省吾『垂加神道の成立と展開』（国書刊行会、二〇〇一年）所収

佐藤直方

『韞蔵録拾遺』、日本古典学会編纂『増訂佐藤直方全集 卷二』（ぺりかん社、一九七九年）

浅見綱齋

『綱齋先生語録』、近藤啓吾、金本正孝『浅見綱齋集』（国書刊行会、一九八九年）所収

『靖献遺言講義』、同右

『常話雜記』（若林強齋筆録）、同右

三宅尚齋

『狼毫録』、『甘雨亭叢書 三』、無窮会織田文庫所蔵、目録番号七〇四一、所収
『白雀録』、無窮会平沼文庫所蔵、目録番号九八六九

稲葉迂斎

『浜見録』、東北大学狩野文庫所蔵

『迂斎先生学話』、無窮会平沼文庫所蔵、目録番号九五一二。大倉山精神文化研究所服部文庫所蔵、目録番号四二。静嘉堂文庫所蔵、目録番号八四、四二。筑波大学附属図書館所蔵、目録番号
中央口 880-283。

稲葉黙斎

『先達遺事』、無窮会織田文庫所蔵、目録番号一六七三。文政十一年の刊本。三上是庵書き入れ本
『先達遺事』、無窮会平沼文庫所蔵、目録番号九五三四。藤田畏斎剞記付き
『三郎稿』、元倡寺所蔵『孤松全稿』一卷
『清谷話録』、慶応義塾大学斯道文庫所蔵

若林強斎

『雑話筆記』、近藤啓吾校注『神道大系 論説編十三 垂加神道（下）』（神道大系編纂会、一九七八年）所収

『若林家譜』、同右

三宅観瀾

『観瀾集』、『續々群書類従 第十三詩文部』（国書刊行会、一九一〇年）所収

植田玄節

『叛門論』、無窮会神習文庫所蔵、目録番号九五六四

渡辺豫斎

『先達遺事劄記』井東実勝録、無窮会織田文庫蔵、目録番号一六七四

『易退録』、無窮会平沼文庫所蔵、目録番号九八五九

伊藤仁斎

『近世儒家文集集成 第一卷 古学先生詩文集』（ぺりかん社、一九八五年）

荻生徂徠

『近世儒家文集集成 第三卷 徂徠集』（ぺりかん社、一九八五年）

・宋学、および中国思想古典

『和刻本漢籍二程全書附索引』（中文出版社、一九七九年）

朱子『大學』、『四書集註』（藝文印書館、一九六九年）所収

『中庸章句』、同右

『詩集伝』、四部叢刊三編（三）（上海書店、一九八五年）所収

『朱子語類』、黎靖德編 岡田武彦解題『和刻本朱子語類大全（二）』（中文出版社、一九七三年）

『朱子文集』（台湾商務印書館、一九六六年）

『太極圖說解』、西晋一郎、小糸夏次郎譯註『太極圖說・通書・西銘・正蒙』（岩波文庫・岩波書店、

一九八六年）

「小学題辭」、宇野精一『新釈漢文大系三 小学』（明治書院、一九六五年）所収

服部宇之吉校訂『漢文大系第一卷 大學説・大學章句・中庸説・中庸章句・論語集説・孟子底本』（富山

房、一九〇九年）

平岡武夫『全釈漢文大系第一卷 論語』（集英社、一九八〇年）

宇野精一『全釈漢文大系第二卷 孟子』（集英社、一九七三年）

市原亨吉、今井清、鈴木隆一『全釈漢文大系第一二卷 礼記上』（集英社、一九七六年）

鈴木由次郎『全釈漢文大系第十卷 易経下』（集英社、一九七四年）

赤塚忠『全釈漢文大系第十七卷 莊子』（集英社、一九七七年）

宇野精一『新釈漢文大系三 小学』（明治書院、一九六五年）

林秀一『新釈漢文大系二〇 十八史略（上）』（明治書院、一九八〇年）

宇野精一『新釈漢文大系五三 孔子家語』（明治書院、一九九六年）

吉田賢抗『新釈漢文大系八六 史記六 世家中』（明治書院、一九七九年）

星川清孝『新釈漢文大系七〇 唐宋八大家文読本（二）』（明治書院、一九七六年）

石川忠久『新釈漢文大系一一〇 詩経上』（明治書院、一九九七年）

石川忠久『新釈漢文大系一一一 詩経中』（明治書院、一九九八年）

石川忠久『新釈漢文大系一二二 詩経下』（明治書院、二〇〇〇年）

・神道

坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋校注『日本古典文学大系六七 日本書紀上』（岩波書店、一九八四年）

吉川惟足『神代卷惟足講説』、平重道校注『神道大系 論説編十 吉川神道』（神道大系編纂会、一九八

三年）

谷省吾『垂加神道の成立と展開』（国書刊行会、二〇〇一年）

・人名、伝記など

『日本道學淵源録』、岡田武彦・荒木見悟・町田三郎・福田殖編『楠本端山 碩水全集』（葦書房、一九

八〇年）所収

『日本道學淵源續録』、同右

『崎門學脈系譜』、同右

山田思淑『闇齋先生年譜』、関儀一郎編『日本儒林叢書 第三卷』（鳳出版、一九七一年）所収

水足安直『山崎先生行實』無窮会平沼文庫所蔵、目録番号九八八四

植田玄節『批水足安直撰山崎先生行實』、同右

稲葉默齋編『佐藤先生年譜略』、日本古典学会編纂『増訂佐藤直方全集卷一』（ぺりかん社、一九七九年）

所収

板倉勝明輯『綱齋淺見先生傳』、『甘雨亭叢書第二集』、立教大学大久保文庫所蔵 目録番号082 K16

21、所収

板倉勝明「觀瀾三宅先生傳」、五弓雪窓編『事実文編二』（関西大学出版・広報部、一九七九年）所収

山宮雪樓『尚齋先生實紀上』、無窮会織田文庫所蔵、目録番号一六三八

多田東溪『尚齋先生實紀中』（同右）

多田東溪『尚齋先生實紀下』（同右）

大高坂芝山『南學傳』、関儀一郎編纂『日本儒林叢書 第三卷』（鳳出版、一九七一年）所収

東條琴台『先哲叢談續篇 卷之三』、『近世文芸者伝記叢書 第四卷』（ゆまに書房、一九八八年）所収

近藤啓吾『増訂淺見綱齋の研究』（臨川書店、一九九〇年）

谷省吾『垂加神道の成立と展開』（国書刊行会、二〇〇一年）

源了圓、前田勉訳注『先哲叢談』（平凡社、一九九四年）

後藤陽一、友枝龍太郎校注『日本思想大系三〇 熊沢藩山』（岩波書店、一九七一年）

阿部隆一「崎門学派諸家の略伝と学風」、西順蔵、阿部隆一、丸山真男校注『日本思想大系三一 山崎闇

齋学派』（岩波書店、一九八〇年）所収

竹村寛一『漢学者伝記集成』（名著刊行会、一九七八年）

長沢規矩也監修『漢文学者総覧』（汲古書院、一九八三年）

小川恭一編著『江戸幕府旗本人名事典』（原書房）

『藩史大事典』（雄山閣）

『国史大辞典』（吉川弘文館）

・その他

金子光晴校訂『増訂武江年表1』（平凡社、一九七六年）

幕府普請奉行編、朝倉治彦監修『江戸城下変遷絵図集 第九卷』（原書房、一九八六年）

『京羽二重』、新修京都叢書刊行会『新修 京都叢書』第二卷（臨川書店、一九六九年）所収

今田洋三『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』（日本放送協会、一九八四年）

水原一校注『平家物語 上』（新潮社、一九七九年）

『平家物語 中』（新潮社、一九八〇年）

『平家物語 下』（新潮社、一九八一年）

高田眞治『漢詩大系一 詩経上』（集英社、一九八〇年）

高木正一『新訂中国古典選 唐詩選 下』（朝日新聞社、一九六六年）

目加田誠『新釈漢文大系七八 世説新語 下』（明治書院、一九八三年）

吉川幸二郎述、黒川洋一編『中国文学史』（岩波書店、一九七四年）

古賀英彦編著、入矢義高監修『禪語辞典』（思文閣出版、一九九一年）

駒澤大学内禪學大辭典編纂所『禪學大辭典 下巻』（大修館書店、一九七八年）

近藤春雄『中国学芸大事典』（大修館、一九八三年）

『角川日本地名大辞典』（角川書店）

岡秀友編『新装普及版 古寺名刹大辞典』（東京堂出版、一九九二年）

全国寺院大鑑編纂委員会『全国寺院大鑑 下巻』（法蔵館、一九九一年）

尚学図書編『故事 俗信 ことわざ大辞典』（小学館、一九八二年）

石田博編『故事成語 ことわざ事典』（雄山閣、一九七五年）

○『先達遺事』校合

〔底本〕…関儀一郎編『日本儒林叢書 第三巻』（鳳出版社、一九七一年）所収。

〔神習〕…無窮会神習文庫所蔵の写本。目録番号一三五一三の『孤松全稿』四巻所収。

〔新発田〕…新潟県新発田市立図書館所蔵の写本。目録番号V09、教書203。

▼一 〔底本〕…序あり 〔神習〕…（欠） 〔新発田〕…新発田本ではこの序は「先達遺事跋」として編の末にあり、その代わりに「題先達遺事」を載せる（※校合の末尾参照）。／〔底本〕…顧葉君之設「斯書」也。 〔新発田〕…顧

越君之設「斯書」也。／**底本**…恰如「坐」巖巖綺室」。**新發田**…如「恰坐」巖巖綺室」／**底本**…還「淵源於道德問學之實」矣。**新發田**…還「淵」源於道德問學之實」矣。／**底本**…葉君何其富饒。**新發田**…越君何其富饒。▼
 二**底本**…先達遺事**神習**…黙齋卷十二 先達遺事**新發田**…先達遺事初編／**底本**…武藏稻葉正信著**神習**…
 〈欠〉／**底本**…各自高「蹈物表」者。家傳語錄之外。**神習**…各自高蹈物表表家傳語錄之外。／**底本**…豈復
 思量所「能解」哉。**新發田**…非「亦思量所」能解」也。／**底本**…俛焉佔畢。**新發田**…帖括佔畢。／**底本**…
 不「致」思于斯「何也」。**新發田**…不「致」力于斯「何也」噫。▼三**底本**…播磨宋栗有「山崎村」。**神習**…播磨
 完栗有山崎村**新發田**…播磨完栗有「山崎村」。／**底本**…生「闇齋」。**新發田**…生「闇齋」云。／**底本**…母佐
 久間氏嘗訓「之云」。**新發田**…母佐久間氏常訓「之云」▼四**底本**…闇齋在「妙心寺」。**新發田**…闇齋入妙心寺。／
底本…聞「師藏」中峰廣錄」。**神習**…聞藏中峰廣錄。／**底本**…後閱「五燈會元」。「三日而終」業。**新發田**…〈欠〉
 ／**底本**…闇不「能」屈。**神習**…不能屈▼五**底本**…預以爲「快」。**神習**…豫以爲快**新發田**…文末に割注で
 以下の文が加えられている。「主閱「五燈會元」。「三日而終」業」▼六**底本**…頃之「主至」。**新發田**…頃之主
 至。／**底本**…權「興僧時中」。「時中即谷三介之父」**神習**…權興僧時中々々即谷三介之父。／**底本**…宗「親鸞
 門徒」。**新發田**…爲「親鸞門徒」／**底本**…野中兼山從「之讀」書。**新發田**…野中伯耆從「之讀」書。／**底本**…
 南人至「今爲」笑談」。**新發田**…南人至「今爲」話頭談」／**底本**…藏主出「妙心寺」入「汲江寺」。**神習**…藏
 主出妙心寺入呼吸寺。／**底本**…野中兼山時爲「檀家之最」。**新發田**…野中伯耆時爲「檀家之最」。／**底本**…
 因「一見藏主」甚異「之」。**新發田**…見「藏主」欽「其風骨奇異」。／**底本**…乃漸勸讀「聖典」。**新發田**…漸勸讀「
 聖典」／**底本**…及「至」讀「語類文集」。**新發田**…及「至」讀「語類文集等書」。／**底本**…時年二十四五。
新發田…年二十四五。／**神習**本は頭注なし。**新發田**本は「三都謂平安大坂江戸三都會也」のみ。▼七**底本**…
 翁方講談。**神習**…翁講談。／**底本**…金平掉慄。諸人失「色」。**新發田**…金平失色諸人掉慄▼八**底本**…心

緒惴惴如_レ下獄。神習…心緒惴々惴如下獄。新発田…心緒惴々如_レ下獄。底本…及_二退出_一戸。新発田…退及_レ出戸。▼九 底本…佐藤直方因_二永田養菴_一見_二垂加翁_一。新発田…佐藤直方因_二永田養安_一見_二垂加翁_一。底本…佐藤直方因_二永田養菴_一見_二垂加翁_一。汝嘗讀何書。底本…因顧_二養菴_一曰。新発田…因顧_二養安_一曰。底本…直方大懷_二耻慨_一。神習…直方大懷慨。底本…翁叱投_二金平_一。金平開_レ卷誦_二序文_一。神習…翁叱投_二金平_一々々開_レ卷誦_二序文_一。▼十 底本…師亦殆是刻薄在。神習…師亦刻薄在。底本…若久_レ之勢應_レ至_レ死。新発田…久則勢應_レ至_レ死。▼十一 異同なし。▼十二 異同なし。▼十三 底本…永田養菴至。新発田…永田養安至。▼十四 底本…此二人不_レ應_二公之招_一。新発田…此一人不_レ應_二公之招_一。底本…野野宮中將。神習…野々宮中將。新発田…野々宮中將。底本…檀中將。底本…加藤美作守。新発田…加藤遠州。底本…井上河内守。新発田…井上河州。底本…檀元眞。桑名松雲。檜崎正員。新発田…植七郎左衛。檜崎忠右衛門。底本…永田養菴。新発田…永田養安。▼十五 底本…翁召_二正員_一。正員唯而起。神習…翁召_二正員_一々々唯而起。底本…翁詈云。新発田…翁叱云。▼十六 底本…翁服_二葛盤坐_一。神習…翁服_二葛盤坐_一。底本…彼總角者清八「重遠小字。後改_二丹三郎_一」。耶。新発田…彼總角者清八耶「重遠小字後改_二丹三郎_一」。底本…聞汝穎敏。新発田…嘗聞汝穎敏。▼十七 異同なし。▼十八 底本…有司細大咨_二稟翁_一。翁所_レ命一器巨大難_レ出門。神習…有司細大咨稟翁々所命一器巨大難出門。▼十九 底本…終身。新発田…終身。▼二十 底本…葵祭。新発田…「葵祭鴨社之祭」の頭注がある。底本…質_二之垂加翁_一。神習…質垂加翁。底本…即投_二祐之_一。祐之退熟_二讀其所_二改正_一。神習…即投祐之々々退熟_二讀其所_二改正_一。底本…翁輒援_レ筆。新発田…翁援_レ筆。底本…且讀且批。新発田…且讀且批（ただし、送り仮名は且ッ）。▼二十一 異同なし。▼二十二 底本…「下御靈神職」。神習…（欠）／底本…既已會得。新発田…既已會得。底本…時民部侍_レ側。新発田…民部時

侍側／**底本**…斂容逡巡且哂云。**新發田**…斂容逡巡且哂云／**底本**…世豈有下若二先生一兒上哉「民部下御靈神職」／**底本**…翁嘗言。**新發田**…翁嘗云／**底本**…而大史奏二客星之變一。**新發田**…而奏下客星犯二帝坐一之急上／**底本**…頭注 一位號風水軒白玉翁姓藤原諱公通**新發田**…〈欠〉／**底本**…吾輩學之成期二何日一。**新發田**…學之成期二何日一／**底本**…因有レ所二云云 得二共閱一也。**神習**…因有所云得共閱也**新發田**…因有レ所二云云一得二共閱一也／**底本**…余友村士行藏藏二一本一／**底本**…盤齋得二之玉木葦齋一。**神習**…得二之玉木葦齋一／**底本**…葦齋得二之正親町一。**神習**…得二之正親町一／**底本**…唐崎淡路曾祖曰二定信一。**神習**…唐崎淡路曾祖曰二定信一／**底本**…至今嚴盟。**神習**…本文に「至今嚴命」とあり頭注で「盟」と修正。／**底本**…而永田養菴有レ見二於道學一。**新發田**…而永田養安有レ見二於道學一／**底本**…梨木祐之有レ發二於神道一。**新發田**…梨木祐有レ發二於神道一／**底本**…謝罪於神靈一。**神習**…謝罪於於神靈／**底本**…唐彦明嘗見二玄節義男伊助一。伊助云。**神習**…唐彦明嘗見玄節義男伊助々々云 ▼二十三 **底本**…頭注 頭巾與禮冠不同燕服也遇人以脫之爲禮**神習**…〈欠〉／**底本**…永田養菴亦在。**新發田**…永田養安亦在／**底本**…目二左右一呼二養菴一。**新發田**…目二左右一呼二養安一／**底本**…云好天氣好天氣。**神習**…云好天氣々々々々**新發田**…云好天氣々々々々 ▼二十四 異同なし ▼二十五 **底本**…因二吉田公効一之。**神習**…因吉田侯効之／**底本**…我邦教二日神之道一。**新發田**…我邦教二日神之道一／**底本**…如二垂加故事一。**神習**…加垂加故事／**底本**…後妣自織二木綿布一以贈レ翁。**新發田**…帰レ家後妣自織二木綿布一以贈レ翁 ▼二十六 **底本**…永田養菴云。**新發田**…永田養安云／**底本**…尹彦明印子蚤。**新發田**…尹彦明印子蚤／**底本**…多類レ此。**神習**…類此／**底本**…養菴爲レ人亦只會點底。**新發田**…養安爲レ人亦只會點底。／**底本**…養菴多整頓了。**新發田**…養安多整頓了 ▼二十七 **底本**…南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。**神習**…南無阿彌陀佛々々々々々々々々／**底本**…三位下賀茂神職。**新發田**…三位名祐之。下賀茂神職／**底本**…著二

日本逸史及大八洲記^一。新発田^二著^三日本逸史及大八洲記^一史浅井氏序^レ之記自序焉。／底本^二議論明決。

新発田^二議論明決。在下同門學^三神道者中^上爲^三魁首^一。▼二十八 異同なし ▼二十九 底本^二春原民部謁^一垂加翁^レ問^レ敬。神習^二春原民部謁垂加翁^一／底本^二且見^三直方^一扣^レ之。新発田^二且見^三直方^一扣^レ之／

底本^二更著^三禮服^一。新発田^二更著^三禮服^一／底本^二往訪^三佐藤^一。佐藤時^二有^三微疾^一。神習^二往訪^三佐藤^一々々

時^二有^三微疾^一／底本^二思念良久乃云^一。新発田^二思念良久乃云^一／底本^二且學^三神道^一。新発田^二且學^三神道^一

▼三十 底本^二福山永田養菴其人^一。新発田^二福山永田養菴其人^一／底本^二必問養菴無^レ恙不^一。新発田^二必問養菴無^レ恙不^一

問養菴無^レ恙不^一 ▼三十一 底本^二汝不^三判得^一。神習^二汝不^三判讀^一／底本^二初松雲與^三石川又新菴^一入^三仕公^一。公及^三偶信^一從鐵牛禪師^一。神習^二初松雲與^三石川又新菴^一入仕公々及偶信從鐵牛禪師／底本^二頭注 尚齋門人有石川治平者即又新菴子 神習^二欠^一／底本^二公及^三偶信^一從鐵牛禪師^一。新発田^二公偶及^レ信^三從鐵牛禪師^一／底本^二獻^三之西山公^一。公因辟^三觀瀾^一。觀瀾薦^三栗山於公^一。神習^二獻^三之西山公々因辟觀瀾々々薦栗山於公 ▼三十二 底本^二野中兼山才性絶^レ人。新発田^二野中伯耆兼山才性絶^レ人／底本^二其人衝衡抗論。神習^二其人衝々抗論 新発田^二其人衝^レ抗論／底本^二爲^三野中^一與^三闇齋^一牴牾。新発田^二爲^三野中^一與^三闇齋^一牴牾牴牾／底本^二闇齋嘗云。神習^二闇齋云^一／底本^二不^三心名家^一。神習^二不必名家 新発田^二不^三必爲^三名家^一 ▼三十三 底本^二時中使^三子三介從^三學野中兼山^一。新発田^二時中使^三子三介從^三學野中伯耆^一／底本^二遣^三少頃田^一給焉。新発田^二遣^三少頃田^一給焉 ▼三十四 底本^二野中兼山 新発田^二野中伯耆^一／底本^二爲^三甚難^一得。得者至寶焉。神習^二爲^三甚難得々者至寶焉^一／底本^二乃託^三三介^一令^三硯工磨^レ之。神習^二託三介令硯工磨之^一／底本^二將^レ冠^三其兒^一。神習^二將其兒 ▼三十五 底本^二加以^三佐藤俊異快爽^一。新発田^二加之^三佐藤俊異快爽^一 ▼三十六 底本^二醫者坊主醫者坊主。神習^二醫者坊主々々々々／底本^二伯道徹受^一醫術於山脇道立^一 神習^二伯道徹受醫術於山脇道玄^一／底本^二雖^レ嗣^三其家^一 神習^二雖^レ其家^一（頭注で「嗣」を

補う) / 底本…齷齪 新発田…齷齪 / 底本…達旦而還。還便教二授學者。神習…達旦而還々便教授學者 / 底本…舉稱二其孝一 新発田…共稱二其孝一 ▼三十七 異同なし。ただし新発田本は「翁嘗言」以下が割注になっている。 ▼三十八 底本…雁腐爲蛆。蛆猶北飛。神習…雁腐爲蛆々猶北飛 / 底本…講義非也。旁通通考是。故事在二大全一。新発田…講義不レ宜旁通爲レ是故事在二大全一 / 底本…旁通通考是。神習…旁通々考是 ▼三十九 底本…聽徒又一扣頭。神習…聽徒又一扣頭 / 底本…努力謁師。師故嚴厲。神習…努力謁師々故嚴厲 / 底本…然尚無レ有「怨意」 新発田…而師無レ有「怨意」 / 底本…雖有「小疾」而必到。師二無レ所「憐撫」一。新発田…雖有「小疾」無レ不「必到」師暑不「勞顧」 / 底本…豈趨伊川門前雪哉。新発田…豈趨伊川門前三尺雪哉。 ▼四十 異同なし ▼四十一 底本…綱翁貧特甚。一時乃至三嚴冬尚無二一布袍一。新発田…綱翁貧屢一時寒無レ衣 / 底本…會若林母贈二一衣於新七一。新発田…若林母贈二新七一衣一 ▼四十二 底本…輿謗邪許。新発田…輿謗邪許 / 底本…給二瞻家貲一 新発田…給二瞻家貲一 / 底本…易實 新発田…易實 / 底本…仙洞亦屢稱二翁姓名一。神習…洞亦屢稱翁姓名 ▼四十三 底本…進レ翁。翁素健啖。神習…進レ翁々素健啖 ▼四十四 底本…身著二小襦一 新発田…身著二小襦一 / 底本…若林每戴レ星出 新発田…若林每戴レ里出 ▼四十五 底本…自制二喪服一 新発田…自制二喪服一 着レ之 / 底本…著二靈黹一頂二圓笠一 新発田…著二靈黹一頂二圓笠一 ▼四十六 底本…吾視二諸侯城堞以二聖土一塗者。新発田…吾視二諸侯城堞以二聖土一塗者。 ▼四十七 底本…伊勢谷川士清亦就レ之學。新発田…伊勢谷川氏亦就レ之學 / 底本…士清字公介。新発田…谷川氏名士清字公介 ▼四十八 異同なし ▼四十九 異同なし ▼五十 異同なし ▼五十一 異同なし ▼五十二 異同なし ▼五十三 底本…即日登レ道還二京師一。神習…○即日登道還京師 ▼五十四 異同なし ▼五十五 異同なし ▼五十六 底本…赤穂遺臣襲二吉良氏一殺レ之。新発田…赤穂遺臣襲二吉良氏一殺レ之「事詳二義臣傳」 / 底本…何得レ爲二義士一。

神習…何爲義士／
 又奚憂 神習…又爰憂 新発田…無二亦所レ憂三後人一 ▼五十七 底本…鳴瀧 新発田…頭注 鳴瀧京師地名
 底本…雷震號號 神習…雷震號々 ▼五十八 異同なし ▼五十九 底本…快活脱洒 新発田…開活脱洒
 ▼六十 底本…彦根侯禮ニ待佐藤翁一 新発田…彦根侯禮ニ待佐藤翁／
 一事上。乃云。 新発田…唯乗レ轎到ニ廳事砌下一 事不レ辭云 ▼六十一 底本…唯不レ辭下乗レ轎到ニ廳事砌下一
 底本…振レ衣云蚤蚤 神習…振レ衣云蚤々 ▼六十二 異同なし ▼六十三 異同なし ▼六十四 底本…野
 田德勝・永井行達俱謁云。 神習…野田勝德永井行達俱謁云 ▼六十五 底本…不レ獲レ已出馬。 神習…不
 得止出馬 ▼六十六 底本…謀ニ之永井行達一。行達甚不三可之。 神習…謀ニ之永井行達々々甚不可之／
 以告レ翁。翁直云。 神習…以告翁々直云 ▼六十七 異同なし ▼六十八 底本…俗稱ニ莊右衛門一 神習…
 「俗稱莊衛門」 ▼六十九 異同なし ▼七十 底本…若路逢下害ニ夥伴一者上。 神習…若路逢害夥伴 ▼七
 十一 底本…悉遺ニ其書籍衣服器用一。 神習…悉遺其衣服書籍器用 ▼七十二 異同なし ▼七十三 異同
 なし ▼七十四 異同なし ▼七十五 底本…嘗從ニ侯祇ニ役駿府一。 新発田…嘗從ニ侯祇ニ役駿府 ▼七十
 六 異同なし ▼七十七 底本…攢眉云。 神習…憤眉云。／
 莫如怒罵捶撻 新発田…然莫下如ニ怒罵答鞭一何上。 底本…撞撞續ニ前話一。 神習…撞々續前話 ▼七十八
 底本…數會ニ茶人。人每稱ニ其饌具精辨一。 神習…數會茶人々每稱其饌具精辨 ▼七十九 異同なし ▼八
 十 底本…吾酬ニ酢郷黨族人一。 神習…吾酬酢郷黨俗人 ▼八十一 底本…然亦口未ニ嘗言一。 新発田…然亦
 口未レ言 ▼八十二 底本…亦不ニ細事一。 新発田…不ニ亦細事一 ▼八十三 底本…喫來充饑是天理。 神習…
 喫來充饑是理 ▼八十四 底本…老兄殆亦不レ可至レ此。 新発田…老兄殆不ニ亦可レ至レ此 ▼八十五 底本…
 夫亦得ニ薄助一。 新発田…父亦得ニ薄助一／
 底本…大喜以告レ翁。翁不ニ敢應一。 神習…大喜以告翁々不敢

應 ▼八十六 底本…阿部侯 新發田…阿部侯／底本…欲得病辭_レ官。 新發田…將得病辭_レ官／
 底本…輒升_二梁上_一 神習…輒升渠上／底本…負而墜。 新發田…負而墜。或云此時事／底本…偶請_二監
 人_一云。監守當_二戒嚴_一。 新發田…偶言_二監人_一云須_二嚴密監守_一。／底本…翁聞_レ之忿然云。 神習…翁聞_レ
 之然云／底本…用_レ此自殺。 神習…用之自殺／底本…又司獄給_レ紙。 新發田…又司獄給_レ紙／底本…
 又偶得_二一竹片五六寸許_一。〔桶匠所棄之殘蔑。時會爲_二回風_一所吹入。〕 新發田…又會_二回
 風轉_一送籜竹殘瑣_一 齧_レ之爲_レ筆／底本…時會爲_二回風_一所吹入。 神習…時爲_二回風_一所吹入／底本…傷_レ
 股取_レ血。以錄_レ所_二開發_一 新發田…傷_レ股取_レ血錄_レ所_二開發_一 ▼八十七 底本…乃知是食_レ婆之狐。 新發田…
 乃知是所_二食_一老婆_一之狐。／底本…相集_二讎殺_一。 新發田…相集報_レ讎。／底本…翁令_二屠戶割_一剥其皮_一。
 新發田…翁令_二屠戶割_一剥其皮_一。／底本…常藉_レ之扣_二狐皮_一云。 神習…常藉_レ之控扣_二狐皮_一云 ▼八十八 底本…
 門人小子嘗捕_レ鼠。翁叱云。 新發田…門人小子或捕_レ鼠則叱云。／底本…殺_レ之何益。 新發田…殺_レ之何
 爲。 ▼八十九 底本…佐藤子客_二酒井侯_一。 侯歲餽_二百金_一。 神習…佐藤子客_二酒井侯_一々々歲餽_二百金_一 新發田…
 佐藤子客_二酒井侯_一。 〃歲餽_二百金_一／底本…丹治譏_二吾_一。吾受_二公金_一。 神習…丹治譏_二吾_一々々受_二公金_一 ▼九十
 異同なし ▼九十一 底本…尚翁應_二土州之招_一來_二江戶_一。 神習…尚齋應_二土州之招_一來_二江戶_一／底本…僮輿從
 僕甚盛。 新發田…僮輿從僕甚盛_一 ▼九十二 異同なし ▼九十三 底本…佐藤翁每_下至_二土井侯_一講談_上。
 新發田…佐藤翁每_下至_二土井侯_一講談_上。／底本…侯必置_レ酒。 新發田…侯必置_レ酒。／底本…侯不_レ覺前_レ
 席。 新發田…侯不_レ覺前_レ席。 ▼九十四 底本…嘗在_二土井侯坐_一。 新發田…嘗在_二土井侯坐_一。 ▼九十
 五 底本…長島侯〔増山河州〕 新發田…長嶋河州牧。／底本…便延_二尚齋_一。尚齋口談極周密。 神習…便
 延尚齋々々口談極周密／底本…尚齋在_二増山侯坐_一。 新發田…尚齋在_二増山侯坐_一／底本…字字句句不_二
 苟遺_一 神習…字々句句不苟遺／底本…亦無_二會心之妙_一。 新發田…無_二亦有_一會心之妙_一 ▼九十六 異同

なし ▼九十七 異同なし ▼九十八 底本…不_レ保三千子中不_レ烝_レ之。 神習…不_レ保三千子中不_レ烝_レ之。佐藤子言 ▼九十九 異同なし ▼百 底本…以_レ足燃_上薪。 新発田…足燃_上薪 / 底本…乃云。 神習…
 〈欠〉 ▼百一 底本…一文丐兒 新発田…一文於_二某處_一與_二丐兒_一 ▼百二 底本…後先君子與_二維則_一侍_レ翁。翁屢舉_二其魔_一以嘲_二維則_一。 神習…後先君子與_二維則_一侍翁々屢舉其魔以嘲_二維則_一 ▼百三 底本…舍人嘻嘻笑云。 神習…舍人嘻嘻笑云 ▼百四 異同なし ▼百五 異同なし ▼百六 底本…但綱常民彝四字。 神習…但綱直常民彝四字 / 底本…綱翁以_レ此爲_二口舌_一。 神習…綱翁以是爲_二口舌_一 / 底本…訥訥爲_二兄所_レ禁過綱常民彝。 神習…訥々爲_二兄所_レ禁過綱常民彝 ▼百七 底本…佐藤子嘗題_二其扇_一云。 神習…佐藤子嘗題云 / 底本…磊磊落落。 神習…磊々落落 / 底本…說_二同門言行_一。 神習…說_二同文言行_一 / 底本…如_三田維則爲_二齋長_一。 新発田…如_三田維則爲_二舍長_一 ▼百八 異同なし ▼百九 底本…友部學_二神道於跡部_一。 神習…學_二神道於跡部_一 ▼百十 異同なし ▼百十一 底本…其嗣_二義家_一而後入_レ門者。 新発田…嗣_二義家_一而後入_レ門者 / 底本…養_二於如圭_一。 神習…養_二如圭_一 / 底本…句 新発田…〔勺〕 / 底本…司_二高瀬河運漕_一。 神習…司_二高瀬河運漕_一 / 底本…兄弟讀_二書於蓬窓之下_一。 新発田…兄弟讀_二書於蓬窓之下_一。 ▼百十二 底本…唐彦明就_レ之論_二文辭學_一。 新発田…唐彦明就_レ之論_二文字学_一 / 底本…物茂卿些吝の意在。 新発田…物茂卿些吝在 ▼百十三 異同なし ▼百十四 異同なし ▼百十五 底本…物茂卿召侍_二丹楓殿_一 新発田…物茂卿召侍_二丹楓殿_一〔在_二江城中_一〕 / 底本…主上未_レ出。 新発田…上未_レ出。 ▼百十六 異同なし ▼百十七 底本…不_レ畏_二寒暑_一。 神習…不_レ異寒暑 / 底本…而亦不_レ回_二護大關節義_一。 新発田…不_レ亦回_二護大關節義_一 ▼百十八 底本…不下_二以_レ行旅_一爲_二心_一。 神習…不以_レ行旅_一 / 底本…未_三嘗_一一乘_二驕馬_一。 新発田…未_三嘗_一一乘_二驕馬_一 / 底本…聊復随_二人情_一耳。 神習…聊随_二人情_一耳 / 底本…先達遺事終 新発田…先達遺事初編 ▼百十九 底本…英雄豪傑於_レ是思過_レ半矣。 新発田…英雄豪傑於_レ是占_二地歩_一領_二分數_一 / 底本…

故道學云。經濟云。新発田…故曰「道學」曰「經濟」／底本…此先達之所_三以卓_二越_一一世_一。新发田…此先達之所_三以卓_二越_一諸儒_一。／底本…黙齋跋新发田…黙齋 越正信／底本…大阪書肆 心齋橋筋南久寶寺町 河内屋八兵衛新发田…（欠）／新发田本は跋として底本の序をあげ（この校合は序で行った）、そのあとに「書「先達遺事後」」と題して▼百十九の文を載せている。

※新発田本

題先達遺事

先達遺事成矣示_レ余曰序焉余退而思_一其言_一以爲載籍世而有_レ之殷人不_レ知周而足矣周人豈得_レ不_レ監_二于殷_一邪居_二今之世_一而學_二古之道_一事多_二於古人所_レ爲苟不_レ得_二其要領_一而取捨_甲則何以有_レ成然至_乙其合_二心契於千載_一存_二目擊於萬里_一者釣_レ深致_レ遠談豈容易只得_二其人_一也千古且暮左右逢_二其原_一得_二之不言之符_一焉耳矣若夫皮相而矜_二影響_一則非_二彼糟粕者_一乎如_二此編_一凜烈龍精識者一望_レ之即知_二其非常_一豈待_二余言_一哉豈待_二余言_一哉文武之道在_レ人則得_二其人_一亦將不_レ止_レ斯矣尚以_二二編三編者_一繼_レ之亦足_二以_一發_一

明和丁亥夏

東都 河善

先達遺事に題す

先達遺事成る。余に示して曰く「序せよ」と。余、退きて其の言を思ふ。以為_{おも}へらく、載籍_{さくせき}世にして之れ有り。殷人、周を知らずして足る。周人、豈_{あに}殷に監みざるを得んや。今の世に居りて古の道を学

ぶ、事、古人の為す所より多し。苟くも、其の要領を得て取捨せずんば、則ち何を以て成ること有らん。然れども、其の心契を千載に合し、目撃を万里に存する者に至りては、深きを釣り遠きを致す談、豈容易ならんや。只其の人を得るや千古・旦暮、左右に其の原に逢ふも、之れを不言の符に得るのみ。若し、夫れ皮相にして影響に矜らば、則ち彼の糟粕なる者に非ずや。此の編の如き凜烈たる龍精は、識者、一たび之れを望めば即ち其の非常を知らん。豈余が言を待たんや。豈余が言を待たんや。文武の道、人に在るときは、則ち其の人を得んも、亦將た斯に止まらず。尚ほ二編、三編なる者を以てこれに繼がば、亦以て発するに足れり。

明和丁亥夏東都河善

○語注

【載籍】書物。【釣レ深致レ遠】「蹟れるを探り隠れたるを索め、深きを鉤し遠きを致し、以て天下の吉凶を定め、天下の臺臺を成す物は、著龜より大なるは莫し。」（『易経』繫辞伝上）。【左右逢】「孟子曰く、君子の深く之れに造るに道を以てするは、其の之れを自得せんことを欲すればなり。之れを自得すれば、則ち之れに居ること安し。之れに居ること安ければ則ち之れに資ること深し。之れに資ること深ければ、則ち之れを左右に資りて其の原に逢ふ。故に君子は其の之れを自得せんことを欲するなり。」（『孟子』離婁下）。【明和丁亥】明和四（一七六七）年。【河善】河本仲遷。名は善、三左衛門と称した。迂斎の門人。丸亀藩士。

十 稲葉默齋『墨水一滴』

長野 美香 解題・注釈・校合

○『墨水一滴』解題

(一)『墨水一滴』の成立について

稲葉默齋（享保十七「一七三二」年—寛政十一「一七九九」年）は、佐藤直方の著作集『韞蔵録』の撰者として、また『先達遺事』に崎門学派の儒者の逸話を収集したことで後世に名を残した。前者については言うまでもなく後代への貴重な文化遺産となったが、後者についてもまた、江戸期の朱子学受容の実際を知る上で貴重な史料となった。

『墨水一滴』はこの『先達遺事』の続編として、自序によれば明和三（一七六六）年に成立した。同書は崎門の学脈について記す書の種本となり、またそれ以外でもたとえば原念齋の『先哲叢談』（文化十三「一八一六」年刊）や、念齋の子・徳齋の『先哲像傳』（弘化元「一八四四」年）の情報源のひとつとされるなど、ある程度は巷間に流布していたようである（諸本については後述）。

ちなみに、書名の『墨水一滴』の「墨水」とは、著者・默齋が父の死後隠棲した地が隅田川に接することによる（「余僻居江左一絶棄人事」（『墨水一滴』自序）、「先生壯歲至不惑一隱於市中及墨水」（林

潜齋『稻葉默齋先生傳』）。直接の關係はないが、『墨水一滴』という題名から思い出されるのが、正岡子規の随筆『墨汁一滴』である。子規は病床で悶々としつつ『墨汁一滴』執筆を思い立ったが、同随筆について「こは長きも二十行を限とし短きは十行五行あるは一行二行もあるべし」と記している（『墨汁一滴』一月二十四日）。「墨水」は隅田川の雅名ではあるが、第一義的には「墨汁」の意であり、默齋が『墨水一滴』と名づけた背景には、子規同様、長くても二十行を限りとする程度の短文（「一滴」）で、端的に先達の面影を伝えようとする意図が窺われているであろう。

さらに『大漢和辞典』によれば、「墨水」の第二義は「学問」である（『燕子箋』）。默齋がこの命名にどこまで重層的に意味を織り込んだかはわからないが、自序の末尾でいわゆる「学海」にこと寄せて述べているように、百の川が日夜励んで学問の海に到るほど大きな思想史上の大展開ではなく、わずか隅田川の水一滴ずつの逸事ではあっても、これを集めればまたそれとも大いなる真理へと向かう本流それ自体であるという確信が、この命名に窺われることはたしかである。

『墨水一滴』は、基本的には崎門学派の先輩儒者たちの学問を伝える目的で書かれている。しかしその方法として選ばれたのは、彼らの学問的成果の独自性を訴えようとする当世風の方法ではなく、学問修養の蓄積が、彼らの生き方におのずと、しかし厳然とあらわれるエピソード、実際には彼らの日常生活での言行をうまく切り取って提示するというしかたであった。「述而不作」を旨とする崎門では、儒者本人の著述によつてではなく、門人による講義筆記や語録などを介して、つまり基本的には門弟の手を通してはじめて、それぞれの儒者の思想が後世に遺された。『先達遺事』や『墨水一滴』は講義筆記等とは趣を異にするが、しかし崎門においては同様に思想を後世に遺すという意味をもっていただろう。師の日々の言行は後継者たちの鑑であり、それに倣った生き方をすることが彼らにとって正しい生き方であったから、言行録は、講義録

や語録同様か、場合によってはそれ以上に重要な意味をもったのである。それゆえ黙齋にしてみれば、これらの撰述もまた祖述とも称すべき重要な任務と感じられたはずである。『墨水一滴』は単に面白おかしいエピソードを興味本位に書き留めた書ではない。先達の言行に示現した学問の精華は、このようなしかたでなければ後世に伝えることができないと考えられたからこそ、記されたのである。

(11) 『墨水一滴』の形式と冒頭部分について

このように『墨水一滴』は『先達遺事』の続編として、つづけて同じ手法で描かれることになったのだが、しかしまったく同じかというと、いささか様相を異にする点もある。

第一の大きな違いは、『先達遺事』は明和四（一七六七）年に版行されているが、『墨水一滴』はその自序が『先達遺事』初版の前年であるにもかかわらず版行されなかったという点である。

第二点目の違いは、『墨水一滴』には各逸話に表題が付され、それぞれが短文であるという点である。このことは大きな違いではないようでもあるが、『先達遺事』に比較して、各エピソードが短く、小咄風に一話完結である点は、文面を一瞥した印象からして大いに異なっている。この表題を黙齋自身が付したのかどうか確認することはできないが、逸話の多くは直方門・迂斎門あたりで「〇〇の話」と言えば通じた、おきまりの話柄であつたろうし、上総で黙齋の学統を継承した人々のあいだでは、これらの表題はかなり膾炙した文言となっていたのではないかと想像される。ただし『先達遺事』のように関係者の語録などを駆使して、各儒者の人物像に多面的に迫ろうとするしかたとは異なり、『墨水一滴』のそれらはいずれも点描の趣きである。

さらに第三点目の違いは、同書にとってひとつの難問ともなる点である。つまり、全体の逸話数にして約

四分の一近い冒頭部分の話柄が、藤原惺窩、林羅山とその周辺の人物のエピソードで占められているのである。崎門以前の人物群、しかも儒者以外の人物も含むエピソードを冒頭に並べている理由を、黙齋自身は特に文中で語らない。それゆえ『墨水一滴』を『先達遺事』の続編として読み継ぐとするときには、読者にはこの冒頭部分が大きな違和感として感じられるはずである。

しかし、この問題については、無窮会織田文庫蔵『帯秋艸盧 雜編八』所収の『墨水一滴』に付された目録が密やかにその答えを教えてくれている。同写本には、自序につづいて目録が付されているが、そこに、冒頭の十八話を河本仲遷、さらにつづく十九、二十話（山崎闇齋に関する記事）を中山専庵が記したとする注記があるからである。（管見のかぎり、その他目録を備えるのは国立国会図書館蔵『輪池叢書』四十二所収『墨水一滴』のみであるが、同書は目録・本文とも「且謝阿十」（六十九話）以下を欠き、織田文庫本のような注記も見られない）。

さらにこの注記を裏づけるものとして、底本を含め、校合を行ったすべての写本の第十四話に、「河善云」で始まる割注が付されている点が挙げられる。河善は河本仲遷を指す。善は仲遷の名である。ちなみにこの河本仲遷は、黙齋門人で丸亀藩に仕えた人物である。黙齋は晩年、仲遷の要請によつて上総から江戸へ出て丸亀藩主・京極高中の子弟のために講義を行っている（『再旬紀行』）。一方、中山専庵は浅見綱斎の門人で、秋田藩儒・中山菁莪の祖父とされる。（菁莪は、名君として知られた佐竹義和の設立した藩校・明道館（のち明德館）に招聘された儒者で、少年期の平田篤胤に儒学を教えたとされる人物であるが、ただしこの真偽の程は定かではない。（吉田真樹『平田篤胤—靈魂のゆくえ』二〇〇九年、講談社））

黙齋が自序で敢えて「編^二與^レ客坐談者^一」と記した理由はこのあたりにあるのかもしれない。仲遷はしばしば黙齋宅の「客」であったことが他の文献から知られるし、専庵も黙齋の許へ出入りする可能性のあった

人物ではある。

このような点からみて、『墨水一滴』冒頭二十話分については、書き手自身、あるいは少なくとも情報提供者自体は、黙斎ではなく「客」であつたことが可能ではないだろうか。冒頭部分が、『先達遺事』や『墨水一滴』後半の話柄と趣を異にし、その多くが惺窩や羅山の文集の内容と酷似している理由がこのあたりにあつたと見れば、それがこの問題を解く鍵となる。

とはいえ、後に『墨水一滴』が『孤松全稿』に収められる頃には、この経緯は背景に退いてしまった。『孤松全稿』編纂の頃、なぜすでにこの件が同門において問題にされなくなっていたのか、その理由はわからない。現存する伝本のすべてを比較していないので確実なことは言えないが、主たる写本、特に黙斎の著作集である『孤松全稿』所収の『墨水一滴』のいずれにも冒頭部に関する言及はないのである。

しかし、とすれば、冒頭部の問題に唯一触れている織田文庫本とはどのような写本であるのかが、今度は問題になってくるだろう。この点に関してはいろいろなアプローチのしかたがあるのだろうが、今回は校合の過程で明らかになったことについて、以下に記しておきたい。

(三) 無窮会織田文庫蔵『帶秋艸廬雜編八』所収『墨水一滴』について

織田文庫本は、明治期の漢学者で財団法人無窮会創設に関わった織田小覺（安政五「一八五八」年—昭和十一「一九三六」年）の編による『帶秋艸廬』全三十七巻中の『雜編八』に収められている。目録と冒頭部分に関する注記をもつという特徴と、さらにいまひとつの特徴として、本文内題を『墨水一滴』としながら、目次に掲げる表題を『續先達遺事』としている点があげられる。ところが、同書を収めた『雜編八』は、松崎慊堂「接鮮紀事」二巻「附録」一卷、高井洪斎「藝苑叢記」一卷との合冊となっており、なにゆえか『先

達遺事』本編のほうは他巻も含め収録していない。現在、『先達遺事』は刊本が無窮会所蔵の織田文庫に収められているので、改めての掲載の必要がなかったためであろうか。

同本は、斑むらのない端正な書体で、当世風の罫線の印刷された一定の用紙に縦横の狂いなく精緻に書写されている。ただし、文意を解さず機械的に書写したために生じたと考えられる誤写や、単なる字の覚え違いによる誤字が多くあり、それらが罫線外で朱書により訂正されている。その訂正者の書体は本文と異なっているように見えるが、この訂正は底本との校正作業によるものではなく、単に写本自体を点検しての文字訂正程度のものである。なお、同写本には訓点はなく、朱書で読点のみが付されている。

織田文庫本書写の時期はさほど遡れないはずである。にもかかわらず、実は底本との異同の多さは群を抜いている。底本とは別系統の写本があつたと考えざるを得ない状況である。なかでも特徴的な点のひとつは、件の冒頭二十話については、大きな異同が見られない点である。いまひとつは、それ以後の黙齋執筆と考えられる部分に、底本を読み解く上での参考になる多くの異同が含まれていることである。

先に述べたように冒頭二十話が黙齋以外の手によって記されたと考えれば、その部分以外に異同があるのは、黙齋自身が自著の部分に手を入れた結果、異同が生じたと推理することができる。織田文庫本と底本と、いずれがより古形を留めているかという点については明瞭ではないが、黙齋終焉の地における上総道学の末裔がまとめた『孤松全稿』版『墨水一滴』を最終形と考えるのが穏当であろうから、その意味では織田文庫本がより古い形を留めている可能性は高い。

たとえば、三十三話「書生口調」で唐津の合田敬勝を皮肉つたのは、底本では単に「家塾書生」であつたが、織田文庫本では「家塾書生金修軒」（金澤修軒のこと）と実名を挙げ、同様に「西洞一學者」についても「西洞一學者王氏」と名を載せている。また三十八話「隆冬静坐」は、底本では楨元眞は静坐の極意を単

に「語_レ人云」つたにすぎないが、織田文庫本ではこれを「語其子云」としている。このほか、四十一話「榎並正固」では、彼の職業を底本が「眼科」とする一方で、織田文庫本は「針治」とし、五十四話「紀文」の「以_二彼文辭而已_一者陋矣」の一文を「周茂叔」（すなわち周敦頤）の言葉であると示している。さらに八十五話「伯夷伊尹」では、底本では伯夷や伊尹を「江島鎌倉的」と評したのは黙齋の父・迂齋自身としている（「先君子云」）が、織田文庫本では、この一文を欠いたうえで、末尾で「此先君子所受于佐藤、密付、話世儒所不知也」と記している。「江島鎌倉的」とはいかにも直方らしい表現であって、篤実な迂齋風とは異なるようでもある。

『孤松全稿』版を踏襲する底本が最終確定版である保証はないが、織田文庫本にはあつた「焉」や「也」、「哉」などを、底本においては削除することによって、文体の整理を行った形跡も見える。

校合の過程から見えてくるのはこれらの点である。なお他本との比較についても多少触れておくと、織田文庫本とわずかな共通点がみられるのが、東北大学図書館蔵の狩野文庫本である。狩野文庫本には訓点と多少の送り仮名が付され、欄外に誤記訂正がある。とはいえ狩野文庫本も基本的には底本と同形態で、その点、より底本に近い碩水文庫本とさほどの差はない。碩水文庫本は完全な白文で、訓点・送り仮名ともに付されていない。その点、底本に酷似するのは成東・元倡寺の『孤松全稿』中に収められた『墨水一滴』である。元倡寺は黙齋の墓寺である。同写本は書写がかなり乱雑であるが、底本に近い訓点と、さらに底本にはない送り仮名が付されている。また他書には見られない大木丹二による頭注が記されており、この内容については、注釈中に適宜掲載した。また校合本すべてに共通する異同も散見される。これらは底本の誤記や活字化の過程における改変と考えてよいであろう。詳細については校合を参照されたい。

(四) 『墨水一滴』で取り上げられた人物について

以下、『墨水一滴』の内容について考えてみたい。まず先に問題とした冒頭エピソードのなかに、中世末期の二人の臨済僧が取り上げられていた点をみておく。朱子学を提唱する崎門学派は闇齋の『辟異』以来むろん排仏の立場であったが、そのことを踏まえたうえで二僧を取り上げたのは、河本仲遷の持ち込んだ話題であったにせよ、最終的には仲遷の師であり、同書の編者である黙齋の眼鏡に合った話だったからであろう。その眼鏡がどのような眼鏡であったかを考えるうえで、これらの逸話には興味深いところがある。

一人目は建仁寺の雪村友梅である。雪村は、中国大陆に渡つて「倭賊」として捕らえられ、まさに斬られようとしたとき、かつて無学祖元が詠んだ二十八字の詩（元軍が寺に侵入したおりに無学がこの句を吟じて事なきを得たという）で押韻した頌二十八首を詠んで示し、疑いが晴れて命を助けられたという。また雪村は帰国の船中で『莊子』を読み、一葉読み終わることにちぎって海に棄てたという。その理由は、もう読み終わったので反古紙はいらないだろう、というものであった。これらの原話は『羅山文集』巻四十八にあるのだが、しかしここで黙齋がこの話を取り上げた理由は、雪村の俊才ぶりと機転、冷静さ、また日頃学問を怠らなかつた結果としての深い学識がこの機転と冷静を支えたことを評価したからだろう。

一方、いま一人の紫野の大燈国師の話は衝撃的である。彼は妻に酒を買いにやらせたときに二歳の我が子を殺し、それを串に刺して炙り、妻の買ってきた酒の肴にした。妻はそれを知って絶叫して出て行つたが、大燈国師はそうにして恩愛を絶ち切ることで出家を果たした、というのである。実はこの話の収められた『羅山文集』巻五十六「告二禅徒」では、この大燈国師の怪伝説をもつて「吁仏氏之蔽心至_二於茲_一酷乎」とし、実に虎狼に劣る所行であると難じている。ところが、『墨水一滴』はなぜかその評価の部分を省いた。もちろん美談とまでは記していないが、先の雪村友梅の話とこの大燈国師の話は十七話、十八話と並べてあ

り、印象としては同列の扱いである。つまり、子を殺して食するという行為の是非ではなく、道を求めることに専一になることから生じる過激さを、黙齋が評価しているように見えるのである。雪村が『莊子』を破って海に棄ててしまった過激さも同様である。彼ら中世禅僧に通有の苛烈ともいえるべき生き方は、近世のはじめに臨済寺院で朱子学に出会った闇齋の、その学派の伝統のなかで、何らか評価すべき気風として生き残ったのである。（なお、こうした過激さについては、それを「狂」の気象として論じた大久保紀子「稲葉黙齋の『先達遺事』の特質について」（『お茶の水女子大学人文科学研究』四号、二〇〇八年、所収）を参照されたい。）

このほか惺窩や羅山については、『羅山文集』の評価を『墨水一滴』はほぼ踏襲している。周辺の人物についても、たとえば徳川家康や角倉素庵（吉田素庵）など、儒者以外の人物評もあり、それぞれ『羅山文集』に出典があるにせよ、それを取捨選択して採録した、黙齋の視点や歴史観が窺われる部分である。

さて、それではそれ以降の部分はどのように構成されているのだろうか。中山専庵に拠るとされる十九話と二十話は山崎闇齋の逸話であるが、二十一話も（ここから以降は黙齋の筆に成ると書き込みがあるにもかかわらず）同じく闇齋のエピソードである。ただし闇齋関連の話はそれ以降にも多少載っている。十九話、二十話は専庵を通じて京都方面（綱齋門下）から伝えられたものであって、それ以外は直方門下に伝えられた話として掲載されたということなのかもしれない。

なお闇齋以後で言えば、やはり圧倒的に佐藤直方の切れ者ぶりを伝える逸話が多く、弁舌さわやかで、比喻や洒落た表現が常的に射っていた直方の言葉の数々が記されている。たとえば八十一話では、享保二年に起きた大火で迂齋が罹災した際に、直方がこの火事は世の中にとって災厄であったが、ただ護持院が灰燼に帰したことと、迂齋がみずからの蔵書『圓機活法』を焼いてしまったことだけは「曾て世用を損益すること

無し」と述べたという話である。巨大な寺院（衰微してはいたが）と漢詩文の手引書とともに「世用」に益のないものと切り捨てるところに直方独特のアイロニーが滲みつつ、それが決してじめじめせず、同時に迂斎の被災をさりげなく慰めてもいるところに行き届いた配慮が感じられる。これは迂斎から黙斎が直接聞いた話であるが、短い漢文で端的に直方の性格を描き切ったところに黙斎の文才が光っている。

さて、直方に続いてやはり多いのが、父・迂斎についての記事だが、しかし、迂斎の言行は『先君子行實』においてさまざまに語られているので、ここでは迂斎その人よりも、むしろ迂斎が見聞きして黙斎に伝えたであろう迂斎近辺の個人的な人々のことに少々触れておきたい。やや淡泊な嫌いのある迂斎が、しかしその寛容さによってなのか、多くの個人的な人物との人間関係を生きていたさまを、黙斎の筆は生き生きと伝えている。

それらの人物群のうち特にユニークなのは、迂斎の仕えた唐津藩の藩士の面々である。たとえば、唐津の地で眼科医をしていた榎並正固は「性宏曠」で、諸事にわたり「驚悸」しないことを旨としていたが、「一日、盤中に浴し、忽ちに陰根血を出し、懸連滝の如し。室人、狼狽して医を迎ふ。正固、視て笑ふのみ」という、むやみと落ち着き払った人物であった。この程度の怪我は、罪人の処刑に比べればたいしたことがないというのがその理屈である（四十一話）。また、代々の唐津藩士の家に生まれた森真楽は、常に懷に枕を入れていて、どこでも寝てしまうというとぼけた男である。彼はある日迂斎の家を訪ねたが、留守であったので、たまたまそこに置いてあった瓜を勝手に取捨選択して甘いものだけ食べて、そのまま帰ってしまった。その後自宅に戻った迂斎は、その残骸を見て「此れ必ず真楽ならん」と笑ったと記されている（四十二話）。このほか、七十歳を過ぎた唐津の「井伊兄弟」は、一日に一度必ず兄の家を弟が訪ねる仲の良さであった。弟が来ると、兄は妻を呼んで、弟に酒を一杯吞ませよ、とのみ言い、あとは兄弟がただ向かい合って座って

いるだけで、弟は一杯の酒をあけると兄嫁に一言札を言つて帰るのが常であつたという話（五十三話）、何があつても迂齋先生の言葉でなければ信じようとしない堀江順齋の話（七十六話）などが記されている。

これらの人々を儒者・迂齋が日々興味をもつて観察していた様は微笑ましいが、迂齋が仕え始めた時代には居敬窮理などとはほど遠かつたであらう唐津の素朴でおおらかな人情を、後年になつて懐かしんで子弟に語る迂齋の姿もまた微笑ましい。

なお四十二話と七十六話は、話題の主よりも迂齋のほうを持ち上げるねらいもあるのだろうが、四十一話と五十三話は登場人物自身の「百事不「驚悸」爲「念」や「豪強多質」、「少「言語」、「友愛最好」といった氣質を褒める文面である。功を焦り、生活に汲汲とした江戸の俗儒のアンチとして、唐津の懐かしい人々の逸話は『墨水一滴』中に位置づけられているのではないだろうか。

ところで、唐津の人々はいずれも滑稽味をもつて描かれていたが、このほかの逸話もいずれもそこはかない滑稽味を帯びている。大久保紀子氏はこの滑稽味に関して「このおかしみは、他の儒者伝には見られない『先達遺事』の特色である」（前掲「稲葉黙齋の『先達遺事』の特質について」）とする。ただしこれらの滑稽味は、単純に侮りのための滑稽味ではない。迂齋同門の長谷川克明、野澤弘篤、小野崎舎人の三人組などは、『處士越復傳』以来、黙齋にたびたび皮肉られているが、彼らのエピソードを黙齋に伝えた迂齋自身は、こうした皮肉な感懷をもつていたふうではなく、それゆえ黙齋はその父へ敬意を払いつつ、彼らの逸話をまとめていることが想像される。また迂齋門下の目の不自由な針医・沢一は、学問に対して厳密に過ぎる人物としていささか滑稽に描かれているが、ここでもまた、迂齋の語りから黙齋が直接受け止めたであろう、沢一に対する温かい視線がそのままに描かれている。沢一のような人物が迂齋の学塾に出入りし得たことは、崎門の学塾の雰囲気と、師の講話を座して聴くことに重点をおいた教育方法を示す事実であるが、そ

れはともかく、黙齋自身が自序で述べているように、高きをのぞみ、いにしえを慕うという志が、『墨水一滴』の底流に一貫して流れていることは、『墨水一滴』を考える際に念頭におかなければならないことであろう。どのような逸話の主であつても、彼らは直方や尚齋、迂齋らの教えを彼らなりに咀嚼・体现した先達なのであり、その意味で黙齋にとって書き残す意義のある人々だったということである。

(五) 底本と諸本について

『墨水一滴』は黙齋著作のアンソロジーである『孤松全稿』巻五に収められており、近代に活字化されている。活字本は以下三点があり、そのうち①を底本とした。

①関儀一郎編『日本儒林叢書 第三冊 史伝書簡部』東洋図書刊行会、一九二八年。

②関儀一郎編『近世儒家史料・中冊』飯塚書房、一九七六年（一九四三年、井田書店刊の複製）。『日本儒林叢書』版と同内容。

③道学協会編『道学遺書』（道学協会、一八九一年）所収。

なお、①～③には同じ誤記がある。その傾向からいずれも無窮会神習文庫本を底本として見られる。

写本については『孤松全稿』所収のもの（④～⑤）があるが、新発田市立図書館本や千葉県立文書館鎌倉家本の『孤松全稿』はこの巻を欠いている。

④無窮会神習文庫蔵『孤松全稿』所収。

⑤千葉県成東市元倡寺蔵『孤松全稿』所収。

また、『国書総目録』によれば、この他に単行の写本が各地に散見される。なお⑤（前述）と⑬は『国書総目録』に掲載されていない。⑥と⑪には「目録」があり、特に⑪の内題「續先達遺事」と、目録に付され

た注記等の異同は注目に値する（前述）。

⑥ 国立国会図書館蔵『輪池叢書』四十二所収。（付目録。六十九「且謝阿十」以下、欠。）

⑦ 内閣文庫蔵『墨水一滴』一冊。

⑧ 東北大学附属図書館狩野文庫蔵『墨水一滴』一冊。

⑨ 大倉精神文化研究所附属図書館蔵『墨水一滴』文政六（一八二三）年、山口好憲写。

⑩ 前田育徳会尊経閣文庫蔵『墨水一滴』。

⑪ 無窮会織田文庫蔵『帶秋艸廬 雜編八』所収。（『帶秋艸廬』は織田小覺編、全三十七卷。内題「續先達遺事」。松崎謙堂「接鮮紀事」二卷「附録」一卷、高井洪齋「藝苑叢記」一卷と合冊。付目録。）

⑫ 無窮会平沼文庫蔵『墨水一滴』二冊。

⑬ 中山久四郎蔵『墨水一滴』文政三（一八二〇）年写。

⑭ 茨城大学図書館蔵『墨水一滴』二冊。

⑮ 九州大学附属図書館碩水文庫蔵『墨水一滴』。（内題「黙齋艸第十三 墨水一滴」）

なお校合は⑤・⑧・⑪・⑮と底本①との間で行った。本来ならば①が底本とした④も校合を行うべきところであったが、無窮会の蔵本修理と時期が重なり叶わなかった。

○『墨水一滴』注釈

凡例

一、関儀一郎編『日本儒林叢書 第三冊 史伝書簡部』（東洋図書刊行会、一九二八年）所収、『墨水一滴』を底本とした。

一、校合は本編末尾に掲載した。校合諸本については、校合冒頭に記した。

一、原文に番号を付し、訓読文と語注を加えた。

一、原文、および語注の見出しは可能な限り旧字体を用い、訓読文は現行字体に改めた。

一、割注は「」で括り、単行の普通字に改めた。

一、明らかな誤字については訓読で正し、（ ）内に原文の誤字を記した。また必要に応じて、語注で訂正の根拠を示した。

一、訓読では難解な語句に振り仮名を付し、引用文には「」、書名には『』を付した。

一、語注の見出しには原文の語句を用いた。

一、校合には、訓点、送り仮名、異体字、俗字等についての異同は記さないこととした。

▼序

余僻^ニ居江左^一。絶^ニ棄人事^一。形神寂寞。耳目不^レ營。晞^マ高慕^レ古。作^ニ先達遺事^一。以寄^ニ邈焉跨^レ俗之心^一。兼存^ニ慨然經^レ世之志^一焉。爾後二三歳。編^ニ與^レ客坐談者^一。補^ニ其遺漏^一。豈百川之學^レ海邪。特墨水一滴耳。時皇和明和丙戌之秋。

余、居を江左に僻^さけて人事を絶棄す。形神寂寞として耳目営まず。高きを晞^{のぞ}（原文・晞）み、古を慕ひ、『先達遺事』を作る。以て邈^{はく}焉として俗を跨ぐの心を寄せ、兼ねて慨然として世を経るの志を存す。爾後二

三歳、客と坐談せし者を編み、其の遺漏を補ふ。豈^{あに}百川の海を学ぶならんや。特に墨水の一滴のみ。時に皇和明和丙戌の秋。

○語注

【余僻^ニ居江左^一。絶^ニ棄人事^一。】黙齋は父の死後、祝髪して「市中の隠」となった（林潜齋『稲葉黙齋先生傳』。梅澤芳男『稲葉黙齋先生と南総の道学』（五一頁）には、宝暦十三（一七六三）年、黙齋は三十二歳で江東牛島（本所向島）に転居したとある。牛島はいわゆる墨水^ニ隅田川の東岸。【形神】姿と精神。【寂寞】さびしく、ひっそりしたさま。【晞^レ高】晞は晞の誤り。諸本いずれも「晞」。【邈焉】はるかなさま。【跨^レ俗】俗世を超越すること。【百川之學^レ海】「百川學^レ海而至^ニ于海^一」。丘陵學^レ山不^レ至^ニ于山^一。『法言』川は海を学んで海に至るも、丘は山を学んで山に至らぬ。それは川は日夜怠らず歩を進めているのに対し、丘は一处に止まったまま進もうとしないからである、の意。（鈴木喜一『中国古典新書・法言』明徳出版社、一九七二年、二六頁。）【皇和明和丙戌】明和三（一七六六）年。黙齋三十五歳。皇和は日本の別称。元倡寺本欄外「日本」。

▼目録

墨水一滴目録

※織田文庫本（『帯秋艸廬 雑編八』）による。底本文中の節番号を付し、底本の題名と異なる箇所は【底本「^レ」】として示した。なお織田文庫本文中の題名を（織田内題「^レ」）、目録割注を「^レ」で示した。さらに輪池叢書本目録の表記を《輪池「^レ」》として付したが、輪池叢書は目録・本文

とも「且謝阿十」以下を欠く。

- 一 藤欽夫^マ方正《輪池「藤斂夫方正」》
- 二 惺窩《輪池「惺窩^マ」》
- 三 性理權輿
- 四 韓山片石
- 五 庠序【底本「請建庠序」】（織田内題「請建庠序」）
- 六 肖推（織田内題「肖推」）《輪池「肖推」》
- 七 香山風流
- 八 惺窩春秋【底本「惺窩謂春秋」】（織田内題「惺窩謂春秋」）《輪池「惺窩^マ春秋」》
- 九 林道春
- 十 神祖笑隘
- 十一 羅浮
- 十二 他日大成
- 十三 勅本朱墨
- 十四 道春別業
- 十五 深衣
- 十六 友梅莊子
- 十七 廿八頌【底本「二十八頌」】（織田内題「二十八頌」）

十八 大燈國師〔以上十八則丸龜河善所記〕

十九 闇齋兒戲【底本「闇齋從群兒戲」】（織田内題「闇齋從群兒戲」）

二十 巧言令色〔以上二則秋田中山宗專所記〕

二十一 闇齋詩〔以下正信之筆〕

二十二 佐渡山【底本「師力三分」】

二十三 別號《輪池「別号」》

二十四 理一分殊

二十五 通鑑綱目

二十六 三千子

二十七 中庸

二十八 雲川氏

二十九 蛇氣

三十 有谷婆

三十一 梁惠王

三十二 就正夙惠

三十三 書生口調

三十四 路廁

三十五 高理父

三十六 金魚生【底本「金魚書生」】（織田内題「金魚書生」）

三十七 奢者不久

三十八 隆冬静坐

三十九 人世贅物【底本「人生贅物」】

四十 友部赤井

四十一 榎正固【底本「榎並正固」】（織田内題「榎並正固」）

四十二 森眞樂

四十三 無鼻【底本「不見鼻」】

四十四 佐藤誓婦人

四十五 闇齋門人【底本「闇齋門六千人」】（織田内題「闇齋門六千人」）

四十六 會津侯【底本「會津侯明断」】（織田内題「會津侯明断」）

四十七 論語

四十八 先君不看明月

四十九 雪中伐松

五十 酒減半身

五十一 澤一漁【底本「漁遊」】

五十二 大父逐怪【底本「大父逐妖」】《輪池「大父逐怪」》

五十三 井伊兄弟

五十四 紀文《輪池「大東世語」》

五十五 徂徠南遷

五十六 推死萬事

五十七 觀水

五十八 舍人

五十九 閑居記【底本「閑居記」】（織田内題「閑居記」）《輪池「閑居記」》

六十 遺忘

六十一 無同寅

六十二 佐藤言談

六十三 闇齋税駕

六十四 舍人十二子

六十五 尚齋復姓

六十六 先君出処

六十七 非儒者（織田内題「非儒者家老」）

六十八 佐藤三宅

六十九 且謝阿十《輪池・以下欠》

七十 三部書

七十一 四抄畧【底本「四抄畧」】

七十二 桑名夜舟【底本「桑名夜舡」】（織田内題「桑名夜舡」）

七十三 先君筮仕

七十四 天木三宅墳墓【底本「天水^{マヅ}三宅過墳墓」】（織田内題「天木三宅過墳墓」）

七十五 通蟻明神【底本「蟻通明神」】（織田内題「蟻通明神」）

七十六 堀江順齋

七十七 課會

七十八 酒充樂

七十九 玩月淡泊

八十 報儉以酒【底本「規戒報酒」】

八十一 丁酉火

八十二 影子

八十三 左氏傳君子【底本「左氏君子」】

八十四 不孝之故

八十五 伯夷伊尹

八十六 法花【底本「法華」】（織田内題「法華」）

○語注

【丸亀河善】河本仲遷。名は善、三左衛門と称す。丸亀藩士。稻葉黙齋門人。『崎門學脈系譜』四六四頁）

【中山宗專】中山專庵、名は盛直、静安と称す。浅見綱齋門人。秋田生保内（おほない現・秋田県仙北市田沢湖生保内）の人。秋田藩儒・中山菁莪の祖父。『崎門學脈系譜』四五七頁）

藤欽夫方正

藤關白「秀次」於「相國寺」。設「聯句會」。五山僧徒畢至。藤欽夫嘗一至。爾後不復至。衆或強之。誘關白旨而詰欽夫。欽夫正色曰。夫物以類聚。如「韓孟相若」。而後得耦。否則左履右鞋。何以耦邪。我不能耦彼倂也。以是忤旨。避害西肥。見中納言秀秋。秋貴豪年少。驕悍無度。常宴左右。潑水激人。滿坐如雨。以爲歡笑。雖大臣無忌憚。每見欽夫。未嘗不廢其戲。秋嘗執小刀削金盤。欽夫進諫曰。公子貴重雖不惜費。不當爲之事則不當爲也。秋納其言。

藤欽夫方正

藤關白秀次、相國寺に於て聯句會を設く。五山の僧徒、畢く至る。藤欽夫、嘗て一たび至るも爾後復至らず。衆の或いは之れを強ふるに、關白の旨を誘へて欽夫を詰る。欽夫、色を正して曰く、「夫れ物は類を以て聚まる。韓・孟の相若けるが如くにして、而る後耦ぶことを得。否からざれば則ち左は履、右は鞋、何を以てか耦ばんや。我、彼の倂に耦ぶこと能はざるなり」と。是れを以て旨に忤ふ。害を西肥に避け、中納言秀秋に見ゆ。秋、貴豪の年少にして、驕悍なること度無し。常に左右に宴し、水を撥きて人に激ぎ、満坐、雨の如くして以て歡笑を爲す。大臣と雖も忌憚無けれども、欽夫に見ゆる毎に、未だ嘗て其の戲を廢せずんばあらず。秋、嘗て小刀を執りて金盤を削る。欽夫、進諫して曰く、「公子、貴重にして費を惜しまずと雖も、當に爲すべからざるの事は、則ち當に爲すべからず」と。秋、其の言を納る。

○語注

【藤欽夫方正】内容は林羅山「惺窩先生行状」(『羅山文集』卷四十)によるか。ただし異同あり。次に記す

ように、そもそも惺窩せうかの字からして誤っている。織田文庫本の目録によれば、「藤欽夫方正」から「大燈國師」までの十八節は河本仲遷の筆になるとしている。また内容的にもこれらは林羅山の著作を典拠とするものが多い。【藤欽夫】藤原惺窩（永禄四「一五六一」年—元和五「一六一九」年）。ただし惺窩の字は正しくは「敏夫れんぶ」。播磨の人。名は肅。惺窩は号。初め京都相国寺に入り儒仏を学んだ。天正十八（一五九〇）年、豊臣秀吉の命によって朝鮮国使と会談し、ついで秀次に招かれた。慶長元（一五九六）年、渡明に失敗するが、慶長の役の捕虜として滞在した朝鮮の儒者・姜沆と出会う。このころ赤松広通の庇護を受ける。広通が関ヶ原の戦いで死ぬと還俗し、徳川家康の招きに門人の林羅山を推薦して京都洛北に隠棲した。学風は朱子学を主としたが、陽明学や仏教にも寛容であつた。著書は『惺窩文集』、『寸鉄録』他。【藤關白秀次】豊臣秀次（永禄十一「一五六八」年—文禄四「一五九五」年）。父は三好吉房、母は秀吉の姉といわれる。天正十九「一五九一」年、秀吉の養子に迎えられて閑白となつた。のち秀吉の実子・秀頼が誕生すると、秀吉との関係が悪化し、のちに高野山へ追放され、自殺に追いやられたという。秀次には文芸・学問を好み、これを奨励するといった一面もあり、また古筆収集家でもあつた。【相國寺】京都五山の一つ。応仁の乱の後、たびたび火災に遭つて荒廃したが、豊臣秀吉により再興された。【設二聯句會一】天正十九（一五九一）年（惺窩先生行状）。【物以レ類聚】『易』繫辭伝上「方以レ類聚、物以レ群分」。君子は君子と集まつて小人の仲間とは別れて行動し、小人は小人と集まつて君子の仲間とは別れて行動する。『全釈漢文大系一〇・易経下』鈴木由次郎、集英社、一九七四年、三〇三頁。【如二韓孟相若一】韓愈と孟郊とが肩を並べているようだ。韓愈と孟郊とは親交があり、「孟詩韓筆」と並称された。【脩二木偶一】西肥【肥州那護屋】（惺窩先生行状）。【中納言秀秋】小早川秀秋（天正十「一五八二」年—慶長七「一六〇二」年）。幼名辰之助。通称金吾。左衛門佐、権中納言。豊臣秀吉の正室高台院の兄・木下家定の三男。秀吉の猶子となり、のち小早川隆景の養

子となる。家督を継ぎ、筑前、筑後の一部、肥前二郡を譲り受けた。慶長の役に総大将として朝鮮に渡る。関ヶ原の戦いでは石田方に属したが、徳川方と通じ、東軍勝利の要因をつくった。戦功によって家康から備前、美作に五十万石を与えられるが、二十一歳で死去した。【金盤】「撒金匣厨金盤」（惺窩先生行状）。

▼二

惺窩

藤原肅。字欽夫。播州細河人。父冷泉爲純。世食邑於細河。永祿四年辛酉生肅于此。肅眼中有重瞳。眉上有黒黥。幼而穎悟絶倫。甫七八歳。從龍野吳東明長老。誦心經法華經。皆暗焉。人呼爲神童。祝髮爲僧曰薺看座。東明之師景雲寺長老九峯者。故江家儒而入佛。薺從事學禪教。弱歳入洛。洛相國寺普廣院泉和尚者。薺叔父也。時有強記名。泉嘗謂衆曰。我與薺言。無地開口。薺在西肥。時有朝鮮之役。藤大闇屯軍名護屋。神祖從在其軍。薺得謁神祖。後至江城。侍讀貞觀政要。賜暇歸洛。專讀性理之書。憂其無善師。奮發欲入明。直到筑陽。泛海逢風濤。漂着鬼界島。不果歸。以爲聖人無常師。我求之六經而足矣。乃別構一室。安聖牌。以擬大成殿。令門生肄釋奠禮。時石田三成在佐保山城。厚聘召薺。薺固辭不就。無幾三成謀反伏誅。時人以爲見機。性素嗜酒。然經旬不飲。或痛飲大醉而能不亂。常慕淵明之爲人。隱居放言。又服謝氏常惺惺之言。自稱惺窩。又號北肉山人。時論以爲中興鴻儒。嘗云。我之所讀。即人之所讀耳。凡識字者何不得而讀邪。所貴者唯得之言表而已。撰文章達德錄及綱領若干卷。林道春輯其遺文。曰惺窩文集。

惺窩

藤原肅、字は欽夫、播州細河の人。父は冷泉為純、世、細河に食邑し、永祿四年辛酉、肅を此に生む。肅、眼中重瞳有り。眉の上に黒黥有り。幼にして穎悟絶倫、甫め七八歳、龍野の吳東明長老に従ひて『心経』・『法華経』を誦む。皆暗ず。人呼びて神童とす。祝髪して僧と為り、薺首（原文・看）座と曰ふ。東明の師景雲寺長老九峯は、故江家の儒にして仏に入る。薺、従事して禅教を学ぶ。弱歳にして洛に入る。洛相国寺普廣院の泉和尚は薺の叔父なり。時に強記の名有り。泉、嘗て衆に謂ひて曰く、「我、薺と共に言へば、口を開くの地無し」と。薺、西肥に在り。時に朝鮮の役有り。藤大閤、軍を名護屋に屯し、神祖従ひて其の軍に在り。薺、神祖に謁することを得。後、江城に至り、『貞観政要』を侍読す。暇を賜はりて洛に帰り、専ら性理の書を読む。其の善師無きを憂ひ、奮発して明に入らんと欲す。直に筑陽に到り、海に泛び風濤に逢ひ、鬼界島に漂着す。果たさずして帰る。以為へらく、「聖人は常の師無し。我、之れを六経に求めて足れり」と。乃ち別して一室を構へ、聖牌を安んじて以て大成殿に擬す。門生をして積奠の礼を肆はしむ。時に石田三成、佐保山城に在り、聘を厚くして薺を召す。薺、固辞して就かず。幾ばくも無くして三成謀反して誅に伏す。時の人、以て機を見たりとす。性素酒を嗜む。然して句を経て飲まず、或いは痛飲大酔するも能く乱れず。常に淵明の人と為りを慕ひ、隠居して放言す。又謝氏の「常惺惺」の言に服し、自ら惺窩と称す。又北肉山人と号す。時論以て中興の鴻儒とす。嘗て云ふ、「我れの読む所は、即ち人の読む所のみ。凡そ字を識る者、何ぞ得て読まざらんや。貴ぶ所は唯だ之れを言表に得るのみ」と。『文章達徳録』及び『綱領』若干巻を撰す。林道春、其の遺文を輯め、『惺窩文集』と曰ふ。

○語注

【惺窩】内容は「惺窩先生行状」によるか。異同あり。【藤原肅】藤原惺窩。【欽夫】斂夫の誤り。【播州細河】播磨国細河荘。現・兵庫県三木市細川町。【冷泉爲純】冷泉家は藤原定家の孫・為相を祖とする。俊成・定家以来の跡を継いで、歌道師範家として重要な役割を果たしてきた。冷泉為之、持為の代に上冷泉、下冷泉両家に分かれた。惺窩は下冷泉家。為純は名門冷泉家の後裔であつたが、天正六（一五七八）年、惺窩十八歳のときに土豪に襲われ、惺窩の兄とともに戦死した。【食邑】その領地の租税で生活すること。【永禄四年辛酉】一五六一年。【重瞳】一つの目に二つの瞳があること。すぐれた人相とされる。【黒黴】左の眉の横に三寸あまりの黒あざがあつた（惺窩先生行状）。【龍野吳東明長老】東明宗吳。播磨国竜野景雲寺（現・兵庫県龍野市掛西町。現在廃寺。）の禅僧。【心経】般若心経。【葬看座】「惺窩先生行状」は「葬首座」、諸本いずれも「首座」。「看座」は誤記。首座は禅僧の首位を指す役職名。【景雲寺長老九峯】諸本いずれも「成九峯」。九峯宗成。はじめ相国寺玉竜庵住持、のち播州竜野景雲寺長老。（相国寺塔頭末派略記并歴代玉竜庵『大日本史料』十二編三二、東京帝国大学文学部史料編纂所、一九三三年、五一二頁）【江家】大江氏。九峯宗成は大江氏の出。（石田一良・金谷治校注『日本思想大系28 藤原惺窩・林羅山』岩波書店、一九七五年、三七七頁）【普廣院泉和尚】相国寺普広院住職の清叔寿泉。惺窩の叔父。惺窩三十三歳のおり義絶した。（「惺窩先生義絶置文」）【朝鮮之役】文禄・慶長の役。文禄元（一五九二年）—慶長三（一五九八年）年。【大閤】豊臣秀吉（天文六「一五三七年—慶長三「一五九八年」年）。【名護屋】名護屋城。佐賀県東松浦郡鎮西町に存した。豊臣秀吉が朝鮮出兵にあたって築城した。【神祖】徳川家康の尊称。【江城】江戸城。【貞観政要】唐の太宗と魏徴・房玄齡ら群臣との政治上の議論を編集した書。為政者の必読書として日本でも広く読まれた。【性理】性理学。【筑陽】鹿児島。【聖牌】孔子の位牌。『日本思想大系28』一九一頁）【大成殿】孔子廟の正殿。【釋奠】古代聖人や孔子の祭り。【石田三成】永禄三（一五六〇）年—慶長五（一六〇〇）年。

豊臣秀吉に仕え、五奉行の一人として実績をあげる。秀吉の死後、家康と関ヶ原で戦って敗れ、処刑された。【佐保山城】佐和山城。佐和山は滋賀県彦根市北部の山。古くは佐保山と呼ばれた。文禄四（一五九五年）、石田三成が本格的な城を築いた。【葬固辭不_レ就】この記事は「惺窩先生行状」にない。「行状」によれば、惺窩は三成のもとに赴こうとしたが、関ヶ原の戦いによって果たせなかったとある。【経_レ旬】十日あまり。【痛飲大醉而能不_レ亂】「唯酒無量不及乱」（『論語』郷党）を念頭に置くものか。【常慕_二淵明之爲_一人】「惺窩先生行状」に「先生、常に彭沢（陶淵明…引用者注）の人となり羡慕」とあり、そのため淵明の肖像画に題賛したり、また「桃花源記」を解釈した林兆恩の『桃源寓言』を惺窩が読んで評価したという記事がある。【隱居放言】「隱居放言、身中清、廢中權」（『論語』微氏）【謝氏常惺惺之言】謝氏は、謝良佐（一〇五〇年—一一〇三年）、字は顯道、寿春上蔡（安徽省）の人で、上蔡先生とよばれた。程門四先生のひとつ。「敬是常惺惺法」（敬は是れ常に惺惺の法なり）（『上蔡語録』卷中）（岡田武彦主編、荒木見悟解題『近世漢籍叢刊 思想初編六 上蔡語録・延平答問附補録』中文出版社、一九七三年）。「惺惺」は「心の昏昧ならざるの謂」（『朱子語類』卷十七）で、禅語にも用いられる。（高島元洋『山崎闇齋—日本朱子学と垂加神道』ペリカン社、一九九二年、三三四頁）【北肉山人】惺窩の私淑した林兆恩の良背心法（『林子全書』第四冊「心聖直指」）による（『日本思想大系』28 一九六、二二五頁）。林兆恩は明代の儒者、陽明学流で、儒仏老一致を説いた。「良背心法」は、『周易』「艮」卦「艮其背不獲其身」（其の背に良まりて其の身を獲ず）による。良卦象伝に、「兼山艮。君子以思不出其位。」（兼ねて山あるは良なり。君子以て思ふこと、その位を出でず。）とあり、また繫辭上伝に「聖人以此洗心、退藏於密、吉凶與民同患。」（聖人、此れを以て心を洗ひ、退きて密に藏れ、吉凶、民と患ひを同じくす）とある。（高田真治・後藤基巳訳『易経 下』岩波文庫、一九六九年、一三六、二四〇頁）【鴻儒】大学者。【得之言表】文字面の解釈以上に深い意味を掘むこと。（『日本思想大系

28』一九七頁)【文章達徳録及綱領】『文章達徳録』および『文章達徳(録)綱領』。『文章達徳録』は、吉田素菴が惺窩の命を受けて経書歴代の詩文を収集・分類した百余巻におよぶ書であつたが、上木されることなく、写本も所在不明。『文章達徳(録)綱領』は全六巻、刊本は姜沆序、寛永十六(一六三九)年堀杏菴序のあるもの、および姜沆の序のみのものの二種がある(太田兵三郎編『藤原惺窩集』巻下「解題」国民精神文化研究所、一九三九年、一〇五頁)。「今時の人、文を作る規格を知らざるを以ての故に、古今の名公の詩話・文評を摺ひ集めて、『達徳録綱領』若干巻を撰び著し……」(『惺窩先生行状』)。(以上、太田青丘『人物叢書 藤原惺窩』吉川弘文館、一九八五年、一一三〜一二三頁)【林道春】林羅山(天正十一「一五八三」年―明暦三「一六五七」年)。京都の人。名は忠または信勝。字は子信。通称又三郎。剃髪して道春と号した。藤原惺窩に朱子学を学び、惺窩の推薦によつて徳川家康の顧問となる。その後、秀忠、家光、家綱に仕えた。また忍ヶ岡に私塾・文庫と孔子廟を建て、これらが昌平黌の起源となつた。幕府儒官林家の祖。『羅山文集』、『大学抄』、『大学解』、『論語解』他。【惺窩文集】書名。ここでは林羅山編『惺窩文集』「正編」を指す。なお惺窩の文集には『惺窩文集』と『惺窩先生文集』の二種の刊本がある。『惺窩文集』は「正編」五巻(林羅山編)、「続編」三巻(菅得菴編)。『惺窩先生文集』は「文集」十二巻、「和歌集」五巻、「首巻」一巻。惺窩の曾孫藤原為経編、徳川光圀校訂。ともに刊記はないが、序跋から、前者は寛永四(一六二七)年頃、後者は享保二(一七一七)年頃の刊と考えられる。(太田兵三郎編『藤原惺窩集』巻上「解題」国民精神文化研究所、一九三八年、七三頁)。

▼三

性理權輿

韓人姜沆「在_レ韓官刑部員外郎」歸化在_二赤松氏_一。見_二惺窩_一歎曰。朝鮮三百年來。未_レ聞_二若_レ斯人_一也。因目_二其居_一爲_二廣胖居_一。惺窩行狀曰。本朝諸儒自_レ古唯讀_二漢唐之書_一。惺窩勸_二赤松氏_一。使_三姜沆等善_二寫四書五經_一。始据_二程朱之意_一爲_二之訓點_一。性理之學行_二本朝_一。是爲_二權輿_一也。

性理の權輿

韓人姜沆「韓に在りて官は刑部員外郎」、帰化して赤松氏に在り。惺窩を見て歎じて曰く、「朝鮮三百年來、未だ斯_かくの若き人を聞かざるなり」と。因りて其の居を目して広胖居とす。『惺窩行狀』に曰く、「本朝の諸儒、古より唯_た漢・唐の書を読む。惺窩、赤松氏を勧めて、姜沆等をして四書五經を善写せしめ、始めて程朱の意に据りて、之れに訓点を為す」と。性理の学の本朝に行はるゝ、是れを權輿と為すなり。

○語注

【性理權輿】内容は「惺窩先生行狀」によるか。異同あり。【權輿】はじめ。【姜沆】朝鮮の朱子学者。一五六七〜一六一八年。朝鮮の役で捕虜となつて日本に押送された。一年半後の元和四（一六〇〇）年、許されて帰国。著書に『睡隱集』四卷（附「看羊録」）及び「別集」一卷など。「看羊録」は日本囚虜中に見聞録。【刑部員外郎】刑部は刑罰を司る官署。外郎は中国の官名で、定員外の職員之意。【赤松氏】赤松広通（永祿四「一五六一年—慶長五「一六〇〇」年）。はじめ播州龍野城主、秀吉の播州侵攻により蟄居、のち但馬竹田三万八千石。関ヶ原の戦いで大坂側に与して丹後田邊を攻め、のち家康によつて自死に追い込まれた。広通は学問を好み、姜沆や惺窩は赤松氏の援助を受けた。『惺窩文集』や姜沆『看羊録』には赤松氏の名がしばしば現れる。（阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』（東大出版会、一九六五、一九七八復刊）所収「藤原惺窩

と朝鮮儒学」第六節「赤松廣通の遺事・遺蹟」参照。）【廣胖居】「惺窩先生行状」は「廣胖窩」。廣胖は『大學』の「心広体胖」（心広くして体も胖なり）による。（金谷治訳注『大學・中庸』岩波文庫、一九九八年、三九～四一頁）【惺窩行状】林羅山著「惺窩先生行状」。【漢唐之書】漢唐の注疏。【善寫】繕写か。

▼四

韓山片石

林道春在洛。見惺窩於賀古（一本古賀）宗隆之宅。論道學。惺窩謂宗隆曰。近時皆驢鳴犬吠。故久廢筆研。今春也起予。可謂韓山片石矣。及春東歸。惺手執延平答問。與春曰。此延平工夫之心法。紫陽傳習之門戸。此意今日都附卿。

韓山の片石

林道春、洛に在り、惺窩に賀古（一本「古賀」）宗隆の宅に見ゆ。道学を論じて、惺窩、宗隆に謂ひて曰く、「近時は皆、驢鳴犬吠なり。故に久しく筆研を廢す。今、春や予を起こす。「韓山の片石」と謂ふべし」と。春の東歸するに及び、惺、手に『延平答問』を執り、春に与へて曰く、「此れ延平工夫の心法、紫陽伝習の門戸なり。此の意、今日都て卿に附す」と。

○語注

【韓山片石】内容は「惺窩先生行状」によるか。【賀古宗隆】惺窩の同郷の友人、後援者。惺窩や赤松広通とも親しかった。【驢鳴犬吠】つまらない文章、聞く価値のない話のたとえ。『世説新語』元倡寺本欄外「駟

者一駟発^レ声万駟從而鳴犬亦然」。**【筆研】**筆と硯。書物を著すこと。**【韓山片石】**南北朝時代、梁の庾信が、温子昇のつくった韓陵山寺碑文を称した語。「梁庾信從^二南朝^一初至^二北方^一、文士多輕^レ之、信將^二枯樹賦^一以示^レ之、於^レ後無^二敢言者^一、時温子昇作^二韓陵山寺碑^一、信読而写^二其本^一、南人問^レ信曰、北方文士何如、信曰、唯有^二韓陵山一片石^一、堪^二共語^一。薛道衡・盧思道、少解^二把筆^一、自余驢鳴犬吠、聒^レ耳而已。」(『朝野僉戴』卷六『四庫全書』第一〇三五冊、子部三四一小説家類、上海古籍出版社、一九八七年、二八一頁。)狩野文庫本欄外「韓山寺碑北魏人温子昇作庾信云韓山一片石唯可與語而已其餘驢鳴犬吠云々」**【延平答問】**書名。朱子とその師である李延平(一〇九三年～一一六三年)との問答。(高畑常信『延平答問 中国古典新書・続編2』明徳出版社、一九八五年、九一～一七頁。)**【紫陽】**朱子の別号。朱子の学堂、紫陽書院による。**【此意今日都附^レ卿】**「羅山年譜」(慶長十二年)、および「惺窩先生行状」は「今我示^レ之非^レ無^レ意也」。

▼五

請^レ建^二庠序^一

道春與^二後藤郎^一。共奏請^下建^二庠序^一於洛^一教^中授生徒^上。乃許^レ之。神祖謂^レ郎曰。春欲^三自居^二庠序^一乎。將尾有^レ人乎。對曰。其妙壽院乎。時有^二大阪之役^一不^レ果。

庠序を建つるを請ふ

道春、後藤郎と共に奏して庠序^{しやうじよ}を洛に建て、生徒を教授せんことを請ふ。乃ち之れを許す。神祖、郎に謂ひて曰く、「春、自ら庠序に居らんと欲するか。將人^{はた}有らんか」と。対へて曰く、「其れ妙寿院か」と。時に大阪の役有りて果たさず。

○語注

【請_レ建_二庠序_一】内容は「惺窩先生行状」によるか。慶長十九（一六一四）年。【後藤郎】郎は役人の意。堀勇雄『人物叢書 林羅山』（日本歴史学会編、一九六四年、吉川弘文館、一五三頁）によれば後藤光次。光次は家康の腹臣。また『日本思想大系 28』は、秀吉に仕えて金座を司り、家康に仕えて御金改役となつた後藤徳乗、あるいは後藤徳乗の名代として後藤光次の名で江戸に下つた弟子の山崎庄三郎のこととする。『日本思想大系 28』三八〇頁、補注）【庠序】学校。村里の学校を、周代には庠、殷代には序といった。【神祖】徳川家康の尊称。【妙壽院】藤原惺窩の居所、別称。『人物叢書 藤原惺窩』二頁。）【大阪之役】諸本いずれも「大坂之役」。大坂冬の陣。慶長十九（一六一四）年十一月。

▼六

肖推

有_二肖推者_一。從_二惺窩_一學。嘗見_二窓前蜂窠_一。揚_レ扇撲_レ之。惺窩即絶_レ交。

肖推

肖推なる者有り。惺窩に従ひて学ぶ。嘗て窓前の蜂窠を見、扇を揚げて之れを撲つ。惺窩、即ち交を絶つ。

○語注

【肖推】内容は「惺窩先生行状」によるか。異同あり。【肖推】種村楊稔。「有_二肖推寺某_一者。家頗藏_レ書」

（「惺窩先生行状」）。「種村某、初め武人たり。後洛陽に蟄居し、楊稊と号す。又肖推寺と称し、以て介子推に似たるのを以て寓す」、「楊稊、初め惺窩と交を執る。此の後、故有りて相絶す。」（『羅山文集卷三』）【揚_レ扇撲_レ之】「惺窩先生行状」によれば、惺窩がとめたにもかかわらず肖推寺某がさらに撲とうとしたので、惺窩自身が蜂を逃がしたとある。

▼七

香山風流

道圓新鐫「白氏文集」。毎二一版成一。惺窩取而讀_レ之曰。香山風流至_レ此。偶足_レ可_レ慰_二目下_一。

香山の風流

道円、新たに『白氏文集』を鐫む。一の版の成る毎に、惺窩、取りて之を読み曰く、「香山の風流、此に至る。偶足_{たまたま}はりて目下を慰むべし」と。

○語注

【香山風流】内容は「惺窩先生行状」によるか。【道圓】那波活所（文禄四「一五九五」年—慶安元「一六四八」年）。名は觚、号は活所、道円は字。播磨国姫路の人。惺窩門人。紀伊侯儒官。惺窩門四天王のひとつ。（『国史大辞典』）【白氏文集】詩文集。唐の白居易撰。南宋の紹興本の系列に菅家点による立野春節和刻本があるが、これらは改編本。改編前の姿を伝えるものが朝鮮本に拠る那波活所の木活字本。【香山】香山居士。白居易の号。【一版】諸本いずれも「一板」。【偶足_レ可_レ慰_二目下_一】訓読は「偶足。可_レ慰_二目

下^一。」と改めた。

▼八

惺窩謂^二春秋^一

惺窩謂^二道春^一曰。讀^二諸經^一則如^二自^レ暗出^二明也^一。只春秋如^二自^レ暗入^二暗也^一。學不^レ至^二至處^一。則未^レ易^レ言^二春秋^一。

惺窩、『春秋』を謂ふ

惺窩、道春に謂ひて曰く、「諸経を読めば則ち暗より明に出づるが如し。只、『春秋』は暗より暗に入るが如し。学、至処に至らずんば、則ち未だ『春秋』を言ふに易からず」と。

○語注

【惺窩謂^二春秋^一】出典未詳。【春秋】周代、魯を中心とする歴史書。魯の史官の遺した記録に、孔子が筆削を加えたものとされ、五経の一つとして重んぜられた。のちに「左氏伝」、「公羊伝」、「穀梁伝」などの注釈書がつくられた。

▼九

林道春

林道春幼入^二建仁寺^一。從^二大統古澗慈稽長老^一讀^レ書。時稱^二多智文珠^一。十四註^二長恨歌^一。引證極精。僧徒

以爲此兒爲「叢林之翹楚」。欲「祝髮爲」僧。春不聽。僧徒便請「京尹前田玄以」。強以「官既許」之。春潛逃歸「家」。專「志經籍」。時清原家儒者講「四書」。只學庸用「朱子章句」。論孟用「何趙註皇邢疏」。至「惺窩」。始開「道學之緒」。然避「世不」接「人」。春獨授「徒以」宋儒之書。本邦道學之興。其功居「多」。林家譜曰。羅山子姓林。其先加州人。後移「紀州」。祖正勝生「吉勝・信時・周堅」。正勝死。三子隨「母移」大坂。遂住焉。吉勝薙髮號「理齋」。信時娶「聚」田中氏。天正十一年癸未生「道春」。理齋先娶「小篠氏」。無「子」。便養「之爲」子。名菊松麻呂。幼而穎悟不凡。八歲時有「甲斐德本者」。來「理齋宅」。說「太平記」。春在「傍」。聞而暗誦。時人歎云。此兒耳如「囊」。所「入不」復漏脫。年十三元服。稱「又三郎信勝」。慶長中。神祖召爲「博士」。祝髮改名「道春」。位歷「法眼」至「法印」。仕「神祖・台德・大猷・巖」有四朝。自「國家草創軍國多事之秋」。至「四海一家守」成之治。即位改元行幸入朝之禮。及外國蠻夷之事。宗廟祭祀之典。莫「不」皆與議焉。正保中病在「家」。執事元老承「旨寄」書。或就論「事」。令「官醫看」病。時有「事」日光山。召見「便殿」。特聽「乘輿入」城門。有「旨以」其年齡漸高。令「朝」朔望。明曆三年丁酉病卒。年七十五。諡「文敏先生」。書著「數百卷」。刊行者甚多。有「四男一女」。長叔勝。次長吉。次春勝。次守勝。皆能存「家風」。女嫁「荒川氏」云。

林道春

林道春、幼にして建仁寺に入る。大統古潤慈稽長老に従ひて書を読む。時に多智の文殊と称さる。十四にして『長恨歌』に註し、引証極めて精なり。僧徒以爲へらく、「此の児、叢林の翹楚たり。祝髮して僧と爲ることを欲す」と。春、聴かず。僧徒、便ち京尹前田玄以に請ひ、強ひて官既に之れを許すを以てす。春、潜かに逃れて家に帰り、志を經籍に専らにす。時に清原家の儒者、四書を講ずるに、只『学』・『庸』は朱

荒川氏に嫁す」と云々。

○語注

【入_二建仁寺_一】文禄四（一五九五）年。十三歳で元服して建仁寺大統庵に入つた。【大統古潤慈稽長老】建

仁寺大統庵長老・古澗慈稽（天文十三「一五四四」年—寛永十「一六三三」年）。俗称土田氏、信濃の人。建仁寺塔頭大統庵の奎文慈瑄けいもんじせんの弟子で、春沢永恩にも学んだ。博多の聖福寺に住したのち、大統庵に戻り、慶長十（一六〇五）年、建仁寺第二九四世の住持となった。著書に『口水集』、『盧瀑集』各一卷がある。（堀勇雄『人物叢書・林羅山』吉川弘文館、一九六四年、一六頁。鈴木健一『林羅山年譜稿』ペリカン社、一九九九年、一二一頁。）【十四註「長恨歌」】文禄五・慶長元（一五九六）年。【叢林】寺。【翹楚】衆に抜きん出て勝れていること。【翹翹錯薪、言刈其楚】『詩経』漢広。【京尹】京都所司代の別名。【前田玄以】天文八（一五三九）年—慶長七（一六〇二）年。武将。織田信忠に仕え、本能寺の変に際して信忠が自刃した際に、その子三法師を託され尾張に逃れた。この功により織田信雄のぶおから京都奉行を命ぜられた。一五八五（天正十三）年、丹波亀山五万石を領した。五奉行の一人。関ヶ原の戦いでは大坂城の留守居を勤めたが、戦後、所領を安堵された。【清原家】十世紀以来、明経道（大学寮において儒学を学ぶ課程。博士を家職とした家柄。【学庸】『大学』と『中庸』。【朱子章句】朱熹『大学章句』と『中庸章句』。【論孟】『論語』と『孟子』。【何趙註】何晏かあん『論語集解』と趙岐ちうき『孟子注』。『人物叢書・林羅山』二八頁。）【皇邢疏】皇侃おうがん『論語義疏』と邢昺けいへい『論語正義』。『人物叢書・林羅山』二八頁。）【林家譜】羅山の伝記には、羅山三男の鷲峰による「羅山林先生年譜」と、四男・読耕斎による「羅山林先生行状」があるが、記述の内容から「年譜」を指すか。【加州】加賀国。【吉勝】羅山の伯父で養父の理斎。京で米穀商を営んだと言われる。『人物叢書・林羅山』一二頁。）【信時】羅山の父。【母】羅山の祖母。【薙髮】髪を剃る。【田中氏】羅山の母。羅山四歳の時に没した。【天正十一年癸未】一五八三年。八月、京都四条新町に生まれる。（『羅山年譜上』）【娶三小篠氏】羅山の養母。【甲斐徳本者】永田徳本（生没年不詳）。戦国時代から江戸時代前期にかけての医者。首に薬囊を下げて牛に乗り、名利を求めず各地を「二服十八文」と呼び歩き、將軍徳川秀忠の病氣を治した時も十八文

しかとらなかつた（一説には十六文）という。『国史大辞典』他【八歳】天正十八（一五九〇）年。【慶長中】慶長元（一五九六）年—慶長二十・元和元（一六一五）年。【祝髪改名道春】慶長十二（一六〇七）年（「羅山年譜上」一五頁、「羅山行状」三八頁）。中江藤樹「林氏剃髪受位弁」や山崎闇斎「世儒剃髪辨」などによつて批判された。【法眼】僧位のひとつ。法印に継ぐ位。【法印】最高の僧位。【台徳】台徳院。二代将軍徳川秀忠の法号。【大猷】大猷院。三代将軍徳川家光の法号。【厳有】厳有院。四代将軍徳川家綱の法号。【守成】完成された事業を守り続けて失墜させないこと。【正保中病在家】正保三（一六四六）年のこと。秋には平癒した。【有_レ事_二日光山_一】「羅山年譜」二九頁。【便殿】貴人などの休息のために建てられた御殿。【朔望】陰暦の一日と十五日。【明暦三年丁酉】一六五七年。【叔勝】林叔勝（慶長十八「一六一三」年—寛永六「一六二九」年）。羅山長男。将来を囑望されたが、十七歳で没した。【長吉】元和二（一六二六）年—元和六（一六二〇）年。羅山次男。疱瘡により早世した。【春勝】林鷺峰（元和四「一六一八」年—延宝八「一六八〇」年）。羅山三男。恕_{しやう}。字は子和、のち之進。薙髪して春斎と称し、鷺峰、向陽子などと号した。兄二人が早世したので家督を継いだ。羅山のほか那波活所、松永貞徳に学び、幕府の儒官として、羅山と『諸家系図伝』・『本朝通鑑』を編纂した。著書『国史実録』など。【守勝】林読耕斎（寛永元「一六二二」年—寛文元「一六六一」年）。羅山四男。【女嫁】荒川氏「長女・振娘。正保三「一六四六」年、荒川宗長に嫁した。

▼十

神祖笑_レ隘

道春在_レ洛。講_二論語集註_一。外史清原秀賢忌_二其才_一効奏。自_レ古無_二勅許_一則不_レ得_レ講_レ書也。朝臣尚然。况

庶士^マ乎。請加^レ罪。事遂達^ニ神祖^一。神祖笑曰。何隘邪。於^レ是^レ不^レ能^レ害。〔春講^レ學之暇。問^ニ本朝官職之事於菊亭右府晴季^一。聽^ニ神道於東山僧某^一。某從^ニ卜部清原二家^一。得^ニ其傳^一云。〕

神祖、隘きを笑ふ

道春、洛に在りて『論語集註』を講ず。外史清原秀賢、其の才を忌みて劾奏す。「古より勅許無ければ則ち書を講ずるを得ざるなり。朝臣、尚ほ然り。況や庶士（原文・士）をや。請ふ、罪を加へよ」と。事、遂に神祖に達す。神祖、笑ひて曰く、「何ぞ隘きか」と。是に於て害する能はず。〔春、學を講ずるの暇、本朝官職の事を菊亭右府晴季に問ふ。神道を東山僧某に聴く。某、卜部・清原二家より其の伝を得、云々。〕

○語注

【神祖笑^レ隘】内容は「羅山年譜」、「羅山行狀」によるか。【論語集註】朱子による『論語』の注釈書。【外史】外記の唐名。外記は詔勅草案の訂正、奏文や先例の考勘、また儀式行事の奉行を司る官職。清原家は大外記を世襲した。【清原秀賢】明経博士。舟橋家の祖。清原氏の嫡流。秀賢は後陽成・後水尾天皇の侍読を勤めたほか、『慶長日件録』の記主として知られる。〔国史大辞典〕【菊亭右府晴季】今出川晴季（天文八「一五三九」年―元和三「一六一七」年）。公卿。菊亭は別号。豊臣秀吉の関白拝任を幹旋し、その後も朝廷における幹旋、調停役を務めた。のち関白秀次に娘を嫁がせたため、秀次の自害後に越後に流罪、翌年赦され、秀吉没後、右大臣に還補された。〔国史大辞典〕【東山僧某】「東山老僧」（羅山年譜）【卜部清原二家】卜部は吉田家。羅山の学んだ「東山僧」は吉田兼右の口伝を受けた。兼右は吉田兼俱の三子・清原宣賢の次子で、十一歳の時に吉田家を継ぎ、家学の神道復興に尽力した。〔人物叢書 林羅山〕、平重道『吉川

神道の基礎的研究』吉川弘文館、一九六六年）

▼十一

羅浮

道春嘗讀「春秋」。惺窩與書曰。古人讀「春秋於羅浮」。足下明窓淨几之上。得「古人羅浮之意」。則此羅浮耳。自是人推崇號「羅浮先生」。惺窩社中稱「林提學」不名。「惺窩呼春爲「林秀才」。名之曰忠。字之曰信。」

羅浮

道春、嘗て『春秋』を読む。惺窩、書を与へて曰く、「古人、『春秋』を羅浮に読む。足下の明窓淨几の上、古人の羅浮の意を得れば、則ち此れ羅浮なるのみ」と。是れより人推崇して羅浮先生と号するも、惺窩の社中、林提學と称して名よばず。「惺窩、春を呼びて春秀才と為す。之れを名づけて忠と曰ひ、之れを字して信と曰ふ。」

○語注

【羅浮】内容は「羅山年譜」、「羅山行狀」によるか。【古人】ここでは羅じやうけん從彦（羅仲素・羅豫章とも、一〇七二年―一一三五年）のこと。宋、南劍の人。字は仲素。楊龜山に学び、また洛陽の程伊川の許を訪ねて教えを乞うなどした。惠州博羅県の主簿（書記）となり、官を終えたのち羅浮山に入り、静座を行った。（諸橋轍次・安岡正篤監修『朱子学大系三卷・朱子の先驅（下）』明徳出版社、一九七六年）【羅浮】広東省増城

県にある羅浮山のこと。梅の名所。【明窓淨几】明るい窓と清潔な机。明るく清らかな書齋。【提學】中国の官名。地方の学校行政を監督した。【日信】「羅山年譜」・「羅山行状」はいずれも「日子信」。

▼十二

他日大成

慶長中。神祖居二條城。召二道春。春往拜謁。時清原秀賢・相國寺承兌・元佶二長老侍坐。神祖問。光武於二高祖一世系如何。三人不レ能答。神祖顧レ春曰。卿記否。春應レ聲答云。九世之孫。又問。漢武反魂香出二何書。曰史漢無レ載。白氏文集・新樂府及東坡詩集註有レ之。又問。蘭多二種品。屈原所レ愛者何。曰據二朱子註。則澤蘭也。神祖大奇レ之。顧二左右。曰。此少年他日可二大成。春時二十三。洛中（一本人）傳稱爲二話頭（一本柄）。一。

他日大成

慶長中、神祖、二条城に居りて道春を召す。春、往きて拜謁す。時に清原秀賢・相國寺の承兌・元佶二長老、侍坐す。神祖問ふ、「光武の高祖に於ける世系は如何」。三人、答ふること能はず。神祖、春を顧みて曰く、「卿、記するや否や」と。春、声に応じて答へて云ふ、「九世の孫なり」。又問ふ、「漢武の反魂香は何れの書に出づるや」。曰く、「『史』・『漢』載する無し。『白氏文集』・『新樂府』及び『東坡詩集註』、之れ有り」と。又問ふ、「蘭、種品多し。屈原の愛づる所は何れぞ」。曰く、「朱子の註に拠れば則ち沢蘭なり」と。神祖、大いに之れを奇しみ、左右を顧みて曰く、「此の少年、他日大成すべし」と。春、時に二十三。洛中（一本「人」）伝へ称して話頭（一本「柄」）と為す。

○語注

【他日大成】内容は「羅山年譜上」、「羅山行狀」によるか。【慶長中】「羅山年譜」等によれば、慶長十（一六〇五）年。【二條城】家康の命で慶長八（一六〇三）年に完成。京都守護と將軍上洛時の宿所。【清原秀賢】当時、六位の藏人の最古參者。【承兌】西笑承兌（天文十七「一五四八」年—慶長十二「一六〇七」年）。臨濟宗夢想派の僧。秀吉、家康のブレーンの一人として主要仏事を差配する傍ら、寺社行政と外交通商文書を作成した。慶長年中、相国寺内に豊光寺を開創し、晩年を同寺で過ごした。『国史大辞典』【元信】閑室元信（天文十七「一五四八」年—慶長十七「一六一二」年）。臨濟宗の僧侶、足利学校の第九代座主。肥前国多々良氏の子として生まれたが、晴氣城主・千葉胤連の落胤ともいう。肥前小城の円通寺で出家したもの、のち足利学校に赴き、天正十五（一五八七）年、足利学校座主となつて同校の中興に尽くした。その後、家康の信任を得て、関ヶ原の戦いで家康の陣中で占筮せんせいを行った。慶長六（一六〇一）年、家康が伏見に創建した円光寺に入り、円光寺が相国寺に移されると、そこで西笑承兌や板倉勝重らと寺社の訴訟などの政務を掌つた。また家康から木活字数十万を与えられ、伏見の円光寺で『孔子家語』・『六韜』・『貞觀政要』・『周易』等、慶長古活字本の伏見版を出版したことで知られる。『国史大辞典』【光武】光武帝・劉秀（前六年—五七年）。後漢初代の皇帝。【高祖】劉邦（前二四七年—前一九五年）。前漢初代の皇帝。【漢武】武帝・劉徹（前一四一年—前八七年）。前漢第七代の皇帝。【反魂香】焚けば死人の魂を呼び返し、その生前の姿が煙の中に現れるといわれる想像上の香。【史漢】『史記』と『漢書』。【白氏文集】書名。白居易の詩文集。【新樂府】書名。白居易撰。【東坡詩集註】書名。宋・王十朋撰。【屈原】前三四〇年頃—前二七八年頃。戦国時代の楚の政治家、文人。楚王の一族で懷王に信任されたが、傾襄王のとき中傷にあつて追放され、汨羅べきろの淵に身を

投じた。屈原の詞賦と、弟子や後人の作を集めた『楚辞』が知られる。【朱子註】朱熹『楚辞集註』八卷、弁証二卷、後記六卷。【澤蘭】『楚辞』中、屈原の作である「離騷」の一節「紉^ニ秋蘭^一以為^レ佩（秋蘭を紉ぎて以て佩と為せり）」について、朱註『楚辞集註』に「本草云。蘭與^ニ澤蘭^一相似。生^ニ水傍^一。紫莖赤節。高四五尺。綠葉光潤。尖長有^レ岐。陰小紫。花紅白色而香。五六月盛。佩飾也。」とあることによる。（岡田正之・井上哲次郎編『漢文大系・第二卷 楚辞・近思録』富山房、一九七八年、「楚辞卷一」、六〇七頁。）

▼十三

敕本朱墨

元和中。道春在^レ洛。講^ニ春秋傳及書傳^一。一時以^レ列^ニ其席^一爲^レ榮。從^レ是洛中移^レ風易^レ俗。遂顯^ニ天朝^一。敕賜^ニ宋朝類苑^一。別出^ニ敕本一部^一。加^ニ朱墨^一以備^ニ叡覽^一。春乃補^ニ脱簡^一正^ニ誤字^一。以奏^ニ獻^一之。

勅本の朱墨

元和中、道春、洛に在り、『春秋伝』及び『書伝』を講ず。一時、其の席に列するを以て榮と爲し、是れより洛中、風を移し俗を易^かふ。遂に天朝に顕はる。勅して『宋朝類苑』を賜ひ、別して勅本一部を出だし、朱墨を加へ以て叡覽に備へしむ。春、乃ち脱簡を補ひ誤字を正し、以て之れを奏献す。

○語注

【敕本朱墨】内容は「羅山年譜上」、「羅山行状」によるか。【元和中】前半は元和五（一六一九）年、後半は元和七（一六二一）年。【春秋傳】『春秋』の注釈書。「羅山年譜上」所収書名目録には関連する書名が多

数見える。【書傳】『書經』の注釈書。「羅山年譜上」所収書名目録は『書經集傳大全「孔氏附」』を載せている。【移風易俗】風俗を変えて世の中を良くすること。（「移風易俗、莫善于樂」『孝経』【天朝】ここでは後水尾天皇。【宋朝類苑】『皇朝類苑』。紹興二十三年（一一五三）年、宋刊本。南宋・江少虞編。ここで羅山が下賜されたものは、元和七（一二二）年刊の、いわゆる元和勅版。【別出敕本一部】「羅山年譜上」によれば、このとき勅本をさらに一部渡して加點等を命じたのは京都所司代の板倉重宗（天正十四「一五八六」年―明暦二「一六五七」年）。古活字本は白文であつたため。

▼十四

道春別業

寛文八年。賜道春別業地於上野^{マダマ}。及黄金貳百兩以爲興學之資^{マダマ}。其明年。尾陽亞相給匠工^{マダマ}構成。納祭器^{マダマ}。親書先聖殿額^{マダマ}。明年始行釋奠禮^{マダマ}。後大駕詣東叡山^{マダマ}時臨學。令春講堯典^{マダマ}。賜白銀若干^{マダマ}。【河善云。延喜式有諸國釋奠式^{マダマ}。吉備公入唐。得弘文館之聖像^{マダマ}。置大宰府^{マダマ}。以肆釋奠式^{マダマ}。爾後盛行諸州^{マダマ}。今存者唯足利學校而已。有聖像及十哲像^{マダマ}。尚足證^{マダマ}。上古王室中微而其禮廢久矣。至羅山先生^{マダマ}。再興其禮^{マダマ}也。」

道春の別業

寛永七（原文・寛文八）年、道春の別業の地を上野に賜ひ、及び黄金貳百兩を以て興学の資とす。其の明年、尾陽亜相、匠工を給して構成し、祭器を納め、「先聖殿」の額を親書す。明年、始めて釈奠の礼を行ふ。後に大駕あり、東叡山に詣る^{いた}。時に学に臨み、春をして『堯典』を講ぜしめ、白銀若干を賜ふ。【河善云ふ、

「『延喜式』に諸国積奠の式有り。吉備公、唐に入り、弘文館の聖像を得て帰る。大宰府に置き、以て積奠の式を肆なひ、爾後諸州に盛行す。今存する者は唯足利学校のみ。聖像及び十哲像有り、尚ほ証するに足る。上古の王室、中微し、其の礼廢れて久し。羅山先生に至り、其の礼を再興す。」

○語注

【道春別業】内容は「羅山年譜下」、「羅山行狀」によるか。【寛文八年】「羅山年譜」・「羅山行狀」によれば、寛永七（一六三〇）年の誤り。【別業】本宅以外の屋敷。【其明年】「羅山年譜」・「羅山行狀」によれば、明くる寛永八（一六三一）年ではなく、寛永九（一六三二）年。【尾陽亞相】尾張大納言徳川義直（慶長五「一六〇〇」年―慶安三「一六五〇」年）。家康の第九子、尾張家の祖。亜相は大納言の唐風の呼び名。【先聖殿】孔子廟。【明年始行ニ釋奠禮】「羅山年譜」・「羅山行狀」によれば、寛永十（一六三三）年。積奠は応仁の頃に廃絶していたが、羅山による再興の後、昌平黌や藩校でさかに行われるようになった。【大駕】天子の乗り物、転じて天子自身。「羅山年譜」は「台駕」。「台駕入先聖殿」（『羅山文集』卷第六十四）によれば、寛永十（一六三三）年七月十七日、三代將軍徳川家光が来訪した。【東叡山】上野寛永寺。【堯典】『書経』中の一編。中国の伝説上の聖天子堯の事績を載せる。「羅山行狀」によれば講じたのは首章。また前掲「台駕入先聖殿」によれば「講誦數行」。【河善】河本仲遷。名は善、三左衛門と称した。稲葉迂斎門人。丸亀藩士（『崎門學脈系譜』四六四頁）。この割注に河本仲遷の名が見えることと、無窮会織田文庫蔵『帶秋艸盧雜編八』版の目録に彼の名のあることと関連すると考えられる。【吉備公】吉備真備（持統天皇九「六九五」年―宝龜六「七七五」年）。奈良時代の政治家、学者。遣唐留学生として入唐、のち遣唐副使として再渡唐し、帰国後、大宰大貳、右大臣を歴任し、大学寮で積奠を整備した。『国史大辞典』【弘文館】唐代におか

れた図書館兼学校の名。【足利學校】下野国足利莊（現・栃木県足利市）に設けられた中世唯一の学校施設。
 【十哲】孔門の十哲。「德行、顔淵・閔子騫^{びんしけん}・冉伯牛^{ぜんはくぎゅう}・仲弓。言語、宰我・子貢。政事、冉有^{ぜんゆう}・季路。文学、子游・子夏」〔論語〕先進）

▼十五

深衣

田玄之衣^ニ深衣^一講^レ儒學^ニ。林子與^レ書曰。若非^ニ玉色程明道^一。便是深衣司馬公。於^ニ先生^一見^レ之。〔玄之江源之族。稱^ニ吉田與一郎^一。西嵯峨角倉人。一名貞順。後號^ニ素菴^一。祖宗桂善^ニ醫術^一。入^ニ明國^一。號^ニ意菴^一。父了以神祖時。請^レ命浚^ニ大堰河^一。達^ニ舩丹保津^一。民利^レ之。再奉^レ命通^ニ舩富士川^一。自^ニ岩淵^一達^ニ甲府^一。峡中居民大驚曰。非^レ魚而走^レ水恠哉。此川尤嶮。自^レ通^ニ舟路^一。民莫^レ不^レ得^ニ其利^一。玄之善^レ書。從^ニ惺窩^一學。刻^ニ史記評林^一行^ニ于世^一。代^ニ父任^一修^ニ富士川^一有^レ功。〕

深衣

田玄之、深衣^きを衣て儒學を講ず。林子、書を与へて曰く、「若し玉色の程明道に非ざれば、便ち是れ深衣の司馬公なること、先生に於て之れを見る」と。〔玄之、江源の族、吉田与一郎と称す。西嵯峨角倉の人。一名貞順。後、素菴と号す。祖宗桂、醫術を善くし、明国に入り、意菴と号す。父了以、神祖の時、命を請けて大堰河を浚ひ、舩、丹保津に達す。民、之れを利す。再び命を奉じて舩を富士川に通はし、岩淵より甲府に達す。峡中の居民、大いに驚きて曰く、「魚に非ずして水を走る、恠^めしき哉」と。此の川尤も嶮、舟路を通はしてより、民、其の利を得ざること莫し。玄之、書を善くし、惺窩に従ひて学ぶ。『史記評林』を刻

して世に行ひ、父の任に代はりて富士川を修して功有り。」

○語注

【深衣】内容は羅山の書簡「寄^二田玄之^一」『羅山文集』巻二によるか。この書簡は惺窩に宛てられたものである（林屋辰三郎『角倉素庵』一九七八年、朝日新聞社、八二頁）。書簡の内容は惺窩への讃辞であり、『墨水一滴』で「玉色程明道」や「深衣司馬公」を田玄之を評した言葉とするのは誤りである。このことは書簡末尾に付された注記からも推測される。なお割注の記述は、羅山の「吉田了以碑銘」『羅山文集』巻四十三によるものか。深衣は、古代中国で諸侯の士大夫が平常着用した服。一般の人は吉例の時に着用した。【田玄之】吉田玄之・角倉素庵（元龜二「一五七一」年—寛永九「一六三二」年）。貿易商でありながら、儒家・書家として知られた。角倉了以の子。惺窩門人で、羅山を惺窩に紹介し、また姜沆とも親交があった。書を本阿弥光悦に学び、光悦のもと、木活字を用いた嵯峨本（角倉本）を刊行したことで知られる。父・了以の海外貿易・土木事業にも協力した。『国史大辞典』【林子】林羅山。【玉色程明道】玉色は姿の美しいこと。程明道は、程顥（一〇三二年—一〇八五年）。北宋の儒者。字は伯淳。明道先生とよばれた。弟の程頤（伊川）とともに二程といわれる。著作は『二程全書』に収められた。「玉色程明道」とは「揚休山立 玉色金聲 元氣之会 渾然天成 瑞日祥雲 和風甘雨 龍德正中 厥施斯普」『朱子文集』巻一四、賛「明道先生」による。『叢書集成初編・朱子文集』中華書局出版、一九八五年）【深衣司馬公】司馬公は、司馬光、司馬溫公（一〇一九年—一〇八六年）。北宋の政治家。字は君実。『資治通鑑』の撰者。「深衣司馬公」とは「篤学力行 清修苦節 有德有言 有功有烈 深衣大帶 張拱徐趨 遺像凜然 可肅薄夫」『朱子文集』巻一四、賛「涑水先生」による。『叢書集成初編・朱子文集』中華書局出版、一九八五年）【江源】江は近江、源は

源氏。角倉家は近江佐々木氏の流れとされる。佐々木氏は宇多源氏の流れをくむ近江の豪族。【西嵯峨角倉】現・京都市右京区嵯峨天龍寺角倉町あたり。【祖宗桂】吉田宗桂（永正九「一五一二」年—元龜三「一五七二」年）。室町時代の医家。角倉了以の実父。天文八（一五三九）年、天竜寺長老策彦周良さくげんに随行して明に渡り、天文十六（一五四七）年に再度渡明した際、明帝世宗の病を療して名声を博したという。「宗忠の子宗桂、薙髪して天龍蘭若に遊ぶ。嘗て医術を学び、一旦、僧良策彦に従ひて溟渤こまを逾て大明に赴く。或る人宗桂を称して意庵と号す。蓋し諸医者意也の義に取る。本邦に還りて、其の業益々進む。」（「吉田了以碑銘」）【意菴】宗桂は明において「医は意なり」の意から意安と称された。この称は子孫代々襲称された。【父了以】角倉了以（天文二十三「一五五四」年—慶長十九「一六一四」年）。本姓は吉田氏。吉田家は代々医師であつたが、祖父が土倉業を始め、豪商としても名をなした。了以は医業を継がず、海外通商や国内の建設諸事業に進出した。徳川家康より朱印状の交付を受けて貿易船を派遣し、玄之はこの貿易事業を継承した。土木事業では、大堰川開削、富士川、天竜川の治水、京都では高瀬川を開削した。角倉家はこれらの河川の通船支配権を獲得し、また搬出材木によつて莫大な経済的利益を得た。『国史大辞典』【大堰河】京都府中部を流れる河川。亀岡盆地と京都盆地の間の山地は保津川と呼ばれる。了以は保津川を改修し、丹波地方からの物資の輸送路を開いた。【舩】小舟。【富士川】山梨県、甲斐駒ヶ岳を源流として、静岡県岩淵付近で駿河湾に注ぐ河川。了以によつて甲府盆地の流出口が開削され、中部地方と東海地方を結ぶ交通路となった。【史記評林】一三〇巻。凌稚隆輯校、李光縉増補。明代の『史記』の注釈書（富山房編輯部編『漢文大系』巻六、一九七三年、富山房）。角倉家の出版事業書目の第一が『史記』であり、この出版は慶長九（一六〇四）年頃であつたと推測されているが、この加點本は明暦三（一六五七）年の大火によつて消失した。現存する角倉本『史記』はいずれも慶長十二（一六〇七）年以降のもので、東福寺本により加點したもの、羅山

本により加点了ものなどが知られている（林屋辰三郎『角倉素庵』一九七八年、朝日新聞社、八二頁）。しかし、角倉本（嵯峨本）は宋・元豊刊本を底本とするもので、書名を『史記評林』とするのは誤りと考えられる。『史記評林』を書名とする伝本は、京都三条八尾助左衛門刊本（「八尾版」宝永十三「一六三六」年刊）と京都紅谷刊本（「紅谷版」寛文十三「一六七三」年）の二種が知られ、このうち八尾版の『史記評林』が最も盛んに行われた。（吉田賢抗『新釈漢文大系・史記（一）』明治書院、一九七三年、解説参照。）

▼十六

友梅 莊子

友梅雪村。居^レ元二十年東歸。舟中讀^二莊子^一。一葉閱了。即破投^レ海。遂至^レ盡矣。人問^二其故^一。曰我已諳焉。故紙奚爲。

友梅『莊子』

友梅雪村、元に居ること二十年にして東歸す。舟中に『莊子』を読み、一葉読み了れば即ち破りて海に投じ、遂に尽くるに至る。人、其の故を問ふ。曰く、「我已に諳^{まづらん}ず。故紙^{なに}奚^せか爲む」と。

○語注

【友梅莊子】内容は「岷峨集序呈^{ぐんが}惺齋先生^二」（『羅山文集』卷四十八）によるか。【友梅雪村】雪村友梅（正応三「一二九〇」年—正平元「一二四六」年）。五山文学隆盛期に活躍した臨済宗一山派の僧。越後白鳥（現・新潟県長岡市白鳥町）の人。十八歳で元に渡って諸山を歴訪し、文宗の勅によって翠微寺に住した。翌年（元

徳元「一三二九」年、帰国、京都万寿寺、建仁寺に歴住した。著『岷峨集』。太清宗渭『雪村大和尚行道記』がある。

▼十七

二十八頌

建仁寺大龍雪村。年十八入_レ元。元人以爲_二倭賊_一。捕將_レ斬_レ之。友梅求_二紙筆_一。吏意供_レ状。乃授_レ之。梅輒以下佛光所_レ謂乾坤無_レ地_一卓_二孤筇_一。且喜人空法亦空。珍重大元三尺劔。電光影裏截_二春風_一。二十八字上爲_レ韻。立作_二頌二十八首_一。詞語正整。字畫粲然。元人見而大奇_レ之。扶去_レ之。後元欲_レ擊_二日本_一。使_三梅爲_二前導_一。梅不_レ從。怒遷_二梅閩蜀_一。遂住_二翠微寺_一。徧遊_二蜀中_一。故所_レ著集名曰_二岷峨集_一。

二十八頌

建仁寺の大龍雪村、年十八にして元に入る。元人、以て倭賊と爲し、捕へて將に之れを斬らんとす。友梅、紙筆を求むるに、吏意状を供へ、乃ち之れを授く。梅、輒ち仏光の所謂「乾坤、孤筇を卓するに地無し。且喜すらくは人空法も亦空なることを。珍重す、大元三尺の劔。電光影裏、春風を截る」の二十八字を以て韻を爲し、立ちて頌二十八首を作る。詞語正整、字画粲然、元人見て大いに之れを奇とし、扶けて之れを去らしむ。後に元、日本を撃たんと欲す。梅をして前導を爲さしむ。梅、従はず。怒りて梅を閩・蜀へ遷す。遂に翠微寺に住み、徧く蜀中へ遊ぶ。故に著す所の集、名づけて『岷峨_{びんが}集』と曰ふ。

○語注

【二十八頌】内容は「岷峨集序呈惺菴先生」（『羅山文集』卷四十八）によるか。ただし異同あり。誤読か、他の出典によるものか不明。【建仁寺】臨済宗建仁寺派の大本山。京都五山のひとつ。【大龍雪村】雪村友梅。【倭賊】倭寇。【佛光】無学祖元（一二二六年—弘安九「一二八六」年）の諱号。臨済宗の渡来僧。仏光派の祖。明州（浙江省）の人。弘安二（一二七九）年に来朝し、北条時宗が円覚寺を開創して開山に迎えた。『仏光録』十卷。【乾坤無レ地卓孤筈】。且喜人空法亦空。珍重大元三尺劒。電光影裏截「春風」。元軍が寺に侵入したおり、無学祖元がこの句を吟じて事なきを得たという逸話による。『元亨釈書』卷八（『大日本仏教全書』卷六二、講談社、一九七三年。）【元欲レ撃「日本」】いわゆる元寇は文永十一（一二七四）年と弘安四（一二八二）年の二回にわたって行われたもので、雪村友梅の大陸滞在の時期と合わない。フビライの死後、後を継いだ成宗が、正安元（一二九九）年に禅僧・一山一寧を日本へ派遣したのが交渉を試みた最後とされるが、それとも合わない。【閩】中国福建省の古名。【蜀】中国四川省の古名。【翠微寺】長安南山翠微寺。【岷峨集】雪村友梅の著作。雪村は長安に流謫されたのち四川成都に編置され、大赦後、長安南山翠微寺に住した。『岷峨集』は在元時代の詩偈を集めたもの。帰朝後の作である『寶覺眞空禪師語録』とを総称して『岷峨集』とする場合もある。（上村観光編『五山文学全集』卷一、思文閣出版、一九九二年）

▼十八

大燈國師

紫野大燈國師。初爲「丐人」。時居「五條橋下」有「年」矣。其門徒作「行狀年譜」。皆諱而無「載」。獨狂雲子宗順作「贊曰」。風浪露宿無「人犯」。第五橋邊十五年。世傳妙超侍者。播磨人。弱齡問「法顯密家」。而不「滿」意。欲「入」元求「法」。遂赴「霸家臺」。適遇「僧紹明歸」自「元」。就「明」而參禪嗣法。超有「妻子」。爲「斷」恩愛。

「使妻買酒。因閉^レ戸殺^二其^二歳兒^一。串^二炙^一之。及^二妻還^一。乃噉^二炙兒^一以飲。妻大叫喚而出。超亦出不^レ反。是^マ燈國師也。

大燈国師

紫野の大燈国師、初め^{かいじん}丐人たる時、五條橋の下に居ること年有り。其の門徒、「行状」・「年譜」を作るに、皆諱みて載すること無し。独り狂雲子宗順、贊を作りて曰く、「風餐露宿、人の犯す無し。第五橋の辺十五年」と。世伝ふ、妙超侍者は播磨の人なり。弱齡にして法を顕密の家に問ひて意に満たず。元に入りて法を求めんと欲し、遂に^は覇家^{かた}台に赴く。適僧^{あたえ}紹明の元より歸るに遇ふ。明に就きて參禪嗣法す。超、妻子有り。恩愛を斷たん為に、妻をして酒を買はしめ、因りて戸を閉ぢ、其の二歳の児を殺し、之れを串にし炙る。妻還るに及びて、乃ち炙れる児を噉ひ以て飲む。妻大いに叫喚して出づ。超も亦出でて反らず。是れ大（原文空欄）燈国師なり。

○語注

【大燈國師】内容は「告^二禪徒^一」（『羅山文集』卷五十六）によるか。織田文庫本「目錄」によれば「藤欽夫方正」以下「大燈國師」までの十八節は河本仲遷撰。【紫野】京都市北区の地名。大燈国師の開山になる大徳寺がある。【大燈國師】宗峰妙超（弘安五「一二八二」年—延元二・建武四「一三三七」年）。臨済宗の僧。播磨（兵庫県）の人。書写山で天台を学ぶが、その後禪に転じ、宋より帰国した南浦紹明に師事した。本文中紹明が元から帰国したとあるのは誤り（ただし大燈国師が渡航しようと考えた頃にはすでに明は滅び、元となっていた）。大徳寺を開山、臨済宗大徳寺派の始祖。【丐人】乞人。【五條橋】京都五条大橋。【狂雲子

宗順】一休宗純（応永元「一三九四」年—文明十三「一四八一」年）。臨済宗の僧。宗純は諱、宗順と書く場合もある（底本文の「宗順」欄外「純力」）。号は狂雲子、瞎驢、夢閨など。大徳寺第四十七代住持。【風浪露宿無三人犯】。第五橋邊十五年。】一休宗純『狂雲集』「題ス大燈国師行状末ニ」によるが、語句に異同がある（挑起大燈輝一天 鸞輿競着法堂前 風浪水宿無人記 第五橋辺二十年（「文安三年五十三歳偈」）。「風浪水宿」は風雨に晒される頭陀乞食行。（市川白弦・入矢義高・柳田聖山校注『日本思想大系 16 中世禪家の思想』岩波書店、一九七二年、二七六頁）【侍者】禪寺で仏菩薩や師僧、長老などに仕えて、給仕の任などの雑用に当たる者。【霸家臺】博多。ただし宗峰妙超が南浦紹明に会った場所は京都だと言われている。【僧紹明】南浦紹明（嘉禎元「一二三五」年—延慶一「一三〇八」年）。臨済宗の僧。鎌倉建長寺の蘭溪道隆に師事、二十五歳で入宋し、文永四（一二六七）年帰朝した。

▼十九

闇齋從「群兒」戯

闇齋五六歳。嘗與「群兒」遊戲。有「人」來過。乃曰。兒曹各應「自有」藝。爲「吾」皆盡「其所」有。群兒或歌或舞。其人輒出「花糖」。以與「歌舞者」。闇在「側」大泣。人曰。兒止「之」。亦與「汝」。乃又與「之」。闇卻「之」云。吾不「爲」欲「糖」而爾「也」。人皆有「所」能矣。吾獨無焉。是以泣。

闇齋、群兒に従ひて戯る

闇齋五・六歳、嘗て群兒と遊戲す。人有り、來過して乃ち曰く、「兒曹、各自ら芸有るべし。吾が爲に皆其の有る所を尽くせ」と。群兒、或は歌ひ或は舞ふ。其の人、輒ち花糖を出だし、以て歌舞する者に与ふ。

闇、側に在りて大泣す。人曰く、「児、之れを止めよ。亦汝に与へん」と。乃ち又之れに与ふ。闇、之れを卻（原文・卻）けて云ふ、「吾、糖を欲せん為に爾^{しか}するにあらず。人皆能くする所有れども、吾独り無し。是を以て泣くなり」と。

○語注

【闇齋從二群兒一戲】織田文庫本「目錄」によれば、「闇齋從二群兒一戲」および「巧言令色」は中山專庵撰。
【闇齋】山崎闇齋（元和四「一六一八」年—寛永元「一六八二」年）。京都の人。名は嘉、字は敬義、通称嘉右衛門、別号垂加。僧となるが、のち還俗して純正程朱学を唱導、佐藤直方、浅見綱齋、三宅尚齋など多数の門人を養成した。後年、垂加神道を創始し、垂加靈社と号した。著作は『文会筆録』他。

▼二十

巧言令色

闇齋與二門人一講二論語一。毎レ至二巧言令色章一。未二始及レ解二文義一。只嗟歎少選云。信然信然。

巧言令色

闇齋、門人の与に『論語』を講ず。「巧言令色」の章に至る毎に、未だ始めて文義を解するに及ばず、只嗟歎すること少選にして云ふ、「信^{まこと}に然り、信に然り」と。

○語注

【巧言令色章】「子曰。巧言令色鮮矣仁。」（『論語』学而）【少選】少したつて。

▼二十一

闇齋詩

闇齋不_レ學_二詩賦_一。偶有_二適意_一。則吟出杜撰。嘗云。李杜用_レ平處。吾亦押_レ平。李杜置_レ仄者。吾何不_レ就_レ仄。

闇齋の詩

闇齋、詩賦を学ばず。偶^{たま}適意有らば、則ち吟出するも杜撰なり。嘗て云ふ、「李・杜の平を用ゐる處、吾も亦平を押す。李・杜の仄を置く者、吾何ぞ仄に就かざらん」と。

○語注

【闇齋詩】織田文庫本「目錄」によれば、前節「巧言令色」までは別人の筆によるもので、「闇齋詩」以下末尾までが稲葉黙齋撰という。【李杜】李白と杜甫。【平】六朝および唐宋時代の四種の声調のひとつ。平^{ひよう}声^{しょう}。【仄】仄声。平声以外の声調。上声、去声、入声。

▼二十二

師力三分

佐藤子嘗語_二先君_一云。闇齋先生見_二佐渡州有_二金氣_一。既辨驗定。而至_下熟_二知礦脈_一。施鑷鑿發之功_上。則吾

與三十二「淺見安正俗稱」在。

師の力三分す

佐藤子、嘗て先君に語りて云ふ、「闇齋先生、佐渡州に金氣有るを見、既に弁驗し定む。而して礦脈を熟知し、施鑿鑿發の功に至りて、則ち吾と十二「淺見安正の俗稱」とに在り」と。

○語注

【佐藤子】佐藤直方（慶安三「一六五〇」年—享保四「一七一九」年）。備後福山の人。闇齋門人であつたが、のちに闇齋の敬内義外説や垂加神道説に異議を唱えて破門された。三宅尚齋、淺見綱齋とともに崎門三傑のひとり。福山侯水野氏、厩橋侯酒井氏、彦根侯井伊氏に仕えた。著作は『韞藏録』他。【先君】稻葉黙齋の父・稻葉迂齋（貞享元「一六八四年—宝暦十「一七六〇」年）。名は正義、十左衛門と称した。江戸の人。佐藤直方門人。唐津藩儒。著作は『迂齋文集』他。【施鑿鑿發】鑿はくわ、鑿はのみ。【淺見安正】淺見綱齋（承応元「一六五二」年—正徳元「一七一」年）。近江高島の人。山崎闇齋門人。崎門三傑のひとり。『靖献遺言』他、著作は数多い。

▼二十三

別號

本國姓字多不_レ雅。故文人騷士。各爲_二別號_一。以效_二華人_一。佐藤子自稱_二五郎左衛門_一。又無_二別稱_一。或人疑。淺見三宅實公同帷。亦皆有_二齋號_一。公何獨無_レ之。佐藤云。吾今假令入_二清國_一。尚以_二五郎左衛門_一行。

「川口子深斯文源流。以『剛齋』爲『佐藤子之號』者誤矣。門人野田德勝稱『剛齋』。」

別号

本国の姓、字多くして雅ならず。故に文人・騷士、各別号おのおのを為して以て華人に效ならふ。佐藤子、自ら五郎左衛門と称し、又別称無し。或人疑ふ、「浅見・三宅、実に公の同帷、亦皆齋号有り。公、何ぞ独り之れ無きや」と。佐藤云ふ、「吾、今仮令清国に入らんも、尚五郎左衛門を以て行かん」と。「川口子深『斯文源流』、剛齋を以て佐藤子の号と為すは誤れり。門人野田德勝、剛齋と称す。」

○語注

【騷士】騷は憂える。騷人、騷客は詩人の意。【川口子深斯文源流】河口静齋『斯文源流』。寛延三（一七五〇）年成立、宝暦八（一七五八）年刊。のち太田蜀山人編『三十幅』みそのや（享和三「一八〇三」年自序）に収められた。『近古文芸温知叢書』第三編（岸上操編、内藤耻叟・小宮山綏介標註、博文館、一八九一年）所収。ただし『近古文芸温知叢書』版には、右に記されたような「剛齋」の文字は見えない。『三十幅』採録にあたり削除されたか。【野田德勝】野田剛齋（元禄三「一六九〇」年—明和五「一七六八」年）。江戸の人。佐藤直方門人。三宅尚齋にも学んだ。家は代々幕臣であつたが、剛齋は隠居して仕えなかつた。本所石原に住んだ。（『日本道學淵源録・續録』六二五頁）

▼二十四

理一分殊

穎悟敏達之士。入^二佐藤子之門^一。渙然冰解者多矣。其妙理超絶而拔^二意言外^一故也。一日與^二學者^一。論^二理一分殊^一。譬喻百出。懸河不^レ竭。因指^二几前唾盂^一曰。看此唾壺中物。本我口中津。既唾去。不^レ堪^二復嘗^一之。非^二分殊^一乎。

理一・分殊

穎悟敏達の士、佐藤子の門に入り、渙然冰解する者多し。其の妙理超絶にして、意を言外に抜く故なり。一日、学者と理一・分殊を論ず。譬喻百出、懸河竭きず。因りて几前の唾盂を指して曰く、「看よ、此の唾壺中の物、本我が口中の津。既に唾し去れば、復^{また}之れを嘗むるに堪へず。分殊に非ずや」と。

○語注

【理一分殊】理一（太極）の理、分殊（個物）の理。理についての考え方。程伊川による。朱子はこれをもとに、太極という理一が散在し、分殊という個物に在るとした。（高島元洋『山崎闇齋』三四頁他）【渙然冰解】渙然氷積。渙然は溶け散るさま、氷積は疑いが氷のように解け去ること。「渙若^二氷之將^レ積^一」『老子』【懸河】上から吊り下げた川の意で、水が激しく流れてとどまらない喩え。「懸河之弁」で、よどみない弁舌。

▼二十五

通鑑綱目

吾黨先輩。訓^二點經史^一。其簡帙重大者。以^二通鑑綱目^一爲^レ魁。初鵜金平成童爲^二訓點^一。當時稱^二卓越^一。後

三宅道乙改訂新刻。破_レ産始成。二氏本並_二行于世_一。綱齋尤愛_二綱目之書_一。校讐討論。自讀_二之學舍_一者。無慮至_二四十二回_一。佐藤子曰。雖_三綱目續_二春秋之旨_一。而熟讀四十二遍。何又必然。及_下後淺見訓_二點朱子文集_一。無_中一字舛繆_一義不_上通。學者大服_二淺見強識_一。然平素至_二經義奧妙_一。則淺見推_二佐藤_一居多。嘗詰_二難中庸第二十五之一章_一。都二十五會而終。二子每以_レ此爲_二話柄_一。以示_三經旨之難_二領會_一。

『通鑑綱目』

吾党の先輩、經史を訓点す。其の簡帙^{かんち}の重大なる者、『通鑑綱目』を以て魁と爲す。初め鵜金平、成童にして訓点を爲し、当時卓越を称す。後、三宅道乙、改訂・新刻す。産を破り始めて成る。二氏の本、世に行す。綱齋、尤も『綱目』の書を愛づ。校讐・討論し、自ら之れを学舎に読むこと、無慮四十二回に至る。佐藤子曰く、「『綱目』、『春秋』の旨を續ぐと雖も、熟読すること四十二遍、何ぞ又必ずしも然らん」と。後に浅見、『朱子文集』を訓点し、一字の舛繆^{せん}、一義の通らざること無きに及びて、学者、大いに浅見の強識に服す。然して平素經義の奥妙に至れば、則ち浅見、佐藤を推すこと多きに居る。嘗て『中庸』第二十五の一章を詰難すること、都て二十五会にして終ふ。二子、毎に此れを以て話柄と爲し、以て經旨の領会し難きを示す。

○語注

【通鑑綱目】書名。『資治通鑑綱目』全五十九卷。司馬光著『資治通鑑』を、朱子が儒教的名分論に基づいて綱目に編集した史書。【簡帙】書物。【鵜金平】鵜飼金平（寛永十「一六三三」年—元禄六「一六九三」年）。鍊齋、名は眞昌、字は子欽。はじめ山崎闇齋に、のち浅見綱齋に学んだ。京都の人。水戸藩徳川光圀に仕え、

史臣として『大日本史』の編纂に携わった。『日本道學淵源録・續録』六一四頁）【三宅道乙】三宅鞏革齋（慶長十九「一六一四」年—延宝三「一六七五」年）。名は道乙、字は子燕、号は鞏革齋、また大遺齋・研山樵夫等の諸号がある。通称忠兵衛、のち道乙と称した。京都の人。道乙はもと合田氏、十八歳で藤原惺窩と親交のあつた朱子学者の三宅寄齋（天正八「一五八〇」年—慶安二「一六四九」年）の養子となった。道乙は史学に長じたため、『通鑑綱目』の刊行を勧める人があつた。道乙はみづから訓点を施し、私財を投じて刊行を達成した。途中、鵜飼石斎（鵜飼金平）の事業を伝え聞いたという。三十六歳のとき寄齋が没すると、「家礼」により儒式の葬儀を執り行い、『喪祭二禮節解』を著した。儒者による喪祭儀礼に関する議論はこれより始まったといわれる。また紀伊公徳川綱教、備前侯池田光政、津侯藤堂高治などに進講した。著書に『祭禮節解』、『喪禮節解』各二卷、『慎修筆記』四卷、『大遺齋文集』十卷、詩集六卷、和歌集一卷などがある。『先哲叢談続編』卷二（『近世文芸者伝記叢書』第四卷、ゆまに書房、一九八八年、四六六—四七二頁）【校讐】書物を対照してその異同を正すこと。【春秋】周代の魯を中心とした歴史書。魯の史官の記録に、孔子が筆削を加えたものとされ、このため五經の一つに数えられた。【淺見訓二點朱子文集一】『晦庵先生朱文公文集』百卷、続集十一卷、別集十卷。正徳元（一七一）年、京都壽文堂より刊行された。岡田武彦等輯『和刻影印近世漢籍叢刊思想編 日本』三・四編、民國六一—六四年、臺灣廣文書局（一九七七—一九八四年、京都中文出版社）、所収。【舛繆】誤り。【中庸第二十五】「誠者自成也。而道自道也。誠者物之終始。不誠無物。是故君子誠之爲貴。誠者非自成己而已也。所以成物也。成己仁也。成物知也。性之徳也。合外内之道也。故時措之宜也。」

▼二十六

三千子

黒岩慈菴。雲川剛毅。在「闇齋之門」。未^レ有^二達者之名^一。剛毅點^二五經白文^一。頗精當。然書肆壽文。恐^レ不^レ售^二於世^一。私加^二闇齋點三字於狹簽^一。慈菴點^二朱子書節要^一。多不^レ做^二文意^一。同舍生相語曰。慈殆亦誦^二十八史略的^一。佐藤直方每^二人詆^二同門紕漏^一乃云。本是在^二三千子之員^一。

三千子

黒岩慈菴・雲川剛毅、闇齋の門に在りて、未だ達者の名有らず。剛毅、五經の白文を点す。頗る精當、然るに書肆壽文、世に售れざることを恐れ、私に「闇齋点」の三字を狹簽に加ふ。慈菴、『朱子書節要』を点し、多く文意を做さず。同舍の生相語りて曰く、「慈、殆ど亦『十八史略』的を誦するや」と。佐藤直方、人の同門の紕漏を詆る毎に乃ち云ふ、「本是れ三千子の員に在り」と。

○語注

【黒岩慈菴】寛永四（一六二七）年—宝永二（一七〇五）年。名は恒、東峯、震翁と号した。土佐の人。野中兼山に学び、のち山崎闇齋の門人となる。土佐藩儒、のち福岡藩に仕えた。著作は『歴代君臣要略』『除患録』『人鬼論』他。『日本道學淵源録・續録』六〇二—三頁、『崎門學脈系譜』四五七頁、阿部吉雄『日本朱子學と朝鮮』四三七、四六三—四頁、『国書総目録』【雲川剛毅】雲川弘毅の誤り。号は春庵、別号は芳謙齋、治兵衛（治平）と称した。京都の人。山崎闇齋門人。早世した。著作は『心學辨』、『聖謨』。『日本道學淵源録・續録』五九四頁、『崎門學脈系譜』四五七頁、『国書総目録』【剛毅點^二五經白文^一】剛毅は弘毅の誤り。山崎闇齋点、雲川弘毅改定、明和刊の刊本があり、安永二（一七七三）年、京勝村治右衛門・京

勝村治右衛門等が重版したものが、残されている。【壽文】京都の書肆である寿文堂を指す。寿文堂の主人・武村市兵衛は山崎闇齋門人『崎門學脈系譜』四五九頁。寿文堂は闇齋著作の刊行を数多く手がけた。【狭筭】書物の標題。【朱子書節要】書名。李退溪（一五〇一年—一五七〇年）編。朱子の書簡中から学問や日用の工夫に関して述べた文章をまとめたもの。闇齋学派で、この書を推奨したため、日本では版が重ねられた。（阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』一六三頁）【十八史略】書名。『古今歴代十八史略』。元代につくられた簡略な中国史書。曾先之撰。日本では室町期以来読まれ、江戸期には初学者用の歴史書として盛んに用いられた。【紕漏】紕はあやまりの意。【三千子】孔子の弟子の数。「孔子、詩書礼楽を以て教ふ。弟子蓋し三千、身、六芸に通ずる者、七十有二人あり」（『史記』孔子世家）、「夫子の門人は蓋し三千有り」（『孔子家語』弟子行）。（吉田賢抗『新釈漢文大系 87・史記（世家下）』明治書院、一九八二年、八七一頁、宇野精一『新釈漢文大系 53・孔子家語』明治書院、一九九六年、一五一頁）

▼二十七

中庸

忠精可_レ以_レ感_レ。誠敬可_レ以_レ服_レ。雖_レ然未_レ至_二至處_一。何以語_二中庸_一。佐藤子語_二先君_一云。屈原何故沈_二汨羅_一。西山尊_二信小學_一如_二神明_一。何必爾。

中庸

忠精以て感ずべし。誠敬以て服すべし。然りと雖も未だ至処に至らずは、何を以て中庸を語らん。佐藤子、先君に語りて云ふ、「屈原、何の故にか汨羅_{（べきろ）}に沈まん。西山、『小学』を尊信すること神明の如し。何ぞ必

ずしも爾からん」と。

○語注

【忠精】真心。忠義な心。「公死於_レ今六百年、忠精赫赫雷當_レ天。」（文天祥「過_二平原_一作」）【誠敬】存誠と居敬。元倡寺本「西山」欄外に「誠敬」の書き込みがあり、「誠敬」の例が「西山」であることを示している（ただし「西山」は「魯斎」の誤り。後述）。【先君】稲葉迂斎。【屈原何故沈_二汨羅_一】屈原（前三四〇年？—前二七八年？）は戦国時代の楚国の忠臣。初め懷王に仕えたが、讒言によつて地位を失った。その後、懷王は秦に大敗して捕らえられ、客死したものの、ついで即位した襄王は屈原を追放し、以後、屈原は祖国への忠誠と奸臣への憤怒を抱きつつ放浪し、最後は汨羅（湖南省湘陰県の北を流れる川）に身を投げて死んだ。元倡寺本「沈_二汨羅_一」の欄外に「忠精」の書き込みがある。朱子『楚辞集註』に「原之爲_レ人。其志行雖_下或過_二於中庸_一不_レ可_二以爲_レ法。然皆出_二於忠君愛國之誠心_一。」（『楚辞集註目錄』（岡田正之・井上哲次郎校訂、富山房編輯部編『漢文大系』巻二一、一九七八年、一六頁）とある。崎門学派はこれを受け、屈原の自殺に関して概して批判的であった。【西山】西山は真西山（德秀）（一一七八年—一二三五年）。朱子の没後、道学の再興に尽力した思想家として知られ（伊東倫厚『真西山』、『朱子学大系 巻一〇 朱子の後継（上）』明徳出版社、一九七六年、四頁）参照）、崎門で重視された。山崎闇斎『文会筆録』十九に「朱子之後大儒西山大学衍義有_レ補_二於治道_一」とある（日本古典学会編『山崎闇斎全集』巻二、ペリカン社、一九七八年、一七〇頁）。ただし元倡寺本欄外に「西山必魯斎之誤」の書き込みがあり、『小学』を尊信したのは真西山ではなく、元の許衡（許魯斎）（一二〇九年—一二八一年）であるとしている。許衡には『小學大義』の著作があり、同書に「當其幼時。若不先習之於小學。則無以収其放心。養其德性。」「小學之本源。合内外而兩

觀之。則小學之規模節目。無所不備。」などとある。(湯川敬弘「許魯齋」(前掲『朱子学大系 卷一〇 朱子の後継(上)』二四〜二六頁)、『朱子学大系 卷一〇 朱子の後継(上)』四七五〜四七七頁)【小學】朱子の監修の下、劉清之らが編纂した書。初学者に日常の礼儀作法や長上に仕え友と交わる道などを説く。

▼二十八

雲川氏

闇齋學者相集飲_ニ于東山_一。諸人吟哦談笑。縱_ニ心事外_一。雲川剛毅嚴然端坐。神氣不_レ接。尚齋從_レ旁云。今日之會。名勝風月。君亦少欣適。剛毅正_レ色云。吾固欣適。

雲川氏

闇齋の學者、相集ひて東山に飲す。諸人、吟哦談笑し、心を事外に縱_{ゆる}す。雲川剛毅_マ、嚴然と端坐し、神氣接_{まじ}はらず。尚齋、旁らより云ふ、「今日の会、名勝風月、君も亦少しく欣適せよ」と。剛毅_マ、色を正して云ふ、「吾、固より欣適す」と。

○語注

【雲川氏】雲川弘毅。文中「剛毅」は誤り。【神氣】精神。【事外】俗界の外。

▼二十九

蛇氣

佐藤與^三永井玄厚^一手帖。呼^ニ與^三左者^一。謂^三色莊無^ニ知解^一。與^三左一邦君邸官。留^ニ浪華^一司^ニ羅糶^一。因^下一饒商饗^ニ國老某大夫^一觀遊^上。與^三左亦陪從^一。大夫容貌肥大。尤富^ニ威儀^一。路上緩歩濶視寡^ニ語言^一。時會虹見^ニ東方^一。大夫見^レ之亦不^ニ輕語^一。乃徐顧^ニ與^三左與^一一商^ニ云。爾曹嘗知^レ虹。一商與^ニ與^三左^一稽首云。僕等不學亦烏識。願承^レ教。大夫直視良久曰。與^三左。虹是蛇吐氣。

蛇氣

佐藤、永井玄厚に与ふる手帖に、与三左なる者を呼びて、色莊、知解無しと謂ふ。与三左、一邦君の邸官なり。浪華に留まりて羅糶を司る。一饒商、国老某大夫を饗して觀遊するに因りて、与三左、亦陪從す。大夫、容貌肥大、尤も威儀に富む。路上緩歩濶視して語言寡し。時に会^ふ虹東方に見ゆ。大夫、之れを見て亦輕語せず。乃ち徐ろに与三左と一商とを顧みて云ふ、「爾曹、嘗て虹を知るや」と。一商と与三左、稽首して云ふ、「僕等、不學、亦烏くんぞ識らん、願はくは教へを承らん」と。大夫、直視して良久しくして曰く、「与三左、虹は是れ蛇の吐氣なり」と。

○語注

【蛇氣】默齋『道学標的講義』に同話がある。【永井玄厚】永井隱求の父。隱求（元禄二「一六八九」年—元文五「一七四〇」年）は佐藤直方門人。「君姓永井氏。諱行達。稱三右衛門。號隱求。又養庵。父玄厚。母大沼氏。」（『日本道學淵源録・續録』六二七頁）【手帖】佐藤直方『韞藏録』に永井玄厚に宛てたとみられる書簡の写しがあり、「与三左がうろたえぬ顔をして居候へどもソレガう路たへにて候」とある。（「拾遺」卷十二（日本古典学会編『増補・佐藤直方全集』巻二、ぺりかん社、一九七九年、二二四頁）【與三左】前

掲『道学標的講義』では「與惣左」。不詳。【色莊】真心がなく、顔つきだけが真面目なこと。「論篤是与、君子者乎、色莊者乎」(『論語』先進)【糴糶】米の売買。【潤視】遠くを見る。

▼三十

有谷婆

佐藤之門。稱_レ不_レ通_レ理曰_二有谷婆_一。有谷氏畜_二一爨婆_一。婆極癯。更無_二一得_一。專阿_二一好茶煙_一。主人一日謂_レ婆云。汝終日啜_レ茶吸_レ煙。若官軍令_三汝禁_二其_一。則將止_レ茶乎。抑烟乎。婆撫然云。有_レ此哉。主公之拘也。官軍烏識_レ婆。主人云。是然。然若有_二官軍禁_レ之。則汝孰止_レ。婆尚未_レ解云。官軍至尊。理應_レ不_レ識_レ婆。又豈管_三婆好_二茶煙_一。主人再三_二之_一。而婆執而不_レ曉。因笑而置焉。未_レ幾。一士人來訪。士人與_二主人_一尤密。以_レ故於_レ婆亦有_レ舊。主人乃舉_二前話_一以爲_二笑囿_一。士人聽_レ之思念漸答云。婆之言恐有_レ理。

有谷の婆

佐藤の門、理に通ぜざるを称して「有谷の婆」と曰ふ。有谷氏、一爨婆を畜_{たくは}ふ。婆、極めて癯_{おろ}か、更に一得無し。専ら茶煙を阿好す。主人、一日婆に謂ひて云ふ、「汝、終日茶を啜り煙を吸ふ。若し官軍汝をして其の一を禁ぜしめば、則ち將た茶を止めんか、抑も烟か」と。婆、撫(原文・撫)然として云ふ、「此れ有らん哉。主公の拘なる、官軍烏ぞ婆を識らん」と。主人云ふ、「是れ然り。然るに若し官軍之れを禁ずる」と有らば、則ち汝孰_{いづ}れを止めん」と。婆、尚ほ未だ解せずして云ふ、「官軍至尊、理、応に婆を識らざるべし。又豈_め婆の茶煙を好むを管せん」と。主人之れを再三すれども、婆、執にして曉らず。因りて笑ひて置く。未だ幾くならずして、一士人來訪す。士人、主人と尤も密、故を以て婆に於ても亦旧有り。主人乃ち前話を

挙げて以て笑囔と為す。士人、之れを聴き思念して漸く答へて云ふ、「婆の言、恐らく理有り」と。

○語注

【有谷婆】元倡寺本「有谷」にユフヤのルビあり。【有谷氏】不詳。【爨婆】飯炊きの老女。【一得】ひとつの取り柄。【阿好】好む所におもねる。

▼三十一

梁惠王

鳥山紀長關東衛士。入^二佐藤子之門^一。與^二瞽澤^一友善。一日澤一往宿語。紀長資性僂率。不^三曾飾^二言辭^一。偶談及^二論孟^一。乃率然曰。吾儕無^二一善^一。要^レ之亦只不仁哉。梁惠王屬。澤一聞^レ之不^レ應。逡巡退避便請^レ去。紀長驚愕曰。今夜更深。亦復何爾。澤一肅然云。瞽者百賴^レ人矣。公自稱曰^二不仁^一。萬一有^二不虞^一。恐不^レ相^レ僕。

梁の恵王

鳥山紀長は關東の衛士、佐藤子の門に入る。瞽^{たまたま}澤一と友善し、一日、沢一往きて宿語す。紀長、資性僂率、曾て言辭を飾らず。偶談『論』・『孟』に及ぶ。乃ち率然として曰く、「吾儕、一善無し。之れを要するに亦只不仁なる哉。梁の恵王の属なり」と。沢一、之れを聞きて応ぜず。逡巡退避して便ち去るを請ふ。紀長、驚愕して曰く、「今夜更深、亦復何ぞ爾^{また}る」と。沢一、肅然として云ふ、「瞽者は百人に頼る。公自ら称して不仁と曰ふ。万一不虞有らば恐らくは僕を相^{たす}けじ」と。

○語注

【梁惠王】黙齋『清谷話録』に同話がある。【鳥山紀長】江戸の人。幕臣。稻葉迂齋門人。（『崎門學脈系譜』四六六頁）【衛士】宮城を守る兵士。【瞽澤一】大神澤一（貞享元「一六八四」年—享保十「一七二五」年）。佐藤直方門人。筑前国佐原（早良）郡原村（現・福岡県福岡市早良区原）の人。兄弟は黒田侯の家臣。幼少時に眼疾によつて視力を失つて針医となるが、貝原篤信門下の竹田氏に学び、のち直方の門人となった。同門の迂齋と親交があつた（『日本道學淵源録・續録』六二八頁、『崎門學脈系譜』四六二頁、稻葉迂齋「澤一小傳」（『迂齋文集』所収）。なお原文「瞽」は盲人の意。同じ表現は五十一話にもある。【篋率】大雑把で飾り氣がないこと。【梁惠王】戦国時代の魏（梁）の第三代の王。「孟子曰、不仁哉、梁惠王也。仁者以其所愛、及其所不愛、不仁者以其所不愛、及其所愛。」（『孟子』盡心章句下）

▼三十二

就正夙慧

有_レ客在_二佐藤翁燕坐_一戲談。一村漢就_二茶博士_一肆_二茶儀_一。坐起周還尤苦。迨_二其啜_レ茶。忽吹_レ之使_レ冷。坐上人遽叱。村漢長息云。吹尚不_レ敢。時翁子就正。纔七歳。從_レ旁聽_レ之。時有_三門人献_二柑實_一。就正欲_レ之。夫人不_レ與。就正乃曰。只剝_二陳皮_一可乎。夫人又不_レ許。就正云。剝尚不_レ敢。便舉_二前話_一。坐中大賞_レ之。就正稱_二彦八_一。翁卒年十一。翁嘗托_三門人野田德勝・永井行達_一與_二先君子_一。及_レ長稍得_二翁之學脈_一。正信幼就_レ之讀_二左氏傳_一。延享中罹_レ病没。

就正夙慧

客有り、佐藤翁の燕坐に在りて戲談す。「一村漢、茶博士に就きて茶儀を肄ふ。坐起周還、尤も苦しむ。其の茶を啜るに^{およ}迫び、忽ち之れを吹きて冷ならしむ。坐上の人、遽かに叱す。村漢、長息して云ふ、「吹くこと、尚ほ敢へてせざらんや」と。時に翁の子就正、纔かに七歳なり。旁らより之れを聴く。時に門人の柑実を献ずる有り。就正、之れを欲す。夫人与へず。就正乃ち曰く、「只陳皮を剥くは可ならんか」と。夫人又許さず。就正云ふ、「剥くこと、尚ほ敢へてせざらんや」と。便ち前話を挙ぐ。坐中大いに之れを賞す。就正、彦八と称す。翁卒する、年十一。翁、嘗て門人野田徳勝、永井行達と先君子とに托す。長ずるに及び^{やが}稍翁の学脈を得。正信、幼にして之れに就きて『左氏伝』を読む。延享中、病に罹りて没す。

○語注

【就正】佐藤就正。宝永五（一七〇八）—延享四（一七四七）年。佐藤直方の子。号、謙斎。稻葉迂斎にも学んだ（『崎門學脈系譜』四六—二頁）。直方が没したのは享保四（一七一九）年。【夙慧】幼い頃から賢いこと。【茶博士】茶道の名人。【周還】立ち居振る舞い。【坐起】坐ることと立つこと。「其坐起恭敬」（『礼記』儒行）【陳皮】蜜柑の皮。【野田徳勝】野田剛斎。【永井行達】永井隠求（元禄二「一六八九」年—元文五「一七四〇」年）。誠之とも。佐藤直方門人。（『日本道學淵源録・續録』六二七頁）【先君子】稻葉迂斎。【正信】稻葉黙斎。【左氏傳】『春秋左氏伝』三十卷。【延享中】延享四（一七四七）年、就正三十九歳。

▼三十三

書生口調

漢津一時擢^二侍讀田忠甫^一。特增^二秩祿^一。先君子先世久故而未^レ有^二特恩^一。藩中頗有^二異論^一。次歲侯朝^二觀東都^一。首進^二先君官秩^一。特賜^二二百石^一。尋逐^二忠甫^一。家塾書生乃言。爲^レ淵^レ鴈^レ魚者獺也。爲^レ叢^レ鴈^レ爵者鸛也。爲^レ稻翁^レ鴈^二二百石^一者莫^レ非^二忠甫^一。西洞一學者好^二奇論^一。至^レ演^二說萬物一體之意^一。曰^二鼠爲^乙堯舜^甲。後以^二身老尤貧。妻多病無^レ養。來^二東都^一方需^レ宦。時其友唐彦明以^二正論^一見^レ放。其人却譏^二唐之不^レ能^レ俯^二仰塵世^一。而自持^二圓軟時中之論^一。學者大失^レ望。濱坊一書生爲^レ之誦云。鼠爲^二堯舜^一堯舜鼠。却爲^二細君^一求^二大君^一。不^レ得^二大君^一細君愁。此時鼠孰^二若堯舜^一。

書生の口調

漢津、一時侍読田忠甫を擢し、特に秩祿を増す。先君子、先世の久故にして未だ特恩有らず、藩中頗る異論有り。次歲、侯、東都に朝覲し、首に先君の官秩を進めて、特に二百石を賜ひ、尋で忠甫を逐ふ。家塾の書生乃ち言ふ、「淵の為に魚を鴈^かは獺なり。叢の為に爵^{すう}を鴈^かは鸛なり。稻翁の為に二百石を鴈^かは忠甫に非ざる莫し」と。

西洞の一學者、奇論を好む。万物一体の意を演説して「鼠、堯舜^た爲り」と曰ふに至る。後、身老ひて尤も貧しく、妻多病にして養ふこと無きを以て、東都に來りて、方^まに宦^むを需^{もと}む。時に其の友唐彦明、正論を以て放たる。其の人、却りて唐の塵世に俯仰すること能はざるを譏り、自ら円軟時中の論を持し、學者、大いに望を失す。浜坊の一書生、之れが為に誦して云ふ、「鼠、堯舜^た爲れば、堯舜鼠なり。却りて細君の為に大君を求む。大君を得ざれば細君愁ふ。此の時、鼠、堯舜に孰^{いづ}若れぞ」と。

○語注

【漢津】唐津藩。【擢】引き抜く。【侍讀】主君のそば近くに仕えて講義をする役職。【田忠甫】合田敬勝（『崎門學脈系譜』四六七頁）。『先君子行實』では敬勝の人柄について「清狂にして威望少なく、政事に任ずべからず」とする。【藩中頗有異論】この一件は『先君子行實』寛保三（一七四三）年に詳しい。【次歳】寛保三（一七四三）年。【侯】当時の唐津藩主は土井利実（元禄三「一六九〇」年—元文元「一七三六」年）。【家塾書生】織田文庫本「家塾書生金修軒」。大木丹二『從江記』（『再旬紀行附録』）も金澤修軒。「あの時に金澤修軒が、叢の為に爵を驅るものは鷹也、先生の為に二百石賜ふ者は合田忠藏也」と云たが、迂斎にもともに二百石賜ふた。（金澤修軒は『崎門學脈系譜』四六七頁に名のみ見えるが、同書では「金澤修軒」）。【歐】驅り立てる。【爵】すずめ。【西洞】京都西洞院。西洞院にあった三宅尚齋の学塾を指す。【奇論】織田文庫本「西洞一學者王氏好奇論」。「王氏」とは三宅尚齋門人の石王塞軒か。【万物一体】『近思錄』道体編「仁者以天地萬物爲一體、莫非己也」による。【唐彦明】唐崎広陵（正徳四「一七一四」年—宝暦八「一七五八」年）。名は欽、彦明は字。乙之助、萬助、多内、金五、金四郎などと称した。芸州竹原（現・広島県竹原市）の人。三宅尚齋門人。著作は『敬斎箴講義』、『詩則編』、『拘幽操口義』、『拘幽操講筆』、『物學辨証』（後に改題して『講学編』）、『竹原遺稿』（黙斎編）他。『国書総目録』、『日本道學淵源録・續録』六五六〜六五七頁）【友唐彦明以正論見放】黙斎『處士越復傳』に「壬申、長島大守其の大夫唐彦明を逐ひて禁錮す。（中略）彦明正論を以て放たれ、亡命して河東横綱に避く。」とある。壬申は宝暦二（一七五二）年、この年唐崎彦明は、仕えていた伊勢長島藩の当時の藩主増山正質（まことし）に諫言して追放された。『日本道學淵源録・續録』六五八頁）【俯仰】伏すことと仰ぐこと。身のこなし方。【塵世】人間世界。【時中】その時に応じて喜怒の感情を調節し、中庸を保つこと。「君子時中」（『中庸』）【濱坊】江戸の日本橋浜町にあった稻葉迂斎の学塾。浜町山伏井戸に迂斎の自宅兼学塾があった。

▼三十四

路廁

若林強齋任誕。毎侮_下慢謹_二拘禮律_一。無_二氣慨_一者_上。一日在_二稠人席上_一呼_二諸人_一云。吾爲_二卿輩_一教_二路廁之法_一。諸君在_二路上_一急内偪。輒揭_レ裳露_二臀_一於街頭。仰_二視行人面_一。行人却傾_レ面去。最便_三於避_二人于屏下_一。

路廁

若林強齋、任誕_{じんたん}にして、毎に札律に謹拘して氣慨無き者を侮慢す。一日、稠人_{ちゆうじん}の席上に在り、諸人を呼びて云ふ、「吾、卿輩_{けいはい}の爲に路廁_{ろし}の法を教へん。諸君、路上に在りて急に内偪_{せま}らば、輒ち裳を掲げて臀を街頭に露_あはにし、行人の面を仰視せよ。行人、却りて面を傾け去らん。最も人を屏下に避くるに便なり」と。

○語注

【若林強齋】延宝七（一六七九）年—享保十七（一七三二）年。名は進居、新七と称した。号は守中翁、晚年、寛齋、自牧、望南軒。京都の人。浅見綱齋門人。著作は『浅見綱齋先生語録』他多数。『日本道學淵源録・續録』六三三頁）【任誕】任達・放誕の意。任達は気ままで礼法などにこだわらないこと、放誕は勝手気ままででたらめなこと。【侮慢】諸本いずれも「侮嫚」。【禮律】礼の教えと刑法。【稠人】ぎっしり詰まっている多くの人。

▼三十五

高理父

高理父漢津人。寛裕善^レ書。頗得^二黄老之術^一。年過^二七十^一。臥起爲^二童謡^一。自悞。妻或諫^レ之。高云。理父年逾^二古希^一。是已死矣。何妨之爲。先君子以^二與^レ之同藩^一。因請^二就而學^レ書。理父云。君且寫^二天字^一。人讀爲^レ天。君且寫^二地字^一。人讀爲^レ地。豈復奚學。

高理の父

高理の父は漢津の人、寛裕、書を善くす。頗る黄老の術を得、年七十を過ぎて、臥起、童謡を爲して自ら悞^もふ。妻、或いは之れを諫む。高云ふ、「理父、年古希を逾^こゆ。是れ已に死せり。何ぞ妨ぐるを之れ為さん」と。先君子、之れと同藩なるを以て、因りて就きて書を学ぶことを請ふ。理父云ふ、「君、且天の字を写さば、人、讀みて天と爲す。君、且地の字を写さば、人、讀みて地と爲す。豈復奚ぞ学ばん」と。

○語注

【高理父】黙齋『近思録講義』に同様の話題がある。【高理】高橋理右衛門。唐津藩臣。父親の事績は不詳（『崎門學脈系譜』四六四頁）。黙齋『堦簾錄』（『孤松全稿』所収）に「高橋理云。念ガ過レバカジケル。急テ書ケハ書キ誤ル。」とあり、その『道學遺書』版頭注に「理書家」とある。『道學遺書 初集卷一 孤松全稿卷一』道學協會、一八九一年）【黄老】黄帝と老子の教え。

▼三十六

金魚書生

京師一書生。居^二父喪^一生^レ子。西洞尚翁家塾學生。尤重^二禮儀^一。因相嘲詆。題^二目金魚生^一。言^二喪生^一子。喪^レ藻方讀相通。金魚生^二子於盆水藻中^一。時俗愛^下蓄^二金魚^一。浮^二藻於盆^一。使^中之生^上子。故云^レ爾。此雖^レ出^二書生之輕^一。然鄙俗薄^レ禮者之一針。

金魚書生

京師の一書生、父の喪に居りて子を生む。西洞尚翁の家塾の學生、尤も礼儀を重んず。因りて相嘲詆^{ちやうてい}、
「金魚生」と題目す。喪に子を生むを言ふ。喪・藻、方に読み相通ず。金魚、子を盆水の藻中に生む。時俗、
金魚を蓄へ藻を盆に浮かべ、之れをして子を生ましむることを愛す。故に爾か云ふ。此れ書生の輕に出づと
雖も、然るに鄙俗の礼に薄きことの一針なり。

○語注

【西洞】京都西洞院。【尚翁】三宅尚斎。【禮儀】諸本いずれも「禮義」【嘲詆】あざけりそしること。【一針】
「頂門一針」で、人の急所を押さえて厳しい戒めを加える意。

▼三十七

奢者不^レ久

大父不休君故舊。皆江城番兵。概多^二國初風^一。專務^二質實^一。獨澤不白豪華好^二奢美^一。衣食居室殆等^二公卿^一。
膝茂睡因^二與^レ之尤密^一。故憂^レ之。然亦未^三直規^二箴^一之。一日不白在^二前茵^一。盛設^二酒席^一。極^二華侈^一。茂睡
居素相鄰。於^レ是自^二籬隙^一窺^レ之。乃諷言。奢者不^レ久矣。不白應^レ聲云。雖^レ不^レ奢亦終不^レ久。時傳爲^二名調^一。

奢れる者は久しからず

大父不休君の故旧、皆江城の番兵にして、概して国初の風多く、専ら質実を務む。独り沢不白、豪華にして奢美を好む。衣食・居室、殆ど公卿に等し。膝茂睡、之れと尤も密なるに因りて、故に之れを憂ふ。然るに亦未だ直ちに之れを規箴せず。一日、不白前園に在りて、盛に酒席を設け、華侈を極む。茂睡の居、素より相鄰る。是に於て籬隙より之れを窺ひ、乃ち諷言す、「奢れる者は久しからず」と。不白、声に応じて云ふ、「奢らずと雖も、亦終に久しからず」と。時に伝へて名調とす。

○語注

【大父不休君】稲葉黙齋の祖父・鈴木正則。五郎右衛門と称した。『先君子行實』によれば、正則ははじめ土井利重（下総古河藩主）に仕えたが、のち大番与力鈴木政重の養子となり、与力を務めた。【江城】江戸城。【澤不白】不詳。【膝茂睡】不詳。【規箴】質し戒めること。

▼三十八

隆冬静坐

槇元眞涵養有素。一時隆冬語人云。夜來祁寒最嚴。因静坐居敬少間。覺三四支漸生温氣。

隆冬に静坐す

槇元眞、涵養に素有り。一時隆冬に人に語りて云ふ、「夜來祁寒最も厳し。因りて静坐して敬に居ること

少間、四支の漸く温氣を生ずるを覺ゆ」と。

○語注

【楨元眞】山崎闇齋門人。美濃加納藩松平光重に仕え、のちその第二子戸田光正の家宰となった。元禄四（一六九一）年没。子の元勝、孫の秀武は迂齋に学んだ（『日本道學淵源録・續録』五九一頁、『崎門學脈系譜』四五七頁）。『先君子行實』に記事あり。【涵養】心を養うこと。朱子学においては、「涵養には当に敬を用ふべく、進学は則ち致知に在り」（『朱子語類』卷一一五、三浦國雄校注『朱子語類』抄）講談社学術文庫、二〇〇八年、四六頁）とされ、居敬と窮理が並進すべきものであることを説いている。（高島元洋『山崎闇齋』二二四頁）【隆冬】真冬。【静坐】程明道、李延平などを介して朱子の思想に入った考え方。「始学の工夫は、須く是れ静坐すべし。静坐すれば則ち本原定まる」（『朱子語類』卷五九、三浦國雄校注『朱子語類』抄）講談社学術文庫、二〇〇八年、一四三頁）などとされ、静坐によって精神を定めることによって道理に収斂すべきことが説かれた。（高島元洋『山崎闇齋』二七五頁）【覺四支漸生温氣】諸本いずれも「乃覺四支漸生温氣」【四支】四肢。

▼三十九

人生贅物

多田東溪誘_レ引後生_一。不_三曾居_二其長_一。四方書生來訪者。必置酒厚待。爲_二忘年友_一。齡六十忽患_二中風_一。然尚扶_レ病訪_二門人_一。一日訪_レ信値_二不在_一。乃題_二几上片簡_一云。吾罹_レ疾矣。實人世贅物。吾子幸勉乎哉。

人生の贅物

多田東溪、後生を誘引し、曾て其の長に居らず。四方の書生の來訪する者、必ず置酒して厚く待し、忘年の友と為す。齡六十、忽ちに中風を患ふ。然るに尚ほ扶病して門人を訪ふ。一日、信を訪ふも不在に値ふ。乃ち几上の片簡に題して云ふ、「吾、疾に罹りぬ。実に人世の贅物なり。吾子、幸ひに勉めよや」と。

○語注

【人生】諸本いずれも「人世」。【贅物】無駄なもの。【多田東溪】多田蒙斎。元禄十五（一七〇二）年—明和元（一七六四）年。名は維則、篤靜。儀八郎と称した。東溪は別号。三宅尚斎に学び、のち室鳩巢の門人。秋田佐竹氏、館林松平氏に仕えた。京都の人『日本道學淵源録・續録』六四八頁、『崎門學脈系譜』四八四頁。著作は『世本正誤』、『東溪詩文集』、『未発自知之説』、『乞修徳治政筭記』、『社倉法大意』、『庶士昏礼式』、『心遠堂雜録』、『東溪筆記』、『伏羲八卦図』他。『国書総目録』【忘年友】年齢に関係なく交際する友人。【信】稲葉默斎の名、正信。【扶病】病氣の身でありながら、無理に起き上がること。【吾子】あなた。友人が親しみを込めて使う言葉。

▼四十

友部赤井

友部安崇。恬淡虚靜。善與人戲談。赤井直義。方正沈重。未嘗妄語。一子風調各最異。友部云。綱翁論正統。長劔罵人。赤井云。不然。吾舊親炙翁。未嘗如此。恐外人妄論。友部云。仁齋終身不帶劔。曰仁者無敵。赤井曰。不然。吾舊在洛。親見其帶劔。恐外人妄論。

友部・赤井

友部安崇は恬淡虚静、善く人と戯談す。赤井直義は方正沈重、未だ嘗て妄語せず。二子の風調、各最も異なる。友部云ふ、「綱翁、正統を論じ、長剣人を罵る」と。赤井云ふ、「然らず。吾、旧翁に親炙す。未だ嘗て此くの如くならず。恐らくは外人の妄論ならん」と。友部云ふ、「仁齋、終身剣を帯びずして曰く、「仁は敵無し」と」と。赤井曰く、「然らず。吾、旧洛に在りて、親しく其の剣を帯ぶるを見る。恐らくは外人の妄論ならん」と。

○語注

【友部安崇】伴部安崇。寛文七（一六六七）—元文五（一七四〇）年。号は八重垣翁、武右衛門と称す。幕臣。はじめ佐藤直方門人、のち垂加神道に傾倒した。神道関係の著作が多数ある。稲葉迂斎は少年の頃、伴部安崇や赤井直義に学んだ。【赤井直義】浅見綱齋門人。傳左衛門と称した。『崎門學脈系譜』四七六頁）【綱翁】浅見綱齋。【長劔】橘南谿（橘春暉）『北憲瑣談』に、この長劔について以下のような記事がある。「浅見綱齋先生、赤心報国といふ四字を彫付たる刀を、常に帶せられしと聞居しが、浪花の藤田仲達、此刀を伝へ得て所持せり。余、藤田氏にて見ることを得たり。伊賀守金道が作にて、長二尺三寸、幅一寸三分、かさね四分、深き七有り。殊の外の大物なり。はゞき、赤銅の一枚はゞきにて、其はゞきの裏表に、赤心報国の字、置上に見えたり。楷書なり。綱齋先生自筆のよし、西依成斎先生審定の添書に見えたり。鐔は鉄のすかしの角鐔甚だ厚し。縁頭は鉄にて唐竹を金象眼に少し入れたり。柄は元結卷なり。赤心報国の四字は、岳武穆の背中に黥し居給ひし文字なりとぞ。」（日本随筆大成刊行会編『日本随筆大成』第二期一五、吉川弘文

館、一九七四年（一九二八年版復刻）、二九九頁）【仁齋】伊藤仁斎。寛永四（一六二七）年—宝永二（一七〇五）年。京都の人。古義学派の祖。はじめ朱子学を修めたが、のち孔孟の原典に還ることを唱えた。出仕することなく、京都堀川に私塾・古義堂を開いて門人を教育した。著作は『論語古義』、『孟子古義』、『語孟字義』、『童子問』他。【仁者無敵】『孟子』『梁惠王上』の言葉。

▼四十一

榎並正固

榎並正固。先君之門。又見_二佐藤三宅二公_一。性宏曠頗有_二智策_一。常以_三百事不_二驚悸_一爲_レ念。一日浴_二盤中_一。忽陰根出_レ血。懸連如_レ瀧。室人狼狽迎_レ醫。正固視而笑而已。嘗語_レ人云。斬云。絞云。竄云。逐云。自_レ昔有_レ之。何復動_レ心。家素貧。只以_レ妙_二眼科_一。時或助_二活計_一。母嘗懷。生涯中以_二帛絮_一作_二夜囊_一。臥伏安適。老軀足矣。正固聞_レ之。以爲_二細故易_レ了。母云。今唯恐_二衣食之不_レ給。何用_レ之。正固至_レ京。悉賣_二衣服書籍什器_一。得_二十金_一。輒輸_二致西肥_一。以充_二母所_レ欲。身着_二單衣_一。只表_二一敝衫_一。

榎並正固

榎並正固は先君の門、又佐藤・三宅二公に見ゆ。性宏曠、頗る智策有り。常に百事驚悸せざるを以て念とす。一日、盤中に浴し、忽ちに陰根血を出だし、懸連滝の如し。室人、狼狽して医を迎ふ。正固、視て笑ふのみ。嘗て人に語りて云ふ、「斬と云ひ、絞と云ひ、竄と云ひ、逐と云ひ、昔より之れ有り。何ぞ復心_{また}を動かさん」と。家素より貧、只眼科に妙なるを以て、時に或いは活計を助く。母、嘗て懷ふ、「生涯中、帛絮を以て夜囊を作さば、臥伏安適、老軀足らん」と。正固、之れを聞きて以_{おも}爲らく、「細故了し易し」と。母

云ふ、「今は唯衣食の給せざることを恐る。何ぞ之れを用ゐん」と。正固、京に至り、衣服・書籍・什器を悉く売りて十金を得。輒ち西肥に輸致して、以て母の欲する所に充つ。身は単衣を着、只一敝衫^{へいしん}を表とす。

○語注

【榎並正固】唐津眼医。稻葉迂齋門人（『崎門學脈系譜』四六四頁）。『迂齋文集』中に迂齋が正固に与えた文章がある。（「跋榎並正固簡」、「答榎並正固 享保戊戌孟冬」、「與榎並正固」）【竄】竄逐は遠地に追放すること。ここでの「斬」・「絞」・「竄」・「逐」は刑罰か。「斬」・「絞」は律令にも見られる刑罰で、斬罪と絞首刑。「竄」と「逐」は遠島や所払などの追放刑を指すと考えられる。【動心】『孟子』「公孫丑」の「浩然之氣」について『孟子集註』に以下のようにある。「氣を養へば、則ち以て夫の道義に配すること有りて、天下の事に於て、懼るる所無し。此れ其の大任に当たりて心を動かさざる所以なり。」（服部宇之吉校注『漢文大系 卷一』富山房編輯部編、富山房、一九七二年）【只以妙眼科】織田文庫本「以其妙於針治」。【帛絮】帛は絹。絮は綿。【細故】些細な事柄。【西肥】肥前唐津。【敝衫】敝はやぶれる、衫は黒色の衣服。

▼四十二

森眞樂

森眞樂。肥之漢津人。土井侯世臣。仕^二玄眞^一二廟^一。以^二滑稽^一得^二君^一懽心^一。致仕。眞廟賜^二號眞樂^一。常懷^レ枕從^レ所^レ在而臥。先君筮仕初。祇^二役漢津^一。時公勵^二志道學^一。禮^二待先君^一。藩中敬^二先君^一甚謹。眞樂在^レ廷。一^二面先君^一。爾後不^二復相見^一。一日偶訪。先君不^レ在。直入^二室中^一。此日有^下外人贈^二甜瓜^一者^上。家僕以^二先君不在^一。受而聞^二架上^一。眞樂出^レ刀剝^レ瓜。甘者食。否者棄。悉罄^レ之遂去。家僕不^レ識^二別眞樂^一。眞

亦不^レ刺^二姓名^一。先君反。家僕告^二其状^一。先君笑云。此必眞樂。〔眞樂每稱^二呼先君^一曰^二老爺^一。先君時壯齡。眞樂已古希。以^三先君道德師表如^二耄老^一戲^レ之。〕

森眞樂

森眞樂は肥の漢津の人、土井侯の世臣なり。玄・真二廟に仕へ、滑稽を以て君の懽心を得。致仕して、眞廟、号を眞樂と賜ふ。常に枕を懷にし、在る所に従ひて臥す。先君、筮仕の初、漢津に祇役す。時に公、志を道学に励まし、先君を礼待す。藩中、先君を敬ひ、甚だ謹む。眞樂、廷に在りて先君に一面し、爾後復相見せず。一日偶訪ふに、先君在らず。直に室中に入る。此の日、外人の甜瓜を贈る者有り。家僕、先君の不在を以て、受けて架上に閣^おく。眞樂、刀を出だし瓜を剥き、甘き者は食ひ、否る者は棄つ。悉く之れを罄^つくして遂に去る。家僕、眞樂を識別せず、真^まも亦姓名を刺さず。先君反る。家僕其の状を告ぐ。先君笑ひて云ふ、「此れ必ず眞樂ならん」と。「眞樂、毎に先君を称呼して老爺と曰ふ。先君、時に壮齡、眞樂、已に古希なり。先君の道德の師表たること耄老^{ばうろう}の如きを以て之れを戲す。」

○語注

【森眞樂】不詳。【漢津】肥前唐津藩。【世臣】代々仕えている家来。【玄眞二廟】唐津藩主・土井利益（慶安三「一六五〇」年—正徳三「一七一三」年）「諦玄院」と次代藩主・土井利実（元禄三「一六九〇」年—元文元「一七三六」年）「宝眞院」。【懽心】歓心。【祇役】君主の命令を奉じて謹んで任務に出ること。【師表】手本となる人。【耄老】年寄り。諸本いずれも「耆老」。

▼四十三

不_レ見_レ鼻

昔一邦君。買_レ妾欲_レ得_二一世國色_一。令_三有司物_二色京師_一。有司遍索_二洛中_一。百而不_レ得_一。忽看_三一商人之女。顔色姿容。一一諧_二相法_一。因遽告状。君召_二有司_一。尚欲_レ審_二其形状_一。更問眼口眉齒。肥瘦長短。至_二膚髮容止。行步聲音_一。果皆備_二艷美_一。有司云然。君有_二怡色_一。乃刻_レ日召見。有司承_レ命將_レ出。君忽云。女衆形已悉。但亦鼻梁之間。可_レ得而聞_一乎。有司失_レ色云。臣不_レ記得_一。想恐是無_レ鼻了。侍坐者大失望。有_二一人在_レ側。拍手稱云。是必一世美色矣。遂納爲_レ妾。果然。蓋至誠無_レ爲。僞妄不_レ出_二天真_一者。多驚_二人耳目_一。顔中不_レ見_レ有_レ鼻。其骨法出_二天真_一者可_レ識。佐藤子以爲_二話柄_一。

鼻を見ず

昔、一邦君、妾を買ふに、一世の国色を得んと欲し、有司をして京師に物色せしむ。有司、遍く洛中を索_{もと}むるも、百にして一を得ず。忽ち一商人の女、顔色・姿容、一一相法に諧_{かな}ふを見て、因りて遽_{すみ}やかに告状す。君、有司を召し、尚其の形状を審らかにせんことを欲し、更に問ふ、「眼口眉齒、肥瘦長短より、膚髮容止、行步聲音に至るまで、果たして皆艷美を備ふるや」と。有司云ふ、「然り」と。君、怡色有りて乃ち刻日して召見せんとす。有司、命を承りて將に出でんとするに、君、忽ち云ふ、「女が衆形、已に悉_{つく}す。但し亦鼻梁の間、得て聞くべきか」と。有司、色を失ひて云ふ、「臣、記し得ず。想ふに恐らくは是れ鼻無からん」と。侍坐する者、大いに望を失ふ。一人、側に在る有り。拍手して称して云ふ、「是れ、必ず一世の美色なり」と。遂に納_いれて妾と爲す。果たして然り。蓋し至誠爲す無し。僞妄の天真に出でざる者は、多く人の耳目を驚かす。顔中鼻有るを見ざるは、其の骨法、天真に出づることは識るべし。佐藤子、以て話柄と爲す。

○語注

【相法】人相・家相・地相などをみて、その吉凶・運命などを占う法。【怡色】にこにこした顔つき。【至誠無_レ爲】「至誠は息むこと無し（中略）。此の如き者は見_{しめ}さずして章_{あら}はれ、動かずして変じ、為す無くして成る。」【中庸】【骨法】この場合は、有司の報告のしかたを指す。【佐藤子以爲_二話柄_一】織田文庫本「佐藤直方稱至德自然者曰無鼻」。

▼四十四

佐藤誓_二婦人_一

佐藤先生。每誓_二夫人_一云。吾欲_三生涯不_二凝滯_一。燕居閑坐。少有_二鬱色_一。輒報_レ吾。吾殆亦無_レ之。

佐藤、婦人に誓ふ

佐藤先生、毎に夫人に誓ひて云ふ、「吾、生涯凝滯せざることを欲す。燕居閑坐、少しく鬱色有らば、輒ち吾に報ぜよ。吾、殆ど亦之れ無からん」と。

○語注

【夫人】佐藤直方の妻は箕輪氏。（日本古典学会編『増訂佐藤直方全集』巻一、ペリかん社、一九七九年）【凝滯】滯る。気分が晴れない。朱子学では、凝滯することなく、魚がはねるように、気力が満ちて活発なさまを指す「活潑潑地」（『中庸章句』であることを理想とする。（高島元洋『山崎闇齋』三二三頁）

▼四十五

闇齋門六千人

人疑孔門三千。通者只七十人。闇齋門六千人。恐不_レ至_レ此。余云。不_レ然。當時以_レ禮相見者。門人籍_二記之_一。其員自有_二六千人_一。何必在_二弟子之列_一。闇齋師道至嚴。初見者。皆厚_レ禮以見。不則不_レ得_レ見。一面後不_二相見_一者。蓋亦多。其在_レ洛下_レ帷。天下書生。輻_二湊京師_一。恐無_二不_レ見者_一。況又如_二會津藩中_一。時勢豈有_下不_レ見_二闇齋_一者乎。一見記籍。其員六千人。何又疑之有。

闇齋の門、六千人

人疑ふ、「孔門三千、通ずる者は只七十人。闇齋の門六千人、恐らくは此に至らざらん」と。余云ふ、「然らず。當時、礼を以て相見する者、門人之れを籍記する、其の員自ら六千人有り。何ぞ必ず弟子の列に在らんや。闇齋、師道至嚴、初見の者は皆礼を厚くし以て見ゆ。不_レんば、則ち見え得ず。一面の後相見せざる者、蓋し亦多し。其れ洛に在りて帷を下せば、天下の書生、京師に輻湊す。恐らくは見えざる者無からん。況や又会津の藩中の如き、時勢豈闇齋に見えざる者有らん乎。一見し記籍する、其の員六千人。何の又疑ひ之れ有らん」と。

○語注

【孔門三千】孔子の弟子の数は三千人と言われた。『史記』孔子世家・『孔子家語』弟子行【籍記】帳簿に記入する。【下帷】塾を開き人に教えること。【輻湊】物事が四方から集まること。【會津藩中】闇齋は寛文

五（一六六五）年に四代將軍家綱の後見役であつた會津藩祖・保科正之の賓師となつた。【其員六千人】諸本いづれも「其員六千」。

▼四十六

會津侯明斷

板倉侯尹^レ京。勵^レ志問學。嘗疑^二難湯武放伐之權^一。未^二釋然^一。自歎^二其學之不^レ造^二極旨^一。會津侯正之云。此則善矣。子受^レ命遠奉^二天子^一。豈無^レ疑^二於放伐之權^一而可哉。

會津侯の明斷

板倉侯、京を尹^む。志を勵まして問學す。嘗て湯武放伐の權を疑難し、未だ釈然とせず。自ら其の學の極旨に造^{いた}らざることを歎く。會津侯正之云ふ、「此れ則ち善し。子、命を受けて遠く天子を奉ず。豈^{あに}放伐の權に疑ひ無くて可ならん哉」と。

○語注

【會津侯】保科正之（慶長十六「一六一一」年—寛文十二「一六七二」年）。會津松平藩祖。將軍徳川秀忠の第三子で、家光の異母弟。朱子學を闇齋に、神道を吉川惟^{きつわ}足^{これたな}に學んだ。【板倉侯】板倉重宗（天正十五「一五八七」年—明暦二「一六五六」年）徳川家光の時代の京都所司代。下総関宿藩主。【湯武放伐】古代中国の革命の是非を論ずる、いわゆる湯武放伐論。湯王は殷王朝の創始者、夏の桀王を倒し、殷王朝を建てた。武王は周王朝の創始者、父の志を継いで殷の紂王を討ち、周王朝を建てた。「齊宣王問曰、湯放桀、武王伐

紂、有諸、孟子對曰、於傳有之、曰、臣弑其君可乎、曰、賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘、殘賊之人謂之一夫、聞誅一夫紂矣、未聞弑君也。」（『孟子』梁惠王下）【權】臨機の処置。「嫂溺、援之以手者權也」（『孟子』離婁）

▼四十七

論語

朱子前後舉二兩說一者。前說爲主。此爲「四子集註通例」。或云。論語孟武伯孝章。後說尤通暢。意味自深長。闇齋無子。故難解此意。闇聞之直云。朱子子有五人。依舊前說爲主。

『論語』

朱子、前後兩說を挙ぐるは前説を主とす。此れ『四子集註』の通例なり。或ひと云ふ、「『論語』孟武伯孝章、後説尤も通暢、意味自ら深長なり。闇齋、子無し。故に此の意を解し難し」と。闇、之れを聞きて直に云ふ、「朱子、子五人有り。旧に依りて前説を主とす」と。

○語注

【四子集註】朱子『四書集註』十九卷。【論語孟武伯孝章】「孟武伯問孝、子曰、父母唯其疾之憂」（『論語』為政）。『論語集註』は以下のとおり。「武伯は懿子の子、名は懿。言ふところは、父母子を愛するの心、至らざる所無し、惟其の疾病有ることを恐れ、常に以て憂と為す。人の子此れを体して、父母の心を以て心と為さば、則ち凡そ其の身を守る所以のもの、自ら謹まざるを容さず。豈以て孝と為すべからざる乎。旧説、

人の子、能く父母をして其の不義に陥るを以て憂と為さず、独り其の疾を以て憂と為さしむるは、乃ち孝と謂ふべし。亦通ず。」（服部宇之吉校注『漢文大系 卷一』富山房編輯部編、富山房、一九七二年）

▼四十八

先君不_レ看_二明月_一

先君幼愛_二山水風月_一。四時佳興。莫_レ不_下與_二親舊門客_一遊樂_上。享保己亥仲秋望。佐藤先生没。自_レ是終身不_レ看_二明月_一。

先君、明月を看ず

先君、幼くして山水風月を愛す。四時の佳興、親旧門客と遊樂せざること莫し。享保己亥仲秋望、佐藤先生没す。是れより終身明月を看ず。

○語注

【先君】稲葉迂齋。【享保己亥仲秋望】享保四（一七一九）年。佐藤直方は八月十五日に没した。【明月】陰曆八月十五日の月。

▼四十九

雪中伐_レ松

服元齋。雪中從_二一門客_一訪_二某氏_一。客主興酣。庭前有_二松樹_一。雪積浩然。從者乘_レ醉執_レ刀。兩_二斷松樹_一

云。主人饗^二老師於雪中^一。豈不^レ如^三常世於^二道崇^一哉。南郭唯笑而已。

雪中、松を伐る

服元喬、雪中に一門の客を従へて某氏を訪ふ。客主の興^{たけはな}酣にして、庭前に松樹有り。雪積もりて浩然たり。従者、酔ひに乗じて刀を執り、松樹を両断して云ふ、「主人、老師を雪中に饗す。豈^{あにつねよ}常世の道崇^{だうすう}に於けるが如くせざらんや」と。南郭、唯笑^{ただ}ふのみ。

○語注

【服元喬】服部南郭（天和三「一六八三」年—宝曆九「一七五九」年）。名は元喬^{もとたか}、字は子遷、南郭は号。京都の商家に生まれ、のち江戸へ下った。はじめ和歌を学び、柳沢吉保に歌人として召し抱えられたが、その後获生徂徠に入門した。漢詩文に長じ、文人風儒者の魁となった。著作は『南郭先生文集』他。【浩然】諸本いずれも「皓然」。【常世於^二道崇^一】謡曲「鉢木」（作者不詳）による。上野国の佐野源左衛門常世のものとを、大雪の晩に一人の旅僧が訪れ、一夜の宿を求める。常世は大事にしていた鉢木を燃やしてもてなし、鎌倉に大事あるときには自分には一番に馳せ参じると語るが、実は、その僧が執権・北条時頼であつたというあらずじ。道崇は出家後の時頼の号。

▼五十

酒減^二半身^一

仙臺侯。惡^二使^レ酒者^一。每訓^二左右^一云。卿曹勿^レ好^レ飲。靜^二觀飲酒者^一。一人之身。既減^二半身^一。此與^二陸

相辰之言「相發。事見『五雜俎』」。

酒、半身を減ず

仙台侯、酒を使ふ者を惡み、毎に左右に訓じて云ふ、「卿曹^{けいさう}、飲を好むこと勿れ。飲酒する者を静観するに、一人の身、既に半身を減ず。此れ、陸相辰の言と相發す。事、『五雜俎』に見ゆ」と。

○語注

【仙臺侯】伊達綱村か。闇齋門下では遊佐木斎ほか田邊整斎、桑名黙斎が仙台藩儒で、木斎が仕えたのが伊達綱村。（『日本道學淵源録・續録』六〇五頁）【使^レ酒】酒の勢いに任せてふるまう。【卿曹】あなたがた。【陸相辰】陸辰。唐の人。（『旧唐書』列伝一二九）【事見『五雜俎』】『五雜俎』は書名。『五雜俎』とも。明代の隨筆集。謝肇淛（生没年不詳）著。十六卷。『北窓瑣言』に載す。陸相辰、士子有りて脩謁す。酌を命ず。飲まざるを以て辞するに、陸曰ふ、「誠に言ふ所の如くんば、已に校すること五分。蓋し生平（平生か）悔吝、十分有り。酒の困を為さざるは、自然に半を減ずる也」（『和刻本漢籍隨筆集』第一集、長澤規矩也解題、汲古書院、一九七二年、二二二頁）。ただしこの逸話は『北窓瑣言』（孫光憲、二〇卷）卷六所収のもので、『北窓瑣言』は誤記と考えられる。

▼五十一

漁遊

磬澤一。執行尤嚴密。捧誦經語^二。一一謹守。一日與田友父^一。在先君坐^一。時日上巳。漁獵之辰也。門

客潮田生。請^レ先君一行漁。先君許^レ之。澤一乃向^二潮生^一問。凡有^二血氣^一之類。不^二自^一（一本親）殺^一。如^二漁者^一則不^レ妨否。澤一誠實。非^三敢詰^二難生^一。只是問^二其輕重之所^一在。潮生年纔弱。答辭屈室。友父從^レ傍云。生急走^二漁獵^一。此論一決。恐不^レ能行。先君於^レ是發^レ笑。澤一亦自悟^二其執^一大笑。

漁遊

誓沢一、執行尤も厳密なり。経語を捧誦し、一一謹守す。一日、田友父と先君の坐に在り。時に日上巳^し、漁獵の辰なり。門客潮田生、漁に行かんことを先君に請ふ。先君、之れを許す。沢一、乃ち潮生に向かひて問ふ、「凡そ血氣有るの類、自ら（一本「親ら」）殺さず」。漁の如きは、則ち妨げずや否や」と。沢一、誠実にして、敢へて生を詰難するに非ず。只是れ其の輕重の在る所を問ふ。潮生、年纔弱^{せうじやく}にして答辭屈室す。友父、傍より云ふ、「生、急ぎ漁獵^ゆに走^ゆけ。此の論一決せば、恐らくは行くこと能はず」と。先君、是に於て笑を發す。沢一、亦自ら其の執を悟り大笑す。

○語注

【漁遊】同話は『清谷話録』にも見られる。【誓沢一】大神澤一。【執行】執り行うこと。【田友父】時田友右衛門。『清谷話録』【先君】稻葉迂斎。【上巳】陰曆三月の初めの巳の日、後に三月三日。この日、川で身を清め不祥を払う行事が行われた。【辰】とき。【潮田生】潮田四郎左衛門。唐津藩老臣。稻葉迂斎門人。『崎門學脈系譜』四六四頁）【凡有^二血氣^一之類。不^二自^一殺。】「君子は庖廚^{はうふ}を遠ざく。凡そ有血氣の類、身^{みづか}ら踐^こさざるなり」（『礼記』玉藻）。血氣は血と息。生命。「血氣有るもの」で生きているもの。【不^二自^一（一本親）殺。】諸本いずれも「不親殺」。【屈室】諸本いずれも「屈室」。【從^レ傍】諸本いずれも「從旁」。

▼五十二

大父逐_レ妖

大父不休君第宅。在_二麻布龍土_一。「今從兄鈴政成。續在。」元禄初有_二妖異_一。巷上曳_二木鐸_一。聲響_二人家_一。而無_下見_上其形_一者。隣佑大驚。百方追_レ之。聲在_二咫尺間_一。未_三嘗見_二其髣髴_一。如_レ此者過_二一月_一。巷中少老大恐。無_二夜裏出歩者_一。大父性剛。不_三曾怖_二懼_一之。一夜妖入_二大父邸中_一。亦爲_二木鐸之聲_一。大父覺屏息聽_レ之。聲在_二寢堂前_一。因起白衣帶_レ巾。從_レ響而歩。三四回。終無_二復聲_一。此後妖去無_レ在。明日家人疑。主公只帶_レ巾不_レ着_レ劍。何其無_二戒心_一。大父笑云。妖既有_レ聲。豈無_レ形。大概狐狸精。人不_レ能_レ見_二其形_一。吾遲歩欲_三乘_レ虛手_二捉_レ之_一。何復帶_レ劍。大父去_二國初_一不_レ遠。專事_二武備_一。然平生多不_レ帶_レ劍。蓋勇悍不_レ事_レ劍也。常以_二作_レ饌饗_レ客爲_レ樂。家尤貧至_二衣食不_レ給_一。一時因_二醫大河内養仙者_一。貸_レ金愆_レ期。仙大怒。變_レ服別_二家人_一。携_レ劍來請_二讐死_一。大父從容出_レ廳。不_二復著_レ劍。慰勞悉_二曲折_一。仙意解乃去。後先君問_二大父_一。仙怒甚。萬一有_二不虞_一。恐無_下如_上大人之不_レ帶_レ劍何_上。大父云。醫等_二沙門_一。假令劍犯_レ我。我兩手足_三以轉_二撲_レ之_一。

大父、妖を逐ふ

大父不休君の第宅、麻布龍土に在り。「今、從兄鈴政成、續ぎて在り。」元禄の初、妖異有り。巷上、木鐸を曳き、声、人家に響くも其の形を見る者無し。隣佑、大いに驚き、百方之れを追ふ。声、咫尺の間に在りて、未だ嘗て其の髣髴を見ず。此くの如きこと一月を過ぎ、巷中の少老大いに恐れ、夜裏出歩する者無し。大父、性剛、曾て之れを怖懼せず。一夜、妖、大父の邸中に入る。亦木鐸の声を爲す。大父、覺めて屏息し

之れを聴く。声、寢堂の前に在り。因りて起き白衣に巾を帯び、響に従ひて歩むこと三、四回、終に復声無し。此の後、妖去り在ること無し。明日、家人疑ふ、「主公、只巾を帯び、剣を着けず。何ぞ其れ戒心無きや」と。大父、笑ひて云ふ、「妖、既に声有り。豈形無からん。大概狐狸の精、人、其の形を見ることが能はず。吾、遅歩にして虚に乗じて之れを手捉せんと欲す。何ぞ復剣を帯びん」と。大父、国初を去ること遠からず。専ら武備を事とす。然るに平生多くは剣を帯びず。蓋し勇悍、剣を事とせざるなり。常に饌を作りて客を饗するを以て樂とす。家、尤も貧、衣食給せざるに至り、一時、医大河内養仙なる者に因りて、金を貸り、期を愆つ。仙大いに怒り、服を変じて家人に別れ、剣を携へ来り讐死せんと請ふ。大父、従容として庁を出づ。復剣を著けず、慰勞して曲折を悉くす。仙、意解け乃ち去る。後、先君、大父に問ふ、「仙の怒り、甚だし。万一不虞有らば、恐らくは大人の剣を帯びざること如何ともすること無し」と。大父、云ふ、「医は沙門に等し。仮令、剣我を犯すも、我が両手、以て之れを転撲するに足らん」と。

○語注

【大父不休君】稲葉黙齋の祖父・鈴木正則。【麻布龍土】麻布龍土町（現・東京都港区六本木七丁目）。【木鐸】木製の舌のついた金属製の大鈴。【隣佑】隣人。【咫尺】距離の近いこと。【屏息】息をこらすこと。【大河内養仙】不詳。【後先君問「大父」】元倡寺本頭注に「丹云、仙ヌキ身デ来タ 迂齋先生コノトキ十五次ノ問ニ扣テアリシト」とある。

▼五十三

井伊兄弟

井伊兄弟。土井侯世臣。元禄正徳間。在_二肥唐津_一。兄政吉。弟政展（一本辰）。皆豪強多質。少_二言語_一。年過_二七十_一。友愛最好。兄弟素異_レ居。弟至_二兄宅_一。日必一次。每_レ至未_二嘗接_レ言。只相面而已。弟至兄乃呼_二其妻_一云。野郎「俗呼_二弱齡者_一之稱。年過_二六十_一尚_レ以_レ之。」來。打酒一杯。妻便盛_二酒於茶碗_一「即茶博士所_レ稱唐津茶碗。概盛_二半升_一。」出。弟直引_二一盃_一。拜_レ嫂云。大婦人多謝。即去。以爲_レ常。

井伊兄弟

井伊兄弟は土井侯の世臣なり。元禄・正徳の間、肥の唐津に在り。兄政吉、弟政展（一本「辰」）、皆豪強多質にして、言語少なし。年七十を過ぎて友愛最も好し。兄弟、素より居を異にす。弟、兄の宅に至るごと日に必ず一次、至る毎に未だ嘗て言を接せず、只相面するのみ。弟至る。兄乃ち其の妻を呼びて云ふ、「野郎「俗に弱齡の者を呼ぶの称なり。年六十を過ぐるに尚ほ之れを以てす。」来る。打酒一杯せよ」と。妻、便ち酒を茶碗に盛りて「即ち茶博士称する所の唐津茶碗、概ね半升を盛る」出だす。弟、直に一盃を引き、嫂を拝して「大婦人、多謝」と云ひ、即ち去るを以て常と爲す。

○語注

【井伊兄弟】不詳。【土井侯】唐津藩主。元禄・正徳の間は土井利益（元禄四「一六九二」年—正徳三「一七一一」年在位）、土井利実（正徳三「一七一一」年—元文元「一七三六」年在位）。【世臣】先祖代々その主家に仕える家来。【元禄正徳間】元禄元（一六八八）年—正徳五（一七一五）年。【打酒】酒を酌む。【茶博士】茶道の名人。

▼五十四

紀文

紀先_レ事而後_レ文。事可_三以傳_二後世_一。故文以紀。文雖_レ巧。而事之瑣瑣者。不_レ紀而可也。本國儒者。以_二漢文_一紀_二倭事_一。多不_レ爲_二華人肺腸_一。故不_レ足_三以傳_二異邦_一。儒者於_レ是概懷_二耻慨_一。以_二閤_二手筆_一。然事之出乎奇絶_一者。雖_レ如_三其文覆_二醅醬_一。而足_三以悚_二動後世_一者。豈可_レ不_レ紀_レ之哉。意達而可也。如_二名物度数_一。不_レ通_二異邦_一。亦不_レ防焉耳。唯業_二文學_一。高_二門戸_一者。當_三其錄_二本國之事_一。事之奇絶。雖_レ足_三以悚_二動後世_一。而譯翻難_レ入_二華人之腸_一者。捨而不_レ載焉。是正先_レ文而後_レ事之過也。服南郭大東世語。其文最奇巧。然大東世語。豈啻此而已哉。蓋先_レ文而後_レ事。所謂_二以_二彼文辭而已_一者陋矣。誠如_二先賢之言_一。

紀と文

紀は事を先にして文を後にし、事、以て後世に伝ふべし。故に文以て紀_しすは、文、巧なりと雖も、事の瑣瑣なる者、紀さずして可なり。本國の儒者、漢文を以て倭事を紀す。多く華人の肺腸を為さず。故に以て異邦に伝ふるに足らず。儒者、是に於て概ね耻慨を懷き、以て手筆を閤く。然るに事の奇絶に出づる者は、其の文、醅醬_{はいしやう}を覆ふが如しと雖も、以て後世を悚動するに足る者、豈_{あに}之れを紀さざる可けんや。意、達して可なり。名物・度数の如き、異邦に通ぜざるも亦妨げざるのみ。唯文学を業とし、門戸を高くする者、其の本國の事を録すに当たり、事の奇絶、以て後世を悚動するに足ると雖も、訳翻して華人の腸に入り難き者は、捨てゝ載せず。是れ正に文を先にして事を後にするの過ちなり。服南郭『大東世語』、其の文最も奇巧、然るに『大東世語』、豈啻_{あにた}此れのみならんや。蓋し文を先にして事を後にする、所謂「彼の文辞のみを以てする者は陋なり」、誠に先賢の言の如し。

○語注

【肺腸】肺腸。心。【耻慨】心に恥じて嘆く。【覆醅醬】覆瓿。書物で醬油壺の蓋をすることで、世間で重んじられない著述のたとえ。醅はもろみ酒。醬はひしお。『漢書』揚雄伝【悚動】恐れ戦くこと。諸本いずれも「疎動」。【度数】定まった制度。爵位などの等級、段階。【服南郭大東世語】服部南郭『大東世語』。五卷五冊、伝記、寛延三（一七五〇）年刊。【以彼文辭而已者陋矣】「聖人之道、入乎耳、存乎心」、蘊之為「德行」、行之為「事業」。彼以「文辭而已」者、陋矣。『周子全書』陋第三十四（『和刻本近世漢籍叢刊 思想初編（1）周張全書（上）』中文出版社・広文書局、台北、一九七二年、一四七頁）【誠如先賢之言】織田文庫本「誠如周茂叔之言」。

▼五十五

徂徠南遷

徂徠父。仕「東都」。獲「罪遷」上總州「而死。余友小松安井氏者。省「其父墓」。小松隣里横地者。徂翁幼學之所。莊頭某。爲「徂翁地主」。

徂徠、南遷す

徂徠の父、東都に仕へ、罪を獲て上総州に遷りて死す。余の友、小松の安井氏なる者、其の父の墓を省す。小松の隣里横地は、徂翁幼学の所にして、莊頭某、徂翁の地主なり。

○語注

【徠徠】荻生徠徠（寛文六「一六六六」年—享保十三「一七二八」年）。古文辞学派の祖。字は茂卿。別号護園。江戸の人。父・方庵は館林藩主であつた徳川綱吉の侍医であつたが、徠徠十四歳のとき、綱吉の怒りに触れて江戸追放となり、一家は母の郷里の上総国長柄郡本納村（現千葉県茂原市）に移り、徠徠は二十五歳（一説に二十七歳）まで当地で過ごした。徠徠は初め朱子学を学んだが、四十歳前後から古文辞学を樹立し、太宰春台、服部南郭らを育てて護園学派を形成した。著作は『弁道』・『弁名』・『護園隨筆』・『政談』・『論語徴』他。【父】荻生方庵。延宝七（一六七九）年、上総国へ流罪となり、元禄三（一六九〇）年、許されて江戸に戻り、宝永三（一七〇六）年に江戸で没した。ここでは方庵が上総で没し、上総の墓を安井氏が省したと読むほうが自然だが、実際には方庵の墓は徠徠と同じ長松寺（東京都港区三田）にある。ちなみに方庵・徠徠親子が最初に身を寄せた本納村（現・千葉県茂原市本納）には、上総流謫中に没した徠徠の実母の墓が、また本文中にもある横地には、同じく流謫中に没した徠徠の祖母の墓があつたとされる。（徠徠先生年譜細君墓表神主一卷」（今中寛司『徠徠学の史的研究』思文閣出版、一九九二年、所収）【小松】現・千葉県山武市小松。【安井氏】安井半十郎（享保九「一七二四」年—享和二「一八〇二」年）。稲葉迂齋に学び、のち野田剛齋にも師事した。荻生徠徠の門人・宇佐美瀧水と親交をもっていた。黙齋『姫島講義』中に挙げられた上総八子のひとり。（柴田武雄「上総道学と稲葉黙齋」（東金市編『東金市史』七・通史篇下、一九九三年、一九〇二七頁）【横地】現・千葉県山武市下横地。【莊頭某】不詳。

▼五十六

推三死萬事^一

石左中。京師人。到^二東都^一爲^レ醫。受^二道學於先君。及剛齋先生^一。性剛正。常自能克^二其欲^一。嘗書^二其室^一曰。推^二死於萬事^一。何事不^レ成。言死者人情最所^レ懼。其他禍故百端。皆輕^二於死^一。禍之來。比^二之死^一則甚易。況儒者殺^レ身成^レ仁。死輕^二於鴻毛^一。豈復畏懼。〔左中切爲^二功夫^一。故云禍之來。未^二遽至^一死。則亦甚易^二於死^一云爾。此與^二近江増叟之事^一相似。増叟見^二本朝遯史^一。〕

死を万事に推す

石左中は京師の人、東都に到り、医と爲る。道学を先君及び剛齋先生に受く。性、剛正、常に自ら能く其の欲に克つ。嘗て其の室に書きて曰く、「死を万事に推す、何事か成らざらん」と。言ふころは、死は人情の最も懼るゝ所、其の他の禍故百端、皆死より輕し。禍の来る、之れを死に比ぶれば、則ち甚だ易し。況んや儒者、身を殺して仁を成す。死、鴻毛より輕し。豈復畏懼せん。〔左中、切に功夫を爲す。故に云ふ、「禍の来るに、未だ遽に死に至らざれば、則ち亦甚だ死より易し」と爾云ふ。此れ近江増叟の事と相似る。増叟は『本朝遯史』に見ゆ。〕

○語注

【石左中】石井左仲（元倡寺本欄外は石井左中）。〔崎門學脈系譜〕四六四頁【剛齋先生】野田剛齋。【殺身成^レ仁】「子曰、志士仁人、無^二求^レ生以害^レ仁。有^二殺^レ身以成^レ仁。」〔論語〕衛靈公【死輕^二於鴻毛^一】鴻毛は極めて輕いものたえ。「死或重^二於泰山^一、或輕^二鴻毛^一。」（司馬遷「報^二任安^一書」）【増叟】まじてのおきな。苦しみがあれば「まして」地獄や餓鬼の苦しみはいかばかりかと思ひ、楽しみがあれば「まして」極楽はいかばかりかと思うことによって、現生への執着を絶とうとする老人を描いた仏教説話。『発心集』

卷三「江州増叟ましゅうの事」などに見える。近世には深草元政撰『扶桑隱逸傳』（寛文三「一六六三」年序）、また文中にあるように林羅山の四男・林守勝撰『本朝遯史』（万治三「二六六〇」年自序、寛文四「二六六四」年刊）などに、同話が漢文体で収められている。【本朝遯史】林守勝（読耕齋）撰、二卷二冊、万治三（一六六〇）年自序、寛文四（一六六四）年刊。『深草元政集』巻四（島原泰雄編『古典文庫』一九七八年）に、関連説話として収められている。なお「増叟」は同書四一―四二頁に見える。

▼五十七

観水

観水。佐藤門。資性和順。百事不レ與人逆一。凡百稱レ好。與レ人應接。事雖レ出二細故一。謝辭每致二殷勤一。小野崎舎人曰。観翁人己マヤ遺亡。他一一致意拜謝。【稱レ好。稱レ得レ益。稱レ不堪。可レ賞。此三言。観翁接二同門一。每常以レ此謝レ辱。】

観水

観水は佐藤の門、資性和順、百事人と逆らはず、凡百に「好し」と称す。人と応接するに、事細故ことに出づと雖も、謝辭つねし毎に殷勤を致す。小野崎舎人曰く、「観翁、人己すで（原文・己）に遺亡するも、他かれ一一致意し拜謝す」と。「好し」と称す、「益を得」と称す、「賞すべきに堪へず」と称す、此の三言、観翁同門に接する毎に常に此れを以て辱きを謝す。」

○語注

【觀水】長谷川克明。觀水は号。源右衛門と称した。佐藤直方門人。松平伊豆守信輝の臣。『崎門學脈系譜』四六二頁）【小野崎舍人】佐藤直方門人。貞享二（一六八五）年—宝暦二（一七五二）年。本姓在原、名は師由、初め団六と称した。秋田藩支封老職。佐藤直方の没後、三宅尚斎に学んだ（『崎門學脈系譜』四六一頁、『日本道學淵源録・續録』六二八頁）。諸本いずれも「小野舍人」。【遺亡】諸本「遺忘」、織田文庫本「遺妄」。

▼五十八

舍人

小野崎舍人。在「佐藤門」。敬「禮先君及剛齋」。餘多輕侮。一日同門集會。舍人呼「野澤弘篤」云。子以「不仕爲「得計」。然如今有「爭訟」。參「獄官」。如「稻君」者。及至「舍人」。皆在「廳側」。子則在「砌下礫中」。與「亂賊乞夫」同「席」。弘篤微笑且言。此事亦可「不「豫慮」乎。舍人云。然則子謹勿「做「罪惡」。

舍人

小野崎舍人、佐藤の門に在り、先君及び剛齋を敬礼し、余は多く輕侮す。一日、同門集會す。舍人、野沢弘篤を呼びて云ふ、「子、仕へざるを以て得計と爲す。然るに如今、爭訟有りて獄官に參ず。稻君の如き者、及び舍人に至りても、皆庁側に在り。子は則ち砌下礫中に在りて、乱賊乞夫と席を同じくす」と。弘篤、微笑し且つ言ふ、「此の事、亦予慮せざるべし」と。舍人云ふ、「然れば則ち、子、謹みて罪惡を做すこと勿れ」と。

○語注

【野澤弘篤】江戸の人。はじめ菅野兼山、のち佐藤直方の門人となった。『崎門學脈系譜』四六二頁）【得計】はかりごとがうまくいくこと。【獄官】ここでは奉行所の役人のことを指すか。【稻君】稻葉迂齋。【廳側】役人の側。【砌下】階段の下。【礫中】奉行所の白州の上。

▼五十九

閑居記

永井隠求。隠^ニ北嶋^一。醫^ニ治數十歩之間^一。因仰食。環堵方丈。親作^レ粥療^レ飢。杜^レ門絶^レ客。一時作^ニ閑居記^一。尤致^ニ幽趣^一。佐藤云。此記偏^ニ乎空寂^一。非^ニ吾儒之旨^一。隠求輒鞭火^レ之。不^レ傳^レ人。

閑居の記

永井隠求、北嶋に隠れ、数十歩の間を医治し、因りて仰食す。環堵^{くわんと}方丈、親ら粥を作り飢^いゑを療^いし、門を杜^{ふさ}ぎ客を絶つ。一時『閑居の記』を作^なし、尤も幽趣を致す。佐藤云ふ、「此の記、空寂に偏す。吾が儒の旨に非ず」と。隠求、輒ち之れを火^やき、人に伝へず。

○語注

【北嶋】八丁堀北島町（現・東京都中央区八丁堀）。【仰食】他人に頼つて生活する。【環堵】小さく狭い家。【方丈】一丈四方。

▼六十

遺忘

野澤弘篤。性質直。學周密。與_レ人接。談有_二少不_レ解_レ心。則再三問難。小野崎舍人。樂曠有_二江河之量_一。與_二弘篤_一資性大反。二人來_二先君_一。觀水亦在。舍人謂_二先君_一云。吾性記_レ事不_レ得。至_レ如_二日時_一。今日は朔邪。非邪。多遺忘。乃訊_二妻子_一始識得。弘篤聞_レ之心大疑。竦然改_レ容云。子仕_二君侯_一。職爲_二家老_一。失忘_レ此。何以能居_レ職。舍人莞爾云。君勿_レ憂矣。官事則不_二遺忘_一。觀水在_レ旁。拍_レ手歎賞。

遺忘

野澤弘篤、性質直、學周密なり。人と接するに、談、少しく心に解せざること有らば、則ち再三問難す。小野崎舍人、樂曠、江河の量有り、弘篤の資性と大いに反す。二人、先君に來り、觀水亦在り。舍人、先君に謂ひて云ふ、「吾が性、事を記すること得ず。日時 of 如きに至りても、今日は是れ朔なるか非ずかと、多く遺忘す。乃ち妻子に訊きて始めて識得す」と。弘篤、之れを聞き、心大いに疑ひ、竦然として容を改めて云ふ、「子、君侯に仕へ、職、家老と爲りて失此_かくの如くんば、何を以て能く職に居るや」と。舍人、莞爾として云ふ、「君、憂ふること勿れ。官事は則ち遺忘せず」と。觀水、旁に在り、手を拍き歎賞す。

○語注

【江河】大河。【莞爾】につこり笑う。

▼六十一

無^二同寅^一

節要課會。諸老集會。及^レ退刻^二後會^一日。觀水時爲^二濱松侯中老^一。「參政」乃謝^二諸人^一云。僕素無^二同寅^一一人（一本一人作又）給^二官事^一。時尤執筆。難^二豫刻^レ日。諸老皆諾。弘篤因言。君侯寵遇至重。然何勤^二勞一人^一。無^二同寅^一。殆亦似^レ不^レ優^二老臣^一。舍人自^レ旁云。阿十「弘篤俗稱」未^レ諳^二世路^一。君侯不^レ置^二同寅^一。所以優^レ之。若有^二同寅^一。則何以得^二久在^レ職。觀翁大服^二舍人經^二歷世故^一。扑躍不^レ已。弘篤尚未^レ解。詞色依^レ舊。

同寅無し

『節要』の課會、諸老集會し、退くに及び後會の日を刻す。觀水、時に浜松侯の中老たり「參政」。乃ち諸人に謝して云ふ、「僕、素より同寅無し。一人（一本「一人」を「又」と作す）して官事を給す。時尤も執筆、予め日を刻し難し」と。諸老、皆諾す。弘篤、因りて言ふ、「君侯の寵遇、至重なり。然るに何ぞ一人を勤勞せしめ、同寅無からんや。殆ど亦老臣を優にせざるに似たり」と。舍人、旁より云ふ、「阿十「弘篤の俗稱なり」、未だ世路を諳ぜず。君侯の同寅を置かざるは、之れを優にする所以なり。若し同寅有らば、則ち何を以てか久しく職に在るを得んや」と。觀翁、大いに舍人の世故に経歴するに服し、扑躍^{べんやく}已まず。弘篤、尚ほ未だ解せず、詞色、旧に依る。

○語注

【節要】書名。李滉編『朱子書節要』二〇卷。【課會】『先君子行實』に記事あり。【濱松侯】長谷川克明について『崎門學脈系譜』に「松平伊豆守信輝臣」とある（四六二頁）が、松平信輝（万治三「一六六〇」年

—享保十「一七二五」年）は川越および古河藩主である。その子・松平信祝（天和三「一六八三」年—延享元「一七四四」年）は徳川吉宗時代に老中を務めており、下総古河から三河吉田、その後享保十四（一七二九）年に遠江浜松へ転封となっている。観水がこのとき仕えた「浜松侯」は信祝と考えられる。【中老】江戸時代の大名家で家老の次席にあたる職名。年寄。【参政】執政の次に位し、政治に参与する職。若年寄。【同寅】臣下がともに謹んで勤務することから、転じて同僚。寅はつつしむ。【鞅掌】仕事が多くて、服装を整える暇もないこと。【弘篤】野澤弘篤。【舍人】小野崎舍人。【世路】世渡り。【経歴】これまでにいろいろなことを経験してきたこと。【世故】世の中の俗事。【扑躍】手を打って喜び踊ること。【依舊】もとのままで変わらない。

▼六十二

佐藤言談

佐藤子所_レ見極高。多輕_二視同帷之間_一。言或涉_二侮弄_一。一日謂_二先君_一云。十二「綱翁俗稱」小心樸實。吾甫親迎。渠來祝。新妻出見。十二面發_レ赤。最好笑。又曰。日者訪_二長谷川克明_一「觀水」。渠迎置酒。余特賞_二其極美酒_一而別。理應_レ令_三人贈_一一瓶。而渠終不_レ贈。乃見_二其不_レ嗜_レ飲_一。又論_二四十六士_一云。淺野本略_二吉良_一而可。可_レ賂而不_レ納_レ賂。所_二以招_レ禍也。嘗送_二書先君於漢津_一云。世儒槩雇夫之徒也。至_レ如_二赤井友部之屬_一。亦只雇夫之長。

佐藤の言談

佐藤子、見る所極めて高し。多く同帷の間を輕視し、言、或は侮弄に渉る。一日、先君に謂ひて云ふ、「十

二「綱翁の俗称」、小心樸実なり。吾、甫めて親迎し、渠、来りて祝ふ。新妻、出でて見はるゝに、十二の面、赤を発す。最も笑ふに好し」と。又曰く、「日者、長谷川克明「観水」を訪ふ。渠、迎へて置酒す。余、特其れ美酒を極むと賞して別る。理、応に人をして一瓶を贈らしむべし。而るに、渠、終に贈らず。乃ち其の飲を嗜まざるを見る」と。又四十六士を論じて云ふ、「浅野、本より吉良に賂ひて可なり。賄ふべくして賂を納れざるは、禍を招く所以なり」と。嘗て書を先君に漢津に送りて云ふ、「世儒、槩ね雇夫の徒なり。赤井・友部の属の如きに至るも、亦只雇夫の長たるのみ」と。

○語注

【同帷】同じ塾の塾生。【綱翁】浅見綱斎。【樸實】飾り気がなく真面目なこと。【日者】かつて。【余特賞二其極美酒一而別】訓読は元倡寺本による。【四十六士】いわゆる赤穂浪士。吉良邸に討ち入ったのは四十七人とも言われるが、大目付に自首して切腹したのは四十六人であった。【浅野】浅野長矩（寛文七「一六六七」年—元禄十四「一七〇一」年）。【吉良】吉良義央（寛永十八「一六四一」年—元禄十五「一七〇二」年）。【漢津】唐津藩。迂斎が唐津藩主に仕えていたため。【赤井】赤井直義。【友部】伴部安崇。

▼六十三

闇齋税駕

闇齋。應二會津侯重聘一。到二江戸一。税駕之日。送二書於京一。未三始委二曲平安一。只書某月日至二江府一。中将垂二愍意一。

闇齋、税駕す

闇齋、会津侯の重聘に応じて江戸に到る。税駕の日、書を京に送る。未だ始めて平安を委曲せず、只書す、「某月日江戸に至る。中将懇意を垂る」と。

○語注

【会津侯】保科正之。【税駕】車につけた馬を解き放つこと。【委曲】詳しく隅々まで行き届いていること。【中将】ここでは会津侯。【某月日至江戸】。中将垂懇意。【元倡寺本割注「去何日着 中将殿懇意」】。

▼六十四

舍人十二子

小野崎舍人。有十二子。舍人時或遺忘其幼字。嘗自遠役反。諸兒出迎。舍人不始交語。指算諸兒。漸怡然云。汝曹無恙。

舍人の十二子

小野崎舍人、十二子有り。舍人、時に或は其の幼字を遺忘す。嘗て遠役より反り、諸兒、出迎す。舍人、始め語を交へず、諸兒を指算し、漸く怡然として云ふ、「汝曹、恙無し」と。

○語注

【怡然】喜び、楽しむ。「黄髮垂髻並怡然自樂」（陶潜「桃花源記」）【汝曹】「なんじがともがら」。おまえた

ち。

▼六十五

尚齋復姓

小野崎舍人。從_レ佐藤子之没_一。受_二教尚齋先生_一。舍人本冒_レ姓。尚齋激_二論復姓之義_一。不_二少貸_一。舍人謂_二先君_一云。自_下未_二始學_一時_上冒_二異姓_一。而今既三十年。子有_二數人_一。職在_二家老_一。事體至難。無_二復姓之手段_一。只有_二出奔之一路_一。先君以告。尚齋嚴然云。子爲_二舍人_一言_レ之。君子當_二大關節_一。不_二一日安_レ所_一不_レ安。出奔何憚之有。詞氣甚厲。先君東歸。致_二意於舍人_一。舍人只服_二尚翁之方正_一而已。

尚齋の復姓

小野崎舍人、佐藤子の没するより、教へを尚齋先生に受く。舍人、本姓を冒す。尚齋、復姓の義を激論し、少しく貸さず。舍人、先君に謂ひて云ふ、「未だ始めて学ばざる時より異姓を冒して、今既に三十年。子数人有り、職、家老に在り。事体至りて難し。復姓の手段無し。只出奔の一路有るのみ」と。先君以て告ぐ。尚齋、嚴然として云ふ、「子、舍人の為に之れを言へ。「君子、大關節に当たりては、一日も安んぜざる所に安んぜず。出奔、何の憚ることか之れ有らん」と。詞氣甚だ厲なり。先君、東歸して意を舍人に致す。舍人、只尚翁の方正に服するのみ。

○語注

【舍人本冒_レ姓】舍人は秋田藩支封・岩崎藩の家老職にあった。「初め舍人異姓を冒し、晩く学成り徳_{たか}邵きに

及べども、尚帰正する能はず。」(『處士越復傳』丁卯)【尚齋先生】三宅尚齋。【尚齋激論復姓之義】三宅尚齋は、浅見綱齋の『氏族辨證』(元禄五「一六九二」年刊)に触発されて、元禄六(一六九三)年に『氏族辨証附録』を著し、異姓養子を否定。このため尚齋門で他家を嗣いで異姓を称した者は復姓を強制された。【子爲「舍人」言「之」】織田文庫本はこの一文を欠き、「舍人如此説去邪」とする。【厲】激しい。

▼六十六

先君出處

先君温粹。未^ニ嘗激昂^一。以^ニ漢津眞廟少倦^レ學。托^レ病請^レ去。因^ニ眞廟苦慰勞^一。又遂不^レ去。尚齋甚不^ニ可^一之^ニ云。十左「先君俗稱」出處似^ニ犬吠^一。何復委弱。尚翁雖^ニ至嚴不^ニ少貸^一。而與^ニ先君^一甚密。多納^ニ先君之言^一。至^レ如^ニ佐藤喪禮甚鄙俗^一。亦尚翁大怒。以^レ書切訶責。及^ニ後先君上京委^ニ曲事體^一。則尚翁又服^ニ家君裁斷^一。

先君の出處

先君、温粹にして未だ嘗て激昂せず。漢津眞廟、少しく学に倦むを以て、病に托して去ることを請ふ。眞廟、苦^{ねだ}ろに慰勞するに因りて、又遂に去らず。尚齋、甚だ之れを不可として云ふ、「十左「先君の俗称」の出處、犬の吠ゆるに似る。何ぞ復^{また}委弱なる」と。尚翁、至嚴少しく貸さずと雖も、先君と甚だ密なり。多く先君の言を納る。佐藤の喪礼、甚だ鄙俗なるが如きに至り、亦尚翁大いに怒り、書を以て切に訶責す。後、先君上京して事体を委曲するに及び、則ち尚翁、又家君の裁断に服す。

○語注

【漢津眞廟】唐津藩主・土井利実。【托_レ病請_レ去】『先君子行實』享保十（一七二五）年に記事あり。【委弱】「委」はまかせる。力を抜いてなりゆきのままにさせる。【家君】ここでは迂齋のこと。【佐藤喪禮】『先君子行實』享保四（一七一九）年に記事あり。

▼六十七

非_二儒者_一

舍人。秋田別封。佐竹壹岐公家老。舍人毎玩_下弄書生不_レ達_二時勢_一。以_レ儒自任者_上。嘗謂_二一學士_一云。子是儒者。余非_二儒者_一。只是壹岐洲牧家老。佐藤之子就正。尚齋之子長民。因_二舍人推舉_一。食_二乎佐竹公邸中_一。舍人給_二五口於長民_一。尚齋以_二儒術_一自尊大。故卻_レ之云。米粟五口。如_二番卒之資_一。遂去歸_レ京。後舍人從容云。寡君蕞爾。人之所_レ知。本無_二五口卒_一。諸老先生之子。何復煩_二舍人_一居多。

儒者に非ず

舍人、秋田の別封佐竹壹岐公の家老なり。舍人、毎に書生の時勢に達せず、儒を以て自任する者を玩弄す。嘗て一學士に謂ひて云ふ、「子は是れ儒者なり。余、儒者に非ず。只是れ壹岐洲牧の家老なり」と。佐藤の子就正、尚齋の子長民、舍人の推挙に因りて佐竹公の邸中に食む。舍人、五口を長民に給ふ。尚齋、儒術を以て自ら尊大なり。故に之れを卻けて云ふ、「米粟五口、番卒の資の如し」と。遂に去りて京に帰る。後に舍人、從容として云ふ、「寡君の蕞_{さいじ}爾たる、人の知る所、本より五口の卒無し。諸老先生の子、何ぞ復_{また}舍人を煩はすこと居多なる」と。

○語注

【舍人】小野崎舍人。【秋田別封佐竹壹岐公】久保田藩支藩であつた出羽秋田新田藩^{しんでん}。藩主は壹岐守を称した。同藩は元禄十四（一七〇一）年に秋田・久保田藩の支藩として公認された。初代藩主・佐竹義長（明暦元「一六五五」年—元文五「一七四一」年）は、享保三（一七一九）年に家督を二代・佐竹義道（元禄十六「一七〇三」年—明和元「一七六五」年）（養子）に譲り、義道は宝暦十三（一七六三）年まで藩主をつとめた（『藩史大辞典 第一巻 北海道・東北編』雄山閣、一九八八年、三六六—三七二頁）。舍人（貞享二「一六八五」年—宝暦二「一七五二」年）が仕えたのは、初代義長・二代義道か。【洲牧】州の長官。「牧」は地方長官。【長民】三宅重徳（元禄十四「一七〇二」年—享保十七「一七三二」年）。長民は字、一平と称した。三宅尚齋の子。学問を志し、享保六（一七二一）年には江戸で佐竹義道に仕えた。役職名は「納戸司」で、「月俸五口、金二十両」であつたという（多田東溪「尚齋先生實記 中」『日本道學淵源録』五五九頁）。【番卒】番兵。【寡君】「寡徳の君」の意。臣下が自分の主君を謙遜するという語。【蕞爾】いかにも小さいこと。

▼六十八

佐藤三宅

佐藤漫接^二門人^一。尚翁嚴訓^二弟子^一。兩先生往^二諸侯^一。佐不^二必固責^一。尚翁禮接甚苛劇。小野崎舍人云。三宅師道至重。佐藤任^二自然^一。而佐藤重^二於尚翁^一許多。

佐藤・三宅

佐藤、漫に門人に接す。尚翁、嚴に弟子を訓ず。両先生、諸侯に往く。佐は必ずしも固責せず。尚翁は礼接甚だ苛劇なり。小野崎舍人云ふ、「三宅の師道、至重なり。佐藤は自然に任ず。而して佐藤、尚翁より重きこと許多なり」と。

○語注

【尚翁】三宅尚齋。

▼六十九

且謝^二阿十^一

妙道玄理。非^二其人^一則不^レ得^二說出^一。佐藤先生。爲^二諸人^一講^二解經語^一。大槩是略略地過。一日爲^二某人^一講解。最有^二妙旨^一。某人大感悟。特致^二謝辭^一。先生曰。今日之會。十左「先君子俗稱」在。不^レ覺發^二妙旨^一。且謝^二阿十^一而可。

且く阿十に謝す

妙道玄理、其の人に非ざれば則ち説き出だし得ず。佐藤先生、諸人の為に經語を講解するに、大概是れ略々地に過ぐ。一日、某人の為に講解し、最も妙旨有り。某人、大いに感悟し、特に謝辭を致す。先生曰く、「今日の會、十左「先君子の俗稱」在り。覺えず妙旨を發す。且く阿十に謝して可なり」と。

○語注

【略略地】「地」は副詞語尾。【十左】稲葉迂斎の俗称。十左衛門の略称。【阿十】「阿」は親しみをあらわす接頭語。

▼七十

三部書

上總鵜容齋。從_レ石原_一還。謂_レ余云。自_レ先君下世_一。侍_レ石原許_一。授_レ三部書_一。余問何。曰鞭策・排釋・鬼神集説。當時稱_レ三部書_一。蓋佐藤門下之所_レ稱。先君無_レ此説_一。

三部書

上総の鵜容齋、石原より還りて余に謂ひて云ふ、「先君の下世より、石原の許に侍し、三部の書を授かる」と。余、問ふ、「何ぞ」と。曰く、「『鞭策』・『排釈』・『鬼神集説』」と。当時、三部書と称すは、蓋し佐藤門下の称する所、先君、此の説無し。

○語注

【上總鵜容齋】鵜澤容齋（元禄八「一六九五」年—安永二「一七七三」年）。稲葉迂斎門人。本姓鈴木、名は宣堯、長右衛門と称す。千葉県大網白里町清名幸谷の人。【石原】現・墨田区石原。野田剛斎の家塾があった。【下世】死ぬこと。【鞭策】『講学鞭策録』。朱子の著作の集成。以下の二書も同様。佐藤直方編。天和三（一六八三）年成立、貞享元（一六八四）年刊。日本古典学会編『増訂佐藤直方全集』卷三（べりかん社、一九七九年）所収。【排釋】『排釈録』。佐藤直方編。貞享二（一六八五）年成立、貞享三（一六八六）年刊。

同上所収。【鬼神集説】佐藤直方編。元禄二（一六八九）年成立・刊。同上所収。

▼七十一

四抄略

闇齋。抄二略周程張朱書一。至二張書之選一。則佐藤子專資治。

四抄略

闇齋、周・程・張・朱の書を抄略す。張書の選に至りては、則ち佐藤子専ら資治す。

○語注

【抄二略周程張朱書一】『周書抄略』延宝七（一六七九）年序、『程書抄略』延宝元（一六七三）年序、『張書抄略』延宝五（一六七七）年跋、『朱書抄略』延宝八（一六八〇）年序、同九（一六八二）年刊。いずれも闇齋編。【資治】（こ）では編纂を資ける意。^{たす}

▼七十二

桑名夜舩

三輪善藏。初學二佐藤一。後倡二王陽明之學一。專信二良知良能之說一。三宅一平。尚翁長子。特排二摯王氏之學一。一時東行。二人相伴。夜登二桑名舩一。二人同被臥語。善藏微諷云。暗中舟自流。一平不_レ答。善藏微諷云。暗中舟自流。一平又不_レ答。少_二間_{之一}。善藏忽欲_レ吸煙。索_二煙管_一不_レ得。因起燃_レ燈始得。一平乃云。雖_二

暗中「舟自行。而明燭却不_レ煩_二摸索_一」。善辭屈。大服_二一平_一。

桑名夜舩

三輪善藏、初め佐藤に学び、後、王陽明の学を倡_とへ、専ら良知良能の説を信ず。三宅一平は尚翁の長子、特に王氏の学を排擠す。一時東行し、二人相伴ふ。夜、桑名の舩に登り、二人同被して臥語す。善藏、微諷して云ふ、「暗中、舟自ら流る」と。一平答へず。善藏、微諷して云ふ、「暗中舟自ら流る_{おのづか}」と。一平、又答へず。之れを少間し、善藏、忽ち煙を吸ふを欲し、煙管を索_{もと}むれど得ず。因りて起き燈を燃やし、始めて得。一平乃ち云ふ、「暗中と雖も、舟自ら行く。明燭、却りて摸索を煩はさず」と。善、辭屈し、大いに一平に服す。

○語注

【三輪善藏】三輪執斎（寛文九「一六六九」年—延享元「一七四四」年）。名は希賢。佐藤直方門人。『崎門學脈系譜』四六三頁）【三宅一平】三宅重徳。【桑名】三重県北東部、伊勢湾に面する。東海道四十二番目の宿場町。尾張熱田と「海上七里の渡」で結ばれていた。【微諷】諷はあてこすること。【少間】少しのひま。【明燭却不_レ煩_二摸索_一】自ら行く船を陽明学の良知良能に譬え、「明燭」を朱子学の明明徳に譬えた。明明徳は、『大学』の三綱領のひとつで、その内容は、八条目の「格物・致知・誠意・正心・修身」にあたる（高島元洋『山崎闇齋』二五二～二五三頁）。

先君簀仕

高大父兵庫君。冒^二山本氏^一。「尾府之臣」曾大父諱正長。即兵庫君第三子。始簀^二仕土井侯^一。「寛永年中領^二古河^一。」爲^二留守^一。領^二三百石^一。大父不休「正長叔子」與^二伯正春^一。去^二古河^一。正春又仕^二南部侯^一。「今正春曾孫某奉祀」大父又冒^二鈴木氏^一。爲^二東都大番兵^一。先君即不休第三子。爲^二佐藤翁門人^一。倡^二道學^一。土井侯利實。時延^二佐藤問學^一。正徳間。侯求^二講官^一。佐藤推^二舉先君^一。侯待^二先君^一寵禮頗重。情好至密。一時夜直。侯因舉^二諸名臣言行^一。及^二曾大父之事^一。先君對曰。某即臣祖父。臣父不休幼。亦（一本時）侍^二吾先侯^一。侯聞^レ之聳然云。今日始審^二卿是我家世臣^一。非^二復羈旅之班^一矣。先君唯拜而已。

先君簀仕

高大父兵庫君、山本氏「尾府の臣」を冒す。曾大父、諱は正長、即ち兵庫君の第三子なり。始めて土井侯「寛永年中、古河を領す」に簀仕して、留守と爲り三百石を領す。大父不休「正長の叔子」、伯正春と古河を去り、正春、又南部侯に仕ふ「今正春の曾孫某、奉祀す」。大父、又鈴木氏を冒し、東都の大番兵と爲る。先君は即ち不休の第三子なり。佐藤翁の門人と爲り、道学を倡^とふ。土井侯利實、時に佐藤を延^{まね}きて問学す。正徳の間、侯、講官を求む。佐藤、先君を推挙す。侯、先君を待するに、寵礼頗る重く、情好至りて密なり。一時、夜直す。侯、因りて諸名臣の言行を挙げて、曾大父の事に及ぶ。先君、對へて曰く、「某、即ち臣が祖父なり。臣が父不休、幼くして亦（一本「時」）吾が先侯に侍す」と。侯、之れを聞き聳然として云ふ、「今日、始めて卿のはれ我が家の世臣にして、復^{また}羈旅の班に非ざることを審かにす」と。先君、唯拜するのみ。

○語注

【高大父兵庫君】黙齋の高祖父・山本正尚。『先君子行實』によれば、正尚は稲葉直政の第二子。稲葉直政は、美濃三人衆で知られる稲葉一鉄（良通）の子。『寛政重修諸家譜』【山本氏】正尚は山本喜兵衛に養われ、その家を継いだ。喜兵衛はじめ徳川家康に仕え、のち尾張侯に仕えたという。『先君子行實』・『稲葉家譜』【尾府】尾張徳川家。【曾大父諱正長】黙齋の曾祖父・山本正長。山本十太夫と称す。山本正尚の第三子。『先君子行實』・『稲葉家譜』【笠仕】初めて仕官すること。【土井侯】正長が仕えたのは、下総古河藩主土井利勝、利隆、利重の三代。『先君子行實』【留守】留守居役か。【大父不休】黙齋の祖父である鈴木正則。正則は正長の第二子で、五郎右衛門と称した。『先君子行實』・『稲葉家譜』【叔子】叔は若い、末弟の意。正則は第二子。【伯正春】正則の兄である山本正春。古河藩主土井利重に仕えた。『先君子行實』【正春曾孫某】不詳。【鈴木氏】鈴木政重。大番組与力。正則は鈴木氏の息女を妻とした。『先君子行實』・『稲葉家譜』【東都大番兵】大番組。大番は江戸幕府の將軍直属の番衆のうち、最も大規模なもの。他に書院番・小性番・新番等があったが、大番は中でも最も由緒を誇った。平時には江戸城の二丸・西丸の警護や江戸市中の巡回、また大坂城・二条城の在番を行なった。寛永九（一六三二）年以降十二番組となり、各番組は大番頭一人（役高五千石）が組頭（各組四人）・番士（五十人）・与力（十人）・同心（二十人）等、配下八十余人を統括した。『岩波日本史辞典』【先君即不休第三子】『先君子行實』も迂齋を第三子とするが、『稲葉家譜』は夭逝した二子を加えて、迂齋を第五子とする。【正徳間】宝永八（一七一）年—正徳六（一七一六）年。迂齋が土井利実の伴読に任じられたのは、正徳五（一七一五）年、三十二歳。『先君子行實』・『稲葉家譜』【講官】儒官。【聳然】慎み畏れるさま。【世臣】先祖代々その主家に仕える臣下。【羈旅之班】他国出身者の一員。

▼七十四

天水三宅過^{マヤ}墳墓

天木時中。慷慨豪爽。在^レ洛每^三出遊到^二諸名公墳墓^一。感激嗚咽。大聲誦^二九原不^レ可^レ起之語^一。詞氣清亮。精神動^レ人。相從者爲^レ之下^レ淚。尚齋翁講會之暇。屢尋^二幽^一（一本名）勝^一。路傍有^二帝王之陵^一。先賢之封^一。必植^レ杖拜跪。躊躇不^レ能^二遽去^一。以爲^レ常。翁嘗養^二一奴^一。奴本自不^レ解^二翁之意^一。路間有^二墳墓^一。則張^二三李四亦必由^二門弟子^一以告^レ翁。弟子時或叱^レ之。奴云。主公素好^二墳墓^一。僕義敢不^二一一告^レ之^一。翁於^レ是發^二一笑^一。

天木（原文・水）・三宅、墳墓を過ぐ

天木時中、慷慨豪爽なり。洛に在りて出遊し諸名公の墳墓に到る毎に、感激嗚咽す。大声して「九原起こす可からず」の語を誦す。詞氣清亮、精神人を動かし、相従ふ者、之れが為に涙を下す。尚齋翁、講会の暇、屢々幽（一本「名」）勝を尋ねて、路傍に帝王の陵・先賢の封有らば、必ず杖を植^たて拝跪し、躊躇して遽去する能はざるを以て常とす。翁、嘗て一奴を養ふ。奴、本より自ら翁の意を解さず。路間に墳墓有らば、則ち張^二三李四も亦必ず門弟子に由りて以て翁に告ぐ。弟子、時に或は之れを叱す。奴云ふ、「主公、素より墳墓を好む。僕が義、敢へて一一之れを告げざらんや」と。翁、是に於て一笑を發す。

○語注

【天木時中】元禄九（一六九六）年—元文元（一七三六）年。尾張の人。江戸に出て佐藤直方門を叩いたが、

九ヶ月で直方の死に遭い、尾張へ帰った。その後、伊勢長島藩主・増山正忠に仕え、京都へ移つて三宅尚斎の門人となった。尚斎は時中の才能を評価したが、早世した。底本「天水」は誤り。『日本道學淵源・續録』六三七〜六四〇頁）【慷慨】意気が盛んなこと。【九原不_レ可_レ起】死者は二度と返らないという歎きの言葉。九原は春秋時代の晋の卿大夫の墓場の名。山西省にあつた。転じて墓場の意。「九原不_レ可_レ作、千古有_二餘悲_一」（蘇軾「故李誠之待制六丈挽詞」）【路傍】諸本いずれも「路旁」。【封】墓。【躊躇】立ち徘徊_{もとお}る。行きつ戻りつする。【張三李四】ありふれた人物。張家の三男、李家の四男の意。張や李は中国ではありふれた姓であるから。

▼七十五

蟻通明神

佐藤先生。壯在_レ洛。門風高峻。學者大畏憚。晚謂_二先君_一云。吾壯歲接_二門人_一。不_二少假_一。時以爲_二蟻通明神_一。此社威靈赫赫。令_二人怖_一。

蟻通の明神

佐藤先生、壯にして洛に在り。門風高峻、學者大に畏憚_{あたん}す。晩に先君に謂ひて云ふ、「吾、壯歳にして門人に接するに、少しも仮さず。時に以て蟻通の明神とす。此の社、威靈赫赫_{いかかく}、人をして怖れしむ」と。

○語注

【蟻通明神】『枕草子』などに見える明神。「うたてある神」(『貫之集』)・「物咎めし給ふ御神」(謡曲「蟻通」)

など、容赦なく神罰を下す神として知られた。蟻通の神は棄老にまつわる伝説をもつ神であるが、『貫之集』・『枕草子』、謡曲「蟻通」（世阿弥作）などは、歌の徳で神を鎮めることをテーマとしている。【赫赫】明ら
かで盛んなさま。

▼七十六

堀江順齋

堀江順齋。唐津人。尊_二信我先君_一如_二神明_一。言行細大。就_二先君_一而質焉。凡事不_レ聞_二於先君_一。則不_二敢諒_一矣。一日順直_二公廳_一。時遞筒到。報_二一官員之計_一。諸人相集弔惜。順獨不_レ肯云。疑未_二信然_一。人問_レ之。順答云。稻葉老師書至。書中無_二此事_一。

堀江順齋

堀江順齋は唐津の人、我が先君を尊信すること神明の如し。言行の細大、先君に就きて質す。凡そ事、先君に聞かざれば則ち敢へて諒とせず。一日、順、公庁に直す。時に通筒到り、一官員の計を報ず。諸人相集ひて弔惜す。順、独り肯ぜずして云ふ、「疑ふらくは未だ信然ならず」と。人、之れを問ふ。順、答へて云ふ、「稲葉老師の書至る。書中此の事無し」と。

○語注

【堀江順齋】堀江九兵衛次。稲葉迂齋門人。『崎門學脈系譜』四六七頁【直】宿直。【公廳】公の事務を取り扱う役所。【遞筒】元倡寺本欄外「ヒキヤク」。

▼七十七

課會

佐藤子在^レ世。先君與^二先師^一。立^二課會^一。講^二朱子訓門人^一。一日同門咸集。時佐藤忽來。聽^二諸人之討論^一。此日佐藤不^レ發^二一語^一。然諸人口談開悟倍^二平日^一。佐藤喟嘔冷咳之間。自使^二諸人快活^一。「此事隱求北島之宅也。先君子云。此日佐藤子。往^二西尾侯^一。有^レ故早了。因過^二北島^一。隱求聞^二子之駕音^一。遽出迎。不^レ覺筆札錯^二置架上^一。子就^レ坐。及^二諸人理^二前論^一。隱求願望摸索。子直云。汝所^レ索恐筆札。吾始未^レ解^三其束^二架上^一。諸人只服^二其清亮^一而已。」

課會

佐藤子、世に在るとき、先君、先師と課會に立ち、朱子の「訓門人」を講ず。一日、同門咸集^{みな}ふ。時に佐藤忽ち來り、諸人の討論を聴く。此の日、佐藤、一語を發せず。然るに諸人の口談開悟すること、平日に倍す。佐藤の喟嘔^{きく}冷咳の間、自ら諸人をして快活ならしむ。「此の事、隱求の北島の宅なり。先君子云ふ、「此の日、佐藤子、西尾侯に往き、故有りて早く了る。因りて北島を過ぐ。隱求、子の駕音を聞き遽に出迎し、覺えず筆札を架上に錯り置く。子、坐に就きて諸人の前論を理^{ただ}すに及び、隱求、願望摸索す。子、直に云ふ、「汝の索むる所、恐らくは筆札ならん。吾、始め未だ其の架上に束ぬるを解さず」と。諸人、只其の清亮に服するのみ。」と。」

○語注

【先師】佐藤直方のこと。【訓門人】書名。『朱子語類』（卷一一三〜一二二）所収。【倍平日】諸本いずれも「陪平日」。【喟嘔】喟は深くため息をつく。嘔はうたう。【隱求】永井隱求。【北島】八丁堀北島町（現・中央区八丁堀）。隱求の居宅があつた。【西尾侯】西尾忠尚（元禄二「一六八九」年—宝暦十「二七六〇」年）。遠江横須賀藩二代藩主。奏者番、寺社奉行、若年寄、老中を務めた。『藩史大事典 卷四 中部編Ⅱ 東海』雄山閣、一九八九年）【筆札】筆と紙。【架】ものを載せる台。

▼七十八

酒充^レ樂

佐藤先生。長^ニ於譬喩^一。毎能開^ニ發人^一。一日門人問。後世樂廢。何以和^ニ解心恙^一。先生乃云。貧子無^ニ雨衫^一。亦且用^ニ浴衣^一便了。今日樂無^レ傳。亦只是一箇酒恰好的。

酒、樂に充^あつ

佐藤先生、譬喩^{ひゆ}に長ず。毎に能く人を開發す。一日、門人問ふ、「後世、樂廢る。何を以てか心恙^{やう}を和解せん」と。先生、乃ち云ふ、「貧子、雨衫^{しん}無し。亦且く一浴衣を用ゐて便了す。今日、樂、伝無し。亦只是一箇の酒、恰好的なり」と。

○語注

【心恙】心の憂い、心の病。【雨衫】元倡寺本頭注「衫クロキ、モノ ヒトヘナルモノ」。【便了】けりがつく。おしまいになる。『禪語辞典』【恰好】ふさわしい。

▼七十九

玩月淡泊

先君子。訓_二門人_一云。人人善賞_二月明清朗_一。凡百事要_レ如_レ此。言雖_レ玩_二賞明月_一。未_下曾有_中取以欲_レ爲_二己有_一者_上。終古愛好中。尤淡泊的。

玩月、淡泊なり

先君子、門人に訓じて云ふ、「人々、善く月明清朗を賞す。凡そ百の事此くの如くならんことを要とす」と。言ふころは、明月を玩賞すと雖も、未だ曾て取りて以て己が有たらんと欲すること有らず。終古愛好する中、尤も淡泊なる_{もの}なり。

○語注

【終古】常に。

▼八十

規戒報_レ酒

佐藤門。自_二先君_一至_二諸弟子_一。伏臘致_二享儀_一。各有_レ等。某歲暮。永井行達。謁_二佐藤_一獻_レ物。如_二定儀_一。佐藤受。行達反。其夜行達又謁見。別置_二被薦_一〔俗間樽可_レ盛_二酒四斗_一者。以_レ薦蔽_二其外_一。如_二乞兒身被_レ薦因名_一。〕一樽_一。更述_二謝辭_一。佐藤不_レ解_二達意_一。良久。行達頓首云。今歲元旦賀謁。先生聞_二小子之窮_一。

辱教^二示儉約之事^一。小子承^レ命。凡百節約。乃此臘稍安。敢表^二寸誠^一。聊報^二規戒之德^一。再拜而去。後佐藤謂^二先君^一云。吾素多規^二戒諸人^一。然規戒報^レ酒。獨玄厚。〔行達俗稱〕

規戒、酒を報ず

佐藤の門、先君より諸弟子に至る、伏臘に享儀を致す。各々等有り。某歳の暮、永井行達、佐藤に謁して物を献ずること定儀の如し。佐藤受け、行達反る。其の夜、行達、又謁見し、別に被薦〔俗間、樽の酒四斗を盛る可き者、薦を以て其の外を蔽ふ。乞児の身に薦を被れるが如きに因りて名づく〕一樽を置き、更に謝辞を述べ。佐藤、達の意を解さず。良久しくして、行達、頓首して云ふ、「今歳の元旦、賀謁す。先生、小子の窮するを聞き、辱くも儉約の事を教示す。小子、命を承りて凡百節約す。乃ち此の臘稍安し。敢へて寸誠を表し、聊か規戒の徳に報ず」と。再拝して去る。後、佐藤、先君に謂ひて云ふ、「吾、素より多く諸人を規戒す。然るに規戒、酒を報ずるは独り玄厚〔行達の俗稱〕のみ」と。

○語注

【伏臘】夏祭りと冬祭り。【享儀】祭儀。ここでは盆暮れに謝礼の品を送ることを指す。【被薦】こもかぶり。薦^{こも}で包んだ四斗入りの酒樽。

▼八十一

丁酉火

享保二年。江城之下。南北有^レ火。先君亦罹^二災于鍛冶橋君邸^一。然經傳性理語解皆無^レ異。只圓機活法一匣。

獨逢^レ火。佐藤子云。今歳之災。尤厄^二人間^一。但護持院之爲^レ燼。與^二阿十活法之罹^レ火。無^三曾損^二益世用^一。

丁酉の火

享保二年、江城の下、南北火有り。先君、亦鍛冶橋の君邸に罹災す。然るに、経伝・性理の語解、皆異無く、只『円機活法』一匣^{はこ}、独り火に逢ふ。佐藤子云ふ、「今歳の災、尤も人間を厄す。但、護持院の燼^{じん}と爲り、阿十の活法の火に罹る、曾て世用を損益すること無し。」と。

○語注

【享保二年】一七一七年。『武江年表』享保二年項「○正月二十二日羊刻、小石川馬場脇井出某殿より出火、湯しま・神田護持院の莊嚴、神田橋御門内・鍛冶橋御門まで諸侯の藩邸数字、通町・八丁堀・築地まで武家・町屋とも夥しく焼亡あり。○災後、護持院を小日向の末に移させられ、その跡并雉子橋外武家屋舗跡、轟地となれり。」（今井金吾校訂『武江年表』上）ちくま学芸文庫、二〇〇三年、二六九頁）【鍛冶橋君邸】迂齋の仕えた唐津藩の江戸藩邸。『先君子行實』正徳五年項に記事あり。鍛冶橋は江戸城外郭の門で、東京都中央区八重洲から丸の内に通ずる所にあつた。【圓機活法】『円機詩学活法全書』二十四卷。明の王世貞校定。古典・故事・熟語・成句などを掲げた書。和刻本も多く、漢詩を作成する手引きとして用いられた。【護持院】東京都千代田区神田錦町にあつた新義真言宗の寺。元禄元（一六八八）年、徳川五代將軍綱吉の帰依を受けた隆光が湯島の知足院を同地に移したもので、元禄八（一六九五）年、幕府の祈願所となり護持院と称した。綱吉の死後次第に衰微し、この年（享保二年）に焼失し、跡地は神田橋と一橋の間の御塚外の火除地となり、護持院の原と呼ばれた。同寺は音羽（文京区大塚）護国寺に合併され、以後護国寺の本坊は護持院

を称したが、明治以降、護持院の寺名は廃された。

▼八十二

影子

一士人。與「長谷川克明」爲「同寮」。平生尤密。士人本羈旅。其祖之墓在「他邦」。藏「肖像於墓寺」。士人早孤。既長未「及」一「省」之。一時克明。因「君命」過「其邦」。臨「行」士人祝「克明」云。大父影堂在「某所」。此行君且爲「我」一「省」之。克明諾而往。克明素不「識」其祖。只與「孫結」交而已。越六七日到「之」。請「寺僧」拜「影像」。僧開「戸」揚「簾」。顏貌眉目。宛然其孫矣。絲髮不「差」。克明一見。愴然自失。膝前再見。乃畫像所「帶劍把」。鐵鐔之紋。即孫平日所「服用」。克明目所「熟習」。因更感想益切。既歸「一」告「其孫」。孫自「是」尤篤「追遠之誠」。克明後以「前話」語「先人」。且云。一絲髮不「似」則別人。程子之論固善矣。然既似如「此者」。乃復豈木主之所「能及」。

影子

一士人、長谷川克明と同寮たり。平生尤も密なり。士人、本羈^{もと}旅なり。其の祖の墓、他邦に在り。肖像を墓寺に蔵す。士人、早く孤なり。既に長じ、未だ之れを一省するに及ばず。一時、克明、君命に因りて其の邦を過ぐ。行に臨み、士人、克明を祝して云ふ、「大父の影堂、某所に在り。此の行、君、且く我が爲に一たび之れを省せよ」と。克明、諾して往く。克明、素より其の祖を識らず。只孫と交を結ぶのみ。越ゆること六七日、之れに到る。寺僧に請ひ、影像を拝す。僧、戸を開き簾を揚ぐ。顔貌・眉目、宛然、其の孫なり。絲髮差はず。克明、一見し愴然自失す。膝前して再見するに、乃ち画像の帶ぶる所の劍把、鉄鐔の紋、即ち

(元倡寺…其の) 孫、平日服用する所、克明、目して熟習する所なり。因りて更に感想益切なり。既に帰り、一一其の孫に告ぐ。孫、是れより尤も追遠の誠を篤くす。克明、後に前話を以て先人を語り、且つ云ふ、「一絲髪似ざるは則ち別人なり。程子の論、固より善し。然るに既に似ること此くの如き者は、乃ち復また豈木主の能く及ぶ所ならん」と。

○語注

【羈旅】他国に身を寄せる人。【省】見舞う。「省墓」。【大父】祖父。【宛然】そっくり。【絲髪】糸髪。わずかな物事。【劔把】刀の柄。【鐔】刀の柄の先端。【追遠】遠い先祖の祭を丁重に行うこと。【程子之論】程頤・程頤の論。ここでは『二程全書』卷二四所収「伊川先生語八上 伊川雜錄」(棟彦思)を指す。「又問ふ、「祭は聖人の制作に起りて、以て人に教ふるや否や」と。曰く、「非なり。先を祭るは天性に本づく。豺祭ること有る、獺祭ること有る、鷹祭ること有るが如き、皆是れ天性なり。豈人にして物に如かざること有らんや。聖人、因りて礼法を裁成し、以て人に教ふるのみ」と。又問ふ、「今の人、高祖を祭らざるは如何」と。曰く、「高祖自ら服(服喪のこと)有り。祭らざるは甚だ非なり。某が家、却りて高祖を祭る」と。又問ふ、「天子は七廟、諸侯は五廟、大夫は三、士は二とは如何」と。曰く、「此れ亦只是れ礼家此くの如く説く」と。亦問ふ、「今士庶(「士」は道を修め人の長たる身分の者、「庶」は農工商に従う者の意)の家、廟を立つるべからず。当に如何かすべき」と。「庶人は寢に祭る。今の正廳是れなり。凡そ礼は義を以て之れを起こして可なり。如し富家及び士は一影堂を置きても亦可なり。但し祭る時、影を用ふべからず」と。亦問ふ、「主を用ふるは如何」と。曰く、「白屋(白い茅で屋根をふいた貧しい人の家)の家は用ふべからず。只牌子を用ゐて可なり。某が家の主式の如き、是れ諸侯の制を殺ぐなり(簡略にしたものである)。大凡、影は

祭に用ゐるべからず。若し影を用ゐて祭らば須く一毫の差ふことなくして方に可なるべし。一莖鬚（莖は細かいものを数える助数詞）も多ければ、便ち是れ別人なり」と。（九州大学中国哲学研究室編『和刻本漢籍

二程全書附索引』（上） 中文出版社、一九七三年、二二二頁）【木主】位牌。

▼八十三

左氏君子

學者多稱^レ人曰^二「君子」^一。佐藤子云。人不^レ知不^レ慍。謂^二之君子^一。我邦神武而下。未^二曾聞^レ之矣。今日多呼^二君子^一。正是左氏傳君子。

『左氏』の君子

學者、多く人を称して君子と曰ふ。佐藤子云ふ、「人、知らずして慍^{うら}みず」、之れを君子と謂ふ。我が邦、神武より下りて、未だ曾て之れを聞かず。今日、多く君子と呼ぶ、正に是れ『左氏伝』の君子なり」と。

○語注

【人不^レ知不^レ慍】「人不知而不慍、不亦君子乎」（『論語』学而）。【神武】神武天皇。【左氏傳君子】『左氏春秋』「襄公二」の「其の乱るゝに及びてや、君子は其の功を称して、以て小人を加^しぎ、小人は其の技に伐^はりて、以て君子を馮^たぐ。是を以て上下礼無く、乱虐^{なぐ}竝^び生ず。善を争ふに由るなり。之れを昏徳と謂ふ。国家の敵^{やふ}は、恒に必ず之れに由る。」（鎌田正校注『新釈漢文大系 卷三二』明治書院、一九七四年、二四八頁）などを指すか。

▼八十四

不孝之故

人言信玄逐^二信虎^一。恐必有^レ故。佐藤云。吾嘗斷^レ之。不孝之故。

不孝の故なり

人言ふ、「信玄、信虎を逐ふ、恐らくは必ず故有らん」と。佐藤云ふ、「吾、嘗て之れを断ず、「不孝の故なり」と」と。

○語注

【信玄逐^二信虎^一】武田信玄は父信虎を今川義元の許へ追放し、武田家の当主となった。この追放の原因については諸説がある。

▼八十五

伯夷伊尹

先君子云。伯夷伊尹。不^レ及^二孔子^一處。只是知。孔子知。洽^二六十四州^一。伯夷伊尹。宛是江島鎌倉的。

伯夷伊尹

先君子云ふ、「伯夷・伊尹の孔子に及ばざる処は、只是れ知なり。孔子の知、六十四州に洽^{あまね}し。伯夷・伊

尹は宛^{あた}かも是れ江島・鎌倉的なり」と。

○語注

【伯夷】周の武王が殷の紂王を討つにあたり、弟の叔齊とともに、臣が君を弑することの不可を説いて諫めたが、聞き入れられなかった。周が天下を統一すると、周の粟を食らうことを恥じて首陽山に隠れ、蕨を食べて共に餓死した。【伊尹】殷の賢人。湯王を助けて夏の桀王を討ち、殷の開国の政治に大功があつた。【宛は江島鎌倉的】元倡寺本欄外「丹云 伯夷ノ清 伊尹ノ任 景色ハヨシトモ一ツギリ」。『孟子』万章下に「伯夷、聖の清なる者なり。伊尹、聖の任なる者なり。柳下惠、聖の和なる者なり。孔子、聖の時なる者なり。孔子、之れ集めて大成すと謂ふ。」とあるによるか（内野熊一郎校注『新釈漢文大系 卷四』明治書院、一九六二年、三四四頁）。なお織田文庫本は冒頭の「先君子云」を欠き、末尾に「此先君子所受于佐藤、密付話、世儒所不知也」の一文を付して、これが直方の言葉であつたことを記している。

▼八十六

法華

法華僧在「壇場」。説「法華經」。大衆中。有「一人宗「專念佛」者」。不「降服」。次日極「口説」法。亦不「曾服」。如「此經」一七日。亦不「肯服」。日晚衆散。一人亦出反。僧忽擲「法華經於其臀」云。汝心不「肯做」法華。臀爲「法華」。佐藤毎目「勸」人學。云「臀法華」。嘗言某甲近日如何。恐復臀法華。

法華

法華僧、壇場に在り、法華經を説く。大衆の中に、一人専ら念仏を宗とする者有り、降服せず。次の日、口を極めて法を説くも、亦曾て服せず。此くの如く一七日を経て、亦肯服せず。日晚衆散る。一人亦出で反る。僧、忽ち法華經を其の臀に擲ちて云ふ、「汝が心、肯て法華^{あへ}を做さず。臀を法華とせよ。」と。佐藤、毎に人に学を勧むることを目して、臀法華と云ふ。嘗て言ふ、「某甲、近日如何。恐らくは復^{また}臀法華ならん」と。

○語注

【日晚】日暮れ。【目】評価する。【佐藤毎目^レ勸^二人學^一】織田文庫本「佐藤毎目勸人學聊興志者」。【某甲】だれそれ。【恐復臀法華】織田文庫本「云漸做法華」。直方は「臀法華」に否定的な意ではなく、学問奨励の意を込めて用いている。

墨水一滴 終

参考文献

・崎門関係原典

日本古典学会編『山崎闇齋全集』（ぺりかん社、一九七八年）

日本古典学会編『増訂・佐藤直方全集』（ぺりかん社、一九七九年）

稻葉默齋編『迂齋文集』（茨城県立古河歴史博物館所蔵、写本、十三冊）

稻葉默齋『孤松全稿』。成東・元倡寺本（写本）他。このうち以下の著作は『道學遺書初集』（卷一

～四、全二冊、道學協會編、一八九一年）を参照した。卷一『姫島講義並余論』、『壩旒録』、

卷三『先君子行實』。卷四『處士越復傳』、『先達遺事』。

稻葉默齋『近思錄講義』篠原惟秀録、『道學標的講義』高宮文七録、『清谷話録』篠原惟秀録（柏木

恒彦「默齋を語る会」<http://mokusai.web.infoseek.co.jp/index.html>）

大木丹二『從江記』（林潜齋『再旬紀行付録』千葉県立文書館・蕪木文庫蔵、写本、一冊）

林潜齋『稻葉默齋先生傳』（池上幸二郎編著『吾學叢書第一篇・默齋先生傳』神田小川町池上方・默

齋学会編、一誠堂書店、一九三五年）

・中国古典原典

『詩經』（青木正兒等編『漢詩大系1』集英社、一九六六年）

『易經』（宇野精一・平岡武夫編著、鈴木由次郎『全釈漢文大系9・10 易經』集英社、一九七四年）。

（高田真治・後藤基巳訳『易經 上・下』岩波文庫、一九六九年）

『春秋左氏伝』（宇野精一・平岡武夫編著、竹内照夫『全釈漢文大系4・6 春秋左氏伝 上・中・下』

集英社、一九七四年、一九七五年）。（鎌田正校注『新釈漢文大系31』明治書院、一九七四年）

『老子』（蜂屋邦夫訳注『老子』岩波文庫、二〇〇八年）

『論語』（宇野精一・平岡武夫編著、平岡武夫『全釈漢文大系1 論語』集英社、一九八〇年）

『孟子』（内野熊一郎校注『新釈漢文大系 卷四』明治書院、一九六二年）

『中庸』（宇野精一・平岡武夫編著、山下龍二『全釈漢文大系 3 大学・中庸』集英社、一九七四年）

（金谷治訳注『大学・中庸』岩波文庫、一九九八年）

『大学』（宇野精一・平岡武夫編著、山下龍二『全釈漢文大系 3 大学・中庸』集英社、一九七四年）

（金谷治訳注『大学・中庸』岩波文庫、一九九八年）

『孔子家語』（宇野精一『新釈漢文大系 53 孔子家語』明治書院、一九九六年）

『孝経』（林秀一『中国古典新書 孝経』明徳出版社、一九七九年）

『楚辞』（岡田正之・井上哲次郎編『漢文大系 22 楚辞・近思録』富山房、一九七八年）

張鷟『朝野僉戴』卷六（『四庫全書 第一〇三五冊、子部三四一 小説家類』所収、上海古籍出版社、

一九八七年）

司馬遷『史記』（吉田賢抗『新釈漢文大系 史記』明治書院、一九七三年～二〇〇七年）

揚雄『法言』（鈴木喜一『中国古典新書・法言』明徳出版社、一九七二年）

班固『漢書』（高木友之助・片山兵衛訳注『中国古典新書続編 15 漢書列伝』明徳出版社、一九九一年）

・朱子学関係原典

諸橋轍次・安岡正篤監修『朱子学大系 3 朱子の先駆（下）』明徳出版社、一九七六年

周敦頤『周子全書 陋第三十四』（岡田武彦・荒木見悟主編『近世漢籍叢刊 和刻影印 思想初編（1）

周張全書（上）』中文出版社、一九七二年）

程顥・程頤『二程全書』（岡田武彦・荒木見悟主編『近世漢籍叢刊 和刻影印 思想初編（三） 二程全

書』中文出版社、一九八五年）・（九州大学中国哲学研究室編『和刻本漢籍二程全書附索引』（上）

中文出版社、一九七三年)

謝良佐『上蔡語錄』(岡田武彥主編、荒木見悟解題『近世漢籍叢刊 和刻影印 思想初編六 上蔡語錄・

延平答問附補錄』中文出版社、一九八五年)

李延平撰、朱熹、周木編『延平答問』(岡田武彥、荒木見悟主編『近世漢籍叢刊 和刻影印 思想初編

六 上蔡語錄・延平答問附補錄』中文出版社、一九八五年)・(高畑常信『中国古典新書 延平答

問』明德出版社、一九八五年)

朱熹『周易本義』(新文豐出版公司・台北、一九七九年)

朱熹『論語集註』(『四書集註』藝文印書館・台北、一九五六年)

朱熹『晦庵先生朱文公文集』(岡田武彥・荒木見悟主編『近世漢籍叢刊 和刻影印 思想初編(九・十)』

中文出版社、一九八五年)・(『叢書集成初編・朱子文集』中華書局出版、一九八五年)

朱熹『四書集註』(『四書集註』藝文印書館・台北、一九五六年)・(服部宇之吉校注『漢文大系 卷

一』富山房、一九七二年)

朱熹・呂東萊『近思錄』(岡田正之・井上哲次郎編『漢文大系 22 楚辭・近思錄』富山房、一九七八年)

朱熹『朱子語類』(朱傑人・嚴左之・劉永翔主編『朱子全書 15 朱子語類』上海古籍出版社・安

徽教育出版社、二〇〇二年)・(三浦國雄校注『朱子語類』抄』講談社學術文庫、二〇〇八年)

諸橋轍次・安岡正篤監修『朱子學大系 10 朱子的後繼(上)』明德出版社、一九七六年

凌稚隆輯校、李光縉增補『史記評林』(富山房編輯部編『漢文大系 6』富山房、一九七三年)

謝肇淛『五雜俎』(長澤規矩也解題『和刻本漢籍隨筆集 1』(汲古書院、一九七二年)

・崎門関係の文献

岡次郎編『日本道學淵源録、續録、續録増補』（開明堂、一九三四年（岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編『楠本端山・碩水全集』葦書房、一九八〇年、所収））

岡次郎編『崎門學脈系譜』（晴心堂、一九四〇年（岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編『楠本端山・碩水全集』葦書房、一九八〇年、所収））

東条琴台『先哲叢談続編』（『近世文芸者伝記叢書 4』ゆまに書房、一九八八年）

阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』（東大出版会、一九六五、一九七八復刊）

高島元洋『山崎闇斎—日本朱子学と垂加神道』（ぺりかん社、一九九二年）

東金市史編纂委員会編『東金市史・史料篇・第一く四』東金市、一九七六年く一九八二年。

東金市史編纂委員会編『東金市史・通史篇・下巻』東金市、一九九三年。

梅澤芳男編著『稻葉默斎先生と南総の道学』（ぺりかん社、一九八五年）

・藤原惺窩・林羅山関係の文献

太田青丘編『藤原惺窩集 上・下』（国民精神文化研究所、一九三八年、一九三九年）

京都史蹟会編『羅山文集 上・下』（ぺりかん社、一九七九年）

京都史蹟会編『林羅山詩集 上・下』（ぺりかん社、一九七九年）

林守勝（読耕斎）撰『日本朝遯史』（『深草元政集』巻四所収、島原泰雄編『古典文庫』一九七八年）

金谷治他校注『日本思想大系 28 藤原惺窩・林羅山』（岩波書店、一九七五年）

堀勇雄『人物叢書 林羅山』（日本歴史学会編、一九六四年、吉川弘文館）

太田青丘『人物叢書 藤原惺窩』（日本歴史学会編、吉川弘文館、一九八五年）

太田青丘編『藤原惺窩集 上・下』（国民精神文化研究所、一九三八年、一九三九年）

堀勇雄『人物叢書・林羅山』（吉川弘文館、一九六四年）

鈴木健一『林羅山年譜稿』（へりかん社、一九九九年）

平重道『吉川神道の基礎的研究』（吉川弘文館、一九六六年）

林屋辰三郎『角倉素庵』（朝日新聞社、一九七八年）

宇野茂彦『叢書 日本の思想家 2 林羅山（附）林鵝峰』（明德出版社、一九九二年）

・その他の文献

師鍊撰『元亨釈書』（鈴木学術財団編『大日本仏教全書 62』講談社、一九七三年）

市川白弦・入矢義高・柳田聖山校注『日本思想大系 16 中世禪家の思想』（岩波書店、一九七二年）

「相国寺塔頭末派略記并歴代」『大日本史料 12 編 31』所収（東京帝国大学文学部史料編纂所、一九三三年）

上村観光編『五山文学全集 1』（思文閣出版、一九九二年）

「徂徠先生年譜細君墓表神主一卷」（今中寛司『徂徠学の史的研究』所収、思文閣出版、一九九二年）

橘南谿（橘春暉）『北窓瑣談』（日本随筆大成刊行会編『日本随筆大成』第二期一五、吉川弘文館、

一九七四年、一九二八年復刻）

河口静斎『斯文源流』（太田蜀山人編『三十輯』所収、岸上操編、内藤耻叟・小宮山綏介標註『近古文

芸温知叢書』第三編、博文館、一八九一年）

- 三木紀人校注『新潮日本古典集成・発心集』（新潮社、一九七六年）
佐竹昭広他編、渡辺実校注『新日本古典文学大系 25 枕草子』（岩波書店、一九九一年）
木村正中校注『新潮日本古典集成・土佐日記・貫之集』（新潮社、一九八八年）
小山弘志、佐藤健一郎校注・訳『新編日本古典文学全集 59 謡曲集 2』小学館、一九九八年）

・目録、辞典、年表類

- 木村礎他編『藩史大辞典 第一卷 北海道・東北編』（雄山閣、一九八八年）
木村礎他編『藩史大辞典 卷四卷 中部編Ⅱ 東海』（雄山閣、一九八九年）
堀田正敦等編『寛政重修諸家譜』（続群書類従完成会、一九六四年～一九六六年）
永原慶二監修『岩波日本史辞典』（岩波書店、一九九九年）
入矢義高古監修、賀英彦編著『禅語辞典』（思文閣出版、一九九一年）
国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』（吉川弘文館、一九七九年～一九九七年）
今井金吾校訂『武江年表 上』（ちくま学芸文庫、二〇〇三年）
『国書総目録 補訂版』（岩波書店、一九八九年～一九九〇年）
『古典籍総合目録 国書総目録統編』（岩波書店、一九九〇年）
諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店、一九八〇年）
小川環樹・赤塚忠・西田太一郎編『新字源』（角川書店、一九六八年）
新村出編『広辞苑 第五版』（岩波書店、一九九八年）
『日本大百科全书 二版』（小学館、一九九四年）

○『墨水一滴』校合

底本…関儀一郎編『日本儒林叢書 第三冊 史伝書簡部』東洋図書刊行会、一九二八年、所収本。

狩野…東北大学附属図書館狩野文庫蔵本。

碩水…九州大学附属図書館碩水文庫蔵本。

元倡寺…千葉県成東市元倡寺蔵『孤松全稿』所収本。

織田…無窮会織田文庫『帯秋艸盧 雑編八』所収本。

※旧字・新字の異同、訓点の異同、また欄外訂正のある誤字は、原則として校異に掲載しなかった。

▼序 底本…晞_レ高慕_レ古。 狩野…晞_レ高慕_レ古。 碩水…晞_レ高慕_レ古 元倡寺…晞_レ高慕_レ古 織田…晞_レ高慕_レ古／

底本…時皇和明和丙戌之秋。 狩野…皆皇和明和丙戌之秋。 織田…皆皇和明和丙戌之秋 ▼目錄 底本…(欠)

織田…目錄あり(本文参照) ▼一 底本…而後得_レ耦。 碩水…而得耦／ 底本…欽夫進諫曰。 碩水…欽

夫諫曰。 ▼二 底本…播州細河人。 碩水…播州細川人 織田…播列細河人／ 底本…葬看座 狩野…葬首

座 碩水…葬首坐 元倡寺…葬首座 織田…葬首座／ 底本…景雲寺長老九峯 狩野…景雲寺長老成九峯 碩水…

景雲寺長老成九峯 元倡寺…景雲寺長老成九峯 織田…景雲寺長老成九峯／ 底本…故江家儒而入_レ佛。

狩野…故江家儒。入_レ佛／ 底本…弱歳入_レ洛。 狩野…弱歳入而洛／ 底本…漂_二着鬼界島_一。 狩野…漂_二

着鬼界寫一織田…漂着鬼界寫／底本…令門生肆釋奠禮一。織田…令門生肆釋奠禮／底本…又號北
肉山人一狩野…又號北關山人一／底本…凡識レ字者狩野…識レ字者／底本…所貴者唯得レ之言表レ而
已。狩野…凡所貴者唯得レ之言表レ而已。▼三底本…是爲權輿一也。碩水…是爲權輿▼四底本…韓
山片石碩水…寒山片石／底本…林道春在レ洛。元倡寺…林道春左レ洛／底本…見惺窩於賀古宗隆之
宅一。狩野…見惺窩一窩於賀古宗隆之宅一／底本…此意今日都附レ卿。元倡寺…此意今日都附レ郷▼
五底本…乃許レ之。狩野…門許レ之織田…門許レ之（欄外…乃）／底本…時有大坂之役不レ果。狩野…
時有大坂之役不レ果碩水…時有大坂之役不レ果元倡寺…時有大坂之役不レ果。織田…時有大坂之役不レ果
▼六異同なし▼七底本…每一板成一。狩野…每一板成一。碩水…每一板成一。元倡寺…每一板成一
織田…每一板成一▼八底本…惺窩謂春秋一碩水…惺窩春秋▼九底本…十四註長恨歌一。碩水…十四
注長恨歌／底本…論孟用何趙註皇刑疏一。碩水…論孟用何趙註皇刑疏／底本…名菊松麻呂。狩野…
名菊松磨呂一碩水…名菊松磨呂／底本…說太平記一。狩野…說太平記一／底本…明曆三年丁酉病卒。
碩水…明曆三十丁酉病卒▼十底本…論語集註碩水…論語集註／底本…本朝官職之事狩野…本朝官職
之某▼十一底本…字レ之曰信。碩水…字曰信▼十二底本…東坡詩集註碩水…東坡詩集註／底本…
朱子註碩水…朱子注▼十三異同なし▼十四底本…置大宰府一。狩野…置大宰府一。元倡寺…置
太宰府一織田…置太宰府／底本…以肆釋奠式一。狩野…以肆釋奠式一。元倡寺…以肆釋奠式一
織田…以肆釋奠式／底本…至羅山先生一。再興其禮一也。狩野…再至羅山先生一興其禮一也▼十五
底本…便是深衣司馬公。碩水…便是深衣司馬温公／底本…再奉レ命通缺富土川一。織田…再命通缺富
土川／底本…非魚而走水恠哉。元倡寺…非魚而走水快哉▼十六異同なし▼十七底本…怒遷
梅閨蜀一。狩野…怒迂梅閨蜀一元倡寺…怒迂梅閨蜀一織田…怒迂梅閨蜀一／底本…遂住翠微寺一。

碩水…遂遂住翠微寺／底本…偏遊蜀中^一。狩野…偏遊蜀中^一。碩水…偏遊蜀中。織田…偏遊蜀中。▼十
八 異同なし ▼十九 異同なし ▼二十 底本…只嗟歎少選云。碩水…只嗟歎少選曰 ▼二十一 底本…
李杜用平處。狩野…李杜甫用平處／底本…李杜置仄者。元倡寺…李杜置仄 ▼二十二 底本…師力
三分 織田…佐渡山／底本…闇齋先生見佐渡州有金氣^一。狩野…闇齋先生見佐渡州有金氣^一。／底本…
則吾與十二^一「淺見安正俗稱」在。織田…則吾與十二^一「淺見安正俗稱」 ▼二十三 底本…佐藤子自稱五
郎左衛門^一。織田…佐藤直方自稱五郎左衛門／底本…又無別稱^一。狩野…亦又無別稱^一。織田…無復別
稱／底本…公何獨無^レ之。織田…公又何獨無^レ之／底本…門人野田德勝稱剛齋^一。織田…門人野田德
勝稱剛齋也 ▼二十四 底本…渙然冰解者多矣。狩野…渙然冰開者多矣 碩水…渙然冰開者多矣 元倡寺…
渙然冰開者多矣 織田…多渙然冰開者矣／底本…論理一分殊^一。織田…論理一分殊之義 ▼二十五 底本…
以通鑑綱目爲魁。織田…通鑑綱目爲魁／底本…初鵜金平成童爲訓點^一。織田…初鵜金平成童爲之
訓點／底本…當時稱卓越^一。織田…當時稱其卓越／底本…後三宅道乙改訂新刻。狩野…後道乙改訂
新刻／底本…綱齋尤愛綱目之書^一。織田…淺見綱齋尤愛綱目之書／底本…自讀之學舍者。織田…
讀之者／底本…佐藤子曰。織田…佐藤直方曰／底本…而熟讀四十二遍。織田…而凡例既業足以爲大
義矣熟讀四十二遍／底本…何又必然。織田…阿十何又剩了／底本…然平素至經義奧妙^一。織田…然
至經義奧妙／底本…嘗詰難中庸第二十五章之一章。狩野…嘗詰難中庸第二十五章之一章 碩水…嘗詰難中
庸第二十五章之一章 織田…嘗詰難中庸第二十五章之一章／底本…以示經旨之難領會^一。狩野…以示終旨
之難領會 ▼二十六 底本…未^レ有達者之名^一。織田…未^レ有達者之名矣／底本…然書肆壽文。狩野…
然書肆壽之／底本…私加闇齋點三字於狹簽^一。狩野…私加闇齋點三字於簽^一／底本…慈殆亦誦二十八
史略^一。織田…慈殆亦未曾誦那十八史略的 ▼二十七 底本…雖^レ然未^レ至至處^一。碩水…雖然未至至所

／**底本**…何以語^二中庸^一。**織田**…則不足以語^二中庸之理也矣^一／**底本**…西山尊^二信小學^一如^二神明^一。**織田**…西山眞氏云吾尊信小學書誠如神明 ▼二十八 **底本**…尚齋從^レ旁云。**織田**…三宅尚齋從旁云／**底本**…君亦少欣適。**織田**…君亦不少欣適／**底本**…吾固欣適。**織田**…五既固欣適矣 ▼二十九 **底本**…佐藤與^二永井玄厚^一手帖。**狩野**…佐藤子與^二永井玄厚^一手帖 **碩水**…佐藤子與^二永井玄厚^一手帖 **織田**…佐藤子與^二永井玄厚^一手帖

底本…因^下一饒商饗^二國老某大夫^一觀遊上。**織田**…因^一饒商饗其國老某大夫觀遊／**底本**…時會虹見^二東方^一。**織田**…時會虹出東方／**底本**…爾曹嘗知^レ虹。**織田**…爾曹嘗知^レ虹乎／**底本**…僕等不學亦鳥識。**織田**…僕等不學亦鳥識焉／**底本**…虹是蛇吐氣。**織田**…虹是蛇吐氣矣 ▼三十 **底本**…稱^レ不^レ通^レ理^一曰^二有谷婆^一。**狩野**…稱^レ不^レ通^レ理者^一曰^二有谷婆^一 **碩水**…稱^レ不^レ通^レ理者^一曰^二有谷婆^一 **織田**…稱^レ不^レ通^レ理者^一曰^二有谷婆^一 **底本**…專阿^二好茶煙^一。 **織田**…專阿^二好茶煙而已^一／**底本**…汝終日啜^レ茶吸^レ煙。 **碩水**…汝終日啜^レ茶吸烟／**底本**…抑烟乎。 **狩野**…抑煙乎 **元倡寺**…^レ欠^一 **織田**…抑止烟乎／**底本**…理應^レ不^レ識^レ婆。**織田**…理當^レ不^レ識^レ婆矣／**底本**…又豈管^三婆好^二茶煙^一。 **織田**…又豈何管婆好茶煙邪／**底本**…主人乃拳^二前話^一以爲^二笑囃^一。**織田**…主人乃拳前話以婆之不通爲笑囃以備話柄／**底本**…土人聽^レ之思念漸答云。 **織田**…土人聽^レ之思念久之漸答云 ▼三十一 異同なし ▼三十二 **底本**…有^レ客在^二佐藤翁燕坐^一戲談。**織田**…有客在^二佐藤翁燕坐^一戲談曰／**底本**…忽吹^レ之使^レ冷。 **碩水**…忽吹^レ之使令／**底本**…吹尚不^レ敢。 **織田**…吹尚不敢邪／**底本**…從^レ旁聽^レ之。**織田**…從^レ之聽之／**底本**…時有^三門人獻^二柑實^一。**織田**…明日有門人獻柑實／**底本**…夫人不^レ與。**織田**…夫人不與焉／**底本**…只剥^二陳皮^一可乎。 **織田**…只剥陳皮爲弄戲可乎／**底本**…剥尚不^レ敢。 **織田**…剥尚不敢邪／**底本**…便舉^二前話^一。**織田**…便舉前日戲談／**底本**…坐中大賞^レ之。**織田**…及^レ長稍得^二翁之學脈^一。**織田**…及長頗得翁之旨訣 ▼三十三 **底本**…漢津一時擢^二侍讀田忠甫^一。 **織田**…漢津侯一時擢侍讀田忠甫／**底本**…首進^二先君官秩^一。特賜^二二百石^一。**狩野**…首進先君□□□賜二

百石／**底本**…家塾書生乃言。**織田**…家塾書生金修軒曰／**底本**…爲稻翁一毆二百石者莫一**織田**…爲稻翁毆二百石者莫非田／**底本**…非忠甫。**織田**…忠甫也／**底本**…西洞一學者好奇論。**織田**…西洞一學者王氏好奇論／**底本**…後以一身老尤貧。**織田**…王後以身老尤貧／**底本**…來東都方需宦。**碩水**…來東都方需宦**織田**…來東都方需宦／**底本**…其人却譏唐之不**能**俯仰塵世。**元倡寺**…其人却譏唐之不能俯仰塵世**織田**…王却譏唐之不能俯仰塵世／**底本**…學者大失望。**織田**…於是學者失望於王／**底本**…濱坊一書生爲之誦云。**織田**…濱坊一書生爲之語云 ▼三十四 **底本**…每每慢謹拘禮律無氣慨者上。

狩野…每每慢謹拘禮律無氣慨者**碩水**…每每慢謹拘禮律無氣慨者**元倡寺**…每每慢謹拘禮律無氣慨者上**織田**…每每慢謹拘禮律無氣慨者／**底本**…吾爲卿輩教路廁之法乎。 **織田**…吾爲卿輩教路廁之法乎 ▼三十五 **底本**…臥起爲童謡自悞。**織田**…臥起歌童謡自悞／**底本**…理父年逾古希。**織田**…理父年逾古希／**底本**…因請就而學書。**元倡寺**…就而學書／**底本**…豈復奚學。**元倡寺**…豈奚學 ▼三十六 **底本**…尤重禮儀。**狩野**…尤重禮義**碩水**…尤重禮義**元倡寺**…尤重禮義**織田**…尤重禮義／**底本**…題目金魚生。**織田**…評以金魚生以充月旦／**底本**…言喪生子。**織田**…言喪子／**底本**…金魚生子於盆水藻中。**織田**…金魚生子於盆水之藻中也／**底本**…然鄙俗薄禮者之一針。**織田**…而鄙俗薄禮者之一針焉耳 ▼三十七 **底本**…大父不休君故舊。**織田**…先君子幼在大父不休宅第隣佑故舊／**底本**…極華侈。**狩野**…極華極**織田**…最極華侈／**底本**…一日不白在前園。**碩水**…一日不白在前園／**底本**…不白應聲云。**狩野**…不白聲云／**底本**…雖不奢亦終不久。**織田**…雖不奢亦是不久矣 ▼三十八 **底本**…一時隆冬語人云。**織田**…一時隆冬語其子云／**底本**…覺四支漸生溫氣。**狩野**…乃覺四支漸生溫氣**碩水**…乃覺四支漸生溫氣**元倡寺**…乃覺四支漸生溫氣**織田**…乃覺四支漸生溫氣 ▼三十九 **底本**…人生贅物**狩野**…人世贅物**碩水**…人世贅物**元倡寺**…人世贅物**織田**…人世贅物／**底本**…多田東溪

誘引後生^一。狩野^二多田東溪誘引後世^一／底本^三爲忘年友^一。碩水^四爲妄年友／底本^五齡六十忽患^二中風^一。元倡寺^六年六十忽患^二中風^一／底本^七一日訪信値不在^一。織田^八一日訪余値不在^一。▼四十
底本^九恐外人妄論。織田^{一〇}是外人之妄論也／底本^{一一}親見其帶^レ劔。織田^{一二}嘗見其帶^レ劔／底本^{一三}赤
井曰。不^レ然。吾舊在^レ洛。親見其帶^レ劔。碩水^{一四}〈欠〉／底本^{一五}恐外人妄論。織田^{一六}是外人之妄論也
▼四十一 底本^{一七}常以^三百事不^レ驚悸爲^レ念。織田^{一八}常以^三百事不^レ驚悸自爲^レ念／底本^{一九}一日洛^二盤中^一。
織田^{二〇}一日洛盤中時／底本^{二一}竄云。逐云。碩水^{二二}竄逐云／底本^{二三}何復動^レ心。織田^{二四}何必動^レ心哉／
底本^{二五}只以^レ妙^二眼科^一。織田^{二六}然以其妙於針治／底本^{二七}時或助^二活計^一。織田^{二八}時復得活計／底本^{二九}
活計^一。〈欠〉 織田^{三〇}一時住京以醫仰食老母在西肥／底本^{三一}母嘗懷。織田^{三二}母居常日／底本^{三三}正固
聞^レ之。織田^{三四}正固云／底本^{三五}以爲^二細故易^レ了。織田^{三六}此細故主亦復何爲患／底本^{三七}母云。織田^{三八}
母笑云／底本^{三九}今唯恐^二衣食之不^レ給。織田^{四〇}今貧唯恐衣食之不^レ給／底本^{四一}何用^レ之。織田^{四二}汝何輕
言／底本^{四三}正固至^レ京。織田^{四四}正固於是／底本^{四五}輒輸^二致西肥^一。碩水^{四六}輸致西肥／底本^{四七}以充^二母
所^レ欲。碩水^{四八}以輒充母所欲／底本^{四九}只表^二一敝衫^一。織田^{五〇}只表^二一敝衫而已^一。▼四十二 底本^{五一}仕^二玄
眞二廟^一。狩野^{五二}仕^二玄眞二病^一（欄外^三恐廟）／底本^{五三}藩中敬^二先君^一甚謹。織田^{五四}藩中敬^二先君等家老^一／
底本^{五五}甘者食。狩野^{五六}其者食（欄外^三恐甘） 碩水^{五七}其者食／底本^{五八}否者棄。織田^{五九}否則棄／底本^{六〇}
悉罄^レ之遂去。碩水^{六一}罄之遂去／底本^{六二}眞亦不^レ刺^二姓名^一。狩野^{六三}眞樂亦不^レ刺^二姓名^一 織田^{六四}眞樂亦不
刺^レ姓名／底本^{六五}以^三先君道德師表如^二耆老^一戲^レ之。狩野^{六六}以^三先君道德師表如^二耆老^一戲^レ之也 碩水^{六七}以先
君道德師表如耆老戲之 元倡寺^{六八}以^三先君道德師表如^二耆老^一戲^レ之 織田^{六九}以先君道德師表如耆老也 ▼四十
三 底本^{七〇}不^レ見鼻 織田^{七一}無鼻／底本^{七二}（冒頭）〈欠〉 織田^{七三}佐藤直方稱至德自然者曰無鼻／底本^{七四}
令^三有司物^二色京師^一。狩野^{七五}有司物^二色京師^一／底本^{七六}有司遍索^二洛中^一。織田^{七七}有司遍索^二洛中^一 底本^{七八}

因違告狀。織田…有司違告其君／底本…肥瘦長短。狩野…長短肥瘦碩水…長短肥瘦／底本…至膚髮容止。織田…至膚髮黑白／底本…果皆備「艷美」。織田…果皆莫不備艷美乎／底本…有司云然。織田…有司云諾／底本…君有「怡色」。織田…君怡然／底本…乃刻日召見。織田…乃命刻日召見／底本…君忽云。織田…君忽呼有司云／底本…女衆形已悉。碩水…女郎形已悉。織田…妾衆形已悉矣／底本…但亦鼻梁之間。織田…只亦鼻梁之間／底本…多驚「人耳目」。狩野…驚「人耳目」碩水…驚人耳目。織田…驚人耳目／底本…顏中不「見」有鼻。織田…顏中不「見」其有鼻／底本…佐藤子以爲「話柄」。織田…「欠」▼四十四底本…每誓「夫人」云。狩野…每誓「婦（欄外…夫）人」云／底本…少有「鬚色」。碩水…少鬚色▼四十五底本…閨齋門六千人。織田…閨齋門六千人／底本…閨齋門六千人。織田…閨齋門六千人。底本…其員自有「六千人」。狩野…其員有「六千人」／底本…蓋亦多。織田…亦宜多耳／底本…其在「洛下」帷。狩野…其在「洛下」帷。織田…其在「洛下」帷時／底本…恐無「不」見者。織田…無不見者／底本…時勢豈有「不」見「閨齋」者乎。織田…時勢有不見閨齋者乎／底本…一見記籍。織田…一一見記籍／底本…其員六千人。狩野…其員六千碩水…其員六千元倡寺…其員六千織田…其員六千▼四十六底本…嘗疑「難湯武放伐之權」。狩野…□□□□□□□□之權▼四十七底本…此爲「四子集註通例」。狩野…此爲「四子集註通例」／底本…或云。織田…或人云／底本…意味自深長。碩水…意自深長／底本…閨齋無「子」。織田…閨齋始無子／底本…故難「解」此意。織田…故蓋難解此意焉耳▼四十八底本…莫「不」下與「親舊門」遊樂上。織田…莫不招與親舊門客宴樂▼四十九底本…雪積浩然。狩野…雪積浩然碩水…雪積浩然元倡寺…雪積浩然織田…雪積浩然▼五十底本…事見「五雜組」。狩野…事見五雜組碩水…事見五雜組織田…事見五雜組▼五十一底本…漁遊。織田…澤一漁／底本…時日上已。碩水…時上已／底本…門客潮田生。碩水…門客潮日生／底本…請「先君」行漁。織田…請先君將行漁

／底本…澤一乃向潮生間。織田…澤整容向潮生間／底本…不自「一本親」殺。狩野…不親殺
 碩水…不親殺元倡寺…不親殺織田…不親殺／底本…答辭屈室。狩野…答辭屈室碩水…答辭屈室
 元倡寺…答辭屈室織田…答辭屈室／底本…友父從旁云。狩野…田友父從旁云碩水…田友父從旁云
 元倡寺…田友父從旁云織田…田友父從旁云▼五十二底本…大父不休君第宅。織田…大父不休府君第宅
 ／底本…元禄初有二妖異。織田…元禄初邸巷中有怪／底本…巷上曳木鐸。織田…路上曳木鐸／
 底本…聲響人家。織田…聲響巷內／底本…聲在二咫尺間。織田…聲在咫尺之間／底本…大父性剛。
 織田…大父性剛毅／底本…不三曾怖懼之。織田…始不怖懼之／底本…一夜妖入二大父邸中。織田…
 一夜怪物入大父邸中／底本…亦爲二木鐸之聲。織田…又爲木鐸之聲／底本…此後妖去無在。織田…
 此後怪去無在／底本…妖既有聲。織田…怪既有聲／底本…豈無形。織田…豈無形哉／底本…人
 不能見其形。織田…人不能見其形耳／底本…何復帶劍。織田…豈何帶劍／底本…專事武備。
 碩水…專事武事／底本…然平生多不帶劍。織田…然平世多不帶劍／底本…蓋勇悍不事劍也。
 織田…蓋勇悍武畧不事劍焉／底本…常以三作饌饗客爲樂。碩水…常以作饌客爲樂／底本…變
 服別二家人。織田…改服別其家人／底本…携劍來請讐死。織田…携劍來大父請讐死／底本…仙
 意解乃去。織田…仙亦解去／底本…我兩手足以三轉撲之。元倡寺…兩手足以三轉撲之▼五十三
 底本…兄弟素異居。織田…〈欠〉／底本…日必一次。碩水…日必一織田…日必一／底本…每至末
 嘗接言。狩野…每至末嘗接言語碩水…每至末嘗接言語／底本…「俗呼二弱齡者」之稱。年過二六
 十尚以之。碩水…「俗呼弱齡者之稱齡者之」／底本…即茶博士所稱唐津茶碗。狩野…即茶博士所
 稱唐津茶碗▼五十四底本…故不足三以傳異邦。織田…故不足以傳異邦也／底本…儒者於三是概
 懷耻慨。碩水…儒者於是懷耻慨織田…儒者槩於是懷耻慨／底本…而足三以悚動後世者。狩野…而

足^三以疎^二動後世^一者 〔碩水〕…而足^三以疎^二動後世者 〔元倡寺〕…而足^三以疎^二動後世^一者 〔織田〕…而足^三以疎^二動後世者／
 〔底本〕…唯業^二文學^一 〔碩水〕…唯文字／ 〔底本〕…雖^レ足^三以疎^二動後世^一 〔狩野〕…雖^レ足^三以疎^二動後世^一 〔碩水〕…雖
 足以疎動後世 〔元倡寺〕…雖^レ足^三以疎^二動後世^一 〔織田〕…雖足以疎動後世／ 〔底本〕…服南郭大東世語。 〔碩水〕…
 服南郭大東世話／ 〔底本〕…然大東世語。 〔碩水〕…然大東世話／ 〔底本〕…誠如^二先賢之言^一。 〔織田〕…誠如周茂
 叔之言 ▼五十五 〔底本〕…小松隣里横地者。 〔織田〕…小松隣里横池者 ▼五十六 〔底本〕…性剛正。 〔碩水〕…剛
 性正／ 〔底本〕…則亦甚易^二於死^一云爾。 〔織田〕…則亦甚大易於死云爾 ▼五十七 〔底本〕…觀翁人已遺亡。 〔狩野〕…
 觀翁人已遺忘 〔碩水〕…觀翁人已遺忘 〔元倡寺〕…觀翁人已遺忘 〔織田〕…觀翁人已遺妄／ 〔底本〕…（末尾割注）
 〔碩水〕…（割注とせず本文に続く） ▼五十八 〔底本〕…皆在^二廳側^一。 〔織田〕…皆在^二廳上^一／ 〔底本〕…然則子謹勿^レ
 做^二罪惡^一。 〔織田〕…然則子謹勿做惡 ▼五十九 〔底本〕…非^二吾儒之旨^一。 〔織田〕…非^二吾儒之旨也 ▼六十 〔底本〕…
 學周密。 〔織田〕…其學周密／ 〔底本〕…（欠）與人接。 〔織田〕…其論深刻讐校經義徹底歸是當而止與人相接／
 〔底本〕…小野崎舍人。 〔狩野〕…小野舍人 〔碩水〕…小野□舍人 〔元倡寺〕…小野舍人 〔織田〕…小野舍人／ 〔底本〕…舍
 人謂^二先君^一云。 〔織田〕…舍人謂先生云／ 〔底本〕…今日是朔邪。 〔狩野〕…舍日是朔邪／ 〔底本〕…乃訊^二妻子^一始
 識得。 〔織田〕…乃訊妻子始記得／ 〔底本〕…弘篤聞^レ之心大疑。 〔織田〕…弘篤聞^レ之心大疑難／ 〔底本〕…竦然改^レ
 容云。 〔狩野〕…竦然致^レ容云 ▼六十一 〔底本〕…無^二同寅^一 〔碩水〕…（欠）／ 〔底本〕…觀水時爲^二濱松侯中老^一。 〔織田〕…
 觀水爲濱松侯中老／ 〔底本〕…〔參政〕 〔織田〕…（欠）／ 〔底本〕…僕素無^二同寅^一。 〔碩水〕…素無同寅／ 〔底本〕…
 難^二豫刻^一日。 〔狩野〕…雖^二豫刻^一日（欄外）雖恐難 〔織田〕…後會難豫刻日／ 〔底本〕…弘篤因言。 〔織田〕…
 弘篤謂舍人云／ 〔底本〕…舍人自^レ旁云。 〔織田〕…舍人云／ 〔底本〕…若有^二同寅^一。 〔織田〕…若始有同寅／ 〔底本〕…
 觀翁大服^二舍人經^二歷世故^一。 〔狩野〕…觀翁大服^二舍人口^二歷世故^一／ 〔底本〕…詞色依^レ舊。 〔織田〕…正色而坐而
 已 ▼六十二 〔底本〕…佐藤子所^レ見極高。 〔織田〕…佐藤所^レ見極高／ 〔底本〕…十二面發^レ赤。 〔碩水〕…十二色發赤

織田…十二面不覺面發赤／底本…余特賞^二其極美酒^一而別。織田…余特賞其品味而別／底本…理應^レ令人贈^二一瓶^一。元倡寺…理應令人贈一舸。織田…理應令人贈一舸／底本…而渠終不^レ贈。織田…而渠不敢贈／底本…乃見^二其不^レ嗜^レ飲^一。織田…正見其不嗜飲也／底本…嘗送^二書先君於漢津^一云。
 狩野…嘗送^二書愆先君於漢津^一云。碩水…嘗送書於先君於漢津云。織田…嘗送書於先君漢津云／底本…亦只雇夫之長。織田…亦只雇夫之長耳／底本…(末尾)〈欠〉織田…(去^ル何日江戸着中將殿懇^二候^一)▼六十
 三底本…中將垂^二懇意^一。織田…中將「正之之官」荷懇意▼六十四 異同なし▼六十五底本…不^二少貸^一。碩水…不貸／底本…舍人謂^二先君云^一。碩水…舍人語先君云／底本…自^下未^二始學^一時^上冒^二異姓^一。織田…自未知學冒異姓／底本…子爲^二舍人^一言^レ之。織田…舍人如此說去邪／底本…出奔何憚之有。織田…出奔何憚爲▼六十六底本…尚齋甚不^二可^一之^二云^一。織田…尚齋甚不^二可^一此冒怒云／底本…亦尚翁大怒。元倡寺…亦尚齋大怒／底本…及^二後先君上京委^二曲事體^一。織田…而及後先君上京委曲事體▼六十
 七底本…非儒者織田…非儒者家老／底本…佐竹壱岐公家老。織田…佐竹壱岐州牧家老／底本…嘗謂^二一學士^一云。織田…〈欠〉云／底本…如^二番卒之資^一。織田…如番走之資／底本…本無^二五口卒^一。織田…豈給五口於走哉▼六十八底本…佐不^二必固責^一。碩水…佐藤不必固責／底本…三宅師道至重。織田…三宅師道至重矣▼六十九 異同なし▼七十底本…曰鞭策・排釋。碩水…曰鞭策錄排釋錄／底本…蓋佐藤門下之所^レ稱。狩野…蓋佐藤門下之所^レ稱也。織田…蓋佐藤門下之所^レ稱也／底本…先君無^二此說^一。織田…而先君無此說▼七十一底本…抄^二略周程張朱書^一。狩野…抄^二略周程長朱書^一／底本…則佐藤子專資治。織田…則佐藤直方專資治▼七十二底本…後倡^二王陽明之學^一。織田…後爲王陽明之學／底本…專信^二良知良能之說^一。織田…專倡良知良能之說／底本…夜登^二桑名^一。元倡寺…夜登^二桑名^一。船／底本…善藏微諷云。碩水…善藏微諷云／底本…善藏微諷云。碩水…善藏微諷云／底本…索^二

煙管「不得。」織田…而失煙管模索枕上而不得 ▼七十三 底本…大父不休「正長叔子」與「伯正春」。

碩水…大父不休「正長長子」與伯正春 元倡寺…大君不休「正長叔子」與「伯正春」／底本…土井侯利實。

織田…土井侯實實／底本…佐藤推舉先君。織田…佐藤遂推舉先君／底本…侯因舉「諸名臣言行」。

碩水…侯因舉諸名臣言行錄 ▼七十四 底本…天木三宅過墳墓 碩水…天木三宅過墳墓 元倡寺…天木三宅過

墳墓 織田…天木三宅過墳墓／底本…感激鳴咽。 碩水…感激鳴咽／底本…路傍有「帝王之陵」。

路旁有「帝王之陵」 碩水…路旁有帝王之陵 元倡寺…路旁有「帝王之陵」 織田…路旁有帝王之陵／底本…

奴本自不解「翁之意」。織田…奴固自不解翁之意／底本…路間有「墳墓」。

素好「墳墓」。織田…主公本好墳墓／底本…僕義敢不「一告」之。狩野…路間／底本…主公

僕義不敢「一告」之。織田…僕義不可敢不「一告」之 ▼七十五 異同なし ▼七十六 底本…堀江順齋

「元倡寺」堀江順齋「九平次」／底本…〈欠〉一日順直「公廳」。織田…順在唐津先君在江戶一日順直公廳

▼七十七 底本…佐藤子在「世」。織田…先君當佐藤子在世之時／底本…先君與「先師」。織田…與先師／

底本…然諸人口談開悟陪「平日」。碩水…然諸人口談開悟陪平日 元倡寺…然諸人口談開悟陪「平日」 織田…

然諸人口談開悟陪平日／底本…有「故」了／底本…隱求聞「子之駕音」。碩水…隱

求聞子駕音 織田…隱求聞子駕音 ▼七十八 底本…亦且用「一浴衣」便了。織田…亦且消「一浴衣」便了 ▼七

十九 底本…未_下曾有_中取以欲_レ爲_二己有_一者_上。織田…未曾有納以爲己有者／底本…尤淡泊的。織田…尤

淡泊物 ▼八十 底本…規戒報_レ酒 織田…報儉以酒／底本…俗間樽可_レ盛_二酒四斗_一者。狩野…俗樽可_レ盛_二

酒四斗_一者 織田…俗以盛酒四斗之樽／底本…以_レ薦蔽_二其外_一。狩野…以_レ薦蔽_二其表_一 碩水…以_レ薦蔽表

織田…薦蔽其外／底本…如_二乞兒身被_レ薦因名_一。織田…如乞兒無衣身被薦因名／底本…「一樽」。織田…

一体／底本…佐藤不_レ解_二達意_一。織田…佐藤固不解達意／底本…良久。織田…乃謂汝既爲享儀去今

復何義贈樽酒／**底本**…行達頓首云。**織田**…行達再拜云／**底本**…先生聞「小子之窮」。**碩水**…先生聞小子之究「**元倡寺**」…先生聞「小子之究」**織田**…先生聞小子客臘之究／**底本**…「**元倡寺**」凡百節約。**織田**…元旦夜至今月凡百節約來／**底本**…乃此臘稍安。**織田**…乃此臘不至客歲之困／**底本**…聊報「規戒之德」。**織田**…聊報慈教之德／**底本**…再拜而去。**織田**…頓首而去／**底本**…後佐藤謂「先君」云。**織田**…佐藤莞爾謂先君云／**底本**…吾素多規「戒諸人」。**碩水**…吾素規戒諸人**織田**…吾素多諫戒諸人／**底本**…然規戒報「酒」**織田**…然報儉以酒／**底本**…獨玄厚。「行達俗稱」**元倡寺**…獨玄「行達俗稱」**織田**…獨玄厚「行達俗稱」而已。▼八十一**底本**…先君亦罹「災于鍛冶橋君邸」。**碩水**…先君亦罹于鍛冶橋君邸／**底本**…尤厄「人間」。**織田**…尤厄人間矣／**底本**…無「曾損」益世用」。**織田**…無曾損益於世用。▼八十二**底本**…平生尤密。**碩水**…平世尤密**織田**…平世尤密／**底本**…士人本羈旅。**織田**…士人本羈旅之臣／**底本**…藏「肖像於墓寺」。**織田**…亦藏肖像之影於墓寺／**底本**…士人早孤。「**元倡寺**」…士人早孤當室／**底本**…此行君且爲「吾一省」之。**碩水**…此行君且爲吾省之**織田**…我今因仕不能遠往願君且爲我一省之／**底本**…越六七日到「之」。**織田**…越六七日到其處／**底本**…顏貌眉目。**織田**…顏面容貌眉目鼻口／**底本**…乃畫像所「帶劔把」。**織田**…則畫像所帶劔把／**底本**…即孫平日所「服用」。**織田**…即孫平日所服之物／**底本**…克明目所「熟習」。**織田**…嘗所熟習／**底本**…因更感想益切。**織田**…因更感邀益切／**底本**…孫自「是尤篤」追遠之誠」。**狩野**…孫孫自「是尤篤」追遠之誠」／**底本**…克明後以「前話」語「先人」。**織田**…克明每後話語吾先人以前話／**底本**…乃復豈木主之所「能及」。**織田**…乃復豈木主之所及哉。▼八十三**底本**…左氏君子**織田**…左氏傳君子／**底本**…我邦神武而下。**織田**…我邦神武以來／**底本**…未「曾聞」之矣。**狩野**…未「曾一聞」之矣。▼八十四**底本**…人言信玄遂「信虎」。**織田**…信玄遂信虎。▼八十五**底本**…先君子云。**織田**…「**元倡寺**」／**底本**…洽「六十四州」。**織田**…洽於六十四州／**底本**…（末尾）「**元倡寺**」**織田**…此先君子所受于佐藤密付話世

儒所不知也。▼八十六／**底本**…法華僧在二壇場一。**狩野**…法花在二壇場一。**元倡寺**…法花僧在二壇場一。
一法花僧在壇場／**底本**…說三法華經一。**元倡寺**…說三法花經一／**底本**…僧忽擲三法華經於其臀二。**織田**…
僧仍投法華經從其當臀云／**底本**…汝心不三肯做三法華一。**元倡寺**…汝心不三肯做三法花一／**底本**…臀爲
法華一。**織田**…然臀是終法華／**底本**…佐藤每目レ勸二人學一。**織田**…佐藤每目勸人學聊興志者／**底本**…
云三臀法華一。嘗言某甲近日如何。恐復臀法華。**織田**…云漸做法華

第二部 山崎闇斎学派についての資料

十一 林潜斎『稻葉黙齋先生傳』

付・岡直養『林潜齋事略』

解題・注釈・校合 長野 美香

○『稻葉黙齋先生傳』解題

(一)『稻葉黙齋先生傳』について

『稻葉黙齋先生傳』は稻葉黙齋門人・林潜斎秀直により黙齋の死後に著された伝記体の一書である。黙齋は、二十代前半から父の学塾で書を講じたが、本格的には父を亡くした宝暦十（一七六〇）年以降、弟子を集めて教えた。三十代のうちに主な著作・編纂書を完成させると、四十代は、新発田藩から月俸を得るなど諸藩（館林、丸亀など）に進講して江戸で活躍していたにもかかわらず、五十歳にして突如上総に移住して、その後江戸に戻らなかった。黙齋の移住した地は、上総清名幸谷村（現・千葉県山武郡大網白里町清名幸谷）である。同地には父迂斎の門人が多く在住していたこともあり、彼は寛政十一（一七九九）年、同地に没するまで近隣の農民たちを集めて教えた。同地では黙齋の教えを受ける農民が増え、中には黙齋の斡旋によって諸藩に仕える者も出た。『稻葉黙齋先生傳』の著者・林潜斎もまたそのひとりである。

『稻葉黙齋先生傳』の内容は、黙齋の出生から没年までを網羅している。しかし、採録された記事には多

少の偏りが見られる。以下、同書の記事について、その典拠や採録の傾向を記しておく。

黙齋に関する伝記的史料には、黙齋自身の手になる『處士越復傳』（『孤松全稿』巻四、所収）がある。同書は、享保壬子（享保十七「一七三二」年）の黙齋誕生に始まり、宝暦乙亥（宝暦五「一七五五」年）、黙齋二十四歳にして「東海に奔りて死す（「奔東海而死」）」の一文で結ばれているが、無論この「死」は事実ではない。『處士越復傳』の成立年は明らかではないが、二十四歳以降、それに近い青年期に書き上げられたものと考えられている。この『處士越復傳』を下敷きとして、その後の黙齋の生涯をたどったものが、『稻葉黙齋先生傳』である。（このほか、門人篠原惟秀による『黙齋先生行實』、同じく門人日原以道による墓碑文（成東・元倡寺）、また近代以降、上総道学の学統を受け継ぐ石井周庵が『道学雑誌』紙上に「小伝」を連載したことが知られている。『道学雑誌』は、明治十六（一八八三）年設立の道学協会によつて発行された小冊子で、明治三十年まで全六十三号が刊行された。）

まず、生年（享保十七「一七三二」年）から黙齋二十四歳（宝暦五「一七五五」年）までの記事は、ほぼ『處士越復傳』に依っていることが本文冒頭で断られているが、この期間のうち、『處士越復傳』に載せられていない記事も見られる。それらはおおよそ以下のとおりである。①元文元（一七三六）年丙辰、三宅尚斎来訪の記事。②寛保三（一七四三）年癸亥と考えられる記事の割注、「重次曰く」以下。③同上・割注の長谷川観水の言葉。これにより、『處士越復傳』「庚申」（元文五「一七四〇」年）章の「長叟」が長谷川観水を指していることがわかる。④宝暦二（一七五二）年壬申、『韞藏録初編』成立の記事。⑤宝暦五（一七五五）年乙亥・割注、「秀直謂へらく」以下、『處士越復傳』末尾の「東海に赴く」の一文の意味について黙齋が語った部分。

また、先に述べたように『稻葉黙齋先生傳』の著者・林潜齋は黙齋の上総における門人であるが、上総の

門人たちにとつてのちに重要な意味を持つことになる『姫島講義』（『孤松全稿』卷一、所収）についての記事は、『處士越復傳』、『稻葉黙齋先生傳』双方にない。黙齋は、宝暦二（一七五二）年十一月、二十一歳の折りに上総東金の清名幸谷に住む鶴澤氏（迂斎の門弟）を訪ね、そこで講義を行っている。その記録が『姫島講義』である。上総における道学の定着・普及の歴史を考えると、この年の上総訪問こそが、黙齋の上総移住の布石となり、またのち上総の地に上総道学の興る端緒となつたと考えることができる。若書きの自伝である『處士越復傳』はともかくとして、黙齋の死後、上総の門人の手によつて成つた『稻葉黙齋先生傳』に、この上総行き、および『姫島講義』成立の記事の欠けている点は興味深い。

一方、『處士越復傳』以降の時代については以下のような特徴が見られる。

宝暦十（一七六〇）年（黙齋二十九歳）の父迂斎の死去以後、黙齋三十〜四十代の記事は、わずかに明和四（一七六七）年（黙齋三十六歳）の『先達遺事』上梓と、安永元（一七七二）年（黙齋四十一歳）、京都で久米訂斎と会う記事のみとなつている。黙齋三十代の時期については、他の記録にも彼の行跡に関する記事はほとんどないようで、『稻葉黙齋先生傳』に限らず、この時期については不明な点が多い。もつとも、この間に佐藤直方の著作集『輶藏録』や野田剛斎の学話集『石原學談』、唐崎彦明の遺稿集『竹原遺稿』、父・迂斎の著作集『迂齋文集』など、黙齋の編纂事業の主なものが成立したといわれている（梅澤芳男『黙齋先生年譜』（梅澤芳男編著『稻葉黙齋先生と南総の道学』南総崎門学会編、ぺりかん社、一九八五年、四九〜五七頁））。しかし、これらも序文に年次を示す記述のあるものはあつても、いずれも正確な執筆時期は不明である。

しかし、『稻葉黙齋先生傳』においてさらに特徴的なのは、黙齋四十代の記事が際だつて少ない点である。この期間について、他の文献から知ることのできる出来事のうち、安永四（一七七五）年（黙齋四十四歳）

に新發田侯から月俸を受けた記事は、時期が示されないかたちで記されているが、それ以外に年号の明瞭な記事は唯一、京都での久米訂齋との面会のみである。

なお、著者潜齋が黙齋のもとを初めて訪れたのは天明六（一七八六）年であるから、潜齋が実際に黙齋のもとにあつての回想は、寛政元（一七八九）年夏の大旱の記事（黙齋五十八歳）以降である。それゆえ、この年以降の晩年の記事は、それ以前のものとは比べて詳細なものとなっている。

以上の点から見て、潜齋は黙齋自身の手による確実な資料（『處士越復傳』）と、みずから直接知り得たことのみをたよりに、師の一生をたどろうとしたと考えられる。不確かな私見を書き加えることなく、確かな情報のみを選んだ態度は、潜齋の篤実な人柄や学問姿勢を彷彿とさせるものである。また潜齋が、情報の少ない中で敢えて黙齋伝の執筆を決意した背景には、黙齋の道学者としての生き方を書き残す役割を担う者は自分以外にないという強い自負と責任感があつたのではないだろうか。黙齋自身は父の伝記『先君子行實』、また先師たちの事績を記した『先達遺事』や『墨水一滴』などを遺して、先達の生き生きとした姿を後世に伝える役割を担った。それだけに、その黙齋自身の生き生きとした姿も同じように誰かが記さねばならない、という焦りが潜齋にはあつたはずである。それが崎門の伝統でもあつた。そのような動機があつたことは、潜齋が間近に接した師・黙齋を描写する際の、その精彩ある筆致からも窺い知ることができるであろう。

（二）著者・林潜齋について

著者・林潜齋は、上総山武郡堀上村の出身で、晩年の稲葉黙齋をもっとも身近で知る人物のひとりであることはすでに述べた。彼の事績については岡直養『林潜齋事略』に詳しい（池上幸二郎編著『吾學叢書第一

篇・黙齋先生傳』神田小川町池上方・黙齋学会編、一誠堂書店、一九三五年、田原擔庵「上總に於ける山崎學」（梅澤芳男編著『稻葉黙齋先生と南総の道学』一三五〜一三六頁、他所収）。

『林潜斎事略』によれば、潜斎は、はじめ花澤文二、のち林潜斎秀直と称した。彼は、稻葉黙齋が上総に隠居してのち、初学者とはいささか高齢ともいえる三十八歳で入門し、入門後は常に黙齋の身边に侍して黙齋の江戸行きに同行するなどしている。潜斎が優秀であったことは、寛政年間に黙齋の推挙によって丸亀藩京極氏に出仕していることからわかる。これは黙齋の友人である丸亀藩士（河本仲遷とされる）の幹旋によるものであるが、潜斎の学問の成果のほどが窺われる逸話である。もともと、丸亀においても上総においても、潜斎の門人として傑出した学者は出なかったようである（田原擔庵「上總に於ける山崎學」（梅澤芳男編著『稻葉黙齋先生と南総の道学』二九八頁）、文化年間には職を辞し、晩年は上総で塾を開いて暮らしたのち、文化十四（一八一七）年、六十九歳で没している。なお潜斎の子として、花澤秀忠傳兵衛の名が見える（『崎門學脈系譜』四六八頁）。

潜斎の人物像については、「人と為り短小清癯、大額にして痘痕有り」、「朴素簡易、人と接するに、和順にして忤あからはず、晩に益々学を励む」、「吾子の記録は簡暢にして爽快、頗る人意を慰む（黙齋の潜斎評）」（以上『林潜斎事略』）、「浮躁淺露」、「文二はあのうっかりで身を持つ」（黙齋の潜斎評。尾関当補「語録」）、「朴実でよい」（潜斎が袴を着た時の風采を黙齋が批評。篠原惟秀「竹川話録」）（以上『東金市史・通史篇・下巻』第四章）などとされる。

さらに『林潜斎事略』は、潜斎の著作として多くの書名を挙げている。なかで特筆すべきものとしては、黙齋に同行して江戸へ旅した際の記録である『再旬紀行』があげられるだろう。同書は森銃三がその内容を取り上げ、のちに森の著作集にも収められた（『森銃三著作集 8 人物篇』中央公論社、一九七一年）。しか

し、その他の著作の多くは所在不明のものが多いうえに、『国書総目録』や『日本道學淵源録・續録』には、『林潜齋事略』に挙げられている以外の書も載せられており、実態は不明である。これらのなかでは『瀾漚紀聞』が、柴田武雄『稻葉黙齋・上総道学関係諸学者略伝（未完）』（東金市郷土研究愛好会、一九九八年）に収められており、また『終焉記』からの引用が「稻葉黙齋先生（三）」『東洋文化』一四〇号（池上幸二郎、東洋文化学会発行、一九三六年）に見られる。なお「潜齋の著作は全部池上君が、自筆にて之を藏してゐる。」（田原擔庵「上總に於ける山崎學」（梅澤芳男編著『稻葉黙齋先生と南総の道学』二九八頁）とされるが、二〇〇九年に実施した池上家蔵書の調査では、林潜齋筆による黙齋講義録（写本）などは散見されたものの、実際には「黙齋先生論語講義」（一冊）のみを潜齋自筆本と確認し得たに過ぎなかった。論語に関する講義筆記は、梅澤芳男「稻葉黙齋先生」（梅澤芳男編著『稻葉黙齋先生と南総の道学』二五頁）によれば、全二十巻とされるので、この自筆本はその一部であろうか。いずれにせよ、黙齋の講義録の有能な筆記者であつた潜齋の著作の多くは所在不明である。

（三）『淵源紀聞』について

本稿では『稻葉黙齋先生傳』の底本として、池上幸二郎編著『吾學叢書第一篇・黙齋先生傳』（内題「稻葉黙齋先生傳」神田小川町池上方・黙齋学会編、一誠堂書店、一九三五年）を用いている。この底本の形態はいわゆる単行である。しかし、東北大学狩野文庫や九州大学文学部図書館碩水文庫などにいくつかの写本の残る林潜齋『淵源紀聞』には、他の佐藤直方門下の儒者の伝記とともに「黙齋先生」の項として『稻葉黙齋先生傳』とほぼ同内容の文章が収められている。『林潜齋事略』の著作目録の筆頭に『淵源紀聞』が掲げられながら『稻葉黙齋先生傳』の書名がないのはこのためと考えられる。『淵源紀聞』はこのほか上述の池

上家蔵書にも写本が残されているが、近年では本稿の底本として用いた『吾學叢書』版のみが『稻葉黙齋先生傳』として知られ、管見のかぎり『稻葉黙齋先生傳』と『淵源紀聞』のかかりについての言及はなかった。しかし、潜斎自身の手によって早い段階において『稻葉黙齋先生傳』は『淵源紀聞』の一部として位置づけられていたはずである。それがどの段階におけるものであるかは定かではないが、そもそも同書の一節として書かれたと考えたほうがよいかもしれない。

東北大学・狩野文庫蔵『淵源紀聞』写本には、文化十三（一八一六）年正月付の潜斎による序があり、序に続いて、以下の目録が付されている。なお、 と 以外は目録のみで本文は欠落しており、 は覚書程度の短文が付されているのみである。

卷之一

中庸大学論語孟子四序中伊洛淵源所漸之語

諸子論周程之淵源之語

叙_下朱子白鹿洞學規及諸先生繫「傳道」之書_上

卷之二（以下、實際は人名ごとに改行あり。）

山崎先生、佐藤先生、淺見先生、三宅先生、訂齋先生

卷之三

迂齋先生、剛齋先生、永井先生、唐崎先生、幸田先生、黙齋先生

附録諸先生門人事実（「舊闕下並同」と朱書、本文を欠いている。）

山崎先生門人

會津羽林公、正親町一位、野々宮中将、加藤侯美作守、井上侯河内守

永田養菴、楨元眞、植田玄節、鵜飼金平、谷丹三郎、梨木祐之

黒岩慈菴、桑名松雲、春原民部、高田未白、雲川治兵衛

遊佐清右衛門、浅井萬右衛門

佐藤先生門人

小野崎舍人、天木善六、贅澤一、長谷川觀水、野澤十九郎、萩野重祐

綱齋先生門人

若林強齋、三宅觀瀾、味池直好、赤井直義、山本半助、山本源藏

尚齋先生門人

天木時中、留主友信、石王康助、伊澤遠治、多田維則、山宮維深

蟬維安、富山順治

迂齋先生門人

村土行藏、明石宗伯、溝口侯浩軒

これらのうちには潜齋以外の筆による文章の引用もあり、それらには典拠がおおむね示されている。また岡次郎編『日本道學淵源録・續録』には『淵源紀聞』からの引用がいくつか見られる。たとえば、同書の「迂齋先生」は黙齋の『先君子行實』の略述として多少の補が加えられたうえで採られ（六二二〜六二六頁）、同文末尾に「淵源紀聞」と出典が記されている。また潜齋による「唐崎先生小傳」と黙齋の「竹原遺稿序」も出典「淵源紀聞」とされ（六五六〜六五七頁）、続く「幸田先生」も同様に「淵源紀聞」を出典としている。さらに肝腎の「黙齋先生」部分についても、『淵源紀聞』の抄録と考えられる「傳」として収められている（六七六〜六七九頁）。ただし、なにゆえかこの箇所には出典名が記されていない。ちなみに『日本道

『學淵源録』への『淵源紀聞』採録には、おそらく九州大学蔵本がかかわっていると考えられるが、その詳細はいまのところ不明である。

『淵源紀聞』については、東北大学狩野文庫本と『日本道學淵源録・續録』との校合を行った。狩野文庫本の特色は、訓点が最小限付されるのみで、しかもその訓点到整合性に欠けるところも多く見られる。底本として用いた『稻葉黙齋先生傳』のほうが表記が説明的であり、底本には漢文を整合的に修正した形跡がある。それらの点からも『淵源紀聞』が、より潜斎筆の原形に近いことを窺わせる。しかし、現段階では『淵源紀聞』自体の調査や写本間の比較検討が十分ではないので、今後さらに調査を行って、成立や異同等について検討しなければならないであろう。

(四) 底本と諸本について

・近代の活字本

①『吾學叢書第一篇・黙齋先生傳』（内題『稻葉黙齋先生傳』）池上幸二郎編著、神田小川町池上方・黙齋学会編、一誠堂書店、一九三五年。本稿の底本に用いた。

②『東金市史・史料篇三』東金市役所編、千葉県東金市、一九七六年。同書所収の『稻葉黙齋先生傳』は、写本⑨『稻葉黙齋傳』（東金市小野・田中義一家蔵）を柴田武雄が書き下して注を付したもので、『東金市史』にはこの書き下し文のみが掲載されている。若干の誤記と考えられる部分、および一部錯簡がある。（一六五頁上段・最終行「キニ謹細ヲ屑シトセズ」から一六六頁上段・九行目「宝曆二」「二七五二」年壬申）までは、一一六六頁下段一二行目「出遊会飲縦肆ヲ事トセリ。」のあとに入るべきものである。）

③『日本道學淵源録・續録』所収「（稻葉黙齋）傳」（ただし抄録）『日本道學淵源録・續録』岡次郎編、

開明堂、一九三四年（『楠本端山・碩水全集』岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編、葦書房、一九八〇年、所収）

・写本

④池上幸二郎家蔵本。『淵源紀聞』所収。一冊。

⑤九州大学中央図書館蔵・碩水文庫本。一冊。『淵源紀聞』所収。

⑥九州大学文系合同図書館蔵・坐春風文庫本。一冊。『淵源紀聞』所収。（千手興成による付箋あり）

⑦九州大学文系合同図書館蔵本。一冊。『淵源紀聞』所収。

⑧東北大学狩野文庫本。『淵源紀聞』所収。三卷三冊。

⑨（未見）東金市小野・田中義一家蔵本『稻葉黙齋傳』。同写本は②の底本なので、少なくとも、その成立年である一九七六年前後には田中家に所蔵されていたと考えられる。東金市教育委員会の説明によれば、その後、田中義一氏の逝去によって、田中家蔵本は「東京の図書館に寄贈された」というが、未確認。あるいは④と同一本の可能性もあるか。

○『稻葉黙齋先生傳』注釈

門人潛齋 林秀直撰

後學池上幸二郎參訂

凡例

一、底本は、池上幸二郎編著『吾學叢書第一篇・黙齋先生傳』（内題『稻葉黙齋先生傳』、神田小川町池上方・黙齋学会編、一誠堂書店、一九三五年）を用いた。

一、東北大学狩野文庫『淵源紀聞』所収、「黙齋先生」との校合と、岡次郎編『日本道學淵源録・續録』所収の抄録「（稻葉黙齋）傳」との内容の異同について、末尾に記した。なおこれらにおいては、訓点、送り仮名、異体字、俗字等についての異同は記さないこととした。

一、底本に頭注のある場合は「▽頭注」として付した。なお、頭注原文には句点がないが、これを適宜補った。

一、原文は年代、内容によって適宜分け、訓読文と語注とを付した。

一、原文の割注は「」で括り、単行の普通字に改めた。

一、原文、頭注、および語注の見出しは可能な限り旧字体を用い、訓読文は現行字体に改めた。

一、底本の誤字は訓読で正字に訂正し、（ ）内に原文の誤字を記した。また、必要に応じて語注に訂正の根拠を示した。なお原文訓点の明らかな誤りはこれを訂正した。

一、訓読では難解な語句に振り仮名を付し、引用文には「」、書名には『』を付した。

一、語注の見出しには原文の語句を用いた。

▼序

先生初生至三年二十四之事實。詳備「於越復傳」。秀直久遊「先生門」。是以今竊搜「索其後年之行實」。以續之。敢俟「識者之採録」云。▽頭注 幸謂。處士越復傳黙翁自叙傳也。孤松全稿所收。道學協會嘗印行之。

先生、初生より年二十四に至るの事実、詳らかに『越復傳』に備はる。秀直、久しく先生の門に遊ぶ。是れを以て、今竊かに其の後年の行実を搜索し、以て是れを續ぎ、敢へて識者の採録を俟つ、云。▽頭注 幸謂ふ。『處士越復傳』は默翁の自叙伝なり。『孤松全稿』の収むる所、道学協会、嘗て之れを印行す。

○語注

【越復傳】『處士越復傳』。默齋二十四歳までの自伝。『孤松全稿』卷四所収。【秀直】著者・林潜齋。【默翁】稲葉默齋。

▼一

先生姓越智。稲葉氏。名正信。號默齋。父迂齋先生。名正義。仕_二土井侯_一。職爲_二教授_一。以_二道學_一聞_二于世_一。母武井氏。以_二享保十七年壬子十一月十三日_一生_二先生於武藏江戸城東濱町山伏井_一。

先生、姓は越智、稲葉氏、名は正信、默齋と号す。父、迂齋先生、名は正義、土井侯に仕へ、職は教授を爲す。道学を以て世に聞こゆ。母、武井氏、享保十七年壬子十一月十三日を以て、先生を武藏江戸城東、浜町山伏井に生む。

○語注

【越智】稲葉氏は伊予豪族・越智氏を祖とする。【迂齋先生】稲葉迂齋（貞享元「一六八四」年—宝暦十「一七六〇」年）。『先君子行實』参照。【土井侯】肥前唐津藩主。迂齋は、土井利実（元禄三「一六九〇」年

—元文元「一七三六」年、利延（享保八「一七二三」年—延享元「一七四四」年）、利里（享保七「一七二二」年—安永六「一七七七」年）の三代に仕えた。【母武井氏】「婦人其産江戸人也。姓武井氏。諱逸。父武井五郎太夫征勝。母中村氏。」（『迂齋文集・別集』常徳院武井婦人小傳）、「武井氏五郎太夫勝征之女」（『迂齋文集』卷一所収『稻葉家譜』、なお『日本道學淵源・續録』所収『稻葉家譜』では、父の名は「勝正」）、「同僚勝征之女」（『先君子行實』）。父の名前は「征勝」、「勝征」、「勝正」と区々。なお母武井氏については、黙齋の「武井婦人小傳」（『三郎稿』（『孤松全稿』卷二）所収）に詳しい。【享保十七年】一七三二年。【濱町山伏井】浜町山伏井戸。現・中央区浜町。井戸は浜町西寄り（久松町裏）にあった。近辺には幕府医官の多紀元堅、杉田玄白、書家の大竹蔣塘などが居住し、宝暦十四（一七六四）年には賀茂真淵も移り住んだ。（竹内理三編『角川日本地名大辞典・十三卷・東京都』同編纂委員会、角川書店、一九七八年）

▼二

幼學_ニ父膝下_一。長師_ト事野田剛齋先生_一。純以_ニ道學_一自任。早見_ニ大意_一。不_レ安_ニ小成_一。而希_ニ遠大之圖_一。特達英斷。足_レ當_ニ經濟_一。銳氣掩_ニ世儒_一。才識鎔_ニ銖老佛_一。尚_ニ友先達_一。最欽_ニ望佐藤先生_一。非_ニ聖賢之書_一未_ニ嘗經_ニ其心_一。終始志在_ニ常儒之外_一。其資質明敏。神氣清爽。言語能辨。容止閒雅而可_レ觀。威儀嚴厲而可_レ畏。凡動止起居。出入進退。視聽氣息。皆恭而安。重而有_レ節。▽頭注 幸按。野田剛齋。名徳勝。江戸人。直方門人。

幼にして父の膝下に学び、長じて野田剛齋先生に師事す。純_{もつぱら}ら道学を以て自ら任ず。早く大意を見_あはし、

小成に安んぜずして、遠大の図を希ふ。特達英断、経済に当たるに足る。鋭氣、世儒を掩ひ、才識、老仙を錙銖す。先達を尚友し、最も佐藤先生を欽望す。聖賢の書に非ざれば、未だ嘗て其の心を經ず。終始志は常儒の外に在り。其の資質明敏、神氣清爽、言語能弁。容止間雅にして觀るべく、威儀嚴厲にして畏るべし。凡そ動止起居、出入進退、視聽氣息、皆恭にして安んじ、重くして節有り。▽頭注 幸按ずるに、野田剛齋、名は徳勝、江戸の人、直方門人。

○語注

【野田剛齋】元禄三（一六九〇）年—明和五（一七六八）年。名は徳勝、江戸の人。佐藤直方門人。三宅尚齋にも学んだ。家は代々幕臣であったが、剛齋は隱居して仕えなかった（『日本道學淵源録・續録』六二六頁）。本所石原に住んだため、石原先生と呼ばれた。【大意】大志。【圖】はかりごと、くわだて。【特達】特別に衆に拔きん出ること。【老佛】老子と仏教。【錙銖】わずかなものとして輕んずる。【尚友】古人を友とする。尚は上の意で、さかのぼって昔の賢人と友になることを指す。（『孟子』万章）【佐藤先生】佐藤直方（慶安三「一六五〇」年—享保四「一七一九」年）。通称五郎左衛門。備後国福山に生まれる。崎門三傑のひとり。のち師闇齋の敬内義外説や垂加神道説に反対して、朱子学の立場を守り破門された。初め福山侯水野氏に仕え、ついで厩橋（前橋）侯酒井氏の師となり、晩年は彦根侯井伊氏に仕えた。『韞藏録』、『拘幽操辨』、『講學鞭策録』、『排釋録』、『鬼神集説』、『道學標的』、『冬至文並附録』、『四書便講』（『増訂・佐藤直方全集』日本古典学会編、ぺりかん社、一九七九年、所収）他。【神氣】氣力。【閒雅】閑雅。『處士越復傳』「壬子」（享保十七「一七三二」年）では、默齋はみずからの容貌について「巨頭垂眼白色骨立頗有『異相』」としている。【容止】立ち居振る舞い。身のこなし。【厲】激しい。厳しい。

蔽か。【氣息】呼吸。

▼三

先生居^レ家。夙興沐浴束髮。一日未^レ懈。盥嗽至^レ剪^レ爪皆不^レ苟焉。恒好^レ潔。雖^二身外物^一亦然。凡書籍篋笥調度什器。位置齊整。如^レ循^二規矩^一也。先生性雖^二嘗嗜^レ酒^一。常戒^二定量^一。食亦絶^二夕膳^一。衣襟端正。雖^二絹素^一而可^レ觀。

先生、家に居るや、夙に興き、沐浴・束髮すること、一日も未だ懈^{おた}らず。盥嗽、爪を剪るに至るまで、皆苟くもせず。恒に潔を好み、身外の物と雖も亦然^{また}り。凡そ書籍・篋笥^{けふし}・調度・什器の位置齊整として、規矩に循^{したが}ふが如きなり。先生、性嘗て酒を嗜むと雖も、常に定量を戒め、食も亦夕膳^{また}を絶つ。衣襟端正、絹素と雖も観るべし。

○語注

【盥嗽】手を洗い、口をすすぐ。【篋笥】書物や衣服を入れる箱。【規矩】ぶんまわし（コンパス）とさし
がね（曲尺）。

▼四

三歳穎悟。過^二常兒^一。良敏慧頓。智出^二於衆^一。其爲^二乳兒^一。人戲^レ之曰。形大尚貪^二乳味^一。先生直曰。我
學^二老萊子^一也。

三歳にして穎悟、常児に過ぎ、良敏慧頓、智、衆より出づ。其の乳児たりしとき、人之れに戯れて曰く、「形大なるに尚ほ乳味を食る」と。先生、直ちに曰く、「我、老萊子を学ぶなり」と。

○語注

【三歳】享保十九（一七三四）年。【穎悟】才知が優れて、賢いこと。【老萊子】春秋時代の楚の人。七十歳になっても子供らしく振る舞い、親を喜ばせたという故事が『蒙求』にある。「高士伝に、老萊子は楚の人なり。少くして孝行をもつて、親を養うて甘脆（歯で切れるほどの軟らかい肉）を極む。年七十にして父母なほ存せり。萊子、荊蘭の衣（斑蘭の誤りか。草花の模様のついた子供の服）を服して、嬰兒の戯れを親の前になし、言、老を称せず。親のため食を取つて堂に上り、足跌いて偃す。因つて嬰兒の啼をなす。」（柳町達也編『中国古典新書・蒙求』明徳出版、一九六八年、二五五―二五六頁）

▼五

「以下越復傳之事也。秀直竊抄其要」。多約文字。或加嘗闕其傳中之遺事以記焉。」甫六歳作文。越復小學諸子品題是也。

「以下、『越復傳』の事なり。秀直、竊かに其の要を抄す。多く文字を約し、或いは嘗て其の伝中に闕くの遺事を加へ、以て記す。」甫めて六歳、文を作る。「越復小學」、「諸子品題」是れなり。

○語注

【六歳】元文二（一七三七）年。【越復小學】『處士越復傳』「丁巳」（元文二「一七三七」年）は「正信小學」。【諸子品題】『處士越復傳』「丁巳」では、「『蒙求』を電覽し、便ち其の体に效なまひ、父の門下生を品題として短文を綴る」とされる。

▼六

元文元年尚翁東。偶、訪「迂齋」。翁以「嗜餅」翁所「好之餅者。俗以「牡丹」名之。又以「萩稱焉。」饗之。先生率爾將「入」翁之坐「見」之。家人遽而止。童心竊憤之云。彼之拒我。以我爲「下」欲「其餽餘」者「上」然爾。我豈敢哉。嗚呼先生自「幼」不屈氣概如「此」。

元文元年、尚翁東し、偶々「迂齋」を訪ふ。翁、餅を嗜むを以て「翁、好む所の餅は、俗に牡丹を以て之れに名づく。又、萩を以て称す。」、之れを饗す。先生、率爾として將に翁の坐に入り、之れに見えんとす。家人遽て止む。童心に竊かに之れを憤りて云ふ、「彼の我を拒むは、我を以て其の餽余を欲する者と為して然るのみ。我、豈に敢へてせんや」と。嗚呼、先生幼よりして不屈の氣概、此くの如し。

○語注

【元文元年】黙齋五歳。一七三六年。直前の記事と年代が前後している。『日本道學淵源録・續録』所収「傳」では、尚齋東行の記事について、黙齋六歳、元文二年の記事の続きとして元文二年とした上で、割注で「或前年未詳」としている。しかし、多田東溪『尚齋先生實記・中』「年譜」（『日本道學淵源録』五五九頁）

によれば、尚齋の東行は元文元年と考えられる。【尚翁】三宅尚齋（寛文二「一六六二」年—寛保元「一七四一」年）。名は重固、字は実操。播磨国明石の人。崎門三傑のひとり。武蔵国忍藩阿部家に仕官したが、直言したために幽囚された。のち京都に塾を開き、久米訂齋、石王塞軒、蟹養齋などの門人を擁し、一大学派を形成した。著作は極めて多い。『爲學要説』一卷、『祭祀來格説』一卷、『默識録』六卷（以上『日本倫理彙編』所収）、『狼薈録』三卷（『甘雨亭叢書』所収）、『養子辨證附録』一卷（『日本儒林叢書』所収）、『爲後稱呼説』一卷（『日本儒林叢書』所収）など。迂齋は尚齋の教えも受けている。多田東溪『尚齋先生實記・下』「行状」には、「元文丙辰三月。先生東行。實爲拜舊君赦命之恩也。八日至舊君邸。〔芝増上寺切通〕即見侯正喬及世子。〔隱岐守〕侯懷舊流淚數行。先生亦不堪。淚下如霰。」（『日本道學淵源録』五七一頁）、多田東溪『尚齋先生實記・中』「年譜」には、「元文元年丙辰三月。先生東行。謁舊君忍侯。見侯及世子。賜饗及絹二匹。年七十五。」とある。この江戸行きが、忍侯を特赦以来初めて訪問する目的であつたことがわかる。【餽餘】食べ残し。【牡丹・萩】牡丹はぼた餅、萩はおはぎ。

▼七

九歳作「迂齋答問」。「見「迂齋先生文集」」

九歳、「迂齋答問」を作る。「『迂齋先生文集』に見ゆ。」

○語注

【九歳】元文五（一七四〇）年。【迂齋答問】『迂齋文集』別集附録所収。默齋による端書に「是正信児時

與先生之間答也。當時既名迂齋答問。今從舊記之。凡三十七條。有先生之自筆。有正信之筆錄。又有問語正信而答語者先生之自筆者也。旧遂條加圈書正信問迂齋老大人答曰。今盡省以提行云。」とある。【迂齋先生文集】『迂齋文集』。迂齋の著作集。黙齋編。

八

十一歳釋^レ書。意氣慷慨。露^二風采^一。長谷川觀水嘆曰。愈^二時祭酒^一。〔重次曰。嘗聞^三先生少童講^一解孟子之書^一。觀水翁在^レ席。驚異嘆曰。嗚乎國學士寧若^二阿兒^一。則我之望足矣。〕▽頭注 幸按。長谷川觀水。諱克明。稱源右衛門。直方門人。

十一歳、書を釈く。意氣慷慨、風采に露はる。長谷川觀水、嘆じて曰く、「時の祭酒に愈れり」と。〔重次曰く、「嘗て聞く、先生少童にして『孟子』の書を講解す。觀水翁席に在り、驚異し、嘆じて曰く、「嗚呼、国学の士、寧ろ阿兒^{あじご}の若くんば、則ち我の望み足らん」と。〕▽頭注 幸按ずるに、長谷川觀水、諱は克明、源右衛門と称す。直方門人。

○語注

【十一歳】寛保二（一七四二）年。【長谷川觀水】長谷川克明。笹崎觀水とも称した。佐藤直方門人。川越藩主松平信輝の臣。（『崎門學脈系譜』四六二頁）【祭酒】大学頭の唐名。林家が世襲した。【重次】中田重次（生年不詳―寛政十〔一七九八〕年）。十二郎と称した。上総堀上村（現・千葉県東金市）の人。黙齋門人。（『崎門學脈系譜』四六九頁）【阿】婦人や子どもの名の上につける愛称。

▼九

明年先生意竊欲^ニ講^レ書導^ニ人。唯^ニ爲^ニ童形未^ニ稱。自廢^ニ總角^一。作^ニ成人之容^一。舉^レ家驚惶。家嚴獨摩^ニ其頂^一大笑。終備^ニ冠禮^一。後成童豪狂自張。專逞^ニ從横之氣概^一。出遊會飲事^ニ縱肆^一。不^レ屑^ニ謹細^一。其放蕩不羈。爲^ニ世所^レ毀。家嚴包^レ荒。

明年、先生意^{おも}ふに、竊^{ひそ}かに書を講じ、人を導かんと欲す。唯々、童形未だ称^{かな}はずとし、自ら総角を廢し、成人の容を作^なす。家を挙げて驚惶す。家嚴、独り其の頂を摩^なでて大笑す。終^{つひ}に冠礼を備ふ。後に成童するや、豪狂自ら張る。専ら從横の氣概を逞しくし、出遊會飲縱肆を事とし、謹細を屑^{いさよ}しとせず。其の放蕩不羈^{ふき}は世の毀^こる所となるも、家嚴荒を包^かぬ。

○語注

【明年】寛保三（一七四三）年、默齋十二歳。【總角】あげまき。元服前の小兒の結髪のかたち。【家嚴】父。【冠禮】男子の成人式。【從横】自由自在、思うまま。【出遊會飲】家の外で遊んだり、集まって酒を飲んだりする。【縱肆】肆は恣。ほしいまま、わがまま。【不羈】束縛されないこと。【包荒】汚れたものを包むことから転じて、他人のいうことをおおらかに受け入れること、度量の大きいことをいう。（『易経』泰・九二）

▼十

先生亦聰明之發。終謹守法度一益進^レ業。於^レ是負^レ笈事^二野田先生^一。「時年十六」

先生、亦聰明^{また}の發、終に法度を謹守^{つひ}し、益々^{ますます}業に進む。是に於て、笈^{きふ}を負ひ、野田先生に事^{つか}ふ。「時に年十六なり。」

○語注

【野田先生】野田剛斎。【年十六】延享四（一七四七）年。

▼十一

弱冠與^二唐彦明「父之執」村士宗章、明石義道、宇仲喜、幸田子善「結^レ交。而切磋有^レ年。業益振。而學舍大新。後先生獨畏^三子善與^二彦明^一。好自言。士爲^二知^レ己者^一死。二子眞知^レ我矣。

弱冠、唐彦明「父の執」・村士宗章・明石義道・宇仲喜・幸田子善と交はりを結びて、切磋年有り。業益々振ひ、学舎大いに新たなり。後、先生独り子善と彦明とを畏れ、好みて自ら言ふ、「士は己を知る者の為に死す。二子、真に我を知れり」と。

○語注

【弱冠】二十歳。『處士越復傳』では、黙齋が学友と出会う時期は二十歳の前後にまたがる。【執】志を同じくする人。【唐彦明】唐崎彦明（正徳四「二七一四」年—宝暦八「一七五八」年）。三宅尚斎門人。安芸

竹原の人。竹原先生と称す。延享元（一七四四）年より伊勢長島藩増山侯に仕えたが、宝暦四（一七五四）年に諫言が聞き入れられず職を解かれ、江戸に下った（『日本道學淵源録・續録』六五六頁）。黙齋編『竹原遺稿』がある。【村土宗章】村土玉水（享保十四「一七二九」年—安永五「一七七六」年）。備後福山藩儒官、村土淡齋の子。江戸の人。初め山宮雪楼、のち稲葉迂齋に学ぶ。江戸・小川町に信古堂を建てて門人を教育した。門下より岡田寒泉、服部栗齋、小松原剛治などを輩出した。（『日本道學淵源録・續録』六七—六七二頁）【明石義道】柳田求馬（元文三「一七三八」年—天明四「一七八四」年）。姓は橘、氏は柳田、初め明石宗伯と称した。江戸浜町で医者をしていたが、この職を甥に譲って隠居し、稲葉迂齋、野田剛齋に学んだ。（『日本道學淵源録・續録』六七四頁）【宇仲喜】宇井默齋（享保十「一七二五」年—天明元「一七八一」年）。肥前唐津の人。京都で久米訂齋に学び、のち江戸に出て、稲葉迂齋、野田剛齋、多田養齋、唐崎彦明に学ぶ。幼少時に唐津で仕えた土井侯に再び見出されて儒講となるが、姻家の禍に罹って三年間幽閉された。のち京都で門下生を教え、京都で没した。（『日本道學淵源録・續録』六六九—六七二頁）【幸田子善】幸田誠之（享保五「一七二〇」年—寛政四「一七九二」年）。下谷長者町に生まれ、のち本所に移った。幕臣。野田剛齋、稲葉迂齋、永井行達に学んだ。（『日本道學淵源録・續録』六六七—六六九頁）【土爲知己者死】土は、自分を知ってくれる人のために命を捨てる。（『史記』刺客伝）

▼十二

寛延三年庚午。侯家當_二閣老享禮之大會_一。先生未_二職仕_一。而充_二僨介之選_一。乃大怒曰。我有_二棟梁之具_一。公未_レ能用。反使_三我聲_二折肉食兒_一也。罵而不_レ已。父兄故老嚴戒。而後稍_レ給_二其事_一。尋有_二嫂之喪_一。懇裁_二葬禮_一。嘗講_二索文公家禮_一。斟酌度_二時宜_一。親舊有_二凶事_一。必走而護_レ喪焉。▽頭注 幸按。侯家土井

侯也。

寛延三年庚午^{かうご}、侯家、閣老享礼の大会に当たる。先生未だ職仕せずして、債介の選に充たる^あ。乃ち大いに怒りて曰く、「我に棟梁の具有り。公未だ用ふる能はず、反つて我をして肉食の兒に聲折せしむ」と。罵りて已まざれば、父兄・故老嚴戒し、而る後稍々^{せうせう}其の事を給す。尋いで、嫂の喪有り、懇ろに葬礼を裁す。嘗て『文公家禮』を講索し、斟酌して時宜^{はふ}を度る。親旧に凶事有れば、必ず走りて喪を護る。▽頭注 幸按ずるに、侯家は土井侯なり。

○語注

【寛延三年】一七五〇年。黙齋十九歳。【侯家】唐津藩主土井家。当時の藩主は土井利里。【閣老】江戸時代、老中の別称。【享禮】享は饗に同じ。【債介】債は客を案内する。介は仲立ちをする。【肉食】肉食でさる身分の者。高禄の官吏。（『春秋左氏伝』莊公第三）【聲折】聲は中国古代の樂器で、「へ」の字をした石や玉をいくつか吊して打ち鳴らすもの。その形状から、聲の形のように身体を折り曲げ、礼をすること。【稍、】少しずつ。【嫂】黙齋の兄・稻葉廓齋の妻。喜多川氏。【文公家禮】五卷。附録一卷。朱子の儒教儀礼を集大成した書。朱熹撰と題しているが、後人の依託であるという。

▼十三

當時先生與^二子善彦明^一會。折^二中四方諸儒之說^一。論^二道體^一。及^二六合之外^一。彦明揚^レ眉曰。老子在^レ官。三餘訪^二諸子^一。話及^二人間之事^一。未^三嘗語^二妙道^一。今得^二此遊^一。自^二泰山之崩^一。未^三嘗有^二此事^一也。

当時、先生、子善・彦明と会し、四方諸儒の説を折中し、道体を論じ、六合りくがふの外に及ぶ。彦明、眉を揚げて曰く、「老子、官に在るの三余、諸子を訪ひ、話、人間の事じんかんに及ぶも、未だ嘗て妙道を語らず。今此の遊を得たり。泰山の崩るゝより未だ嘗て此の事有らざるなり」と。

○語注

【子善】幸田子善。【彦明】唐崎彦明。【道體】道の本体。【六合】世界。【揚眉】意気の盛んなさま。【老子】自称。【三餘】勉強に利用すべき三つの余暇。年の余りである冬と、日の余りである夜と、時の余りである雨降り。【泰山之崩】『礼記』「檀弓上・第三」の言葉。「孔子蚤ひそに作きて、手を負ひ杖を曳きて、門に消搖せうぎょうす。歌ひて曰く、「泰山其れ頽くれんか、梁木其れ壞やぶれんか、哲人其れ萎やまんか」と。」（竹内照夫『新釈漢文大系・二十七卷・礼記（上）』明治書院、一九七一年、一〇一〜一〇三頁）。泰山は山東省にある山で、昔から五岳の一とされる。北斗星と共に泰山北斗たいざんぼとうとされて、模範の意味に用いられる。孔子が自らの死を予知して語った言葉で、後世、「泰山頽梁木折」で、哲人の死を指すようになった。

▼十四

先生學益まな進。以もつ雄辯能探たん物情ぶつじやう。人希レ侍し講筵かうてん也。以下其徒往往縛しやく章句しやうきう無中見解むちゆうけんかい上。皆謝而卻レ之。獨意氣慷慨どくいきかうがい自任。切せつ齒腐儒陸沈こふじゆりくしん之風ふう一矣。

先生、学益々進み、雄弁能く物情を探るを以て、人、講筵に侍せんことを希ひねがふ。其の徒、往々にして章

句に縛られ見解無きを以て、皆謝して之れを卻く。独り意気慷慨、自ら任じ、腐儒陸沈の風を切齒す。

○語注

【切齒】齒を食いしぼる。齒ざしりする。激しく怒るさま。【陸沈】頑固で時代の移り変わりを知らないこと。【切齒腐儒陸沈之風矣】『處士越復傳』『癸酉』（宝暦三「一七五三」年）では、宇井黙齋と激論して腐儒陸沈の風を切齒している。

▼十五

寶暦二年壬申韞藏録初編成焉。〔時年二十一〕

宝暦二年壬申、『韞藏録初編』成る。〔時に年二十一なり。〕

○語注

【寶暦二年】一七五二年。黙齋二十一歳。【韞藏録】佐藤直方遺稿。『増訂・佐藤直方全集』（日本古典学会編、ぺりかん社、一九七九年）所収。全五十七卷（初編十六卷、拾遺三十卷、続拾遺六卷、四編五卷）。この他に『五編韞藏録』（尾関当補編、五卷）、『六編韞藏録』（梅沢思齋編、十卷）がある。黙齋による序（宝暦壬申春）が付されている。（『増訂・佐藤直方全集』一卷、日本古典学会編、ぺりかん社、一九七九年、所収）

▼十六

頻年侯家老臣弄^レ權。君臣闇^レ手。先生欲^下改^二革舊弊^一。痛^中抑宰執^上。而無^レ由^二於達^一。空論^二大義^一。勵^二同志^一。獨講^二究通鑑綱目^一。自題^二靖獻遺言^一。曰。是瞑眩良劑。若人切憂^二宿痾^一。突出觸^二我毒手^一。又自言。某雖^二粗卒狂獫^一。至^下於振^二綱常^一。任^中大義^上。則老師宿儒。不^三少愧^二於心^一乎。

頻年、侯家の老臣權を弄すれども、君臣手を闇^おく。先生、旧弊を改革して、宰執^{さいしつ}を痛抑せんと欲するも、達するに由無し。空しく大義を論じ、同志を励ます。独り『通鑑綱目』を講究し、自ら『靖獻遺言』に題して曰く、「是れ、瞑眩の良劑なり。若し人切に宿痾を憂へば、突出して我が毒手に触れよ」と。又、自ら言ふ、「某^{そがし}、粗卒狂獫なりと雖も、綱常を振ひ大義に任ずれば、則ち、老師宿儒、少しく心に愧ぢざらんや」と。

○語注

【頻年】連年。【侯家】唐津藩土井家。当時の藩主は土井利里か。【宰執】政治を行う最高の官職。【痛抑】痛はひどく、はげしくの意。抑はおさえるの意。【通鑑綱目】五十九卷。宋の朱熹およびその門人の著。『資治通鑑』に基づき、綱（本文）と目（注釈）とに分けて、史実を倫理的に批判した書。【靖獻遺言】浅見綱斎著。八卷三冊。貞享四（一六八七）年成立。『浅見綱斎藤集』（近藤啓吾、金本正孝編、国書刊行会、一九八九年）ほか所収。【瞑眩良劑】目のくらむほどにきつい良薬。【宿痾】持病。【粗卒】卒は率に同じ。大雑把で飾り気がない。【狂獫】獫は蹶に同じ。心が乱れて落ち着きがない。【綱常】三綱（君臣、父子、夫婦の道）と五常（仁、義、礼、智、信）。【宿儒】年たけ、名望ある学者。

▼十七

此歳「時年二十四」赴「東海」。不_レ知_レ所_レ之。「秀直謂。此之「東海」云者。假設之辭。蓋固表_二不_レ出之意_一矣。一日先生笑語_二秀直_一。某今隱_二東海_一者往年之傳爲_二其識_一耳。以上前文所_レ謂越復傳之事也。」

此の歳、「時に年二十四」東海に赴きて、之く所を知らず。「秀直謂へらく、此の東海に之くと云へるは、仮設の辭なり。蓋し固より出でずの意を表す。一日、先生笑ひて秀直に語る、「某、今東海に隠るゝは、往年の伝、其の識をなせるのみ」と。以上は、前文の所謂『越復傳』の事なり。」

○語注

【此歳】宝曆五（一七五五）年。【赴東海】『處士越復傳』『乙亥』（宝曆五「一七五五」年）も同様に「此歳赴_二東海_一而不_レ知_レ所_レ之」。（『史記』『魯仲連鄒陽列伝』参照）【往年】往歳に同じ。過ぎ去つた年。先年。昔。【往年之傳】『處士越復傳』を指す。【識】未來の吉凶禍福をあらかじめ知らせる言葉。晩年、上総に移住した事実を踏まえ、かつての自伝（『處士越復傳』）においてそれを予言したという意。

▼十八

六年丙子春正月十三日。遭_二母氏喪_一。編_二内艱劄記_一。

六年丙子春正月十三日、母氏の喪に遭ひ、『内艱劄記』を編む。

○語注

【六年】宝暦六（一七五六）年。黙齋二十五歳。【母氏】武井氏。【内艱割記】『孤松全稿』二卷所収。内艱は母親に死なれること。

▼十九

十年庚辰冬十一月十日。遭_二父喪_一。亦外艱割記成焉。「秀直竊謂。合_三先生外内艱割記與_二家禮抄略_一。可_三以爲_二吾門之喪規_一也。」

十年庚辰^{かうしん}冬十一月十日、父の喪に遭ひ、亦、『外艱割記^{きう}』成る。「秀直、竊かに謂^{おも}へらく、先生の『外・内艱割記』と『家禮抄略』とを合はせて、以て吾門の喪規と為すべきなり。」

○語注

【十年】宝暦十（一七六〇）年。黙齋二十九歳。【外艱割記】『孤松全稿』三卷所収。外艱は父親に死なれること。【家禮抄略】一冊。黙齋が『文公家禮』を抄録した書。文久二（一八六二）年夏四月、新発田藩上木。

▼二十

明和四年丁亥。先達遺事上梓焉。「先生不_レ充_二于意_一。後年欲_二燒而廢毀_一焉。」

明和四年丁亥、『先達遺事』を上梓す。「先生、意に充たず。後年、焼きて廃毀せんと欲す。」

○語注

【明和四年】一七六七年。黙齋三十六歳。【先達遺事】『孤松全稿』四卷所収。

▼二十一

先生在_レ家。事_二父兄_一也。逆_レ志先_レ意。而能給_二其事_一。父母亦鍾_二愛先生_一殊至。兄弟友愛交、不_レ薄。共謀以_二可久可大_一爲_二別號_一。先生庶_二幾德業_一。懷_二經濟之大圖_一者。竊可_レ知焉。其平素秘_二藏佐藤子家君之書_一。「佐藤子與_二迂齋_一之書。及家嚴戒_二先師_一而所_レ告之書也」至_レ晚謹帶_二於身_一。垂_二年六十_一。暇日自誦_二先君子行實_一。未_二數行_一頻催_二涕淚_一。終爲_レ是廢。嘗曰。敬_レ親者當_レ如_二國君_一。故曰。家有_二嚴君_一。父母之謂也。又曰。事_レ親者以_二敏速詳勉_一爲_二最務_一。事至_二割烹_一。可_二習熟_一矣。

先生の家に在りて、父兄に事_{つか}ふるや、志に逆らひ意を先にし、能く其の事を給す。父母も亦、先生を鍾愛すること、殊に至れり。兄弟の友愛交々_{こじも}薄からず、共に謀りて、可久・可大を以て別号と爲す。先生の、徳業を庶_{これが}幾ひ、経済の大図を懷けること、竊_{ひそ}かに知るべし。其の平素、佐藤子・家君の書を秘藏し「佐藤子、迂齋に与ふるの書、及び家嚴、先師を戒めて告ぐる所の書なり」、晩に至るも謹みて身に帶_よす。年六十に垂_{なん}として、暇日に自ら『先君子行實』を誦し、未だ數行ならずして、頻りに涕_{てい}涙を催し、終_{つひ}に是れが爲に廢せり。嘗_{かつ}て曰く、「親を敬すること、当に国君の如くなるべし」と。故に曰く、「家に嚴君有り、父母の謂

ひなり」と。又曰く、「親に事ふること、敏速詳勉を以て最務とす。事、割烹に至るまで習熟すべし」と。

○語注

【鍾愛】特別にかわいがる。【兄弟】黙齋には兄がひとりあった。稲葉廓齋。【徳業】徳行。【經濟】経世済民。【佐藤氏與迂齋之書】佐藤直方が迂齋に与えた書。「佐藤先生年譜略」に「享保元年丙辰冬至日。艸一文與稲葉正義、野田徳勝、永井行達。以付託學術之事。」とある。また、『孤松全稿』二十二卷所収「己酉雜記」序に「享保元年佐藤子作冬至文」とある。直方が迂齋に与えた書とは、この「冬至文」のことか。【家嚴戒先師而所告之書】「示黙齋」（宝暦十「二七六〇」年）のこと。迂齋が死の直前に黙齋に示した書。林潜齋『再旬紀行』（黙齋晩年の江戸行きの記録）によれば、「示黙齋」の文面は「一、講習一日も怠慢あるべからず。奇説を立、並に人をかるんじあなどるべからず。一、應事接物禮節を守るべし。一、酒宴佚遊并に朝寝無用の事。火の本念を入れるべし。右三條事尤卑近而所繫甚重矣。汝頂門之一針也。寶暦十年庚辰五月廿四日書 迂齋老人」であり、黙齋は「コレヲモト表具シテ掛物ニシタガ又トツテ懷中」したという。【先君子行實】『孤松全稿』三卷所収。【割烹】肉を切つて煮る。料理する。（『孟子』万章上）

▼二十二

先生與_二親戚故舊_一。常以_二情話_一歡好。不下敢以_二賢智_一侮慢_上。一愛_下遺_二財物_一致_中情意_上也。他日語_二秀直_一曰。我性好_二授與_一。而惡_二受取_一焉。因意我之諸親。好_二於信_一者。非_二菲徳之所_レ及。在_二務而遺_レ物耳。

先生、親戚故旧と常に情話を以て歛好し、敢へて賢智を以て侮慢せず、一に財物を遺り、情意を致すを愛

す。他日、秀直に語りて曰く、「我が性、授与を好みて受取を惡む。因りて意おもふに、我が諸親、信を好むは、菲徳の及ぶ所に非ず、務めて物を遺おくるに在るのみ」と。

○語注

【情話】人情の籠もつた話。 【信】默齋の諱、正信。 【菲徳】薄い徳。

▼二十三

晚容二狂姪一之寄託レ迎レ之。其愛顧撫育無レ所不レ盡。彼與二先生一咫尺異レ席。而妄歌狂吟。日夜多嘆。聽者耳煩氣衝。先生在二几案一自若。秀直慰曰。累年讀書安眠苦辛如何。希自愛。先生慘然曰。彼之喧則善。唯其寂寥閑默不レ忍見レ之。▽頭注 幸按。狂姪。名十二。諱通徳。默翁之兄廓齋季子。寛政十一年没年三十四。

晩に狂姪てつの寄託を容れ、之れを迎ふ。其の愛顧し撫育すること尽くさざる所無し。彼、先生と咫尺しせきし席を異にして、妄歌狂吟、日夜多嘆たぐわす。聴く者、耳煩ひ氣衝すれども、先生は几案に在りて、自若たり。秀直、慰めて曰く、「累年、讀書安眠に苦辛すること如何せん。希こひねがはくは自愛されよ」と。先生、慘然として曰く、「彼の喧なるは則ち善し。唯々其の寂寥閑默、之れを見るに忍びず」と。▽頭注 幸按ずるに、狂姪、名は十二、諱は通徳、默翁の兄廓齋の季子。寛政十一年没、年三十四。

○語注

【狂姪】頭注にあるように、名は十二、諱は通徳、黙齋の兄・廓齋の季子。成東・元倡寺に現存する墓の碑文には「君姓越智。稻葉氏。諱通徳。廓齋君季子。黙齋先生姪也。明和三年丙戌三月江戸生。寛政十一年己未九月十六日。歳三十四。上總清名幸谷卒。法諡曰。本然覺性居士。」とある。ちなみに、『先君子行實』には、迂齋の孫（黙齋の兄・廓齋の子）として四人が挙げられている。長男は宝暦六（一七五六）年三月生、これは後出する黙齋の甥・友齋通故の記事と年齢がほぼ一致する。また長女が同じ宝暦六（一七五六）年四月生、長男と生まれが一月違いであるが、どのような事情かは不明。さらに宝暦八（一七五八）年七月、宝暦十（一七六〇）年七月に二女、三女が生まれており、以上で四人である。しかし、黙齋が養っていた狂姪・十二は『先君子行實』（宝暦十「一七六〇」年成立）よりのもの明和三（一七六六）年の生まれであるから、廓齋の子は、『先君子行實』に記された四人よりも多く、少なくとも男二人、女三人の五人であることがわかる。なお、狂姪については女子とするものもある（『東金市史・通史篇・下巻』二九頁）が、「姪」の語は男子にも用いられる。狂姪の名は「通徳」とあり、後出の友齋の名の「通故」と「通」の字が共通する。また戒名から考えても、黙齋が手元において面倒を見た狂姪は男子であろう。【咫尺】非常に近い距離。【多嘩】嘩は諱の俗字。諱はかまびすしい。【衝】つきあげる。【凡案】つくえ。【廓齋】稻葉廓齋（享保九「一七二四」年—安永七「一七七八」年）。名は正直。鐵次郎と称した。迂齋の長男。宝暦元（一七五一）年より唐津藩の近習伴読となるが、宝暦七（一七五七）年に同職を免ぜられ、以後迂齋膝下に学んだという。安永七（一七七八）年に没したのち、上総に移住した黙齋は廓齋の子を引き取り、黙齋の死まで面倒を見た（後述）。（『崎門學脈系譜』四六七頁、『先君子行實』）

先生接^レ物感速慮深。望^レ之則威嚴雖^レ不^レ可^レ近。而即^レ之則中誠遂感。欲^二長從^一之。辭令聽^レ之。則雖^レ可^レ畏。而能辯懇喻。自服希^二乎尋承^一教。唯^レ懼^三永被^二遐棄^一。門人歸路遠者。其去必問曰。得^レ無^レ饑乎。若^二奴僕^一則必與^二酒錢^一曰。須^二汝過^レ店充^レ飢。偶聞^二門人故舊之喪^一。則驚悸惻痛。動^レ容見^二於色^一。忼然如^レ有^レ失也。

先生、物に接するや、感ずること速かに慮り深し。之れを望めば、則ち威嚴近づくべからずと雖も、之れに即^つけば、則ち、中誠にして遂に感じ、長く之れに従はんと欲す。辞令は、之れを聴けば、則ち畏るべしと雖も、能く弁じ懇ろに喻す。自ら服し、尋いで教へを承けんことを希ひ、唯々永く遐棄せられんことを懼る。門人の帰路遠き者は、其の去るや必ず問ふて曰く、「饑^うる無きを得んや」と。奴僕の若きには、則ち必ず酒錢を与へて曰く、「須く汝店を過^よりて飢^うを充たすべし」と。偶^{たまたま}門人・故旧の喪を聞けば、則ち驚悸惻痛し、容を動かし色に見はれ、忼然として失有るが如し。

○語注

【中誠】忠誠に同じ。【辭令】人とやりとりする言葉遣い。【遐棄】遠ざけて見捨てる。【動容】容貌を変える。【忼然】気拔けしてぼんやりする。

▼二十五

先生自^レ東以來。未^二嘗交^レ人^一。戸外標^二一書^一。不^レ入^下無^二紹介^一之人^上。自言杜^二事端^一。不^二敢煩^二里正^一也。或雖^二門人^一。多歸^二之農畝^一而卻^レ之。唯如^二舊來門人^一。常懇教育。偶有^二過失^一。則爲^二不^レ聞者^一。而待^二其

開悟^一。率恕而不^レ問。或有^下背^二門法^一傷^二心術^一者^上。痛呵不^レ假。直瀉^二肚裏^一破^二巢窟^一。不^レ能^レ撩^二其情^一也。一日痛督^二高宮文七^一。其密責嚴呵。世俗所^レ謂猶^三闇王之斷^二冥譴^一也。河仲遷在^レ座。以爲猶^レ束^二濕薪^一也。先生嘗言。我不^二終絶^上人。人遠^二於我^一者不^レ逐。不^三苟求^二人之親^一。有^二請^レ教者^一則曰。尊^二信直方先生^一者。入^二我門^一矣。

先生、東^{ひがし}せしより以来^{このかた}、未だ嘗て人に交はらず、戸外に一書を標^{しる}し、紹介無きの人を入れず。自ら言ふ、「事端を杜^{ふさ}ぎ、敢へて里正を煩はざるなり」と。或いは、門人と雖も、多くは之れを農畝^はに帰らしめて之れを卻^{しりぞ}く。唯、旧来の門人の如きは、常に懇ろに教育し、偶過^{たまたま}失有らば、則ち、聞かざる者として、其の開悟するを待ち、率^{おほむ}ね恕して問はず。或いは、門法に背き、心術を傷^{やぶ}る者有らば、痛く呵^{しか}りて假^{やそ}さず、直ちに肚裏を瀉^はき、巢窟を破り、其の情を撩^{おほ}むる能はず。一日、痛く高宮文七を督^{たぐ}す。其の密責嚴呵、世俗の所謂^{ゆゑ}猶^と闇王の冥譴を断ずるがごとし。河仲遷、座に在^{おも}ひて以^{おも}はる、猶ほ、濕薪^{しん}を束^{いやく}めるがごとし」と。先生、嘗て云ふ、「我、終に人を絶たず。人、我より遠ざかる者は逐はず。苟^{いやく}も人の親^{しん}を求めず」と。教へを請ふ者有らば、則ち曰く、「直方先生を尊信する者は、我が門に入れ」と。

○語注

【自東】上総へ移住して以来。【事端】争いのもと。【里正】村長。【肚裏】腹のうち。【高宮文七】默齋門人。上総山武郡押堀村の人。（『崎門學脈系譜』四六九頁）【河仲遷】河本仲遷。迂齋門人。名は善、三左衛門と称した。丸亀藩士。（『崎門學脈系譜』四六四頁）【束濕薪】束湿。湿った物は束ね易いことから、強く締めつける喩え。（『漢書』甯成伝）

▼二十六

先生處_レ事。取舍與奪。雖_三各_二度_一其宜_一。而取_二於人_一。乃最極_二其至密精詳_一。始在_二江都_一。受_二新發田侯「浩軒君」之俸_一。「俗曰_二出入扶持_一」既而隱_二于南總_一。數_レ辭_レ俸。侯不_レ可。辭_レ之不_レ息。侯大怒而容_レ之。遂疏_二先生_一矣。晚年遊_二江都_一之日。爲_二當侯「溝口出雲守」所_レ延而進講焉。遂再謁_二浩軒君_一。退語_二吾輩_一曰。幸矣哉今日拜_二老侯之溫顏_一。「侯數有_二先生喬居之賜_一」又嘗固辭_二門人履端伏臘之壽貲_一。秀直敢問。世儒皆義納_レ之。夫子貧而不_レ肯何也。曰文七之輩。爲_二略_一干_レ祿。而多出_二于江都_一。懼_二其媿體自_レ我始_一也。

先生、事に処し、取舍与奪すること、各々其の宜しきを度ると雖も、人に取ること、乃ち最も其の至密精詳を極めたり。始め江都に在るや、新発田侯「浩軒君」の俸を受く。「俗に出入扶持と曰ふ。」既にして南総に隠れ、数々俸を辞す。侯、可_{ゆる}さず。之れを辞すること息めず。侯、大いに怒るも之れを容_{ゆる}し、遂に先生を疏_{うと}む。晚年、江都に遊ぶの日、当侯「溝口出雲守」に延_ひかれ、進講す。遂に再び浩軒君に謁す。退きて吾輩_{わがどもがら}に語りて曰く、「幸ひなるかな、今日、老侯の温顔を拝す」と。「侯、数々先生に喬居の賜有り。」又、嘗て門人履端伏臘の寿貲_しを固辞す。秀直敢へて問ふ、「世儒皆義として之れを納_いる。夫子貧にして肯_{うへ}はざるは何ぞや」と。曰く、「文七の輩略々_{ほぼ}祿を干めんとして、多に江都に出づ。其の媿_き体、我より始むるを懼_{おそ}るゝなり」と。

○語注

【處事】事がらを取り捌く。【取舍】取捨。【江都】江戸。『日本道學淵源録・續録』「傳」に付された割注

は、江戸を江都と表記するのは誤りであるとする。【新發田侯「浩軒君」】新發田藩主、溝口直養（元文元「一七三六」年—寛政九「一七九七」年）。直養は程朱の学を尊信、崎門学派・石原寛信を登用し、安永元（一七七二）年、藩校を建設開校した。安永五（一七七六）年には町在の者にも聴講を奨励し、安永九（一七八〇）年、程朱闇齋以外の学を禁じた。【出入扶持】三田村鳶魚『武家事典』（青蛙房、一九五九年、一六九頁）に、医師の例として以下のように記されている。「幕府の医官ばかりでなく、他の大名の医官でも一度他家の殿様を診察すると、出入扶持といつて三人扶持なり、五人扶持なりを終身給与されたものである。幕府の医官などには、五軒十軒の大名から出入扶持を受けていた医者が随分あつた。出入扶持を取つていても、薬礼は無論もらうのである。」闇齋が受けた「出入扶持」も同様の形式か。終身給与されるという俸給の決まり事を闇齋が拒否したために、浩軒君の怒りを買つたものか。【溝口出雲守】新發田藩主、溝口直侯（なほよし）。浩軒の弟、浩軒（溝口直養（なおよす））の父直温（なおあつ）の四男。【喬居之賜】喬居は僑居に同じ。仮住まい。「賜」はおくりもの。闇齋の江戸の宿舎に、新發田侯から賜物があつたことを指す。【履端伏臘之壽賀し】履端は新年を迎えること、伏臘は夏祭りと冬祭り、賀はたから。年賀・中元・歳暮のような付け届けのこと。【文七】高宮文七。【媿】媿の本字。はじ。

▼二十七

先生自レ壯至レ晩。常立二貧窮之間一。能支吾不二狼狽一焉。衣不三一見二其破絮一。飲食亦精潔甘美。養レ生尤至。其活計之制。節儉之度。區劃最密。嘗曰。節儉之策。大易而小難。若使三先生得二其志一。則家國何有。固無二二理一也。【幸田語錄中有下家計與二經濟一之一事上先生言曰天下經濟猶言二衆人家計一也】蓋自二其若年一。志在二經濟一。豈慢レ人而然耶。雖レ然小心翼翼。每務二小物一。不二敢少置一。亦與二大事一何擇。殊長二於處事一。

百度萬般。經畫前定。區別豫具。臨^レ時綽然有^二餘裕^一焉。不^二獨生事^一。鬼事亦不^レ待^レ年制^レ之備^レ禮。没十年前。選具無^二缺遺^一。而別臧^二後事之一書^一。以待^二死期之至^一也。

先生、壮より晩に至るまで、常に貧窮の間に立ち、能く支吾し、狼狽せず。衣は一も其の破絮を見ず、飲食亦精潔甘美にして、生を養ふこと尤も至れり。其の活計の制、節儉の度、区画最も密なり。嘗て曰く、「節儉の策、大は易く、小は難し」と。若し先生をして其の志を得しむれば、則ち、家國何ぞ有らん。固より二理無ければなり。『『幸田語録』中に、家計と経済との一事あり。先生言ひて曰く、「天下の経済は、猶ほ衆人の家計を言ふがごとし」と。』蓋し、其の若年より、志は経済に在り。豈に人を慢りて然らんや。然りと雖も、小心翼翼、毎に小物を務め、敢へて少しも置かず。亦大事と何ぞ扱ばん。殊に処事に長じ、百度万般、経画を前に定め、區別を予め具へ、時に臨み、綽然として余裕有り。独り生事のみならず、鬼事も亦、年を待たず之れを制し、礼に備ふ。没するの十年前、選具して欠遺無く、而も別して後事の一書を臧^{かん}して、以て死期の至るを待てり。

○語注

【支吾】支える。【則家國何有】『日本道學淵源録・續録』『傳』は「則家國何異」。【幸田語録】幸田子善の語録。寛政五（一七九三）年、新発田藩士・佐藤照明（新発田藩儒臣佐藤復斎・仲弟）序（『日本道學淵源録・續録』六六九頁）、また、黙斎による跋（同年冬。同上・六六八～六六九頁）がある。照明の序には「先兄尚志之所録也」とある。尚志は佐藤照明の兄・佐藤復斎。幸田子善の門人で、寛政三（一七九一）年に没している。（『崎門學脈系譜』四六二頁）【小心翼翼】慎み深くて恭しいさま。【處事】事がらを取

り捌くこと。【經畫】組み立てて見積もること。【綽然】綽はゆるやか、しなやか。【生事】生きている者に対する礼。【鬼事】生事に対して祖先の靈に仕えること。【臧】臧とじめる。

▼二十八

先生晩年多^レ凶。失^二千載之望^一。「迂齋之孫繼子早世。家終絶矣。」雖^三其痛惻摧^二心胸^一。未^三嘗向^レ人說^二憂患^一。自負^二煩苦^一。權宜之制最盡。嗚呼先生終身祚薄。事常多^レ差。雖^レ然經畫早定。居^レ之泰然。處^レ之裕如。其格致之效。以至^二於命^一者乎。

先生、晩年凶多く、千載の望みを失ふ。「迂齋の孫・繼子早世し、家終に絶えたり。」其の痛惻、心胸を摧くと雖も、未だ嘗て人に向かひて憂患を説かず。自ら煩苦を負ひ、權宜の制最も尽くす。嗚呼、先生終身祚薄く、事常に差たがふこと多し。然りと雖も、經畫を早く定め、之れに居して泰然たり、之れに処して裕如たり。其の格致の効、以て命に至るものか。

○語注

【繼子】默齋は、遠縁にあたる鈴木八蔵を稲葉家の養子にしようとしたが、彼もまた早世したという。この子は迂齋の代から見れば孫の代にあたる繼子である。その子のことか。【權宜】時と場合とに応じて適宜に処置すること。【格致】格物致知。

▼二十九

先生平素處^レ己。禮容恭儉。毫無^二瞞^一肝^二情容^一驕^二夸^一傲言^一。故自遠^二怨怒^一橫逆侮慢之辱^一。嘗曰。受^二人之侮^一者。己之不恭職之由。常戒懼焉。最防^二火災^一。往年寓^二江戸之客舍^一。將^レ歸之日。嚴滅^二爐火^一。以使^二店主^一點檢而後去。凡百事雖^レ不^二敢忽^一。殊畏^二制禁^一。戰兢如^二隋夫^一然。嘗戒^レ人曰。此鄉當^下謹^二守國禁^一待^二季秋^一速折^二釣竿^一絶^中鳥肉^上矣。〔此近里自^二國初^一官掣^レ鷹之地故有^下捕^二魚鳥^一之禁^上也。〕

先生、平素己を処するや、礼容恭儉、毫も瞞^{まん}肝^{かん}の情容、驕^{きょう}夸^{かう}の傲言無し。故に、自ら怨怒横逆侮慢の辱^{はづかし}めを遠ざく。嘗て「人の侮りを受くること、己の恭しからざる、職として之れに由る」と曰ひて、常に戒懼す。最も火災に防^ふふ。往年、江戸の客舍に寓し、將に帰らんとする日、嚴に炉火を滅し、以て店主をして点検せしめ、而る後に去る。凡そ百事敢へて忽^{ゆが}せにせずと雖も、殊に制禁を畏る。戰兢、隋夫の如く然り。嘗て人を戒めて曰く、「此の郷、当に国禁を謹守し、季秋を待ちて速かに釣竿を折り、鳥肉を絶つべし」と。〔此の近里、国初より官、鷹を掣^ひくの地、故に魚鳥を捕ふるの禁ありしなり。〕

○語注

【禮容】礼儀正しい態度。【恭儉】人に対してうやうやしく、自分自身にはつつしみ深い。（『論語』学而「温良恭儉讓」）【瞞肝】瞞は目尻の平らなさま、肝は目を見はるさま。『東金市史・史料篇三』所収の柴田武雄による注（一一七四頁）によれば、「だましたり、おどしたり」することとあるが、疑問。あるいは肝は誤字か。【情容】だらしない行儀。【驕夸】おごりたかぶる。【職之由】職由は、物事が起こり基づくよりどころ。『日本道學淵源録・續録』「傳」は「職由己之不恭也」（職^{しやく}として己^{おのづか}の恭^{こう}しからざるに由るなり）。【戒懼】戒慎恐懼。戒慎はいましめつつしむこと、恐懼（恐懼）はおそれかしこむこと。戒懼と略

した語は『中庸章句』に見える。【戰兢】戰戰兢兢。おそれつつしむさま。【隋夫】隋は墮、惰で、なまける意。【季秋】陰曆九月。通常、鷹狩は九月から翌年の三月に行われた。（根崎光男『將軍の鷹狩り』同成社、一九九九年、一八八頁）【掣鷹之地】闇斎の住んだ東金地方には、徳川家康が関東入府後はじめて設置した東金鷹場があった。三代將軍家光の頃からすでに將軍の來訪はなく、鷹場役人の職制も縮小されていたが、在地には引き続き鷹場を管理する郷見鳥が存続していた。（石井進・宇野俊一編『千葉県の歴史』山川出版社、二〇〇〇年、一八二～一八五頁）【捕魚鳥之禁】鷹場とその周辺地域である御捉飼場（鷹の実地訓練や鳥類の調達のために設けられた鷹場）では、鷹狩りの際に豊富な獲物が狩猟できるよう禁猟区域に指定され、また、冬季に飛來する鴨や鶴の餌を供給するため、池や川の小魚貝類を獲ることも禁じられていた。その他、田の排水に心掛け、鳥を威す案山子の設置や鉄砲の使用が制限されるなど、鷹狩りに支障を來す行動は、それがたとえ農事に深くかわつていようと厳禁されていた。（大網白里町史編さん委員会編、大網白里町『大網白里町史』一九八六年、三七二～三七三頁）

▼三十

秀直問處「患難」如何。先生曰。不_レ愛_二頸_一。則萬事定矣。其臨_レ義不_レ顧_二死生_一者。既斷然見「氣概之表」。其操確乎不_レ可_レ拔者。夫先生乎。一日酒後笑曰。某往年在「江戸」。偶、罹_二厲虐之疾_一。自決_二其死_一。不_レ圖瘡瘍之後。乃反發_下背_上「初心」之異念_上。未_二以爲_レ幸焉。其激發之至。痛洗_二利心_一。極絕_二外飾_一。世榮不_レ意。聞達不_レ求。澡雪之功。誠正之驗。隱顯爲_レ一。至_二其心術之微_一。則未_レ讓_二先達_一。而幽不_レ作_二鬼神_一。明不_レ愧_二人間_一者。亦夫先生乎。

秀直問ふ、「患難に処すること如何」と。先生曰く、「一頸を愛しまずんば、則ち万事定まる」と。其の義に臨み死生を顧みざる者、既に断然として気概の表を見はし、其の操確乎として抜くべからざる者は、夫れ先生か。一日、酒の後笑ひて曰く、「某、往年江戸に在り、偶々厲虐の疾に罹り、自ら其の死を決す。図らずして痊瘳の後、乃ち反つて初心に背くの異念を發し、未だ以て幸ひと為さず。其の激發の至るや、痛く利心を洗ひ、極めて外飾を絶つ。世榮意はせず、聞達求めず、澡雪の功、誠正の驗、隠顯一と為る」と。其の心術の微に至るも則ち未だ先達に譲らず、而かも幽に鬼神に忤ぢず、明に人間に愧ぢざる者は、亦夫れ先生か。

○語注

【厲虐】危急。【痊瘳】痊も瘳もいえる。【激發】病が激しくおこる。【利心】利益を得ようとする心。【澡雪】澡漑に同じ。あらいすぐ。あらい清める。『莊子』外篇・知北遊第二十二に、「老聃曰く、「汝、斉戒して而の心を疏燼し、而の精神を澡雪し、而の知を掇撃せよ」とある。疏燼もすすぎ洗うこと。掇撃は打破すること。（市川安司・遠藤哲夫『新釈漢文大系八・莊子（下）』明治書院、一九六七年、五八〇～五八二頁）【誠正】誠意正心。【隠顯爲一】裏表のない誠、無私の状態。（高島元洋『山崎闇齋—日本朱子学と垂加神道』ぺりかん社、一九九二年、一五八～一六〇頁）

▼三十一

先生之學。早明「道體」而通「事情」。尤長「無極太極性理之談」。而業既成矣。爾後吾黨諸老尋而逝焉。明和以來。京師獨有「訂齋先生」。東武有「幸田先生及我先生」。蓋道學之衰。未_レ有_下甚_二於此時_一者_上。而闇齋佐

藤子之學。不_レ絶如_レ線。況復天下益、厭_二道學_一。而僅學焉者。亦非_二第一等之人_一乎。君子雖_二任_レ道之切_一。而衰世之運。可_二如_レ之何_一哉。先生終隱。而日日録_下所_二以自發揮_二之旨訣_上。又善筆_二先諸達_マ之遺言事實_一。多出_二乎其一手之業_一。而空俟_二後之子雲_一而已。是故今日東方之學。傳_二于世_一者。蓋先生之功也。

先生の学、早く道体を明らかにして事情に通じ、尤も無極太極性理の談に長ず。而して業既に成り、爾後、吾が党の諸老尋いで逝けり。明和以来、京師に独り訂齋先生有り、東武に幸田先生、及び我が先生有り。蓋し、道学の衰へ未だ此の時より甚だしきは有らず。而して、闇齋・佐藤子の学、絶えざること線の如し。況や復_{また}、天下益々道学を厭ひ、僅に焉_{こゝ}れを学ぶ者、亦_{また}第一等の人に非ざるなり。君子、道に任ずること切なりと雖も、衰世の運、之れを如何がすべけんや。先生、終に隠れ、日々、自ら發揮せる所以の旨訣を録し、又、善く諸先達（原文…先諸達）の遺言_{いげん}事実を筆にすること、多く其の一手の業に出づ。而して、空しく後の子雲を俟つのみ。是の故に、今日東方の学世に伝はるは、蓋し先生の功なり。

○語注

【道體】道の本体。【無極太極】無極は太極の無限性を言う。宇宙万物の本体。万物生成の根源。【性理】性命理気の学。【明和】元号。明和元（一七六四）年―明和九（一七七二）年。【訂齋先生】久米訂齋（元禄十二「一六九九」年―天明四「一七八四」年）。名は順利、断二郎と称した。京都の人。三宅尚齋門の四傑（井澤灌園、石王塞軒、蟹養齋、久米訂齋）のひとり。三宅尚齋の娘を妻とした（『日本道學淵源録・續録』六四一〜六四七頁）。黙齋は、安永元（一七七二）年、京都で訂齋と会っている。後出。【幸田先生】幸田子善。【闇齋】山崎闇齋（元和四「一六一八」年―天和二「一六八二」年）。朱子学者、神道家。十五

歳で妙心寺の僧となるが、のち帰儒還俗して京に塾を開き、佐藤直方、浅見綱斎、三宅尚斎（いわゆる崎門三傑）ら多数の門人を育てた。のち神儒並行の立場を確立し、寛文十一（一六七二）年に吉川惟足から吉田神道の秘伝を受け、垂加靈社の号を授けられた。著作は『垂加草全集』、『文會筆録』他。【佐藤子】佐藤直方。【子雲】揚雄。中国漢代の儒学者、文人。子雲は字。前漢（紀元前二〇二年―後八年）、新（九年―二三年）、後漢（二五年―一二〇年）の三王朝に仕えた。『易経』に擬した『太玄経』、『論語』を模した『法言』などを著した。漢・唐の諸儒は揚雄を評価したが、宋代の程伊川や朱熹が、聖人の書の模作や性善悪混説、三朝に仕えたことなどを批判したため、以後の儒者も多くこれに倣った。

▼三十二

先生家書。皆則「大學近思錄之條目」。以發「道學之要」也。「大學八條。近思十四目。先師家學之龜鑑。而其踐履所「自出」也。」乃其終始闢「異端之邪説」。退「百家之陋習」。痛説極辨。不「得」遁「其情」也。上自「天道鬼神造化時運之奧」。下至「日用彝倫齊家經國之密」。其所「講」。探「頤鉤」深顯「微闡」幽。其所「得」。理事一串。渾融浹合。無「不」盡「至當」也。

先生の家書、皆『大學』・『近思錄』の条目に則り、以て道学の要を發す。「『大學』八条・『近思』十四目は先師家学の龜鑑にして、其の踐履の自ら出づる所なり。」乃ち、其の終始異端の邪説を闢け、百家の陋習を退け、痛説極弁、其の情を通るゝことを得ず。上は天道・鬼神・造化・時運の奥より、下は日用・彝倫・齊家・經國の密に至るまで、其の講ずる所、蹟（原文・頤）を探り深を鉤し、微を顯はし幽を闡らかにし、其の得る所、理事一串し、渾融浹合して、至当を尽くさざる無きなり。

○語注

【家書】家に伝わる書籍。【龜鑑】手本、模範。【踐履】行ない。【彝倫】人の守るべき道。【齊家】家庭を整え治める。【探頤鈎深】探頤鈎深の誤り。『易』繫辞上伝に、「探頤索隱。鈎深致遠。以定天下之吉凶。」とある。頤は雜乱、鈎は鈎針でひっかける意。雜然としたものの中に法則を探り、隠れた世界に搜索の手を伸ばし、深みに鈎針を垂れ、遠いものを引き寄せて、天下の吉凶を定めること。（本田濟『新訂中国古典選・第一卷・易』朝日新聞社、一九六六年、五一四～五頁）【顯微闡幽】『易』繫辞下伝に「微頤闡幽」とある。中井履軒は「微頤」を「頤微」の誤りであろうとしているという（未見）。事の微かな兆しをはつきりさせ、目に見えぬ道理を人に知らせる意。（本田濟『新訂中国古典選・第一卷・易』朝日新聞社、一九六六年、五四七頁）【浹合】浹洽。あまねくゆきわたる。

▼三十三

秀直嘗竊謂。先生之學之柄。信_レ所謂心與_レ理之外無_レ他矣。「先生曰朱子曰人之爲_レ學心與_レ理而已矣。此語三見_二朱書中_一。眞秘藏第一之訓也。」而其所_二以事_一之任。自斷曰。我乃此學之捕吏。身雖_二微賤_一。不敢避_二貴戚_一也。是以雖_二實尊_二先輩_一。不敢阿_レ所好。而公然議_二其所_レ未盡_一。凡天下之學。辨_二其是非_一。欲_二以章明永垂_二後裔_一也。

秀直嘗て竊かに謂ふ、「先生の学の柄は、所謂心と理との外、他無きことを信ずるのみ」と。「先生曰く、「朱子曰く、「人の学を爲す、心と理とのみ」と。此の語三たび朱書中に見ゆ。眞に秘藏第一の訓へなり」

と。」而して、其の以て事とする所の任は、自ら断じて曰く、「我、乃ち此学の捕吏たり。身、微賤なりと雖も、敢へて貴戚を避けず。是を以て実^ニに先輩を尊ぶと雖も、敢へて好む所に阿^{おも}らずして、公然とその未だ尽くさざる所を議す。凡そ天下の学は、其の是非異同を弁じ、以て章明永く後裔に垂れんことを欲するなり」と。

○語注

【秀直】著者・林潜斎。【人之爲學心與理而已矣】朱子の著作に三カ所見えるというこの言葉について、『日本道學淵源録・續録』「傳」割注は『大学或問』を一例として掲げている。『大学或問』の該当箇所は以下のとおり。「人之所以爲學。心與理而已矣。」（荒木見悟、岡田武彦主編『近世漢籍叢刊・和刻影印・思想三編五・孟子或問・大学或問・中庸或問』、中文出版社、一九七七年、四〇頁）。その他は未見。【事】專念する。【此學】聖人の道を修める学。【貴戚】君主の親戚。

▼三十四

先生之出處。高尚不^レ可^レ測。迥然不^レ可^レ據。非^四後學所^三以可^二輒語^一。而老儒或有^二議者^一也。由^下徒視^二其顯^一不^上能^三深察^二其微^一已。先生若弱既深識^二邦國之時體^一。儒醫者制在^二除名^一。唯祿仕賓師。則置而不^レ論。雖^二才識幹^レ事。而經濟之柄。未^レ下^二儒手^一。則何裨補之有。佐藤子嘗聞^二鳩巢子之出^一曰。唐虞之治。今將^レ可^二庶幾^一焉。先生固遂^二隱操^一者。蓋其見亦在^二於斯^一而然耶。「遇^レ世而出明^二道天下^一者。伊尹太公也。不^レ遇而處傳^二學萬世^一者。孔孟也。是正出處之標準。而我先達之去就隱顯。蓋取^二于此^一已。」故先生業進學成。父師進^レ仕。先生懇謝不^レ肯。二老亦不^二敢強^一。信^二其志^一也。先生其豈謂^レ不^レ知^二時體^一乎。何謂^レ不^レ明^二出

處之道^一乎。他日忽然謂^レ人曰。若有^二召^レ我者^一。止^二於俸祿萬鍾月講一課^一。不^三敢給^二他事^一。則我可^二出仕^一。

先生の出处、高尚にして測るべからず。廻然^{けい}として抛るべからず。後学の以て輒^{たやす}く語る所に非ず。而るに、老儒或いは議する者有るは、徒らに其の顛はるゝを視、深く其の微を察する能はざるに由るのみ。先生、若弱にして既に深く邦国の時体を識る。儒医者^にの制は除名に在り。唯、祿仕の賓師は則ち置きて論ぜず。才識事を幹すと雖も、經濟の柄、未だ儒の手を下さざれば、則ち何の裨補^{ひほ}か之れ有らん。佐藤子、嘗て鳩巢子の出づるを聞きて曰く、「唐虞の治、今將に庶幾^{こひれが}ふべし」と。先生の固く隱操を遂げしは、蓋し、其の見亦斯に在りて然るや。「世に遇ひて出でて、道を天下に明らかにするは、伊尹・太公なり。遇はずして処し、学を万世に伝ふるは孔孟なり。是れ正に出处の標準にして、我が先達の去就隱顯は、蓋し此れに取るのみ。」故に、先生、業進み学成り、父、師仕を進むれど、先生懇謝^{うげん}して肯はず。二老も亦敢へて強ひず。其の志を信ずればなり。先生、其れ豈に時体を知らずと謂はんや、何ぞ出处の道を明らめずと謂はんや。他日忽然^{かひ}として人に謂ひて曰く、「若し我を召す者有らば、俸祿万鍾月講一課に止め、敢へて他事を給せざれば、則ち我、出仕すべし」と。

○語注

【出處】出て仕えることと、退いて民間に在ること。身のふり方。【廻然】遠いさま。【除名】『再旬紀行』に「儒医制外ナリ」の一文がある。制外は制規の範圍外、おきての外の意で、ここでは儒者や医師は徳川幕府の身分制度の制外にあることを指す。除名も同義であろう。【祿仕】俸給を得るために官に仕える。【賓師】諸侯の国で客分待遇を受ける人。相談役。【幹】任にたえる。【裨補】助け補うこと。【鳩巢子】室鳩

巢（明暦四「一六五八」年—享保十九「一七三四」年）。名は直清、字は師礼、通称新助。鳩巢、滄浪と号した。備中出身の医師の子として江戸に生まれる。加賀藩主前田綱紀に仕えて、その命により木下順庵に学んだ。この間、闇斎門下の羽黒養潜と親交を深めた。正徳元（一七一）年、新井白石の推挙で幕府儒官となる。白石失脚後、將軍徳川吉宗の信任を得て、享保七（一七二二）年侍講、享保十（一七二五）年、西丸奥儒者。著作は『赤穂義人録』、『駿台雜話』、『鳩巢文集』他多数。【唐虞之治】堯・舜二代の治績。【隱操】隱遁の志。【伊尹】殷の賢人。湯王を助けて夏の桀王を討ち、殷の開国の政治に大功があつた。【太公望】周の文王の師、呂尚の号。中国、殷末周初の武將、政治家。落ちぶれて渭水のほとりで釣りをしていたとき文王に出会い、先君太公が待ち望んだ人物であることから太公望と呼ばれた。【二老】父・迂斎と師・野田剛斎。【愜然】愜は平氣でいるさま。【萬鍾】非常に多くの量。また、その穀物、あるいは俸給など。一鍾は約五〇リットル。

▼三十五

其壯歲遂祝髮。固避_二塵俗_一。絶_二世榮_一。深爲_二市中隱_一。判然明_二其不_レ仕_一。而韜_二晦形跡_一。徇_二洋物外_一。一任_二自適_一。見者目_レ之以_二顛狂_一。聞者訾_レ之以_二異端_一。親戚患焉。師友傷焉。膾_二炙人口_一。以揭_二集會之話頭_一也。是以舊遊親者。多警_二其異狀_一。先生曰。我不_レ敢絶_二妻肉_一。害_二彝倫_一。則何傷焉。我國俗頂髮半而與_レ古異者。獨如何。是亦爲_レ狂爲_レ異端_一乎。「先生初謀_二百法_一。而事定則終始不_二必變易_一矣」後年偶_レ疾久臥。鬚髮肆長。是以不_二復剃_一也。

其の壯歲、遂に祝髮し、固く塵俗を避け、世榮_{せいえい}を絶ちて、深く市中の隱と爲り、判然として其の仕へざる

を明らかにす。而して、形跡を韜晦し、物外に徜徉し、一に自適を任ず。見る者、之れを目するに顛狂を以てし、聞く者、之れを置るに異端を以てす。親戚はこれに患ひ、師友はこれを傷む。人口に膾炙し、以て集会の話頭に掲ぐ。是を以て、旧遊・親者、多く其の異状を警む。先生曰く、「我、敢へて妻肉を絶ち、彝倫を害さざれば、則ち何ぞ傷まんや。我が国俗、頂髪半ばにして古と異なるは、独り如何。是れも亦狂と爲し、異端と爲すか」と。「先生、初めに百法を謀りて事を定む。則ち終始必ずしも変易せざるなり。」後年、偶々疾みて久しく臥し、鬚と髮肆に長ず。是を以て復剃らず。

○語注

【壯歳】働きざかりの年頃。三十歳頃。【祝髪】髪を切り落とす。祝は断ち切る。【韜晦】才能、学問を包みくらます。【徜徉】ぶらぶらあるく。【物外】世俗の外。【舊遊】旧友。【親者】身内。親戚。【頂髪半】『日本道學淵源録・續録』「傳」は「頂髪祝其半」（頂髪その半ばを祝つ）。

▼三十六

安永元年「壬辰」先生適^ニ於京師^一。「有^ニ紀行^一曰^ニ西遊轡録^一」初見^ニ訂齋先生^一。「訂齋時年七十四先生年四十一」訂齋寵^ニ異先生^一甚至。會談數回。互相歡好。如^ニ舊相識^一。

安永元年「壬辰^{じんしん}」、先生京師に適^ゆく。「紀行有り。『西遊轡録』と曰ふ。」初めて訂齋先生に見ゆ。「訂齋、時に年七十四、先生、年四十一。」訂齋、先生を寵異すること甚だ至れり。會談數回、互ひに相歡好し、旧より相識れるが如し。

○語注

【安永元年】一七七二年。黙齋四十一歳。【西遊轡録】『孤松全稿』卷五所収。同年二月二十九日、目黒行人坂の大火によつて焼け出された黙齋は、古河藩主の許しを得て、三月八日、兄・廓齋正直のいる関西に向けて旅立つた。江戸帰着は八月十四日。【訂齋先生】久米訂齋。【寵異】他の人よりも特別に愛する。

▼三十七

先生壯歳至「不惑」。隱「於市中及墨水」。

先生、壯歳より不惑に至り、市中及び墨水に隠る。

○語注

【壯歳至不惑】黙齋は父の死後、祝髪して市中の隠となった（既出）。梅澤芳男編『稻葉黙齋先生と南総の道学』（五一頁）には、宝暦十三（一七六三）年、黙齋は三十二歳で江東牛島（本所向島）に転居したとあるが、牛島はいわゆる「墨水」である。それ以前に住んだ「市中」とは、宝暦十（一七六〇）年、二十九歳のときに迂斎宅から独立した居（若松町といわれる）のことか（『先君子行實』）。ちなみに、安永元（一七七二）年、四十一歳のおりに目黒行人坂の大火によつて焼けた家の名は「新泉草廬」（『西遊轡録』）、半年後には建て直されて黙齋は同地に戻っているが、安永四（一七七五）年、四十四歳でさらに「住吉坊」へ転居している。（梅澤芳男編著『稻葉黙齋先生と南総の道学』五二頁。）

▼三十八

知命之歳。「天明元年辛丑八月九日泛_レ舟啓行。以去_二江都_一」。志水義質。松本義上。高須順正。日原以道。各送_二先生_一別_二于行德驛_一。先生舟中作_二一書_一以與_二四子_一。詳見_二辛丑雜記_一。時年正五十。」

知命の歳、「天明元年辛丑八月九日、舟を泛べ啓行し、以て江都を去る。志水義質、松本義上、高須順正、日原以道、各々先生を送り、行徳驛に別る。先生、舟中一書を作り以て四子に与ふ。詳らかに『辛丑雜記』に見ゆ。時に年正に五十。」

○語注

【知命】五十歳。【天明元年】一七八一年。默齋五十歳。【啓行】旅立つこと。【江都】『日本道學淵源録・續録』「傳」割注は、江戸を「江都」と記載することについて、京師でなければ都を称してはならないとする。【志水義質】『崎門學脈系譜』（四六四頁）には志水質義とあるが、義質が正しい。迂齋門人。三九郎と称した。『壬寅雜記』（『孤松全稿』卷十三所収）奥書に「右壬寅先生所手書自正月七日至十二月晦凡九百三十八條 為志水君義質繕写 鵜沢恭節謹書」とある。【松本義上】默齋門人。丸亀藩臣。（『崎門學脈系譜』四六九頁）【高須順正】默齋門人。丸亀藩臣（『崎門學脈系譜』四六九頁）。『再旬紀行』によれば、寛政六（一七九四）年の江戸行きの際、默齋は江戸で高須當八という人物と十四年ぶりに再会している。この高須當八と高須順正は同一人物であろう。【日原以道】手塚坦齋（宝暦十二「一七六二」年—天保五「一八三四」年）。默齋門人。江戸の人。初め日原以道を称した。少壮のころ默齋に学び、のち五十年間にわた

つて土浦藩土屋侯四代に仕えた（『日本道學淵源録・續録増補・上』七二二頁）。五十年間仕えたことが事実であれば、二十歳にしてすでに土浦侯に出仕していたことになる。【行徳驛】行徳宿。現在の千葉県市川市南部の江戸川河口近く。近世初期、徳川氏が塩田造成を奨励した。周辺は燃料の松葉が得やすかったたので、ここに江戸湾最大の塩浜が形成された。中期以後、利根川、江戸川水運の終着点ともなり、成田参詣も盛んとなつて、川岸の集落は河港町、宿場町として栄えた。【辛丑雜記】『孤松全稿』十一・十二卷所収。下卷（十二卷）後半部分に「八月九日啓行。適上總」。【志水松本高須日原送予。泛舟別行徳」。舟中漫書與四氏」。如左。』」として、以下四氏に与えた書が掲げられている。

▼三十九

移于上總清名幸谷。「村名○鵜澤氏父子兄弟。迂齋先生門人。先生友也。故迎之以卜其居」至此固閉門謝俗。殆二十年。終世未嘗一出其門也。秀直一日訪先生。見其屋漏掛一草鞋。怪問其故。先生曰。我若與里人不合。則欲不俟終日而去。爲豫備已。秀直動悸。深感其言。先生萬般已豫事前。而不屈事後。謀慮敏捷。不在二人後。其剛毅英斷。誰復如此。▽頭注 幸謂。清名幸谷今千葉縣山武郡増穂村清名幸谷。

上総清名幸谷に移る。「村名○鵜澤氏父子兄弟は迂齋先生の門人、先生の友なり。故に之れを迎へ以て其の居を卜す。」此に至りて固く門を閉ざし、俗を謝すること殆ど二十年、世を終ふるまで、未だ嘗て一たびも其の門を出でず。秀直、一日先生を訪ひ、其の屋漏に一草鞋の掛くるを見、怪しみて其の故を問ふ。先生曰く、「我、若し里人と合はざれば、則ち日を終ふるを俟たずして去らんと欲し、為に予め備ふるのみ」と。

秀直、動悸し深く其の言に感ず。先生、万般已に事前に予めず。而して事後に屈せず。謀慮、敏捷にして人後に在らず。其の剛毅英断、誰か復此くの如くならん。▽頭注 幸謂ふ。清名幸谷は、今の千葉県山武郡増穂村清名幸谷なり。

○語注

【清名幸谷】地名。現・千葉県山武郡大網白里町清名幸谷。【村名○】○は底本の表記どおり。【鵜澤氏】清名幸谷村の豪農。迂斎の門人である鵜澤容斎とその子、由斎・近義兄弟。鵜澤容斎は迂斎の門人、本姓は鈴木、名は宣堯、長右衛門と称した。黙斎が上総に移住を果たした際には、容斎はすでに死去していた（『東金市史・通史編・下』三五頁）。由斎は容斎の長子、近義は次子である。黙斎が『姫島講義』を与えた「上総八子」（上総における八人の門人）のひとり（『姫島講義』）。なお、後に名が見える鈴木恭節は近義の三男で、のち館林藩儒臣となった。【屋漏】家の北西の隅、家のもっとも奥の部分。

▼四十

三年癸卯四書或問抄略成焉。〔後來享和二年壬戌館林侯梓藏焉〕

三年癸卯『四書或問抄略』成る。〔後來、享和二年壬戌、館林侯、梓藏す。〕

○語注

【三年】天明三（一七八三）年。默齋五十二歳。【四書或問抄略】三卷二冊。『癸卯雜記』（『孤松全稿』

十六卷所収）に自序（「四書或問抄略序」天明三年九月十六日）、自跋（「書四書或問抄略後」癸卯十月二十三日）が収められている。【享和二年】一八〇二年。黙齋の没後三年。【館林侯】館林藩主・松平斉厚（天明三「一七八三」年―天保十「一八三九」年）。【梓藏】享和二（一八〇二）年、藩校道学館上木。

▼四十一

寛政元年己酉夏大旱。先生憂苦。卻「書生」。使_下其各、自專盡「農事」切求「水利」。「鑿」井灌「田之類」以勵_中「養」枯苗「之力上」也。【秀直間時獨得_レ聞「鬼神集説之講」先生編「鬼神集説考證」

寛政元年己酉夏、大旱。先生憂苦し、書生を卻け、其の各々をして自ら専ら農事に尽くし、切に水利「井を鑿ち田に灌ぐの類」を求め、以て枯苗を養ふの力を励ましめたり。【秀直、間時に独り『鬼神集説』の講を聞くを得。先生、『鬼神集説考証』を編む。】

○語注

【寛政元年】一七八九年。黙齋五十八歳。【大旱】寛政元年について、『武江年表』は「米穀豊饒なり」としている。上総地方にかぎって旱魃であった可能性は否定できないが、疑問。あるいは年代に誤りがあるか。直前の天明年間には大飢饉があり、特に関東・東北で死者十三万人に及んだ。【鬼神集説】佐藤直方編。朱子の語録・文集中から鬼神に関する記述を集成した書。直方の自序（元禄二「一六八九」年）がある。『増訂佐藤直方全集』巻三（日本古典学会編、ぺりかん社、一九七九年）所収。【鬼神集説之講】黙齋の講義録として、『鬼神集説講義』が遺されている。同書は寛政五（一七九三）年序。また、大木忠篤編「孤松先生

講義書目大成」(梅澤芳男編著『稻葉黙齋先生と南総の道学』。ぺりかん社、一九八五年、二八頁)によれば、『癸丑春講義』に「鬼神集説二席」とある。上記『鬼神集説講義』と同じものであるか否かは未詳。『増訂佐藤直方全集』解題(三卷所収)は、『鬼神集説』を講じたものとして、稻葉黙齋と鈴木養齋の講義を挙げている。【獨得聞鬼神集説之講】潜齋が黙齋のもとを初めて訪れたのは天明六(一七八六)年正月、この頃は入門三年目。【鬼神集説考證】『鬼神集説考証並遺言』。写本、国会図書館(二冊)、無窮会神習文庫(一冊)。

▼四十二

五年癸丑之秋。館林侯「松平久五郎後稱_二右近将監_一」老臣「尾關隼人松倉主水」欲_レ使_三幼君學_二正學_一。大臣共謀_下延_二先生_一爲_中師範_上。乃命_二於儒臣鈴木恭節_一東行。先容_二其意_一。先生意固在_レ不_レ出。而慮_レ煩_二再請_一。徐荅曰。某明春欲_レ展_二省父母之墓_一。至之日宜_三謀_レ事荅_二懇命_一。幸勿_二復問_一焉。

五年癸丑の秋、館林侯「松平久五郎、後に右近将監と称す。」の老臣「尾關隼人、松倉主水」、幼君をして正学を学ばしめんと欲し、大臣と共に先生を延きて師範と爲んと謀り、乃ち、儒臣鈴木恭節に命じて東行せしめ、先づ其の意を容る。先生の意、固より出でざるに在り。而るに再請を煩はすを慮り、徐ろに答へて曰く、「某、明春父母の墓を展省せんと欲す。至るの日、宜しく事を謀り、懇命に答ふべし。幸はくは復問ふこと勿れ」と。

○語注

【五年】寛政五（一七九三）年。黙齋六十二歳。【館林侯】館林藩主・松平斉厚。【尾関隼人】尾関當官。黙齋門人。正綏、隼人と称す。館林藩上大夫（『崎門學脈系譜』四六八頁）。息子の當補も隼人を名乗っていたが、寛政五年当時は若年なので、この隼人は當官を指すものと考えられる。【松倉主水】松倉正挙。館林藩上大夫。谷中・臨江寺に現存する松倉家墓所の墓碑銘からは、松倉正都、正挙、正達の三代が確認できるが、正都は寛政四（一七九二）年に没している。このため、寛政五（一七九三）年に「館林侯の老臣」であつたのは、正都の息子、松倉正挙（正達の父）と考えられる。当時、正挙は五十歳。ちなみに、『崎門學脈系譜』（四六九頁）には「松倉ト山」の名が見え、「名は正達、主水と称す、館林藩上大夫、安永六年七月二十一日歿、年五十七」とある。同墓碑銘によれば、「正達」の名は、文化元（一八〇四）年に正挙の墓を建てた正達（正挙の長男）と同名であるが、この年に父親の墓を建てているとすれば、『崎門學脈系譜』の没年と合わない。また「ト山」の名は、文政七（一八二四）年の館林大火の記事に見え（松平武聡「跋尾山氣詩史」未見。『館林叢書』卷二十一、館林市教育委員会・館林市立図書館、一九九三年、一一九～一二〇頁）、これも『崎門學脈系譜』の没年と食い違う。【鈴木恭節】迂斎門人であつた鶴澤近義の第三子。黙齋門人。館林藩儒臣。宝暦十三（一七六三）年—天保元（一八三〇）年（『崎門學脈系譜』四六九頁）。「通称は長蔵、上総の人。稻葉黙齋に師事し、後藩學教授となり侍讀を兼ね。天保元年十一月十日館林に歿す、年六十九。加法師法輪寺に葬る。（其墓誌に據る）」（前掲『館林叢書』卷二十一、一二六頁。）【容其意】意向を伝える。【父母之墓】黙齋の父母（迂斎、武井婦人）の墓は竜光寺（東京都文京区本駒込二丁目）に現存。【展省】墓参。

▼四十三

十一月聘使川鰭源藏「侯之傳」副使恭節。訪^ニ先生之廬^一。謹陳^ニ書及侯言^一曰。孤及一二老臣。久仰^ニ先生正學德風^一。冀得^ニ三一西遊辱^一教導^一。則敝藩之幸。何任^ニ積望之權^一。敢納^ニ方金若干光絹三匹茶酒及八丈帛外套^一。〔但外套母君所^レ遣也〕聊以致^ニ微諒^一。昭察惟祈。先生事差^ニ乎往日之慮^一。而大怪。雖^レ然侯賜非^レ可^ニ固辭^一。乃進拜納。復^レ席曰。信今老劣衰弱。假令雖^レ辱^ニ顧問^一。何益之有。希垂^ニ高恕^一。明春待^レ暖。再旬遊^ニ都下^一。須^ニ敢望^一高邸^一拜^ニ謝侯賜^一焉。

十一月、聘使川鰭源藏「侯之傳^ふ」、副使恭節、先生の廬を訪ひ、謹みて書及び侯の言を陳^のべて曰く、「孤及び一二の老臣、久しく先生の正學德風^{せいがく}を仰ぐ。冀^{こひねが}はくは、一たび西遊して教導^{かたづな}を辱^をくすることを得ば、則ち敝藩の幸ひ、何ぞ積望^{よめ}の權^たびに任^たへんや。敢へて方金若干、光絹三匹、茶酒及び八丈帛の外套「但し、外套は母君^{おく}の遺^{おく}る所なり」を納め、聊か以て微諒^{いりやう}を致す。昭察を惟^これ祈^をのみ」と。先生、事、往日の慮に差^{たが}へば、大いに怪しむ。然りと雖も、侯の賜は固辞^こすべきに非ず。乃ち進みて拝納し、席に復して曰く、「信、今老劣衰弱せり。仮令顧問^{かんもん}を辱^をくすと雖も、何の益か之れ有らん。希くは、高恕^{かうじゆ}を垂れ、明春暖を待ちて再旬都下に遊ばん。須く敢へて高邸を望み、侯の賜を拝謝すべし」と。

○語注

【川鰭源藏】河鰭源藏。默齋門人。名は景命、源太郎、後に七郎左衛門と称した。館林藩家老職（『崎門學脈系譜』四六九頁）。「河鰭」の読みは「かわばた」か。『東金市史』（柴田武雄校注）は「かわひれ」、東金市郷土研究愛好会発行『稲葉默齋上総道學關係諸學者略伝（未完）』（柴田武雄、一九九八年）は「かわば」。【傳】養育係。【恭節】鈴木恭節。【孤】王侯の自称。【方金】徳川時代の貨幣。方形の金貨。『再

旬紀行』は、このときの報酬を「御肴代五百疋」とする。【光絹】『再旬紀行』は「羽二重」。【八丈帛】八丈絹。古くは、一匹の長さが八丈（約二四メートル）の絹織物を指した。各地で産したが、その後規格寸法が廢れて「八丈」の名称のみが残り、絹織物を指すようになった。【微諒】諒は誠。ささやかなまごころ。【再旬】二十日間。

▼四十四

明年甲寅春三月十一日。啓「行江都」。門人大木丹二。及秀直從焉。寓「八町堀客舍」。【門人小川氏官舎】乃詣「侯邸」。謹謝「往年重聘」。爲「侯進講小學之書」。侯殊作「書」。賜「俸三十口」。老臣等請曰。後年希在「視春秋時令西行之佳」。以「意命駕」。辱「永承教誨」。則千萬幸甚。先生謹謝「恩遇」。固辭「俸而不受」。其「講暇省「祖先父師之墓」。語「秀直等」曰。先師之碑。猶使「人畏」矣。徧問「親戚」。出入必有「限」。未「必失」半刻」。▽頭注 先生遊中之事。詳「秀直之再旬紀行」。

明年甲寅の春三月十一日、江都に啓行し、門人大木丹二及び秀直これに従ふ。八町堀の客舎に寓し【門人小川氏官舎】、乃ち公邸に詣る。謹みて往年の重聘を謝し、侯の為に『小学』の書を進講す。侯、殊に書を作り、俸三十口を賜ふ。老臣等請ひて曰く、「後年、希くは春秋の時令、西行の佳を在視し、意を以て駕を命ぜん。永く教誨を承くるを辱くすれば、則ち千万幸甚なり」と。先生、謹みて恩遇を謝し、固く俸を辞して受けず。其の講暇に、祖先・父師の墓を省す。秀直等に語りて曰く、「先師の碑は、猶ほ人をして畏れしむ」と。徧く親戚を問ふも、出入必ず限り有り、未だ必ずしも半刻を失せず。▽頭注 先生遊中の事、秀直の『再旬紀行』に詳らかなり。

○語注

【明年】寛政六（一七九四）年。默齋六十三歳。【啓行】出發する。【大木丹二】默齋門人。諱は忠篤。上総山武郡北幸谷村（現・千葉県東金市北幸谷）の人（『崎門學脈系譜』四六八頁）。『再旬紀行』に「附録」として大木丹二録「從江記」が輯録されている。【八丁堀】八丁堀。現在の中央区新富一丁目、八丁堀四丁目境から東へ隅田川に至る運河とその界限（『角川日本地名大辞典一三・東京都』角川地名大辞典編纂委員会・竹内理三編、角川書店、一九七八年）。『再旬紀行』によれば、默齋が逗留したのは「北八丁堀矢場稲荷前小川氏ノ僑居」。【小川氏】小川省義か。小川省義は迂齋門人。上総山武郡の人。後に默齋に学ぶ（『崎門學脈系譜』四六六頁）。官舎とあるので別人とも考えられるが、しかし小川省義は館林侯とかかわりのある人物のようである。【公邸】館林侯邸。【侯殊作書賜俸三十口】『再旬紀行』に「三十人扶持進入致シ候トテ書付ヲ賜ハル」とある。「作書」とはこの書付のことか。【在視春秋時令西行之佳】時令は時節、時候。春秋の時節に、上総から江戸へ出る（西行する）佳い日を見計らう（在視する）、といった意味。【以意命駕】默齋の都合（意）に合わせて迎え（駕）を命ず。【教誨】教えさとす。【省祖先父師之墓】省墓は墓参の意。『再旬紀行』に、「十六日晴五ツ時ヨリ先生父母ト曾祖ノ墓ヲ展省シ溝口浩軒様奉問シ親類方ヲ訪ヒ七ツ時帰レリ」とある。【先師之碑猶使人畏矣】ここでの先師は野田剛齋か。『再旬紀行』に小石川・善仁寺（現・文京区小石川四丁目）の野田剛齋の墓へ詣でる記事があり、「石原先生（野田剛齋・引用者注）ハ石ニナツテモコワイ」、「極楽水ノ寺へ行タガ石原先生鬼神ニナツテモムツカシイ」という默齋の言葉載せている。【徧】「遍」の本字。【再旬紀行】「大綱白里町・鵜澤志津子家文書」（『大綱白里町史料目録2 増穂地区編』大綱白里町、一九八五年）、「蕪木文庫本」（千葉県立文書館蔵）がある。梅澤芳男「稲葉

黙齋先生」（梅澤芳男編著『稻葉黙齋先生と南総の道学』ぺりかん社、一九八五年、二五～二六頁）によれば、原本は梅澤氏が所蔵していたが、戦災で焼失したという。

▼四十五

遊中又爲「桑名侯」「松平下總守」所延。學談數刻而退。爲「新發田侯」「溝口出雲守」「丸龜公子」「京極菰」進講焉。「應」仲遷之請「爲」公子「講」好學論。新發田侯之筵。未詳講「何書」。都下門人故舊來訪日、多。先生果再旬告歸。侯酒禮盛饌尤至。賜「白銀十枚」。先「是」早春爲「門人」講「考盤之詩」。益「見」不出之意。▽頭注 好學論有「秀直之筵上筆記」。

遊中、又、桑名侯「松平下總守」に延^ひかれ、學談數刻にして退き、新發田侯「溝口出雲守」、丸龜公子「京極菰」の為に進講す。「仲遷の請ひに応じ、公子の為に『好學論』を講ず。新發田侯の筵、何書を講ぜしか詳らかならず。」都下の門人・故旧の來訪、日々多し。先生果たして再旬にして帰るを告ぐ。侯、酒禮盛饌尤も至り、白銀十枚を賜ふ。是れより先、早春門人の為に『考槃（原文・盤）』の詩を講じ、益々不出の意を見^{あら}はす。▽頭注 『好學論』は、秀直の筵上筆記有り。

○語注

【桑名侯】桑名藩主・松平忠和（宝曆九「一七五九」年—享和二「一八〇二」年）。【延】招く。【新發田侯】新發田藩主・溝口直侯（安永七「一七七八」年—享和二「一八〇二」年）。溝口直養（浩軒）の弟。黙齋は、江戸在住のころ溝口直養の俸を受けていたが、上総へ移住して俸給を辞したことによって、直養に疎

んぜられた。しかし、このときの江戸行きで次代藩主の直侯に招かれたおり、直養に謁見を許されている。（『黙齋先生傳』（一）「一六七〇―一六八頁」）【丸龜公子】丸龜藩主・京極高中（宝暦四「一七五四」年―文化八「一八一二年」）の子（公子は諸侯の子の意）。高中は黙齋の訪れたのち、同寛政六年八月に儒臣渡辺半八に命じて、場内にあつた学堂正明館を大手前に移して孔子廟を設け、春秋二季の積奠を行なうなど学問を奨励した（『藩史大事典 第六卷 中国・四国編』雄山閣、一九九〇年）。「京極藩」は不詳。高中の次代藩主・高朗は寛政十（一七九八）年生まれで、このときは生まれていない。【仲遷】河本仲遷。迂斎門人。名は善、三左衛門と称した。丸龜藩士。（『崎門學脈系譜』四六四頁）【好學論】『再旬紀行』に附録として『好學論』が採録されている。内題下に「甲寅三月十八日講于稽古館 花澤文録」（花澤文は林潜斎）とある。【筵】座席。【侯酒禮盛饌尤至】『再旬紀行』に、「此日館林公河鱒氏使者ニテ燕服二領銀十枚ヲ贈リ餞別トス及ヒ酒一樽取肴二箱味噌漬鯛一桶ナリ」とある。『再旬紀行』で、黙齋が館林侯からの銀子十枚を両替させたところ、金七両と錢四文になったとされている。【考盤】考槃の誤り。『考槃』は『詩経』国風の編名。

▼四十六

七年乙卯春二月。本里檀寺主僧某。挾「檀師」來。率爾入「戸」就座。厲「色」以直難「先生」曰。自「下」叟之教「授」此地「上」。大害「衆生之心」。以至「下」於不「尊」祈禱「輕」視檀師「上」。適「教」之非故也。爾後吾親入「講席」。悉檢察矣。先生徐答「レ」之曰。予未「下」嘗教「中」門人輕「檀師」廢「中」祈禱「上」。但「遊」吾門「者」一年半歲間。槩自覺「無」地獄天堂「」。蓋是以然歟。吾固不「能」禦「其自悟者」也。僧不「能」復言「」。亦不「再」來「」。先生即告「里長」而離「絕其檀縁」。別卜「爽塏地」。請「成東一禪寺」。「元倡寺」而爲「檀師」。先生自「是辭」門人集會及列國藩士請「遊學」。

者^上。遂廢^二教學^一。自晦^二於茶酒之間^一。其言曰。吾非^下誘^二講學^一之人^上也。占曰。有^レ孚^レ于飲^レ酒^レ无^レ咎^レ。濡^二其首^一。有^レ孚^レ。失^レ是。其庶^二幾無^二大過^一乎。〔以上見^下卻^二生徒^一説^上秀直抄^二出其梗槩^一已〕

七年乙卯の春二月、本里の檀寺、主僧某、檀師を挾^さみて来り、率爾として戸に入り座に就く。色を厲^{はげ}して以て直ちに先生を難じて曰く、「叟の此の地に教授せしより、大いに衆生の心を害し、以て祈禱を尊ばず、檀師を輕視するに至れるは、適々^{たまたま}教への非なるが故なり。爾後、吾が親^{しん}を講席に入れ、悉く檢察せん」と。先生、徐ろに之れに答へて曰く、「予、未だ嘗て門人に、檀師を輕んじ祈禱を廢せよと教へず。但々^{ただただ}、吾が門に遊ぶ者、一年半歳の間、概ね自ら地獄・天堂無きを覺る。蓋し、是を以て然るか。吾、固より其の自ら悟ることを禦^{ふせ}ぐ能はざるなり」と。僧、復言ふ能はず、亦再び来らず。先生、即ち里長に告げて其の檀縁を離絶し、別に爽塏^がの地を卜し、成東の一禪寺「元倡寺」に請ふて檀師とす。先生、是れより門人の集会及び列国藩士の遊学を請ふ者を辞し、遂に教学を廢し、自ら茶酒の間に晦す。其の言に曰く、「吾は講学を誘ふの人に非ざるなり。占に曰く、「飲酒に孚^{まじ}有り。咎无^{とがな}（原文・无）し。其の首を濡らすときは、孚有れども是^{よろ}しきを失はん」と。其れ大過無きに庶幾^{ちか}からん」と。〔以上、『生徒を卻くの説』に見る。秀直、其の梗概を抄出するのみ。〕

○語注

【七年】寛政七（一七九五）年。黙齋六十四歳。【檀寺】清名幸谷（大綱白里町）にある日蓮宗寺院、東光寺か。東光寺は鵜澤家菩提寺であり、黙齋は一時期同寺に自らの墓所を定めようとしていた。（『東金市史』一〇〇八〜一〇一頁）【厲色】血相を変えろ。【適々】まさに。【天堂】極樂世界。【爽塏】高台の土地。

【元倡寺】千葉県山武市成東の曹洞宗の寺。默斎の墓所が現存する。【占】『易経』のこと。【有孚于飲酒无咎濡其首有孚失是】『易経』「未濟・上九」の言葉。誠の心を抱いて悠然として酒を飲む（「有孚酒于飲酒」、このようであれば咎はない（「无咎」）。しかし酒を飲むことが度を過ぎて、酒の中にどっぷりと頭までつかうようになっては（「濡其首」、たとえ内に至誠真実の心があっても正道（「是」）を失うであろう（「有孚失是」）（鈴木由次郎『全釈漢文大系十・易経下』全釈漢文大系刊行会編、集英社、一九七四年、三〇〇頁）。なお「有孚失是」について、朱子は『周易本義』の同項（「下経第二」）において、「過於自信而失其義」という解釈をしている（劉修橋『周易本義』新文豊出版、中華民国、一九七九年、二二一頁）。「是れを失はん」とする解釈もあるが、ここでは朱子の説に従った。【卻生徒説】未見。

▼四十七

十一年^マ戊午之春應^ニ館林侯之請^一。而再遊^ニ館江都^一。寓^ニ弓坊之客舎^一。進講十餘日。侯家寵遇恩賜益^ニ篤^一。故舊門人。日來問學。虛往實歸之益未^レ鮮。先生時年六十七。從^レ是後養^レ老不^ニ復西^一矣。

十（原文・十一）年戊午の春、館林侯の請ひに応じて、再び江都に遊館す。弓坊の客舎に寓し、進講すること十余日なり。侯家の寵遇恩賜、益々篤し。故旧・門人、日に来たりて問学し、虚往実帰の益、未だ鮮^{すくな}からず。先生、時に年六十七、是れより後、老を養ひて、復^{また}西せず。

○語注

【十一年戊午】十年戊午の誤り。「先生時年六十七」とあるので、寛政十（一七九八）年。『日本道學淵源

録・續録』「傳」が「十一年己未之春」とするのも誤り。【再遊館江都】寛政年間における江戸での進講は以下のとおり。寛政六（一七九四）年三月、館林、桑名、新発田、丸亀侯に進講。寛政七（一七九五）年、館林侯に進講。寛政九（一七九七）年、春、館林、桑名、丸亀侯に進講。溝口侯に面会。四月十三日、新発田藩で『小学』序を講義、「浩軒侯ヨリ稻葉黙齋家断絶ニ及候ニ付、墓所永久退転無之様被思召、駒込龍光寺へ祠堂金トシテ金十兩御寄附アリ」（三扶誠五郎編『新発田年譜』郷土研究社、一九三三年）。寛政十（一七九八）年、館林侯に進講。（「黙齋先生年譜」（梅澤芳男編著『稻葉黙齋先生と南総の道学』ぺりかん社、一九八五年））【館林侯】松平斉厚。【弓坊】弓町。現・中央区銀座二丁目三〇五番。坊は都城制における一区画の称。【虚往實歸】「虚而往実而帰」。心を虚しくして行けば物の理はおのずから得られ、腹を満たして帰ることができる。あるいは、未だ学ばずして往き、徳を得て帰ること。「虚而往、実而帰、固有不言之教、無形而心成者邪。」（『莊子』徳充符）

▼四十八

侯家宰執諸大夫之賢。專尊_レ道學。善務_二政務_一。信_三先生長_二於事_一。數_レ寄_レ書以謀_二國事_一。侯藩新建_二學校_一。先生命_レ之曰_二道學館_一。「當時先生語_二吾輩_一曰扁揭_二道學館三字_一後來伊荻文辭之徒或雖_二覲面目_一而豈得_二入而講_レ書哉_一。」又邸學名_二官偷舍_一。或邦治以_二歡農_一爲_レ主。更始設_二其官吏_一。是以治教超_二列國_一云。

侯家の宰執・諸大夫の賢なる、専ら道学を尊び、善く政務を務む。先生の事に長ずるを信じ、数々書を寄せ、以て国事を謀る。侯、藩に新たに学校を建つ。先生之れに命じて道学館と曰ふ。「当時先生、吾輩に語りて曰く、「扁に道学館の三字を掲ぐ。後來、伊荻文辞の徒、或いは覲面目と雖も、豈に入りて書を講ずる

を得んや」と。「又、邸学を官諭（原文・諭）舎と名づく。或いは、邦治は勸（原文・歛）農を以て主とし、更に始めて其の官吏を設く。是を以て治教、列国を超ゆと云々。

○語注

【侯家】館林侯家。【扉】門戸にかける札。【後來】将来。【伊荻文辭之徒】伊は伊藤仁斎、荻は荻生徂徠、文辭之徒は古文辭学の徒。【靦面目】あつかましい顔つき（「余雖靦然而人面一哉、吾猶禽獸」（『越語』））。靦面目で、はじるさまを意味する場合もある（「有靦面目」（『詩経』何人斯））が、ここでは文脈上、前者を採った。【侯藩新建學校】寛政七（一七九五）年七月に藩主・松平斉厚によつて藩校・道学館が設立された。それゆえ、黙齋のこの江戸行きの際の逸話ではない。同校は、天保七（一八三六）年十月の松平斉厚の石見国浜田への移封に伴い、同地へ移った（天保八「一八三七」年三月開校）。（『藩史大事典 第二卷 関東編』雄山閣、一九八九年）【官諭舎】官諭舎の誤り。館林城内の道学館と同時に（寛政七「一七九五」年）に江戸藩邸内に建てられた（『藩史大事典 第二卷 関東編』雄山閣、一九八九年）。「官諭」は『易』「初九」の「官有渝貞吉出門交有功」による。位の低い役人、これから世に出ようとする若者を相手に、今後世に出て位の上がることがあつても正しい道を失うことがないように、の意。（鈴木由次郎『全釈漢文大系・九 易经上』全釈漢文大系刊行会編、集英社、一九七四年、三〇九頁、他）【治教】政治と教化。

▼四十九

先生之在「清谷」也。精義操存日熟。其業益進。其德益著。而尚未以爲足終日讀書作文不輟。猶

「書生」然也。講學既優。警戒日密。固衛「斯文」。不「背」朱夫子之訓「矣」。其誠之至。能教「子弟」。篤諭「里民」。殊懇示「三日斂」。〔葬之義〕是以郷村多惡「火葬」。棺斂效「禮」。始用「樞青」者。先生之化導也。

先生の清谷に在るや、精義・操存、日々に熟す。其の業益々進み、其の徳益々著る。而かも、尚ほ未だ以て足れりと為さず、終日書を読み文を作るを輟めざること、猶ほ書生のごとく然り。講學既に優れ、警戒日に密にして、固より斯文を衛り、一も朱夫子の訓に背かず。其の誠の至れる、能く子弟を教へ、篤く里民を諭す。殊に懇ろに三日の斂〔葬の義〕を示し、是を以て、郷村多く火葬を惡み、棺斂、礼を效し、始めて瀝（原文・樞）青を用ふるは先生の化導なり。

○語注

【清谷】清名幸谷。現・千葉県山武郡大網白里町清名幸谷。【精義】『易経』に「精義入神、以致用也（義を精しくして神に入るは、以て用を致すなり）」（繫辞下伝）とあるによる。物事の道理を研究して、進んで人の容易にうかがい知ることのできない境地に至ること。（鈴木由次郎『全釈漢文大系十・易経・下』全釈漢文大系刊行会、集英社、一九七四年、三九〇～三九二頁、高島元洋『山崎闇斎―日本朱子学と垂加神道』ぺりかん社、一九九二年、四〇〇～四〇二頁）【操存】「操則存、舍則亡。（操れば則ち存し、舍つれば則ち亡ふ）」（『孟子』告子章句上・牛山之木章）。この箇所について、朱子は「操れば則ち存し、舍つれば則ち亡ふ」とは、只是れ人能く此の心を持すれば、則ち心在り。若し之れを捨つれば、便ち失ひ了るが如し。」（『朱子語類』（卷五十九））とする。精義が窮理であることに対応させた、居敬の系列にある朱子学的概念。（高島元洋『山崎闇斎―日本朱子学と垂加神道』ぺりかん社、一九九二年、二三八～二四

四頁) 【警戒】居敬としての警戒。 【斯文】この学。 【朱夫子】朱子。 【三日斂】死亡してから三日を待つて行う葬儀のこと。 『家礼抄略』 「大斂」 (新発田藩上木、文久壬戌夏四月刊) に「司馬溫公曰禮曰三日^{ニシテ}而斂^{スル}者俟^ツ其復生^{ルヲ}一也三日^{ニシテ}而不^レ生則亦不^レ生矣故以三日^ヲ爲^ニ之禮^ト一也」とある。 【棺斂】死骸を棺に入れること。 【櫨青】瀝青の誤り。 松脂に油を加えて練り合わせた塗料。 これで棺の入った棹を塗つて密閉した。 (『家礼抄略』)

▼五十

其晚誘^一掖門徒^一。 定^一立課程^一。 教授之法。 嚴則^一程朱之讀法^一。 純守^一家學之定規^一。 循循有^一次序^一。 不^四敢許^三踰^レ等走^二捷徑^一也。 先^レ是南總之俗。 往往無^二父兄之教誨^一。 其或爲^レ學者。 亦詞章記聞之陋習耳。 然先生諄誨懇喻。 無^レ所^レ不^レ盡矣。 講會之課。 雖^レ病而不^二敢闕^一。 祁寒暑雨。 雖^レ酷而不^二敢廢^一。 長日永夜。 雖^レ飢而不^二敢倦^一。 其說^レ書也。 四筵解^レ頤。 懸河之辯。 賢愚峙^レ聽。 說^レ高而不^レ虛。 解^レ卑而不^レ淺。 古以^レ今徵。 今託^レ古避。 其考證援引。 多稱^二先達之活說^一。 爬疏剖析。 詳明^二經傳之旨訣^一。 滋味奧義。 愈^レ出愈^レ新。 著實親切。 精彩發見「精彩二字先生嘗所^レ示^二學者^一也」故聽徒自有^下得^二其彷彿^一者^上也。 是以不^レ屑^二老釋霸功刑名之術記誦操觚之習^一。 稍悟^二他術之可^レ廢道學之不^レ可^レ易^一。 以發^二向^レ道之志^一矣。 且權^一與南總之道學者。 先生之厚澤也。

其の晩、門徒を誘掖せんと課程を定立す。 教授の法、嚴に程朱の読法に則り、純ら家学の定規を守る。 循循として次序有り、敢へて等を踰え、捷徑に走るを許さず。 是れより先、南總の俗、往往にして父兄の教誨無し。 其の或いは学を為す者も亦、詞章記聞の陋習あるのみ。 然るに、先生、諄誨懇喻、尽くさざる所無し。

講会の課、病むと雖も敢へて闕かず。祁寒暑雨、酷しと雖も敢へて廢せず。長日永夜、飢うと雖も敢へて倦まず。其の書を説くや、四筵おとふち頤もとを解き、懸河の弁、賢愚聰を峙そまつ。高きを説きて虚しからず、卑しきを解きて浅からず、古は今を以て徵め、今は古に託して避く。其の考証援引、多く先達の活説を称あげ、爬梳はそ（原文・疏）剖析、詳らかに経伝の旨訣を明らかにす。滋味典義、愈々出でて愈々新たなり。著実親切にして、精彩はつげん発見す。「精彩の二字、先生嘗て学者に示す所なり。」故に、聴徒、自ら其の彷彿を得る者有り。是を以て、老釈・霸功・刑名の術、記誦操觚の習ひを屑しとせず、稍他術の廢すべく道学の易ふべからざるを悟り、以て道に向かふの志を発す。且南総の道学を権輿したるは、先生の厚沢なり。

○語注

【誘掖】導き助ける。【定規】規は規の異体字。【循循】整然。【次序】順序。【等】順序、段階。【捷徑】近道。必ずしも正道に従わない、ある物事に通達する手早い方法。【詞章】詩歌や文章。文辞の通称。【記聞】記憶することと聞くこと。【諄誨懇諭】諄誨も懇諭も、懇ろに諭す意。【祁寒】厳しい寒さ。【四筵】座席の四方、その場に座っているすべての人々。【解頤】感服して、あいた口がふさがらないこと。（『漢書』匡衡伝「匡説詩解人頤」）【懸河之辯】勢いよく流れる水のように、よどみのない弁舌。【峙聽】耳をそばだてて聴く。【爬梳】爬梳の誤り。整理する。【剖析】分析する。【經傳】經書とその解釈書。【精彩】「精彩」について、默齋に以下の言葉がある。「爲己之學トハ吾心身ヲヨクスルコトナリ。儒官ノ様ニナラント心掛ルニハ及バザルコトナリ學問藝業役目ニナリテハアシハ、不吟味ニテモ不調法ト咎メナキ身分ニテ吟味スルコト爲己ノ學ナリ役目ニテハ精彩ナシト心得ルヲ役目トスベシ。茶湯ニテモ茶道役ニテナキ人ノ好ムニ精彩アリコレニテ知ルベシ。」、「朱子愛「恰好字」。儒佛之辯亦在「斯中」。至有「思慮」。一步

陷^二作用是性之説^一也。如^二石勒^一者亦然。是惡人之有^二精彩^一者。推^レ之可^レ知。「また默齋の「精彩」について、三上是庵は以下のように述べている。「ツヤ、ツヤとは申す條、艶の字などの意とは没交渉なり。光澤の字の方がまだも近き方なり。さりながら平らつたく云はゞハゼル、ハエル、タギル、ハネルなどの辯。一ち叶ふべし……故先生（奥平棲遲庵）は精彩は實之著と仰せられたり。牡丹の花も、ウメの花も、つやが違ふと云は、眞實の花故いやと云はれぬ處なり。作り花精彩なし。醫者よりは、母の容體を述るに精彩があると思ふべし。醫者は他人のこと。母は可愛ひ實心が一杯なり。」（以上、池上幸二郎「稻葉默齋先生（三）」（三鹽熊太編『東洋文化』一四〇号、東洋文化学会、一九三六年））【發見】現れ出る。発現。【老釋】老莊思想と仏教。【霸功】霸者となった功績。霸は霸の俗字。「人君當黜霸功行王道」（『孟子集註』卷二）【刑名】刑は形に通ずる。名称とその形。名実の一致を重んずること。刑名字は、名と形との一致・不一致を見て賞罰すべきとする学説。戦国時代の申不害が唱え、韓非子が受け継いだ。【記誦】覚え誦んじること。記誦の学は、暗記して読むのみで理解、実践の伴わない学問態度。【操觚】文字を書くこと。觚は、中国古代、文字を書くための方形の木札。【權輿】はじまり。発端。

▼五十一

先生垂^二古稀^一罹^二不治之病^一。自知^レ不^二復起^一。而絶^二藥餌^一。門人惟秀稟曰。使^二松慶診^一則如何。先生奮然曰。彼若使^二我起^一。何使^二重次死^一。惟秀畏屈。嗚乎先生之^レ死。追^二悼重次^一之深。何亦至^二此^一。其後門人以^二先生愛^二丹^一。使^二彼進^二湯藥^一。爲^レ之少服。病間謂^レ人曰。吾門徒未^二嘗講^レ禮^一。吾死則必狼狽已。又曰。吾今日得^二其死^一。先生果病革。會^レ館林侯使者某〔門人鈴木恭節〕至。謹告^二侯命問^レ病納^レ幣^一。先生將^二已絶^一。而頭不^レ能^レ舉。口不^レ能^レ言。幸養女在^レ傍。稍^レ勉目示。使^二彼代受^二其賜^一。而先生没矣。實寬政己未

十一月朔也。享年六十八。蓋始振「起道學於東方」者。闇齋先生。而佐藤淺見三宅三先生繼「其傳」。集而全「備之」者先生也。門人主「事」。棺斂以「禮」。葬「于上總國成東元倡寺境内西南隅」。其家書文稿語錄諸講義數百卷。藏「門人之家」。▽頭注 幸按。中田重次。

先生、古稀に垂なんなんとして、不治の病に罹り、自ら復また起たざるを知りて、藥餌を絶つ。門人惟秀、稟まうして曰く、「松慶をして診せしむれば則ち如何」と。先生、奮然として曰く、「彼、若し我をして起たしむれば、何ぞ重次をして死せしめんや」と。惟秀、畏れ屈す。嗚乎、先生、死に之いたりて、重次を追悼するの深き、何ぞ亦また此に至るや。其の後、門人、先生の丹二を愛せるを以て、彼をして湯藥を進めしめ、之れが為に少しく服す。病間、人に謂ひて曰く、「吾が門徒、未だ嘗て礼を講ぜず。吾死すれば、則ち必ず狼狽せんのみ」と。又、曰く、「吾、今日其の死を得ん」と。先生、果たして病革あつたまる。会々館林侯の使者某「門人鈴木恭節」至り、謹みて、侯命により病を問ひ幣を納いれんことを告ぐ。先生、將に已に絶えんとして、頭挙ぐる能はず、口言ふ能はず。幸ひに養女傍らに在り。稍々勉めて目示し、彼をして代はりて其の賜を受けしめ、先生没す。実に寛政己未きび十一月朔なり。享年六十八。蓋し、始めて道学を東方に振起せしは闇齋先生にして、佐藤・淺見・三宅三先生其の伝を継ぎ、集めて之れを全備せしは先生なり。門人、事を主り、棺斂、礼を以てし、上総國成東元倡寺境内の西南隅に葬る。其の家書・文稿・語録・諸講義、數百卷、門人の家に蔵す。▽幸按ずるに、中田重次。

○語注

【古稀】七十歳。黙齋が没したのは六十八歳。【惟秀】篠原惟秀。黙齋門人。本姓北田。上総堀上村（現・

千葉県東金市堀上^{ほりあげ}）の人（『崎門學脈系譜』四六九頁）。著書に『黙齋先生行實』（成東町・真行寺氏藏書、自筆本）、『竹川録』（『清谷全話』所収）、『清谷話録』（『清谷全話』所収）。【松慶】上総田間村（現・千葉県東金市田間）の医師。（池上幸二郎「稻葉黙齋先生（二）」（『三鹽熊太編『東洋文化』一三九号、東洋文化学会、一九三六年））【重次】中田重次。黙齋門人。十二郎と称す。上総堀上村（現・千葉県東金市堀上）の人。寛政十（一七九八）年没。（『崎門學脈系譜』四六九頁）【丹二】大木丹二。【革】危篤になる。【館林侯】松平斉厚。【謹告侯命問病納幣】「謹告侯命問病納幣」が適当か。「謹みて侯命を告げ、病を問ふて幣を納る。」【養女】黙齋の兄・廓齋の娘。【寛政己未】寛政十一（一七九九）年。【棺斂】納棺を主とする葬礼のこと。

▼五十二

林秀直曰。先生臨^レ終之時。亡人亦在^二席上^一。蓋懼^三彼代受^二侯賜^一。而目^三示養女^一耳。又意。禮家或責^下其不^上避^二女子^一以爲^レ議焉。然先生無^下親戚家僕備^二將護^一者^上。唯養女供^二使令^一已。豈效^三犬馬獨斂^二野外^一哉。先生嘗爲^レ禮。非^下弄^二死蛇^一之手段^上者。已存^二家禮抄略^一。又何差^二終焉之禮^一哉。嗚乎先生究格克治。素養之熟。而克塞之活氣。激昂之精神。丁^二其臨^レ終之際^一最著矣。非^下體^二道學^一嚴^二心術^一者^上。誰能得^レ然乎。

▽頭注 幸按。亡人即默翁姪。名通故。號友齋。文化五年没。年五十三。古河藩亡命之士。

林秀直曰く、「先生、終はりに臨む時、亡人、亦席上^{また}に在り。蓋し、彼の代はりて侯の賜を受くるを懼れ、養女に目示するのみ。又、意ふに、礼家、或いは其の女子を避くることを責め、以て議と爲^せん。然るに、先生、親戚・家僕の將護に備ふる者無し。唯、養女のみ使令に供せしのみ。豈^{あに}犬馬の独り野外に斂^{たふ}るに效^なは

んや。先生、嘗て礼を為るは死蛇を弄ふの手段に非ざること、已に『家禮抄略』に存す。又何ぞ終焉の礼に差はんや。嗚乎、先生、究格・克治して素養の熟し、克塞の浩氣・激昂の精神、其の終はりに臨むの際に丁たりて最も著る。道学を体し、心術を嚴にする者に非ざれば、誰か能く然るを得んや」と。▽幸按ずるに、亡人は即ち黙翁の姪、名は通故、友齋と号す。文化五年没、年五十三。古河藩亡命の士なり。

○語注

【亡人】亡命者。ここでは黙齋の甥、稻葉通故のこと。【将護】助け守る。【使令】指図して使う。【弄死蛇】黙齋は、礼を実用に即して解釈して使うことを重んじたが、そのことを「生きた蛇をつかう」と喻えた。「朱子ガ「コナタ衆ノ礼ヲ説ハ、死タ蛇ヲ弄フヤフジヤ。コレハ活タ蛇ヲツコフ」ト云ハレタソ。礼ハ今ニ行ル、ヤフニ、又心ニノルヤフニヨムテナクテハナラヌコトソ。」（『黙齋先生家禮抄略』（無窮会平沼文庫蔵）句読点引用者。なお、同書で「弄」を「ツカフ」と訓んでいるので従った。）【究格】究理格物。【克治】欲望に打ち勝つ。【克塞】浩然の氣が宇宙を塞ぐ。【浩氣】浩然の氣。【通故】稻葉通故。『先君子行實』の記述から、廓齋（黙齋の兄）の長男と考えられる。没年齢から換算して、宝暦六（一七五六）年に生まれ、文化五（一八〇八）年没、黙齋の死の年、通故は四十四歳。【古河藩】下総国。通故が仕えた時期は明らかではないが、土井利里（宝暦十二「一七六二」年—安永六「一七七七」年在位）、利見（安永六「一七七七」年在位）、土井利厚（安永六「一七七七」年—文政五「一八二三」年在位）のいずれかの藩主であろう。

◎ 付録

稻葉默齋先生傳附録

後學池上幸二郎編

林潜齋事略

岡直養撰

▼

林潜齋。名秀直。稱「文二郎」。上總堀上村人。「今千葉縣山武郡東金町堀上」父名秀尹。母花澤氏。潜齋其第二子。爲「人短小清癯。大額而有「痘痕」。自「幼好「讀」書。農隙從「鄉師」受「學。出「入」百家」。博雜無「條。

▽頭注 幸謂。潜齋年二十六冒同州豐海村細屋敷花澤氏而。爲其嗣。默翁呼以細屋敷文二織邸花生。散見于孤松全稿及清谷全話。

林潜齋、名は秀直、文二郎と称す。上総堀上村の人。「今の千葉県山武郡東金町堀上なり。」父の名は秀尹、母は花沢氏、潜齋は其の第二子なり。人と爲り短小清癯、大額にして痘痕有り。幼きより書を読むを好み、農隙に郷師きやうしに従ひ学を受け、百家に出入りして、博雑条無し。

▽頭注 幸謂ふ。潜齋年二十六にして、同州豊海村細屋敷・花沢氏を冒をかし、其の嗣となる。默翁、呼ぶに細屋敷・文二・織邸・花生を以てすること、『孤松全稿』及び『清谷全話』に散見す。

○ 語注

【上總堀上村】現・千葉県東金市堀上。【清癯】清瘦。瘦せてすらりとしている。【郷師】郷校の師か。【豊海村細屋敷】現・千葉県山武郡九十九里町細屋敷。【冒】他人の姓を名乗る。【織邸】細屋敷の雅称。（『東金市史』下巻一一九頁。）【孤松全稿】大久保紀子「『孤松全稿』解題」参照。【清谷全話】全一五〇巻。明治二十余年、田原担庵、田中蛇湖編。黙齋の講義録を編集したもの。収録された講義録の名は、梅澤芳男編著『稻葉黙齋先生と南総の道学』（ぺりかん社、一九八五年、四一頁）に掲げられているが、完本は存在しないのではないか。

▼二

年三十八。入_二稻葉黙齋門_一。聞_二聖學之要_一。大有_レ所_二啓發_一。自_レ是一往不_レ返。信_二程朱_一純如也。其始謁仰_二德容之盛_一。歎曰。不_レ圖今世有_二如_レ此之師_一。頗悔_二執_レ贊之遲_一。爾來侍_二講筵_一陪_二燕居_一。無_二日不_レ親炙_一。謂若不_レ遭_二先生_一。殆虚_二過_一一生_一矣。憤排激發。堅苦困勉。在_レ門者十有一年。凡四書小近。程朱相傳之書。無_レ不_レ聽_レ講焉。詩書諸經。與_二友儕_一討論。而折_二中於函丈_一。以爲_二薰陶之漸_一。從學之久。如_二有_レ所_レ得者_一焉。

年三十八、稻葉黙齋の門に入り、聖学の要を聞き、大いに啓発する所有り。是れより一たび往きて返らず、程朱を信ずること純如たり。其の始めて謁するや、徳容の盛んなるを仰ぎ、歎じて曰く、「図らざりき、今の世、此くの如きの師有らんとは」と。頗る贊を執るの遅きを悔ゆ。爾来、講筵に侍り、燕居に陪_レひ、日として親炙せざること無し。謂_レへらく、「若し先生に遭はざれば、殆ど一生を虚過せしならん」と。憤排激発、堅苦困勉、門に在ること十有一年、凡そ四書・小・近、程朱相伝の書、講を聴かざるは無し。詩書諸經、友

儕^{さい}と討論し、函丈に折中し、以て薰陶の漸を為す。従学の久しき、得る所有者者の如し。

○語注

【執贄】進物をおさめて、師に入門すること。贄は、君主や師にはじめて面会するときに贈るもの。【燕居】休息して、くつろいでいること。【憤悱】憤は、心に理解しようとしてもできずもだえ苦しむこと、悱は、口で言おうとしても言えずもだえ苦しむこと。「不憤不啓不悱不発」（『論語』述而）【困勉】困知勉行。苦心して物事の道理を知り、無理なほど努め励んで物事を行う。「困知勉行者勇也」（『中庸』）【函丈】師と弟子との間に一丈の余地を残しておくこと。【折中】折衷。種々の意見・学説の中間をとること。

▼三

寛政中。以^二黙齋知友薦^一。仕^二丸龜藩主京極氏^一。爲^二儒員^一者九年。後稱^レ疾致仕。歸^二舊里^一授徒以老焉。

▽頭注 幸謂。知友即河本仲遷也。

寛政中、黙齋の知友の薦めを以て、丸龜藩主京極氏に仕へ、儒員と為ること九年、後、疾と称して致仕す。旧里に帰り、徒に授けて以て老ゆ。

▽頭注 幸謂ふ、知友は即ち河本仲遷なり。

○語注

【仕丸龜藩主京極氏】潜齋は讃岐の丸龜藩・京極高中（宝暦四「一七五四」年—文化八「一八一」年）に

仕えた。高中の在位期間は宝暦十三（一七六三）年—文化八（一八一）年。潜斎が出仕した年について、

『東金市史』は、寛政六（一七九四）年五月以降、翌七（一七九五）年三月の間ではないかと推定している。

【爲儒員者九年】墓碑銘（『東金市史』下巻、一二六頁）には「数年」とある。

▼四

先_レ是冒_二花澤氏_一。欲_レ復_二本姓_一。俗累未_レ果。至_レ是遂_二其初志_一。

是れより先、花沢氏を冒す。本姓に復せんと欲すけれども俗累のため未だ果たさず。是に至りて其の初志を遂ぐ。

○語注

【遂其初志】晩年、林姓に復し、潜斎と号した。

▼五

潜斎與_二手塚坦齋_一契合。以_二其价_一見_二幸田子善_一。退謂。風采粹和。怡顔洒落。覺_レ爲_二有道之人_一耳。又嘗訪_二服部栗齋・岡田寒泉_一叩_二其說_一。不_二甚服_一焉。曰有_下不_レ稱_二吾黨之旨訣_一者_上。其訪_二尾藤二洲_一。則云談及_二四書集註_一。彼言取_二正於佐藤氏便講_一。恐不_レ差_二本旨_一。其所_レ見蓋有_下異_二於他儒_一者。

潜斎、手塚坦齋と契合し、其の价を以て幸田子善に見ゆ。退きて謂ふ、「風采粹和、怡顔洒落、有道の人

たるを覚ゆるのみ」と。又、嘗て服部栗齋・岡田寒泉を訪ひ、其の説を叩くも、甚だしくは服せず。曰く、「吾が党の旨訣に称はざるもの有り」と。其の尾藤二洲を訪ふや、則ち云ふ、「談、『四書集註』に及ぶとき、彼の言、正を佐藤氏の『便講』に取り、恐らくは本旨に差はざらん」と。其の見る所、蓋し他儒に異なるもの有り。

○語注

【手塚坦齋】日原以道。【契合】意気投合する。【怡顔】顔を怡^{よろ}ばす。にこにこする。【洒落】心や態度がさっぱりしていてわだかまりがない。宋学では、「洒落」は周濂溪の氣象を形容するものとして知られる。朱子の師・李延平は、周濂溪の「洒落」について「有道者の氣象を形容して絶だ佳し。胸中洒落なれば、即ち作為、尽く洒落なり」（『延平答問』）としている。（高島元洋『山崎闇齋—日本朱子学と垂加神道』ぺりかん社、一九九二年、三二九頁、参照。）【有道】道德を身に備えていること。「就有道而正也」（『論語』学而）【服部栗齋】元文元（一七三六）年—寛政十二（一八〇〇）年。摂津の人。はじめ大坂で五井蘭州に学び、中井竹山・履軒兄弟と親しんだ。また、のちに久米訂齋、石王塞軒、稲葉迂齋、村士玉水らとも交わった。はじめ上総・飯野藩に仕えるが、安永三（一七七四）年、上野・伊勢崎藩（酒井氏）の儒員となった。その後、安永五（一七七六）年に村士玉水が没したとき、玉水所有の講堂、図書などが栗齋に寄付され、栗齋は玉水の弟子を引き継いで教えた。寛政の初め、幕府から麹町善国寺谷に宅地を与えられ、以後ここに学校（麹溪書院または麹町学問所）を建てて教え、大いに賑わった。程朱の学に通曉し、山崎闇齋の書物に精通することをもってみずからの学務としたが、崎門の学者は道を求めることに性急で文辞を十分理解しないとして、みずからはまず文義によって義理を定めるという立場をとった。（朝倉治彦監修『江戸文人

辞典』東京堂出版、一九九六年、参照。）【岡田寒泉】明和四（一七六七）年—文化十四（一八一七）年。江戸の人。父・善富は西丸書院番を務めた旗本。兵学を村士淡斎に学び、その子・玉水に闇斎学を学んだ。寛政五（一七九三）年、幕府に儒官として採用され、昌平黌において寛政異学の禁に伴う新しい教育に携わった。寛政六（一七九四）年、常陸国の代官職に転じた。村民に慕われ、祠や碑が多く建てられた。（朝倉治彦監修『江戸文人辞典』東京堂出版、一九九六年、参照。）【尾藤二洲】延享二（一七四五）年—文化十（一八一三）年。寛政三博士（柴野栗山、古賀精里、尾藤二洲）のひとり。伊予の人。はじめ大阪で復古学を片山北海に学ぶが、同学の頼春水との交わりや中井竹山・履軒兄弟の影響で朱子学に転じた。寛政三（一七九一）年、幕府に召されて昌平黌の儒官となった。二洲の妻は頼山陽の叔母。（朝倉治彦監修『江戸文人辞典』東京堂出版、一九九六年、参照。）【便講】書名。佐藤直方著『四書便講』（『佐藤直方全集』三卷、ぺりかん社、一九七九年。）

▼六

潜斎長_レ於筆記_一。黙齋講話。其所_レ記居_レ多。黙齋書_二其曾點章講義後_一曰。吾子記録。簡暢爽快。頗慰_二人意_一。亦知解_レ之一事也。昔有_二關宿藩士賀古利器者_一。記_二先君子話_一。殆似_二吾子筆力_一。讀畢爲_レ之愴然。其爲_二黙齋所_レ許如_レ此。嘗曰。傳神寫照之默契。風韻氣象之精彩。非_二先生體_レ之。則其德容何從而得。淵源之正。學脈之統非_二先生任_レ之。則其門風之嚴。何從而來。秀直雖_二不敏_一。竊有_レ所_レ感。是其所_レ以信_二闇齋之學_一。不_レ惑_二百家之說_一也。

潜斎、筆記に長じ、黙齋の講話は其の記する所多きに居る。黙斎、其の『曾点章講義』の後に書いて曰く、

「吾子の記録は簡暢爽快、頗る人の意を慰む、亦知解の一事なり。昔、関宿藩士に賀古利器なる者有り。先君子の話を記すこと、殆ど吾子の筆力に似、読み畢はりて之れが為に愴然たり」と。其の黙齋に許さるゝこと此くの如し。嘗て曰く、「伝神写照の密契、風韻氣象の精彩、先生之れを体するに非ざれば、則ち其の徳容何に従りて得んや。淵源の正、学脈の統、先生之れを任ずるに非ざれば、則ち其の門風の厳、何に従りて来らんや。秀直、不敏と雖も、竊かに感ずる所有り。是れ其れ、闇齋の学を信じ、百家の説に惑はざる所以なり」と。

○語注

【居多】大部分を占める。【曾點章講義】『論語』先進・最終章についての黙齋の講義。未見。『清谷全話』「論語講義」中に存するか。【知解】知識の力で悟ること。【関宿藩】下総国葛飾郡関宿（現・千葉県野田市北部）にあった藩。宝暦二（一七〇五）年に久世氏が入封、以後廃藩まで久世氏。【賀古利器】稲葉迂齋門人（『崎門學脈系譜』四六五頁）。『迂齋先生學話』（『迂齋學話』二十八卷、付録十六卷）のうち正編は黙齋の編纂によるが、付録は村上宗章、賀古利器、山下尚志等による筆録。【先君子】黙齋の父・迂齋。【愴然】悲しみ悼むさま。黙齋は、賀古利器の名文を読んで父・迂齋を思い出したのであろう。【傳神】人物を文章や絵で描写して、神髓を伝えること。【寫照】人物の姿を描くこと。

▼七

潛齋朴素簡易。與レ人接。和順不レ忤。晚益勵レ學。自歎曰。終身役役。不レ見ニ成功一。茶然疲役。不レ知レ所歸。今老矣。莫ニ能爲一也。然中夜平旦。尚有下欲ニ温レ故革レ心斃而後止一者上。天幸假レ年。待レ費ニ松脂一。

則不^レ庶^三幾乎報^二靈臺^一哉。以^二寛延二年十二月二十六日^一生。文化十四年五月六日没。年六十八。著有^二淵源紀聞・閒居録・易學啓蒙諸老説・麻谷雜志・鹿島紀行・身延紀行・再旬紀行・潜齋語録・倚伏箴・潜齋年譜^一等。

潜斎、朴素簡易、人と接するに、和順にして忤^{あひから}はず。晩に益^{ます}学^{まな}を励む。自ら歎じて曰く、「終身役々として成功を見ず。茶然^{てう}として疲役し、帰する所を知らず。今老ゆ。能く為すこと莫し。然るに、中夜平旦、尚ほ故きを温ねて心を革め、斃れて後止まんと欲するもの有り。天幸ひにして、年を仮して松脂を費すを待たば、則ち靈台に報ゆるに庶^あ幾^かからずや」と。寛延二年十二月二十六日を以て生まれ、文化十四年五月六日没す。年六十八。著に、『淵源紀聞』、『閒居録』、『易學啓蒙諸老説』、『麻谷雜志』、『鹿島紀行』、『身延紀行』、『再旬紀行』、『潜齋語録』、『倚伏箴』、『潜齋年譜』等有り。

○語注

【茶然疲役不知所歸】「茶然疲役而不知其所歸」（『莊子』齊物論）。茶然はぐったり疲れること。【中夜真夜中。【平旦】夜明け。【費松脂】松脂は棺に塗る松脂。費松脂は死ぬこと。【靈臺】魂のありか。心。【不可内於靈台】（『莊子』庚桑楚）【寛延二年】一七四九年。【文化十四年】一八一七年。

参考文献

・崎門、稻葉迂斎、稻葉黙斎の編著書

池上幸二郎編著『吾學叢書第一篇・黙齋先生傳』（内題『稻葉黙齋先生傳』、神田小川町池上方・黙

齋学会編、一誠堂書店、一九三五年)

池上幸二郎家蔵『淵源紀聞』写本、一冊。

九州大学中央図書館蔵碩水文庫『淵源紀聞』写本、一冊。

九州大学文系合同図書室・坐春風文庫『淵源紀聞』写本、一冊。

九州大学文系合同図書室『淵源紀聞』写本、一冊。

東北大学図書館・狩野文庫『淵源紀聞』写本、三冊。

稲葉黙齋『姫島講義並余論』、『堦簾録』、『三郎稿』、『内艱剖記』、『話録』、『外艱剖記』、『先君子行實』、『若松艸』、『處土越復傳』、『若松夜話』、『牛島隨筆』、『先達遺事』、『西遊轡録』、『辛丑雜記』、『壬寅雜記』、『癸卯雜記』、『己酉雜記』(稲葉黙齋『孤松全稿』元倡寺蔵本、写本、他、所収)※なお、以下の作品は『道学遺書初集』(卷一〜四、全二冊、道学協会編、一八九一年)を参照した。卷一『姫島講義並余論』、『堦簾録』、『三郎稿』。卷二『内艱剖記』、『話録』。卷三『外艱剖記』、『先君子行實』、『若松艸』。卷四『處土越復傳』、『若松夜話』、『牛島隨筆』、『先達遺事』。

稲葉黙齋編『迂齋文集』(茨城県立古河歴史博物館所蔵、写本、十三冊)

稲葉黙齋『黙齋先生家禮抄略』(無窮會平沼文庫蔵、一八六二年刊本、一冊)

日本古典学会編『増訂・佐藤直方全集』(ぺりかん社、一九七九年)

浅見綱斎『靖猷遺言』(近藤啓吾、金本正孝編『浅見綱齋集』国書刊行会、一九八九年)

多田東溪『尚齋先生實記』(『日本道學淵源録』所収(岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編『楠

本端山・碩水全集』葦書房、一九八〇年)

林潜斋『再旬紀行』（千葉県立文書館・蕪木文庫藏、写本、一冊）
・中国思想古典

『礼記』（竹内照夫『新釈漢文大系 27・28・29 礼記（上・中・下）』明治書院、一九七一、一九七七、一九七九年）

『易經』（本田濟『新訂中国古典選 卷一 易』朝日新聞社、一九六六年）

『春秋左氏伝』（宇野精一・平岡武夫編著、竹内照夫『全釈漢文大系 4・6 春秋左氏伝 上・中・下』集英社、一九七四年、一九七五年）

『論語』（宇野精一・平岡武夫編著、平岡武夫『全釈漢文大系 1 論語』（集英社、一九八〇年）

『詩經』（高田眞治『漢詩大系 1・2 詩經（上・下）』集英社、一九六六、一九六八年）

『孟子』（宇野精一・平岡武夫編著、宇野精一『全釈漢文大系 2 孟子』集英社、一九七三年）

『大学』（宇野精一・平岡武夫編著、山下龍二『全釈漢文大系 3 大学・中庸』集英社、一九七四年）

『中庸』（宇野精一・平岡武夫編著、山下龍二『全釈漢文大系 3 大学・中庸』集英社、一九七四年）

『莊子』（市川安司・遠藤哲夫『新釈漢文大系 7・8 莊子（上・下）』明治書院、一九六七年）

司馬遷『史記』「列伝」（小川環樹、今鷹真、福島吉彦訳『史記列伝 1・5』岩波文庫、一九七五年）

班固『漢書』（高木友之助・片山兵衛訳注『中国古典新書統編 15 漢書列伝』明德出版社、一九九一年）

李瀚『蒙求』（柳町達也編『中国古典新書・蒙求』明德出版、一九六八年）

朱熹『家禮』（慶應義塾大学蔵、五卷、一七九二年刊本）

朱熹、劉修橋『周易本義』（新文豐出版公司・台北、一九七九年）

朱熹『大学或問』（荒木見悟、岡田武彦主編『近世漢籍叢刊 和刻影印 思想三編六 孟子或問・大学或

問・中庸或問』中文出版社、一九七七年)

朱熹『論語集註』(『四書集註』藝文印書館・台北、一九五六年)

朱熹『孟子集註』(『四書集註』藝文印書館・台北、一九五六年)

朱熹『中庸章句』(『四書集註』藝文印書館・台北、一九五六年)

朱熹編『小学』(字野精一『新釈漢文大系3 小学』明治書院、一九六五年)

朱熹『朱子語類』(朱傑人・嚴左之・劉永翔主編『朱子全書15』18 朱子語類』上海古籍出版社・安徽教育出版社、二〇〇二年)

李延平撰、朱熹、周木編『延平答問』(岡田武彦、荒木見悟主編『近世漢籍叢刊 和刻影印 思想初編 六 上蔡語錄・延平答問附補錄』中文出版社、一九八五年)

池上幸二郎『稻葉默齋先生』(一) (二) (三) (完) (三鹽熊太編『東洋文化』一三八〜一四一号、東洋文化学会、一九三六年、所収)

岡次郎編『日本道學淵源録、續録、續録増補』(開明堂、一九三四年(岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編『楠本端山・碩水全集』葦書房、一九八〇年、所収)

岡次郎編『崎門學脈系譜』(晴心堂、一九四〇年(岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編『楠本端山・碩水全集』葦書房、一九八〇年、所収)

端山・碩水全集』葦書房、一九八〇年、所収)

東金市史編纂委員会編『東金市史・史料篇・第一〜四』東金市、一九七六〜一九八二年。

山崎道夫『稻葉默齋の人と学』(一) (二) (三) (『朱子學大系月報』12〜14号、明德出版社、一九八一〜一九八三年)

九八一〜一九八三年)

九八一〜一九八三年)

九八一〜一九八三年)

九八一〜一九八三年)

九八一〜一九八三年)

九八一〜一九八三年)

梅澤芳男編著『稻葉黙齋先生と南総の道学』（ぺりかん社、一九八五年）

『大網白里町史料目録2 増穂地区編』（大網白里町、一九八五年）

大網白里町史編さん委員会編『大網白里町史』（大網白里町、一九八六年）

高島元洋『山崎闇斎―日本朱子学と垂加神道』（ぺりかん社、一九九二年）

東金市史編纂委員会編『東金市史・通史篇・下巻』（東金市、一九九三年）

柴田武雄『稻葉黙齋上総道学関係諸学者略伝（未完）』（東金市郷土研究愛好会、一九九八年）

・その他

三扶誠五郎編『新発田年譜』（郷土研究社、一九三三年）

三田村鳶魚『武家事典』（青蛙房、一九五九年）

竹崎貫一編『漢学者伝記集成』（名著刊行会、一九六九年）

竹内理三編『角川日本地名大辞典・十三巻・東京都』（角川書店、一九七八年）

『藩史大事典 第六巻 中国・四国編』（雄山閣、一九九〇年）

館林市教育委員会『館林叢書』21（館林市立図書館、一九九三年）

朝倉治彦監修『江戸文人辞典』（東京堂出版、一九九六年）

根崎光男『將軍の鷹狩り』（同成社、一九九九年）

石井進・宇野俊一編『千葉県の歴史』（山川出版社、二〇〇〇年）

斎藤月岑撰、今井金吾校訂『武江年表 中』（ちくま学芸文庫、二〇〇三年）

○『稻葉黙齋先生傳』校合

底本…池上幸二郎編著『吾學叢書第一篇・默齋先生傳』神田小川町池上方・默齋学会編、一誠堂書店、

一九三五年。

狩野…東北大学狩野文庫所蔵写本。『淵源紀聞』のうち。

※なお、末尾に岡次郎編『日本道學淵源録・續録』開明堂、一九三四年（『楠本端山・碩水全集』岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編、葦書房、一九八〇年）所収、「（稻葉黙齋）傳」（抄録）を付した。

▼序 底本…秀直久遊先生門。狩野…秀直久遊其門。▼一 底本…以道學聞于世。狩野…道學聞于世。▼二 底本…非聖賢之書未嘗經其心。狩野…非聖賢之書未嘗經其心。底本…容止閒雅而可觀。狩野…容止閒雅而可觀。▼三 底本…雖身外物亦然。狩野…而雖身外物亦然。底本…先生性雖嘗嗜酒。狩野…先生惟雖嘗嗜酒。▼四 異同なし。▼五 異同なし。▼六 底本…元文元年尚翁東。狩野…斯年「或前年未詳」尚翁東。底本…以我爲欲其餒餘者然爾。狩野…我以爲欲其餒餘者然爾。▼七 異同なし。▼八 底本…露風采。狩野…露風彩。底本…長谷川觀水嘆曰。狩野…長翁觀水嘆曰。底本…重次曰。狩野…十二日。底本…▽頭注 狩野…ナシ。▼九 底本…出遊會飲事縦肆。狩野…出遊會飲事從肆。底本…其放蕩不羈。狩野…其放蕩不軌。底本…爲世所毀。狩野…爲世多所毀。底本…家嚴包荒。狩野…家嚴已荒。▼十 異同なし。▼十一 底本…幸田子善結交。

狩野…幸田君「結レ交」▼十二 底本…乃大怒曰。狩野…爲レ之大怒曰／底本…而後稍レ給「其事」。狩野…而稍給「其事」／底本…嘗講「索文公家禮」。狩野…嘗先「是講」索文公家禮／底本…斟酌度「時宜」。狩野…斟酌度「時宜」以／底本…親舊有「凶事」。必走而護「喪」焉。狩野…親舊必走而護喪焉。▼十三 底本…未「嘗有」此事「也」。狩野…未「曾有」此事「也」。▼十四 底本…人希「侍」講筵「也」。狩野…人多希「侍」講筵「也」▼十五 異同なし。▼十六 底本…先生欲「改」革舊弊「痛抑宰執」上。狩野…先生爲「是欲」改「革舊弊」也。痛「抑宰執」／底本…而無「由」於達「」。狩野…無「由」於達「」。▼十七 底本…不知「所」之。狩野…不知「所」之。／底本…一日先生笑語「秀直」曰。狩野…一日先生笑語「秀直」曰／底本…以上前文所「謂越復傳之事也」。狩野…以上前文越復傳之事也。▼十八 底本…狩野…狩野文庫『淵源紀聞』所收「默齋先生」／底本…遭「母氏喪」。狩野…遭「母氏之喪」。▼十九 底本…遭「父喪」。狩野…遭「父之喪」／底本…可「以爲」吾門之喪規「也」。狩野…以可「爲」吾門之喪規「也」。▼二十 底本…後年欲「燒而廢毀」焉。狩野…而後年欲「燒而廢毀」焉。▼二十一 底本…垂「年六十」。狩野…當時垂「年六十」。／底本…暇日自誦「先君子行實」。狩野…暇日自誦「迂齋行實」。▼二十二 底本…不敢以「賢智」侮慢「」。狩野…不下以「賢智」侮慢「」。／底本…他日語「秀直」曰。狩野…又別日語「秀直」曰。▼二十三 異同なし。▼二十四 底本…先生接「物感速慮深。望「之則威嚴雖」不「可」近」。狩野…先生接「物感速應深人望「之則威嚴雖」不「可」近」／底本…唯「懼」永被「退棄」。狩野…唯「懼」永所「退棄」／底本…其去必問曰。▼二十五 底本…先生自「東以來」。狩野…當時自「東以來」／底本…未「嘗交」人。狩野…未「曾交」人／底本…戸外標「一書」。狩野…後戸外標「一書」／底本…不「入」無「紹介」之人「上」。狩野…以不「入」無「紹介」之人「上」／底本…多歸「之農畝」而卻「之」。狩野…多婦「之農畝」而卻「之」／底本…或有「背」門法「傷」心術「者」上。狩野…或若至「於背」門法「傷」心術「者」上。／底本…直瀉「肚裏」破「巢窟」一。狩野…直以瀉「肚裏」破「巢窟」／底本…

一日痛督「高宮文七」／**狩野**「一日痛督」文七／**底本**「河仲遷在」座。**狩野**「河仲遷在」坐／**底本**「不三
 苟求」人之親」。**狩野**「嘗不三苟求」人之親」／**底本**「有」請教者」則曰。**狩野**「請教者不問曰」▼二
 十六 **底本**「受」新發田侯「浩軒君」之俸」。**狩野**「受」新發田侯之「浩軒君」俸」／**底本**「辭」之不」息。
狩野「尋辭」之不」息／**底本**「遂疏」先生」矣。**狩野**「遂疎」先生」矣／**底本**「晚年遊」江都」之日。**狩野**「
 晚年再旬遊」江都」之日／**底本**「所」延而進講焉。**狩野**「見」延而進講焉／**底本**「幸矣哉今日拜」老侯之
 溫顏」。**狩野**「幸矣哉今日拜」先侯之溫顏」／**底本**「世儒皆義納」之。**狩野**「世儒皆義而納」之」▼二十
 七 **底本**「飲食亦精潔甘美」。**狩野**「飲食亦精潔旨美」／**底本**「區劃最密」。**狩野**「區畫最密」／**底本**「若使」
 先生得」其志」。**狩野**「若使」先生遂」其志」／**底本**「則家國何有」。**狩野**「則家國何異」／**底本**「志在」
 經濟」。**狩野**「志在」經濟」者／**底本**「豈慢」人而然耶。**狩野**「慢」人然耶／**底本**「不」敢少置」。**狩野**「
 不」肯少置」／**底本**「選具無」缺遺」。**狩野**「撰具無」缺遺」▼二十八 **底本**「先生晚年多」凶」。**狩野**「先
 生晚年切多」凶／**底本**「家終絕矣」。**狩野**「家續終」絕矣／**底本**「未嘗向」人說」憂患」。**狩野**「未曾向」
 人說」我患」／**底本**「嗚呼先生終身祚薄」。**狩野**「嗚乎先生終身祚薄」／**底本**「處」之裕如」。**狩野**「處」之
 裕如也」▼二十九 **底本**「毫無」瞞肝脩容驕夸傲言」。**狩野**「聊無」瞞肝脩容驕夸傲言」／**底本**「常戒懼焉」。
狩野「常戒懼」／**底本**「往年寓」江都」之客舍」。**狩野**「往年寓」江都之客舍」／**底本**「嚴滅」爐火」。**狩野**「
 堅滅」爐火」／**底本**「以使」店主點檢而後去」。**狩野**「以呼」店主僕」彼點檢」而後去／**底本**「殊畏」制
 禁」。**狩野**「殊畏威」／**底本**「戰兢如」隋夫」然」。**狩野**「戰兢如」惰夫」然」／**底本**「嘗戒」人曰」。**狩野**「
 嚴戒」人曰／**底本**「此鄉當」謹」守國禁」。**狩野**「此鄉當堅謹」守國禁」▼三十 **底本**「秀直問處」患難」如何」。
狩野「因」事秀直問處」患難」如何／**底本**「則萬事定矣」。**狩野**「則事定矣」／**底本**「其臨」義不」顧」死生」
 者。**狩野**「其自臨」義不」顧」死生」者／**底本**「某往年在」江都」。**狩野**「某往年在」江都」／**底本**「偶、

罹厲虐之疾。狩野…偶遭厲虐之疾。／底本…不圖痊瘳之後。狩野…不則尋而瘳之後。／底本…乃反發下背初二心之異念上。狩野…乃却發下背初二心之異念上。▼三十一底本…京師獨有訂齋先生。狩野…西京獨有訂齋先生。▼三十二底本…乃其終始關異端之邪說。狩野…乃其終始專關異端之邪說。／底本…探頤鈎深顯微闡幽。狩野…探頤鈎深微顯闡幽。▼三十三底本…秀直嘗竊謂。狩野…秀直嘗竊顧。／底本…先生之學之柄。狩野…先生其學之柄。／底本…自斷曰。狩野…自斷然曰。▼三十四底本…非後學所_三以可輒語。狩野…後學兆_レ所_三以可輒語。／底本…由徒視其顯不_レ能深察其微已。狩野…由_レ不_レ能徒視其顯深察其微已。／底本…先生若弱既深識邦國之時體。狩野…先生若弱既深識邦國之特體。／底本…雖才識幹_レ事。狩野…若雖才識幹_レ事。／底本…未下儒手。狩野…不_レ下儒手。／底本…則何裨補之有。狩野…則何裨益之有。／底本…而我先達之去就隱顯。狩野…而我洗達之去就隱顯。／底本…故先生業進學成。狩野…故當時其業進學成。／底本…父師進仕。先生懇謝不_レ肯。狩野…父師使_二先生仕_一先生懇謝不_レ肯。／底本…先生其豈謂不_レ知時體乎。狩野…先生其豈謂不_レ知時休乎。▼三十五底本…膾炙人口。狩野…膾炙人口。／底本…後年偶疾久臥。狩野…後年偶疾久不_レ起。▼三十六底本…訂齋寵異先生甚至。狩野…寵異先生甚至。／底本…互相歡好。狩野…互相歡好。／底本…如舊相識。狩野…大愈舊相識。▼三十七底本…先生壯歲至不惑。狩野…先生壯歲至強仕之歲。／底本…隱於市中及墨水。狩野…久隱於市中及墨水。▼三十八異同なし。▼三十九底本…終世未嘗一出其門也。狩野…終世未_三曾一出其門也。／底本…我若與里人不_レ合。狩野…我與里人不_レ合。／底本…爲豫備已。狩野…爲_レ之豫備已。／底本…先生萬般已豫事前。狩野…若之先生萬般已豫事前。／底本…誰復如_レ此。狩野…誰復如_レ之。▼四十異同なし。▼四十一底本…卻書生。狩野…遽卻書生。／底本…秀直閒時獨得_レ聞鬼神集說之講。狩野…秀直閒時獨得_レ

聞_二鬼神集説之講_一。▼四十二 底本…松平久五郎後稱_二右近將監_一。狩野…松平久五郎後曰_二右近將監_一／
 底本…乃命_二於儒臣鈴木恭節_一東行。狩野…乃命_二事於儒臣鈴木恭節_一東行／底本…先生意固在_レ不_レ出。
 狩野…先生依_レ舊意在_レ固_レ不_レ出／底本…而慮_レ煩_二再請_一。狩野…則慮_レ煩_二再請_一／底本…至之日宜_三
 謀_レ事荅_二懇命_一。狩野…至自宜_下謀_レ事荅_中懇命_上。▼四十三 異同なし。▼四十四 底本…啓_二行江都_一。狩野…
 將啓_二行江都_一／底本…及秀直從焉。狩野…及秀直從_レ行／底本…猶使_二人畏_一矣。狩野…猶使_二大畏_一
 矣／底本…徧問_二親戚_一。狩野…徧問_二親戚_一。▼四十五 底本…遊中又爲_二桑名侯_一「松平下總守」所_レ延。
 狩野…遊中又爲_二桑名侯_一「松平下總守」見_レ延／底本…應_二仲遷之請_一爲_二公子_一講_二好學論_一。狩野…應_二
 仲遷之請_一爲_二公子_一講_二好學語_一／底本…未_レ詳_レ講_二何書_一。狩野…闕講何／底本…都下門人故舊來訪
 日_レ多。狩野…都下門人故舊來訪日多來訪終日而云。▼四十六 底本…予未_下嘗教_中門人輕_上檀師_一廢_中祈禱_上。
 狩野…予未_下曾教_中門人輕_上檀師_一廢_中祈禱_上。／底本…元倡寺_一狩野…寺曰_二元倡寺_一／底本…遂廢_二教學_一。
 狩野…自遂廢_二教學_一／底本…自晦_二於茶酒之間_一。狩野…晦_二於茶酒之間_一／底本…吾非_下誘_中講學_上之
 人也。狩野…吾非_下誘_中講學_上之身_上也。▼四十七 底本…十一年戊午之春應_二館林侯之請_一。狩野…十一年
 己未之春應_二館林侯之懇請_一／底本…而再遊_二館江都_一。狩野…而再遊_二于江都_一。／底本…進講_二十餘日_一。
 狩野…延講_二十餘日_一／底本…日來問學。狩野…日來問／底本…從_レ是後養_レ老不_二復西_一矣。狩野…從_レ
 是後固以養_レ老不_二復西_一矣。▼四十八 底本…善務_二政務_一。狩野…善務_二政教_一／底本…侯藩新建_二學校_一。
 狩野…而殊本藩新建_二學校_一／底本…又邸學名_二官儉舍_一。狩野…又邸學若_二官儉舍_一。／底本…或邦治
 以_二歡農_一爲_レ主。狩野…或邦治以_二勸農_一爲_レ主。▼四十九 底本…先生之在_二清谷_一也。狩野…先生積年在_二
 清谷_一之間／底本…而尚未_二以爲_レ足終日讀_レ書作_レ文不_レ輟。狩野…尚未_二自以爲_レ足終日讀_レ書作_レ文不_レ
 輟／底本…能教_二子弟_一。狩野…能於_二子弟_一／底本…始用_二樞青_一者。狩野…始用_二歷青_一者。▼五

十 **底本**…定_レ立課程_一。 **狩野**…堅_レ立課程_一／ **底本**…其或爲_レ學者。 **狩野**…其稀爲_レ學者／ **底本**…然先生諄諄懇喻。 **狩野**…雖_レ然先生諄諄懇喻／ **底本**…祁寒暑雨。 **狩野**…初寒暑雨 ▼五十一 **底本**…何使_二重次死_一。 **狩野**…何使_二十二死_一／ **底本**…追_二悼重次_一之深。 **狩野**…追_二悼_二二_一之深／ **底本**…吾今日得_二其死_一。 **狩野**…吾今日得_二其可死_一。／ **底本**…先生果病革。 **狩野**…果而先生病革／ **底本**…門人鈴木恭節 **狩野**…門人鈴木氏／ **底本**…幸養女在_レ傍。 **狩野**…幸養母在_レ傍／ **底本**…使_二彼代受_二其賜_一。 **狩野**…使_二彼代受_二其賜_一也／ **底本**…而先生沒矣。實寬政己未十一月朔也。 **狩野**…新日寬政己未十一月朔先生沒矣／ **底本**…集而全_レ備之_一者先生也。 **狩野**…集而余_レ備之_一者先生也／ **底本**…▽頭注 **狩野**…ナシ ▼五十二 **底本**…林秀直曰。 **狩野**…秀直謂／ **底本**…蓋懼_二彼代受_二侯賜_一。 **狩野**…蓋懼_二彼代受_二其侯賜_一／ **底本**…而目_二示養女_一耳。 **狩野**…而目_二示養女_一者耳／ **底本**…禮家或責_下其不_レ避_二女子_一以爲_レ議焉。 **狩野**…禮家或貴_下其不_レ避_二女子_一以爲_レ議焉／ **底本**…豈效_二大馬獨斃_二野外_一哉。 **狩野**…豈效_下大馬獨斃_二野外_一之樣子哉／ **底本**…非_下體_二道學_一嚴_二心術_一者_上。 **狩野**…嘗非_下體_二道學_一嚴_二心術_一者／ **底本**…誰能得_レ然乎。 **狩野**…誰得_レ然乎／ **底本**…▽頭注 **狩野**…ナシ

『日本道學淵源録・續録』所收「傳」 ※原文を欠く節は「欠」とした。

▼序 欠 ▼一 先生姓越智。氏稻葉。名正信。號默齋。爲唐津教授迂齋先生諱正義之仲子。母武井氏。以享保十七年壬子十一月十三日。生先生於江戸城東濱街山伏井。 ▼二 幼學父膝下。長師事野田剛齋先生。專以道學自任。早見大意。不安小成。而希遠大。特達英斷。足以當經濟。銳氣掩世儒。才識鎔銖老佛。尚友先達。最欽慕佐藤先生焉。非聖賢之書。未嘗交其目。終始志在常儒之外。其資質明敏。神氣清爽。言語能辯。容止閒雅而可觀。威儀嚴厲而可畏。凡動止起居。出入進退。視聽氣息。皆恭而安。重而有節。 ▼三 先生

居家。夙興沐浴束髮。一日未嘗懈。盥嗽至剪爪。皆不苟焉。恒好潔。而雖身外物亦然。凡書籍筐笥什器。位置齊整。如循規矩也。性雖嗜酒。常戒定量。食亦絕夕膳。▼四 三歲穎悟過常兒。其爲乳兒。人戲之曰。

形大而尚食乳味。先生直曰。我學老萊子也。▼五 甫六歲作文。越復小學。諸子品題是也。▼六 斯歲「或

前年。未詳。」尚翁東。偶訪迂齋。翁以嗜餅「翁所嗜之餅。俗以牡丹名之。亦以萩稱焉。」饗之。先生率爾

將入翁之坐而見之。家人遽然止之。童心憤之曰。人之拒我。以我爲欲其餒餘者乎。我豈敢哉。其自幼不屈氣

概如此。▼七 九歲作迂齋答問。「見迂齋先生文集」▼八 十一歲釋書。意氣慷慨。頗見風彩。▼九 明

年先生竊欲講書以導人。然憂其童容之不稱。於是自去總角。作成人之容。舉家驚之。家嚴獨摩其頂大笑。終

備冠禮。及成童。豪狂自張。專逞從橫之氣概。出遊會飲。每事縱恣。不屑細謹。其放蕩不軌。爲世所毀。家

嚴包荒。▼十 先生亦聰明之發。終守法度。益進乎業。於是負笈事野田先生。「時年十六」▼十一 弱冠

與唐彥明。「父之執」村士宗章。明石義道。宇仲喜。幸田子善結交。而切磋有年。業益進。而學舍大新。後

先生獨畏子善。與彥明好。自言士爲知己者死。二子眞知我矣。▼十二 欠▼十三 一日先生與子善彥明會。

折衷四方諸儒之說。論道體及六合之外。彥明揚眉曰。愚老在官。三餘訪諸子。話及人間之事而已。未嘗語妙

道。今日得此遊。自泰山之崩。未嘗有此事也。▼十四 先生意氣慷慨自任。切齒於腐儒陸沈之風矣。▼

十五 寶曆二年壬申。輜藏録初編成。「時年二十五」▼十六 先生自言。某雖粗率狂獷。至於振綱常任大義。

則老師宿儒。不少愧於心矣。嘗題靖獻遺言曰。是眩眩良劑。若人切憂宿痼。突出觸我毒手。「時年二十四」

▼十七 欠▼十八 欠▼十八 欠▼二十 明和四年丁亥。先達遺事上梓。▼二十一 先生在家事父兄也。

逆志先意。而能給其事。父兄亦愛先生殊至。先生秘藏佐藤子及其先人之書。「佐藤子與迂齋之書。及迂齋嚴

戒先生而所告之書也。」至晚謹帶於身。年垂六十。暇日自誦迂齋行實。未數行頗催涕淚。終爲是廢焉。嘗曰

敬親當如國君。故曰家有嚴君。父母之謂也。又曰事親者。以敏速詳勉爲最務。事至割烹。可習熟矣。▼二

十二 先生與親戚故舊交。常以情話歡好。不敢以賢知侮慢。時遺物以致情意焉。▼二十三 晚容狂姪之寄託

迎之。其愛顧撫育。無所不盡。彼與先生咫尺異席。而妄歌狂吟。日夜嘩騷。聽者煩耳衝心。先生在憑几案自若。人慰勞之。先生慘然曰。彼之喧則善。唯其寂寥閒默。不忍見之。▼二十四 門人歸路遠者將辭去。必

問曰。得無饑乎。若奴僕。則必與酒錢曰。汝宜過店飲之。聞門人故舊之喪。則驚惻見於色。忼然如有失也。

▼二十五 如舊來門人偶有過失。爲不聞者。待其開悟。或至於背門法傷心術者。痛呵不假。直以瀉肚裏破巢窟。不能捺其情也。一日痛督文七。其密責嚴呵。猶世俗所謂閹王之斷冥譴也。先生嘗言。我未嘗絕人。人遠

於我者不迫。不苟求人之親。請教者不拒。▼二十六 先生處事。取舍與奪。各度其宜。而取於人。乃最極

其精詳。初在江戶。受新發田侯。「浩軒君」之俸。既而隱于南總。數辭俸。侯不可。先生辭之不息。侯大怒

而疏先生。晚年遊於江戶之日。爲嗣侯「溝口出雲守」所延而進講焉。遂復謁老侯浩軒君。語吾輩曰。幸哉今

日拜老侯之溫顏。▼二十七 先生自壯至晚。常立貧窮之閒。能支吾不狼狽焉。衣不一見其破絮。飲食亦精

潔甘美。養生最至。其活計之制。節儉之度。區畫最密。嘗曰節儉之策。大易而小難。若使先生得其志。則家

國何異。固無有二理。幸田氏語錄。有家計與經濟無二道之語。先生曰。天下經濟。猶庶人家計也。先生小心

翼翼。能務小物。無與大事異也。最長於處事。而百度萬般。經畫前定。區別豫具。臨時綽然有餘裕焉。▼

二十八 欠▼二十九 先生平日處己。禮容恭儉。毫無瞞盱情容驕夸傲言。故自遠怨怒橫逆侮慢之辱。嘗曰。

凡承人之侮者。職由己之不恭也。先生畏威戰兢。如墮夫然。▼三十 不意世榮。不求聞達。澡雪之功。誠

心之驗。隱顯爲一矣。至其心術之微。則未讓先達。而幽不忤鬼神。明不愧人間。▼三十一 先生之學。早

明道體。通事情。尤長性理之談矣。明和以來。京師獨有訂齋先生。江戶有幸田先生及我先生而已。道學之衰。

未有甚於此時者。崎門之學。不絕如綫。況復天下益厭道學。而其學焉者。又非第一等之人乎。先生隱居。日

錄所自發揮之旨訣。又善筆先諸達之言行。多出乎其一手。今日東方之學傳于世者。先生之功居多。▼三十

二欠 ▼三十三 秀直竊謂。先生之爲學。其柄信所謂心與理而已矣。〔先生曰。人之爲學。心與理而已矣。此語三見朱書中。學者第一之訓也。興成按。又見大學或問。〕其任道也。自斷然曰。我是此學之捕吏。身雖微賤。不敢避貴戚也。是以雖實尊前輩。不敢阿所好。公然議其所未盡。凡天下之學。辨其是非異同。欲以章明此道永垂後裔。〔興成謂。此與余之志全符焉。雖父兄之說。有所不符。則不敢曲從。〕 ▼三十四 先生之出處。高尚不可測。迥然不可據。後學所不可輒語。而老儒或有議之者。此由徒視其顯而不能深察其微耳。先生自弱冠。已深識邦國之時體。雖才識可幹事。而經濟之柄。不下儒手。則無裨益於國家。是以父師雖使先生仕。先生懇辭之以遂隱操也爾。嘗謂人曰。若有召我者。俸祿萬鍾。月講止一課。不敢給他事。則我出仕耳。其志可以見矣。 ▼三十五 壯歲祝髮。避塵俗絕世榮。深爲市隱。以明其不仕。輟晦形跡。徜徉物外。一任自適。見者目之以顛狂。聞者詈之以異端。以爲集會之話柄。親戚患焉。師友傷焉。人皆驚其異狀。先生曰。我不絕妻肉害彝倫。則何傷哉。我國俗頂髮祝其半。與古異者獨如何。是亦爲狂爲異端乎。後年偶久疾。鬚髮肆長。是以不復剃也。 ▼三十六 安永元年壬辰。先生適於京師。始見訂齋久米先生。〔訂翁時年七十四。先生年四十一。〕寵異先生甚至。會談數四。相共歡好。大愈於舊相識。訂翁語人。數稱揚先生。 ▼三十七 先生久隱於市中。 ▼三十八 至知命之年去江都。〔興成曰。或曰非京師則不得稱都。人或稱江戶浪華以都。是僭也。可謂不知都字矣。都是都會之義也。邑有先君之廟。亦謂之都也。論語序說。墮三都。大學序。王宮國都之類。可以見矣。豈限京師哉。故稱京阪江戶曰三都。寧樂古之都也。今亦稱南都。左傳稱齊得臣曰東宮。然本邦則天子之元子而已矣。薨字亦限於三位以上矣。凡此等類。與漢土異矣。不可僭也。如夫御字。本邦通上下之尊稱也。然學者作文。皆倣漢土。則雖無國制。當獨施之於天子也。若都字。則不然也。〕 ▼三十九 移于上總清名幸谷。〔村名○^{マツ}鵜澤氏父子兄弟。迂齋先生之門人。而爲先生之友也。故迎之以卜其居。〕至此固閉門謝俗。殆二十年。終世未嘗一出其門也。 ▼四十欠 ▼四十一欠 ▼四十二 寬政五年癸丑之秋。

館林侯老臣等。欲延先生使幼君學正學。命事於儒臣鈴木恭節。東行先容其意。先生依舊意在不出也。則慮煩再請。徐荅曰。某明春欲展省父母之墓。到日謀事荅懇命。勿復問焉。▼四十三十有一月。聘使川鱗源藏。

副使恭節。訪先生之廬。謹陳書及侯言曰。孤及一二老臣。久仰先生正學德風。冀一西遊辱教導。則敝藩之幸。

何任積望之權。敢納方金若干。光緡三匹。茶酒及八丈外套。聊以致微諒。先生以事差往日之慮而大怪。雖然

侯賜非可固辭。乃進拜納。復席曰。信老劣衰弱。雖辱顧問。何益之有。希垂高恕。明春待暖遊都下。造高邸

拜謝耳。▼四十四 明年甲寅春三月赴江都。詣侯邸。謹謝去年重聘。爲侯進講小學之書。侯殊作書賜賜俸

三十口料。老臣等請曰。希以來在視春秋時令是宜之日。命駕而西。辱永承教。則千萬幸甚。先生謹謝恩遇。

辭俸而不受。▼四十五 遊中又爲桑名侯〔松平下總守〕所延。談學數刻而退。又爲新發田侯丸龜公子進講

焉。居再旬而告歸。侯酒醴盛饌尤至。賜銀十枚。▼四十六 七年乙卯春二月。本里檀寺主僧。挾檀師來。

率爾入戶就座。厲色曰。自叟之教授此地。大害衆生之心。以至不尊祈禱輕視檀師。適由教之不正耳。爾後我

入講席而檢察之。先生徐荅之。曰余未嘗教門人輕檀師廢祈禱。但遊吾門者。一年半歲間。槩自覺無地獄天堂。

蓋以是故也歟。吾固不能禦其自悟者也。〔興成曰。若次之以一言曰。然欲檢余之講書。則即今講經一章。使

子聞之。乃講太極圖說。詳釋太極陰陽仁義中正死生晝夜之理。則僧必茫乎。自失。或有覺其夢乎。惜夫。〕

僧不能復言。亦不再來。先生即告里長。而離絕其檀緣。別卜爽垲地。請成東一禪寺〔寺曰元倡寺〕而爲檀越。

先生自是辭門人廢教學。晦跡於茶酒之間。其言曰。吾非誘掖講學之身也。占曰。有孚於飲。酒無咎。濡其首。

有孚。失是。其庶幾無大過乎。▼四十七 十一年己未之春。應館林侯之懇請。再遊於江戶。進講十餘日。

侯家寵遇恩賜益篤。先生時年六十七。從是後以養老不復西矣。▼四十八 侯家賢宰。專尊道學。善務政教

者。信先生長于事。數寄書以謀國事。又新建學校。先生命之曰道學館。先生語吾輩曰。扁揭此三字。後來伊

物文辭之徒。或雖覲面目。豈得入而講書哉。〔興成曰。其名甚善。〕▼四十九 先生積年勉學。精義操存

日熟。其業益進。其德益著。尚不自以爲足。終日讀書作文不輟。猶書生然。能教弟子。篤喻里民。殊懇示三日斂葬之義。是以鄉村多惡火葬。棺斂效禮。始用瀝青者。先生化之也。▼五十 先生說書。四筵解頤。懸

河之辯。賢愚峙聽。說高而不虛。解卑而不淺。其考證援引。多稱先達之活說。是以聽徒自不屑老佛霸功刑名之術。記誦操觚之習。稍悟他術之可廢。道學之不可易。以起向道之志矣。且權輿南總之道學者。乃先生之厚澤也。

▼五十一 先生垂古稀。罹不治之病。自知不復起。而絕藥餌。門人勸之少服。病革會館林侯使者「門人鈴木氏」至。謹陳侯命。問病納幣。先生將已絕。而頭不能舉。口不能言。幸養女在傍。稍勉目示。使其代受賜。是日没。實寬政己未十一月朔也。年六十八。門人主事。棺斂以禮。葬于上總成東元倡寺境內西南隅。

▼五十二 秀直謂。禮家或議其不避女子。然先生無親戚家僕備將護者。唯養女供使令已。豈效大馬獨斃野外哉。興成謂。默齋稻葉翁。是狂簡之士。而其行有不掩者。然其磊磊落落之氣象。非拘士俗儒之所能知也。而能得崎門之道學。以傳於後生。又能筆其言行。使永不朽。其有功於正學。不可誣矣。幸田翁傳曰。幸田翁其或不恭也。而學則恭矣。余於默翁亦云。學之與行。雖不及其父。而可謂能繼其業矣。

十二 人名索引

大久保 紀子 長野 美香 作成

『姫島講義』、『處士越復傳』、『先君子行實』、『先達遺事』、『墨水一滴』、『稻葉黙齋先生傳』の本文の人名索引である。掲載箇所 of 書名と見出し番号をあげた。書名の略号は以下のとおりである。

『姫島講義』―姫 『處士越復傳』―処 『先君子行實』―先 『先達遺事』―遺 『墨水一滴』―墨
『稻葉黙齋先生傳』―黙

なお、『姫島講義』、および『處士越復傳』の「稻葉黙齋」の掲載箇所、および『先君子行實』の「稻葉迂齋」の掲載箇所は省略した。

第二部 山崎闇斎学派についての資料

人名															掲載箇所		
合田敬勝																	
青山大膳亮																	
赤井直義																	
明石義道（柳田求馬）																	
赤松広通																	
浅井万右衛門																	
麻田政																	
浅野長矩																	
浅見吉兵衛（綱斎の弟）																	
浅見綱斎（安正）																	
先 33	先 38	先 16	遺 36	墨 22	106	遺 10	姫 1	遺 36	墨 62	先 27	遺 14	墨 3	処 9	先 5	遺 111	先 16	
	56	遺 87		23	116	11	11						先 31	遺 40		25	
	65	106		25		12	先 5						黙 11	108		墨 33	
	109			40		14	8							墨 40			
				62		22								62			
				黙 51		35											
						36											
						37											
						38											
						39											
						40											
						41											
						42											
						43											
						44											
						52											
																	阿部正興
																	跡部宮内
																	味池直好
																	浅見道徹（綱斎の兄）

十二 人名索引

稻葉圓齋
稻葉廓齋（正直）

稻葉迂斎（正義）

稻葉通徳

到津中務少輔

伊藤仁斎

一休

板倉重宗

石田三成

石川治平

石井左中

井澤遠治

伊尹

井伊兄弟

天木時中

[illegible]

第二部 山崎闇斎学派についての資料

稻葉廓齋女（宝曆六年生）	先 28
稻葉廓齋女（宝曆八年生）	先 29
稻葉廓齋女（宝曆十年生）	先 31
稲葉直政	先 2
稲葉正則	墨 37
稲葉通故	先 29
稲葉默齋（葉君）	先 21
稲葉義通	先 2
井上河内守（井上正利）	遺 14
今出川春季	墨 10
今平	遺 73
伊門善藏	遺 14
伊予皇子	先 1
岩城隆韶	先 33
尹彦明	先 36
宇井默齋（弘篤）	処 13
植田伊助	遺 12
植田玄節	遺 14
鵜飼金平（鍊斎）	遺 7

十二 人名索引

大河内養仙	正親町公通	大木丹二	大神澤一	大江求達	王陽明	黄檗	応神帝	江村万蔵 (北海)	江村如圭	榎並正固	栄寿(浅見綱斎の継母)	卜部繁兼	宇野平介	宇野三平 (宇土新)	宇野三郎右衛門	鵜澤容斎	鵜澤由斎	鵜澤近義
墨 52	遺 14	黙 44	遺 79	遺 1	姫 5	姫 9	遺 22	遺 111	遺 111	墨 41	遺 36	遺 22	遺 111	遺 111	遺 111	墨 70	黙 39	黙 39
	22	51	80											112		黙 39		
	25		81															
			82															
			83															
			墨 31															
			51															

第二部 山崎闇斎学派についての資料

[illegible]

十二 人名索引

[illegible]

第二部 山崎闇斎学派についての資料

黒岩慈庵	遺 14	16	墨 26
黒田継高	先 33		
黒田長清	先 33		
桑名才一	遺 22	25	
桑名松雲	遺 14	22	25
巖光	遺 22		31
孝元帝	先 1		
孔子	姫 1	先 4	遺 38
幸田子善（誠之）	処 11	黙 11	墨 85
河内屋八兵衛	遺 119		31
河野通信	先 1		
光武帝	遺 22	墨 12	
古澗慈稽	墨 9		
小杉以長	先 35		
後藤松軒	遺 19		
後藤郎	墨 5		
小早川秀秋	墨 1		
酒井脩敬	姫 1		
佐久間氏（山崎闇斎の母）	遺 3		

十二 人名索引

佐竹義明
佐竹義敏
佐藤就正
佐藤直方
佐野源左衛門
澤不白
潮田四郎左衛門
子建
子思
篠原惟秀
司馬光
志水義實
謝良佐

墨	默	姬	先	姬	遺	墨	墨	墨	默		墨		遺	姬	先	先	先
2	38	5	44	1	1	51	37	49	2	70	22	82	55	8	1	21	33
		墨	默	9					21	71	23	89	56	9	5	35	
		15	51						25	72	24	91	57	10	先	遺	
									31	73	25	92	58	11	3	84	
									34	75	26	93	59	14	6	墨	
									51	77	27	94	60	22	7	32	
															9	67	
										78	29	95	61	23			
										80	32	96	62	25	11		
										81	41	97	63	29	34		
										83	43	98	64	35	35		
										84	44	99	65	37	38		
										86	48	100	66	39	41		
															42		
										59	107	67	40				
										62	116	68	52				
										68			73	53			
										69			78	54			

第二部 山崎闇斎学派についての資料

[illegible]

十二 人名索引

鈴木正則（不休、迂斎の父）	処 10	先 2	3	12	墨 73
鈴木養察（莊内）	姫 1				
角倉與市（角倉家当主名）	遺 111				
角倉了以	墨 15				
西山公（水戸光圀）	遺 32				
清叔寿泉	墨 2				
西笑承兌	墨 12				
雪村友梅	墨 16	17			
千日氏（唐崎彦明の祖母）	遺 25				
曾子	姫 1				
曾点	遺 26				
大慧	姫 9				
太公望	黙 34				
高木甚平	遺 52				
高須順正	黙 38				
高田未白	遺 14	29			
高橋理右衛門	墨 35		37		
高宮文七	黙 25	26			
武井氏（稻葉黙斎の母）	処 5	10	14	先 15	28
				遺 73	
				84	
				黙 1	
				18	

第二部 山崎闇斎学派についての資料

武井勝征	先	15
武井敬勝	先	28
武井主守	先	15
武田信玄	墨	84
武田信虎	墨	84
武村市兵衛	遺	9
多治比氏（山崎闇齋の祖母）	遺	3
多田東溪（維則）	処	8
伊達侯	墨	50
伊達綱村	遺	31
谷川土清	遺	47
谷三介	遺	6
谷時中	遺	6
谷秦山（丹三郎、重遠）	遺	14
谷北溪（丹内）	遺	25
種村楊稊	墨	6
玉木葦斎（正英）	遺	22
達磨	姫	9
張敬夫（南軒）	遺	74

第二部 山崎闇斎学派についての資料

内藤正弼	鳥山紀長	豊臣秀吉	豊臣秀次	友松氏興	伴部安崇	舎人親王	杜甫	戸田光政	徳川義直	徳川秀忠	徳川家康 (東照宮)	徳川家光	徳川家綱	時田友右衛門	藤茂睡	東明宗晃	湯・武	道斎
先 33	墨 31	墨 2	墨 1	遺 32	先 5	遺 25	墨 21	先 7	墨 14	墨 9	先 2	墨 9	墨 9	墨 51	墨 37	墨 2	遺 47	遺 57
					遺 62			8			墨 2							
								9			5							
					110			31			9							
					墨 40						10							
					62						12							
											15							

十二 人名索引

[illegible]

第二部 山崎闇斎学派についての資料

野野宮中將 （野野宮定基）	遺 14
伯夷	墨 85
白居易	墨 7
長谷川克明 （觀水）	処 5 先 7 35 遺 77 墨 57 60 61 62 82 黙 8
蜂須賀重喜	先 33
服部南廓	墨 49
林市之進	遺 25
林鷲峰	墨 9
林周堅	墨 9
林潜斎	黙 22
林長吉	墨 9
林詭耕斎	墨 9
林信時	墨 9
林吉勝	墨 9
林叔勝	墨 9
林羅山	遺 38
春原民部 （出雲路信直）	遺 14
日原以道 （手塚担斎）	黙 38
日原氏 （廓斎の後妻）	先 28

十二 人名索引

松倉主水	松岡多助 (雄淵)	松岡玄達	増山正任 (長島候)	増山正贇 (長島候)	榎小進	榎元真	前田玄以	堀正知	堀真堯	堀江順斎	保科正之 (会津中将)	北条時頼	布留川彌右衛門	武帝	武王	藤原惺窩	平山安左衛門	平野金華
黙 42	遺 47	遺 47	遺 61	処 12	先 9	先 7	墨 9	先 22	先 33	墨 76	遺 14	墨 49	姫 5	墨 12	遺 21	墨 1	姫 5	遺 113
	48		95	先 33		9		26			18					2		
	49		96			遺 10					30					3		
						14					墨 46					4		
						墨 38					63					5		
																6		
																8		
																11		
																15		

第二部 山崎闇斎学派についての資料

無学祖元	三輪執斎	三宅甚平				三宅尚斎	三宅重徳	三宅鞏革斎	三宅観瀾	溝口直侯	溝口直養	三木信成	松本義上	松平光重	松平正温	松平斉重	松平忠和	松平武元 (館林源公)
墨 17	墨 72	遺 100	墨 23	遺 102	遺 14	姫 1	墨 67	墨 25	遺 31	黙 26	先 33	先 4	黙 38	先 7	先 33	墨 40	黙 45	先 31
			28	103	22	先 4	62		36	45	黙 26					42		33
			41	104	35	7										43		遺 96
			65	111	39	8										44		
			66	116	58	9										47		
			67		72	12										48		
			68		84	21										51		
			74		85	24												
			黙 6		86													
			51		87													
					88													
					89													
					90													
					91													
					92													
					95													

十二 人名索引

[illegible]

第二部 山崎闇斎学派についての資料

山脇道立	遺	36
有谷氏	墨	30
有谷婆	墨	30
遊佐源右衛門 (木斎)	遺	14
揚雄	姫	5
與三左	墨	29
吉川惟足	遺	22
吉田兼雄	遺	47
吉田素庵	墨	15
吉田宗桂	墨	15
李延平	先	43
陸辰	墨	50
李初平	先	36
李白	墨	21
劉邦	墨	12
梁惠王	墨	31
臨濟	姫	6
冷泉為純	墨	2
老萊子	默	4

墨
4

十二 人名索引

若林強齋（新七）
和田儀丹
渡部越州
王仁

遺 遺 姫 遺
22 40 1 39
41
42
43
44
45
46
47
48
50
51
墨
34

第二部 山崎闇斎学派についての資料

十三 『孤松全稿』について—『黙斎艸』との関係

大久保 紀子

『孤松全稿』と『黙斎艸』はともに黙斎の著作集を指す名称である。この二つの名称について、我々の調査の結果から明らかになったことを整理し、それを通して『孤松全稿』の諸本およびその成立について考察する場合に必要な最も基礎的な部分を確定しておきたい。

(一) 黙斎の著作集の成立

梅澤芳男氏によれば、『孤松全稿』は黙斎の門人大木丹二^⑤によって編纂され、江戸在住当時の二五編の著作を収める前篇二五巻とその附録二巻、上総移住以降の二五編の著作を収める後篇二五巻とその附録二巻という構成であったとされている。この見解が正しいとすれば、大木丹二の没年である文政十(一八二七)年までに、前後の附録を合わせて計五四巻の『孤松全稿』が成立していたことになる。

梅澤氏の見解は、大木丹二が編纂したという根拠が示されていないために、またややおまかな記述であるために不明な部分がある。たとえば大木丹二が「編纂」したとあるが、まったく無の状態から黙斎の全集を独自に編纂したのか、あるいは何らかの形でまとめたものを整理したのであるか。また大木丹二

によって編纂されたことを認めたとしても、『孤松全稿』という名称の成立はいつなのであろうか。

後者の『孤松全稿』という名称の成立については、管見の限りでは確とした年代を示すことはできない。黙斎は天明五（一七八五）年、五十四歳の時に所謂「孤松庵」に移ったといわれ、後に引用する寛政六（一七九四）年（黙斎六十三歳）の『甲寅雜記』には「孤松庵」の署名が見られる。しかし『孤松全稿』という名称については手がかりが見えず後考を待つ。

前者の黙斎の著作全集の編纂過程に関しては若干の知見を得た。梅澤氏によれば、大木丹二によって編纂された黙斎の著作全集は五四巻本で、前編は江戸在住当時の二五編を収めるということである。我々が調査した千葉県山武市成東の元倡寺所蔵の『孤松全稿』の第一巻の内題に「孤松全稿 前編一」とあり、「前編」が存在したことは確かであろう。

前編にあたる二五編の自筆稿本は、すでに黙斎自身によってまとめられてあったと考えられる。『孤松全稿』の一〇巻の跋に「右艸稿凡二十五卷正信所筆也（中略）庚子歲暮^⑤」とある。「庚子」とは、黙斎が上総に居を移す前年、安永九（一七八〇）年（黙斎四十九歳）のことである。この年、黙斎はそれまでの著作二五編を成立年代順にまとめて整理し、それを上総に持ち込んだと考えられる。それが著作全集の前編二五編の原型となった。附録については、誰がいつ頃編集したものか不明であるが、梅澤氏が述べるように大木丹二の手によるものかとも考えられる。

では、上総に移ってからの著作である後編についてはどうかといえば、寛政六（一七九四）年（黙斎六十三歳）の『甲寅雜記』までは、黙斎がまとめた自筆稿本があったことが確実である。元倡寺本『孤松全稿』の『甲寅雜記』の跋に次のようにある。

右予草稿起乎姫島講義。時甫二十一歳。迨今茲甲寅齡實六十三。此冬有故欲賣之。小川氏聞之輒出小判五金買之。予大喜書其後。

孤松庵 默叟（花押）

右依小川氏藏本直寫之

（元倡寺所藏『孤松全稿』、三二卷）

右予の草稿、『姫島講義』に起こり、時に甫めて二十一歳、今茲に甲寅に迫んで、齡實に六十三。此の冬故有つて之れを売らんとす。小川氏、之れを聞き輒ち小判を五金を出し之れを買ふ。予、大いに喜んで其の後に書す。

孤松庵 默叟（花押）

右、小川氏藏本に依つて直に之れを写す。

小川氏とは迂斎、および默斎に学んだ小川省義（享保十九「一七三四」年—文化十一「一八一四」年）のことである。^③この時小川氏が買ったのは一六冊であつたという。後館林藩にそのうち八冊が渡り、あとの八冊は小川氏が所蔵していたらしい。^④右の引用文に「小川氏藏本に依つて直に之れを写す」とあるのはそれを示している。默斎の手元に默斎が「草稿」と呼ぶ、『姫島講義』から寛政六年の雜記に至るまでの自筆稿本がまとめられていたのである。

以上のことから、默斎の著作集は默斎自身の手によつて、江戸在住当時の二五編が安永九年（一七八〇）年（默斎四十九歳）までにまとめられ、上総移住後も、寛政六年（一七九四）年（默斎六十三歳）まで毎年

雑記が加えられていったと考えられる。売却後も黙齋は毎年雑記を記し、その死後、大木丹二かいずれかの者の手によって、売却された分も含め、附録を加えられて全著作集が成立したものと考えられる。

(1) 『孤松全稿』の諸本

黙齋自身の自筆稿本は、右に述べたように寛政六（一七九四）年（黙齋六十三歳）に一六冊が小川氏に売却されたが、現存かどうかは不明である。館林藩に渡ったと伝えられる八冊は維新の兵火で喪われたとされている。^②

写本については不明な部分が多い。上総道学の最後の学徒であった田中謙蔵（蛇湖）氏は、かつて『孤松全稿』の完本は無窮会と池上文庫にそれぞれ一部ずつあり、不完本は成東小学校蔵に二部、田中氏所蔵のものが一部あると述べていた。^③しかし、田中氏の子息、池上幸次郎氏によれば、完本が現在の山武市成東の小学校に二部、現在の山武市湯坂の田原氏所蔵本が一部、計三部あり、不完本は無窮会本、白石正邦本、吉田英厚本、池上氏所蔵本があるとのことである。^④

このうち所在が明らかなのは、無窮会神習文庫所蔵の三九巻本（完本）である。しかし、残念なことこの無窮会所蔵本の由来については不明であり、ここに何も述べることができない。

ほかに成東の元倡寺に前編の三冊、前編の附録、後編の六冊、後編の附録を欠く全三〇冊が所蔵されている。元倡寺本には「鈴木常蔵本記」という蔵書印があり、欠本である巻、および一、四、十一、十二、二四巻を除いたすべてに「稲葉黙齋先生遺稿 山武郡成東町 出品人 鈴木順蔵」という後題簽が付けられている。元倡寺本は、もとはといえば、代々「常右衛門」を名乗る現在の山武市湯坂の鈴木家の蔵書であった。

鈴木家については、平成十二年に湯坂にある鈴木家の二箇所の墓所を調査した山口巖氏によって系譜が明らかにされた。四代にわたる当主の号と生没年は次のとおりである。栄誠（宝暦十二「一七六二」年—天保八「一八三七」年）、栄順（文化二「一八〇五」年—明治十七「一八八四」年）、信順（天保四「一八三三」年—明治三九「一九〇六」年）、そして昭和十三（一九三八）年に七十七歳で没した鈴木順蔵氏と続く家系である。栄順は、鈴木養斎、および奥平棲遅庵に学び、また、信順は、父、栄順を凌ぐ字才を称された。

この元倡寺本を筆写したのは誰かといえば、二つの可能性が考えられる。一つは、健筆で知られ『孤松全稿』全三九巻を筆写して師養斎を驚かせたという栄順である。しかし、もし、山口巖氏のように筆写が黙齋の存命中になされたと考えれば、一代さかのぼって栄誠を筆写の主と考えることも可能である。

そのほか、『孤松全稿』の端本としては、千葉県立文書館の鎌倉家文書に合計四三冊がある。そのうち柱に「思齋蔵」とあつて梅澤芳男氏の蔵書であることがわかるものが一七冊、跋あるいは識から梅澤芳男氏の筆写であることが確実なものが二冊、「九鬼氏蔵書印」のあるものが一〇冊である。その他の端本とあわせると次の表一のように『孤松全稿』の後半にあたる部分が網羅されていることがわかる。つまり、鎌倉家文書の『孤松全稿』は「一〇（下）」以下の後半部分を写本や九鬼氏の蔵書、及び端本によって補うという意図のもとに集められたものであることが知られるのである。完本である無窮会神習文庫所蔵『孤松全稿』の巻番号をあげ、その該当分が千葉県立文書館鎌倉家文書にある（○）か否か（×）を柱、蔵書印別に示した。

新発田市立図書館は黙齋の著作の写本を多数所蔵しているが、そのうち『黙齋艸』の表記があるのは二冊、v09教書198とv09教書185である。前者は題簽に『黙齋艸』、内題に「黙齋艸卷一」、「黙齋艸卷二」の表記があり、「家蔵」、「新發田藩邸學問所」の蔵書印がある。後者は内題に「黙齋草卷十六」とあり、「新發田道學堂圖書印」、「家蔵」の蔵書印がある。

表一

無窮会所蔵本の巻番号。 (一)は分冊番号	柱に「思齋蔵」あるいは梅澤氏の跋、識をもつ写本	「九鬼氏蔵書印」のある写本	その他
一から一〇 一〇(下) 一一から二一まで 二二から二七まで 二八から三六まで 三七 三八 三九	× ○ ○ × × × × ×	× × × × × × ×	× × × ○ ○ × × ×

(三) 『孤松全稿』と『黙斎艸』

[1] 梅澤氏の見解

梅澤芳男氏によれば、『孤松全稿』も『黙斎艸』も稲葉黙斎の著作、語録の集大成であり、その所収している内容に違いはなく編集の方法が異なるだけであるとされている。⁽²⁵⁾ また、『黙斎艸』については、梅澤氏は、明治初年、後学が山崎闇斎の『垂加草』にならって『孤松全稿』を『黙斎艸』とよび、内容はそのまま

に巻数だけを三六巻、拾遺二巻、附録一卷の計三九巻に改めたものであると述べている。⁽¹⁶⁾『孤松全稿』では一巻一編であったものを改めて、一巻に複数編を所収し、全三九巻の『默齋艸』に編纂しなおしたというわけである。梅澤氏の見解をまとめれば、『孤松全稿』とは默齋の全著作集の五四巻本をいい、『默齋艸』とは同じくその三九巻本をいう。そして、『孤松全稿』の成立は文政十(一八二七)年以前、『默齋艸』の成立は明治初年にまで下るということになる。

しかし、梅澤氏の見解をにわかに信じることはできない。『孤松全稿』および『默齋艸』の成立については錯綜した事情があるうし、また確証となる文献を見いだせない以上、どのような見解も推測の域を出ないのであるが、少なくとも『默齋艸』の成立を明治初年であるとするのは無理である。なぜなら、新発田乙本(v09教書198)は「默齋艸卷一 姫島講義」という内題で始まる写本であるが、同じ頁に「新發田藩邸學問所」の印が押されているからである。新發田藩の江戸藩邸に學問所が設置されたのは、安永元(一七七二)年のことである。⁽¹⁷⁾

さらに、梅澤氏の見解では、默齋の全著作集を巻数の違いによって『孤松全稿』か『默齋艸』と呼ぶということがあるが、以下に述べる我々の調査によれば、默齋の全著作集を『默齋艸』と呼ぶ形跡は見い出せない。池上幸次郎氏は『孤松全稿』を三九巻四〇冊としている。⁽¹⁸⁾梅澤氏自身も、子安吟風筆「孤松全稿目錄」⁽¹⁹⁾の追補として記した文章の中で、本来ならば『默齋艸』と呼ばれるはずの三九巻本が『孤松全稿』と呼ばれていると述べている。つまり、五四巻本にせよ、三九巻本にせよ、默齋の全著作集はどのような場合でも『孤松全稿』と呼ばれ、『默齋艸』と呼ばれている例は調査の限りでは見えないのである。

[2] 調査の結果

五四巻本の『孤松全稿』は、管見の限りでは存在しないため、これについて考察を加えることはできない。しかし、無窮会神習文庫に三九巻本の、また千葉県山武市成東の元倡寺に最後の五巻を欠いた三四巻の『孤松全稿』が所蔵されている。これら二揃いの『孤松全稿』を調査した結果、『孤松全稿』と『黙斎艸』の関係について、梅澤氏とは異なる見方が可能であるという結論を得た。梅澤氏は『孤松全稿』と『黙斎艸』をいずれも黙斎の全著作集と考え、巻数だけが異なるものととらえているが、我々の調査によれば、『黙斎艸』とは黙斎の江戸在住当時の著作集であり、全著集である『孤松全稿』の一部であると位置づけることができる。『黙斎艸』として全著作集を編集することが企てられたことがあったのかもしれない。しかし、それは成立には至らず、『黙斎艸』は江戸在住当時の著作だけにどまったと考えられる。『孤松全稿』と『黙斎艸』の関係については、どのような見解も推測の域を出ないが、調査の結果にもとづいてこの仮説を提示してみた。^⑥

①『黙斎艸』の意義

後出の目録を一瞥すれば明らかなように、無窮会の神習文庫蔵および元倡寺所蔵の二揃いの『孤松全稿』は、梅澤氏が言う『黙斎艸』、三九巻の体裁をとっている。しかし、無窮会神習文庫所蔵本の三九巻にも、元倡寺所蔵本の三四巻にも、その全体を『黙斎艸』と呼ぶ形跡は見られない。たとえば、神習文庫所蔵本の場合は、第一巻に「孤松全稿目録」として三九巻の内容が記されており、所蔵分類上の名称も『孤松全稿』である。また、小口書に巻の番号が記されているが、第一巻や第五巻の小口書には番号とともに「孤松全稿」と記されている。さらに、第二巻では、所収している諸編の奥書に「孤松全稿」と記されている。元倡寺所蔵本では、題簽が剥落している、あるいは読めない場合を除けば、すべて「孤松全稿」という名称を含んだ

題簽がつけられている。我々が調査し得た『孤松全稿』は、いずれも三九巻本の『黙斎艸』の体裁をとりながら『孤松全稿』と呼ばれているのである。

ここで重要なのは、二揃いの書が『黙斎艸』と呼ばれるべき形をとりながら、『孤松全稿』と呼ばれているということではない。それならばすでに梅澤氏が指摘していることである。そうではなく、この二揃いの『孤松全稿』が示すことは、三九巻本においてもそれが黙斎の全著作集である限り『孤松全稿』と呼ばれるということなのである。そして、後述するように、どちらの『孤松全稿』においても『黙斎艸』の表記が一致して特定の部分だけに認められることに目を留めれば、これらの『孤松全稿』が、『黙斎艸』とは『孤松全稿』の一部であることを示していることに気づく。これが『黙斎艸』の第一義的な意味である。

次に『黙斎艸』の第二義的な意味について述べる。我々が調査し得た神習文庫所蔵本、及び元倡寺所蔵本の『孤松全稿』、そして千葉県立文書館所蔵鎌倉家文書の『孤松全稿』の端本、また新発田市立図書館所蔵の『孤松全稿』の端本の中の『黙斎艸』という表記の現れ方を一覧表にしてみると次のようになる。「『黙斎艸』の表記のある巻番号」の欄では神習文庫所蔵本と元倡寺所蔵本ではその巻数を示し、千葉県立文書館鎌倉家文書では該当する神習文庫所蔵本の巻数を示した。「『黙斎艸』の巻番号、附録の表記の有無」とはたとえば「黙斎艸巻三」あるいは「黙斎艸 附録」という表示があるか否かということである。「『孤松全稿』の表記の有無」の欄では、小口書あるいは題簽、内題に「孤松全稿」とある場合は有と記した。

表二

	神習文庫 所蔵本	元倡寺所 蔵本	千葉県立 文書館鎌 倉家文書
『黙斎艸』の表記 のある巻番号	一から一〇まで 一三	一から一〇まで	一〇にあたる一冊 一三にあたる一冊 三七にあたる一冊
『黙斎艸』の巻番号、 附録の表記の有無	有 無	有	有 無 無
『黙斎艸』の表記のある場所	各編の冒頭 冒頭 (黙斎艸 雑記 壬寅)	小口書、内題、各編の冒頭	冒頭 (黙斎艸 附録) 冒頭 (黙斎艸 雑記 壬寅) 冒頭 (黙斎艸 全書拾遺 完)
『孤松全稿』の表記 の有無	一、二、五巻のみ有 無	三巻を除き一から 一〇巻迄有	有 有 無

右の表から、『黙斎艸』の表記のある巻番号と、『黙斎艸』の巻番号、附録表記の有無の間に相関関係があることがわかる。『黙斎艸』の表記がある巻番号が、一から一〇までならば『黙斎艸』の巻番号が有り、巻番号が一以上になると『黙斎艸』の巻番号は無くなるのである。

これは偶然ではない。編集された『黙斎艸』ならば、当然『黙斎艸』としての巻番号が付されるはずである。『黙斎艸』の巻番号が付けられている第一巻から第一〇巻までは『黙斎艸』として編集された可能性が高い。そして、第一一巻以降はたとえ『黙斎艸』と冠せられていても、それは孤立した単編だったのではない。

いかと考えられる。この場合は、『黙斎艸』という名称が編集された著作集の名称としてではなく、黙斎の著作であるという意味で用いられているのではないだろうか。巻番号をとみなわない一一巻以降の『黙斎艸』は、このように理解することができる。

つまり、『黙斎艸』の第一義的な意味は『孤松全稿』の一部にあたる黙斎の著作集ということであるが、そのほかに、第二義的な意味として、孤立した単編に冠せられて黙斎の著作であることを示す場合があるということである。たとえば、表二の神習文庫所蔵本と千葉県立文書館鎌倉家文書の中に、『孤松全稿』の表記も、『黙斎艸』の巻番号、附録の表記もないながらも『黙斎艸』の表記をもつ写本が一冊ずつある。この二冊は『孤松全稿』からも独立して、また『黙斎艸』として編集された形跡も残さずに、『黙斎艸』と呼ばれる本があること、つまり『黙斎艸』が黙斎の著作であるという意味で用いられる場合があることを示している。

また、新発田市立図書館所蔵本の二冊は、神習文庫所蔵本でいえば、それぞれ一巻、六巻にあたるものでいずれも巻番号つきで『黙斎艸』という表記がある。これらは『黙斎艸』として編集された一〇巻の中の一冊を書写したものであろう。

②『孤松全稿』の中の『黙斎艸』の位置

表二から、神習文庫所蔵本と元倡寺所蔵本では一巻から一〇巻まで『黙斎艸』という表示があり、しかも『黙斎艸』の巻番号もあることから、『黙斎艸』が編集されたとするならば、これら二揃いの『黙斎艸』がその姿を示していると考えられる。

よって、神習文庫所蔵本と元倡寺所蔵本の一〇巻までの『黙斎艸』を対象として選び、第一義的な『黙斎

艸』の意味をさらに明らかにしていく。目録から明らかなように、神習文庫所蔵本でも元倡寺所蔵本でも、一巻の「姫島講義」から、一〇巻目の「奇峯録・示二三子談」までは一編ずつに「黙斎艸□」（□には、巻一あるいは単に一といった形で『黙斎艸』の巻番号を示す数字が入る）という表記がある。神習文庫所蔵本では各編の冒頭に、元倡寺所蔵本では小口書、及び各編の冒頭にその巻数とともに『黙斎艸』と記されている。表二からも明らかなように、『黙斎艸』とその巻数が冠されているのは、神習文庫所蔵本では一〇巻目までの二五編であり、元倡寺所蔵本ではそのうち三編を欠く。しかし、欠けている編を除けば、神習文庫所蔵本と元倡寺所蔵本との間に、編名と巻番号の対応について完全な一致が認められる。そして、『黙斎艸』という表記のある一〇巻までの二五編とは黙斎が江戸に在住していた時期の著作であり、一一巻以降は上総移住以降の毎年の雑記を主とする著作である。

つまり、我々の調査によれば、『黙斎艸』とは、第一義的には黙斎の江戸在住当時の著作二五編に付けられた名称であり、それは、本来の五四巻の『孤松全稿』の前編として編纂された部分にあたるということができる。『黙斎艸』は、黙斎の著作全体の編集を目指したものであったかもしれないが、全体としては成立にいたらず、江戸在住当時の著作だけにとどまったと考えられる。

ここで、黙斎自身が江戸を立つ前年、すでにこの二五編を自らの著作としてまとめていたことを思い起こす必要がある。梅澤氏がいうところの大木丹二によって編纂された『孤松全稿』も、黙斎自らの編集に従ったのであろうか、江戸在住当時の二五編を前編としてまとめていた。江戸在住当時の二五編は、当初から独立し得る一まとまりのものとしてとらえられていたのである。後年、それが『黙斎艸』と呼ばれるようになったのではないだろうか。現在、黙斎の著作全体を『黙斎艸』と呼ぶ例が見つからない以上、この仮説は充分に考慮に値すると考えられる。

以上、梅澤氏が述べる本来の『孤松全稿』の形からしても、また我々の調査の結果からも、『孤松全稿』が默斎の著作全体の呼称であることは確かである。江戸在住当時から上総での終焉まで、默斎の全生涯の著作集を『孤松全稿』と呼ぶ。そして、『默斎艸』とは、『孤松全稿』という默斎の全著作集のうちの、江戸在住当時の著作二五編を指す名称であると結論することができる。

【注】

(一) 名は忠篤。現在の千葉県東金市北幸谷の人。文政十(一八二七)年、六十三歳で没した。默斎に非常に愛された門人の一人で、『乙卯二句録』などを著した。

(二) 梅澤芳男編著『稻葉默斎先生と南総の道学』(ぺりかん社、一九八五年)、三四頁。

(三) 池上幸次郎「稻葉默斎先生(二)」、『東洋文化第百三十九號』、一九三六年、東洋文化學會、四五頁、梅澤芳男「默斎先生年譜」(前掲『稻葉默斎先生と南総の道学』、五四頁)。

(四) 目録参照。

(五) 『處士越復傳』解題参照。

(六) 原型というのは、自筆稿本は以下に述べるように売却され、大木丹二かいずれかの者が編纂した『孤松全稿』は写本であった可能性があるからである。

(七) 前掲『稻葉默斎先生と南総の道学』、一三〇頁。池上幸二郎編著『吾學叢書第一篇 稻葉默斎先生傳』(一誠堂書店、一九三五年)所収の「稻葉默斎先生傳附録」には小川精義としてのっており東士川の人とある。また小川省義が默斎の窮状を救うために默斎の著作を買ったいきさつについては、田原綱三郎「上総における山崎亭」(前掲『稻葉默斎先生と南総の道学』、一三〇頁—一三二頁)に述べられている。

(8) 同右。また黙齋の自筆の稿本の一部(『己酉雜記』(寛政元「一七八九」年)の部分)は前掲『吾學叢書第一篇 稻葉黙齋先生傳』の冒頭の迂齋、黙齋などの自筆の書を掲載している部分に縮小されてあげられている。

(9) 田中謙蔵「上総に於ける稻葉黙齋の遺蹟」、総人編『蛇湖小品文』所収、三頁。

(10) 同右。

(11) 「稻葉黙齋先生(完)」、『東洋文化第四百四十一號』(東洋文化學會、一九三六年)所収、四四頁。我々の調査によれば無窮会神習文庫所蔵本は完本である。

(12) 田原綱三郎「上総における山崎学」、前掲『稻葉黙齋先生と南総の道学』、一四八頁—一四九頁。

(13) 思齋は梅澤芳男氏の号である。山口巖氏によれば、梅澤氏は伊賀の書肆より『孤松全稿』を求めたが、不完本であったため、欠本にあたる部分を無窮会本を書写させて補って完本としたとのことである。後出の表二で無窮会神習文庫所蔵本の「壬寅 雜記」と千葉県立文書館の鎌倉家文書の「壬寅 雜記」の表記が一致しているのはそのためである。

(14) 鎌倉家文書の中に神習文庫所蔵本の巻数でいえば六卷に入るべき一編、『寸虎録』が所蔵されているが、省略した。

(15) 梅澤芳男「黙齋先生遺著要略」、前掲『稻葉黙齋先生と南総の道学』(ぺりかん社、一九八五年)所収。

(16) 前掲書、三七頁—三八頁。

(17) 新発田市史編纂委員会編『新発田市史上巻』(新発田市、一九八〇年、四五五頁)。廃藩は明治四「一八七一」年。

- (18) 「稲葉默斎先生（完）」、『東洋文化第百四十一號』（東洋文化學會、一九三六年）所収、四四頁。
- (19) 子安吟風は明治四十（一九〇七）年、七十七歳で没した。現在の東金市荒生の人。大木丹二の門人であった子安義知の子。朽木為斎に学び、閨流の和算家でもあった。
- (20) 元倡寺所蔵の『孤松全稿』は、欠本があり、また小口書に「默斎艸」という表示があつてやや問題を複雑にしているが、この二点は大勢に影響はないのでこたわらずに論を進めていくこととする。
- (21) 以下神習文庫所蔵本という。

第三部 上総道学についての関連論文と資料

◎『孤松全稿』所蔵一覧表

無窮会			燕木文庫	元倡寺		新発田市立図書館
巻 冊	一卷目録書名		書名	冊 黙齋艸	内容	No. 書名（外題）
1	1	姫島講義 [※] 餘論 堙旒録 三郎稿		1 黙齋艸 1 黙齋艸 2 黙齋艸 3	姫島講義 堙旒録 三郎稿	186 姫島講義 198 姫島講義 堙旒録 214 堙旒録 540 三郎稿
2	2	内艱割記 話録		2 黙齋艸 5	話録	196 黙齋先生話録
3	3	外艱割記 先君子行實 若松草		3 黙齋艸 6 黙齋艸 8	外艱割記 若松草	182 外艱割記 213 汪齋先生行實
4	4	處土越復傳 若松夜話 牛嶋随筆 先達遺事		4 黙齋艸 9 黙齋艸 10 黙齋艸 11	處土越復傳 若松夜話 牛嶋随筆 上中 下	203 先達遺事
5	5	墨水一滴 西遊轡録 新泉草		5 黙齋艸 13 黙齋艸 14 黙齋艸 15	墨水一滴 西遊轡録 新泉草	
6	6	排積録 寸虎録	寸虎録	6 黙齋艸 16 黙齋艸 17	排積録 寸虎録	185 排積録筆記
7	7	新屋筆録 再遊瑣録		7 黙齋艸 18 黙齋艸 19	新屋筆録 再遊瑣録	549 再遊瑣録
8	8	丁酉雜記		8 黙齋艸 20	丁酉雜記	
9	9	燕閑録 西南録 蹊蹊録		9 黙齋艸 21 黙齋艸 22 黙齋艸 23	燕閑録 西南録 蹊蹊録	180 燕閑西南二録 3 蹊蹊録
10	10	五句引 仲夏雜記 奇峯録 示二三子談		10 黙齋艸 24 黙齋艸 25	五句引 仲夏雜記 奇峯録 示二三子談	184 (学談) 五句引 (感興詩旁解) 296 奇峯録 252 示二三子談
10	10	附録 下	附録 拾 下			181 婦人の心得 184 学談 (五句引) 感興詩旁解 187 稲葉黙齋先生学談
11	11	辛丑雜記 上	辛丑雜記 上	11 雜記	雜記 辛丑 上	
12	12	辛丑雜記 下	辛丑雜記 中 辛丑雜記 下	12 雜記	雜記 辛丑 下	
13	13	壬寅雜記 上	壬寅雜記 上	13 雜記	雜記 壬寅 上	
14	14	壬寅雜記 下	壬寅雜記 下	14 雜記	雜記 壬寅 下	
15	15	癸卯雜記 上	癸卯雜記 (1-6)	15 雜記	雜記 癸卯 一	

十三 『孤松全稿』解題―『孤松全稿』と『黙斎艸』―

16	16	癸卯雜記 下	癸卯雜記 (7-8)		16	雜記	雜記 癸卯 二		
	17		癸卯雜記 (8-9)						
	18		癸卯雜記 (10-11)						
			癸卯雜記 (12-14)						
17	19	甲辰雜記	甲辰雜記 ①		17	雜記	雜記 甲辰	197	黙齋先生雜記 甲辰、戊申、己酉、乙卯 (→見花稿)
			甲辰雜記 ②						
18	20	乙巳雜記	乙巳雜記		18	雜記	雜記 乙巳		
19	21	丙午雜記	丙午雜記 ①						
	22		丙午雜記 ②						
20	23	丁未雜記	丁未雜記		20	雜記	雜記 丁未		
21	24	戊申雜記	戊申雜記		21	雜記	雜記 戊申		
22	25	己酉雜記	己酉雜記		22	雜記	雜記 己酉		
23	26	庚戌雜記	庚戌雜記		23	雜記	雜記 庚戌		
24	27	辛亥雜記	辛亥雜記		24	雜記	雜記 辛亥		
25	28	一六談柄 上	一六課會記 上中下					170	一六課会 上
	29								
26	30	一六談柄 下之一			26	雜記	一六談柄下之 一		
27	31	一六談柄 下之二							
	32								
	33								
28	34	壬子雜記 上	壬子雜記上	壬子雜記	28	雜記	雜記 壬子 上		
29	35	壬子雜記 下	壬子雜記下						
30	36	癸丑雜記	癸丑雜記	癸丑雜記	30	雜記	雜記 癸丑	781	雜記 癸丑
31	37	甲寅雜記	甲寅雜記	甲寅雜記	31	雜記	雜記 甲寅		
32	38	見花稿	見花稿	見花稿	32		見花稿		
33	39	雪梅草	雪梅草	雪梅草	33		雪梅草		
34	40	重雪草	重雪草	重雪草	34		重雪草		
35	41	六七録	六七録	六七録					
36	42	六八録	六八録	六八録					
37	43	拾遺上	全書拾遺	全書拾遺					
38	44	拾遺下	代魄録					78	代魄録
39	※	斯事談	斯事談						
※は分冊 No.なし。			私抄上						
			私抄下						

無窮会本…財団法人無窮会専門図書館（東京都町田市玉川学園）所蔵・神習文庫所収本（蔵書番号一三五一一三）。縦24・3 cm×横16・0 cm、表紙・格子縞灰色（ただし、七分冊・十_下分冊は格子縞青）。〔平成十二年六月十八日・七月九日調査〕

蕪本文庫本…千葉県立文書館所蔵・蕪本文庫（鎌倉家文書）所収本。縦27・4 cm×横19・7 cm、表紙・薄茶色、異なる体裁あり。〔平成十六年一月十七日調査〕

元倡寺本…元倡寺（千葉県山武市成東）所蔵本。縦24・3 cm×横16・7 cm、表紙・青。〔平成十五年九月七日調査〕

新発田本…新潟県新発田市立図書館所蔵本。体裁は区々。〔平成十二年七月二十五日調査〕

十四 『稻葉家譜』について

長野 美香

『稻葉家譜』は、延享四（一七四七）年七月下旬、稻葉迂斎（貞享元「一六八四」年—宝暦十「一七六〇」年）が著した自伝である。稻葉家の系譜に始まり、迂斎自身の経歴をたどるこの『稻葉家譜』は、次男・黙斎による『先君子行實』執筆時の主な情報源のひとつとなった。同書は、延享三（一七四六）年二月、迂斎が浜町の自宅を焼失、同年五月に新居が再建される記事で終わっている。当時、迂斎は六十三歳、この時期に自伝の書かれた理由は、延享三（一七四六）年の火災にあったのではないだろうか。つまり、火災で少なからぬ資料を失うなどした迂斎が備忘として書き付けたということである。

以下、参考として『稻葉家譜』全文を掲載する。底本は、茨城県立古河歴史博物館蔵『迂斎文集』巻一所収、旧・新字の別は底本に従った。また迂斎の年譜部分の年号に傍線を付した。なお、管見のかぎりでは、現存するテキストは以下の二種あり、字句等の相違は、該当箇所番号を付し、巻末に校異を記した。

①底本『迂斎文集』巻一、所収『稻葉家譜』。

「『迂斎文集』について」参照。

②『日本道學淵源録・續録』「巻之二」「稻葉迂斎先生」の項、所収『稻葉家譜』。

『日本道學淵源録・續録』巻之二（岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編『楠本端山・碩水全

『集』葦書房、一九八〇年）、所収。同書には訓点等は付されていない。

稲葉家譜

高祖稲葉姓越智氏諱直政號但馬守美濃曾根城主稲葉伊豫守義通第三子高祖妣某氏曾祖山本兵庫諱某直政第二子而為山本喜兵衛之後「喜兵衛初仕于東照宮源大君」後仕于尾張源公而改冒山本氏曾祖妣某氏祖父山本太夫諱正長仕于下總古河城主從四位下行侍從兼大煩頭土井利勝公與嗣君利隆公及利重公「正長寛文元年辛丑八月二十七日病没葬于江戸浅艸祝言寺」祖妣杉山氏「土井家臣杉山甚右エ門女也」延宝八年庚申十一月七日病没諱長慶院葬于浅草祝言寺父鈴木不休諱正則為鈴木源五左衛門政重「大番組与力」之後而改冒鈴木氏「正則幼名二郎九郎號六郎兵衛」後号五郎右エ門又致仕称不休前仕土井利重公後退為鈴木政重之後享保五年庚子十一月十日以病没于江戸麻布六本木一年八十一葬於江戸麻布櫻田町乘泉寺母鈴木氏諱久「正重」第三女也宝永四年丁亥正月廿日以疾没行年五十五正義乃正則第五子也長女兄殤「諱山」伯兄亦殤「号次郎八」天和年時以疾没行年八次兄稲葉源太夫「名通則幼名才三郎次源五右エ門次十左エ門次三左エ門後号源太夫」仕于水戸源公次兄鈴木端齊「幼名源次郎」後号源五左エ門致仕稱端齊繼家父之世為与力元文三年戊午七月五日以疾没行年六十女弟「名政為水戸源公臣麻田兵右エ門之配」正義以貞享元年甲子九月十七日生于江戸麻布六本木元禄九年丙子見三木信成「尚齊先生門人号治部左エ門宝永丁亥病没」始聞聖賢之道不可不學而竊有為学之志「正義時年十四」元禄戊寅之秋始見三宅先生「先生諱重固初号儀平又号儀左エ門」山崎先生

之門人而其德行學識最高矣初仕忍城主阿部公（二八）後退閑（二九）於京師（三〇）教授諸生（三一）學徒多矣（三二）後号丹次（三三）
（三八）稱尚齊先生（三九）益固爲學之志（四〇）元禄十二年（四一）己卯二月廿八日剃（四二）前髪（四三）略行成人之禮（四四）「時正義
 十六歲從是得父兄之許而博訪諸友」（四五）秋七月始見赤井直義（四六）「号傳左エ門（四七）綱齊先生之門人」
 聽近思錄及大学章句或問之講（四八）元禄十三年（四九）庚辰春見伴部安崇（五〇）「号武右エ門（五一）又稱重垣翁（五二）初
 從學山中久右衛門（五三）中見佐藤先生（五四）後專從跡部光海翁（五五）信垂加翁（五六）以誘諸生（五七）聽小学四子近思錄
 家禮及易詩書等之書（五八）同年（五九）見佐藤先生（六〇）「諱直方号五郎左衛門（六一）山崎先生之門人也備後福山人游于京
 師沒于江戸（六二）初應於備後福山城主水野侯之需（六三）為賓師（六四）晚應上野厩橋城主酒井侯之招（六五）亦為賓師（六六）資稟
 卓絕學識高明信從者多矣如其所造則非後學所敢議也（六七）大奮起竊略（六八）知聖學之道統全在周程張朱
 而於異端（六九）權謀百家之學（七〇）渙然不有所疑矣從是開講筵（七一）日講書焉（七二）宝永四年丁亥正月廿日遭内艱（七三）聊
 以禮斂葬喪中讀喪禮（七四）而切排世俗火葬之非（七五）同年六月應戸田君（七六）「初号二靱負（七七）後任二若狹守（七八）松平丹波守次
 男孫十郎之子也」之需（七九）客其家（八〇）為其家臣（八一）教授賜二月俸（八二）若干後卜宅於其邸中（八三）居數年宝永五年戊子
 夏四月為二學友數輩（八四）所招游于下総國古河（八五）留止旬日讀孟子近思錄之書（八六）又游于武藏國忍學友辻道德
（八七）之宅（八八）數日講大学及孟子等之書（八九）正徳改元辛卯春同二家兄（九〇）上京師（九一）再見三宅先生（九二）又始見二淺見
 先生（九三）「諱安正號二十二郎（九四）稱綱齊先生（九五）山崎先生之門人（九六）居于京師（九七）教授諸生（九八）焉（九九）博涉三經
 史（一〇〇）議論確実德望有餘自任道之重俗儒非所能及也（一〇一）留止三旬竊聞聖學之要領（一〇二）信學愈篤夏五
 月游于勢州山田（一〇三）又如駿河國府中草深（一〇四）「時戸田君蒙命為此地之加番」留止十日（一〇五）泉石游歷之間為二
 書生（一〇六）講書焉（一〇七）正徳五年（一〇八）乙未夏五月歷覽相模國鎌倉及江島及箱根堂嶋（一〇九）浴温泉（一一〇）同年（一一一）十二月廿六
 日（一一二）簀仕于土井侯（一一三）「諱利實号大炊頭（一一四）謚宝眞院常好（一一五）讀書令三正義（一一六）任二伴讀（一一七）焉（一一八）禮接不（一一九）衰後增二月俸（一二〇）
 又進班（一二一）「五〇」享保二年丁酉正月廿二日我君鍛冶橋之邸罹火災（一二二）同年（一二三）二月游二美濃國文珠槇氏邸（一二四）「号二

小進^ト「山崎先生之門人楨七郎左エ門元眞之子」尋^デ上京師^ニ「就見^ニ三宅先生^ヲ」聽^レ講^ヲ「朱易衍義易学啓蒙^{（五）}」及
周易本義^ノ「留止^{スル}幾五旬享保三年^{（五三）}」戊戌春蒙^ニ加恩^ヲ「扈^ニ從我君之采邑肥前國唐津^ニ」三月廿一日啓^レ行^ヲ「伴
讀之暇為^ニ諸生^ノ開^ニ講筵^ヲ」講^ヲ諸經^ヲ「明年己亥五月十五日東歸同年^{（五四）}」八月十五日佐藤先生卒^{（五）}與^ニ諸友相共禮葬^{（五五）}
服^ニ心喪^ヲ「享保五年^{（五五）}」庚子八月十九日^{（五七）}啓^レ行^ヲ適^ニ唐津^ニ同年^{（五八）}十一月十日遇^ニ外艱^ニ同月^{（五九）}
廿三日訃至明年辛丑五月東歸同年夏^{（六〇）}以^レ病請^ヲ閑退^ヲ不^レ許同年^{（六一）}進^ニ于使番班^ニ「享保七年壬寅三月西
行^ニ于唐津^ニ」同年十二月復^ニ姓稻葉^ニ「明年癸卯三月東歸同年八月五日娶^ニ武井氏五郎太夫勝征^{（六二）}之女^ヲ」同年^{（六三）}
十月啓^レ行^ヲ西適^ニ唐津^ニ「享保九年^{（六四）}」甲辰六月十六日生^ニ一男^ヲ「鉄次郎^{（六五）}」正直是也^{（六六）}同年^{（六七）}九月東歸
「享保十年^{（六七）}」乙巳再請^ニ閑退^ヲ堅不^レ許尋有^レ命占^ニ宅於邸外^ニ與^ニ学友^ノ「隨意會^レ之於^ニ是^ニ」是九月遷^ニ宅于江戸材
木町^ニ「新右エ門町是也」^{（六八）}「享保十一年^{（六九）}」丙午五月卜^ニ居於濱町^ニ「享保十三年^{（七〇）}」戊申三月啓^レ行^ヲ適^ニ唐
津^ニ同年^{（七一）}十月東歸享保十七年壬子十一月十三日生^ニ一男^ヲ「次男又三郎正信是也」^{（七二）}「享保十八年^{（七三）}
癸丑三月與^ニ学友^ノ「相伴啓^レ行適^ニ于京師^ニ」見^ニ三宅先生^ヲ「聽^ニ大学章句^ニ」正義亦得^ニ諸生之需^ヲ」^{（七四）}「蒙^ニ先生之命^ヲ
講^ス」講学鞭策錄^ヲ「留止^{スル}略三句^{（七五）}」從是至于撰津國大坂我侯之邸從駕^ニ「利実公時將^ニ參^ニ觀^ニ」于江都^ニ」六月六
日^{（七六）}東歸同月^{（七七）}十日世子出雲守利武公^ノ「諡^ス泰壽院^{（七八）}」以^レ疾終^{（七九）}「蒙^ニ命棺斂事成尋^{（八〇）}」元
文改元丙辰十一月廿四日我君利實公^{（八一）}以^レ疾終^{（八二）}「蒙^ニ命親^ヲ」^{（八三）}「棺斂畢焉」諡^ニ宝眞院^ト「葬^ニ于江戸浅艸誓願
寺^ニ」元文二年^{（八三）}丁巳春為^ニ嗣君利延公之伴讀^ト「元文三年^{（八四）}」戊午七月五日遭^ニ家兄喪^ニ「端齊正邑行年六
十^{（八五）}」元文四年^{（八五）}己未三月啓^レ行^ヲ適^ニ于京師^ニ」^{（八七）}見^ニ三宅先生^ヲ「聞^ニ中庸鬼神章講解^ヲ」正義依^ニ諸生之
需^ニ」^{（八八）}解^ニ中庸序及首章^ヲ「四月之^ニ于大坂^ニ」^{（八九）}從^レ駕^ニ「時利延公將^ニ參^ニ觀^ニ」」五月東歸元文六年^{（九〇）}辛酉
「即寛保元年^{（九一）}」正月廿九日三宅先生卒^{（九二）}于京師^ニ「行年八十葬^ニ于黒谷山^ニ」^{（九三）}「寛保三年癸亥五月十一日蒙^レ
恩賜^ニ二百石^ヲ」進^ニ班于持箇頭^ニ「利延公好^レ学信^レ道日微勤^ニ伴讀^ニ」^{（九四）}延享改元甲子三月十五日^{（九五）}啓^レ行^ヲ

從利延公適^ニ唐津^ニ屢^ニ召^レ侍^ニ講筵^ニ餘暇為^ニ諸生^ノ開^ス講孟及小学等書^ヲ時我君嬰^レ疾終不^レ起七月十六日終^ニ正
寢^ニ焉^一「行年廿^ニ諡^ス諡^ニ諱^ト其德行聞望大^ニ凡^ニ國人大痛惜^ス命^{ナル}哉^{ナル}哉^{ナル}與^ニ老臣^一相議親^カ斂棺^ニ葬^ニ
于唐津城南神田山^一八月朔葬畢八月十五日啓^ヲ行十月朔日東帰仕^ニ于嗣君利里公^一「利延公之弟^ノ蒙^レ命撰^ス先君
之碑銘^ヲ尋為^ニ伴讀^ト講^ニ大學論語孟子等之書^ヲ我君繼^ニ先君^一「宝眞院諱^ニ院之^一二君皆好^レ學^ヲ之志^ヲ講學
日新^ニ礼貌如^ニ先世^一更不^レ衰^ニ延享三年^一（二〇〇）丙寅二月晦濱町宅罹^ニ火災^ニ同年^一（二〇一）夏五月新宮^ニ今
宅^ニ集^ニ諸生^ヲ教授如^レ舊延享四年丁卯秋七月下旬識^ス
右稻葉家譜 嚴君迂齋先生所^ニ手記^{スル}也今著^{シテ}于此^ニ而^ニ（二〇二）便^{リス}觀覽^ニ云延享戊辰之春

男正信謹識

・『日本道學淵源錄・續錄』所収版（上記②）との校異

1 源大君—ナシ 2 從四位下行—從四位下 3 大煩頭—大炊頭 4 土井利勝公—土井利勝 5 利隆公—利隆
6 土井家臣杉山甚右エ門女也—ナシ 7 鈴木源五左衛門政重—鈴木氏 8 鈴木氏—其姓 9 幼名二郎九郎—
ナシ 10 號六郎兵衛—ナシ 11 又—ナシ 12 土井利重公—土井公 13 葬於江戸麻布櫻田町乘泉寺—葬江戸
櫻田町乘泉寺 14 正重—政重 15 乃正則第五子也—則第五子也 16 長女兄殤「諱山」伯兄亦殤「号次郎八天
和年時以疾没行年八」—長女兄伯兄皆殤 17 幼名才三郎次源五右エ門次十左エ門次三左エ門後号源太夫—ナシ
18 幼名源次郎—ナシ 19 後号源五左エ門—號五郎右衛門 20 為与力—同為與力 21 以疾没—以病没 22 水
戸源公臣麻田兵右エ門—水戸家臣麻田氏 23 有為學之志—起為學之志 24 元禄戊寅之秋—十一年戊寅 25
初号儀平又号儀左エ門—ナシ 26 退閑—閑退 27 学徒多矣—學徒甚衆矣 28 後号丹次—ナシ 29 元禄十二
年—十二年 30 而博訪諸友—遍訪諸友 31 元禄十三年—十三年 32 稱重垣翁—稱八重垣翁 33 山中久右衛

- 門——山中久右衛門〈頭注…直養按中山久右衛門矢野拙齋假名〉 34 等之書——等書 35 同年——是年 36 備後福山人游于京師没于江戸初應於備後福山城主水野侯之需為賓師晚應上野厩橋城主酒井侯之招亦為賓師——ナシ
- 37 而於異端——而異端 38 客其家——客于其家 39 之書——等書 40 辻道德——辻直德 41 等之書——等書 42 諱安正號十二郎稱綱齊先生——先生諱安正號綱齊 43 門人——門人也 44 居于京師教授諸生焉——ナシ 45 俗儒非所能及也——非俗儒所能及也○興成竊謂迂齋先生見佐藤淺見三宅三子各條下細註評三子數句其言各有少異者此先生之所以能知人而可謂立言不苟者矣三子之風采躍如乎數句之中矣此非後世陋儒阿其所好者之所能知也其識之高其心之公百歲之下使人欽慕矣 46 留止十日——留止 47 正德五年——五年 48 同年——ナシ 49 十二月廿六日——十二月二十二日 50 「諱利實号大炊頭諡宝眞院常好讀書令正義任伴讀焉礼接不衰後增月俸又進班」——ナシ
- 51 同年——ナシ 52 易学啓蒙——易啓蒙 53 享保三年——三年 54 同年——ナシ 55 與諸友相共禮葬——與諸友相共葬禮 56 享保五年——五年 57 八月十九日——八月十五日 58 同年——ナシ 59 同月——ナシ 60 同年夏——ナシ
- 61 同年——ナシ 62 勝征——勝正 63 同年——ナシ 64 享保九年——九年 65 鉄次郎——鉄次郎 66 同年——ナシ 67 享保十年——十年 68 「新右エ門町是也」——ナシ 69 享保十一年——十一年 70 享保十三年——十三年 71 同年——ナシ 72 享保十七年壬子十一月十三日生一男「次男又三郎正信是也」——ナシ 73 享保十八年——十八年 74 亦得諸生之需——亦應諸生之需 75 略三句——幾三句 76 六月六日——六月 77 同月——是月 78 「諡泰壽院」——ナシ 79 以疾終——以病終 80 棺斂事成尋——棺斂事成 81 利實公——ナシ 82 親——ナシ 83 元文二年——二年 84 元文三年——三年 85 元文四年——四年 86 啓行——ナシ 87 適于京師——適京師 88 依諸生之需——應諸生之需 89 之于大坂——之大阪 90 元文六年——六年 91 葬于黒谷山——ナシ 92 日徵勤伴讀——ナシ 93 三月十五日——三月 94 啓行——ナシ 95 大不凡——不凡 96 斂棺——棺斂 97 等之書——等書 98 日新——日進 99 礼貌如先世更不衰——禮貌不衰如先世時 100 延享三年——三年 101 同年——ナシ 102 而——以

十五 『迂齋文集』について

長野 美香

・古河市と稲葉迂齋のかかわり

先年、茨城県立古河歴史博物館の展示物の中に、偶然『迂齋文集』とその続編を見つけた。茨城県古河市はかつての古河藩の城下町である。宝暦十二（一七六二）年に、唐津より土井利里が七万石で入封し、以後廃藩まで土井家による藩治が続いた土地柄である。『迂齋文集』の著者・稲葉迂齋は、正徳五（一七一五）年から唐津藩土井家三代に仕え、その三代目が土井利里であった。それゆえ、迂齋に関する手がかりが何らか遺されているのではないかという期待はあったし、その可能性を探りに古河へ赴いたのではあったが、しかし、実際に『迂齋文集』十巻十冊、『續集』四巻四冊、『別集・附録』一冊、『迂齋先生卒年文稿』一冊、計十六冊ものの写本が現存し、しかも博物館にそのうちの一冊が展示されていたことは驚きであり、望外の喜びであった。

ちなみに、迂齋自身は土井家が古河へ転封になる二年前に没しているが、唐津時代に迂齋が尽力して成った藩校盈科堂は、土井家転封に伴い、そのまま古河に移転している。同書は、古河藩家老職であった鷹見家伝来の蔵書群に含まれていたものである。鷹見家は、家老にして蘭学者の鷹見泉石を輩出した名家であり、泉石については渡辺崋山の代表作「鷹見泉石像」（国宝）が知られている[※]。迂齋の著作も、このように文

運盛んな鷹見家だからこそ伝存し得たのであろう。

※泉石は、迂斎の仕えた土井利里より三代のちの土井利位に仕えた。藩主の大坂城代時代、大塩平八郎の乱において藩主を補佐して功績を残した。また泉石は蘭学者としてもすぐれ、土井利位著『雪華図説』の刊行を助けるなどしている。『雪華図説』は、土井利位が長年にわたる雪の結晶の観察の末にまとめた研究書である。（『藩史大事典』第二巻・関東編、「古河藩」の項、参照。雄山閣、一九八九年。）

・『迂斎文集』の特色

以下、茨城県立古河歴史博物館蔵本をたよりに、『迂斎文集』とその続編について、成立・特色を考えた。同博物館像の迂斎著作は計十六冊である。内訳は以下のとおりである。（題名は外題を採った。）

- 第1冊『迂斎文集 一』 第2冊『迂斎文集 二』 第3冊『迂斎文集 三』
- 第4冊『迂斎文集 四』 第5冊『迂斎文集 五』 第6冊『迂斎文集 六』
- 第7冊『迂斎文集 七』 第8冊『迂斎文集 八』 第9冊『迂斎文集 九』
- 第10冊『迂斎文集 十終』
- 第11冊『迂斎別集 附録 全』 第12冊『迂斎續集 一二三四 終』
- 第13冊『迂斎先生卒年文稿』

これら十三冊は、迂斎の著作全体から見て、同じ性質をもつ著作群と考えることができる。それは、これらが迂斎自身の手になる漢文体の書であるという点において、である。大別すれば、『迂斎文集』十巻十冊、『迂斎別集 附録』一卷・附録合一冊、『迂斎續集』四巻一冊、『迂斎先生卒年文稿』一卷一冊の四書であるが、この四書全体が『迂斎文集』と考えられるべきであって、『別集』や『續集』などは、『迂斎文集』

の『別集』、『續集』であることは言うまでもない。しかし、ここでは当面この四書を分けて、それぞれについて考えていきたい。

まず、『迂齋文集』全十巻である。『迂齋文集』の編纂方針については、『迂齋文集』巻一卷頭に目録が示されており、各巻毎に著作の種類が掲げられている。

巻一…詩 巻二…上書 巻三…序跋 巻四…書 巻五…贈答 巻六…十…雜著

巻一に付された序は、寛延元（一七四八）年二月、迂齋の長男・稻葉廓齋正直による。これは狭義の『迂齋文集』十巻についての序である。そこには「家弟正信恐其久而廢失」蒐輯之「更與正直」考訂之「謹藏」家」とある。また、同じ年に付された黙齋の識語にも、迂齋の著作のうち「僅存者盡于故篋既數十年正信兄弟竊恐其終廢壞以不傳因謹録之以藏于家」とある。この年、迂齋は六十五歳、実際、『迂齋文集』十巻は延享四（一七四七）年までの著作を収めている。

ちなみに、黙齋の編集着手の前年である延享四（一七四七）年七月下旬、迂齋自身の手によつて『稻葉家譜』が著されている。同書は迂齋の事績を知る上で貴重な史料であるが、延享三（一七四六）年二月、迂齋六十三歳、浜町の自宅の焼失、同年五月、新居再建の記事で終わっている。この『稻葉家譜』は、築地本願寺あたりに端を發した火災で過去の書付を失うなどした迂齋が、早急に備忘として書き付けたものであることが想像される。火災から二年、十七歳の黙齋が、「恐其久而廢失」れて、迂齋の長年の著作をまとめ始めた背景にも、単に「蠹」のみでなく、この火災の物理的・心理的影響があつたかもしれない。

次に『迂齋別集』は、寛延元（延享五）（一七四八）年を下限として、おおよそ『迂齋文集』と重なる時

期に書かれた雑著類である。ちなみに、『迂齋別集』は「附録」として「迂齋答問」を付している。「迂齋答問」は、それ自体に年月を示す書き込みはないが、『處士越復傳』には、元文五（一七四〇）年、黙齋九歳の折り、「講_二解經語_一詰_二難疑目_一」として、「侍_二父講筵_一退講_二一章或半章_一。集_二與_レ父詰難之語_一題曰_二迂亭答問_一。」（当時、迂齋五十七歳）という記事が見える。ここでの書名は「迂亭答問」である。また、『稻葉黙齋先生傳』にも同じ年の記事があるが、そこでの書名は「迂齋答問」であり、『迂齋文集』と同名である。いずれにせよ、「附録」はこの折りの問答であるが、他の著作と趣を異にするので、あえて「附録」として採録したものであろう。

一方『迂齋續集』は、末尾の一文に宝暦元（一七五一）年と記されている。この年、迂齋六十八歳、黙齋二十歳である。また、十三冊目の『迂齋先生卒年文稿』は、言うまでもなく迂齋卒年の著作である。迂齋が没したのは宝暦十（一七六〇）年十一月十日であるが、同書の巻末には、十一月九日、死の前日の迂齋の言葉が「易實語録」として掲載されている。識語は宝暦十年冬、長男廓齋正直によるものであるから、成立は迂齋の死の直後と考えてよいであろう。

ところで、これらの一連の巻のうち、『迂齋續集』までは、間断なく宝暦元（一七五一）年までの著作を採録しているのであるが、この翌年から迂齋没年の宝暦十（一七六〇）年以前の八年間に関しては完全に欠落している。迂齋の他の著作を確認しないと断定はできないが、あるいは、この八年間分もまた火災によって失われたのかもしれない。なぜなら、宝暦十（一七六〇）年二月六日に神田旅籠町辺で発生した火災によって、迂齋は自宅を再度焼失しているからである。迂齋は、火災の直前一月六日に発病しているので、この罹災はかなりの肉体的・精神的苦痛であつただろう。

『迂齋先生卒年文稿』には、「病中漫記」として、発病以後・火災以前と見られる小文が七編掲載されて

いる。これが、宝暦元（一七五二）年に著作が途切れて以来最初のものであるが、しかし、また火災以前には、実にこの七編の小文以外見出せないのである。この七編の次にあたる火災直後二月二十六日の一文には、「予病幾^{シト}瘥^ヘ未^レ復^レ常又遭^ニ火家屋盡^ク為^ニ灰燼^ト」と記されている。直前までの筆勢を考えれば、この欠落した八年間にも相当量の著作をなしたのではないかと想像される。火災で失われたものとすれば、名物といわれた江戸の火事が実に容赦ない惨事であったことが窺われるが、場合によっては、今後この八年間の著作が見出されるかもしれない。以上は臆測にすぎない。

とはいえ、『先君子行實』に掲げられた迂齋の著作書目などから見ても、広義の『迂齋文集』は、やはり上掲の四書十三冊で完結していると思われるべきであろう。ちなみに、現在『迂齋文集』の所在を確認できるのは、茨城県立古河歴史博物館のほかには、国立国会図書館・鶚軒文庫、および新潟県新発田市立図書館の旧新発田藩蔵本である。このうち国会図書館・鶚軒文庫は『迂齋文集』十卷三冊、『別集』一卷一冊のみであるが、新発田市立図書館は広義の『迂齋文集』以外にも、迂齋の著作をいくつか収蔵している。これらについては、今後、古河県立歴史博物館蔵本との比較検討を行う予定がある。

・茨城県立古河歴史博物館蔵『迂齋文集』目録

以下は、上述の茨城県立古河歴史博物館蔵本の目録である。各巻ごとに外題を示し、そのうち各内題ならびに各文書名を列挙した。なお、『迂齋文集 一』、『迂齋別集 附録 全』、『迂齋續集 一二三四 終』、『迂齋先生卒年文稿』原本の巻頭にはそれぞれ目録が付されているので、まずそれを書き起こした。ただし、同目録には年月日などの情報が欠けているため、本目録では、（ ）内に各文の見出し（題名）を、また記載のあるものに関しては年月日などを付して掲載することとした。

『迂齋文集 一』

家大人文集序

吾 老大人発見_二于_三宅先生_一中親_レ炙_二于_三佐藤先生_一先生没後復從_二于_三宅先生_一受学_二于_三兩先生_一數年
其他與_二同学_一切磋亦有_レ年常以_二講_レ書談_一道為_レ務矣是以於_二詞章記文之事_一則更不_レ留_レ意也雖然
交接之間或答_二人書_一或應_二人之需_一及又有_レ適_レ意則漫賦_レ詩之類幾至_レ成_レ快也適家弟正信恐_二其久而
廢失_一蒐_二輯之_一更與_二正直_一考_レ訂之_一謹藏_レ家云爾

延享戊辰春二月男正直謹序

稻葉家譜

延享戊辰之春男正直謹識

稻葉十左衛門墓

稻葉鐵次郎越智正直立

稻葉先生文集目錄

迂齋先生文集卷之一

詩

三月偶感（三月盡偶感）

遊江州石山寺二首（四月四日遊江州石山寺即興 丁酉 二）

東寺二首（遊東寺即事 丁酉）

（同）

東山二首（東山 丁酉）

（同）

金閣寺即興（金閣寺 丁酉）

四月餞別三宅先生（四月十九日朝餞別三宅先生 丁酉）

偶作（偶作）

題金錢花（題金錢花得雨喜 庚子）

藝州偶作（藝州洋偶作 庚子）

防州灘（防州灘 庚子）

朝晴（朝晴 庚子）

防州船中憶古鄉（防州舟中憶古鄉 庚子）

長州漫成（長州洋漫成 庚子）

豫州海上吟（豫州海上吟 庚子）

賡知耻之韵（賡知耻之韵 庚子）

下關瀨（下關瀨 庚子）

題潮（題潮 庚子）

唐城偶感（唐城偶感 庚子）

庚子漫成（漫成 庚子）

西州憶故鄉偶作二首（西州憶故鄉偶作）

（同）

偶作（偶作）

與三宅先生別于海安寺（与三宅先生別于海安寺）

拜直方先生（壬寅八月望日恭拜直方先生）

十五夜偶作（十五夜偶作）

望拜顯祖考忌日（八月廿七日望拜顯祖考忌日 壬寅）

遊西濱二首（遊西濱 壬寅）

（同）

賡邵子韻二首（適讀邵子安分吟有感竊賡其韻 壬寅 二）

（又賡其韻以慕晋士）

偶感（偶感 壬寅）

題水仙（題水仙 壬寅）

題松（題松 壬寅）

拜聖廟二首（拜聖廟有感二首 壬寅）

訪見借隱人正固（訪見借隱人正固）

轎裏有感（轎裏有感 壬寅）

過御油驛示一門生二首（過御油驛示一門生 壬寅）

（同）

坂下偶作（坂下偶作）

感偶（感偶）

憶先師偶作（仲秋望日憶先師偶作 乙巳）

家君遠諱（家君遠諱 乙巳十一月十日）

乙巳冬至偶感（乙巳冬至偶感）

漫成（漫成）

丙午九月十三夜（丙午九月十三夜野田永井佐藤之三丈會于愚亭時月明星稀情話闌々因賦鄙詞以述其意）
拜亡友與正尹之墓（丙午九月廿五日亡友與正尹君大祥忌拜其墓）

丙午游品川東海寺（丙午十月十七日与野田兄永井兄游品川東海寺有感卒賦）

賡剛齋君新歲之吟（賡剛齋君新歲之吟）

（同）

丁未先師靈筵有感（享保丁未八月望日拜先師之靈筵竊有感）

丁未冬題乞人之松（享保丁未之秋野田丈游總上州姉崎村過小松原茲游矮舍其側有卓立孤松風影尤奇因問馬僕此舍誰舍此松誰松馬僕笑曰此舍乞人之舍此松乞人之松也野田丈歎息嗚呼此奇松如在顯家之苑人之賞觀亦不之矣猶人之有才德在下位世終不能聞也然唯之松也美德囂囂不為乞人損其德凡天物不違於天之美者亦如此予聞之竊有感自筆記綴小詩属其後）

丁未冬至（享保丁未冬至）

春日即事（春日即事）

戊申之秋喪心友小杉君（戊申之秋喪心友小杉以長君痛哭之餘宣鄙情）

己酉正月望讀節要（享保己酉正月望日心友集會于茅屋其共讀朱子節要有感因賦）

己酉賡酒井修敬之韵（酒井修敬享保己酉秋移居於予舍之側且以詩示予因卒賡其韵）

觀紅葉有感（觀紅葉有感 己酉）

題盆水（卒題盆水）

庚戌元旦自警二首（庚戌元旦將試毫而不知文不識詩只信口成數句聊述鄙懷以自警）

（因警）

五月游兩國橋上（庚戌五月与野田野沢二君暫游于武總兩國橋上時雲盡月清野田君云澄景良好看矣人但難值昇平之時何屑々於外誘以不知此樂耶予有感因賦）

十三夜偶吟（庚戌十三夜偶吟）

拜亡友奥氏之墓（庚戌九月廿五日拜亡友奥氏之墓）

庚戌立春卒賦（庚戌立春卒賦 十二月廿九日）

和長島侯高韻二首（謹奉和長島大守之高韻）

（同）

題雪（題雪 壬子）

與旧友友別大坂三日（与旧友別大坂）

（同）

（同）

賀利實侯病愈（賀利實侯病愈 壬子）

癸丑試毫（癸丑試毫）

春雪漫成（春雪漫成 甲寅正月）

遭吾君利實侯之喪即事（十一月下旬遭吾君利実公之喪即事）

丁巳歲旦拜利實侯墳（丁巳歲旦拜謁利實侯之墳）

和中村君之韻（中村君有新年之佳作山宮氏賡其韵予亦效顰漫味其韻云 己未）

讀節要憶永井兄二首（於埜田兄之亭讀節要因憶亡友永井兄 庚申八月廿日）

（同）

賡幸田君之韵二首（賡幸田君之韵 辛酉）

（同）

賡增山公致仕之高韻（恭奉賡增山公致仕高韵）

感偶（感偶）

拜矢作氏之墳（癸亥三月十五日詣本所猿江慈眼寺拜矢作氏某君之墳）

陪游致仕增山公之別莊（癸亥閏四月陪游致仕增山公之別莊）

癸亥拜謁利勝公墳（我君烈祖古河城主寶地院故拾遺從四位下兼大倉令土井侯今日適及千百年之忌辰于時寬保癸亥七月十日也家臣稻葉正義拜其碑稽（稽）首謹述微意其詩云）

藝州西条即興五首（藝州西条路中即興甲子初夏）

（第二）

（第三）

（第四）

（第五）

四十八坂即事二首（同四十八坂即事）

（第二）

周防七曲即興（周防七曲即興 甲子）

和利延公之高韻二首（恭奉賡利延公之高韻 甲子）

和利延公松浦川高韻（恭奉廣利延公松浦川之高韻 甲子）

陪従利延公田獵（甲子五月十一日吾君利延公田獵于封内僕亦陪従焉因賦一章）

憶亡兄廣堯夫之韻（甲子七月五日於肥前唐津憶亡兄竊廣堯夫之韻）

乙丑待諸賢來訪（乙丑上元日待諸賢來訪）

遊墨水次平清慎韻二首（遊墨水次平清慎之韻 乙丑）

（同）

次水原保明之韻（同次水原保明之韻）

冬至漫成（冬至漫成 乙丑）

廣佐久間君之韻（暮春佐久間君有佳作廣其韻）

丁卯孟夏遊真間（丁卯孟夏日泛舟葛西邊与渡邊信統信貞矢作勝美及男正信同遊于國府臺真間下）

遊真間路中即興二首（同路中即興）

（同）

題弘法寺楓（題真間山弘法寺楓）

總寧寺（總寧寺）

國府臺（國府臺）

丁卯游品川東海寺（丁卯四月廿七日與野田剛齋翁同步游于品川東海寺）

訪亡友永井君墳墓（訪亡友永井君墳墓）

迂齋先生文集卷之二

上書

上利實侯（上利實侯）

割子（割子）

對利實侯問目（對利實侯之問目 壬寅十月）

對利實侯問祭祀儀割子（對利實侯問祭祀儀之割子）

上利実侯（上利實侯）

甲辰對利實侯問目割子（對利實侯之問目 甲辰夏五月）

上利実侯（上利實侯 甲辰五月）

甲辰割子（割子 享保甲辰七月十三日）

乙巳割子（割子 享保乙巳十月十六日）

己酉割子（割子 享保己酉十月十八日）

上利実侯（上利實侯 享保庚戌十二月十五日）

上利實侯書并追幅上利實侯（上利實侯 享保辛亥四月廿二日）

（追副）

割子（割子 八月十三日）

上利実侯（上利實侯 享保甲寅十二月十八日）

上利延侯（上利延侯 寛保癸亥九月廿六日）

『迂齋文集 三』

迂齋先生文集卷之三

序 跋

送加藤氏帰筑州序（送加藤氏帰筑州序 正徳乙未春三月）

王学論談序（王学論談序 正徳丙辰孟春）

贈時田国正序（贈時田国正序 享保甲辰秋七月）

送奥正岑序（送奥正岑序 享保乙巳孟春月）

送久米貞固帰唐津序（送久米貞固帰唐津序 享保丁未三月十三日）

與小杉善長字序（與小杉氏字序 享保戊申秋）

送山宮維深游京師序（送山宮維深游京師序 并詩 享保癸丑十月）

并詩

送渡邊高遠行棚倉序（送渡邊高遠行棚倉序 享保甲寅仲秋）

送山宮維深適羽州序（送山宮維深適羽州序 享保乙卯夏五月）

贈男正直序并戒（與男正直序并戒）

送或人帰羽州序（送或人帰羽州序 元文丁巳夏五月）

與武井敬勝字序（與武井敬勝字序 元文丁巳秋八月）

贈岡野進三序（贈岡野進三序 元文四年己未四月十九日）

與小川三異字序（與小川三異字序 元文庚申十一月）

送竹内茂昆帰庄内序（送竹内茂昆帰庄内序 寛保壬戌四月朔旦）

送藤田通志帰大垣序（送藤田通志帰濃州大垣序 延享乙丑六月）

跋火葬辨（跋火葬辨論）

跋脫然說（跋脫然說 正徳壬辰夏五月）

跋無情辯（記無常辨筆記後 正徳三年癸巳七月十日）

跋養子辨（跋養子辨 正徳乙未孟夏）

跋妙字說（跋妙字說 正徳丙申六月）

跋加藤氏簡（跋加藤氏簡 己亥九月十四日）

記野田徳勝丈居喪說後（記野田丈居喪說後）

跋尚齋先生與増山侯書（跋尚齋先生與増山侯書 享保甲辰之夏）

跋平山季好簡（跋平山季好簡 享保庚戌九月廿日）

記利実公讀史論後（記利實公讀史論後 辛亥六月二日）

記蟲災考後（記蟲災考後 享保壬子冬）

跋後藤氏論說（跋後藤氏論說 壬子十二月）

跋大道寺氏簡（跋大道寺氏簡 癸丑十一月）

跋永井行達論嬰子御製（跋永井行達論嬰子御製 乙卯閏三月）

記川野氏自警文後（記川野氏自警文後）

跋榎並正固簡（跋榎並正固簡）

書久米氏論說之後（書久米氏論說之後）

跋武井勝始簡（跋武井勝始文）

跋天木時中簡（跋天木時中簡 元文丙辰十月十八日）

記吉川崇廣文武筆記後（書吉川崇廣文武割記後 寛保壬戌九月）

『迂齋文集 四』

迂齋先生文集卷之四

書

與見的（與見的書 正徳壬辰仲呂月）

與或人（與或人）

與出淵守行（與出淵守行 乙未孟冬晦日）

答榎並正固（答榎並正固 享保戊戌孟冬）

上佐藤先生（上佐藤先生 戊戌閏月）

與出淵守行（與出淵守行 庚子六月十九日）

與松平仲生（與松平仲生 享保乙巳十一月）

與佐藤就正（與佐藤就正 享保丁未十月廿三日）

答金澤修軒（答金澤修軒 享保甲寅二月）

上三宅先生（上三宅先生 享保丙辰四月）

答三宅先生（答三宅先生）

答藥袋氏（答藥袋宴樂 元文丁巳四月廿六日）

答平野直道（答平野直道 元文戊午二月）

答味池直好（答味池直好）

答長野氏（答長野氏 壬戌四月三日）

答吉武法命（答吉武法命 延享甲子夏）

答浦野種智（答浦野種智 延享乙丑冬日）

答長野氏（答長野氏）

答平野直道（答平野直道 延享丁卯之秋）

『迂齋文集 五』

迂齋先生文集卷之五

贈答

與小杉左生（與小杉左生 正徳六年丙辰二月二十九日）

與或人（與或人 丙辰四月十八日）

示武井勝始（示武井勝始 享保二年丁酉）

示諸生（示諸生 享保三年戊戌中春）

與一學者（與一學者 戊戌四月）

示一門生（示一門生）

示林逸八 二（示林逸八 享保三年戊戌五月）

（示林逸八）

答大関氏（答大関氏）

示石黒尚義（示石黒尚義 享保戊戌十月）

與東氏（與東氏 戊戌冬日）

與林逸八（與林逸八 享保四年己亥三月十日）

與時田國正 二（與時田國正 己亥四月十一日）

（與時田國正）

與渡邊半七（與渡邊半七 己亥六月）

與石黒尚義 六（與石黒尚義 享保四年己亥六月廿一日）

（示石黒尚義 己亥七月十一日）

（示石黒尚義 己亥八月二十四日）

（示石黒尚義 己亥八月廿八日）

（示石黒尚義 己亥九月）

（與石黒尚義 己亥九月）

與武井勝始（與武井勝始 己亥九月二十二日）

示中村團生 四（示中村團生）

（示中村團生）

（與中村團生 己亥十月朔日）

（与中村團生 己亥十月二日）

示石黒尚義 二（示石黒尚義 己亥十月）

（示石黒尚義 己亥十月廿七日）

與加藤氏（與加藤氏 享保己亥）

示武内弘篤 六（示武内弘篤 享保五年庚子正月）

（示武内弘篤）

（示武内弘篤）

（示武内弘篤）

（示武内弘篤 庚子）

（示武内弘篤 庚子）

示久米貞固（示久米貞固 庚子）

與船橋生（與船橋生 庚子）

答石黒尚義（答石黒尚義 享保五年庚子）

（示石黒尚義 享保五年庚子）

（與石黒尚義 庚子）

示忠豐丈（示忠豐丈）

與中村團生（與中村團生 庚子）

示林逸八（示林逸八 享保庚子）

與渡邊半七（與渡邊半七 享保五年庚子）

示二三子（示二三子 享保六年辛丑正月）

示諸生（示諸生）

與榎並正固（與榎並正固）

與吉武法命 二（與吉武法命）

（與吉武法命）

與榎並正固（與榎並正固）

與堀欣吾 二（與堀欣吾 享保七年壬寅十一月廿七日）

（與堀欣吾 享保八年癸卯孟春）

示潮田氏 二（示潮田氏 享保九年甲辰夏六月九日）

（與潮田氏）

與或人（與或人 享保十年乙巳正月廿一日）

答久米貞固（答久米貞固 享保十年乙巳十二月廿四日）

示一學士（示一學士）

答或人（答或人）

示一學生（示一學生）

與一學士（與一學士）

示諸生（示諸生）

與一学徒（與一學士）

（示諸生）

（示一學徒）

與堀丈（與堀丈 享保十四年己酉十月）

（與堀丈）

與鈴木左門次（與鈴木左門次 享保十五年庚戌十一月）

與齋藤貞志（與齋藤貞志 享保十八年癸丑孟秋日）

與石黒尚義（與石黒尚義 元文四年己未夏五月朔旦）

與男正信（与男正信 寛保改元辛酉夏四月）

與幸田丈（與幸田丈 寛保改元辛酉夏五月）

與或人（與或人 寛保二年壬戌三月）

與鵜澤喜内（示鵜澤喜内 寛保二年壬戌七月）

與正信（與正信）

與厚齊（與厚齋 寛保三年癸亥四月）

與男正信（與男正信 延享二年乙丑八月）

示興津義信（示興津義信 延享三年丙寅之夏）

諭男正直（諭男正直 延享四年丁卯七月）

諭男正信（諭男正信 延享四年丁卯七月下旬）

『迂齋文集 六』

迂齋先生文集卷之六

雜著

為学説（為学説 正徳辛卯仲呂日）

答友部安崇辯為学説（答友部安崇辯為学説 正徳辛卯十一月）

初学藁蕪辯（初学藁蕪辯 正徳五載乙未八月）

（享保丙辰仲秋直方跋）

（享保癸卯春三月 記初学藁蕪辯後）

『迂齋文集 七』

迂齋先生文集卷之七

雜著

榎秀武記事（榎秀武記事 正徳五年乙未三月三日）

祭先君子文 二（祭先君子文 享保辛丑正月十三日）

（祭先君子文 享保辛丑十一月十日）

利益侯遺事（利益侯遺事 享保甲辰四月廿四日）

出淵守行叙事（出淵守行叙事）

祭沢一盲人文（祭澤一盲人文）

祭出淵守行文（祭出淵守行之靈文 享保丁未八月廿四日）

先君子遺事（先君子遺事 元文三年戊午冬十一月十日）

少君遺事（少君遺事 元文五年庚申九月）

渋谷君記事（渋谷君記事 寛保元年辛酉春三月）

祭三宅先生文（祭三宅先生文 寛保二年歲次壬戌春正月廿九日己丑）

源夫人碑銘（順善院源夫人碑銘 寛保二年壬戌冬十一月日）

榊原正甫墓表（榊原正甫墓表）

利延侯碑銘（利延侯碑銘 延享元年甲子八月日^マ）

『迂齋文集 八』

迂齋先生文集卷之八

雜著

讀書漫記（讀書漫記 凡二十六通）

（戊戌三月）

（享保戊戌十一月朔日）

（戊戌十二月十八日）

（己亥八月）

（己亥九月廿五日）

（享保乙卯十二月十四日）

（享保癸丑冬）

（享保癸丑十一月）

（享保癸丑十一月）

（壬戌秋）

（延享乙丑十月朔旦）

〔※他、見出しなし〕

讀太極西銘二解跋（讀太極西銘二解跋 享保丙辰）

戒一學士（戒一學士）

喜見君父師（喜見君父師 享保丁酉孟春三日）

喻愚俗（喻愚俗 享保戊戌仲春）

有感悟記（有感悟記 享保戊戌十二月十七旦）

己亥自警（自警 己亥六月）

讀四教要論（讀四教要論 己亥八月）

論大学白鹿洞揭示（論大学白鹿洞揭示）

觀器物有感（觀器物有感）

實理說（實理說）

庚子有感悟（有感悟 庚子）

庚子有感悟書（有感悟書 庚子）

立春有感（立春有感 享保己酉臘月十八日）

書男鉄児小学書之後（書男鉄児小学書之後）

辛亥自警（自警 享保辛亥臘月十八日）

雪夜歌并序（雪夜歌并序 享保壬子冬）

讀和漢事始（讀和漢事始 元文丁巳秋）

迂齋先生文集卷之九

雜著

論藤原仲光之事（論藤原仲光事 正徳壬辰仲秋日）

温泉説（温泉説 正徳乙未中夏）

見經説（見經説 享保改元丙申八月）

中字説（中字説 享保己亥四月十四日）

榜学舎（榜学舎 享保辛丑春）

復姓文并詩（復姓文并詩 享保壬寅二月）

誌久米氏館亭（誌久米氏館亭）

盈科堂記（盈科堂記 享保甲辰春三月）

題唐津書窓柱（題唐津署窓柱 甲辰之夏）

讀論衡刺孟論陳仲子章（讀論衡刺孟論陳仲子章）

君臣之義説（君臣之義説）

答或人（答或人）

答或人（答或人）

答或問為学筆記（答或問為学筆記）

讀通書勢章（讀通書勢章）

見寒山集（見寒山集）

見伊勢物語（見伊勢物語）

論四十六士之奉上杉家不発徒之事（論四十六士之奉上杉家不発徒之事）

答四不出日之問（答四不出日之問）

禁倡家俳優説（禁倡家俳優説）

戒矜説（戒矜説）

必変説（必変説）

葬埋説（葬埋説 乙巳七月廿四日）

追書（追書）

論易序古太極古河圖（論易序古太極古圖書 戊申五月廿五日）

誠意之説（誠意之説 享保壬子七月）

題中村氏之團（題中村氏之團 戊午七月廿二日）

讀張子全書（讀張子全書）

答或人祝予壽（答或祝予壽 寛保癸亥孟夏日）

示諸友（示諸友）

見困知記（見困知記）

見淮南子（見淮南子）

狗上屋説（狗上屋説 延享丙寅四月十八日）

見北條五代記（見北條五代記 延享丁卯夏）

見湖艸（見湖艸 丁卯九月）

戲題煙艸（戲題煙艸）

辯議變化氣質說（辯議變化氣質之說 延享丁卯冬）
諭家人（諭家人）

『迂齋文集 十終』

迂齋先生文集卷之十

雜書凡三十七條（雜書凡三十七條）

（乙未孟春月）

（正徳乙未春月）

（享保丙申九月廿二日）

（享保丁酉十月）

（享保戊戌正月）

（戊戌孟春）

（享保戊戌）

（戊戌季秋六日）

（享保戊戌十二月廿八日）

（己亥七月十三日）

（己亥七月望）

（己亥七月望日）

（己亥八月）

(己亥八月十四日)

(己亥十月三日)

(己亥十月十日)

(庚子)

(庚子)

(庚子)

(庚子)

(庚子)

(庚子)

(庚子)

(庚子十二月)

(壬寅)

(享保壬寅十二月十一日)

(享保乙巳十一月廿三日)

(享保丁未九月六日)

(享保戊申春)

(享保戊申初秋日)

(享保己酉九月十四日)

(享保己酉閏九月)

(享保己酉閏九月廿三日)

(享保庚戌十一月廿一日)

(享保乙卯歲十二月廿六日)

「※他、見出しなし」

右家大人文集初稿凡十卷其文稿之不_レ存者不_レ可_二追索_一僅存者蠹于故篋既數十年正信兄弟竊恐_二其終廢壞以不_レ傳因謹錄_レ之以藏_二于家_一云

延享戊辰之春男正信謹識

『迂齋別集 附録 全』

迂齋先生別集目錄

迂齋先生別集

書齋側之柱 (書齋側之柱)

讀祭祀來格說筆記 (讀祭祀來格說筆記 延享丁卯秋七月)

跋隱微說 (跋隱微說 享保二年丁酉七月)

記與正直聖學圖之後 (記與正直聖學圖之後 享保十七年壬子閏五月)

與正直 (與正直 寛保壬戌正月)

記訓門人割記後 (記訓門人割記後)

答中村義方 (答中村義方)

答野澤弘篤（答野澤弘篤）

示諸友（示諸友 享保丁未四月）

答正信疑目（答正信疑目 乙丑丙寅）

答或人 四（答或人）

（答或人）

（答或人）

（答或人）

祭先君子文 大祥（祭先君子文 大祥 享保七年壬寅十一月十日）

禪祭文（禪祭文 壬寅十一月廿三日）

少君忌日詩（少君忌日詩）

少君忌日詩并序（少君忌日詩并序 享保戊申正月十九日）

拜直方先生文（拜直方先生文 享保壬寅八月望日）

直方先生記事（直方先生記事）

先君子小祥之明日自警（先君子小祥之明日自警 辛丑十一月）

利延侯之誌石（利延侯之誌石）

上利實侯 四（上利實侯 享保辛亥十二月十四日）

（對利実侯之間 庚戌十一月二十二日）

（上利實侯 享保乙卯仲夏下旬）

答金澤脩軒（答金澤脩軒 庚戌十一月二十二日）

答或人（答或人）

與或人（與或人）

與井上生（與井上生）

與永尾生（與永尾生）

與一學生（與一學生 庚子冬）

與鷹見生（與鷹見生）

答出淵生（答出淵生 己亥八月）

與岡野生（與岡野生）

記武内弘篤酒箴後（答武内弘篤酒箴之後）

與石黒尚義（與石黒尚義）

與久米貞固（與久米貞固）

記岡野氏文之後（記岡野氏文之後 癸卯十二月）

答藥袋宴樂（答藥袋宴樂）

與或人（與或人）

答或人（答或人）

答或人（答或人）

書水江孫市筆記之後（書水江孫市筆録之後 延享丁卯八月）

答或人（答或人）

示一門生（示一門生）

答或人（答或人 戊午秋）

書正信文字後（書正信文字後）

題鏡（題鏡）

題浮貼（題浮貼 延享丁卯歲二月朔旦）

跋壺石碑（跋壺石碑）

漫記（漫記 丁卯秋八月十八日）

跋永井丈文（跋永井丈文 寛保改元辛酉八月十九日）

跋天木氏書（跋天木氏書 延享乙丑四月八日）

讀書漫記（讀書漫記）

（享保辛亥七月十七日）

（享保辛亥十二月）

（乙巳四月九日）

（享保己亥八月廿八日）

（享保甲寅孟春）

（寛保壬戌秋八月）

（寛延戊辰冬）

（寛延戊辰冬十一月）

〔※他、見出しなし〕

與久米貞固（與久米貞固）

答或人（答或人）

答正信（答正信）

過筑州姪濱憶亡友澤一（過筑州姪濱憶亡友澤一）

肥州崎即事（肥州濱崎即事 戊申四月）

賡山宮君新歲之韻 二首（賡山宮君新歲之韻 壬子）

（又）

雨後會學友（雨後會學友 甲寅二月）

游原邸園即事（游原邸園即事 甲寅四月三日）

四月四日游龜井戸（四月四日游龜井戸）

見一樹有感（見一樹有感）

（偶感）

臘月九日聞雪漫成（臘月九日聞雪漫成）

試毫（試毫 癸卯）

玄海漫成 二首（玄海漫成）

（又）

唐津示諸生（唐津示諸生）

筥根湖水漫成（筥根湖水漫成）

吉原瞻富士（吉原瞻富士）

奉和利實侯雪後高韻（奉和利實侯雪後高韻）

游原邸之園中即興（游原邸之園中即興 辛亥十月二十三日）

暑中偶感（暑中偶感）

憶学友（憶学友 戊申歳）

冬日偶作（冬日偶作）

次山宮君之韻（次山宮君之韻）

答藥袋氏（答藥袋氏 元文戊午五月十日）

雜記（雜記）

（辛巳歳）「※内容から考えて「辛丑歳」の誤りであろう。」

（享保丁未三月）

（享保丁未四月）

「※他、見出しなし」

答野澤生 二（答野澤生 享保丁未三月廿一日）

（答野澤生近思録謝湜自蜀之京僦条之間 丁未）

因兒病偶作（因兒病偶作 丁未）

與武井敬勝生（與武井敬勝生 元文戊午三月）

與潮田郷生（與潮田郷生 元文戊午三月）

答吉川道元（答吉川道元 壬戌）

書三瓶氏筆記之後（書三瓶氏筆記後 戊申十二月）

答野沢生（答野沢生 享保丁未五月廿二日）

上利実侯（上利実侯 甲辰十月十四日）

上利実侯（上利実侯 丁未）

答多田氏（答多田氏問 甲辰）

謝惠寒梅（謝惠寒梅 甲辰十二月）

麿長谷川某之韻（麿長谷川某之韻 甲辰）

與出淵生（與出淵生 甲辰三月）

答吉武團（答吉武團 甲辰四月）

與時田乙三郎（與時田乙三郎 享保甲辰閏四月三日）

顯妣諱日（顯妣諱日 甲辰春）

麿合田氏韻（麿合田氏韻 甲辰）

書三宅先生答或人書後（書三宅先生答或人書後 甲辰六月望）

答土岐時習（答土岐時習 甲辰六月廿八日）

呈天木時中（呈天木時中）

誌德子棺蓋（誌德子棺蓋 享保十九年甲寅七月五日）

（誌鳥山氏蒞女棺蓋 享保廿年乙卯八月廿四日）

常徳院武井婦人小傳（常徳院武井婦人小傳）

示正信（示正信 九月二日）

答正信（答正信）

喪禮不可不素講説（喪禮不可不素講説）

書武井主守書後（書武井主守書後 己亥冬）

迂齋先生別集附録

迂齋答問

『迂齋續集 一二三四 終』

迂齋先生續集目錄

迂齋先生續集卷之一

戊辰之歳凡十通

與正直正信（與男正直正信 延享戊辰五月）

送竹内茂菟歸庄内序（送竹内茂菟歸庄内序 延享戊辰六月）

送仲淵甫適姫路序（送仲淵甫適姫路序 寛延改元戊辰秋八月）

上利里侯文并詩（上利里侯文并詩 寛延戊辰九月）

祭妹政女文（祭令妹政女文 寛延戊辰秋九月下旬）

鈴木氏小傳（鈴木氏小傳 寛延戊辰冬十月）

澤一小傳并跋（澤一小傳并跋 寛延戊辰十月）

記澤一小傳後 寛延戊辰冬）

答正信（答正信）

示正信（示正信 寛延戊辰閏十月廿日）

答児等并新婦（答児等并新婦 戊辰臘月廿九日）

迂齋先生續集卷之二

乙巳之歲凡二十八通

諭學者（諭學者 寛延二年己巳正月昨旦）

元旦江戸橋即興（己巳元旦江戸橋即興）

見老子経（見老子経 寛延己巳春）

見二十四孝（見二十四孝 寛延己巳春二月）

奉送利里侯序（奉送利里侯序 三月五日）

示默齋（示默齋）

見年中故實（見年中故實 己巳四月）

與土州執政福岡孝紀（與土州執政福岡孝紀 己巳孟夏望）

病中偶作二首（病中偶作二首 己巳五月）

（又）

病中漫記（病中漫記 寛延己巳夏五月）

與大木剛中字序（與大木氏字序）

與水江孫市（與水江孫市 己巳夏日）

與曲直瀬良仙（與曲直瀬良仙 寛延己巳六月）

記廓齋之柱（記廓齋之柱 寛延己巳六月）

答福岡孝紀（答福岡孝紀 寛延己巳八月十六日）

奉次横渠先生之韻（奉次横渠先生之韻）

喜友人東訪即興（喜友人東訪即興 九月三日）

生靈死靈論（生靈死靈論 己巳秋九月）

遊東海寺二首（遊東海寺二首 九月十日）

（又）

望亡友服部守義舍（望亡友服部守義舍）

拜服部守義之墓（拜服部守義之墓 十月四日）

讀岩淵夜話（讀岩淵夜話）

送關戸氏歸唐津序（送關戸氏歸唐津序 寛延二年己巳十一月五日）

與鵜澤近義（與鵜澤近義 寛延己巳十一月）

與猪瀬藤吉（與猪瀬藤吉 寛延己巳之冬）

答明石要（答明石要）

（答明石要）

（答明石要）

（答明石要）

觀池亭記（觀池亭記 寛延己巳冬）

答平野直道（答平野直道）

迂齋先生續集 卷之三

庚午之歳凡三十二通

容膝堂記（容膝堂記 寛延庚午春）

與各務氏（與各務氏 寛延庚午春）

春日即興（春日即興 庚午）

遊四谷中野桃園（庚午二月望與武井猪瀬二生遊于四谷中野桃園 庚午二月）

遊忍岡（二月廿日與武井氏遊忍岡）

與南條氏字序（與南條氏字序 寛延庚午二月廿八日）

讀列女傳漫記（讀列女傳漫記 寛延三年三月五日）

跋薩摩守忠度之歌（跋薩摩守忠度之歌）

讀平家物語（讀平家物語 寛延庚午四月）

送或人歸東序（送或人歸東序 庚午初夏）

示一門生（示一門生 庚午孟夏日）

送仲淵甫歸厩橋序（送仲淵甫歸厩橋序 寛延庚午夏五月望）

見武藏野風（見武藏野風 寛延庚午夏五月）

送男正信適日光山序（送男正信適日光山序 庚午五月二十五日）

日光山詩（日光山詩五首 庚午夏日）

利延侯遠忌（利延侯遠忌 寛延庚午七月十六日）

讀小学有感書斎壁（讀小学有感書斎壁 寛延庚午七月）

與正信君臣之義說（與正信君臣之義說 寛延庚午八月）

記深艸元政壁書後（記深艸元政壁書後 寛延庚午十月廿日）

答村士行藏卜筮說（答村士行藏卜筮說 寛延庚午十月）

答村士行藏中國説（答村士行藏中國説 庚午冬十一月）

答村士行藏神道説（答村士行藏神道説 庚午十二月）

與武井氏守序（與武井氏字序 寛延庚午十一月望）

（與猪瀬氏字序 寛延庚午十二月）

與原氏字序（與原氏字序 寛延庚午十二月）

記井上感通詩倭歌後（記井上感通詩倭歌後 寛延庚午冬十二月）

題達磨畫（題達磨畫）

戲書正信扇（戲書正信扇）

尚志齋記（尚志齋記 庚午獵月）

跋剛齋厩戸説（書厩戸辯説後 寛延庚午冬）

喜多川婦人小傳（喜多川婦人小傳 寛延庚午冬十二月）

讀忠経（讀忠経 寛延庚午十二月）

迂齋先生續集 卷之四

辛未歳凡三十一通

立春（立春）

正月二十日先妣諱辰（正月二十日先妣諱辰）

答村士行藏（答村士行藏 辛未正月）

遊亀井戸（遊亀井戸 二月十二日）

看臥龍梅（看臥龍梅）

詣羅漢寺（詣羅漢寺）

訪故新婦順女之墓（訪故新婦順女之墓 二月十八日）

上利里侯（上利里侯 寛延四年三月廿四日）

送芹澤氏（送芹澤氏）

答村士行藏（答村士行藏 辛未四月十一日）

遊相州詩 二十首（遊相州詩 二十 寛延辛未四月）

竊賡横渠先生韵（竊賡横渠先生韻）

書佐藤先生文後（書佐藤先生文後 辛未六月）

中村逸齋記事（中村逸齋記事）

漫記（漫記 辛未閏六月）

答或人（答或人 辛未七月）

曾根氏字序（曾根氏字序 寛延辛未七月）

望品川海邊（望品川海邊 九月三日）

東海寺即興（東海寺即興）

御殿山眺望（御殿山眺望）

示諸生（示諸生）

感偶 二首（感偶）

（又）

諸齋壁示二三子（諸齋壁示二三子）

與長尾氏（與長尾氏 寛延辛未冬）

跋佐藤先生真跡（跋佐藤先生真跡 寛延辛未秋）

跋永井行達録後（跋永井行達録後 寶曆改元辛未十一月十二日）

告多田氏令郎名之説（告多田氏令郎名之説 寶曆改元辛未十一月廿七日）

讀枕草子（讀枕草子 寶曆改元辛未十一月十三日）

與正信（與正信）

示二三子（示二三子 寶曆改元辛未十二月廿一日）

見三先生説（見三先生説 寶曆改元辛未十二月）

『迂齋先生卒年文稿』

題先君子卒年文稿

先君子之書

文集 十卷

續集 四卷

別集 一卷

雜稿 三卷

和書集 五卷

續和書集 五卷

學話 二十八卷

在_レ世時既編次焉而固未_レ脱_レ稿也今編_二卒年文稿_一為_二一卷_一又類_二集學話附錄若干卷_一以旁載
四方門人小子之善知_二先君子_一而信_レ之之醇者讀_レ焉可也

庚辰冬 男 正信謹書

先君子卒年文稿目錄

先君子卒年文稿 男 正直 訂 男 正信 輯

病中漫記凡九道（病中漫記凡九道）

〔※第一、見出しなし〕

（第二 正月十七日）

（第三 正月二十一日）

（第四 正月二十一日）

（第五 二十三日）

（第六 二十七日）

（第七 庚辰二月二日）

（第八 二月二十六日）

（第九）

跋中山氏再嫁説（跋中山氏再嫁説 五月十二日）

新屋落成題柱（新屋落成題柱 實曆庚辰五月七日）

與和久田生（與和久田生 五月）

題齋壁（題齋壁 五月）

題柱（題柱）

示正直（示正直 寶曆庚辰五月二十三日）

稲葉圓齋記事（稲葉圓齋記事 五月二十二日）

完倉氏名説（完倉氏名説 寶曆庚辰秋七月）

應一書生之需書（應一書生之需書凡四通 庚辰七月）

名孫女説（名孫女説 庚辰七月）

録野田徳勝語（録野田徳勝語 庚辰七月）

病中漫筆凡六道（病中漫筆凡六道）

〔※第一、見出しなし〕

（第二 九月二十六日）

（第三）

（第四 庚辰十月七日）

（第五）

（第六）

十月即興（十月即興 十一日）

永訣揮筆凡七道（永訣揮筆凡七道）

〔※第一、見出しなし〕

（第二）

（第三 十月十四日）

(第四)

(第五) 十月十七日)

(第六) 十月十四日)

(第七) 寶曆庚辰十月)

酬長谷川生(酬長谷川生 寶曆庚辰十月念一日)

示二兒(示二兒 十一月朔)

易寶語錄 凡五條(易寶語錄 十一月九日)

先君子在_レ世以_三講_レ學誨_二諸生_一為_レ任得_レ疾廢_二講會_一有_レ日每以為_レ恨既沒未_レ日家弟正信編_二卒年文稿_一讀_二之喪次_一又授_二一二門人_一示_二平素講學之任以_レ疾不_レ衰相共勉勵云

宝曆十年冬 男正直 謹識

第三部 上総道学についての関連論文と資料

十六 稻葉迂斎・黙斎年譜

長野 美香

凡例

一、本年譜は主として以下の文献の記事により作成した。なおこれらの文献の所在については、各解題に示したので、ここでは省略するものとする。

稲葉黙斎「先君子行實」『孤松全稿』巻三、所収。

稲葉黙斎「稻葉家譜」『迂斎文集』巻一、所収。

稲葉黙斎「處土越復傳」『孤松全稿』巻四、所収。

林潜斎「稻葉黙齋先生傳」（付録・岡直養「林潜齋事略」）池上幸二郎編著『吾學叢書第一篇・黙齋

先生傳』（内題『稻葉黙齋先生傳』）神田小川町池上方・黙斎学会編、一誠堂書店、一九三五年、所収。

また、特に出典を示していないものは、『日本道學淵源録・續録』、『崎門學脈系譜』（岡田武彦、荒木見悟、町田三郎、福田殖編『楠本端山・碩水全集』葦書房、一九八〇年、所収）により、大名の没年は木村礎他編『藩史大事典』（雄山閣出版、一九八八～一九九〇年）による。

一、年譜の項目は、年号、干支、西暦年号、迂斎の年齢、黙斎の年齢、内容の順である。

一、「内容」項の出典は「」に入れて、各末尾に付した。出典略号は以下のとおり。

「姫島講義」↓「姫島」 「先君子行實」↓「先君子」

「稻葉家譜」↓「家譜」 「處士越復傳」↓「越復伝」

「稻葉黙齋先生傳」↓「黙齋伝」 「林潜齋事略」↓「事略」

※上記以外、関係者の事績を※印の下に記した。また、その他の同時代の事項を※※として、適宜末尾に付した。

年号	干	支	西暦	迂	黙	内 容
天和2	壬	戌	1682			※山崎闇齋、没。享年六十五。
天和3	癸	亥	1683			
貞享1	甲	子	1684	1		9月17日、迂齋、江戸麻布六本木に生まれる。「先君子」「家譜」
貞享2	乙	丑	1685	2		
貞享3	丙	寅	1686	3		
貞享4	丁	卯	1687	4		
元禄1	戊	辰	1688	5		
元禄2	己	巳	1689	6		
元禄3	庚	午	1690	7		
元禄4	辛	未	1691	8		
元禄5	壬	申	1692	9		
元禄6	癸	酉	1693	10		※※井原西鶴、没。享年五十二。

十六 稲葉迂斎・黙斎年譜

元禄 16	元禄 15	元禄 14	元禄 13	元禄 12	元禄 11	元禄 10	元禄 9	元禄 8	元禄 7
癸未	壬午	辛巳	庚辰	己卯	戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌
1703	1702	1701	1700	1699	1698	1697	1696	1695	1694
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
※※赤穂浪士討入。			※※契沖、没。享年六十二。 ※※徳川光圀、没。享年七十二。			迂斎、初めて三宅尚斎の門人三木信成と知り合う。「先君子」 迂斎、初めて三宅尚斎に会う。「先君子」 のこととする。 ※※木下順庵、没。享年七十八。			※※松尾芭蕉、没。享年五十一。
			迂斎、春、伴部安崇に会い、『小学』『四子』『近思録』『家礼』『易』 『詩書』等を学ぶ「家譜」 迂斎、佐藤直方に師事する。「先君子」「家譜」 ※※徳川光圀、没。享年七十二。			迂斎、初めて三宅尚斎に会う。「先君子」 迂斎、初めて三宅尚斎に会う。「先君子」 のこととする。 ※※木下順庵、没。享年七十八。			※※松尾芭蕉、没。享年五十一。
			迂斎、春、伴部安崇に会い、『小学』『四子』『近思録』『家礼』『易』 『詩書』等を学ぶ「家譜」 迂斎、佐藤直方に師事する。「先君子」「家譜」 ※※徳川光圀、没。享年七十二。			迂斎、初めて三宅尚斎に会う。「先君子」 迂斎、初めて三宅尚斎に会う。「先君子」 のこととする。 ※※木下順庵、没。享年七十八。			※※松尾芭蕉、没。享年五十一。

宝永 1	宝永 2	宝永 3	宝永 4	宝永 5	宝永 6	宝永 7	正徳 1
甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛
申	酉	戌	亥	子	丑	寅	卯
1704	1705	1706	1707	1708	1709	1710	1711
21	22	23	24	25	26	27	28
※※伊藤仁斎、没。享年七十九。		1月20日(↑「家譜」のみ) 迂斎母(鈴木氏)、没。「先君子」[家譜]		4月、迂斎、友人長谷川克明ら(↑「先君子」のみ)に招かれて、下総古河城で『孟子』『近思録』を講ず。また忍城に辻道徳を訪ね、『大学』『孟子』等を解す。「先君子」[家譜]		春、迂斎、兄端斎に従い、京都へ赴く。「先君子」[家譜]	
		迂斎、『火葬論』を著す。「先君子」		※※富士山、宝永の大噴火。		迂斎、京都で三宅尚斎に再見する。「先君子」[家譜]	
		6月(↑「家譜」のみ)、迂斎、若狭守戸田君の客となり、月俸若干を受け、芝三田の邸内に移る。「先君子」[家譜]		※三宅尚斎門人・三木信成、没。		迂斎、浅見綱斎に会う。「先君子」[家譜]	
						※※徳川綱吉、没。徳川家宣、将軍宣下。	

十六 稻葉迂斎・黙斎年譜

享保 2	享保 1	正徳 5	正徳 4	正徳 3	正徳 2	
丁	丙	乙	甲	癸	壬	
酉	丙	未	午	巳	辰	
1717	1716	1715	1714	1713	1712	
34	33	32	31	30	29	
2月、迂斎、美濃文珠に模元真の子、小進を訪ねる。〔先君子〕子〕〔家譜〕	1月22日、鍛冶橋唐津藩邸、罹災。迂斎、巢鴨別邸に転居。〔先君子〕	夏、迂斎、鎌倉、江ノ島、箱根（堂ヶ島温泉）に遊ぶ。〔家譜〕12月26日（↑〔家譜〕のみ）迂斎、唐津藩主土井利実の伴読（大番班・月俸二十口↑〔先君子〕のみ）に任ぜられる。〔先君子〕〔家譜〕	鍛冶橋の唐津藩邸に転居。〔先君子〕	※※徳川家嗣、没。徳川吉宗、將軍宣下。	※※徳川家嗣、没。徳川吉宗、將軍宣下。	5月、迂斎、伊勢山田、駿河府中草深をまわり、駿府の戸田君へ立ち寄って講義をする。〔先君子〕〔家譜〕※12月1日、浅見綱斎、没。60歳。

享保 7	享保 6	享保 5	享保 4	享保 3	
壬	辛	庚	己	戊	
寅	丑	子	亥	戌	
1722	1721	1720	1719	1718	
39	38	37	36	35	
3月、迂斎、土井利実の唐津行きに従う。〔先君子〕〔家譜〕	<p>階を進め、使番に任ぜられる。〔先君子〕〔家譜〕</p> <p>君子〕〔家譜〕</p> <p>6月15日、迂斎、病と称して退職を願い出るが、許されない。〔先君子〕〔家譜〕</p> <p>5月、迂斎、江戸へ帰る。〔先君子〕〔家譜〕</p>	<p>※※漢訳洋書輸入緩和。</p> <p>11月23日、父の訃報が唐津に届く。〔先君子〕〔家譜〕</p> <p>11月10日、迂斎父不休、没。〔先君子〕〔家譜〕</p> <p>8月19日、迂斎、唐津に行く。〔先君子〕〔家譜〕</p> <p>春、土井利実、唐津に帰る。〔先君子〕</p>	<p>8月15日、佐藤直方、没。〔先君子〕〔家譜〕</p> <p>5月15日、迂斎、江戸へ帰る。〔先君子〕〔家譜〕</p>	<p>子〕〔家譜〕</p> <p>3月21日、迂斎、藩主の参勤に伴い唐津に赴き、講義する。〔先君子〕〔家譜〕</p> <p>春、迂斎、加恩（十口）。〔先君子〕〔家譜〕</p>	<p>義』を授かる。〔先君子〕〔家譜〕</p> <p>その後、京都で三宅尚斎に会い、『朱易衍義』『易学啓蒙』『周易本</p>

十六 稲葉迂斎・黙斎年譜

							12月、迂斎、本姓稲葉に復することを願い出て許される。〔先君子〕 〔家譜〕
享保 8	癸	卯	1723	40			3月、迂斎、江戸へ帰る。〔先君子〕〔家譜〕 8月5日、迂斎、妻（武井氏）を娶る。〔先君子〕〔家譜〕 10月、迂斎、唐津に遣わされる。〔先君子〕〔家譜〕
享保 9	甲	辰	1724	41			春、土井利実、藩校盈科堂を設立、迂斎、教官となる。〔先君子〕 6月16日、迂斎長男正直、江戸に生まれる。〔先君子〕〔家譜〕 9月、迂斎、江戸に帰る。〔先君子〕〔家譜〕 ※※近松門左衛門、没。享年七十二。
享保 10	乙	巳	1725	42			迂斎、再び病と称して退職を願い出るが、許されない。〔先君子〕 〔家譜〕 9月、迂斎、藩邸を出て、江戸材木町に転居。〔先君子〕〔家譜〕（↑ 〔家譜〕は「江戸材木町」とした上で、割注に「新右エ門町是なり」とする。） ※佐藤直方門人・大神澤一、没。享年四十二。 ※※新井白石、没。享年六十九。
享保 11	丙	午	1726	43			5月、迂斎、浜町山伏井戸に転居。〔先君子〕〔家譜〕（↑〔家譜〕は「浜町」。）

享保 18	享保 17	享保 16	享保 15	享保 14	享保 13	享保 12	
癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	
丑	子	亥	戌	酉	申	未	
1733	1732	1731	1730	1729	1728	1727	
50	49	48	47	46	45	44	
2	1						
子」[家譜] 3月、迂斎、佐藤就正や上総の学生たちと京都に行き、三宅尚斎から『大学』講義を授かる。迂斎、『講学鞭策録』を講ず。「先君子」[家譜] ※※享保の飢饉。	※※享保の飢饉。 斎伝」[家譜] 11月13日、迂斎次子黙斎、浜町山伏井戸に生まれる。「先君子」[黙斎] 西国に蝗害発生、迂斎、永井行達『蟲災考』跋を書く。「先君子」 藩主土井利実、『人物辨』を著し、迂斎、同書に略言を付す。「先君子」	『迂斎文集』「上書」の日付は12月15日) 12月5日、迂斎、藩主土井利実を上書して諫言する。「先君子」(↑		※※萩生徂徠、没。享年六十三。	※土井家家臣・小杉以長、没。 10月、迂斎、江戸へ帰る。「先君子」[家譜] 3月、迂斎、唐津へ遣わされる。「先君子」[家譜]	※※大坂懷徳堂設立。	

十六 稲葉迂斎・黙斎年譜

元文 3	元文 2	元文 1	享保 20	享保 19	
戊	丁	丙	乙	甲	
午	巳	辰	卯	寅	
1738	1737	1736	1735	1734	
55	54	53	52	51	
7	6	5	4	3	
7月5日、迂斎兄端斎、六十歳で没。[先君子][家譜]	春、迂斎、伴読に任ぜられる。[先君子][家譜] 黙斎、「正信小学」を著し、諸子を品題す。[越復伝][黙斎伝](↑ 「黙斎伝」は『越復小学』、「諸子品題」という書名にしている。)	三宅尚斎、迂斎を来訪。[黙斎伝] 11月14日、唐津藩主土井利実、没。[先君子][家譜]([家譜]は 24日) 唐津藩嗣侯利延、襲封。[先君子] 迂斎、『幼君補佐説』を家老に与える。[先君子] ※天明時中、没。享年四十一(一説に四十)。	※※室鳩巢、没。享年七十七。	※※江戸で打毀。 6月6日、迂斎、藩主土井利実を大阪に迎え、江戸へ帰る。[先君子][家譜] 6月10日、藩主土井利実の嗣子(出雲守利武)、没。[先君子][家譜]	

元文 4	己	未	1739	56	8	3月、迂斎、京都で三宅尚斎に会い、『中庸』『鬼神』章の講義を受ける。迂斎、『中庸』序・首章を講ず。〔先君子〕〔家譜〕 4月、迂斎、藩主土井利延を大阪に迎える。〔先君子〕〔家譜〕 5月、迂斎、江戸へ帰る。〔先君子〕〔家譜〕
元文 5	庚	申	1740	57	9	黙斎、『迂斎答問』を著す。〔越復伝〕〔黙斎伝〕（↑〔黙斎伝〕は『迂斎答問』。また同書は『迂斎答問』の名で『迂斎文集』『別集附録』に掲載されている。） ※佐藤直方門人・永井行達、没。享年五十二。 ※伴部安崇、没。享年七十五。
寛保 1	辛	酉	1741	58	10	1月29日、三宅尚斎、京都にて没す。享年、八十。〔先君子〕〔家譜〕（↑〔家譜〕はさらに「黒谷山に葬る」とする。） 2月、尚斎死去の報、迂斎のもとに届く。〔先君子〕 黙斎、書を説く。〔黙斎伝〕
寛保 2	壬	戌	1742	59	11	5月11日、迂斎、二百石を賜う。階を進め持筒物頭に任ぜられる。〔先君子〕〔家譜〕
寛保 3	癸	亥	1743	60	12	9月、迂斎、藩主に対して『小学』・『四子』講義、終わり、賀文を上る。〔先君子〕 黙斎、自ら総角を廃す。〔越復伝〕〔黙斎伝〕

十六 稻葉迂斎・黙斎年譜

延享 1	甲	子	1744	61	13	3月15日、迂斎、藩主土井利延に従って唐津に赴き、『小学』『論語』『孟子』を講ず。〔先君子〕〔家譜〕 7月16日、唐津藩主土井利延、没。享年二十三。土井利里、襲封。〔先君子〕〔家譜〕黙斎、慟哭して発病する。〔越復伝〕 8月15日、迂斎、唐津を出発。〔先君子〕〔家譜〕 10月1日、迂斎、江戸へ到着。〔先君子〕〔家譜〕 迂斎、藩主土井利里の伴読に任ぜられ、『大学』『論語』『孟子』を講ず。〔先君子〕〔家譜〕 迂斎、先侯の碑銘を撰す。〔先君子〕〔家譜〕 ※※石田梅岩、没。享年六十。
延享 2	乙	丑	1745	62	14	※三宅尚斎門人・味池直好、没。享年五十七。 ※※徳川吉宗、將軍辭職、徳川家重、將軍宣下。
延享 3	丙	寅	1746	63	15	2月晦、山伏井戸の自宅、罹災。〔先君子〕〔家譜〕 5月、新居落成。〔先君子〕〔家譜〕 黙斎、学問に飽き、不法を働く。〔越復伝〕 ※※富永仲基、没。享年三十二。
延享 4	丁	卯	1747	64	16	春、郭斎、妻（喜多川氏）を娶る。〔先君子〕 黙斎、野田剛斎に師事。〔越復伝〕〔黙斎伝〕

寛延 3	寛延 2	寛延 1	宝暦 1	
庚	己	戊	辛	
午	巳	辰	未	
1750	1749	1748	1751	
67	66	65	68	
19	18	17	20	
<p>黙斎、唐津藩主による老中享礼の会で案内を務める。〔越復伝〕〔黙斎伝〕</p> <p>8月17日、廓斎の妻（喜多川氏）、没。〔先君子〕〔越復伝〕〔黙斎伝〕</p> <p>郭斎、近習・伴読を任せられる。〔先君子〕</p> <p>迂斎、藩主が唐津に帰るにあたり、上書する。〔先君子〕</p> <p>4月14日、迂斎、武井敬勝と次男黙斎を伴い、金沢・鎌倉・江戸・大山に遊ぶ。〔先君子〕</p> <p>4月18日、迂斎、江戸に帰る。〔先君子〕</p>	<p>りを結ぶ。〔越復伝〕</p> <p>黙斎、迂斎門人の山宮雪楼、村土玉水、橘（明石）義道らと交わりを結ぶ。〔越復伝〕</p> <p>春、藩主土井利里、唐津に帰る。〔先君子〕</p> <p>1月1日、迂斎、学舎に一文を掲げる。〔先君子〕</p> <p>春、黙斎、『稻葉家譜』跋。〔家譜〕</p> <p>9月25日、迂斎妹（麻田氏）、没。〔先君子〕</p>	<p>春、黙斎、『稻葉家譜』跋。〔家譜〕</p> <p>7月下旬、迂斎著『稻葉家譜』成る。〔家譜〕</p> <p>※佐藤就正、没。享年三十九。</p> <p>※※太宰春台、没。享年六十八。</p>		

十六 稲葉迂斎・黙斎年譜

宝暦 8	宝暦 7	宝暦 6	宝暦 5	宝暦 4	宝暦 3	宝暦 2	
戊寅	丁丑	丙子	乙亥	甲戌	癸酉	壬申	
1758	1757	1756	1755	1754	1753	1752	
75	74	73	72	71	70	69	
27	26	25	24	23	22	21	
7月、迂斎孫（女）、生まれる。〔先君子〕	夏、郭斎、近習を免ぜられ、迂斎膝下に学ぶ。〔先君子〕	※3月11日、稲葉通故友斎生まれる。〔元倡寺墓碑〕 4月、迂斎孫（女）、生まれる。〔先君子〕 3月、迂斎孫（男）、生まれる。〔先君子〕 『内艱剋記』成る。〔黙斎伝〕	1月13日、迂斎妻（武井氏）、死亡。〔先君子〕 ※※雨森芳洲、没。享年八十八。 黙斎、『靖献遺言』を講ず。〔黙斎伝〕	黙斎、『春秋』『通鑑綱目』を講究。〔越復伝〕〔黙斎伝〕 黙斎、迂斎に妾を買う許しを乞う。〔越復伝〕	黙斎、宇井黙斎と知り合う。〔越復伝〕 黙斎、学舎の課会を謝絶す。〔越復伝〕	夏、郭斎、後妻（日原氏）を娶る。〔先君子〕 黙斎編『挈藏録・初編』完成。〔黙斎伝〕 唐崎彦明、伊勢長島藩を追われる。〔越復伝〕 10月、黙斎、上総清名幸谷に行く。〔姫島〕 ※佐藤直方門人・小野崎舎人、没。享年六十八。	黙斎、同門の士と人物を品題する。〔越復伝〕

第二部 山崎闇齋学派についての資料

宝暦 11		宝暦 10	宝暦 9	
辛		庚	己	
巳		辰	卯	
1761		1760	1759	
		77	76	
30		29	28	
<p>※唐崎彦明、没。享年四十五。</p> <p>※秋田藩主・佐竹義明、没。享年三十六。</p> <p>7月1日、迂齋、藩主土井利里の擢庸について上書する。〔先君子〕</p> <p>※唐津藩儒・吉武法命、没。享年七十七。</p> <p>1月6日、迂齋、発病。〔先君子〕</p> <p>2月6日、山伏井戸の自宅、罹災。〔先君子〕</p> <p>夏、藩主土井利里、唐津へ帰るにあたり、迂齋、上書する。</p> <p>〔先君子〕</p> <p>5月、迂齋、矢ノ倉村松町に転居。〔先君子〕</p> <p>5月18日、迂齋兄円齋、没。〔先君子〕</p> <p>6月、黙齋を別居させる。〔先君子〕</p> <p>7月、迂齋孫（女）、生まれる。〔先君子〕</p> <p>秋、迂齋、再び発病。〔先君子〕</p> <p>10月、藩主土井利里に劄子を上る。〔先君子〕</p> <p>11月10日、迂齋、没。駒込龍光寺に埋葬。〔先君子〕〔黙齋伝〕</p> <p>『外艱劄記』成る。〔黙齋伝〕</p> <p>※※徳川家重、將軍辞職、徳川家治、將軍宣下。</p>				

十六 稲葉迂斎・黙斎年譜

安永 7	安永 6	安永 5	安永 4	安永 3	安永 2	安永 1	明和 8	明和 7	明和 6	明和 5	明和 4	明和 3	明和 2	明和 1	宝暦 13	宝暦 12
戊	丁	丙	乙	甲	癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	癸	壬
戌	酉	申	未	午	巳	辰	卯	寅	丑	子	亥	戌	酉	申	未	午
1778	1777	1776	1775	1774	1773	1772	1771	1770	1769	1768	1767	1766	1765	1764	1763	1762
47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
※迂斎長男・廓斎、没。享年五十五。	※古河藩主土井利里、没。享年五十六。	※迂斎門人・村土玉水、没。享年四十八。	※石原寛信、没。享年四十九。	※※杉田玄白ら『解体新書』刊行。	※迂斎門人・鶴澤容斎、没。享年七十九。	黙斎、京都に行き、久米訂斎と会う。〔黙斎伝〕			※※青木昆陽、没。享年七十二。	※野田剛斎、没。享年七十九。	『先達遺事』成る。〔黙斎伝〕（実際には、序跋成立の年。）	※廓斎季子・稲葉通徳十二、生まれる。〔元倡寺墓碑〕				

第二部 山崎闇斎学派についての資料

安永 8	己	亥	1779		48	※館林藩主松平武元、没。享年六十七。 ※迂斎門人（房総八子のうち）・鈴木養察、没。享年八十五。
安永 9	庚	子	1780		49	
天明 1	辛	丑	1781		50	8月9日、黙斎、上総へ隠居する。〔黙斎伝〕 ※迂斎門人・宇井黙斎、没。享年五十七
天明 2	壬	寅	1782		51	※※中井竹山、懷徳堂主となる。 ※※天明の大飢饉（〜天明七年）。
天明 3	癸	卯	1783		52	『四書或問抄略』成る。〔黙斎伝〕 ※※与謝蕪村、没。享年六十八。 ※※浅間山大噴火。
天明 4	甲	辰	1784		53	※久米訂斎、没。享年八十七。 ※迂斎門人・明石義道、没。享年四十七。 ※迂斎門人（房総八子のうち）・安井武兵衛、没。享年七十六。
天明 5	乙	巳	1785		54	
天明 6	丙	午	1786		55	※迂斎門人・林潜斎、黙斎に入門。〔林潜斎事略〕 ※迂斎の義弟・武井敬勝、没。享年七十八。 ※※徳川家治、没。

十六 稲葉迂斎・黙斎年譜

天明 7	丁	1787	56	※徳川家斉、将軍宣下。 ※江戸、大坂などで打毀。
天明 8	戊	1788	57	
寛政 1	己	1789	58	大旱。黙斎、『鬼神集説考証』を著す。〔黙斎伝〕
寛政 2	庚	1790	59	※寛政異字の禁。
寛政 3	辛	1791	60	
寛政 4	壬	1792	61	※幸田子善、没。享年七十三。 ※ロシア使節ラクスマン、根室に來航。
寛政 5	癸	1793	62	秋、黙斎のもとへ館林藩から遣いが来る。〔黙斎伝〕 11月、黙斎のもとへ、再度館林藩から遣いが来る。〔黙斎伝〕
寛政 6	甲	1794	63	早春、黙斎、門人に『考槃』の詩を講ず。〔黙斎伝〕 3月11日、黙斎、江戸へ行き、館林藩主松平斉厚に『小学』を講ず。さらに新発田藩主溝口直侯、丸亀藩主京極高中の子弟に進講し、『好學論』を講ず。〔黙斎伝〕
寛政 7	乙	1795	64	2月、黙斎、檀寺と論争、菩提寺を元倡寺に移す。『卻生徒説』。〔黙斎伝〕
寛政 8	丙	1796	65	

第二部 山崎闇斎学派についての資料

寛政 9	寛政 10	寛政 11	寛政 12	享和 1
丁	戊	己	庚	辛
巳	午	未	申	酉
1797	1798	1799	1800	1801
66	67	68		
※新発田藩主溝口直養、没。享年六十二。	春、黙斎、江戸へ行き、館林藩主松平斉厚に進講す。〔黙斎伝〕 ※黙斎門人・中田重次、没。 ※近藤重蔵、択捉島探検。	11月1日、黙斎、没。元倡寺に埋葬。〔黙斎伝〕 ※廓斎季子・通徳十二、清名幸谷にて没。〔元倡寺墓碑〕 ※平賀源内、没。享年五十二。	※伊能忠敬、蝦夷地測量に出発。	※本居宣長、没。享年七十二。

あとがき

高島元洋

■謝辞

本研究は、一九九九年における高島と大久保紀子・長野美香との上総道学研究会にはじまります。そのご、「東アジアにおける儒教思想の倫理思想史的研究―「人倫」概念を手がかりに」（日本学術振興会・科学研究費補助金（基盤研究（C））。研究期間二〇〇一年度から二〇〇三年度）により本格的な研究をおこなうこととなります。

上総道学の存在は、それ以前から知っていましたが、直接利用できる資料はありませんでした。蕪木文庫は、非公開の個人蔵であり蔵書数も膨大であるためその全容もわからず調査することもできませんでした。当時、資料としては『孤松全稿』（『道學遺書初集』）の部分的な複写があるだけでした。しかし、この肝心の『孤松全稿』なるものの性格がよくわかりませんでした。

蕪木文庫は、上総道学を伝えた梅沢（山口）芳男氏の蔵書です。梅沢芳男氏没後は、三か所に分散して所蔵されていましたが（山口巖家「山武市」、山口節家「山武市」、鎌倉家「船橋市」）、そのご梅沢氏の甥にあたる山口巖氏のご尽力により一括して千葉県文書館に寄託収蔵されました。それぞれの搬入年月日は、

山口巖家文書（平成七年五月十五日）、鎌倉家文書（平成八年九月十九日）、山口節家文書（平成十二年七月二十七日）です（千葉県文書館・柴崎邦彦氏による）。ちなみに文書館の資料数は、山口巖家文書「約六〇〇〇点」、山口節家文書「約二〇〇〇点」、鎌倉家文書「約一五〇〇点」です。これによりわれわれはじめて上総道学の全貌を知ることができました。しかしなお、『孤松全稿』など貴重書の成立や所在に疑問があり、調査をつづけました。今回、これらの研究が一段落したこともあり成果をまとめておくことにしました。

本書が成立するにあたっては、長い時間がかかり、その間いろいろなかたからご指導を賜りました。

上総道学については、千葉県山武市成東の山口巖先生と塚本庸先生からさまざまなご教示を賜ったことに感謝いたします。膨大な蕪木文庫はいまなお未整理の部分がおおく、内容の詳細については山口先生に教えていただきました。塚本先生には、お忙しいところ何回もわれわれの調査に同行していただき、さまざまな場面でご協力をいただきました。また千葉県文書館の芝崎邦彦氏には資料の閲覧にご配慮をいただきました。「黙斎を語る会」の柏木恒彦氏にも貴重な情報をいただきました。

九州の儒教については、柴田篤先生（九州大学教授・中国近世思想史）のご指導をあおぎました。お忙しいところ、九州大学図書館をはじめとして楠本端山・碩水の遺跡等をご案内いただいたことに感謝いたします。

資料の閲覧調査については、千葉県文書館・元倡寺（千葉県山武市成東）・無窮会図書館（東京都町田市）・茨城県立古河歴史博物館・新潟県新発田市立図書館などおおくの図書館のお世話になりました。また神田ナ氏（東京都千代田区神田）の個人蔵書を調査させていただきましたことも、厚くお礼申し上げます。

とりわけ『姫寫口義』の原本である『稻葉黙齋先生姫島講義真蹟書』の写真撮影と本書掲載を許可してい

いただいた熱田秀夫氏（千葉県山武市成東）に感謝いたします。

最後になりましたが、本書の電子書籍（E-book）による出版をおすすめいただいた近藤譲先生（元副学長・お茶の水女子大学附属図書館長）に感謝いたします。このたびの学術書は、昨今の営利目的の出版事情ではもはやとりあつかわれることはありません。しかし、幸いにして本学附属図書館の出版物（電子書籍）として出していただけになり、近藤先生には出版に関する環境整備をしていただきました。さらに、近藤先生の後任である鷹野景子先生（現副学長・お茶の水女子大学附属図書館長）ならびに江川和子氏（図書・情報チームリーダー）をはじめとする図書館のスタッフには、われわれの編集状況についてつねにご心配をいただき心強く思っております。

本書出版の原稿作成において、もともと苦労されたのは浦川修子氏（お茶の水女子大学アカデミック・アシスタント）です。私の素人判断で編集・出版について、つねづね有能であると思っていた浦川さんをお願いしたのですが、膨大な原稿にたいして、きわめて誠実かつ厳密な仕事をされ、さらに私自身の仕事の遅延もあり、二〇一〇年夏入稿、二〇一一年春初稿というようになりました。作業は、この間きわめて複雑であつたようです。データはすでに存在しましたが、原稿の横書きを縦書きに、一太郎をワードに変換するということは、簡単なことではなかったようです。また、その間多くの訂正・加筆がありご迷惑をおかけしました。面倒な作業をじつにいてねいにいただき、きれいな原稿を作ってくださいました。同様のご迷惑を、校正の段階では、徳重公美氏（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）にお願いました。大量の原稿を見ていただき、とくに原文との対校において、おおくの不用意なまちがえを指摘していただき、漢字の字体を検討していただくなど、誠実なお仕事に感謝しております。

■本書の論文等の初出一覧

一 高島元洋 「思想史」とは何か―「日本倫理思想史」に関する方法的反省」『お茶の水女子大学 比較日本学研究センター研究年報』創刊号、二〇〇五年三月、九五―一〇八頁。

二 高島元洋 「日本儒教の特徴」『お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成二十年度 活動報告書 海外教育派遣事業編』二〇〇九年三月、一八七―二〇四頁。

三 高島元洋 「日本朱子学論」（書き下ろし）

なお本論文の中の（一）「日本儒教の多様性」については、「日本儒教之多様性」（翻訳・張可佳、台湾・政治大學『政大中文學報』半年間「第十三期」、二〇一〇月六月、二五―三八頁）がある。また「日本儒教の多様性（要旨）」（『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』第七号、二〇一一年三月）がある。

本論文の中の（二）「日本朱子学の特徴―「敬」の意味をめぐって」の初出は、『お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成二十一年度 活動報告書 学内教育事業編』二〇一〇年三月、二三―二六頁である。またこの部分の講演「日本朱子学における敬の意味」については、翻訳・林鳴宇「日本朱子學之「敬」之意味」がある。二〇〇九年十月二十九（三十一日、台湾・清華大学（National Tsing Hua University）、法鼓仏教学院（Dharma Drum Buddhist College）における「International Conference on Meditative Traditions of East Asia（東亜的静坐伝統国際学術研討会）。また別の機会における同内容の講演について、翻訳・Matthias HAYEK, *Meditation*

*et persona : Du Sens du Recueillement (Kei) dans le Neo-confucianisme japonais*がある。二〇〇九年十二月十日、Université Blaise Pascal とお茶の水女子大学との Colloque franco-japonais Personality and subjectivity, East and West による。

- 四 大久保紀子「稲葉黙齋論」。このうち、(一)「狂」の資質」の初出は「狂」に関する考察」（『お茶の水女子大学人文科学研究 第一巻』二〇〇五年三月、一一—三頁）。ただし大幅に改稿・加筆した。また(二)「黙齋の位置」、(三)「黙齋の儒学の特質」、(四)「上総における黙齋」には以下の論文と重複する部分がある。「稲葉黙齋の『家礼』による啓蒙の試み」（『お茶の水女子大学人文科学紀要 第五六号』二〇〇三年三月、一一—三頁）、「山崎闇齋学派における敬の内実と変化」（『お茶の水女子大学人文科学研究 第二巻』二〇〇六年三月、一一—三頁）、「山崎闇齋学派の儒者の多様性について」（『お茶の水女子大学人文科学研究 第五巻』二〇〇九年三月、二七—三九頁）、「上総道学の特質について」（『お茶の水女子大学人文科学研究 第六巻』二〇一〇年三月、一五—二七頁）。

※

- 五 稲葉黙齋『姫島講義』（解題・注釈・校合 大久保紀子）
初出は、科学研究費補助金（基盤研究（C））・研究成果報告書「東アジアにおける儒教思想の倫理思想的な研究——「人倫」概念を手がかりに」（研究代表者・高島元洋。研究課題番号一三六一〇〇三七。研究期間二〇〇一年度から二〇〇三年度）。ただし一部改稿・加筆した。
- 六 稲葉黙齋『姫島口義』（解題・注釈・校合 大久保紀子）（初出情報は五と同じ）
- 七 稲葉黙齋『處士越復傳』（解題・注釈・校合 大久保紀子）（初出情報は五と同じ）
- 八 稲葉黙齋『先君子行實』（解題 長野美香、注釈・校合 大久保紀子・長野美香）（初出情報は五と同じ）

じ)

- 九 稲葉黙齋『先達遺事』（解題・注釈・校合 大久保紀子）（書き下ろし）
- 十 稲葉黙齋『墨水一滴』（解題・注釈・校合 長野美香）（書き下ろし）
- 十一 林潜齋『稲葉黙齋先生傳』（付・岡直養著「林潜齋事略」）（解題・注釈・校合 長野美香）
- 長野美香「林潜齋『稲葉黙齋先生傳』を読む（一）」『聖心女子大学論叢一〇二』二〇〇四年二月、「林潜齋『稲葉黙齋先生傳』を読む（二）」『聖心女子大学論叢一〇四』二〇〇五年二月。ただし一部改稿・加筆した。

十二 大久保紀子・長野美香「人名索引」

※

- 十三 大久保紀子「『孤松全稿』について―『黙齋艸』との関係」（初出情報は五と同じ）
- 十四 長野美香「『稲葉家譜』について」（初出情報は五と同じ）
- 十五 長野美香「『迂齋文集』について」（初出情報は五と同じ）
- 十六 長野美香「稲葉迂齋・黙齋年譜」（初出情報は五と同じ）

■本研究は、主として以下の日本学術振興会・科学研究費補助金（基盤研究（C））によって行なわれた。「東アジアにおける儒教思想の倫理思想史的研究―「人倫」概念を手がかりに」（研究代表者・高島元洋。研究課題番号一三六一〇〇三七。研究期間二〇〇一年度から二〇〇三年度）

「日本儒教に関する倫理学・倫理思想史的研究―近代化論と比較思想史的研究の統合」（研究代表者・高島元洋。研究課題番号一九五二〇〇一六。研究期間二〇〇七年度から二〇〇九年度）

著者略歴

■高島元洋（たかしま もとひろ）（第一分冊、第二分冊）

1949 年東京都生まれ。東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得の上退学。博士（文学）〔東京大学〕。お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授

【主著・主論文など】『山崎闇斎—日本朱子学と垂加神道』ぺりかん社、1992 年、『日本人の感情』ぺりかん社、2000 年、「河竹黙阿弥と演劇の近代化」西村清和・高橋文博編『近代日本の成立』ナカニシヤ出版、2005 年

■大久保紀子（おおくぼ のりこ）（第一分冊、第二分冊）

1955 年秋田県生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科西洋史専攻修士課程修了。博士（人文科学）〔お茶の水女子大学〕。東京理科大学、立教大学、お茶の水女子大学非常勤講師【主論文】「上総道学の特質について」『お茶の水女子大学人文科学研究 第六巻』2010 年、「山崎闇斎学派の儒者の多様性について」『お茶の水女子大学人文科学研究 第五巻』2009 年

■長野美香（ながの みか）（第二分冊）

1966 年東京都生まれ。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較化学専攻博士課程単位取得の上退学。博士（人文科学）〔お茶の水女子大学〕、聖心女子大学文学部哲学科准教授

【共著・主論文など】「内村鑑三にみる近代日本の宗教思想」『大航海 67・特集：日本思想史の核心』新書館、2008 年、篠澤和久・馬淵浩二編『倫理学の地図』ナカニシヤ出版、2010 年

近世日本の儒教思想—山崎闇斎学派を中心として 第二分冊 資料編

2012 年 3 月 28 日 初版発行

編著者 高島 元洋

著 者 大久保 紀子 長野 美香

発 行 お茶の水女子大学附属図書館(E-book サービス)

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
<http://www.lib.ocha.ac.jp/>

電話 03-5978-5835 FAX 03-5978-5849

ISBN978-4-904793-02-2 C3010

本著作の著作権は著者が保持しています。著作権法上の著作権の制限を超える利用については、お茶の水女子大学附属図書館にお問い合わせください。